

# 東方龍球伝

清川 明希

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一星龍を倒して宇宙を救った英雄の孫悟空が神龍と共に何処かへ行ってしまった。でも、実は悟空がいった世界は神々や妖怪が暮らす幻想郷であった。悟空は幻想郷での新たな仲間 霊夢と魔理沙と共に異変解決を行なっていく物語である。

□ ↑キャラクターが喋っている時に使う

○ ↑キャラクターが心で思った事や考えている時などに使う

『 ↑物音, 効果音

※注意点

読んでいたら物語の意味が分からなくイライラする可能性があります。

話がややこしい

語彙力がない

原作の設定 無視

ごり押し展開 多め

弾幕ごっこが存在しない

この注意点で一つでも嫌だなと思う方は、この物語を読むのをオススメしません。

もはや、物語になつてるかも分かりませんが徐々にマシにはなつていつてると思います。  
す。

更新ペースは出来るだけ早くしていきます。

毎日3時に投稿しています。(今年受験生ということもあり毎日投稿が出来ておりません)

文字数は、大体2000字

現在、次の記念作品のリクエストを下のURLで募集しています。

<https://syosetu.org/?mode=kappa|view&kind=194616&uid=225159>

## 追加設定1

悟空の尻尾は神龍によって取ってもらったということをお願いします。でも、スーパーサイヤ人4になる感覚は悟空はもう、身に付けているのでスーパーサイヤ人4にはなれるということをお願いします。

目標は、100〜200話ぐらいまで話を続けることです。（初期の目標達成）  
現在、1話から読みやすいように編集作業を行なっています。

# 目次

悟空、幻想入り編	8	霊夢が苦戦？謎のメイド十六夜咲夜	103
悟空が幻想入り!! 第1話	1	第8話	119
博麗神社？幻想郷最強の巫女!! 第2話	21	咲夜攻略！ 第9話	134
悟空 v s 霊夢 第3話	32	魔法使い v s 魔法使い 第10話	145
夢想天生を破れ!! スーパーサイヤ人登場 第4話	47	パチュリーの弱点 第11話	162
新たに始まる生活 第5話	64	異変の主犯！レミア・スカーレット 第12話	178
金髪の魔法使い登場 第6話	83	霊夢 v s レミア 第13話	190
紅霧異変編	145	フランを止めろ！悟空 v s フラン 第14話	203
紅魔館？悟空 v s 門番!! 第7話	203	異変解決!! 第15話	219

修行編（気の感じ方）

霊夢と魔理沙の弟子入り 第16話

211

悟空 v s 霊夢 & 魔理沙 第17話

277

219

気を感じる！ 第18話

227

春雪異変編

春の雪 第19話

234

長い階段 第20話

240

魔理沙 v s 妖夢 第21話

248

妖夢のスピードを攻略せよ！魔理沙の

作戦!! 第22話

255

春を返せ！霊夢 v s 幽々子!! 第23

3

話

死を操る幽々子 第24話

270

幽々子を破れ！霊夢の奥義 第25話

284

帰ってきた春 第26話

284

萃夢想編

3日に1回の宴会 第27話

292

謎の霧 第28話

299

悟空 v s 萃香 第29話

307

萃香の力 第30話

315

スーパーサイヤ人2登場 第31話

323

ついに決着！ 第32話

330

修行編2 (界王拳)

霊夢・魔理沙 新たなる技 第33話

338

界王拳 第34話

346

界王拳の修行!! 第35話

353

永夜異変編

おかしな夜 第36話

361

消えた人里 第37話

370

霊夢vs慧音 第38話

378

迷いの竹林 第39話

386

因縁の戦い 霊夢vs魔理沙

第40話

話

魔理沙vs鈴仙 第41話

394

弾幕vs弾幕 第42話

408

月を返せ! 八意永琳 第43話

416

永遠亭の過去 第44話

424

霊夢vs永琳!! 第45話

431

ついに完成! 界王拳!! 第46話

439

ついに登場 永遠亭の姫様! 第47話

話

霊夢敗北! 恐るべし輝夜有能力 第48話

447

輝夜を破れ! 悟空出動!! 第49話

463

話

455

輝夜の本気！でるか悟空の新たな変身	第50話	471	限界突破!!	第57話	530
ついに決着！最強のスーパーサイヤ人	3!! 第51話	479	平和な日常	第58話	539
修行編3（魔法拳）			風神録編		
魔理沙 新たな技を目指して	第52話	488	博麗神社の危機！	第59話	547
新たな技を求めて！いざ紅魔館へ！	第53話	496	山の神社へ！	第60話	555
			人間は盟友！	第61話	562
			霊夢vsにとり	第62話	569
			超高速の天狗	第63話	577
			恐るべし文のスピード戦術！	第64話	584
			勝利を掴め！3種の夢想封印	第65話	592
魔法拳 完成！	第55話	513	ついに到着！山の神社	第66話	
限界パワー炸裂!!	第56話	521			



	600	巫女 v s 巫女 第 6 7 話	608	博麗の巫女。まさかの敗北 第 7 5 話	659
		恐るべし守矢の巫女!! 第 6 8 話			
	615	早苗を突破せよ! 霊夢の作戦! 第 6 9 話	623	相性最悪? 第 7 7 話	675
				頭脳戦? 悟空の戦略 第 7 8 話	688
	631	ついに決着! 巫女と巫女 第 7 0 話	639	悟空 v s 神奈子! 第 7 9 話	695
		霊夢の強さ 第 7 1 話		神の超本気! 行くな! スーパーサイヤ	
		ついに登場! 守矢の神 第 7 2 話		人 3 !! 第 8 0 話	701
	645	神の気とは? 第 7 3 話	652	神を超えし悟空 第 8 1 話	709
		神に挑め! 霊夢 v s 神奈子 第 7 4 話		修行編 4 (瞬間移動)	



- 最強の邪念降臨!! 博麗の奇跡! 第1  
00話【記念】—— 837
- 緋想天編(後半)
- 力の源? 天人の桃 第101話
- 965 10倍界王拳! 霊夢vs天子 第10  
2話 —— 974
- 983 一か八かの大勝負 第103話
- 神社の再築 第104話 —— 992
- ??? 異変
- 999 スキマ妖怪からの依頼 第105話
- 111話 —— 1045
- 1012 謎の3人組? 第106話 —— 1006
- 深まる3人組の謎 第107話
- 1012 迫る影! 現る最悪の敵! 第108  
話 —— 1016
- 年末スペシャル【メタ回】本編とは関係  
ありません。 —— 1023
- 1033 永久式の人造人間 第109話
- 1041 謎のフードの男 第110話
- 魔法拳破れる!  
魔理沙がピンチ! 第  
1045

	圧倒的力の差	第112話	1059
	負けるな霊夢	第113話	1068
	霊夢の限界！決めるぜ20倍界王拳！	第114話	1077
	本気と本気	第115話	1084
	20倍界王拳の「夢想封印 集」	第116話	1088
	人造人間の謎	第117話	1096
	地霊編		
1102	嬉しい大ニュース！	第118話	1152
1109	娯楽の中に潜む影	第119話	1162
	謎の妖怪達	第120話	1116
	悟空不在の異変解決	第121話	
1122	力が入らない？	第122話	1125
	謎の世界	第123話	1132
1138	巨大な妖力を持つ女	第124話	
1145	この世界の正体	第125話	
	恐るべきパワー！魔理沙vs勇儀	第126話	1152
	魔力vs怪力	第127話	1162
	新たな手がかり。目指す場所は地霊殿		

！ 第128話

1170

ついに到着！地霊殿！ 第129話

1177

突如、現れる気配無き少女 第13

0話

1181



# 悟空、幻想入り編

## 悟空が幻想入り!! 第1話

これは、かつて宇宙を救った英雄 孫悟空が神龍とともに姿を消したその後を描いた物語である。

一星龍を倒した悟空はしばらく神龍の背中で眠りについていた。

悟空「ぐく、ぐく」

悟空は大きいびきをかきながら神龍の背中へと乗っていた。

いや、待っていたのである。

あの聖地へ到着するのを……

神龍「孫悟空よ起きるのだ。」

その声を聞き悟空は、目を開ける。

悟空「ふわあああ、よう、神龍もう幻想郷に着いたのか」

大きなあくびとともに目をさます悟空。

そして、ピョンと神龍の背中から飛ぶ降りた。

悟空は、そのまま周りの風景に目をやった。

悟空「神龍ここが幻想郷か？」

神龍「そうだ、ここが幻想郷これからお前が暮らしていく世界だ。お前達は今までドラゴンボールに頼りすぎた。だから、一度私は地球から離れ神や妖怪なども暮らすこの幻想郷に来ることにした。だが、残念ながら私だけの力ではこちらの世界に来ることが出来なかつた。だから、強い力を持ったお前にこちらの世界に来るのを手伝ってもらった。すまない、孫悟空よお前までこの世界につれてきてしまつて」

神龍が申し訳なさそうに謝罪する。

だが、悟空は、ニツと笑みを浮かべた。

そして、神龍にこう告げる。

悟空「気にすんな神龍、元はと言えばオラ達がドラゴンボールを使いすぎたのが原因なんだ。おめえが謝る事ねえさ」

神龍「孫悟空、やつぱりお前はたいしたやつだ。お前がドラゴンボールを自分だけの為に使わなかつたのが何故だかよくわかる」

神龍は、顔色ひとつ変えることはできないが悟空は、神龍は実際ほんの僅かながら笑みを浮かべていることを察した。



悟空「まあ、そんな堅苦しい話は置いとこうぜ。オラそう言う話苦手なんだ。それよ  
り、これからおめえは幻想郷のどこで暮らすんだ？」

神龍「私は幻想郷で再び七つのドラゴンボールの中に入りそこで眠ることにする。そ  
して、100年の時が経つまでこの世界の最後の希望となりドラゴンボールを集めた者  
の願いをひとつだけかなえよう。だが、何度も何度も願いをするとまた、邪悪龍が現れ  
てしまうかもしれぬ。そのへんは、孫悟空お前に任せる。お前ならこの幻想郷の者たち  
ともすぐに和解し合いドラゴンボールの恐ろしさも伝えられるはずだ」

どうやら、神龍は再びこの世界でドラゴンボールを蘇らせるようだ。

そして、ドラゴンボールを集めたものの願いを叶える。

恐らく、この世界にドラゴンレクターは存在しない。

なので、あまり願いが叶えられることはない神龍はそう考えたのであろう。

悟空「わかってるよ神龍オラだってあんな悪夢二度とよみがえしたくねえ。その辺は  
オラに任しとけて！」

悟空は、自分の胸に拳を当てながら言った。

神龍はそんな悟空を見て安堵したのか、

神龍「うむ、もう私はいくさらばだ」

そう言っつてすぐさまドラゴンボールの中に入り7つの玉が四方八方へと飛んでいっ

た。

悟空は、そんな神龍を見て「じゃあな」と呟く。  
そして、少しの沈黙が流れた。

悟空は、まず何をすべきか考える。

その結果、悟空が思いついなのは、

悟空「まあ、まずは町でも探るか」

そうまず人のいる方へといかないと幻想郷がどのような場所なのか見当もつかない。

悟空は、そう考え舞空術を使い町を探しに行こうとした。

その瞬間!

『カサカサ』

急に目の前の茂みが動いた。

悟空は誰か居るのかと思いしげみの方に近づいていく。

悟空（何かいるんか?）

悟空「おい、誰か居るのか」

茂みの方に声をかけた。

すると、そこからは、

??? 「お腹空いたのだー」

と言いながら一人の女の子が出て来た。

悟空はその女の子に近づく。

悟空「おめえ、腹減ってんのか？」

??? 「うん」

どうやら、その女の子はお腹を空かせているようであった。

悟空「そういや、オラも腹が減って来たな。めえったなあ、オラ何も食べるもん持つてねえんだよな」

頭をぼりぼりかきながら言う悟空

しかし、女の子からの返答は予想を遥かにうわまわっていた。

??? 「大丈夫、もう食べもの見つけたから」

悟空「えっ？」

その言葉に頭の回転が追いつかない悟空

それもそのはず、目の前にいる女の子が悟空を食べると言ったのだから。

??? 「君を食べるから」

悟空はそれを聞いた瞬間に身構える。

どうやらやつと頭の回転が追いついたようだ。

悟空「おめえ、何もんだ、妖怪か？」

???「うん、私は妖怪ルーミアなのだー」

悟空「人を食う妖怪か、でも、残念だったな。おめえはオラを食えねえ。」

ルーミア「どーしてなのだー。」

悟空「おめえじゃオラには勝てなえてことだ」

それを聞いたルーミアは少し怒った。

ルーミア「人間の子供のくせに生意気なのだー。すぐに食べてやるのだー」

怒ったルーミアは、ヤケクソになり急に悟空に飛びかかる。

しかし、悟空は「よっ」と言いながら体を横に傾け見事にルーミアの攻撃を躲した。

悟空「オラこう見えても、大人なんだけどな〜」

悟空がルーミアに呟く。

だが、ルーミアはそんな言葉に耳を貸さない。

そのまま悟空に連続攻撃を放つ。

悟空「めえったなあ〜」

そう言いながら余裕でかわしていく悟空

そんな悟空にルーミアは、若干 恐怖を感じる。

ルーミア（私の攻撃が当たらないのだー）

ルーミア「ふふふ」

しかし、ルーミアは笑っていた。

ルーミアは少し悟空と距離を取る。

ルーミア「こうなったら、少し驚かせてやる。」

悟空は、一度距離をとったルーミアを睨みつける。

悟空「何をやっても、オラには無駄だぞ」

ルーミア「なら、これならどうなのだ！」

ルーミア「はあああああ！」

その瞬間、悟空の周りが真っ暗になってしまった。

## 博麗神社? 幻想郷最強の巫女!! 第2話

悟空「なんだこれ?いきなり真っ暗になっちゃった」

急に暗くなってしまった周りの光景に若干の焦りを見せる悟空

悟空は、ここにきて妖怪つてのはすごいんだなと再認識したのであった。

ルーミア「これで、お前は周りを見ることが出来ないのだ」

悟空から光を奪ったルーミアは若干の笑みを浮かべ余裕の表情を見せる。

それもそのはず相手はもう目が使えない。

目を使えないということは相手の位置を正確に判断できない。

つまり、ほぼ勝ち確定ルーミアはそう考えたのである。

だが、悟空は違うこのような状況におかれても何一つとして動揺を見せなかった。

そして、ルーミアにこう告げる。

悟空「でも、これじゃおめえも何も見れないんじゃないのか?」

そう悟空の言う通りたしかにこちらは何も見えないが裏を返せば相手もこの暗闇の

影響を受ける。

悟空は、この状況で冷静で的確にそう判断したのであった。

ルーミア「確かにそうさ。でも、はあ！」

ルーミアが気弾を放つ。

その気弾は暗闇の中の、的確に悟空の位置を捉えていた。

悟空「なに！」

油断してた悟空はその気弾にあたってしまふ。

悟空「いててて、一体どうなってるんだ」

あまりにも的確に飛んでくる気弾に驚きを隠せない悟空

悟空は、この瞬間こいつは気を感じれる。

そう考えた。

しかし、次のルーミアの発言でその予想は覆される。

ルーミア「ふふふ、残念でした。私は匂いで君の居場所がわかるのだ」

な、なんとルーミアは気を感じ経ったのではなく匂いで悟空の場所を見つけたのであった。

悟空「へー、おめえ鼻がいいんだな」

悟空がルーミアを褒める。

ルーミア「へへへ、あたりまえなのだ。私は強いのだ」

ちよつと誇らしげな顔を浮かべるルーミア

しかし、悟空はそんなルーミアの感情をぶち壊すようにこういう。

悟空「でも、戦闘面では、ちっと弱えな〜」

その言葉を聞いた瞬間ルーミアの目が鋭くなる。

「どうやら、少し切れたようだ。」

ルーミア「私が大したことないだって！人間のくせに調子なるな〜！」

怒りが溜まったルーミアは、迫力のある声を出し悟空に攻撃を仕掛けた。

ルーミア「だりやりりやりりやりりや〜」

暗闇の中、的確に悟空の位置を捉え攻撃を仕掛けるルーミア

これは、悟空もピンチか！

そう思われた時！

悟空「よっ、よ、よ、よ」

なんと、悟空は暗闇の中正確にルーミアの攻撃を避けたのである。

流石のルーミアもその行動には驚きを隠せない。

ルーミア「なんで攻撃が当たらないのだ〜」

その言葉を聞いた悟空は、ニツと一瞬笑みを浮かべ、そして、こう告げた。

悟空「残念だったな！実はオラ相手の気を読むことが出来るんだ！」

その言葉を聞いたルーミアは首を横に傾げた。



恐らく、何か疑問におもったのであろう。

まあ、その疑問は言うまでもない。

ルーミア「気ってなんなのだ？」

そう実はこの世界　気と言うものはかなりマイナーなものであり基本は魔力、霊力で構成されている。

なので、世間一般的に気とは何か知っているものは少ないのである。

まあ、たまに気を使うものもいるのだが……。

悟空は、気を知らないというルーミアの声を聞き取り返答をした。

悟空「気ってのは、生きている物なら誰でも持つ秘められた力のことさ」

そう言いながら軽く手に力を溜め込む悟空。

その瞬間、『ボウツ』と悟空の手が輝き出す。

いや、正確には悟空の手の中から小さな光のエネルギーを出したのである。

そして、悟空はこう告げた。

悟空「これが気さ」

そう言いながら悟空はエネルギーによって照らし出されたルーミアの顔を見る。

その表情は額から汗を大量に流し怯えた表情をしていた。

恐らく、ルーミアは悟ったのであろう。

勝てない!と……。

ルーミア（アレは、弾幕!でも、密度が違いすぎる。あんなの当たったら1発アウトなのだ!）

ルーミアは心中そう囁いた。

と、その時!

『ボウツ』

と音をたてて悟空はエネルギーを消した。

そして、こう告げる。

悟空「よし、説明も終わったことだし再スタートだ!」

そう言つて再び悟空は構えだした。

しかし、

ルーミア「……………」

ルーミアはあつげにとられたのかどうやら固まって動かないようだ。

悟空はそんなルーミアを見てこう告げる。

悟空「どうした、もう攻撃して来ないんか?」

しかし、ルーミアは固まったまま全然動こうとしなかった。

悟空はそんなルーミアをみて、「じゃあ、こっちから行くぞ!!?」といいルーミアに接

近する。

その瞬間、ルーミアは我に返り急いで悟空に弾幕を放とうとする。

しかし、時すでに遅し。

すでに悟空はルーミアの目の前まできていた。

悟空はそのままルーミアに思い一撃を与える。

『グハッ』

その威力はとてつもなくルーミアは一撃で倒されてしまった。

『バタン』

地面に倒れこむルーミア。

悟空はそんなルーミアに接近する。

そして、こう囁いた。

悟空「こいつ、これだけオラに攻撃をして来たって事は、よっぽど腹が減ってたんだ

ろうな。しょうがねえ」

そういうと周りを見渡す悟空。

すると、そこにはいくつか果物が生えてあつた。

悟空は食べれそうな果物をいくつか回収する

（10分後）

ルーミア「ううう…」

ルーミアが目を覚ました。

悟空「オツス、目覚めたか。さつきはすまねえな」

そう言いながら悟空はルーミアに果物を渡す。

ルーミアは今の現状がよくわかっていないようだ。

悟空「どうした食わねえんか？」

悟空はそんなルーミアを見てそう尋ねた。

ルーミア「私はさつきお前をいきなり襲ったんだぞ？それなのにくれるのか？」

その言葉を聞いた悟空は少し微笑みを浮かべる。

そして、優しい声でこう告げた。

悟空「おめえ、だって生きるためにオラを襲ったんだろ。なら、しょうがねえじゃね

えか」

自分の命を狙われたにも関わらずそんな言葉を放ってくれる悟空にルーミアは少し

感動しありがとうなのだ」と元気な声をあげ何処かへ行ってしまったのであった。

悟空はそんなルーミアを見届け再び自分の目的へと戻る。

悟空「さて、オラも取り敢えず人のいる場所を探さねえとな！」

悟空はそう告げ舞空術を使い空に飛ぶのであった。

## 『ヒューン』

しばらく空を旅する悟空。

しかし、いくら飛ばうともこの森は広く人っ子一人見つかからない。

悟空「うん、もうすこしスピード出してみつか」

しばらく森が続いてると予想した悟空は更にスピードを上げようと考えた。

しかし！

悟空「うん、あれなんだ？」

グッドタイミング悟空が丁度何かを見つけたようだ。

悟空はそのまま見つけた物の所へと降り立つ。

悟空「ここは？」

素晴らしいながら周りを見渡す悟空。

そこには、大きな鳥居が置いてあった。

そう悟空が見つけたのは神社である。

悟空「神社か？取り敢えずはいつてみつか」

悟空はそこに人がいないのか確かめるため神社の中へと入って行くのであった。

しかし、

悟空「なんだ誰もいねえのか？」

悟空の入った神社は参拝客など一人もいなかったのである。

悟空「まあ、たしかにこんな森の中の神社だもんな。潰れてても仕方ねえか」

悟空はこの神社はもう潰れてしまっていると予想し立ち去ろうとした。

と、その時!

『ばた、ばた、ばた』

神社の裏の方から足音が聞こえた。

足跡はどんだんこちらに向かってきている。

そして!

??? 「失礼ねえ! まだ、潰れてないわよ」

そういうながら一人のひとりの女性が顔を出した。

服装から察するにこの神社の巫女であろう。

悟空「そうなんか。オラ人がいなかったからてつきり」

??? 「人里からこの博麗神社の通り道には妖怪が沢山いて普通の人間は来れないのよ。

君は見た感じ外来人っぽいしこの神社の近くにたまたま出て運良く妖怪に襲われなかったってところかしら?」

セリフから察するにこの巫女はどうやら悟空が外の世界の人間だと悟ったようだ。

悟空「妖怪? ああそれならオラ妖怪に襲われたぞ」

巫女のセリフを聞いた悟空はさっきの妖怪を思い出した。

しかし、そのセリフを聞いた巫女は…。

??? 「君見たいな子供が……。ハハハハハハハ」

急に大笑いしだす巫女。

悟空はそんな巫女を見て自分なにか変なこと言ったかなと考える。

しかし、悟空が考える間もなく巫女が何故笑ってるのかすぐに口にするのであった。

??? 「妖怪に襲われて助かるわけではないでしょう」

そうあの笑いは子供が妖怪とあつて生き延びれるはずがないと馬鹿にしているのであった。

流石の悟空も少し巫女の態度に腹が立ち言葉を返す。

悟空 「少なくともオラおめえよりは強いと思うぞ」

悟空は真剣な顔つきで巫女を睨みつけるような態度でいった。

その言葉を聞いた巫女は笑うのを一時的にやめる。

そして！

??? 「面白い事を言うわね。外来人だから知らないと思うけど私は、この博麗神社の巫女であり幻想郷、最強の博麗の巫女 博麗霊夢よ。あんたみたいな子供と次元が違うわ」

どうやらこの巫女の名前は博麗霊夢といいこの神社は博麗神社というようだ。

しかし、悟空はそんな名前よりもっと気になる単語があった。

それは、。。。

悟空「最強だつて！おめえそんなには強えんか？」

そう霊夢が放つた最強という言葉である。

霊夢は、えつと驚きの表情をうかべた。

霊夢「まあ、幻想郷ではトップレベルよ」

急にテンションが上がった悟空についていけない霊夢。

しかし、霊夢が本当に驚くのはこの次の言葉であった。

それは！

悟空「じああ、オラと戦おうぜ」

ウキウキしながら言う悟空。

霊夢「はあ☒」

流石霊夢も思わずそう声が漏れた。

霊夢「あんたねえ。何いつてんの？あんた子供でしょ？私とあなたじゃレベルが違い

すぎて戦いにならないわよ」

流石の霊夢も呆れた表情で悟空にそう告げる。



しかし、悟空はそんな霊夢の心情とは裏腹にバンバン言葉をかけた。

悟空「でえじょうぶだつて！オラこう見えても結構強えんだから！なんなら手加減してやつぞ！」

霊夢「なんで、手加減すんのよ？」

悟空がもはや何いつてるのか分からなく困惑する霊夢。

悟空「だつて本気でやつたらおめえを殺しかけねえからな」

悟空はニコニコしながらそう告げた。

霊夢はここで察した。

もしかして、今自分は馬鹿にされていないかと……

霊夢「あのねえ？あんたみたいなガキが私より強いわけないでしょ！」

少し怒りがこもった声でそう告げる霊夢。

しかし、空気の読めない悟空は「そうなんか。でも、やつぱりオラの方が強ええと思うぞ」と火に油を注ぐようなセリフをいつてしまった。

その言葉を聞いた霊夢は「はあ」と息をもらし悟空にこう告げた。

霊夢「いいわ、じゃあ少しだけ相手してあげるわ。ただし、私に負けたら、もう二度と私より強いなんね言うんじゃないわよ」

悟空「ああ、わかった」

悟空は霊夢の言った言葉に了承する。

霊夢「じゃあ、気絶するか先に降参と言った方の負けね」

悟空「ああ！」

そう相槌を打つと少し霊夢と距離をとる悟空。

そして、霊夢にこう告げた。

悟空「それじゃあ、始めようぜ！」

そういいながら構えをとる悟空。

果たして幻想郷最強の博麗の巫女 博麗霊夢はどれほどの力の持ち主なのか。

## 悟空 V S 霊夢 第3話

霊夢（こんな子供に対してガチになる必要はないわね。軽く一撃を喰らわせて早く終わらせよっと）

そう霊夢は思うと悟空に向けて手を広げた。

そして！

霊夢「はあ！」

小規模なエネルギー弾を放った。

勿論、威力はそれほどでもない。

悟空はエネルギー弾が飛んでくる瞬間エネルギー弾を鋭く見つめる。

そして！

悟空「はっ!!？」

『ポントッ』

悟空は気合いだけでエネルギー弾を消しとばした。

流星の霊夢もそれは予想外。

少しは悟空の強さを実感したのであった。

靈夢「へえー、少しはやるのね」

靈夢が悟空にそう告げる。

しかし、そんな靈夢にたいして悟空は鋭く睨みつけた！

悟空「おめえ、全然本気でやってねえな」

そう悟空は気づいたのである。

靈夢が手を抜いてる事に…。

靈夢「当たり前でしょ。博麗の巫女が子供相手に本気を出すと思う。どうしても、本気でやって欲しかったらそれなりの力を私にみせることね」

それを聞いた悟空はニヤツとした笑みを浮かべる。

そして！

悟空「じゃあ、本気を出してもらっか！」

そう告げた瞬間、悟空は体中の気を集中させる。

悟空「はあああ!!？」

その瞬間！

『ポオッ!』

白いモヤモヤした炎のような物が悟空の周りに現れた。

靈夢「なにつ！」

霊夢はその炎のようなものに目を奪われる。

それもそのはず、その炎のようなものは圧倒的な威圧感を放っており距離を置いてる  
霊夢の所にさえその威圧感は届いているのだから…。

霊夢はここでやつと気づいた悟空は只者ではないと！

霊夢「あんた、本当に外来人」

悟空「外来人？　そういうや、外来人ってさつきも言ってたけんどなんのことだ？」

霊夢「簡単に言うとなりの世界。つまり別の世界から来た住人のことよ」

霊夢が軽く説明をする。

悟空「じゃあ、オラは外来人だ別の世界から来たからな」

霊夢「外来人でここまでの力を持った奴がいるとはね。しかも、子供が…」

外来人にこれ程の力を持ったものがいたとしり驚愕する霊夢。

しかも、見た感じ相手は子供。

驚くのも無理はなかった。

悟空「オラ、子供じゃねえぞ。まあいつか、取り敢えず戦いの続きだ」

そういうと悟空は構えをとった。

霊夢もそれに合わせて構えをとる。

そして！

『ヒュン』

その瞬間！悟空は超スピードで靈夢に向かって行きパンチを放った！その速度は凄まじくとも一般人に見える素早さではなかった。

しかし、靈夢は幻想郷でもかなりの実力者。

靈夢は素晴らしいまでの反射神経で悟空の攻撃を避ける。

靈夢「おわつと！」

悟空「やるじゃねえか」

悟空自身少し靈夢を舐めておりまさか、避けるとは思っていなかった。

靈夢「ふん、これくらい避けて当然よ」

強がりかどうかは定かではないが靈夢は悟空にそう告げた。

その言葉を聞いた悟空は少し笑みを浮かべ靈夢にこう告げる。

悟空「なら、どんどんいくぞ！」

悟空「だりやりやりやりやりや」

悟空は靈夢に連続攻撃を仕掛けた。

靈夢（なんて速さなの）

靈夢は悟空の連続攻撃をギリギリで躲していく。

しかし、そんなギリギリの躲しなど所詮は悪あがきに過ぎなかった。

霊夢の動きは徐々に悟空に見切られていく。

そして！

ドンッ

重い一撃が霊夢の腹部に放たれた。

霊夢「ぐはっ！」

殴られた反動で口から血が飛びでる霊夢

霊夢は、そのまま膝立ち状態になってしまった。

悟空「どうだ！」

そんな、霊夢に対して少しドヤ顔をする悟空。

霊夢は震えた声で悟空にこう告げた。

「霊夢「なんて重い攻撃なの、一撃でここまでのダメージを受けるなんて…」」

悟空の強さに驚愕の表情を隠せない霊夢。

しかし、それは無理のないことなのである。

悟空の実力はかなりの物 今までそこらへんの妖怪と戦ってきた霊夢とは次元そのものが違うのである。

霊夢は歯をくいしばり、そして、立ち上がった。

霊夢「あんた、強いわね。私の思ってた10倍いや、50倍は強いわ」

急に悟空を褒め称える靈夢。

その顔には少し笑みが混じっていた。

悟空はなにかを感じ取った。

というより、感じ取らされたのである。

そう靈夢は今どう考えても追い込まれているはず、なのに何故か靈夢からは自信が感じとられるのである。

まるで、まだ、本気を出していないぞ。と言わんばかりに…。

悟空「おめえ、まだ、奥の手残してんな…」

悟空は靈夢に恐る恐る尋ねた。

靈夢「ふふっ」

不気味な笑みを浮かべる靈夢。

そして、「あんた流石ね」と意味深な台詞を悟空に残した。

一体、何を考えてんだ…。少し靈夢を警戒する悟空。

しかし、その答えは思ったよりもすぐに出た。

スツ

靈夢は素早くカードのような物を取り出した。

悟空「なんだ！」



思ってもいなかった霊夢の行動に驚く悟空。

それもそのはず、悟空自身今まで多くの敵と戦ってきたが急にカードを取り出した敵は初めてなのだから。

悟空は身構えた。霊夢が何をしようとするかに対応できるように…。

そう悟空はあのカードで霊夢がなにかをするとよんだのである。

そして！

悟空の予想は見事に的中した。

霊夢「スペルカード！ 霊符『夢想封印』」

カードを構えた霊夢は急にそんな謎の発言をする。

その瞬間！霊夢から弾幕が放たれた。

悟空「なにつ！」

慌ててそれを避ける悟空。

しかし！

なんと、霊夢の放った弾幕は追尾機能がついていた。

弾幕は再びUターンし悟空に突撃する。

まるでヤムチャの操気弾が何発も連続で放たれているようだ。

ヒュン、ヒュン、ヒュン

いくら避けても悟空を追う靈夢の夢想封印。

流石の悟空少しづつ余裕がなくなってきた。

そんな、悟空を見下したか、靈夢は悟空にこう告げた。

靈夢「これが私の奥の手 夢想封印よ！」

悟空は理解した。

靈夢はこの技を隠し持っていたからあんなに自信があったのかと…。  
すると、「おっと」急に足を踏み外す悟空。

靈夢「よし、決まった」

靈夢は勝利を確信する。

しかし！

悟空「はあ!!?!」

悟空は自らの気を自分の周りに集中させる。

そう悟空は自らの気でバリアのようなものを作ったのである！

ドンツドンツドンツ

夢想封印はそのまま無残にも悟空のバリアで弾かれていく。

そして、ついに全ての夢想封印が消えてしまったのであった。

悟空「ふう。今のは、危なかつたぞ」

満面の笑みを浮かべながら霊夢に告げる悟空

霊夢「あんたは、化け物なの」

流石の霊夢も焦りを隠せないようだ。

悟空「オラは、化け物じゃねえぞ。オラは、サイヤ人だ」

霊夢「サイヤ人？」

サイヤ人という単語に疑問符を浮かべる。

しかし、今の霊夢にとってそんなことはどうでもよかった。

霊夢「ふふ、ふふふふ」

急に笑みを浮かべる霊夢。

霊夢「あんた、子供なのにすごい力ね」

悟空「だろ？もう諦めて降参した方がいいぞ？オメエじやオラには勝てねえ」

悟空は霊夢に降参を勧めた。

霊夢「降参？なに言ってるんのそんなことするわけないじゃない」

再び余裕の表情を浮かべる霊夢。

その笑みを見た悟空は感じ取った。

悟空「おめえ、まさか、まだ上があんのか？」

そう霊夢はまだ、更にすごい奥の手を隠し持つてると悟空は考察したのである。

霊夢「まあね、わたしの夢想封印が効かなかった以上あんたを倒すにはこれしかないからね」

霊夢の台詞には勝利の確信が感じ取れた。

あれ程までの実力の差を見せた後の勝利の確信。

これは、悔れねえなと悟空は心で呟いた。

先ほどと同様にカードを取り出すが霊夢

悟空はそれを見て少しワクワクした。

次はいつてえどんなすごいことを見せてくれんだ！

と言わんばかりに。

霊夢「スペルカード！『夢想天生』」

先ほどと同様、発動の呪文を唱える霊夢。

悟空は身構えた。

しかし！

しゅん

周りを見渡すがいくら、たつても静かなまま攻撃が放たれない？

悟空「おめえ一体何したんだ？」

そう言いながら霊夢の方を振り向く悟空。

ビクッ！

その瞬間、悟空は驚いた。

何故、驚いたかだって？

それは、なんと！

霊夢の体が半透明になっていたのである。

霊夢の使った夢想天生とは一体どんな技なのであろうか…。

## 夢想天生を破れ!!スーパーサイヤ人登場 第4話

悟空「一体、どうなってるんだ!？」

霊夢の体が透けてしまっていることに驚く悟空。

悟空自身今まで色々な敵と戦ってきたがこんな相手は初めてみたのは初めてであった。

しかし、霊夢は悟空と違っていたって冷静な振る舞いをしている。

霊夢「どうしたの?攻撃してご覧なさいよ」

そう言いながら悟空を煽る霊夢。

考えたってどうしようもない悟空はそう考え戦闘態勢をとった。

悟空「言われなくてもやってやるぞ!」

ヒュン

超スピードで霊夢に接近する悟空。

悟空はほんの一瞬で霊夢の眼の前へと移動した。

そして!

悟空「だりや!!」

悟空は鋭い一撃を霊夢の腹部めがけてはなつた。

しかし！

スカッ

悟空「なっ!?!」

なんと、悟空の攻撃は霊夢の体をすり抜けてしまった！

霊夢「ふん」

薄ら笑いを浮かべる霊夢。

悟空は一回、霊夢と距離をとった。

悟空「なんだ、何がおきたんだ？」

驚きを隠せない悟空

霊夢「ふふふ、驚いてるみたいね」

驚いている悟空を見下しながら告げる霊夢。

悟空は、そんな中戸惑って表情で霊夢に尋ねた。

悟空「おめえ、一体なにをしたんだ？オラの攻撃がすり抜けてしまったぞ」

同様のあまり声が少し高くなる悟空。

霊夢はそんな悟空を見かねてから説明を始めた。

霊夢「これは、私が生まれ持つて使える技。その名も『夢想天生』。この技は私が最強

と呼ばれる原因の1つでありとあらゆるものから浮いた存在になれる技」

悟空「ありとあらゆるものから浮いた存在だと!？」

霊夢の異常な発言にさらに戸惑う悟空。

霊夢「ええ、そうよ。まあ、子供でもわかるように説明するならば私に攻撃を当てられなくなつたつて言つた方が早いわね」

腕を組み完全に油断した態勢でいる霊夢。

これも自分の夢想天生による自身であろう。

しかし、そんな霊夢の弱点がないかに思える夢想天生であるが悟空はある些細な疑問をもつた。

悟空「でも、それじゃあ、おめえもオラを攻撃できねえんじゃねえか？」

そうそれは他者に対しての攻撃である。

確かにふれれない今霊夢に攻撃を与えることは不可能である。

しかし、あえて言葉を裏返すならばそれは相手に攻撃が出来ないという捉え方もできるのである。

霊夢「ふふふ。それは、どうか」

だが、思つたよりも余裕の表情が浮かぶ霊夢。」



そして！

シユン

悟空のふいをつき不意打ちを仕掛けた。

悟空「なっ!?!」

流石の悟空も油断をしており反応が遅れてしまう。

そして！

ズゴーン

悟空の腹部に重い一撃が放たれた。

そのまま吹き飛ばされていく悟空。

しかし！

スツ

自らの体を一回転させることで体勢を立て直した。

悟空「いつてえなあ」

腹部を抑えながら呟く悟空。

霊夢「どうかしら、こちらから攻撃をする事は出来るの」

霊夢は得意げな笑みを浮かべながら悟空に告げた。

腹の痛みをこらえながら霊夢を睨む悟空。

霊夢「攻撃してこないの? まあ、出来ないけどね。どうする降参する」

圧倒的な自信に溢れた霊夢は悟空に対して自分のすごさをみせつけてきた。

流石の悟空も内心少しヤバいかもと考え出す。

しかし、悟空の辞書に降参という文字はない。

悟空は再び戦闘態勢をとった。

悟空「降参なんてしねえよ。必ずその技を破ってやる」

意気込む悟空。

霊夢「ふん。意気込みだけはいいわね。だけど、意気込みだけじゃ勝利は手に入らないのよ。あんたを気絶させて私が勝たせてもらうわ」

シユン

そう告げると霊夢は超スピードで悟空に接近した。

悟空「なっ!？」

霊夢「だりやあ!」

霊夢は悟空に連続でパンチを放った。

悟空は霊夢の攻撃をひたすら避け続ける。

しかし、悟空は霊夢の攻撃をひたすら躲すことしか出来ず、防戦一方になる。

霊夢「流石に速いわね。でも、逃げてばかりじゃ勝てないわよ」

そう告げると霊夢は悟空に回し蹴りをはなった。

悟空「なに！」

その回し蹴りは実に見事で完全に悟空のタイミングに合わせてきている。流石の悟空も避けきる事が出来ず、蹴りをくらいかける。

しかし！悟空は、とっさに手で攻撃を受け止め霊夢の足を掴み取った。

そして、悟空はそのまま霊夢の足を強く握りしめる。

と、その時！

霊夢「いたっ！」

悟空が強く握ったせいか霊夢は足に痛みを感じとる。

霊夢は、しようがなく一度悟空と距離をとった。

霊夢に距離をとられてしまう悟空。

しかし、悟空は見逃さなかった。

今、一瞬 確かに霊夢は痛みを感じダメージを受けていた。

悟空は考察する。

悟空「もしかして！」

悟空はなにかを閃く。

と、その時！

霊夢「今の攻撃を耐えきるなんてね」

霊夢は悟空に尊敬の眼差しを浮かべながら告げた。

霊夢「はあ、はあ、確かに、あんたは強いわ。私の夢想天生がなかったら確実にやられていたわ」

悟空「ん？」

霊夢に違和感を感じる悟空。

それは、なにかと言うと…。

霊夢「はあ、はあ」

そう霊夢の息が荒くなっている事である。

いくらなんでも息切れにはまだ、早すぎる。

悟空は少し疑問に思う。

そして、その疑問に自ら考察を行いそれをまとめた。

悟空（さっき、霊夢がオラを攻撃しようとした時、何故かオラは霊夢の足を掴むことが出来た。夢想天生は他者から浮いた存在になれる技…。そうか！わかったぞ！だから、あいつは向こうからオラに攻撃を与えることが出来たんだ。それにあの息切れ…。なるほどな、見つけだぞ。夢想天生の弱点を2つ！）

悟空は自らの心の中でどうやら回答を出せたようだ。

霊夢「……………」

悟空が攻撃してこないのを待つ霊夢。

霊夢「どうしたの？まさか、降参？」

悟空が攻撃しないので痺れを切らした霊夢は悟空に尋ねた。

悟空「降参だつて？冗談じゃねえ、やっとヒントを掴めたのによお」

そう告げると悟空は気を溜める態勢をとった。

悟空「一か八か試してみっか」

悟空「次はこつちの番だ！はあああああ！！」

急に奇声のような声をあげる悟空。

そして！

シューウウウン

その瞬間、悟空の髪の毛が逆立ち金色へと姿を変えた。

霊夢「これは一体！」

悟空の身からでる気迫に押される霊夢。

霊夢「なんて、凄い力なのまさかこれ程の力を持っているなんて！」

霊夢は、そのあまりの気迫に身震いする。

しかし、霊夢は、すぐに我に帰った。

霊夢「でも、残念ね。私の夢想天生の前には無意味よ!」

そう霊夢は自分の奥義である夢想天生に守られているのである。

いくら、悟空の戦闘力が上がろうと正直、意味がない!

霊夢はそう思った。

しかし、悟空は、「それはどうかな、どんな技にも必ず穴がある」と少し笑みを浮かべつつ余裕の表情を浮かべる。

悟空のその余裕は一体どこから出てくるのだ?

霊夢は心中眩いた。

霊夢「いい!夢想天生は最強の奥義穴なんてないわ」

悟空の余裕の表情を消し去るように気迫を込めて告げる霊夢。

すると、悟空は戦闘態勢をとった。

悟空「なら、やってみっか!」

微笑みながら告げる悟空。

霊夢もまさかとは思うが少し不安になってきた。

霊夢「私の技に弱点なんてないわ」

再度、自分に言い聞かせる霊夢。

悟空の圧倒的な余裕のせいかどうかどうやら霊夢自身の不安も膨らんで来ているようだ。

焦った霊夢は冷静さを失う。

そして！

霊夢「だりやああ！」

考えなしに真正面から悟空の元へ向かっていった。

霊夢「これで終わりよ！」

シュン

悟空の腹部めがけてパンチを放つ霊夢。

しかし！

霊夢「ぐはあ……」

急に腹部から痛みを感じとる霊夢。

霊夢は、恐る恐る自分の腹部に目をやった。

そこには！

悟空「ふふん」

悟空の手が自らの身に触れパンチを命中させて来ていた。

ダメージが大きく膝を地面につける霊夢。

霊夢「がはっ！一体、どうして！」

頭がしばし混乱状態になる霊夢。

そんな、霊夢を見かねてか悟空が説明を始めた。

悟空「簡単なことさ、おめえがオラに攻撃してきた時があっただろ。その時オラはおめえの攻撃を避けきる事が出来ず防御を取った」

霊夢「それが、何だというの？」

悟空の言葉に更に疑問を膨らませる霊夢。

悟空「よく考えて見ろ、おめえの攻撃をオラが防御した時、オラはおめえに触れる事が出来てるじゃねえか。その時、わかつたのさ。おめえはオラに攻撃を与える瞬間だけ実体化しオラに攻撃をしてたつてな。だから、オラはそれを狙ってカウンター攻撃を仕掛けたつてわけさ」

霊夢「……………」

しばし沈黙状態になる霊夢

そして、やっと頭の回転が追いついた。

霊夢「成る程ね。だから、あなたはそのスーパーサイヤ人つてやつになって一撃で私を倒す作戦に出たのね」

悟空「ああ、そうさ」

自分にも弱点はまだ、あつたんだなあ。と実感する霊夢。

霊夢「てことは、もし、私がカウンター出来ないほどのスピードを持つてたとしたら



どうなつてたの？ 私に勝気はあつたのかしら？」

霊夢は悟空に尋ねる。

たしかに今の言い分では悟空は圧倒的なまでのスピードがあつたからこそ霊夢を倒せた。

だが、実際にそんな速度を持つているものはまずいない。

霊夢は自分の弱点を再度見直すのも兼ねて悟空に尋ねた。

悟空「いいや、残念ながらねえな」

悟空は軽く霊夢にそう告げた。

霊夢は一度目を瞑る。

そして、「そう」とだけ相槌を打った。

霊夢「出来れば、その理由も聞かせてもらえるかしら」

霊夢は悟空に頼む。

すると、悟空はそれに対しての返事をする事なくすぐに説明を始めた。

悟空「おめえ自身、気づいてねえと思うが夢想天生を使ってから息が荒くなつてるんだ。おそらく、その夢想天生つちゆう技はかなりの体力を使つてしまう。もし、あのまま続けてたらおめえは燃料切れで終わつてたさ」

霊夢は我に残る体力を確かめる。

たしかに今の自分にもう殆どの体力は残っていないかった。

霊夢「成る程ね。最初から私には敗北しか無かったのか」

生まれて初めて悔しいと感じる霊夢。

それもそのはず彼女は幻想郷最強とも呼ばれるほどの人間。

しかし、その最強という名もたった今、目の前の少年に奪われたのだから。

霊夢「そういうえば、さっきのスーパーサイヤ人ってなんなの？」

不意に質問をする霊夢。

そう霊夢にとってはさっきの金色の光はまるで奇跡のような光。

その光は悟空を取り巻くらと悟空の戦闘力が増大したのだから。

悟空「サイヤ人が穏やかな心を持ちながら、激しい怒りによって目覚めた伝説の戦士

さ。まあ、伝説といってもオラの仲間の何人かは、普通になれっけどな」

悟空は軽く流した説明をした。

霊夢「成る程ね。じゃあ、あくまでそのサイヤ人ってのが慣れるだけでわたしには出

来ないのか」

少しため息をつく霊夢。

おそらく、自分もなれるのではないかという淡い期待をしていたのであろう。

悟空「そんじやら説明は終わったし戦いの続きすつか？」

悟空が霊夢に尋ねた。

すると、霊夢はビクツとした動きをし慌てた表情で悟空に告げた。

霊夢「冗談じゃないわ。悔しいけど降参、わたしの負けよ」

霊夢は自らの口から降参という言葉をだす。

悟空「そっか」

霊夢の降参を確認した悟空はスーパーサイヤ人の状態を解いた。

それに合わせて霊夢も夢想天生を解除する。

悟空「流石、幻想郷最強の巫女だな、オラ久しぶりにワクワクしたぞ」

悟空は少し笑みを浮かべつつ霊夢に告げた。

その言葉を聞いた瞬間、霊夢はゆっくりと立ち上がりつつ悟空に告げる。

霊夢「よくいうわ、あんな変身を隠していて、実はまだ、あつたりするんじゃないの」

少しにやけつつ冗談まじりの口調で霊夢は告げた。

しかし、そんな冗談も悟空の前では通用しない。

なぜなら…。

悟空「まあ、あと3つ変身を残してっけどな！」

そう本当に悟空はまだ変身を持っているのである。

流石の霊夢もこれには驚きを隠せない。

霊夢「あと、3つ!!」

周りに響き渡るような大声で告げる霊夢。

まあ、無理もない。さっきのスーパーサイヤ人でさえ、とてつもない力を持っていたのだ。

まだ、その上が3つも残しているというのだから驚くのは必然的である。

霊夢「あんたいつたい何処の世界から来たの?」

思わず悟空の世界について尋ねる。

悟空はすぐさまその質問に答えようとした。

悟空「オラの世界か? えつとだな…」

と、その時!

??? 「あと、あなたは何者なの?」

何処からともなく弾みのある声が響き渡る。

悟空は周りを見渡した。

果たして声の主は誰なのか!

## 新たに始まる生活 第5話

悟空「誰だ！」

悟空は謎の声に反応し警戒をいれる。

しかし、それも無理のない事。

何故なら、その声の主の姿が何処にも見渡らないのである。

姿の見えない敵ほど恐ろしいものはない。

悟空はいつでも反応できるように構えをとった。

???「そんなに警戒しなくていいわよ」

しかし、そんな悟空を見かねてか声の主は優しめの声をあげ悟空の警戒を解かせる。

と、その時！

霊夢「紫ね。あんたいつからいたの？」

霊夢が急に謎の声に対して言葉を返した。

どうやら、この謎の声の主を知っているようである。

紫「その子とあなたが戦いを始めた時からよ」

声の主。いや、霊夢いわく紫と言う自分は霊夢に返事を返した。

そして！

ビューーン

急に悟空と霊夢の前に空間の裂け目のようなものができる。

悟空は、あまりにも唐突な空間の裂け目に少し驚く。

いや、驚くのはそれだけではない。

なんと、なんと、その空間の裂け目から人が出てきたのである。

どうやら、こいつが声の主の正体のようだ。

紫「で、その子は誰なの霊夢？」

出てくるや否や霊夢に尋ねる紫。

どうやら、紫自身少し悟空を警戒しているようだ。

霊夢「誰って聞かれてもさつきであったばかりで私も何も知らないわ」

霊夢は、紫に正直に答える。

その表情は引き締まっておりどこことなく霊夢の方が権力が下に感じとられた。

紫「ふくん。そうなの」

紫は霊夢に対して適当に相槌を返すと悟空の方に振り向く。

紫「あなた、名前は一体なんて言うの？」

何処となく悟空に対する恐れを持ちつつ尋ねる紫。

よほど、霊夢を倒した悟空に恐怖を持っているのであろう。

悟空「オラは孫悟空だ」

定番の挨拶を交わす悟空。

紫「悟空君ね。私は八雲紫よ。で、悟空君、君は何者。霊夢を倒すなんて普通の外来人じゃないわよね？君のことについて詳しく教えてくれるかしら？」

紫は悟空に全てを尋ねる。

悟空の強さは正直、この幻想郷では異常。

紫はそんな存在の悟空をほっておけないのであろう。

悟空「わかった」

あつさりと許可を出す悟空。

なんと言うべきか悟空からは全然危機感が感じ取れなかった。

悟空「ただ悟空君って呼びかたはやめてくんねえか？オラこう見えても大人なんだ？」

紫に少しムツとした表情で告げる悟空。

そう忘れてはいけない。

悟空は姿は子供でも中身はもういい年のおじさんなのである。

まきに見た目は子供、戦闘力は大人である。

人に子供扱いされたら嫌なのは当然なこと。

霊夢「そういえばさつきもそんな事いってたわね。その事も含めて説明宜しく」

霊夢は紫の質問の間に入り込み悟空に言った。

悟空「わかった」

く 悟空説明中く

紫「あなたはとても凄い世界からきたのですね。まさか、宇宙を救った英雄とは…」

説明を終えるや否や急に口調が変わる紫。

どうやら、悟空の世界のことがあまりにもショッキングだったようだ。

霊夢「そりゃ、私が勝たないわけだ。でも、こんな子供の姿をした奴が私よりも年上だなんて」

霊夢は、なんとも不思議な気分を襲われた。

と、いうより話をまだ、しっかりと理解することすら出来ていない。

紫「こら霊夢、悟空さんに謝りなさい」



霊夢をしかる紫。

どうやら、見た感じ紫は霊夢の親てきな存在のようだ。

悟空「いいよ、實際体の年は大体13〜14歳ぐらいの年だしな」

霊夢の年齢は17歳なので確かに体の年齢は霊夢の方が年上である。

だから、あながち霊夢が年上だと言ってもあながち嘘にはならない。

それに悟空自身そのような言葉は聞き慣れて別に何も感じないようだ。

悟空「あと、紫。悟空さんじゃなくてオラの事は悟空って呼んでくれ敬語もいらねえ。

オラそういう風な言葉使いされるのどうも、苦手ですよ」

悟空はニコニコした顔で紫に告げた。

そう悟空は自分自身が凄いと一度も思ったことがないのである。

ここまで、来れたのも仲間のおかげ、だから、自身は敬わられるような立場ではない

と思っっているのだ。

紫「わかったわ、悟空」

そんな、悟空の心情をさしたかあつさりとして承する悟空。

どうやら、紫は多くの人間に関わってきたのか人間関係というのに深く詳しいようだ。

霊夢「そういうえば、もう日が沈みかけてるけど、何処に泊まるの？」

霊夢が不意に悟空に尋ねた。

悟空は「えっ?」と言葉をこぼす。

霊夢「えっ?」

その悟空の言葉に対して思わず反射的に言葉を返してしまう霊夢。

霊夢「えっ?て、あんた寝る場所あるの?」

霊夢は、再度悟空に尋ねた。

そうその通りである悟空は先程、幻想郷に来たばかりでまだ、人間とは霊夢ぐらいしか会っていない。

そんな、悟空が人里で宿の予約などを入れてるわけもないのである。

しかし、悟空は平然とした顔を浮かべ霊夢に告げた。

悟空「そんなん、そこら辺で野宿すりゃいいじゃねえか?」

なんとという野生魂であろうか。

悟空は野宿すると言い出した。

霊夢は瞳孔を思いつき開けて悟空をガン見する。

霊夢「あんた、それ正気で言ってるの!」

悟空の言葉がそんなに予想外だったか霊夢は叫び声のような音量で悟空へと告げた。

悟空「なんでだ?」

その霊夢の気迫に押されて思わず聞き返してしまふ悟空。

霊夢「野宿なんてしたらその辺にいる妖怪に食べられちゃうわ。いい、あんたがいくら強くてもね。幻想郷っ一体なにがおこるか分からないのよ。それに寝てる人間なんて完全に獲物だわ」

霊夢は若干、早口になりながら悟空に告げる。

どうやら、幻想郷ではそれほど野宿というものは危険な行為なのでしょう。

悟空「そうなんか？じゃあ、どうしよっかなあ？」

霊夢の気迫に押されたか、野宿するのを諦めた悟空。

悟空は行くあてもなくどうしたものか考え込んだ。

ふと、我に帰る霊夢。

そこでやっと自分が野宿を否定したせいで悟空の寝場所が無くなったことを自覚した。

霊夢も悟空がどこか暮らせる場所がないか考え込む。

そして、一つの案を思いついた。

思わずニヤける霊夢。

そのニヤケにはどことなく悪意を感じとれた。

霊夢「ねえ、悟空」

悟空「ん？なんだ？」

今夜の事を考え込んでいる悟空に対し不意に声を上げた。

そして、悟空に思わぬ一言を告げる。

「霊夢「もし、よかつたら私の神社で暮らす」

な、なんと、霊夢が神社と一緒に暮らさないかと提案してきたのである。

流石の悟空も急な提案に戸惑いを隠せない。

悟空「え？お前の神社にか？」

そう告げると神社の方に目をやる悟空。

神社は少し寂れてるものの人が住むには十分、立派と言つてもいいぐらいのもの。

悟空は再度霊夢に確認をとる。

悟空「本当にいいのか？」

悟空は霊夢に尋ねた。

勿論、霊夢は、「いいわよ」と軽く答える。

そのあまりの親切さには何か裏があるのではと疑うほどであった。

紫「あら、霊夢からそんな事言うなんて珍しいわね？」

不意に紫が霊夢に尋ねる。

どうやら、霊夢と長い付き合いであろう紫ですら霊夢の案は不思議に思えるようだ。

霊夢「どうせ、私が言わなくてもあんたが神社で暮らさなさいっていたでしょ？」

紫「まあ、確かにいったらうけど」

どう考えてもおかしい。

そう思いながら霊夢をジーッと見つめる紫。

そして、紫はハツとした。

紫「さては、あなた悟空に異変解決を手伝ってもらおうとしてるわね」

ギクッ！

急に背すじがピンとなり固まる霊夢。

霊夢「な、な、な、何言ってるのよ紫。そ、そ、そんな、わけな、ないじゃない」

まるで小説の登場人物のようにあからさまな動揺をする霊夢。

どうやら、凶星だったようだ。

ジト目で霊夢を睨み続ける紫。

霊夢「別にいいじゃない手伝ってもらうくらい」

開き直ったかツンとした表情を浮かべる霊夢。

紫「あのねえ、異変解決はあの魔法使いとあなたの役目でしょうが」

紫は大きくため息をつく。

どうやら、霊夢に呆れている様子だ。

悟空はまだ何のこっちやわかっていない様子。

悟空「なあ、紫、異変解決ってなんだ？」

悟空は紫に尋ねた。

さつきから霊夢と紫で異変、異変と言われても言葉よ意味が分かるが状況が飲み込めないの玉ある。

紫は悟空の方へと目をやった。

紫「この世界には異変という、妖怪が起こす異常な現象があるの。それを解決する事を異変解決。そして、博麗の巫女である霊夢はその使命を持っており異変解決のエキスパートなのよ」

悟空は首を少し傾げる。

どうやら、まだ、話を根から理解できていないようだ。

そんな、悟空を見かねてか霊夢が悟空に告げる。

霊夢「簡単に言えば悪い妖怪を倒して幻想郷の平和を保つてことよ」

その霊夢の台詞を聞いた瞬間、「なんだ、そういうことか」と言葉を漏らす悟空。

どうやら、軽くだが話についていけたようだ。

スツと紫に視線を合わせる悟空。

そして、悟空は誰もが予想しなかった発言をした。

悟空「よくわかんねえけど悪い妖怪を倒して幻想郷を守るって事なんだろう？よし、オラその異変解決って奴を手伝うぞ」

紫「え!？」

思わず声に出して驚いてしまう紫。

紫「いいの？あなたにとってこの幻想郷はいわば敷地の外の外のようなものなのよ？」

紫はあたりに響くような声で悟空に告げた。

確かに紫の言う通り悟空はまだ、この幻想郷に来て間のない存在。

そんな、悟空が幻想郷を守る意味だよなのである。

しかし、悟空は…。

悟空「そんなの関係ねえ。ただ、悪い奴をほっておくなんてオラにはできない」

悪い奴はほっておかないと言う信念を持っているのである！

例え自分とはあまりなくても何かを守るため絶対に負けない為に戦う。

それが悟空なのである。

霊夢はそんな悟空に対して目を輝かせる。

霊夢「流石、宇宙を救った英雄、話が分かるわねえ」

表情全体で喜びを表す霊夢。

どうやら、悟空が異変解決を手伝ってくれることがかなり嬉しいようだ。

紫も悟空が許可を出したのならば口を挟むことはできない。

紫「分かったわ」

あっさりと悟空の異変解決への協力を認める。

しかし、勿論、条件なしではない。

紫には分かるのであるこのまま好き勝手、霊夢にやらせると霊夢が異変解決の仕事をしなくなると…。

紫「ただし手伝ってもらっただけよ。自分は異変解決に行かないで悟空に全部任せたりしたらダメだからね」

今までの霊夢に対する信用がそんなに薄かったのか、紫は霊夢に忠告をうながした。

流石の霊夢も少しプツンとする。

霊夢「流石の私もそこまでサボったりしないわよ」

自分に対しての信用性が薄いことに拗ねる霊夢。

と、その時！

ぐうぐう



謎の音があたりにこだました。

霊夢と紫はその音の方角を振り向く。

そこには、腹を抱えた悟空がいた。

悟空は、霊夢と紫に告げる。

悟空「オラ腹減っちゃったぞ」

ドテッ

ドテッ

音に対して警戒まで入れていたのにまさかのその音が悟空の腹の音だったと知り思わずこけてしまう二人。

紫はそんな悟空を見かね霊夢に告げた。

紫「霊夢、悟空に食事の用意をしてあげなさい」

紫は霊夢に食事の用意をするように告げる。

しかし…。

霊夢「食事？冗談言わないですよ。この神社にそんなお金はないわ」

そう実は博麗神社は森の奥にあるため人里の人たちも滅多に來ず、収益があんまりないのである。

そのせいで周りからは貧乏神社とバカにさられる事もよくある。

紫「て、じゃあ、あんな食費はどうするきななの？」

霊夢「私と同じ雑草でいいんじゃないの？」

霊夢のありえない返答に思わず顔を抑える紫。

どうやら、霊夢には少しマナーを学んでもらう必要があると紫は思った。

紫は少し考え込む。

紫「まあ、いいわしばらくの間、食費代は私が出してあげる」

紫は渋々と言った表情で霊夢に告げる。

紫、自身霊夢を甘やかすのはダメだと思っているようだが今回は悟空の為に食事代の

費用を出すことを決意した。

霊夢「やったあー、それじゃあ、夕ご飯の用意するわね」

るんるんと鼻歌を歌いながら神社の中へ入っていく霊夢

そんな霊夢を背中を眺めながら紫は大きなため息をついたのであった。

時は少し進み霊夢の夕飯の用意が済んだ。

机にはこれでもかというほど料理が並べられている。

紫は目を丸くしながら霊夢に告げた。

紫「あんたねえ、人のお金だからってこんなに作る必要ないでしょ」

霊夢を叱る紫。

しかし、それもそのはずである。

何故ならその飯の量はゆうに30人前を超えていただから。

霊夢「それもそうね、久しぶりの自炊だから少し作る量を間違えちゃったかな」

流石の霊夢もこれは、作り過ぎたと反省する。

どうやら、今までこんな大量の料理を作ったという自覚がなかったよくだ。

しかし、捨てるのもあれなので取り敢えず余り物は食べてから考えようと自分に言い

聞かせ料理に手をつけ始めたのであった。

数分後

霊夢「はあ、はあ、私もうダメ」

料理の一割ぐらいを食べたところで霊夢が告げる。

いや、霊夢だけではない。

霊夢に続いて紫も腹を抑える。

紫「私もよ。流石にこれ以上は無理だわ。太っちゃっても嫌だし」

どうやら、紫ももう満腹のようだ。

霊夢も紫もこれはかなりの料理を残すことになってしまったなあ。と思う。

しかし、そんな心配もすぐに霊夢と紫から消え去るのであった。

霊夢と紫はふと悟空を見る。

その瞬間、二人は目玉が飛び出るかのように驚いた。

なんと、悟空のあんな小さな体の中にどんどん料理が吸い込まれていくではないか。

まるで胃袋にブラックホールが収められてるかのようである。

霊夢と紫は驚きのあまり固まった。

そして、我に帰った頃には机の上の料理は綺麗サツパリ食べられていた。

悟空「いや、食った食った」

とても満足そうな笑みを浮かべる悟空。

霊夢と紫はお互いに目を合わせる。

そして、「ははは」と笑い合った。

どうやら、今後の食事の時間の大変さを理解したようである。

霊夢「悟空、あんたそんな小さな体のどこにそんなに入るのよ」

紫「これは、食費代がとんでもない事になりそうね」

思わず口からポロリと言葉をこぼす二人

二人にとって先ほどの悟空がそれほどショッキングだったようだ。

ちなみにその後は無事洗い物も済ませ風呂も入ってその日は終了したのであった。  
これは悟空にとっての新たな生活の始まりであった。

## 金髪の魔法使い登場 第6話

悟空「ふわああん。よく寝た」

前回、博麗神社に住むことになった悟空は幻想郷ではじめての一夜を明かした。

霊夢「おはよう」

霊夢が寢室の悟空に顔を覗かせる。

どうやら、霊夢はもう起きていたようだ。

悟空「おめえ、もう起きてたんか？」

悟空は霊夢が起きていたことに驚いた。

それもそのはず、何故なら悟空はこれでも世間一般的には早起きと呼ばれている。

しかし、霊夢はそんな悟空を遙かにしのぎ当たり前かのように悟空に挨拶をしたのだから。

霊夢「まあね。それより朝ごはんできてるから食べなさい。どうせ、沢山食べるんでしょ」

悟空「まあな」

悟空は腹をポンポンと叩き空腹という意図をしめす。

それをみた霊夢は「ふふふ」と笑い悟空と一緒にちやぶ台を囲むのであった。

悟空「霊夢おめえ、料理うめえな」

飯を食っていると悟空が急にそのようなことを呟いた。

霊夢は少し頬を赤らめる。

しかし、

霊夢「まあ、博麗の巫女として料理ぐらいは出来ないよね」

とどこことなくツンとした表情でいった。

そんな霊夢の表情をみた霊夢は少し微笑みそのまま勢いよく食材を胃袋の中へ放り

込んでいくのであった。

それから、10分経った頃だろうか。

気がつけばちやぶ台の上に乗っていた食材は綺麗サツパリ無くなっていた。

悟空「ごちそうさま」

悟空は手を合わせながらそう告げる。

そして、「さてと」そういいながら急に立ち上がった。

悟空はそのまま玄関の方へと足を進める。

それを見た霊夢は少し疑問を覚える。

霊夢「ちよっと、どこ行くのよ？」

それは勿論、悟空がどこへ行くかである。

急に立ち上がったと思えばすぐに外へ向かう悟空。

悟空「ん、ああ、ちよっと、修行しようと思つてな」

悟空はなんとも当たり前だろという表情で霊夢に告げる。

恐らく、悟空にとつてはこれは日課なのだろう。

霊夢「あんたあんなに強いのに修行するの？」

悟空のセリフを聞いた霊夢はこれでもかというぐらい目を大きく開ける。

まさに目が飛び出るほどの驚きであった。

そんな、霊夢の驚きに少し動揺する悟空。

恐らく霊夢がこれほど驚くのは予想外だったのだろう。

悟空「あたりめえじゃねえか。いくら強いといつても体なんてほつといたらすぐにな

まつちまう。おめえも一緒に修行すつか？」

霊夢と一緒に修行しようとして介入する悟空。

恐らく、霊夢の驚き様から悟空は霊夢は普段全然修行していないと察したのである

う。

しかし、霊夢ときたら……。



霊夢「修行なんてお断りよ。疲れるし面倒いしそれに、私は元から強いから修行なんかしなくていいのよ」

自分の生まれつきの才能に溺れてしまっているのか修行は断固拒否した。

悟空は少しガツカリした表情を浮かべる。

悟空「そうなんか？でも、勿体ねえなあ、元であんなに強いなら修行したらとんでもなく強くなれるのに」

悟空は、寝転んでいる霊夢を後にし外へ向かうのであった。

悟空「この辺で修行すつか」

悟空は縁側の前あたりにやってきた。

なぜ、この場所を選んだかと言うと他の場所よりま人一倍スペースがあり少し心に余裕が持てるからである。

悟空「よし、まずは気のコントロールからだな」

悟空はそう言葉をこぼすと早速、修行に取り組もうとした。

しかし

「おーおーおー」

縁側から声が聞こえてきた。

悟空はふいに声の下方向に振り向く。

すると、そこには霊夢がいた。

どうやら、縁側に腰掛け悟空を見ている様子である。

悟空「どうしたんだ霊夢？」

修行をしようとしたタイミングで霊夢が来たのでもしかすると霊夢も気が変わって修行しにきたのではないかと淡い期待を込める悟空。

しかし、世の中そう甘くはなかった。

霊夢「あんたがどんな修行をするのか見せてもらおうかなっと思つてね」

どうやら、ただ霊夢は悟空が一人でどのような修行をするのか気になっただけのようなようだった。

悟空は、なんだと思つて修行を始める事にする。

すると、悟空は体を少し浮かべて座り目を瞑つて手を重ね合わせた。

そうこれは精神統一である。

目を瞑る事で相手の場所や動きをより鮮明に感じれるようにトレーニングをすると共に頭の中でこの時はこのように行動するとイメージでのトレーニングも重ねているのだ。

それを見て呆然とする霊夢。

それもそのはず、普通は修行と聞くと主に肉体のトレーニングを頭に思い浮かべるのだ。

なので、悟空のやっている精神いわゆる、気のコントロールなどの修行はあまりにも予想外であった。

霊夢「それが修行なの？」

思わず声を漏らしてしまう霊夢。

しかし、悟空は体勢を変えることなく「そうだ。これは気をしっかりと感じとったりコントロールする修行になるんだ」と霊夢に説明をする悟空

それを聞いた霊夢は再び呆然となってしまう。

うちなるエネルギーである気、霊夢で言うところの霊力はコントロールよりも大きさを優先されることが多い。だからこそ、今の悟空の修行は霊夢にとっては変な修行と一言でまとめてしまってもおかしいとは捉えがたいのである。

霊夢はますます分からなくなってきた。

そんな、霊夢の心情を僅かな呼吸の乱れか何かは分からないが悟空はすぐに察した。

悟空は分かりやすく霊夢に説明をする。

悟空「例えば、ちよつとオラに攻撃してみてくれ」

悟空は霊夢に自分へ攻撃するように要求する。

霊夢「え？」

霊夢は思わず声が漏れてしまった。

まあ、それもそのはずである。

なぜなら……。

霊夢「本当にいいの今あんた目瞑ってるし何も見えなんじゃないの？」

そう悟空は目を瞑っているのである。

霊夢にとって戦闘の中で最も大切な五感の一つは視覚なのだ。

なのにその視覚を閉ざしている今本当に悟空に攻撃をしていいのか不安なのだ。

しかし、悟空は、「まあ、試して見ろって」となんと余裕の表情。

霊夢は少し不安は残りつつも悟空の表情をみて少し恐れながらも攻撃を決意した。

霊夢「わかったわ。ただし怪我しても責任とらないからね」

霊夢はそう告げるや否や石ころほどの大きさのエネルギー弾を悟空めがけて放った。

すると、なんと言うことだろうか。

悟空はエネルギー弾がくる瞬間少し体を折り曲げてまるで弾幕を目でみたかのよう  
に避けた。

これには、流石の霊夢も驚く。

悟空「これが気を感じるって事だ」

霊夢は目を見開いた！

それもそのはず、幻想郷でこんな芸当ができるやつなど霊夢は一度も見たことないのだから。

霊夢は悟空の凄さを改めて教え込まれた気がした。

悟空「気づつてのは、誰もが絶対に持つているものだ。だから、オラは闘いの時相手の気を感じてそれで、相手の攻撃を避けんだ」

最早、次元の違う事を説明します悟空。

霊夢は少しだけ悟空を尊敬するのであった。

霊夢「あんた、本当に凄いわね」

悟空を反射的に褒める霊夢。

すると、悟空は目を開ける霊夢の近くまで歩きよつてきた。

悟空「そんなことねえぞ。おめえだつて修行すればこれくらい出来るようになるはずだ」

悟空はそう告げると霊夢の目を真剣に見つめる。

「どうやら、霊夢を修行に勧誘しているようだ

霊夢「でもねー、やっぱり修行は面倒臭いからな」

しかし、やっぱり霊夢の中ではどうしても面倒くさいと言う感情が勝つてしまうよう

だ。

悟空は少しガツカリした表情を浮かべる。

その時！

悟空「ん？」

悟空はなにかを感じたり空を見上げた。

霊夢「どうかしたの？」

霊夢はその異様なまでの悟空の表情の変化に少し驚く。

すると、悟空は空を睨みつけ「誰かが来る」といった。

霊夢「誰かって誰よ？」

悟空に続いて空を見上げる霊夢。

すると、奥の方から箒に乗った少女がこちらに向かってきているのが見えた。

悟空は、少し警戒を入れる。

しかし、「そんなに警戒しなくてもいいわよ悟空」と霊夢は悟空に警戒を解くように

言った。

悟空は、少し首をかしげる。

悟空「なんで？」

霊夢「ああ、あいつは私の友達なのよ」

どうやら、霊夢いわくこちらに向かってきている者は霊夢の友達だという。

悟空はその言葉を聞いていた安心したのか警戒をといた。

その直後だった。

箒に乗ってた少女が猛スピードで神社に降りてきた。

??? 「よっ 霊夢」

到着するやいなや挨拶をしすぐ箒から降りる少女。

どうやら、本当に敵ではないようだ。

箒を降りた少女はすぐに悟空へと目をやる。

そして、「誰だこいつ?」と一言呟くのであった。

霊夢はすぐにこの少年。すなわち、悟空の名前を教える。

霊夢 「この子は孫悟空って子よ。まあ、子供じゃないけど」

??? 「子供じゃないってどう言う事だ? どう見ても子供だろ?」

少し笑いを交えながら告げる少女

正直、悟空は内心不快に感じた。

霊夢 「結構、説明面倒臭いのよね」

しかし、霊夢は相変わらずの面倒な性格。

いちいち悟空の事を説明するのも嫌なようだ。

悟空「霊夢、こいつ誰だ？」

不意に悟空は霊夢にたずねる。

霊夢は、頭をポリポリ書きながらこう告げた。

霊夢「こいつは、霧雨魔理沙。私と同じ異変解決を行なっている魔法使いよ」

どうやら、この少女こそが霊夢と長年のコンビを組んできたものようだ。

悟空は、それを聞いた瞬間、魔理沙の方へさっと目をやった。

確かに大きな戦闘力が感じとられる。

どうやら、この少女、霊夢と組んでるだけあってそれ相当の力を身につけているようだ。

悟空は、魔理沙に声をかけようとする。

悟空「なあ」

しかし！

魔理沙「それより霊夢こいつは誰だよ？見た感じ外来人っぽいけど？外来人だったら早く外の世界に返してやれよ」

どうやら、魔理沙にとっては悟空は眼中外の存在のようだ。

悟空の声に耳を傾けようともせず、霊夢にばかり話しかける。

ここまで、尋ねられてはしようがない。



霊夢は、面倒そうなため息をつく。

霊夢「この子、実は……」

霊夢は、悟空の説明をしようとした。

今更だが考えてみると魔理沙は霊夢のパートナー的存在、なら、結局、説明しなければならぬことには変わりはないのだ。

後から説明するのも先に説明するのも一緒霊夢は悟空の説明にしばしば入り込む。

しかし！

悟空「なんだこれ？」

霊夢が説明をしようとした瞬間、不意に悟空が声を出した。

その声には疑問符が混じっており不自然さをかよわせる。

霊夢は説明をやめすぐ悟空の方へと顔を向けた。

すると、そこには何も言わずただ空を指さす悟空が立っていた。

疑問におもいつつも霊夢と魔理沙はすぐに上を見つめる。

そこには！

霊夢「なっ！」

魔理沙「嘘だろっ！」

戸惑いの感情をあらわとする2人。

どうやら、幻想郷にとってもこの現象は異常などのようだ。

魔理沙は、霊夢の方へと顔を向ける。

魔理沙「霊夢、どうやら、今は説明よりこつちをなんとかしなきゃいけねえみてえだな」

霊夢「ええ、そう見たいね」

表情を険しくする2人。

そして、2人はこの現象を口に出していった。

霊夢「空が真つ赤に染まっている。これは、もう間違えないわね」

魔理沙「ああ、これはまさしく」

霊夢「異変よ！」

魔理沙「異変だ！」

そう悟空が空に指を指していた理由はこれである。

なんと、空が真つ赤に染まっていたのだ。

悟空自身まだ、幻想郷に来たばかりで幻想郷にとって何が普通で何がおかしいかは把握しきれていない。

しかし、2人のセリフから悟空自身もこれが例の異変と言うことを理解できた。

霊夢「そうと決まれば早く行くわよ！この赤い霧どうやらまだまだ増えてるみたいだ

し。下手をしたら手遅れになる可能性があるわ」

霊夢は悟空と魔理沙の目を交互に見る。

2人とも霊夢の心情を察することが出来たのかコクリと頷いた。

そして！

霊夢「よし、行くわよ！悟空それに魔理沙」

霊夢は2人に出発の合図を出した！

悟空と魔理沙は口を揃えて「おう！」と意気込みをいれる。

そして、異変解決へ行動をうつそうとした。

しかし！

魔理沙「つて、なんでこいつも行くんだよ」

魔理沙は、慌てて悟空を制止する。

霊夢は顔を押しさえ込んだ。

恐らく、呆れているのであろう。

しかし、今から説明しては時間が足りない。

霊夢は、気合いで魔理沙の言葉を跳ねのく。

霊夢「後で説明するわよ」

霊夢はそう一言だけ吐き捨て我先にと飛び立った。

魔理沙「あ、ちよっ！」

魔理沙は、霊夢を止めようとするが時すでに遅し霊夢は素早く先に飛び出してしまった。

魔理沙は、ふと悟空の方へと振り返る。

そうこのままじゃ悟空を置きっぱなしになると思ったようだ。

しかし、その不安もすぐさま吹き飛ばされる。

ビューン

な、なんと、悟空は魔理沙が振り向いた瞬間、すぐさま霊夢の後を追うように飛び立ったのであった。

魔理沙自身まさか、こんな子供が空を飛べると思っておらず驚きを隠せずにいた。

しかし、すぐに我に戻りこのままじゃ私が置いてかれると思ったのか手に持っていた放棄にまたがり慌てて霊夢と悟空の後を追う。

少ししたぐらいだろうか。

魔理沙はやつとの思いで悟空と霊夢に追いついた。

霊夢「遅いわよ。魔理沙、何してるのよ！」

行動が遅い魔理沙に文句を言う霊夢。

確かに今回、魔理沙は色々という意味がわからないことが重なりてんやわんやしている。

その故、行動が少し遅れてしまったのだ。

魔理沙「仕方ねえだろ。まさか、そいつが空を飛べるなんて思わなかったし」

魔理沙が少し頬を膨らませる。

どうやら、少し拗ねたようだ。

魔理沙「とにかく！あとで絶対にこいつについて説明してもらおうからな。めんどくさ

がるなよ霊夢！」

魔理沙はめんどくさがりやの霊夢に念を推すような感じで伝えた。

霊夢の性格を手取るように理解している魔理沙。

どうやら、魔理沙と霊夢は本当に昔からの付き合いなんだなとこの時、悟空は改めて

思った。

魔理沙「で、とりあえず何処に向かうんだ？行くあてとかあんのか？」

不意に霊夢に尋ねる魔理沙。

そうよくよく考えてみれば勢いよく飛び出した割に目的地などは正確に決めていなかった。

魔理沙は今更ながらそのことを思い出したようだ。

霊夢は、頭をひねる。

そして、魔理沙に告げた。

霊夢「取り敢えず、霧が濃くなってる方向へ行きましよ。濃くなってるってことほそれだけ霧が密集していると言うことつまり発信源に近いってことだしね」

魔理沙「分かったぜ、じゃあさっさと行つてすぐに片付けてやるぜ」

グツと拳を握り込み気合を入れる魔理沙

おそらく、自分の強さにかんがりの自信があるようだ。

たしかに気を感じたところ魔理沙はかなりの潜在能力を秘めていることはわかる。

これほどの自身があつても不思議ではないのだ。

しかし、そんな魔理沙にまるで現実を叩きつけるかのように告げるのであつた。

悟空「でも、そう簡単には終わりそうにないぞ。今、オラ達が向かつてる場所、結構でかい気がいくつも集まつてる」

悟空の言葉に反応した魔理沙はピクリと悟空の方を振り向く。

魔理沙「なんでそんな事がわかんだよ？」

すこし鋭めの口調で悟空に告げる魔理沙。

恐らく、自分の強さが否定されたように感じすこしイラツときたのだろう。

霊夢は、すぐさまそんな魔理沙の感情を読み取つたのかため息混じりに魔理沙に説明をしてあげた。

霊夢「こいつには、そういう能力があるのよ。まあ、その能力は修行さえすれば誰でも使えるらしいけど」

その霊夢の説明は意外なほど単純だったがその説明に思わず驚いてしまった。

魔理沙「そういう能力って…。簡単にいう割にはめちやくちやすげえじゃねえか！もしかしてこいつってすごいやつなのか!？」

少し興奮する魔理沙。

その目には少し悟空への興味の表れを感じ取れた。

霊夢「まあね」

魔理沙とは逆にめんどくさいのか適当に返事を返す霊夢。

と、その時！

???「その人間ちよつと待った」

悟空と霊夢と魔理沙が呼び止められた。

3人は思わず急ブレーキをかけ周りを見渡した。

すると！

シューーン

どこからともなく青い何かがこちらに向かって飛んでくる。

悟空達は軽く身構えた。

??? 「あたいの縄張りに入るなんて、いい度胸ね」  
水色の髪に青い服を着た幼い少女のような奴が目の前に現れた  
果たして、少女はいったい何者なのだろうか。



## 紅霧異変編

## 紅魔館？悟空 V S 門番!! 第7話

現在、悟空達は突如現れた謎の少女によって足止めをくらっていた。

??? 「あんだ達！」

急にこちらに指をさしてくる少女。

??? 「アタイの縄張りに入ったことは覚悟は出来てるのよね！」

ドヤ顔かつ、まるで人を小馬鹿にしているかのような笑みを浮かべながら告げる少女。

悟空は思わず首をかしげる。

正直なところこの少女からはあまり大きな気を感じることはできなかった。

しかし、少女から溢れるこの圧倒的自信！

悟空は何か裏があるのではないかと警戒を強める。

と、その時。

少女の後ろからチラツと誰かが顔を出した。

その少女は緑色の髪をしているものどことなくこの青い少女と似た気を感じ取れ

た。

緑の少女は青い少女に囁くように告げる。

??? 2 「ねえ、もうやめようよチルノちゃんこの人達、今急いでるみたいだしさ」

どうやら、この子の名前はチルノというようだ。

恐らく、今後ろからきたチルノの友達がここを引き下がろうという提案のようだ。

たしかにその判断は賢明である。

ぶっちゃけ数でも戦闘力でもこちらの方が有利なのだ。

しかし、この青い少女は違った…。

チルノ「何いつてるの大ちゃん、こいつら勝手にアタイの縄張りに入ってきたんだよ

！」

今の分からない理論で逆ギレするチルノ。

正直、霊夢達は現在話についていけていなかった。

霊夢「あんた達、今私たち急いでて、遊びに付き合ってる余裕はないの。用が無いならもう行くわよ」

ついに痺れを切らした霊夢はこの2人をほってさっさと主犯の元へ向かおうとする。

しかし…。

チルノはそうはさせまいと体を大の字にして霊夢達をくいとめた。

チルノ「何を言うか、アタイの縄張りに入つて無傷で出れると思うなよ。なんとつてアタイ達は幻想郷最強のチルノ様と大妖精の大ちゃんだぞ！」

それを聞いた大妖精は思わずため息をつき「チルノちゃん……」と内心で呟いた。その表情は少しチルノに呆れた様子である。

悟空「おめえ、強えのか？」

この自信溢れるチルノへの興味が高まった悟空は目を輝かせながらチルノに尋ねた。すると、チルノは「はあ？」とした表情を浮かべる。

チルノ「あなた人の話を聞いてなかったの？」

大妖精（妖精だけどね）

やれやれという仕草をとりながら悟空をバカにするチルノ。

悟空は頬を少しぼりぼり搔いて今自分が変なことだったかな？と考えた。

そんな、悟空を見たチルノは「まったくもう！」とブツブツ言いながらも一度自悟空に自称自分の立場をもう一度説明した。

チルノ「アタイはこの幻想郷で最強つていったでしょ！私に勝てる者なんて存在しないわ」

親指で自分を指差すようにしながら告げるチルノ。



放棄の上に体を寝かせながら霊夢に告げる魔理沙。

霊夢「分かつてるわよ」

威勢良く告げる霊夢。

どうやら、チルノ同様霊夢もかなりの自信に溢れているようだ。

霊夢「それじゃあ、始めましょうか」

そう告げると同時に霊夢とチルノは構えをとるのであった。

チルノ「ああ、それじゃあ、こっちから行かせて貰うわよ」

その瞬間、空高く一気に浮上するチルノ。

霊夢はそれを見上げる。

一体、チルノは何をするのであろうか。

チルノ「ふふふ、アタイノ本気見せてやる」

そう呟くと同時にチルノは何かを取り出した。

そして！

チルノ「氷符「アイシクルマシンガン」」

チルノからツララ状の氷が霊夢めがけて降り注がれるのであった。

そうチルノが出したのはスペルカードてまある。

どうやら、いきなり全力で飛ばして来たようだ。

魔理沙は霊夢を見つめる。

その表情には少し心配の眼差しが見えた。

しかし、そんな心配も無駄だったとこの瞬間、魔理沙は自分の目で教えられるのであった。

ヒュン ヒュン ヒュン

なんと、霊夢はその攻撃をいとも簡単に躲していくのである！

その光景は、まるでツララの方が霊夢を避けているのではないかと錯覚してしまうほど美しかった。

魔理沙「やるな！霊夢」

思わず、声が出る魔理沙。

しかし、そんな魔理沙とは裏腹に悟空は無言であった。

まるで、霊夢ならこれぐらい当たり前だと知っていたかのように…。

そうこうしている間に霊夢は少しずつチルノとの距離を詰めていた。

どうやら、霊夢は近距離で一気に決めるようだ。

それに気づいたチルノは懸命にツララを放つ。

しかし、体力があんまりないのか少しづつツララの数が減っていった。

そして…。

ついに霊夢は、チルノの目の前までやってきた。

チルノの腹部に手をかざす霊夢。

その瞬間！

霊夢「はあ!!？」

霊夢は衝撃波のようなものをチルノに浴びせた。

勿論手加減はしている。

チルノ「うわあゝ」

そのまま勢いよく吹き飛ばされていくチルノ。

なんともあつけないと言うべきか一瞬で決着がついてしまったのであった。

近くにいた大妖精も「チルノちやくん」と叫びながら吹き飛ばされたチルノを追いか

けていった。

それを見た霊夢達は、ぼかんとした表情で突っ立っている。

どうやら、予想以上に弱かった妖精達に困惑してしまったようだ。

悟空「一体、なんだったんだあいつら？」

魔理沙「さあ……」

霊夢「私もよく分からない」

しかし、こんなところで、ぼーっとしている暇もあるわけなくすぐに切り替え再び3

人は異変解決へと向かうのであった。

〈数分後〉

悟空達はついに霧の発信源を見つけた!

悟空「霧の発生源が見えてきたぞ!」

そう告げると謎の館に対して指を指す悟空。

どうやら、発信源の正体はあの館のようだ。

霊夢「あれが紅い霧の発信源ね」

館を強く睨みつけながら告げる霊夢。

どうやら、霊夢自身も少し警戒しているようだ。

なぜなら、目の前にある館は言葉には表せないが謎の威圧感を放っていたのである。

それに霊夢の感が働いたのだ。

魔理沙「よし、さっさと行こうぜ」

そんな霊夢とは裏腹に明るい声で告げる霊夢。

その言葉はまるでムードメーカーのように霊夢の心に余裕を与えた。

魔理沙「本当にそれいつも一緒に来るのか?」

不意に悟空を見つめる魔理沙。

どうやら、かなり心配しているようだ。



しかし、魔理沙は悟空の本当の力をまだ知らない。心配して当然なのである。

魔理沙「いくら私達がいるからってそいつに構ってばっかりいられないんたぜ？」  
何を押すように言葉を吐き出している魔理沙。

しかし、霊夢はそんな魔理沙とは裏腹に「大丈夫、大丈夫」と軽い口調で流すのであった。

魔理沙「でもなあ〜」

だが、やっぱり悟空の事を全く知らない魔理沙。

悟空の事が心配でたまらないのである。

霊夢は、少し首を捻る。

一体、どうしたら魔理沙に悟空の強さを知ってもらえるのかと…。

と、その時、霊夢の頭に1つの案がよぎった。

霊夢「そうだ！じゃあ、こうしましょう。1番初めにできた奴は悟空と戦ってもらうことにしましょう！」

どうやら、霊夢の作戦は早々と悟空の強さを魔理沙に見せることのようにだ。

確かに悟空の強さを見れば魔理沙も気が楽になるはず、霊夢は中々良い案を考えたのであった。

その後も魔理沙は少し不安そうな表情を浮かべたが結局、霊夢に押されてしまい霊夢の意見に賛成してしまう。

魔理沙「じゃあ、そうするけどよ。でも、危ないと思ったたらすぐに私が助けに入るからな」

心配そうな目で悟空を見つめる魔理沙。

どうやら、本気で悟空を心配してくれているようだ。

しかし、霊夢はそれとは裏腹に悟空の強さに確信を持っていた。

霊夢「分かったわ。てことで悟空、最初の敵をよろしく」

笑顔で悟空を見つめながら告げる霊夢。

どうやら、戦いを省けてラッキーと思っているようだ。

悟空「ああ、分かった」

悟空は、そう一言霊夢に返す。

そうこう会話をしている間に館へとたどり着いた。

周りを見渡す霊夢達。

その館は物凄い威圧感を放っており入る前から霊夢と魔理沙にプレッシャーを与えた。

しかし、悟空は、「ひえ〜、近くで見るとより一層でけえなあ。オラなんかワクワクし

てきたぞ！」と呑気なことをかます。

そんな悟空を見た魔理沙は本当に大丈夫か？と心配になったのであった。館の周りをグルグルしているとなついに入り口の門らしきものを見つけた。

魔理沙「おい、霊夢あれ」

いち早くそれに気づき門に向かって指を指す魔理沙。

霊夢「どうやら、あれが入り口みたいね」

そのまま門の方へと急降下する霊夢達。

どうやら、いよいよ異変解決のスタートのようだ。

トン トン トン

3人同時に門の前へと足を下ろした。

そして、そのまま門の方へと目をやる。

そこからみる館の景色は上から見るのとまた違い不思議なオーラを醸し出していた。

魔理沙は唾を飲み込む。

どうやら、少し恐怖を覚えたようだ。

と、その時！

??? 「おや、どなたですか？」

どこからともなく聞き覚えのない声が響き渡った。

霊夢と魔理沙そして、悟空は警戒心をつよめる。  
すると…。

トントントントン

どんどんこちらへ向かってくる足音が聞こえた。

その音は確実にこっちへ向かってきており間違えなく自分達を狙っていると理解できた。

霊夢達は足音が聞こえてくる方向へと目をやる！

気がつくところには、チャイナドレスのような服装でみを包んだ女性が門にもたれるように立っていた。

??? 「あなた方は？」

不意に質問をしてくる謎の女性。

どうやら、向こうもこちらと同様警戒をしているようだ。

霊夢 「私は博麗霊夢こっちは孫悟空そして、こっちは、おまけの霧雨魔理沙よ」

魔理沙 「おまけてなんだよ！」

霊夢のあまりにも雑な自分の言い回しに少し顔を膨らませる魔理沙。

しかし、今のこの状況でそんな魔理沙に関わってる暇もなくそのまま魔理沙は無視されてしまうのであった。

??? 「そう。なら、次の質問ですが。あなた方がこの紅魔館に何の用ですか？」  
門番の目つきが一瞬変わる。

「どうやら、門番にとってはこの質問こそが大切なことのようなのだ。」

「霊夢「紅魔館?それがこの館の名前ね。そんなの決まってるじゃない。この霧を出すのをやめてもらいにきたってわけよ」

「霊夢の言葉に対して「なるほど」と相槌をうつ門番。」

「しかし!」

??? 「ですが、それは出来ないたのみです。どうか、お帰り願います」

「そんな甘いわけなく門番に帰るように請求された。」

「だが、しかし、勿論、霊夢達は、こんなところで帰れるわけではない。」

「霊夢「なら、仕方ないわね。無理矢理でもあんたらの主をぶっ倒してとめてもらおうわ」  
強い気迫を込めながら告げる霊夢。」

「どうやら、めんどくさがりやな性格とはいえ自分の役目を果たすという強い意志を霊夢は持っているようだ。」

「それに少し悟空は感心するのであった。」

??? 「私たちの主をぶっ倒す?残念ですがそれは無理です。何故なら、私がこの門を通らせはしませんからね」

少し微笑みを交えつつ余裕そうな表情を浮かべる門番。

どうやら、戦いにかんがりの自信をもっているようだ。

しかし、そんなのは想定内。

入り口に守り役がいることぐらいお見通しであったのである。

霊夢は、すぐさま悟空に声をかけた。

霊夢「そういうとおもってたわ。それじゃあ、悟空。よろしく」

悟空「分かった」

これから戦いが始まると思えないほどの呑気さを見せる霊夢と悟空。

しかし、これは単なるバカではなく戦いに絶対的な自信を持っているのである。

それを見た門番は顔を少し拒めた。

眉がそびえる。

???「闘うのはこの子供1人ですか?随分となめられた者ですね」

表情にうつすらと怒りを見せる門番。

どうやら、自分が舐められているように感じたようだ。

しかし、そんな門番の表情には、何一つ気づかない悟空は、門番の目の前まで足を運

んだ。

魔理沙「本当にあいつ1人でいいのか?」

再び心配の声を上げる魔理沙。

正直、ここまでしぶといと面倒いレベルであるがそれだけ魔理沙は他人を思っているんだなと霊夢は解釈し魔理沙に告げた。

霊夢「大丈夫だって、言ってるでしょ。いいから見えていなさい」

そう一言だけ告げると悟空の方へと顔を向けさせた。

すでに2人の距離は2メートルぐらいになっておりいつ戦闘が始まってもおかしくない。

??? 「今まで何年も門番をやってきたけど子供と闘うのは初めてですよ」

どことなく悟空を見下しながら告げる門番。

完全に悟空を下に見ているようだ。

しかし、悟空はそんなことは気にしない。

軽い笑みを浮かべ悟空は門番にこう告げるのであった。

悟空「へへへ、でもオラこう見えて子供じゃねえぞ」

それは、もはや悟空にとってお約束化したセリフの一つである。

毎回会う相手に子供扱いされるため自分の意思でいったというより反射的に口に出したに近かった。

門番はそんな悟空の意味不明な発言に頭を傾ける。

??? 「子供じゃない?」

まさに予想通りの反応をする門番。

悟空と霊夢はやっぱりそんな反応になるわよね。と心で呟くほどである。

??? 「まあ、子供だろうが子供じゃないからうが私は侵入者を倒すまでです」

恐らく、子供の言った適当なことだろう。

門番は悟空の言葉をそう解釈し戦闘の体制をとるのであったり

??? (ふん、10秒で終わらせるわ)

心の中でそう呟く門番。

そして!

ヒュン!

不意に門番は猛スピードで悟空に接近した。

どうやら、この一瞬で悟空との戦いを決めるようだ。

シューーン!

悟空にめがけ勢いよくパンチを放つ門番。

このまま行けばその拳は悟空の腹部を貫きやられてしまうであろう。

だが、悟空はそんな不意打ちの攻撃にも瞬時に反応する!



なんと、悟空は体をヒヨイと横にねじりいともたやすく門番のパンチを躲してしまつた。

これには、流石の魔理沙も門番も驚きを隠せない。

魔理沙「なに!!?」

???「なに!!?」

お互いに悟空が攻撃を避けられるはずないと考えていたのか目が飛び出るほどに悟空の方へ目をやった。

門番は一度悟空と距離をとる。

悟空「結構、速えじゃねえか」

どうやら、悟空の方も門番の速度に驚いているようだ。

たしかにもし悟空が少しでも動作が遅ければパンチは直撃したであろう。

門番は一呼吸する。

???「すみません。あなたをなめていました。あなたの名前なんです。たっけ?」

強さを認めたのか悟空に名前を尋ねる門番。

悟空「オラは孫悟空だ。おめえの名前は?」

悟空も同じように名前を聞き返す。

すると、門番は礼儀正しい振る舞いをし、こう告げるのであった。

??? 「私の名前は紅美鈴と申します」

門番の名前は美鈴というようだ。

美鈴は、足を一歩前に出す。

恐らく、ここからが本当の戦いのようだ。

その美鈴の気迫を感じ取ったのか悟空も美鈴と同様に構えを取る。

悟空「美鈴、こんどは本気でこい！」

美鈴に言い放つ勢いのある声で告げる悟空。

美鈴は、それを聞くと返答のかわりにニヤツとした笑顔をみせる。

そして！

ヒュン

美鈴は先ほどよりもさらに勝る速さで悟空に接近した！

美鈴「はっ!!?」

悟空に勢いよくパンチを放つ美鈴。

しかし…。

悟空「よっと」

悟空はいともたやすく避けてしまった。

しかし、美鈴は諦めない。

一度躲されたぐらいなんのその次は連続で悟空にパンチとキックを送っていった。しかし、悟空にそんなのは関係ない悟空は攻撃と攻撃の隙間にできるわずかなスペースをかいぐぐった。

悟空「動きに無駄がありすぎっぞ！はあ！」

そう告げるや否や美鈴の腹部にパンチを打ち込む悟空。

流石の美鈴もこれはたまったものじゃない。

慌てて悟空と距離をとり体制を立て直した。

美鈴（何て奴なの私の攻撃を全て躲すなんて、しかもあの隙間をぬった攻撃）

美鈴は悟空が予想以上に強く驚きを隠せなかった。

いや、美鈴だけじゃない。

魔理沙「ひえ、悟空ってあんなに強いのか」

霊夢「だから心配要らないって言ったでしょ」

どうやら、魔理沙も美鈴と動揺に悟空の強さに驚いていた。

ここに来てようやく悟空の強さを知ったのである。

美鈴（このままでは、私に勝ち目は無いわね。こうなったら私の全力の一撃をくらわせるしかありませんね）

美鈴はそう心中で呟くと悟空を指差した。

美鈴 「悟空さん、今から私の全てをあなたにぶつけます」  
「どうやら、美鈴は本当に次の一撃で全てを賭けるようだ。」

恐らくさの攻撃を悟空が耐えられるかどうかで勝負が決まるであろう。  
果たして、勝つのは悟空か美鈴どちらでもあろうか。

## 霊夢が苦戦？ 謎のメイド十六夜咲夜 第8話

美鈴「これが私の全力です」

そう告げるや否や両手を重ね合わせ構えをとる美鈴。

美鈴の手からは何やらエネルギーの塊のようなものが現れた。

どうやら、これが今のこいつの気全てであろう。

悟空はそんな美鈴に対してドツシリと構える。

どうやら、本気で美鈴の一撃に対抗するようだ！

それを見た美鈴はニヤツと笑みを浮かべる。

どうやら、悟空のとの戦いに楽しいという感情が混じったようだ。

美鈴「これで、決める！」

そう告げるや否や美鈴はエネルギー波を放った。

そのエネルギーは高密度で凝縮されており正に威力重視の一撃必殺技である。

流石の悟空もこれは危ないと判断したのか！

即座に両手を前にし重ね合わせる。

そして！

悟空「波——！」

とつさに悟空はエネルギー波を放った。

ヒューーン ヒューーン

お互いにエネルギーを込め合わせた技を放つ2人。

そして！

ドーン!!?

2人のエネルギー波はちょうど真ん中でぶつかり合った。

そして、そのままお互いにエネルギーが消えてしまったのであった。

どうやら、お互いのエネルギー波同士がエネルギーを相殺しあったのである。

美鈴「まさか、あんな一瞬のために相殺させるなんて」

美鈴は驚き呆然としていた。

まあ、無理も無いであろう今の一撃は自分のフルパワーだったのにもかかわらずいとも簡単に消されてしまったのだから。

呆然としている美鈴をおいて即座に次の攻撃の構えを取る悟空。

悟空「こんどはこっちから行かせてもらうぞ」

そう告げると悟空は両手を体の後ろの方に持っていくようにし重ね合わせた。

そのまま悟空の手にエネルギーが圧縮されていく。

そうこの技は！

悟空「かくめくはくめく波ー！」

悟空はそう告げると同時に両手を前に持つていきそこからエネルギー波を放った。

そうこの技こそ悟空の必殺技であるかめはめ波である。

呆然としていた美鈴もあまりの迫力に目が醒めるような感覚に襲われた。

美鈴「なんて威力と速さなの！」

急いで横に避けようとする美鈴。

しかし、時すでに遅し美鈴はそのまま、かめはめ波に飲み込まれてしまったのであった。

『ドンッ』

周りは凄まじい爆風で包まれる。

霊夢「ちよつとどうなってるのよ！」

魔理沙「知るかよ。前が見えねえぜ」

急に広がっていく爆風のせいで視界が閉じてしまったようだ。

霊夢と魔理沙は黙々と爆風が晴れるのを待つ。

30秒ぐらいだろうかついに爆風が晴れていた。

そこには、倒れた美鈴の姿がある。

霊夢「どうやら、勝負ありのようね」

倒れた美鈴を見てそう告げる霊夢。

魔理沙「ああ、そうみてえだな」

魔理沙の口からも霊夢と同様のセリフが出た。

「どうやら、霊夢と魔理沙どちらの目から見てもこの勝負は悟空の勝利に見えたようだ。」

まあ、その通りだろう。

言うまでもなく美鈴の体はポロポロになっておりとても戦いどころか立つのですら無理に思われた。

霊夢と魔理沙は悟空の元へ近づこうとする。

と、その時！

美鈴「く、ぐぐぐ」

なんと、美鈴から声が聞こえた。

「どうやら、意識は失っていないようである。」

いや、それだけではない。

なんと、そのまま美鈴はポロポロになりながらも立ち上がったのである。



それを見た霊夢と魔理沙は思わず「え！」と声が漏れてしまった。まあ、それもそのはずである。

あれほどの攻撃を受けたにも関わらずまだ、立ち上がったのだから。美鈴は大きく息を乱している。

どうやら、たつたまではいいがそれで降、体が動かないようだ。歯を思いつきりくいしげな美鈴。

その表情からは悔しさが感じ取れた。

そして、次の瞬間こう告げる。

美鈴「参りました。まさか、これほどの力を持っているとは」

美鈴は降参をしたのであった。

まあ、このまま言っても恐らく美鈴に勝機は全くないこれは正しい判断であろう。

悟空はそんな美鈴に敬意を持ったのか真剣な眼差しで美鈴をみつめた。

悟空「おめえ、すげえなかめはめ波をまともにくらって立つなんてよ」  
美鈴に心から告げる悟空。

恐らく、これが悟空の優しさだったのだろう。

勝ち負け関係なく相手に常に敬意を払うそれが悟空なのである。

そんな、悟空の心情を読み取ったのか。

美鈴も悟空を真剣かつ優しい目を向けこう告げるのであった。

美鈴「ありがとうございます」

その言葉を最後に急に倒れ込む美鈴。

恐らく、体力が切れ気絶してしまったのだろう。

悟空は、そんな美鈴を壁にもたれさせてあげると霊夢と魔理沙とともに門番を通つていくのであった。

無事に美鈴を倒し門を越えることに成功した霊夢達は現在、建物の庭を歩いていた。

この建物、思ったよりも敷地が大きく門から建物までの庭がもの凄く長かったのだ。

魔理沙「いや、まさかこいつがあんなに強いとわな」

さっきの戦いでの悟空の強さに感動している魔理沙。

恐らく、これで魔理沙も悟空の事を心配することはなくなったであろう。

悟空「はは！まあな」

魔理沙に褒められて少し天狗になる悟空。

恐らく、戦いが出来て少し浮かれているのであろう。

悟空にとって戦いとはそれほど楽しいものなのである。

そうこう会話をしているうちにいつのまにか館の庭を抜け館の扉の目の前までやつ

てきていた。

近くでみるとさつきよりも迫力が増して見える館。

霊夢と魔理沙は思わず息をのむ。

しかし、勿論こんなところで足を引くわけにもいかなないので霊夢と魔理沙と悟空はゆつくりと扉を開けついに館の内部に入り込むのであった。

館内を見渡す悟空。

悟空「なんか、薄気味悪いところだな」

悟空の口からそう言葉が溢れる。

たしかにこの館には、窓が一切なく太陽の光が入ってきていないのである。

せいぜいあるとしても高い天井の先にあるシャンデラの明かりぐらいであった。

と、その時！

『ガチャン』

今、自分達が入ってきた扉が急にしまった。

霊夢と魔理沙は扉をみつめる。

霊夢「扉が勝手に……」

あまりにも急な展開に取り乱している霊夢達。

一体、何が起こったのだろうか……。

霊夢達を取り乱していると急に前の方から謎の声が聞こえてきた。

??? 「ようこそ、紅魔館へ」

どこからともなく人の声が聞こえた。

霊夢と魔理沙は警戒をいれる。

すると、目の前から白髪の謎のメイド服をきた女性が現れた。

霊夢 「あんた何者！」

自分達にこれ以上近づかせない為か女性に少し気迫を込めて告げる霊夢。

どうやら、霊夢は直感的に何かヤバいものを感じたようだ。

しかし、どういうことか目の前に現れた女性はまるで霊夢の声が聞こえていないかのように質素な表情が崩れることはなかった。恐るべきポーカークーフイスである。

??? 「私はここでメイドをやらせて頂いております十六夜咲夜と申します。以後、お見

知り置きを」

女性は警戒をするところか霊夢達に頭を下げる。

どうやら、本当に礼儀の正しいメイドのようだ。

霊夢 「メイドですって? なら丁度いいわ。今すぐこの主人に伝えてきてちょうだい。今すぐこの霧を止めるようにね!」

咲夜に命令を出す霊夢。

しかし、咲夜は、またまた何一つ表情を変えることなくこう告げるのであった。

咲夜「それは出来ません。私はお嬢様に使えるメイドです。貴方の命令を聞くわけに  
わいきません。そして、もしお嬢様に近づくというおつもりでしたら……」

その瞬間、咲夜の目つきが変わった。

咲夜「ここで私があなた方を始末させて頂きます」

礼儀が正しいところは先ほどと変わらないが今の咲夜からは殺気のようなものが感じ取れた。

どうやら、この咲夜を倒さないと先へは進めないようである。

霊夢「そう、じゃあ私があなたを退治してあげる」

こいつを倒さないといけないとわかったいじよう戦うしか選択肢をなくした霊夢は咲夜と戦うことを決意したようだ。霊夢の目からは何やら熱い炎のような物が戦える。恐らく、さっきの悟空に刺激され戦いへの好奇心が高まったのであろう。

霊夢は、一歩前に踏み出し構えをとった。

と、その時！

魔理沙「ちよつと、まったー！！！！」

後ろから魔理沙が急に大きな声をあげた。

霊夢「なによ、魔理沙！」

少し鬱陶しそうな声で魔理沙に告げる霊夢。

「どうやら、さあ、戦おうという時に邪魔をされたので腹が立ったようだ。」

魔理沙「今度は、私に戦わせろよな！お前ここに来る前妖精と闘ったじゃねえかよ。」

悟空もさつき門番と闘ったし次は私の番だろ？」

「どうやら、魔理沙は次に戦うのは自分が先だと主張したいようだ。」

たしかによくよく考えてみれば霊夢は先ほど妖精と戦闘をしたばかりなのである。

それなのにまた戦おうとしたから少しずるいとおもったのである。

霊夢「妖精とはこの館では闘ってないわ。だから、あの戦いはノーカンなのよ！」

しかし、霊夢もこの戦いは自分がやりたいという欲求が強く魔理沙にはなかなか譲ろ

うとしなかった。

魔理沙「でもよ」

しかし、勿論、魔理沙がそれで納得するわけもなく。

言い争いはこの後も続くのであった。

それを見かねた悟空は、やれやれと思いつながら二人にこんな案を出した。

悟空「じゃあ、ジャンケンすりゃいいじゃねえか」

霊夢と魔理沙は一度言い争いをやめる。

そして、同時にこう告げるのであった。

霊夢・魔理沙「それいいわね」

どうやら、二人ともそれで納得がついたようだ。

すぐさま、行動に移す霊夢と魔理沙。

霊夢・魔理沙「それじゃあ、最初はグージャンケンポン」

しかし、結果は両方ともグーでありあいこであった。

もう一度手を最初の形に戻す二人。

霊夢・魔理沙「あいこでしょ」

だが、今度はお互いにチョキを出し合い再びあいこになってしまった。

流石に3回目以内には決着をつけたい霊夢と魔理沙。

二人は、声に気合を込め再び告げるのであった。

霊夢・魔理沙「あいこでしょ」

だが、もうここまできたら予想がつくであろう。

二人はまたまた、あいこになってしまった。

変なところで気があう二人。

なんと、この後もずっとあいこが続きいつのまにかジャンケンは53回目に到達して  
いたのであった。

霊夢・魔理沙「あいこでしょ」

霊夢がグーを出し魔理沙はチヨキを出す。

どうやら、やつと勝敗がついたようだ。

魔理沙「くっそー、負けたぜ」

霊夢「ふふん! どんなもんよ!」

悔しがる魔理沙を後ろ目に喜ぶ霊夢。

どうやら、長い接戦を勝ち抜いたのが嬉しかったようだ。

霊夢「じゃあ、あんた達は離れて見てなさい」

今度こそと言わんばかりの迫力で前に出る霊夢。

魔理沙はしようがなさうに悟空と一緒に霊夢の戦いを観戦することにした。

咲夜「やつとですか」

変な茶番のせいでずつと待たされていた咲夜は堅苦しい体制をとき霊夢に視線を飛ばした。

霊夢は、ニヤリと笑い「悪いわね。私達はこういうキャラなのよ!」と呟いた。

咲夜はそれを聞いた瞬間、やれやれといった態度を取ってきたが霊夢は特にそれを気にすることはなく戦闘態勢を取るのであった。

そして、咲夜にこう告げる。



霊夢 「それじゃあ、行くわよ！」

そう告げた瞬間、霊夢は両手を前に掲げる。

そして！

霊夢 「はあああああ!!」

『しゅん』『しゅん』『しゅん』『しゅん』

高密度の弾幕が咲夜に放たれた。

威力もあればスピードもっている。

恐らく、あのメイドに当たれば瞬殺できるであろう。

『シューシューシュー』

どンドン咲夜と弾幕の距離が縮まっていく。

しかし、咲夜は一向に避けようとしなかった。

霊夢は、その事について一瞬怪しんだ。

しかし、特に相手がなにかを仕掛けてくる素ぶりがない以上。

「あまりにも早すぎて反応するのができない」というふうに解釈をした。

しかし、その解釈が間違えて会ったことを霊夢は次の瞬間わからされるのであった。

それは、霊夢の弾幕が咲夜に当たる直前になった時だった。

『シューン』

霊夢「え？」

謎の効果音とともに焦りを見せる霊夢。

一体、これは？そう心で呟きながら周りを見渡す霊夢。

霊夢「き、消えた！」

しかし、霊夢がこうなるのも無理はない。

なぜなら、咲夜が弾幕に当たる瞬間、咲夜の姿が消えたのである！

あの弾幕は確実に咲夜を捉えていた。

しかも、あそこまでの距離を詰めて…。

霊夢は、若干の恐怖を覚える。

と、その時、後ろから声が出た。

咲夜「どちらを見ておられるのですか？」

霊夢「!!?」

すぐさま、声のした方向を振り向く。

そこには、無傷の咲夜がいた。

霊夢は慌ててバックステップをとり咲夜よ距離を置いた。

霊夢「あんた、いつの間にも！一体どうやって…」

啞然とした表情でつぶやく霊夢。

額からは冷や汗が流れ落ちていた。

咲夜「さあ、何をしたんですかね〜」

霊夢に対して焦らすような口調で挑発を行う咲夜。

咲夜「まあ、何をしたのか知りたいなら自分で考えることね」

一体、咲夜は何を狙っているのだろうか。

霊夢「いいわ、あなたの能力なんてすぐに見切つてあげる」

霊夢は、あつさりとして咲夜の挑発に乗つてしまふ。

その光景を見ていた悟空は少し厳しい顔を浮かべたのであつた。

咲夜「威勢だけはいいのね。じゃあ、今度はこつちから攻撃させて頂きます」

その瞬間、指先でナイフを持つ咲夜。

一体、何をするつもりなのだろうか…。

霊夢は、めい一杯警戒をして構えをとつた。

と、その瞬間！

『シュン』

霊夢「なっ!!?」

霊夢の目の前に数本のナイフが一気に現れた。

霊夢は慌ててそのナイフを避けていく。

咲夜「ほお、まさか避けきるなんてねえ」

先ほどよりも怖い目つきに変わった咲夜はまるで霊夢を見下すかのような表情を浮かべた。

それに腹を立てたのか霊夢は、歯を思いつきりくいしぱり再び構えをとった。

霊夢「調子に乗るんじゃないわよ！」

頭に血が上ってしまったのか、霊夢の表情には怒りしか見えてこない。

どうやら、冷静さを少し失ってしまったようだ。

それを見ていた魔理沙と悟空。

魔理沙「霊夢が苦戦してる。こりゃ、私が闘わなくて良かったぜ」

悟空(あいつ、急に現れたり消えたりしやがる。瞬間移動とは少し違いし、しかも、急にナイフが霊夢の前に現れる何て一体あの咲夜って奴は何をしてるんだ?)

どうやら、悟空でさえ咲夜の能力はまだ把握できていないようだ。謎の能力の持ち主十六夜咲夜、果たして霊夢に勝機はあるのか?

## 咲夜攻略！ 第9話

霊夢（取り敢えず今は、ひたすら攻撃して相手の能力を見極めるか）

咲夜の能力が分からない以上どうしようもなくなってしまうた霊夢は、取り敢えず攻撃に専念をした。

霊夢「はあ!!？」

再び霊夢からは高密度の弾幕が放たれる。

しかし…。

『シユン』

いくら放とうとも当たる直前に咲夜は身を消してしまい弾幕を避けられてしまう。

いや、それだけではない。

あまりにも攻撃に夢中になっていると不意に目の前から無数のナイフが飛んでくる。

霊夢はそのたびギリギリで攻撃を躲し続けた。

しかし！

流石の霊夢もそんな不意打ちを何度も躲せるわけもなく…。

『シユン』『シユン』

直撃はないものの身をかすめる始めてきた。  
霊夢の頬からうっすらと血がにじみ出る。

睨夜はそんな霊夢をよそにクスクスと余裕の笑みを浮かべるので会った。  
と、その時!

悟空「もしかして、あいつは」

離れて見ていた悟空は何かに気がついた。

恐らく、睨夜の能力の正体に気がついたのであろう。

魔理沙「なんだよ、悟空?まさか、あいつの能力に気がついたのか?」

悟空の表情から能力に気がついたことを察する魔理沙。

悟空は、ゆっくりと「ああ」と告げた。

魔理沙「それなら、すぐに霊夢に教えてやろうぜ。このままじゃ霊夢が!!」

魔理沙の声は少し早口になっており焦っていることがわかる。

どうやら、それだけ霊夢のことを心配しているようだ。

しかし、悟空は…。

悟空「ダメだ」

なんと、魔理沙の頼みを断り再び霊夢の試合の観戦を続けた。

魔理沙は、「えっ？」といった表情で悟空を見つめる。

魔理沙「なんでだよ悟空！」

そして、それと同時に怒りのこみ上げた声を荒げた。

魔理沙「このままじゃ、あいつは死んじまうかもしれないんだぜ！」

焦る魔理沙。

悟空は、そんな魔理沙を見かねたのかゆつくりと口を開き魔理沙に自分の意図を伝える。

悟空「霊夢の性格だったら、きつとオラ達に余計なことはするなっていうはずだ。ここでオラ達が手助けしちまうとあいつの心に悔いが残っちまう」

ここで霊夢に協力しては霊夢自身納得のいかない戦いになる。

そう悟空は、霊夢が悔いのない戦いをしてくれるの望んでいるのである。

魔理沙は、少し考え込んでしまった。

魔理沙「でもよ……」

やはり不安が大きいのか、少し自分の心で格闘がおこってしまったていた。

霊夢を助ける方がいいのか霊夢を応援する方がいいのかと……。

しかし、そんな魔理沙の気持ちを感じた悟空は、優しい口調で魔理沙に告げる。

悟空「魔理沙。よく考えて見るよ、相手は能力はともかく身体的には霊夢よりも

劣っているんだ。根本的に、とてつもなく強い相手だったら、まだしも、自分よりステータスが低い相手に多数で闘うのは霊夢も好まないはずだ。ここは、霊夢を信じて見届けろぞ」

その言葉を聞いた瞬間。

心の迷いが吹っ切れたのか、魔理沙の顔に元気が戻る。

そして、「それもそうだな! 頑張れよ霊夢」と、魔理沙は再び霊夢の応援を続けるのであった。

一方、霊夢はその頃咲夜の能力の考察をしていた。

霊夢「急に消えて急に現れる。さらには、急にナイフが現れる」

一度、咲夜的能力を整理する霊夢。

しかし、その答えはまだ、掴めずにいた。

と、その時!

ヒュン

再び霊夢の前にナイフが現れた。

霊夢は、慌てて体をねじる。



なんとか、直撃は免れたもののそれは霊夢の右腕を深めにかすめていった。

霊夢は、右腕を抑えながら咲夜を睨む。

霊夢「くっ!!?」

咲夜「戦いの中で考え事をするのはよろしくありませんよ。今みたいに判断力が落ちてしまいますから」

滴り落ちる霊夢の血を横目に咲夜は笑みを浮かべていた。

霊夢は、そんな咲夜に少し苛立ちを覚える。

そして!

霊夢「はあ!!?」

咲夜に不意打ちのエネルギー波を放った。

咲夜は、完全に油断しておりまず、避けられないはず!

霊夢は、一瞬勝利を想像した。

しかし…。

ヒュン

霊夢のエネルギー波が当たる。

これには、流石の咲夜も反応が遅れてしまった。

しかし、咲夜は両手を前にかざしてエネルギー波から身を守る。

霊夢「決まった!」

霊夢は、勝利を確信した。

しかし…。

気がつくともエネルギー波の波の中には咲夜がいなかった。

どうやら、また、消えたようである。

霊夢は、慌てて周りを見渡し咲夜を探す。

すると、後ろから声が聞こえた。

咲夜「何度攻撃しても、あなたの攻撃は私には当たりません。もう、諦めたらどうかしら」

咲夜が後ろに回り込んでいるのを認識した霊夢は慌てて咲夜と距離を取る。

霊夢の顔には完全に焦りが現れていた。

それもそのはず、自分の攻撃は相手を捉えることすら出来ていないのだから。

霊夢「くっ!!?このままじゃ…」

焦る霊夢…。

と、その時。

霊夢「あれは?」

霊夢は、何かに気がついた。

それは、咲夜の腕である。

霊夢「やけど？」

そう咲夜の腕にはどうしてか、分からないが先程まで付いていなかったやけどがあったのである。

しかも、その火傷は奇妙な事に少し時間が経ち冷やされた後があった。

しかし、霊夢は咲夜が冷やしてたことは愚か火傷の事にすら気づかなかつた。

霊夢は、考察する。

霊夢（あいつはこの戦いが始まった時にはあんな火傷なんてなかつたわ。てことは、火傷を負うとしたらさっきの私の不意打ちぐらいだわ。でも、妙ね。あの火傷もうすでに冷やされた後があるわ。でも、奴には冷やす時間なんてなかつたはず…。冷やす時間…。）

霊夢「!!?」

その時、霊夢の目がパツチリと開いた。

まるで何かに気がついたかのような目である。

霊夢は、少し笑みを浮かべる。

咲夜はそんな霊夢の笑みを奇妙に思った。

咲夜「その笑みは絶望からくる笑みかしら？それなら、安心して下さい。今、帰るの

であれば今回の事は水に流しますので」

咲夜は、帰れば命は助けてやると言わんばかりに霊夢に告げた。

しかし、霊夢は…。

霊夢「冗談じゃないは、やっとヒントが掴めてきたのに」

と、自信に溢れたセリフを告げる。

咲夜は、ため息をついた。

そして!

咲夜「なら!これで終わらせてあげます!!」

その瞬間、霊夢の前に再び無数のナイフが現れる。

しかし、霊夢は、「はあ!!?」と一気に弾幕を放ちそのナイフ達を撃ち落としていく。

いや、それだけではない。ナイフを撃ち落とした霊夢は、その弾幕をそのまま咲夜の

方へ飛んでいくように計算していた。

無数の弾幕が一気に咲夜を襲う。

咲夜「やれやれ、何度やっても無駄だと言うのに」

しかし、その攻撃は先程と同じ様に咲夜は弾幕が当たる直前に消えた。

霊夢「きた!そつちよ!」

その瞬間、霊夢はクルリと体を回す。

そこには、咲夜が立っていた。

咲夜「なっ!!？」

霊夢の予期せぬ行動に咲夜は戸惑ってしまふ。

霊夢は、その瞬間を見逃さなかつた。

霊夢と咲夜の距離はほぼ0。

霊夢は咲夜の腹部に手を掲げる。

そして、「いくら、時を止めても！0距離じゃ避けれないわよ！」と叫び咲夜にエネルギー弾をくらわせた。

咲夜の腹部が光に包まれる。

そして！

バンッ

ものすごい爆発音が響くのであつた。

咲夜「ぐはっ!!？」

勿論、肉体的にはあまり強くない咲夜。

霊夢の0距離攻撃に耐えることが出来ず倒れてしまったのであつた。

霊夢「どうやら、やっと攻撃が当たつたみたいね」

倒れた咲夜に対して少し上から目線で告げた。

咲夜は震えた声で霊夢に尋ねる。

咲夜「一体どうやって…」

咲夜の声には敗北による悔しきよりも何故自分に攻撃を当てることが出来たのかという疑問が浮かび上がった。

霊夢「あんたの腕よ」

霊夢はゆつくりと咲夜に告げる。

咲夜は、その言葉に釣られるがままに自身の腕を確認した。

そこには、火傷の後が残っている。

霊夢「その傷、戦いを始めた時にはなかったわよね。てことは、私との戦いで出来た傷だわ。だけど、その傷は、まるで冷やされたかのような後がある。そして、ピーンと来たのよ。もしかして、あなたは時間を止められるんじゃないかと思ってね。そしたら、その火傷の傷が少し回復してるのも納得できるし十分、冷やす時間も確保することができる。要するにあんたの敗因は自分の能力に頼り過ぎたってことよ」

それを聞いた咲夜は納得したかのような顔を浮かべた。

どうやら、霊夢の時を止める能力という予想は当たっているようである。

観戦していた悟空も「やっぱりな」と告げた。

どうやら、やはり悟空もわかっていたようである。

咲夜「だけど、時を止める能力とわかったところでどうやって私に攻撃を当てたの？」  
霊夢「簡単な事よ。あんたの基本的に時止めたら私の後ろに回ってたでしょ。私はその癖を利用したのよ」

咲夜は、それを聞いた瞬間自分の動きを思い返す。

すると、確かに自分は相手の後ろに回り込むことが多かった事を思い出した。

咲夜「残念だけどそう見たいね」

咲夜は、少し満足気な顔を浮かべながら告げた。

どうやら、咲夜自身も少しこの戦いを楽しんでいたようである。

咲夜「楽しかったわよ…」

咲夜は、そう告げると目を閉じてしまった。

どうやら、気絶したようである。

それを確認した霊夢は咲夜を後に悟空と魔理沙の元へ歩いて行った。

魔理沙「すごいじゃねえか、霊夢まさか相手の能力を見極めるなんてよ!!」

魔理沙は、少し興奮しながら霊夢に言う。

霊夢は、それに対して照れ臭そうにも誇らしげな顔を浮かべた。

霊夢「当然でしょ、私は幻想郷のバランスを保つ博麗の巫女なんだから」

霊夢の表現には満足感が浮かんでおり気分が良さそうなのが見てとれた。

そんな中、悟空も魔理沙と同様に霊夢に関心の言葉をかける。

悟空「それにしても、まさか、相手の移動をする位置を予想して攻撃したのは、すごかったぞ!!」

その言葉を聞いた瞬間、霊夢はドキツとしてしまった。

軽く目が泳ぐ練習。

霊夢「ま、まあね…」

霊夢（実はどうせ後ろに来るだろうって思ってたに放つたらまたま上手いこと当たっただけだね）

どうやら、霊夢自身先ほどの一撃はまぐれに近かったようだ。

しかし、今のこの状況でそんなことを言い出せることもなく結局、霊夢の才能ということで片付けられたのであった。

魔理沙「よし、そろそろ次にいこうぜ!」

そう言いながら奥の方を指差す魔理沙。

霊夢「それもそうね。早く次行きましようか」

霊夢もこの話を終わらせるべくすぐさま魔理沙の話にのる。

やっとなのおもいで紅魔館の奥へ行けるようになった霊夢達。



霊夢達は、一歩一歩警戒しながら紅魔館の奥へと向かうのであった。

しかし…。

紅魔館の中は思っていたよりも広く霊夢達は同じような景色のする館内で迷子になつてしまった。

霊夢「ああ、もう、この館広すぎ！ さつきのメイドにこの館の道おしえてもらえばよかつた」

先程、咲夜を気絶させてしまったことを今になつて後悔する霊夢。

そうそれほどまでに紅魔館の中は入り組んでおりまるで迷路のようであつたのだ。

魔理沙「まったくくだけ」

迷子になり機嫌をそこねる2人。

と、その時、そんな霊夢と魔理沙を見かねてか悟空が二人に告げる。

悟空「じゃあ、取り敢えずあつちの方に気を感じるから行つてみつか？」

そうその通りであるいくら道が分からなくても悟空ならば相手の位置を読み取るこゝとが出来るのである。

いろいろな気をとられておりすっかり霊夢も魔理沙もこのことを忘れていたのであつた。

「靈夢「そうよ、あんた誰が何処にいるか分かる能力持つてるんだから、最初からあんたに案内して貰えば良かったのよ」

少し声を荒げていう靈夢。

「どうやら、余程今の迷子時間がストレスだったようだ。」

悟空「わりい、わりい。てつきりオラあてがって歩いてるのかと」

大きな笑顔を浮かべながら告げる悟空。

「靈夢も魔理沙もその笑顔を見ては怒る気も失せてしまった。」

魔理沙「取り敢えず、悟空その気つてのが感じる場所に案内してくれよ」

悟空にそのまま案内を頼み込む魔理沙。

悟空は、そんな魔理沙に対して「ああ、分かった」とだけ告げ気の感じる方向へ歩いて行くのであった

く数分後く

悟空は一つの扉の前で足を止めた。

悟空「この扉の向こうに気を感じっぞ」

「どうやら、この先にこの紅魔館に関わる人物がいるようである。」

この紅魔館、美鈴といい咲夜といい思っていた以上にレベルが高い。

その事をしっかりと理解した三人は恐る恐る扉を開けるのであった。

開けるや否やすぐさま警戒を入れ中を確認する霊夢達。

しかし、そこに広がっていた光景は霊夢達の予想を超えていた。

なんと、部屋の至る所に本が置いてあるのである。

そこは俗にいう図書館的な場所であろう。

果たしてこんな落ち着きのある場所に本当に誰かがいるのだろうか？

## 魔法使い v s 魔法使い 第10話

悟空「すげえ、本かいっぱいあんど」

四方八方に広がる本の壁を見渡す悟空。

いや、悟空だけではない。

霊夢と魔理沙もその不思議な部屋に驚きを隠せずにいた。

霊夢「見た感じ図書館？みたいな場所だけど」

素晴らしいながら少しこの部屋を怪しむ霊夢。

どうやら、この部屋に何か罠がないか探っているようである。

しかし、そんなものはどこを探してもなく。

本当にただの図書館のようだ。

魔理沙「そうだな、でも、面白そうな魔法書がいっぱいあるぞ」

キラキラ目を輝かせ本を見る魔理沙。

どうやら、魔法使いである魔理沙にとってこのような場所は天国なのであろう。

霊夢「魔道書なんて、私は興味ないわ」

しかし、勿論、霊夢と悟空はそんなものに興味があるわけもなく。

即座に奥の方は向かうのであった。

魔理沙「なあ、霊夢この異変を解決したら、ちよつと本をここから借りて行つていいか？」

魔導書を見つめながらそう告げる魔理沙。

どうやら、余程ここの魔法書が気に入つたようである。

霊夢「そんなのあなたの勝手にしなさいよ」

しかし、霊夢がそんな事に興味を持つわけもなく適当に話を流すのであった。

魔理沙は、ニヤリと笑う。

どうやら、本気で借りていこうと思つていようだ。

と、その時だった！

??? 「勝手に借りていかないでもらえるかしら」

奥の方から謎の声が響いて来た。

霊夢達はすぐさまその声が出た方へと向かう。

そして、恐らく、こちら辺にいないはずと考えながら周囲を見渡した。

すると！

悟空「霊夢、魔理沙！あそこだ！」

悟空は、ある一点に指をさした。

霊夢と魔理沙は悟空につられるようにそちらへ視線を飛ばす。

すると、そこには、まるでパジャマのような服を着た紫の髪をした女性が自分たちを睨みつけながら座っていた。

さっきの声の主もこいつと違って間違えないであろう。

霊夢と魔理沙は、少し警戒をいれる。

霊夢「あなたは？」

一定間隔の距離を取りつつ名前を尋ねる霊夢。

そんな、霊夢に対して謎の女性はゆつくりと口を開けた。

??? 「私はパチュリー・ノーレッジ。魔法使いよ」

ゆつくりとした口調でそう告げるパチュリー

どうやら、見た目からしても口調からしても脳筋的な敵ではないようである。

まさに、ザ・魔法使いという感じであった。

と、その時…。

魔理沙は魔法使いという言葉に強く反応する。

魔理沙「お前、魔法使いなのか？」

魔理沙は生き生きとした声でパチュリーに告げた。

パチュリーはそんな魔理沙に対してとろろんとした目で魔理沙を見る。

パチュリー「ええ、そうよ、それがなにか？」

なんとも、冷たい返事を魔理沙にするパチュリー。

どうやら、他人と関わるのを拒んでいるようである。

しかし、魔理沙はそんなこと御構い無し。

次の瞬間、大きな声で「私も魔法使いなんだぜ」とパチュリーに告げた。

恐らく、魔理沙自身初めて自分以外の魔法使いに出会い興奮しているのであろう。

しかし、パチュリーは違った。

パチュリー「あなたが？」

素晴らしいながらパチュリーはクスクスと笑った。

どうやら、魔理沙を見下しているようである。

パチュリー「あなたのような奴が魔法使いとわね。まあ、所詮は人間、私には到底か

なわないわ」

明らかに魔理沙を軽蔑せるような発言をするパチュリー。

流石の魔理沙もこれにはイラツと来た。

魔理沙「なんだと！」

頭に血がのぼっていく魔理沙。

そして、次の瞬間、パチュリーに指を指した。

それと同時にパチュリーにこう告げる。

魔理沙「じゃあ、私と勝負だぜ！」

魔法使いとしてのプライドをバカにされた魔理沙は、パチュリーに勝負を仕掛けたのである。

パチュリーは、それに対してやれやれとした表情を浮かべた。

パチュリー「どうやら、あなた魔法使いを舐めているような。いいわ、その申し出乗ってあげる。そして、その身で味わいなさい人間の限界をね」

自信満々にパチュリーは告げた。

パチュリーの目には余裕が見て取れる。

魔理沙「ふん。返り討ちにしてやるぜ」

それに打って変わり興奮状態の魔理沙。

果たして、この勝負どうなってしまうのであろうか…。

と、そんな時。

霊夢「ちよつと、魔理沙あんた勝てるの？」

後ろから一声魔理沙にかける霊夢。

きつと、霊夢も魔理沙が心配なのであろう。

しかし、魔理沙は…。



魔理沙「当たり前だろ！なんなら、霊夢と悟空は先に異変の主犯の方に行つといてくれだぜ！」

霊夢の心配を蹴散らすかのように威勢よくこう告げた。

恐らく、魔理沙にとつてこの戦い負けられない何かがあるのであろう。

そんな、魔理沙の気持ちを察したのか霊夢は、魔理沙の心配をするのをやめた。

霊夢「わかったは、じゃあ先に主犯の方に行つてくる。負けるんじや無いわよ魔理沙！！」

霊夢は、そういうながら悟空とともに図書館を出て行くのであった。

魔理沙は、パチュリーを睨みつける。

魔理沙「それじゃあ、勝負だぜ！」

魔理沙は、大きくパチュリーに眼を飛ばした。

パチュリーは、やれやれと言わんばかりに立ち上がり魔理沙の前に立ちふさがるのであった。

パチュリー「やれやれ、しょうがなわね。人間がたどりつけない世界を見せあげるわ」

そう告げると急に目をつぶり出すパチュリー。

どうやら、瞑想しているようだ。

魔理沙もそれに合わせて構えをとる。

いつ、攻撃が来てもおかしくない状況。

魔理沙は、最大限まで自分の神経を集中させた。

その時！

パチュリー「火符「アグニシャイン」」

急に弾幕を放つパチュリー。

その弾幕はまさに魔法使いと言わんばかりの精密度を持っていた。

魔理沙は慌てて箒に乗り込み。

空中へと逃げ延びた。

魔理沙「危なかったぜ」

空中に逃げたことで一息つく魔理沙。

しかし、パチュリーがそんな休憩時間をくれるわけもなく。

すぐさま、次の攻撃を仕掛けてくるのであった。

パチュリー「水符「プリンセスウンディネ」」

魔理沙に更に追い討ちをかけるパチュリー

魔理沙はただ、逃げる事しか出来なかった。

少しずつ余裕がなくなってくる魔理沙。

流石の魔理沙も内心ヤバイとわかり始めた。

魔理沙「このままじゃまずいぜ」

逃げながら策を考える魔理沙。

と、その時だった。

パチュリー「ゴホッゴホッ」

急に咳こんでしまうパチュリー。

本の少しだけ弾幕が和らいだ。

それと同時に魔理沙はピンチをしのぐこともできた。

パチュリー「チッ」

思わず舌打ちをするパチュリー

魔理沙「危なかったぜ」

魔理沙自身今のは少しヤバかったのでラッキーと心で思い込む。

そして、それと同時に一つの疑惑が生まれた。

魔理沙（今、咳をしたのはたまたまか？）

それは、勿論、今の咳の事である。

しかし、そんなことを考えても現状では答えが出せない。

そう思った魔理沙は、ただ埃がたっただけと思い。

考えるのをやめた。

パチュリー「そんなに落ち着いていいのかしら？」

考え事をしており呆然としている魔理沙を見つめるパチュリー。

そして！

パチュリー「木符」「シルフィホルン」

「金符」「メタルファティグ」

すかさずパチュリーは、攻撃に移した。

しかも、今回は二つ同時にスペルカードを使い確実に魔理沙を消しにかかっている。

魔理沙は、それに対して逃げる事しかできず防戦一方になってしまった。

そして、この時初めて理解したパチュリーの魔法の凄さを…。

魔理沙「なんて野郎だ。こんなに凄い魔法を使えるなんて悔しいけど私より魔法の威力は上だぜ」

魔理沙はパチュリーの弾幕をひたすら避けていく。

いや、もはや魔理沙には避けるしか選択肢がなかったのである。

魔理沙「こんなんじや、あいつに攻撃が出来ないぜ！一体どうすればいいんだ」  
焦る魔理沙。

しかし、徐々に余裕がなくなって来ていた。

パチュリー「なかなか頑張るじゃない。でも、もうそろそろ限界のようね」

魔理沙にそう告げるパチュリー。

しかし、パチュリーの言う事は正しい。

実際、魔理沙はすでに紙一重で躲している状態である。

魔理沙「くっそー!!」

魔理沙自身、もう、終わりかと思った。

しかし、その時だった！

パチュリー「ゴホッゴホッ」

なんと、再びパチュリーは咳をしてしまう。

そのせいで弾幕が途絶えてしまった。

魔理沙（まただぜ）

再び窮地を脱した魔理沙。

しかし、流石の魔理沙もこれには違和感を感じた。

魔理沙は、なにかを考え込む。

そして、一つの案が魔理沙の頭に浮かぶのであった。

パチュリー「運のいい奴ね」

パチュリーは、そう告げると今度は三枚のスペルカードを出した。

そして！

パチュリー「だけど、もうそろそろ決める」

「土符」「トリリトンシェイク」

「日符」「ロイヤルフレア」

「月符」「サイレントセレナ」

なんと、3つ同時にスペルカードを使うパチュリー。

流石の魔理沙もこれは長時間躲すかとは出来ない。

しかし！

魔理沙（試してみるか!!?）

どうやら、魔理沙もこのタイミングでパチュリーの何かに気付いたようだ。

果たして、魔理沙はパチュリーに勝つ事は出来るのか！

# パチュリーーの弱点

## 第11話

魔理沙「来た」

弾幕に備えていた魔理沙はパチュリーーの弾幕に瞬時に反応し避けていく。

ヒュン　　ヒュン　　ヒュン

だがしかし、あくまで紙一重で避けるのが精一杯。

少しでも動きが鈍れば終わりであろう。

魔理沙は、無我夢中でひたすら避け続けるのであった。

魔理沙「やっぱり、凄い弾幕だぜ！」

あまりの密度とスピードに思わずそう声が溢れる魔理沙。

魔理沙の顔つきがどんどん曇ってゆく。

しかし、パチュリーーの顔は至って平然。

まるで表情のない木偶の坊のようであった。

パチュリー「避けるのだけは上手いのね。でも、これで終わりよ」

避けるだけで反撃を仕掛けて来ない魔理沙に痺れを切らしたのか。

追い討ちをかけるようにパチュリーーは、更なる事を仕掛けてきた。

それは…。

パチュリー「火水木金土符「賢者の石」」

そう追い討ちのスペルカードである。

ただでさえ現在、三枚の同時攻撃を避けるので精一杯なのに4枚を発動されては流石の魔理沙もあぶない。

魔理沙「これは、まずいぜ!!？」

シユン シユン シユン

パチュリーのスペカは魔理沙の体や箒をかすめてゆく。

万事休すか！

魔理沙「やばい、やられる」

魔理沙は、冷や汗を流し必死に避け続けた。

その表情には最早感情すら感じない。

魔理沙「早く、早くこい」

だが、魔理沙は諦めない。

それどころか、まだ、反撃の機会を待っていたのである。

パチュリーは、少し呆れたような表情を見せた。

パチュリー「いい加減にしなさい。もうあなたに勝ち目はないのよ」



どうやら、パチュリーは勝ちを確信しているようである。

その故に魔理沙の耐久のせいで時間がとられるのが惜しく思っているのだ。

しかし、魔理沙は、パチュリーの言葉に耳を傾けない。

例え体中に傷が出来ようとも諦めずに避け続けた。

一体、魔理沙は、何を考えているのだろうか？

と、その時だった！

パチュリー「ゴホッゴホッ」

再び、パチュリーは咳をしてしまう。

パチュリーの弾幕が乱れた。

魔理沙の目つきが変わる！

そして！

魔理沙「今だ!!？」

そう告げると同時にパチュリーに急接近した。

パチュリーは驚く！

パチュリー「なっ!!？」

魔理沙の予想外の急接近。

パチュリーは慌てて再びスペカを使おうとした。

しかし、時すでに遅しすでに気がついた時には魔理沙は目の前にいた。

魔理沙「もらったぜ!!」

そのままミニ八卦炉を取り出す魔理沙。

恐らく、これが魔理沙のキーアイテムであろう。

そして、そのままミニ八卦炉をパチュリーにかざした。

魔理沙「この距離なら避けられないだろ!!」

その瞬間、パチュリーは初めて魔理沙の作戦に気がついた。

そう魔理沙は、自分が咳をするのを待っていたのである。

咳をすれば必然的に弾幕は乱れる魔理沙はその隙をついたのであった。

パチュリー「くっ!!?」

避けようにも身体的にはあまりすぐれていないパチュリー。

魔理沙は、そんなパチュリーにニヤリと笑いながらこう叫ぶのであった。

魔理沙「恋符「マスタースパーク」」

その瞬間、八卦炉から爆発的なエネルギーが放たれる。

勿論、こんな近距離で攻撃を避けれるわけもなく。

ドンッ

そのまま、マスタースパークを直撃してしまうのであった。

魔理沙のマスタースパークはとてつもない威力を持っており四方八方にあった本棚や壁や床なども吹き飛ばした。

周りは爆風に包まれてしまう。

魔理沙は、そんな爆風の中、「決まったぜ!!」と囁くのであった。

それから数分後ようやく爆風が散り周りの様子が見えるようになった。

パチュリー「何て威力なの」

晴れた爆風の中からそう囁くパチュリー。

どうやら、倒れはしているものの意識は保っていたようである。

魔理沙「これが、人間の魔法使いの力だぜ!!」

満面の笑みを浮かべながらそう告げる魔理沙。

余程、魔法使いとしてパチュリーを倒せた事が嬉しかったのであろう。

パチュリー「ふん、どうやら人間を侮っていたようね」

パチュリー自身まさか人間に負けるとは思っておらず初めて人間の力を知った気がした。

人間には無限の可能性があるのかもしれないパチュリーは内心そう呟く。

パチュリー「まさか、私が負けるなんてね。完敗よ」

大人しく負けを認めるパチュリー。

どうやら、魔理沙の事を認めたようである。

魔理沙「ああ、でも、お前も凄い魔法使いだったぜ。全体的な魔法の能力はお前の方が上だったしな」

パチュリーの事を讃えるような発言をする魔理沙。

どうやら、相手の事を認めたのはパチュリーだけでなく魔理沙自身もパチュリーの事を認めたようである。

二人の中に何処と無く友情というものが出来た瞬間であった。

パチュリー「それじゃあ、早く行きなさい。仲間があなたを心配しているはずよ」

魔理沙に先へ行くように指示するパチュリー。

恐らく、敗者として魔理沙を敬った気持ちから出た言葉であろう。

魔理沙は、パチュリーの心情を察する。

そして…。

魔理沙「じゃあな」

そう告げながら倒れたパチュリーを背に扉の方へと歩いていくのであった。

どうやら、霊夢達の後を急いで追うようである。

と、その時だった！

??? 「ねえ、私と遊ばない？ ハハハハハ」

後ろから不気味な笑い声が聞こえてきた。

魔理沙は、慌てて声の方へと振り向く。

魔理沙 「誰だ!？」

すると、その方向には一人の少女がいた。

その少女の表情は何処と無く残忍さを感じ取れた。

魔理沙は、慌ててパチュリーに尋ねる。

魔理沙 「おい、パチュリーあいつは誰だ？ どう見ても正気な奴ではないぜ」

早口でパチュリーに伝える魔理沙。

しかし、いくら待とうともパチュリーの返答が返ってこない。

痺れを切らした魔理沙は、再びパチュリーに尋ねる。

魔理沙 「おい、聞いてんのかパチュリー。あいつは一体…」

その時、魔理沙の口の動きが止まる。

その理由は…。

パチュリー 「あ、あつ」

パチュリーの表情である。

顔は真っ青になっており冷や汗もかいていた。

そこで、魔理沙は悟る。

あの少女はヤバイやつだと…。

パチュリー「な、なんで、あの子が…結界に閉じ込めてたはずなのに、まさか、さっきのマスタースパークで…」

焦った表情を浮かべながらそう告げるパチュリー。

魔理沙は自分を置いて自己解決していくパチュリーに自分にも説明するよう要求する。

魔理沙「なんだよ、あいつがなんだっていうんだよ？結界ってどういう事だよ？」

それを聞いたパチュリーは簡潔に説明を始めた。

パチュリー「簡潔に言うとかいつは、紅魔館の主の妹よ。名前はフランドール・スカレット、ものすごい力と能力を恐れて昔、結界の中に閉じ込めたの。でも、おそらくさっきのあなたのマスタースパークで結界が壊れちゃったみたい」

早口で焦りながらそう告げるパチュリー。

そして、自分のせいであんな化け物を復活させてしまったのかと後悔する魔理沙。

そんな魔理沙の心情を察したのかパチュリーは魔理沙に必死な顔でこう告げた。

パチュリー「あなた、今更後悔してももう遅いわ。お願いあの子を止めて!!」

本当は自分がたかいたいところだが魔理沙のマスタースパークをまともにくらい

喋るのも限界なパチュリーは魔理沙に頼む。

魔理沙「お前が私に頼むなんて……」

まさか、パチュリー自身が自分に頼むのに驚く魔理沙。

そして、パチュリー自身恐れるあの少女。

正直、魔理沙自身恐れていた。

しかし、魔理沙にはフランの封印を解いてしまったという責任があった。

それに敵に恐れて逃げるのも性に合わない。

魔理沙「わかったぜ!!パチュリーあいつを倒してやるよ!!」

魔理沙は、フランと戦う決心をするのであった。

パチュリーは、そんな魔理沙の勇氣に「ありがとう」と囁く。

魔理沙「そうと決まれば早速いくぜ!」

魔理沙は、そう呟くとフランの前に立ちふさがる。

そして、フランにこう告げた。

魔理沙「おい、お前!さつき遊んでくれとかいってたな!いいぜ!この私が相手をし

てやる!」

威勢のある声を張り上げながらフランに告げる魔理沙。

その声には、恐怖のようなものは一切感じ取れない。

一方、フランの方は不気味な笑みを浮かべて「やったー」と子供らしく喜んだ。その喜んでいるフランを見つめる魔理沙は、もしかして、今がチャンスではないかと考える。

そして！

魔理沙「魔符「スダードラストレヴァリエ」」

初手からいきまりスペルカードで不意打ちを仕掛けた。

いくらなんでもこの不意打ちは避けれないはず！

魔理沙は、内心これで決まったのではないかと思つた。

しかし！

フラン「フッフ、無駄だよ」

そう告げると同時にフランはいとも容易く弾幕の隙間を縫い攻撃を躲していった。

流星の魔理沙もこれには驚きを隠せない。

魔理沙「なんて野郎だ!! 不意打ちの弾幕を躲しやがった」

魔理沙は、ただ唾然と固まることしか出来ない。

すると、フランが「もう終わり？」と冷たい笑みを浮かべながら告げてきた。

魔理沙は、少しヤケクソになる。

魔理沙「くそ、ならこれならどうだ！」



そう告げると先ほどと同様にミニ八卦炉を構える魔理沙。  
そうこれは！

魔理沙「恋符「マスタースパーク」」

先ほどパチュリーを倒したものすごいエネルギー波である。  
エネルギー波はそのままフランを飲み込む。

流石のフランもこれなら！

魔理沙は、勝ち確信する。

魔理沙「決まったぜ!!」

魔理沙は、笑みを浮かべる。

しかし！

「ははは、今の少しだけおもしろいわ」

爆風の中からそんな可愛らしい声が聞こえた。

そして！

ヒューーン

次の瞬間、爆風が一気に吹き飛ぶ。

そして、その中からほぼ無傷の状態のフランが出てきた。

魔理沙「なんだと!!」

流石の魔理沙もこれには焦りを隠しきれない。

なぜなら、今の一撃は完全にフランを捉えていた。

故に今フランが立っているのはおかしいのである。

フラン「今のは、面白かったよ。でも、もう飽きたから壊しちゃうね」

どうやら、フランにとっては本当にマスターズパークも遊びの一環のようである。

正直、魔理沙は絶望した。

しかし、今更投げたところでこいつから逃げれるわけがない。

そう自分に言い聞かせ誇りを胸に最後まで戦い抜くことを決意した。

魔理沙「そう簡単に壊せるかな？」

澄ました顔で余裕そうに告げる魔理沙。

勿論、この表情はハツタリで内心余裕などない。

フラン「ふふふ、じゃあ、出来るだけ粘ってね！」

フランは不気味な笑みを浮かべてそう告げるとスペカを取り出した。

どうやら、ここからがフランの本領発揮のようである。

魔理沙は、限界まで警戒を強めた。

フラン「禁忌」「レーヴァテイン」

フランがそう宣言すると突如、炎を纏った剣がフランの手元にあらわれる。

どうやら、フランは武器を使った戦闘を得意とするようだ。

フラン「じゃあ、いくよ！」

シュン

そう告げると同時に魔理沙に急接近するフラン。

その速度は凄まじく魔理沙は行動が遅れてしまう。

そして、気がつくと剣を振りかざしたフランが目の前にいた。

魔理沙「しまっ！」

避ける余裕すら与えないフランの速攻攻撃。

魔理沙は、覚悟した。

この一撃で自分は殺されると…。

しかし、その時だった！

ヒューーン

ドンッ

フランの攻撃が魔理沙に当たる直前、不意に横からエネルギー弾が飛んできた。

そのエネルギー弾はフランを少しだけ吹っ飛ばす。

これは、一体！

そう思った魔理沙とフランはエネルギー弾の飛んできた方向へと目をやった。そこには！

パチュリー「なんと、パチュリーが腕をこちらにかざして立っていた」最早、立つのでさえやつとのはずのパチュリー。

「どうやら、なけなしのエネルギーを使って魔理沙を守ったようだ。」

フラン「よくもやったわね」

いいところで妨害を受けてしまったフランはパチュリーに怒りを表す。

その表情からは完全に頭に血が上っていることが読み取れた。

フランは、標的を魔理沙からパチュリーに移す。

そして！

フラン「くたばれー!!」

そのままボロボロのパチュリーに思いつきエネルギー弾を放った。

パチュリーは、そのままエネルギー弾に直撃する。

ドンッ

魔理沙「パチュリーー」

爆風に包まれていくパチュリー。

魔理沙は慌ててパチュリーの元へと駆け寄った。

魔理沙「おい、パチュリー。大丈夫か？おい！」

必死にパチュリーに訴える魔理沙。

しかし、いくら待とうともパチュリーからは返事は返ってこなかった。

魔理沙は、ゆっくりとパチュリーの心臓に手を置く。

ドクンツ　ドクンツ　ドクンツ

すると、パチュリーの心臓の鼓動を感じることができた。

どうやら、ただ気を失っていただけのようである。

ひとまず安心をする魔理沙。

そして、そのままフランに怒りをぶつけるのであった。

魔理沙「お前、よくもパチュリーを」

感情的にフランに伝える魔理沙。

どうやら、余程、魔法使いとしての仲間を傷つけられた事に腹を立てたようだ。

フラン「もとはと言えばそいつが私を閉じ込めたのが悪い。私は私を閉じ込めた奴らに復讐をするって決めたの。かならず、皆殺しにしてやるってね」

なんの躊躇いもなく怖いセリフを吐き出すフラン。

どうやら、フラン自身もかなり紅魔館の奴らを恨んでいるようである。

魔理沙「皆殺しして、物騒な言葉を使うじゃねえか」

若干、苦笑いをしながらそう告げる魔理沙。

どうやら、フランの恐ろしさをすこし知ったようである。

こいつは、野放しにしてはいけない存在と…。

フラン「私は本気なのあなたを殺したら次はお姉様を殺すわ」

そう告げた瞬間、フランは再びスペカを取り出した。

どうやら、魔理沙にとどめを刺すつもりであろう。

魔理沙は、少し警戒しフランとの距離間を保つようにした。

フラン「禁忌「クランベリートラップ」」

フランの弾幕が魔理沙に放たれる。

魔理沙は急いで箒に乗り弾幕を避けた。

しかし、フランのスペカの威力はそんなじゃそこらの奴とは比にならないレベルであった。

スピード、密度、パワー全てを兼ね備えており流石の魔理沙も避け切る事が出来なかつた。

ドンツ ドンツ ドンツ

少しずつ体にぶつかってゆくフランの弾幕。

勿論、魔理沙がそんな攻撃をずっと耐え切れるわけもなく。

魔理沙「うわく!!」

天井に勢いよく吹っ飛ばされてしまった。

バゴンッ

そのまま天井を貫く魔理沙の胴体。

どうやら、あまりの威力に天井を貫通してしまったようだ。

フランはそんな魔理沙を逃さまいと魔理沙のあとを追った。

天井を超えたことにより一階上に上がってきてしまった魔理沙。

魔理沙「ぐっ!!?」

魔理沙は、急いで体を動かそうと周りに目を動かした。

その瞬間、魔理沙は驚く。

なんと、目の前に霊夢と悟空、それにフランに似た少女がいたのであった。

## 異変の主犯!レミリア・スカーレット第12話

時間は、少し戻り霊夢達が魔理沙と別れた後の出来事。

霊夢「さあ、魔理沙がああ魔法使いと闘っている間に主犯の方へ向かうわよ悟空!」  
いよいよ、異変も大詰めに入り気合を入れ直す霊夢。

その表情は、何処と無くたくましく信頼できるものを感じさせるのであった。

悟空「わかった」

霊夢の気持ちに答えるように悟空は霊夢に告げた。

どうやら、2人のモチベーションは最高のものである。

悟空は、強い気を感じとりながら主犯の方へと霊夢を案内する。

〜数分後〜

悟空と霊夢はまだ、紅魔館内をグルグル回っていた。

どうやら、気を感じれるとはいえ紅魔館内の複雑な通路のせいで時間をくついているようである。

霊夢「主犯の所まではあとどれくらい距離があるの?」

不意に悟空にそう尋ねた霊夢。



どうやら、霊夢自身痺れを切らし始めているようである。  
すると……。

悟空「うゝん」

悟空は、少し険しい顔を浮かべた。

霊夢は、悟空の表情に嫌な予感を浮かべる。

霊夢「ちよつとちよつと、まさか、あんた迷子になったとか言わないわよね」  
ジト目で悟空を見つめながらそう告げる霊夢。

そう今この紅魔館での勇逸の便りは悟空の気を感じる能力だけである。

だから、悟空にこんな不安な表情をされてしまうと霊夢まで不安になるのであった。  
しかし……。

悟空「いや、迷子にはなつてねえ。実際、まだ、主犯の位置は捉えれてるしな」  
どうやら、悟空は主犯の気を見失つたわけではないようである。

なら、一体何故？

霊夢がそう尋ねようとした瞬間。

悟空は、それを見越してか先に説明を始めるのであった。

悟空「実はさつきいた図書館の上の部屋にこの異変の主犯がいたんだ」

急な悟空の発言に驚愕する霊夢。

そして、悟空の困っている理由もこの時初めて気がついた。

霊夢「なるほど、じゃあ、あなたはさっきから階段を探してたのね」

そう悟空は階段を今まで探してたのである。

いくら、相手の気を感じることが出来ても流石に階段というものは探すことができない。

だから、結果的にこのように紅魔館内をぐるぐる回るようになっていたのである。

霊夢「なら、とつとと階段探して上に行くわよ」

そうと分かれば霊夢は再び元気を取り戻す。

どうやら、階段ぐらいならきつとすぐ見つかると思ったようだ。

く10分後く

やつとの思いで階段が見つかった。

この館思ったよりも広く階段を探すのにもかなり手こずってしまったようだ。

そのせいで…。

霊夢「やつと階段が見つかった。この館広すぎんのだよ! ippsoのこと天井に穴を空けて上に行けばよかったわ!」

霊夢の機嫌が悪くなってしまった。

まあ、無理もないひたすら似た景色の場所をループし続ける羽目になったのだから

…。

悟空「まあまあ、そう怒るなって」

しかし、悟空は機嫌の悪い霊夢を頑張って落ち着かせようとする。

霊夢は、そんな悟空をみて少し切れるのは大人気ないと思ったのちよつとだけ機嫌が良くなった。

霊夢「まあ、いいわ早く主犯の所に向かいましようか」

そう言いながら階段を登っていく霊夢と悟空。

上の階にきてしまえばこっちのもの。

悟空は気を探る能力で迷うことなく主犯の元へ霊夢を案内するのであった。

すると、ある部屋の前で悟空は不意に霊夢へ声をかけた。

悟空「霊夢！この部屋に紅い霧を出した主犯がいんぞ」

悟空は、少し真剣な表情で霊夢に告げる。

恐らく、この先にある主犯はそれほど大きな気を持っているのであろう。

霊夢「分かったわ」

その悟空の表情からすぐさま主犯の強さを察した霊夢は再度気合を入れなおす。

そして…。

ガチャリ

その部屋の扉を開けるのであった。

霊夢と悟空は、入るや否や中を確認する。  
すると…。

??? 「ようこそ、紅魔館へ」

部屋の真真中に一人少女がポツンと立っていた。

まるで自分たちがここに来るのを待っていたかのように…。

霊夢はすぐさま身構えた。

霊夢 「あなたがこの異変の主犯?」

霊夢は、ゆっくりと少女に尋ねる。

すると、少女はそんな霊夢に笑顔を返しながらつげた。

??? 「ええ、そうよ」

霊夢は、やつぱりと言わんばかりに少女の目を見つめた。

そして、実感するのであった。

この異変もやつと終盤に差し掛かったと…。

と、そんな時。

悟空 「まさか異変の主犯が子供だとわな」

唾然とした表情で悟空は告げた。

どうやら、こんな大掛かりなことを目の前の少女が起こした事にビツクリが止まらないようである。

と、その時、少女の眉間にシワがたった。

その顔からは怒りが感じとれる。

??? 「君に言われたくないわ!!?」

急に怒鳴り声を上げる少女。

そう少女は自分を子供と言われたことに切れたようである。

特に子供の姿である悟空に…。

悟空 「オラこう見えて大人なんだぞ」

すぐさま自分は子供ではないと主張する悟空。

しかし、少女もそれに便乗するように「私だって500歳よ」と告げた。

悟空はその言葉に目を丸くする。

悟空 「5、5、500歳だつて!!!」

桁違いの年齢に驚きを隠せない悟空。

悟空 「オラより全然年上じゃねえか」

そして、何よりも自分より年上という事実には驚くのであった。

霊夢は、そんな悟空を見かねたのか軽く説明を始める。

霊夢「幻想郷では常識にとらわれたらいけないの。相手は妖怪、おそらく吸血鬼ね。人間と妖怪じゃ年のとりかたが全く違うからそんなに不思議じゃないのよ」

簡潔にまとめている割に分かりやすく幻想郷の事を悟空に伝えた霊夢。

悟空は、頷きながら「なるほどなあ、確かに界王神様とかもオラより小さくて若そうだけど実際はすんげえ昔から生きてたらしいしなあ」と身近な人に例えて理解するのであった。

???「お喋りはもういいかしら。ここまで来たんだから勿論、私と闘いにきたのよね?」  
悟空と霊夢の会話に痺れを切らしたのか二人の会話に割り込むように少女は告げた。

悟空は、拳に力を入れながら「ああ、勿論だ」と告げる。

霊夢「外に広がるあの謎の霧。アレを撤去しないといけないのでね。どうもし今あの霧を止めるって言うなら貴方を戦闘不能にさせないであげる」

ここで目の前の少女に最後のチャンスを与える霊夢。

どうやら、あの霧を消せば見逃してあげるとのことだ。

しかし、勿論そんな条約に少女が乗るわけがない。

少女は、少し霊夢達にあの霧の説明を始める。

???「ふふふ、あの霧は太陽が苦手な吸血鬼が昼でも自由に外に出れるようになるもの。」

止めることは出来ないわ」

どうやら、あの霧は吸血鬼の太陽への対策が目的で出されたようである。

あの霧により太陽の光を遮り地上へ届かなくなったのである。

少女は、ニヤリと笑みを浮かべる。

??? 「もし、あの霧を止めなければ私を倒すことよ！」

背中にある羽をバサリツと広げそう告げる少女。

どうやら、少女は霊夢達と戦うつもりのようなのだ。

悟空「ああ、もとよりそのつもりだ」

少女の脅しかどうかは分からないが背中に付いているインパクトとある羽にも動揺することなく悟空は告げた。

その目には、確かに闘争心が映し出されている。

と、その時！

霊夢「ちよつと待った！あいつと闘うのは私よ！あんたは下がってなさい」

やる気満々の悟空を見て何かを悟った霊夢は慌てて悟空を止めた。

悟空は、不満げな顔を浮かべる。

悟空「おめえ、さっきやったじゃねえか今度はオラの番だ！」

そう悟空の言う通り霊夢は、先ほど咲夜との戦いを終えたばかりなのである。

その故、連続で戦うのはずるいと悟空は言っているのだ。  
しかし…。

霊夢「あんたも門番と闘ったじゃない!それにあんたは元からあくまで手伝いつてこ  
とで異変解決にきてるのよ!だから、異変の主犯とは私が闘うわ!それが博麗の巫女の  
役割だしね」

そう言われてしまったては悟空も言葉を返すことが出来ない。

悟空は、あくまでも助っ人としての参加。

戦う権利は霊夢の方が上なのである。

悟空「でもなあ」

いまいち腑に落ちない悟空。

霊夢は、そんな悟空に少し厳しい口調になった。

霊夢「あんた、神社に住ませてあげてるんだから私の言うこと聞きなさい!!」

かなりの剣幕で悟空に告げる霊夢。

悟空は、それに対して渋々「分かったよ」と答えるのであった。

???「あのもういいかしら?」

悟空と霊夢の謎の言い争いを黙って見ていてくれた少女。

霊夢は、慌てて少女の方へ振り向く。



霊夢「ああ、もう決まったから大丈夫よ」

そして、少女に話がまとまったことを伝えた。

霊夢「私があなたと戦うわ！私の名前は博麗霊夢。博麗の巫女よ！」

拳を少女に向けて掲げながら告げる霊夢。

どうやら、やる気は十分なようだ。

レミリア「私は、誇り高き吸血鬼のレミリア・スカーレット。まさか、一人で戦いを挑んでくるとわね」

霊夢を少しなめているレミリア。

彼女の表情には余裕が浮かんでいた。

霊夢「ふん。その余裕もいつまで続くかしらね」

レミリアに鋭い眼光を飛ばしながら告げる霊夢。

しかし、レミリアは、そんなものには全く動揺を浮かべない。

霊夢とレミリアは戦闘態勢をとる。

いよいよ、戦闘開始のようだ。

悟空は、少し後ろへ下り戦いを見学する。

レミリア「では、こちらから行くわよ！」

そう告げると早速スペカを出すレミリア。

どうやら、様子見を兼ねているようだ。

レミリア「天罰」「スターオブダビデ」」

レミリアの先制スペカ攻撃が霊夢を襲う。

しかし!

ヒュン ヒュン ヒュン

霊夢はレミリアの弾幕の僅かな隙間を見事にくぐり抜けて行く。

その動きには無駄が一切なくこのような動きには慣れていくようであった。

レミリア「なかなかやるわね!」

霊夢の見事な避けに感心するレミリア。

そして、それと同時に少しづつ迫ってくる霊夢に少しだけ恐怖を感じたのかレミリアは、一度弾幕を弱め少し後ろへ下がろうとする。

しかし、そんな小細工が霊夢に通用するわけではない。

霊夢は、逆に弾幕を弱めた一瞬をチャンスとして捉え大胆にレミリアへ接近した。

霊夢は、そのまま拳を後ろに引く。

そして!

霊夢「はあ!!?」

鋭い一撃をレミリアに放つのであった。  
しかし…。

レミリア「かかったわね！」

一気に接近してきた霊夢に対してそう叫び声をあげるレミリア。  
どうやら、これはレミリアの作戦だったようだ。

わざと弾幕を弱めることで一気に接近させたのである。

霊夢は、すでに殴りにかかる態勢で後ろに戻ることはできない。

そんな中、レミリアは、すかさずスペカを発動した。

レミリア「神槍「スピア・ザ・グングニル」」

その瞬間、レミリアの手に紫色に輝く槍が現れた。

そして、そのまま霊夢を串刺しにしようとして霊夢に対して槍を伸ばした。

霊夢「まずい」

これには、流石の霊夢も身の危険を感じる。

どう考えても拳と槍ではリーチの長さが違う。

霊夢は、とっさの判断で拳を広げる。

そして！

霊夢「はあ!!？」

そこから、エネルギー波のようなものを出した。

霊夢の体は、空中に浮いているためそのエネルギー波の反作用により後ろへと吹っ飛ばす。

悟空「危ねえ、霊夢の奴ギリギリじゃねえか」

ギリギリの霊夢に肝を冷やす悟空。

どうやら、見ている側ですらヒヤヒヤする戦いのようだ。

霊夢「危なかった」

冷や汗を流しながらそう告げる霊夢。

それに対してレミリアは、笑みを浮かべながらこう告げた。

レミリア「へえ、あの状態から躲すとわね。これは、楽しくなりそうだし」

どうやら、レミリア自身あの霊夢の判断力には驚いたようである。

こんな機転の利く敵は、おそらくレミリアも始めて戦うのであろう。

霊夢「あの槍なかなかやっかいね」

そう告げると勢いよく後ろに下がる霊夢。

どうやら、近距離戦では槍のリーチ的にこちらが不利と見たようだ。

霊夢は、スペカを掲げる。

そして！

霊夢「霊符「夢想封印」」

霊夢は切り札の一つである夢想封印を放った。

確かにこれなら相手との距離を保ったまま攻撃が出来る。

遠くから見てる悟空も少し霊夢を感じした。

しかし！

レミリア「ふふふ」

不気味な笑みを浮かべるレミリア。

その表情には、焦りが一つもなかった。

そして！

ヒュン ヒュン ヒュン

レミリアは信じられない速度で弾幕を躲していく。

どうやら、レミリアはこのような展開には慣れていているようだ。

その軽やかさが故にもはや弾幕がレミリアを躲しているのではないかと錯覚するほどであった。

しかし、

夢想封印には迫尾機能がある。

いくら避けようとも無駄なはずよ！

霊夢は、内心そう叫ぶ。

しかし…。

ドンツ ドンツ ドンツ

その希望の次々と消えていった。

そうここは部屋の中。

夢想封印がユーターンするほどのスペースはなかったのである。

弾幕は一つづつ壁にぶつかりその度に消滅していくのであった。

霊夢「なに!?!」

流石の霊夢もあれほど見事に躲されるとは思っていなかったのか目を丸くし驚いた。

レミリアは、そんな動揺する霊夢の表情を楽しむ。

レミリア「あらあら、あなたのせいで壁が壊れちゃったじゃない」

笑いながら霊夢に告げるレミリア。

どうやら、霊夢の切り札がこの程度と分かり余裕が生まれたようである。

霊夢「なめられたものね!!ならこれならどう!」

そんな、レミリアに対してヤケになったのか霊夢は、なんと二つ同時にスペカを取り出す。

そして!

霊夢「霊符」「夢想封印」「」

「靈符 「夢想封印」」

なんと靈夢は2枚連続で夢想封印を放った。

どうやら、数を増やしてレミリアに意地でも攻撃を当てようとしているようである。

しかし、勿論そんな小細工がレミリアに効くわけがない。

レミリアは、ほとんど先ほどと同じ動きで夢想封印を躲していきり

どうやら、一度見た夢想封印の軌道を完全に暗記しているようである。

靈夢「これも、躲し切られた!!」

靈夢は、動揺した。

まさか、これ程までにレミリアが素早いとは…。

レミリア「数を増やせば良いって問題じゃないのよ」

靈夢とは裏腹にレミリアは楽しそうな表情を浮かべるレミリア。

果たして靈夢はレミリアに勝つことはできるのか。

## 霊夢 v s レミリア 第13話

霊夢 「まさか、夢想封印を2枚連続で使っても躲されるとは…」

これには流石にどうしたものかと頭を曲げる霊夢。

霊夢の切り札を使っても倒すことが出来ないレミリア。

霊夢は、一体どのような手段でレミリアに攻撃を当てるのだろうか。

霊夢は、頭をひねって考える。

しかし、勿論、レミリアがそんな時間を与えるわけではない。

レミリア 「あら、考え事？でもね。戦いに考える時間なんてないのよ」

そう告げた瞬間、レミリアは再びスペカを構えた。

そして…。

レミリア 「神槍 「スピア・ザ・グングニル」」

先ほどと同じ大きな槍を出す。

その瞬間！

レミリア 「はあ!!？」

今度はレミリアの方から霊夢へと攻撃を仕掛けた。



どうやら、霊夢に考える隙を与えないようである。

霊夢「なっ!!?」

レミリアの急な槍攻撃に動揺する霊夢。

霊夢は体をひねることによってギリギリで躲した。

霊夢「あつぶない」

数センチ単位で横切る槍の先端を見つめながらそう告げる霊夢。

レミリアは、またしても槍攻撃を躲した霊夢に驚く。

レミリア「反射神経だけは中々のものね。でも!!?」

その瞬間、一気に槍を引くレミリア。

そして!

レミリア「だりやりやりや!!?」

引いた槍の力を一気に解放するような形でレミリアは一気に槍を連打した。

流石の霊夢もこれには驚きの表情を隠せない。

霊夢「ぐっ!!?」

霊夢は、攻撃する事を捨て完全に受け身に徹する。

そうする事で攻撃を避けることだけに神経を使い連打攻撃を避けることには成功し

た。

しかし、あくまでそんなものは悪あがきにしかない。

流石の霊夢もこんなに連打されては、全てを躲し切ることが出来ない。

スパッ

槍が霊夢の頬を掠める。

どうやら、避けきれなかったようだ。

このまま攻められてはヤバイ！

そう思われた時！

レミリア「よっと」

レミリアは何故か一度、霊夢との距離をとる。

レミリア「どうかしら、私の攻撃は？」

霊夢に煽るように告げるレミリア。

その表情には少なからず笑みが混じっていた。

霊夢「よくも、私の顔に傷を付けたわね！」

霊夢は怒りの感情を見せる。

その表情には最早、冷静さを取り戻す余裕はなかった。

どうやら、レミリア自身これを狙ったようである。

一度、霊夢の冷静さを削ぐことで確実に霊夢を仕留める。

レミリアの考えには完全な計画性があったのであった。  
霊夢「こうなったら」

少しヤケクソ気味に霊夢は告げる。

恐らく霊夢はレミリアに何かを仕掛けるようだ。

しかし！

レミリア「おっと、あなたに攻撃の隙は与えないわよ」

そう告げると再び槍を振りかざすレミリア。

どうやら、再び連続攻撃を仕掛けるようだ。

霊夢は、すぐさま身構える。

レミリア「だりや!!？」

予想通り連続で攻撃を仕掛けてくるレミリア。

これでは、また、先ほどと同じ展開になってしまう。

そう思われた時！

霊夢「はあ!!？」

ドンッ

レミリア「ぐはっ!!？」

なんと、事態は先ほどとは全く違う方向へと向かった。

レミリアは腹を抑えている。

どうやら、霊夢はレミリアにカウンターを仕掛けたようだ。

流石の霊夢も何度もやられた技。

少しづつ相手の攻撃を暗記していたようである。

レミリア「くそ!!? 油断した」

まさか、今の霊夢がここまで冷静にカウンターを合わせてくるとは!

完全に自分の作戦が裏目に出てしまったレミリア。

離れて見ていた悟空も今の霊夢の行動には流石に驚いた様子を浮かべる。

しかし、霊夢の攻撃はこれだけではなかった。

霊夢「今だ!!?」

そう告げると今度は霊夢がスペカを構える。

どうやら、最初から霊夢はこれを狙っていたようだ。

霊夢「夢符「封魔陣」」

その瞬間、霊夢から四方八方に弾幕を放たれた。

どうやら、隙間なく弾幕を放つことでレミリアの逃げ道を無くしたようである。

更にレミリアはダメージを受けている。

霊夢「流石のあなたもそのダメージでこの弾幕を避けられないはず!!?」

これには、流石のレミリアも思わず大きな声をあげた。

レミリア「しまった!!」

レミリアの声が部屋一面に広がる。

レミリアはそのまま弾幕を避けようと努力するもさっきのカウンターが体に残っており体がうまく動かない。

そして!

ドンツ ドンツ ドンツ

レミリアは弾幕に飲み込まれるのであった。

レミリアは霊夢の弾幕に直撃し倒れ込んでしまう。

どうやら、クリーンヒットしたようだ。

しかし..。

霊夢「..」

霊夢は、倒れたレミリアを無言のまま見続ける。

一体、どうしたのだろう。

周りからは不自然に映る霊夢の姿。

しかし、それだけではない。

次の瞬間、霊夢はもつと驚くべき事を告げる。

霊夢「立ちなさい!!？」

なんと、霊夢は倒れたレミリアを見つめながらそう告げた。

レミリアの目は閉じており一見気絶しているように見える。

しかし、霊夢の判断は正しかった。

霊夢「さっきの弾幕は量は凄いけど威力はそれほどよ。あなたならあの程度の威力の弾幕じゃ大したダメージにはならないでしょ？」

そうさっきのスペカはあくまで範囲重視。

威力はそこまではないのである。

その故にレミリアみたいな奴が気絶までするとは考えられないのであった。

レミリア「ふふふ」

レミリアから、笑い声が聞こえる。

どうやら、霊夢の発言はビンゴだったようだ。

レミリア「でも、大したことないダメージではないわ。まあ、立ち上がる程のダメージだけだね」

そう言いながら身を起こすレミリア。

その表情には、まるで痛みや苦しみなどは感じられない。

レミリア「それにしてもまさか、カウンターを合わせられるなんてね。正直、驚いた

わ

霊夢の予想外の攻撃を正直に褒めるレミリア。

確かに先ほどの攻撃は相手に攻撃の隙すら与えない猛攻。

その故、霊夢がカウンターを合わせたのがよほど凄いのである。

レミリア「でもね。私だってまだ、本気じゃないのよ」

そう告げた瞬間、レミリアは再びスペカを構えた。

そして！

神槍「「スピア・ザ・グングニル」」

再び槍を出すレミリア。

だが、その槍は先ほどとは少し違っていた。

その槍からは紫色のオーラが滲み出ており明らかに威力が上がっているのが見て取

れる。

レミリア「これで決めて見せる!!？」

レミリアは血相を変えてそう告げた。

どうやら、自分にカウンターを合わせられたのが余程、ショックだったようである。

霊夢「チツ!!？まだそこまでの力があるとわね」

レミリアがまだ、こんな力を隠してたのに驚く霊夢。

しかし、もう槍の軌道は記憶済み。

拳と違って単調的な動きしか出来ない槍では長く続けば続くほど動きが読みやすくなるのである。

霊夢とレミリアは共に構えを取る。

そして！

再び攻防戦が始まるのであった。

霊夢は拳でレミリアは槍でお互い互角の闘いを繰り広げる。

霊夢がパンチをくらわせようとするとレミリアは槍で霊夢の攻撃を受け流しレミリアが槍で霊夢を刺そうとすると霊夢は躲し隙あらばカウンターを狙う。

その戦いは続けば続くほどスピードアップしていき。

途中からは、最早、反射神経だけで動いているのではないかというほど素早くなっていった。

悟空はそんな戦いに少し感心する。

悟空「すんげえ、闘いだな！オラ、わくわくしてきたぞ！」

そして、見ている悟空の方もワクワクするほどであった。

その後も霊夢とレミリアの互角の攻防がしばらく続く。

しかし、そんな中…。



レミリア「あっ」

レミリアが霊夢のパンチを受け流しそこねた。

レミリアの槍は大きく後ろに弾き飛ぶ。

霊夢「もらったー!!」

これは、千載一遇のチャンス。

霊夢はレミリアの腹部に重い一撃を連続で放った。

レミリア「ぐはっ!!?」

こうなってしまうては一方的に殴られるしかないレミリア。

レミリアはなすすべなく霊夢の攻撃をくらっていく。

そして…。

霊夢「だりやあ!!?」

霊夢は、追い討ちをかけるようにレミリアに回し蹴りを放った。

流石にレミリアもこれにはなすすべなく数メートル先まで吹っ飛ばされてしまう。

レミリア「ぐっ!!?」

ゴンッ

そのまま壁に強く衝突するレミリア。

レミリアは急いで体制を立て直そうとする。

しかし…。

レミリアが視線を前に移すとスペカを構えた霊夢が立っていた。

レミリア「まずい!!」

流石のレミリアも今、夢想封印を撃たれては躲すことは出来ない」

悟空は、「この勝負決まったな!」と口走る。

霊夢「霊符」「夢想封……」

霊夢は、夢想封印を放とうとした。

と、その時!

バゴンッ

突然、床から穴を開け何かがぶっ飛んできた。

霊夢は、すぐさま夢想封印を取り消しその飛んできたものに目をやる。

それは…。

霊夢「魔理沙!!」

そう魔理沙だったのである。

急に下から魔理沙が飛んできたことに脳が追いつかない霊夢。

すると、悟空は後ろから大きな声をあげた。

悟空「霊夢、下から何かくる避けろ!!」

悟空の声を聞いた霊夢は急いで魔理沙を抱え今立っている場所を移動する。すると、その瞬間!

今、霊夢と魔理沙がいた所の床からフランが床をぶち破って出てきた。

レミリア「フラン!!」

レミリアは驚く。

その表情には焦りがあり冷や汗をかいていた。

フラン「あ、私をあんな所に閉じ込めたお姉様だ」

そんなレミリアとは正反対に笑みを浮かべながらレミリアを見るフラン。

果たして一体、紅魔館はどうなっているのだろうか。

## フランを止めろ! 悟空 v s フラン 第14話

レミリア「フラン。どうして! 結界に閉じ込めていたはずなのに!」

遙か昔に閉じ込めた筈のフランが何故か目の前で野放し状態になっている。

レミリアの目に光はなく絶望が写っていた。

魔理沙「すまない、私とパチュリーが闘って結界をぶっ壊してしまったんだ」

魔理沙は、こうなった経緯を簡潔にレミリアへ伝えた。

レミリアの表情からして目の前にいる少女はヤバイとだけ察する霊夢と悟空。

霊夢「どうやら、あんたと戦ってる場合じゃないようね。レミリアあいつは何者?」

レミリアの目の前の少女について尋ねる霊夢。

レミリアは、そんな霊夢に対して震えた口を必死に動かした。

レミリア「あいつは私の妹のフラン。昔、私が結界に閉じ込めたのよ」

霊夢「閉じ込めたですって!!?」

思わず反射的に声が飛び出た霊夢。

どうやら、妹を閉じ込めたということに対してレミリアを少し軽蔑したようだ。

霊夢は、少し強めの口調でレミリアに言った。

霊夢「なんで結界に閉じ込めたのよ。妹なんでしょ！」

そのセリフからは明らかに怒りの感情がこもっている。

「どうやら、どんな理由があろうとも妹を閉じ込めたというレミリアの行動を許さなかつたようだ。」

しかし、レミリアはそんな霊夢に反論するように告げる。

レミリア「しようがなかつたのよ！あの子の強さは計り知れない。それに、何よりあの子は何でも破壊出来る能力を持っているの！昔、あの子が暴走して紅魔館は大変なことになったのよ！だから、結界に閉じ込めたの！」

レミリアは、その後も黙々と話を続ける。

レミリアの話によると昔、フランが何かをキツカケに暴走状態になってしまい自分達では手がつけられなくなってしまったようである。

更にフランは破壊の能力を持っておりそうやすやすとはほっておかなかつたようだ。

その故に苦肉の策ではあるがフランを閉じ込めることにした。

姉として、これ以上フランの罪が重なるのを防ぐためにも…。

レミリアは、霊夢の方へと視線を移した。

霊夢「なによ？」

あまりにも急なレミリアの視線、霊夢は少しレミリアの方へと意識を向けた。

その瞬間!

レミリア「お願い霊夢!あの子を止めるのを手伝って、もしあの子が外に出てしまつたらこの幻想郷は消えてなくなるわ…」

レミリアは威圧のある声で霊夢に告げた。

そのレミリアの表情には、『辛い』という言葉が浮かんでいる。

そして、それはこの状況のヤバさを霊夢や魔理沙、それに悟空。

この三人に語りかけているようであつた。  
すると…。

霊夢「幻想郷が消えるとなつたら放っておくわけにはいかないわね…」

そう言いながら一歩前へと足を出す霊夢。

そして、そのままレミリアの方へと顔を向けた。

霊夢「行くわよ!レミリア!」

レミリア「!!」

驚いた表情を浮かべるレミリア。

どうやら、本当に自分達に協力しようとしてくれる霊夢にレミリア自身驚きを隠せないようだ。

霊夢は、そんな、レミリアに対し微笑を浮かべる。

霊夢「な〜くに、驚いてるのよ！先にお願ひしてきたのはそっちでしょ？」

優しいながらも少し敵対しているような素振りを振るう霊夢。

どうやら、霊夢は、レミリアをいや、フランの姉を信じてみることにしたようだ。レミリアの瞳が少し潤む。

そして、微笑むように告げるのであった。

「ありがとう」と…。

そんな様子を倒れた状態で見っていた魔理沙は、霊夢の方へと手を伸ばす。

そして、告げるのであった。

魔理沙「無茶だ霊夢!!」

その一言は、表面上のものではなく心からの叫び。

そう魔理沙は、先ほどまでフランと戦っていた。

その故に、フランに対しての恐ろしさを現段階では一番理解をしているのである。

しかし、霊夢は！

霊夢「無茶でも、やるしかないでしょ！」

少し怒鳴るように魔理沙に告げた。

それはまるで、「あんたに言われなくても分かってるわよ」という感じに…。  
そう霊夢自身も気づいているのである。

今、自分がどれほど危険な事をしようとしているのかを…。

霊夢「さあ、いくわよレミリア」

レミリア「分かったわ」

倒れている魔理沙を後ろに戦闘態勢をとる霊夢とレミリア。

フランもすぐさま2人が戦闘を仕掛けてくると察する。

フラン「ふふふ、魔法使いの次はお姉様達がフランと遊んでくれるのね」

不気味な笑みをこぼしながらこちらを見つめるフラン。

その目にはまるで正気を感じ取れなかった。

霊夢「ええ、そうよ!」

しかし、霊夢はそんなの御構い無し!

相手から動かないなら今がチャンス!

霊夢は、レミリアに指示を出しフランへの同時攻撃を仕掛ける!

霊夢「行くわよ!」

そう言いながらレミリアとともにスペルカードを構える霊夢。



2人の視線は完全にフランを捉えていた！  
と、その時！

「待て!!」

霊夢とレミリアが同時攻撃を仕掛けようと瞬間！

2人の行動を遮るかのように声が響いた。

霊夢とレミリアは、とつさに声の方へと顔を向ける。

そこには、腕を組み鋭い眼光をとぼしている悟空がいた。

どうやら、さっきの声の主も悟空のようである。

悟空は、続けざまに霊夢達に告げた。

悟空「さっきまで戦ってたお前達の体力じゃ無理だ」

霊夢は、その悟空の一言を聞くや否や視線を地面の方に落とす。

そして、自らの拳をめいっばいに握りしめる。

霊夢「そんなこと、分かっているわよ。でも、今！闘わないと幻想郷が…」

喉にピリピリとした痛みが走るほど大きな声を荒げる霊夢。

どうやら、霊夢は自分の幻想郷に対する想いを本気で悟空に伝えたかったようだ。

悟空「…」

悟空は無言で瞳を霊夢の方へとちらりと向ける。

そして、こう告げるのであった。

悟空「でえじようぶだ、オラがあいつを倒す!!」

その言葉は、今までとは違い戦いを楽しみたいというより大切な物を守ると言った感情が強く漏れ出ていた。

霊夢は、この時、心に強く思う。

これが悟空なのか…と。

しかし、そんな中

レミリア「あなたのような子供に何が出来るの?」

霊夢とは違い全力で悟空を止めるレミリア。

まあ、当然であろう。

レミリアからしてみれば悟空はただの子供。

そう悟空の強さをこれっぽっちも知らないのだから。

悟空「ははは」

不意に笑みをこぼす悟空。

そして、レミリアにこう言い放つのであった。

悟空「安心しろオラはただの子供じゃねえ」

そう告げると同時に体に力を溜め込む悟空。

悟空「はああああああ!!」

そして!

ボンツ

悟空の髪の色が一瞬にして金髪に染まった。

そうスーパーサイヤ人である。

魔理沙・レミリア「なんだ(なんなの)、あの力!？」

スーパーサイヤ人を始めて間近でみた魔理沙とレミリア。

2人はまさに空いた口が塞がらない状態。

霊夢は、そんな2人を見かねて軽く説明をした。

霊夢「あれは、スーパーサイヤ人。悟空の奥の手よ」

レミリア「凄い、ものすごい威圧感が感じ取れる!」

魔理沙「悟空の奴、こんな力を隠していたとは!」

呆然とした表情を浮かべただ、悟空を見つめるレミリアと魔理沙。

悟空「頼む、あいつはオラに任せてくれ!!」

確かな感情のこもった目とともにレミリアを見つめる悟空。

レミリア「分かったわ、あなたに任せる」

レミリアはそんな悟空の雰囲気を感じると微かな希望を目に浮かべ悟空に想いを託

した。

悟空「ありがとよ」

悟空もそう一言だけレミアに言葉を返すとフランの方に視線を向けた。

悟空の目にはワクワクとした壊れた目を浮かべるフランがうつる。

フラン「ねえ、まだなの？誰でもいいから遊ぼうよ」

フランは無邪気な子供のようにまだかまだかと待ち望む。

フランにとってはこの状況はただの遊びでしかないのだ。

悟空「待たせてすまねえな！オラが相手してやるよ！」

フラン「君が相手？まあ、お姉様の味方をする者はみんな壊してあげる」

と言いフランは悟空に破壊のエネルギーを放つ

悟空はそれに反応して破壊のエネルギーを避ける。

すると、躲した破壊のエネルギーが壁に当たった。

なんと、破壊のエネルギーが当たった壁は完全に消えてしまった。

悟空「なんて技だ!!」

霊夢・魔理沙「あれが、破壊の能力!!」

霊夢と魔理沙は消えた壁を見て驚きを隠せない。

悟空「おめえ、なかなかやるな」

フラン「ハハハ、まさかあれを避けるなんて君壊しがいがありそうだね」

悟空（こりや、油断してたらずいかもな）

悟空「次は、こつちから行かせてもらうぜ、はあー！」

悟空は金色のオーラを纏いフランに近づく

フラン「そんな真つ直ぐに来ていいの？」

といい破壊のエネルギーを悟空に再び放つ

霊夢・魔理沙・レミリア「まずい!!」

だが、悟空は、

悟空「オラに同じ技は通用しねえ!!」

といいバリアのような物を体に纏う

そして、悟空は破壊のエネルギーを気にせず通り過ぎフランにパンチを食らわせよう

とする。

フラン「なに!?!」

流石のフランも自分のとっておきの能力が効かなく焦る

悟空「そんな、焦ってる余裕あんのか？」

と言い悟空はフランの腹にパンチを入れる。

フラン「ぐはっ」

フランはそのまま吹き飛び壁に激突して倒れる。だが、フランはすぐに立ち上がる。

フラン「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

フランは完全に狂ってしまっている。

フラン「君、絶対に壊してあげる」

フランの目が鋭くなる。

フラン「禁忌「レーヴァテイン」」

フランは炎の剣を持った。

そして、そのまま悟空に猛スピードで攻撃する。

悟空「なんて速さだ！」

悟空はフランの剣を紙一重で避けていく。

フラン「ハーハハハハハ」

フランの猛攻が続く

悟空（このままじゃまずい）

その時、悟空はフランの攻撃をくらってしまった。

悟空「うわー！」

少し吹き飛ぶ悟空

悟空（まさか、スーパーサイヤ人のオラに攻撃を当ててくるなんて!!）

フラン「ハハハハハ」

悟空「チツこいつさつきから笑ってばっかりだな」

魔理沙「おい、霊夢悟空の奴大丈夫なのか？」

霊夢「分からない、でも今は悟空を信じることにしか出来ないわ」

魔理沙「頼むぜ！悟空！」

霊夢と魔理沙はひたすら悟空を信じて祈る。

悟空「おめえ、なかなかやるな！今度はもう少し力入れていくか」

フラン「さつきの攻撃をくらっても壊れないんだ」

悟空「あたりめえだあの程度じゃオラは倒せねえぞ」

フラン「なら何度も攻撃し続けてあげる」

といいフランが悟空に攻撃を仕掛ける。

悟空もそれに合わせて攻撃と防御をしていきお互い一步も譲らない闘いになった。

だが、近距離が得意な悟空は少しずつフランの動きに慣れていき、徐々にフランダメージを与えていく。

フラン「くそー！こうなったら私の最高の技で!!」

フラン「禁忌「禁じられた遊び」」

フランは自分の全てを悟空にぶつけた。

しかし、悟空に攻撃が当たると同時に悟空が消えた。

フラン「何？」

すると、後ろから声が聞こえてきた、フランが振り向くと

悟空「かくめくはくめく」

なんと悟空がいた。

悟空「波ー」

しかも、悟空はフランにかめはめ波を打った。

果たしてこの後どうなるのか。



## 異変解決!! 第15話

悟空「かゝめゝはゝめゝ波ー!」

悟空がフランにかめはめ波を放つ。

流石のフランも急に後ろから来た攻撃に反応することが出来なかった。

フラン「しまった!!」

そして、フランはかめはめ波に飲み込まれてしまう。

そして、紅魔館内は爆風で埋め尽くされる。

魔理沙「なあ、霊夢今悟空何をしたんだ?」

霊夢「分からない。気がついたらフランの後ろに悟空が回り込んでいた。時を止めたわけじゃなさそうだし」

魔理沙「霊夢でも、分からないのか」

そして、しばらくして爆風がなくなりフランの姿が見えてきた。

フランはかめはめ波をまともにくらったせいで、体は傷だらけでボロボロになって倒れていた。

レミリア（フラン…）

だが、フランはよろめきながらも立ち上がる。

フラン「はあ、はあ、はあ、はあ」

息を切らしているフラン。

フラン「まだよ、まだ私は負けない」

どう見ても立ち上がるので精一杯の姿で再び構えてくる。

悟空「無駄だ、もうお前に闘う力は残ってねえ」

フラン「こんな所で私が、私は自由を手に入れるんだ！お前はお前は私に殺されるべきなんだ!!」

フランは残った力を振り絞って破壊の能力を使った。

しかし、悟空は、

悟空「馬鹿野郎ー!!」

と叫びエネルギー波を放った。

そのエネルギー波は、フランの破壊のエネルギーを消し去りフランに直撃しかけた。

その時、

レミリア「フランー!!」

なんと、フランに当たりかけた悟空のエネルギー波の前にレミリアがきてフランの盾となるように、フランを捨て身で守った。

レミリア「うわあー！ー！」

レミリアは悟空のエネルギー波を直撃してしまう。

そして、レミリアは倒れる。

フラン「お姉様、お姉様、なんで私なんかを」

レミリア「そんなの決まってるでしょ、あなたが大切な妹だからよ」

フラン「でも、私はお姉様達を壊そうと……」

レミリア「それも元々は、あなたをあんな狭い所に閉じ込めた私の責任よ。誰だって、あんな所に閉じ込められたら怒るわよ。ごめんね、フランあんな所に閉じ込めて」

と言いつレミリアは気を失う。

フラン「うわあー！ーん」

フランは泣き叫ぶ。

すると、悟空は泣き叫ぶフラン見て、

悟空「おい、フランおめえこれからは暴れたりしねえか？」

悟空は突然フランに質問する。

フラン「えっ？」

突然の悟空の質問に戸惑うフラン。

悟空「おめえは、もう誰かを傷つけたりしねえか？」

悟空は再びフランに質問する。

フラン「勿論、もう誰も壊したりしないわ!!」

とフランは涙を拭きながらいう。

悟空「そうか」

といい悟空は倒れたレミリアに近寄り

悟空「はあ!!」

悟空はレミリアにエネルギーのようなものを放つ。

フラン「一体、何を？」

とフランがレミリアの方を向く

その時、

レミリア「う、うう」

なんとレミリアは意識を取り戻した。

悟空「オラの気を少し分けてやった。これで、しばらく安静にしていれば元気になる

はずだ」

といいスーパーサイヤ人を解く悟空。

フラン「お姉様！お姉様ー」

フランはレミリアの意識が戻り喜ぶ

レミリア「フラン」

とレミリアはフランの名前を呼びフランを抱きしめる。

フラン「お姉様、本当に本当に良かった」

レミリア「フラン、いつたい私はどうして、たしかに私は悟空のエネルギー波を直撃して？」

フラン「悟空が、悟空がお姉様にエネルギーを与えたの」

とレミリアに説明するフラン

レミリア「そう、悟空が……」

とレミリアはいい悟空の方を向く

レミリア「悟空、ありがとう。本当にありがとう」

レミリアは心から悟空に感謝する。

悟空「いいってことよ！」

レミリア「悟空、お詫びに何かしたいんだけど何がいい？」

悟空「そうだなあ、取り敢えず外の霧を止めてくんねえか？元よりオラ達はそれが目的だしな！」

とレミリアにいう悟空、

レミリア「分かったわ」

といいレミリアは外の霧を止めた。

レミリア「これでいいかしら？」

悟空「ありがとよ、レミリア」

と言ひ霊夢と魔理沙の方に戻る悟空

霊夢「やれやれ、これで異変解決ね！」

魔理沙「そうだな！」

霊夢と魔理沙も異変解決が出来て一息つく。

そして、少しして霊夢が、

霊夢「それじゃあ、もう行きましようか」

と悟空と魔理沙に言ひ紅魔館を後にしようとした。

レミリア「あら、もういっっちゃうの？」

霊夢「当たり前でしょ、異変は解決したんだから」

レミリア「それもそうね、それじゃあさよなら」

フラン「さよなら」

とレミリアとフランは悟空達にさよならを言う。

悟空「ああ、またな！」

と悟空は言葉を返して3人は紅魔館を後にした。

魔理沙「いやー、今回の異変はちよつと危なかつたな」

霊夢「ほんとよ、悟空がいなかったら大変なことになってたわ」

と2人は博麗神社に向かいながら喋る。

霊夢（もし、本当に悟空がいなかったら：想像するだけで恐ろしいわ）

と少し考え込む霊夢。

そんな、霊夢を見て魔理沙が、

魔理沙「どうしたんだ霊夢？そんな考え込んで？」

霊夢「うん、ちよつとね、」

と魔理沙の言葉を流す霊夢

魔理沙はこんな表情をした霊夢を見たことなかつたので少し霊夢が心配になる。

そして、少しして、霊夢が予想外の言葉を悟空にいう。

霊夢「ねえ、悟空、私を弟子にして!!」

なんと、霊夢が悟空に弟子入りを頼んだ！

魔理沙「霊夢何いってんだよ!？」

魔理沙も驚きを隠せない。

魔理沙「お前、修行は大っ嫌いじゃねえか！」

霊夢「確かに、私は修行することは嫌いよ。でも、今回の件から私はもっと強くならないといけないと思ったの!だから私は、悟空に弟子入りを頼んでるのよ!これからは私の力だけで異変を解決するために!!」

魔理沙「霊夢、、そうだな確かに悟空にばっかり頼ってられないしな。よし、決めた。悟空、私も弟子にしてくれ!」

なんと魔理沙も悟空に弟子入りをする。  
果たして悟空は2人を弟子にするのか。



## 修行編（気の感じ方）

## 霊夢と魔理沙の弟子入り

## 第16話

悟空「とんでもねえ、オラ師匠なんて無理だぞ」

と焦る悟空

霊夢「何言ってるのよ、あんなに強いのに師匠になるくらい簡単でしょ」

魔理沙「そうだぜ」

悟空「でもよく、オラ、ウーブ以外弟子を取ったことないからな」

霊夢「あら、師匠になった経験はしたことあるの？」

悟空「まあな」

魔理沙「そういや、まだ私悟空の事聞いてなかったぜ！悟空、お前は何者なんだ？」

悟空「そういや、まだおめえにオラの事話してなかったな。」

（悟空説明中）

悟空説明が終わると同時に博麗神社に着いた。

魔理沙「悟空、お前そんなにすごい奴だったのか!？」

悟空「まあな」

魔理沙「こりや、絶対に師匠になってもらうぜ！」

魔理沙は悟空の事を聞き更に師匠になってもらうという気持ちが強くなる。

悟空「だから、オラ師匠とかそういうの苦手なんだよ」

霊夢「でも、昔ウーブって奴の師匠になったんでしよう?」

悟空「そうだけだよ」

悟空は霊夢と魔理沙を師匠にするか迷う。

魔理沙「なあ、悟空頼む」

霊夢「お願い」

2人は必死に悟空に頼む。

悟空「うゝん」

悟空は少し考え込む。

その時、

悟空の腹「ぐうゝゝゝ」

悟空「わりの、オラ腹減ったまたその話はまた飯を食った後でな」

霊夢「はあく、分かったわ」

魔理沙「そういや、私も腹が減って来たぜ。霊夢、悪いけど夕飯奢ってくれよ。紫に食費代出してもらってんだろ？」

霊夢「分かったわよ」

魔理沙「ラッキー、夕飯代が浮いたぜ」

霊夢「その代わり夕飯作るの手伝いなさい魔理沙」

と魔理沙にいう霊夢

魔理沙「まあ、それくらいなら手伝うぜ」

く数時間後く

魔理沙「はあ、はあ、なあ霊夢なんで簡単な料理を3人前作るのにこんなに時間がかるんだよ」

と大量の夕飯を目の前にいう魔理沙

魔理沙「なんだよ、この量なんでこんなに作る必要があるんだ？ザツと3く40人前はあらず」

霊夢「すぐにわかるわよ」

といい夕飯を食べる3人

魔理沙「え、え、ええー!!」

すると、魔理沙が驚く

霊夢「うるさいわね、食べてる時くらい静かにしなさいよ!」

と魔理沙を叱る霊夢

魔理沙「でもよ、悟空の奴この量の飯をあんなスピードで食ってるぞ」

霊夢「あれが悟空の普通なのよ。それより早く食べないと全部食べられちゃうわよ」

といいながら箸を進める霊夢

→15分後→

悟空「いや、食った食った」

魔理沙（本当にあの量の飯を食いきりやがった。やつぱり、悟空は只者じゃないぜ）

霊夢「それじゃあ、悟空さっきの話の続きなんだけど」

悟空「さっきの話?」

霊夢「弟子入りのことよ」

悟空「ああ、その話か、いいぞ、2人共弟子にしてやつぞ!」

霊夢と魔理沙「えっ!!」

驚く霊夢と魔理沙それもそのはず先程は、弟子をとるのをあんなに嫌がってた悟空が

急にいいと言ってくれたのだから。

霊夢「なんで、急にさつきまではあんなに嫌がってなのに？」

と悟空に聞く霊夢

悟空「よくよく思えばこの神社に住まわせてもらってるうえに、飯まで食わしてもらってたんだ。それなのに何のお礼もなして訳にはいかねえじゃねえか」

霊夢「悟空…ありがとう」

悟空「よし、そうと決まれば明日の朝から修行始めつぞ、今日は早く風呂入って寝るぞ」

霊夢「分かったわ」

魔理沙「それじゃあ、私は明日の朝に来るからな」

といい魔理沙は家に帰った。

悟空と霊夢も明日の朝飯を作ってその日は早く寝た。

そして、次の日

悟空・霊夢「ふああ〜ん」

2人は少し早めに目を覚ます。

悟空・霊夢「おはよう」

2人は挨拶して朝飯を食べた。

霊夢は朝飯を食べながら

霊夢「そういや、悟空修行ってどんな修行するの？」

と悟空に質問する霊夢

悟空「それは、あとで魔理沙が来た時に話すぞ」

と言葉を返した。

霊夢「分かったわ」

と霊夢もいい朝飯を食べ終えた。

そして、悟空と霊夢は外に出た。

霊夢「さて、魔理沙はまだかしら」

と空を見ながらいう霊夢

すると、悟空は、

悟空「もう、そこまで来てるからあと5分もすりゃくるだろ」

と悟空も空を見上げながらいう。

く5分後く

魔理沙が来た。

魔理沙「よつ、悟空、霊夢」

霊夢「あんた来るの遅いわよ」

と霊夢は待たされて少し機嫌が悪そうだった。

魔理沙「まあまあ、これでも飛ばしてきたんだぜ」

と必死に霊夢のご機嫌をとる魔理沙

霊夢「まあいいわ、とりあえず修行を始めましょ」

悟空「ああ、分かった」

魔理沙「で、悟空いつたい今日はどんな修行をするんだ？」

悟空「今日はとりあえずオラと組み手だ」

と悟空は言った。

霊夢と魔理沙は驚く

魔理沙「ちよつと待てよ悟空初日からいきなりお前と組み手かよ」

霊夢「そうよ」

と霊夢と魔理沙は悟空にいう。

悟空「初日だからこそ組み手をするんだ」

霊夢「どういうこと？」

悟空「オラは、霊夢とも少ししか闘つてねえし、魔理沙とは闘つてもねえし闘い方を見てすらいねえ、だからまずおめえ達は普段どんな風に闘っているのかを知りたいんだ。そして、その闘い方でダメな場所を見つけてそこを鍛えていくぞ」

霊夢「なるほどね」

魔理沙「そういう事なら早速始めようぜ」

と霊夢と魔理沙は理解する。

霊夢「で、まずどっちと闘うの？」

悟空「いや、もう2人いつぺんに来ていいぞ」

魔理沙「2人って、本当にいいのか？」

悟空「ああ、いいぞ」

霊夢「分かったわ。まあ、どうせ2人いつぺんにかからないと組み手にもならないしね」

悟空「それじゃあ、早速始めるぞ」

霊夢・魔理沙「分かったわ(ぜ)」

といい3人は戦闘態勢に入る。



## 悟空 V S 霊夢 &amp; 魔理沙 第17話

悟空「これはお前達の闘い方を知るための闘えだ。だから、本気で来い!!」

霊夢「分かったわ、それじゃあ遠慮なく!」

霊夢「霊符「夢想封印」」

霊夢はいきなり夢想封印を使う。

魔理沙（霊夢の奴いきなり夢想封印かよ。なら、私も）

魔理沙「魔符「スターダストレヴアリエ」」

2人はいきなり大量の弾幕で悟空に攻撃する。

しかし、悟空は、

悟空「はあー!!」

悟空は気合いで弾幕をかき消していく。

霊夢「やつぱり、こうなるわよね」

魔理沙「まあ、分かってわいたことだけだな」

と呆気なく消されていく弾幕を見ながらいう霊夢と魔理沙

悟空「どうした、これっぽっちか?」

と少し挑発を入れた悟空、

すると、その挑発に乗って魔理沙が、

魔理沙「なら、これならどうだ!!」

魔理沙「恋符「マスタースパーク」 この威力なら流石に気合いだけじゃ弾けないはずだぜ」

悟空「すんげえ威力だ。だけだよ」

悟空は魔理沙のマスタースパークが当たる手前で消える。

魔理沙「なに!!」

次の瞬間、魔理沙の後ろに悟空が現れる。

悟空「こっちだ」

そして、悟空は魔理沙の背中に回し蹴りをした。

魔理沙は数メートル飛ばされるも態勢を立て直す。

悟空「どうだ!」

魔理沙「いつの間に後ろに」

霊夢「そういうえば、フランの時も似たようなことしてたわね。一体何をしたの?」  
と悟空に聞く霊夢

悟空「瞬間移動さ」

と悟空は簡単に答える。

魔理沙「しゅ、しゅ、瞬間移動だつて！」

驚く魔理沙。

悟空「ああ、オラは、瞬間移動つてのを使うことが出来るんだ！」

霊夢「あんた、もはや何でもありね」

と改めて悟空の凄さに気づく霊夢。

悟空「そんな事ねえぞ、オラ子供になつてからしばらく瞬間移動出来なくなったしな」

魔理沙「じゃあ、どうやってまた、出来るようになったんだ？」

悟空「それは、オラの仲間に昔ピッコロつて奴がいたんだ。そして、オラが瞬間移動をしないとヤバイ時にあいつはオラに気を分けてくれてそんな時にまた、瞬間移動出来るようになったんだ」

魔理沙「ふくん」

悟空「さあ、話はこのくれえにして続きすつぞ」

と言い再び戦闘態勢をとる悟空。

魔理沙「それもそうだな！」

といい魔理沙も再び戦闘態勢に戻る。

悟空「さあ、来い！」

魔理沙（来いっていわれてもマスタースパークも効かなかつたし、どうすればいいんだ）

考え込む魔理沙

すると、霊夢が小声で

霊夢「ねえ、魔理沙」

とこう。

魔理沙も小声で

魔理沙「なんだ、霊夢？」

という。

悟空（なんだ、作戦会議か？）

霊夢「作戦があるの」

魔理沙「作戦？作戦なんか考えても無駄だろ」

霊夢「いいから聞きなさい」

魔理沙「分かったよ」

といい強制的に作戦を聞かされる魔理沙

霊夢「私が悟空の動きをなんとかして止めて見せるその隙に魔理沙あなたが悟空にマスタースパークを打ちなさい」

魔理沙「悟空の動きを止めるだつて!!いくら霊夢でも無茶だぜ!この闘いはあくまで私達の闘いを悟空に教えるため、そこまで勝ちにこだわらなくていいんだぜ!」

霊夢「何言ってるのよ?どうせやるならやっぱり、勝ちたいじゃない!」

と魔理沙にいう霊夢

魔理沙「まあ、確かにそうだな!分かったぜ霊夢」

と魔理沙も話に乗って作戦会議を終わる。

悟空「作戦会議は終わったか?」

霊夢「ええ、終わったわよ」

悟空「そうか、じゃあ来い」

霊夢「ええ、いわれなくとも」

と言いつつ霊夢は悟空に近づきパンチを打つ

悟空「よつと」

しかし、悟空は簡単に躲す。

霊夢は少し距離を置き

霊夢「霊符」「夢想封印 散」

霊夢は細かく数の多い弾幕を放つ。

だが悟空は、

悟空「よっよっよっよっ」

軽やかにステップを踏みながら弾幕を躲していく。

そして、そのまま悟空が全部弾幕を躲しきるかと思った時、

霊夢「もらった!!」

なんと、霊夢は弾幕で悟空の死角を作り一気に悟空に近づきパンチを打つ。

悟空「なに!?!」

悟空は霊夢が急に攻めて来たのに焦り反応が遅れる。

しかし、悟空はその状況からでも落ち着き舞空術で空に逃げる。

悟空「霊夢、今のは凄かったぞ!まさか、弾幕でオラの死角を作ってそこから一気に

攻めてくるとはな」

霊夢「あら、褒めるのわ少し早いんじゃないの?」

悟空「なんだって?」

と言いつつ悟空は上に気を感じ上を見る。

すると、そこにはミニ八卦炉を構えた魔理沙がいた。

悟空「しまった!!」

悟空は逃げようとするが急過ぎて体が動かない。

魔理沙「もらったぜ」

魔理沙「恋符」「マスタースパーク」

魔理沙のマスタースパークは悟空を飲み込む。

霊夢「やった!!」

霊魔理沙「やったぜ!!」

と喜ぶ霊夢と魔理沙

しかし、

「はあああああー!」

マスタースパークのエネルギーの中から声が聞こえる。

悟空「はああああ!!!」

その瞬間、悟空は金色に輝きマスタースパークのエネルギーを吹き飛ばす。

魔理沙「なに!」

そして、スーパーサイヤ人を解く悟空

悟空「今日は、こんぐれえにすつか」

と何事も無かったように悟空

霊夢・魔理沙「えっ、もう終わり?」

悟空「ああ、おめえ達の闘い方と強さは大体分かったしな。それにしても、霊夢、魔理沙おめえら本当にすげえなまさか、スーパーサイヤ人になるとは思ってたぞ

！」

と言いながら3人は神社の中に入る。

霊夢「で、悟空私達に必要な修行はなんなの？」

と修行が終わった早々いう霊夢

悟空「ああ、おめえ達に必要な修行はだな……」

果たして霊夢達に必要な修行とはなんなのか。



## 気を感じる！ 第18話

悟空「おめえ達に必要な修行それはまず、気を感じれるようになる修行だ!!」

霊夢「気を感じる？」

悟空「ああ、そうだ！前から薄々気付いていたがおめえ達目で相手の動きを捉えてるだろ。それじゃ、いつか限界が来る」

魔理沙「でも悟空、そんな事簡単に出来ることじゃないぜ」

と悟空に絶対無理と言わんばかりに言う魔理沙

悟空「そんなことねえぞ！オラだって最初から出来たわけじゃねえんだ。でも、神様に修行してもらって出来る様になった。おめえ達はあの時のオラよりうんと強えだからすぐに出来るようになっさ」

と魔理沙にやる気を与える様という悟空

だが、魔理沙は

魔理沙「そんなものなのか」

と少し不安そうに言う魔理沙

しかし、霊夢が

霊夢「なに弱音吐いてんのよ、そんな事じゃこれからの修行に耐えれないわよ。まあ、いいわあんたが修行しないなら私だけが気を感じる能力を身につけるんだから」と魔理沙を下に見るようにいう霊夢

すると、魔理沙が、

魔理沙「なんだと、いいだろやってやる！ 霊夢、お前よりも早く気を感じる能力を身につけてやるんだからな!!」

と霊夢に言い放つ。

霊夢は、ふふふつと笑みを浮かべて魔理沙をみる。

そして、

霊夢「ならどつちが先に気を感じれるようになるか勝負ね」

魔理沙「ああ、望むところだ!!」

魔理沙はやる気満々になった。

悟空（霊夢のやつ、あんな簡単に魔理沙にやる気を出させるとわな）

悟空「じゃあ、お前達明日から気を感じれるようになる修行すつからな」

と悟空は霊夢と魔理沙に言い放つ。

そして、魔理沙が

魔理沙「分かったぜ!!」

と言ひ博麗神社を出て帰ろうとした。  
その時、

霊夢「ちよつと待って！」

と急に霊夢が言い出す。

悟空「どうしたんだ霊夢？」

魔理沙も再び霊夢の所に戻る。

霊夢「今から修行しない？」

なんと、修行嫌いだった霊夢が今すぐ修行しないと叫び出したのだ！

魔理沙「今からだって！」

魔理沙も驚くそれもそのはず、先程、悟空と組み手をして2人ともかなりの体力を消耗しているのである。

そんな状態で修行をしようと言うのだから、流石の悟空も

悟空「霊夢、おめえはさつき闘った時、弾幕を使いまくってたじゃねえか、そんな状態で修行しても逆効果だ！」

と霊夢に言う悟空

霊夢「でも、気を感じる修行つてのは、多分体を動かしたりするんじゃないやなくて精神を集中させる修行でしょ？それじゃあ体力なんて関係ないじゃない」

と悟空に言う霊夢

だが悟空は、

悟空「確かにその通りだ、だが肉体が疲れた状態てま精神修行をしても上手い事修行になんねえんだ。その辺は、分かってくれ霊夢」

と最後に霊夢の名前を強く言う悟空

そんな、真剣な悟空に

流石の霊夢も、

霊夢「分かったわ、悟空わがままいってごめんなさい」

と言う。

悟空も霊夢が分かってくれてホツとする。

その時、魔理沙が

魔理沙「霊夢なんでお前はそんなに早く修行をしたいんだ？」

と疑問を投げかける魔理沙

すると、霊夢は魔理沙の顔を見て、

霊夢「紅魔館での異変よ、あれは、私や魔理沙だけの力じゃ手に負えないほどの異変だった。もし、悟空がいなかったらおそろく、今頃はあの破壊の能力を持ったフランに幻想郷は破壊され尽くしていたわ。だから決めたのよ、今度もしました、とんでもない奴

が出て来たら、この幻想郷を私自身が悟空に頼らずに守ってみせるってね」  
と霊夢が魔理沙にいった。

すると、それを聞いていた悟空が、

悟空「おめえは本当にこの幻想郷が好きなんだな!!」  
という。

霊夢は、

霊夢「もちろん、幻想郷は私の故郷だから」

悟空「そうか、なら明日からしっかりと鍛えていくからな!!」  
と悟空は笑顔で霊夢にいう。

霊夢「ええ、そうして頂戴!」

と霊夢も笑顔で悟空に返す。

魔理沙「まあ、とりあえず明日から修行頑張るぜ!!」  
と霊夢にいい魔理沙は帰っていった。

そして、時間はあつという間にたち次の日になった。

霊夢「よし、悟空、今日から本格的に修行ね」

魔理沙「なんだか、ワクワクしてきたぜ!」

もう既に魔理沙も来ており2人はやる気満々だった。

悟空「よし、修行すつぞ!!」

と悟空は2人にいう。

魔理沙「で、悟空一体どんな感じでしたらいいんだ？」

悟空「オラの真似をしてくれ」

といい悟空は目を瞑って坐禅をとる。

魔理沙「そんなんでいいのか？」

と魔理沙は少し疑問に思う

悟空「ああ、」

と悟空はいい坐禅を終える。

悟空「よし、まあ、こんな感じだぞ」

と悟空はいう。

魔理沙「よくし、やってやる」

と魔理沙はいつて坐禅をとる。

それに続いて霊夢も坐禅をとる。

く10分後く

魔理沙「う、うう、ううう」

魔理沙はもう限界が近づいてきた。

悟空「魔理沙、集中力が落ちて気が乱れて来てるぞ！」

と魔理沙を注意する悟空

そして、

魔理沙「はああ〜〜」

と坐禅をとく魔理沙

悟空「なにやっつてんだ魔理沙？」

と悟空は、魔理沙にいう。

魔理沙「あんな態勢ずつとキープしてられないぜ」

と魔理沙は寝転がりながらいう。

悟空「魔理沙、霊夢を見てみる」

と霊夢の方を指差す悟空

すると、そこには凄い集中力の霊夢がいた。

魔理沙「霊夢の奴、あんなに頑張ってるのか。よし、私もやっつてやるぜ!!」

と霊夢を見て再び坐禅をとる魔理沙

そして、その修行は数ヶ月続いた。

## 春雪異変編

### 春の雪 第19話

霊夢と魔理沙が悟空に修行をしてもらい数ヶ月がたった。

霊夢と魔理沙は悟空の修行あってついに気を感じれるようになった。

悟空「よし、お前達、だいぶ気を感じれるようになったな」

と霊夢と魔理沙にいう悟空

霊夢・魔理沙「まあね(な)」

とちよつと誇らしげにいう2人。

霊夢「これで、また新しい修行をつけてもらえるのかしら？」

と悟空に聞く霊夢

悟空「ああ」

と悟空は霊夢に言葉を返す。

魔理沙「一体、次はどんな修行をするんだ？」

と悟空に聞く魔理沙

悟空「次の修行はだな…」



と悟空が次はどんな修行をしていくのか言おうとした時  
空から雪が降って来た。

悟空「あれ、雪か？」

と疑問を持つ悟空、それもそのはず今はもう4月に入り春なのだ。そんな季節に雪が降るはずない。

霊夢「こんな季節に雪なんておかしいわね」

と霊夢は空を見上げながらいう。すると、魔理沙が

魔理沙「きつと異変だぜ！」

といった。

その言葉に霊夢は、

霊夢「ええ、きつとそうね。誰かが春を奪ったって所かしら」

悟空「春を奪うって本当に幻想郷はすごいところだな」

と悟空は関心する。

霊夢「関心してる場合じゃないわ。すぐに、異変解決に行くわよ」

悟空「わかった」

魔理沙「わかったぜ！霊夢」

と2人は霊夢に返事した。

霊夢「さてと、異変の主犯を探しますか」

と霊夢がいう。

魔理沙「こういう時こそ、今まで修行してきた気を読み取る修行が役に立つな」

そして、霊夢と魔理沙はこの異変の主犯の気を探り始める。

そして、

霊夢・魔理沙「見つけた!!」

と言いつつ2人

悟空（こいつら本当にここまでの確に気を感じとれるようになってはな）

と2人を関心する悟空。

霊夢「でも、この気は、どこか遠くのような変な所から感じるわね」

魔理沙「ああ、確かにそんな感じだぜ！一体、この気の持ち主はどんな場所にいるんだぜ」

悟空「おそらくだけんど、何処か別の空間じゃねえか」

魔理沙「別の空間？」

と悟空にいう魔理沙

悟空「ああ、相手の気が少し不安定に感じる。おそらく、何処かに空間の穴が空いていてそこから春を奪って行ってんじゃねえか」

霊夢「なるほどね」

と霊夢は話を理解する

魔理沙「私はイマイチ良く分からないんだが」

と魔理沙がいう。

霊夢「まあ、簡単にいうと、別の空間にいる誰かが空間に穴を開けてそこから春を吸収していつてるのよ」

魔理沙「そういうことか」

と魔理沙も納得する。

悟空「よし、お前達、取り敢えずこの異変を解決しに行くぞ」

と悟空がいい3人は異変の主犯の所へ向かった。

霊夢「はあ、春だつてのに本当に寒いわね。全く」

と飛んでる時に急にイライラし始める霊夢

それもそのはず、霊夢は寒いのが大の苦手で寒さには弱いのだ。

魔理沙「まあまあ、霊夢この異変の主犯を倒すまでの辛抱だ」

と魔理沙は霊夢の機嫌を取ろうと頑張る。

霊夢「全く、この異変の主犯を見つけたらすぐに私が倒してやるんだから」

魔理沙（これ霊夢の奴かなり切れてるな、全く今回の異変の主犯の奴はなんてことを

するんだぜ！霊夢が怒るとどれほど面倒くさいのか知らないのかよ」

と魔理沙は心の中でブツブツ言いつついた。

そんな、2人を見て悟空が、

悟空「おい、2人共、何イライラしてんだよ」

という。

しかし、2人は、

霊夢・魔理沙「別に」

と完全に内心キレている状態であつた。

悟空「おめえ達そんな状態じゃこの異変の主犯には勝てないぞ！」

という悟空

魔理沙「勝てないって、さつきから気は感じるけどそんなに大したことない気だぜ？」

悟空「確かに、気はあんまり大きく感じねえ、でも、よく考えて見ろこの気は空間の穴越しに気を感じているんだ！ここでも、これだけの力を感じるといふ事は、実際はこの気の持ち主はとんでもねえ気の持ち主だぞ!!」

と2人にいう悟空

その悟空の言葉を聞き2人はイライラするのをやめ真剣になつた。

果たして、春を取り戻すことが出来るのだろうか。

そして、この異変の主犯はなぜ春を奪ったのだろうか

## 長い階段 第20話

そして、しばらく飛んだ所に変な穴を見つけた。

悟空「あの穴の向こうに今回の異変の主犯がいるはずだぞ」

霊夢「ええ、そう見たいね」

魔理沙「よーし、気合い入れてくぜ!!」

と言い穴に近寄る2人

そして、空間の穴を見る。

霊夢「一体、どこと繋がってるのかしら?」

悟空「さあな」

魔理沙「例えどこと繋がって誰がいようと私達なら大丈夫だぜ!!」

と言い魔理沙は空間の穴に入る。

それに続いて悟空と霊夢も、

悟空「よし、いくぞ!!」

霊夢「そうね」

と言い空間の穴に入る。

空間の穴の中は案外短くすぐに謎の場所についた。

霊夢「ここは？」

と言いながら辺りを見渡す霊夢

すると、そこにはなんと永遠にあるのではないかと思うほど長く続く階段があった。

魔理沙「うわー、長いな〜」

と魔理沙も階段を見ていう。

悟空「でも、この先に気を感じっぞ」

という。

霊夢「まさか、この階段を上っていくの？」

と霊夢はめんどくさそうな顔をする。

悟空「当たり前えだろ、この先に異変の主犯がいんだからよ。しかも、その近くに主

犯ほどじゃねえがかなりの気を持った奴もいるみたいだしな」

と悟空は霊夢を見ながらいう。

魔理沙「まあ、取り敢えず階段を上らないことには始まらないしな」

と魔理沙はいう。

霊夢「仕方ない、上るわよ」

とため息をつきながら霊夢はいう。

悟空「霊夢そんなにめんどくさがらなくても、これを修行だと思えばいいんだ!!」

霊夢「これが修行?」

と悟空に聞く霊夢

悟空「そうだ、こんなに長え階段なら足腰を鍛える修行になる。昔、オラも階段じゃねえけどよ、長い塔や100万キロある道を歩いたもんだ」

と悟空がいう。

霊夢「なるほどね」

霊夢（100万キロって……）

魔理沙「まあ、取り敢えず早く行こうぜ。こうしてる間にも幻想郷の春は奪われていつてるんだぜ」

霊夢「それもそうね。それじゃあ行きましようか」

悟空「おう」

といい3人は高速で階段を上り始めた。

しかし、

　　↓10分後↓

霊夢「はあ、はあ、はあ、はあ、もう疲れたわ」

魔理沙「はあ、はあ、はあ、はあ、そうだぜ」



と2人はもう息を切らした。

悟空は一度止まり

悟空「なんだおめえら、もうつかれたんか？」

と2人にいう。

霊夢「当たり前でしょ、あんた見たいなスピードについていたら誰だってバテるわよ」

魔理沙「そうだけ悟空、こういうのわな、ゆつくりと体力を温存しながら行くのがいいんだぜ」

と2人は悟空に答える。

悟空「でもよおく、こうしてる間にも春が奪われてんだぞ」

と悟空は2人にいう。

霊夢「そんなん、後で一気に奪い返せばいいのよ。今体力を使ったら主犯と闘う時に持たないわ」

と悟空に反論する霊夢

悟空「そんなもんなんか？」

と悟空はいい少し休憩をとった。

悟空（それにしても、こいつら力はあるのに体力がねえんだな）

と心で呟く悟空

く5分後く

悟空「よし、これだけ休憩すりや、もう動けるだろ」

霊夢「ええ、もう回復したわ」

魔理沙「私もだぜ」

と2人を確認する悟空

そして、

悟空「じゃあ、行くぞ！」

といって再び走って上ろうとする悟空

すると、霊夢が、

霊夢「ちよつと待ちなさい！」

と悟空を止める。

悟空「なんだ霊夢？」

と悟空は霊夢の方を振り向く

霊夢「あんたねえ、せっかく回復したのにまた、飛ばしたら同じでしょ」

魔理沙「そうだぜ」

2人はすごい剣幕をだしながらいう。

悟空も仕方なく、

悟空「わかったよ」

と答えた。

そして、3人は歩きながら上っていく。

そして、5分、10分、15分、20分と時間が過ぎた。

霊夢「まだ着かないの!!」

と霊夢がいいだす。

悟空「仕方ねえだろ、ゆっくりいってんだからさ」

霊夢「それでも、時間がかかり過ぎよ!」

と霊夢はイライラしてきた。

その時、魔理沙が、

魔理沙「な、なあ霊夢、今更なんだけどさ」

といいだす。

霊夢「何よ!魔理沙」

と魔理沙の方を振り向く霊夢

魔理沙「こんな事いうのは、遅すぎるかも知れないけど飛んだら速いんじゃないか」

と魔理沙はいう。

その瞬間、あたりは一瞬固まる。

そして、霊夢が

霊夢「どうして、それを早く言わないのよ」

と魔理沙を睨む霊夢

悟空「そっか、その手があったか」

と悟空も改めて思う。

霊夢「ああ、もう、もつと早く気づきなさいよね!!」

と魔理沙にいう霊夢

魔理沙「す、すまん霊夢」

魔理沙（あれ、なんで私謝ってるんだ？）

といい悟空と霊夢は舞空術をつかい魔理沙は箒に乗り主犯の元へ向かう。

悟空（そういや、瞬間移動もあったけど、今の霊夢に言ったらキレるだろうし、まあ  
いつか）

く3分後く

3人はすぐに階段を上ることができた。

霊夢「ふう、やっと着いたわね」

魔理沙「ああ、そうだな」

という2人

悟空「ああ、そうだな」

霊夢「よーし、このまま異変の主犯を倒しに行くわよ」

と霊夢は気合いを込めて行った時、

??? 「生きている人間よ、よくぞここまできたな」

と上から声がした。

3人は声のした方へ振り向く。そこには、白色の髪の毛でさらに、周りに白いフワフワしたような物を纏わしている女性がいた。

果たして、彼女は何者なのだろうか

## 魔理沙 v s 妖夢 第 2 1 話

悟空は女性をみて、

悟空「誰だおめえ」

という。

??? 「私の名前は魂魄妖夢、半人半霊よ」

悟空「半人半霊？」

霊夢「要するに、半分は人で半分は幽霊ってことね」

妖夢「ええ、その通りよ」

悟空「半分幽霊っておめえ死んでんのか生きてんのかよくわかんねえ奴だな」と会話をかわす。

霊夢「まあ、いいわ取り敢えずあんたは異変解決を邪魔をするのかしら？」

妖夢「ええ、勿論」

霊夢「そう、なら話が早い、あなたを退治させてもらおうわ」

そして、霊夢が構える。

その時、悟空と魔理沙が、

悟空・魔理沙「ちよつと待て、霊夢」  
という。

魔理沙「お前だけが闘おうなんてずるいぜ霊夢」

悟空「そうだぞ」

霊夢「いいじゃない別に」

魔理沙「いいや、良くない。ここは、ジャンケンだ！」

と魔理沙がいう。

霊夢「仕方ないわね」

といい3人はジャンケンをすることにした。

悟空・霊夢・魔理沙「最初はグー、ジャンケンポン！」

霊夢はグーを出し魔理沙はチョキを出し悟空はパーを出すお約束のあいこの展開になった。

悟空・霊夢・魔理沙「あいこでしょ！」

今度は、霊夢はパーを出し魔理沙はグーを出し悟空はチョキを出した。

悟空・霊夢・魔理沙「あいこでしょ！」

その後もあいこは続き

（10分後）

ついに、霊夢と悟空はチョコキを出し魔理沙がグーを出して魔理沙がジャンケンに勝った。

魔理沙「やったぜ！私の勝ちだぜ！」

霊夢「チツ、まさか魔理沙に負けるなんて」

悟空「まあ、運だから仕方ないぞ霊夢」

と、いい霊夢と悟空は少し下がる。

霊夢「負けるんじゃないわよ、魔理沙」

と霊夢は叫び気味にいう。

魔理沙「勿論だぜ！霊夢」

と、いい魔理沙は妖夢に対して構える。

妖夢「まさか、1人でかかってくるわね。しかも、ジャンケンで私を10分も待た

せるなんて、舐められたものね」

と妖夢は少し怒り気味になっていた。

魔理沙「わるいな、霊夢と悟空とは気が会いすぎてよくあいこになるんだぜ」

妖夢「まあ、いいわ。あなたを倒す」

と、いい妖夢は剣を構える。

魔理沙「お前、剣士なのか？」



妖夢「まあ、そんなところね」

といい魔理沙に剣を向ける妖夢

妖夢「それじゃあ、こつちから行かせてもらいます」

そして、魔理沙に斬りかかる妖夢

魔理沙「おっと」

といい妖夢の剣を躲す魔理沙

妖夢「へー、あれを避けるとは、人間にしてはやるじゃないか」

魔理沙「当たり前だぜ!!」

魔理沙（あ、危なかった後少し反応が遅れていたら真つ二つだったぜ）

霊夢「へえー、あいつスピードだけは、なかなかのものね」

悟空「ああ、だけどそれに反応した魔理沙もなかなかだぞ」

魔理沙（近距離戦じゃ不利だな）

と魔理沙は思い

妖夢と距離を取ろうとする。

しかし、

妖夢「おっと、距離を取ろうとしても無駄ですよ」

といい魔理沙が妖夢と距離を開けようとしても妖夢はすぐに追いつき斬りかかる。

魔理沙「チッ」

思わず舌打ちをする魔理沙

だが、妖夢が連続で魔理沙に斬りかかる。

だが、魔理沙は妖夢の動きに合わせて避けて行く。

妖夢「これも、躲しきるとわ」

魔理沙「当たり前だぜ！」

妖夢「なら、これならどうかしら？」

妖夢「転生剣」「円心流転斬」

その瞬間、妖夢から凄まじい連続攻撃が出される。

魔理沙「なに!？」

流石の魔理沙もその攻撃速度に焦る。

そして、ミリ単位で躲していく魔理沙

妖夢「なかなかやるわね」

と妖夢も魔理沙を感心する。

しかし、魔理沙は徐々に追い詰められていく。

魔理沙（このままじゃまずい）

妖夢「いまだ！」

その瞬間、妖夢は剣を横に払いのける。だが、魔理沙も意地で剣を受け止める。

妖夢「なに!?!」

驚く妖夢

そして、魔理沙は受け止めた剣をそのまま受け流し距離を取る。

そして、魔理沙はそのままミニ八卦炉を構える。

魔理沙「くらえ、マスタースパーク!!」

魔理沙はマスタースパークを放つ。

しかし、妖夢は剣を構えて

妖夢「こ、こ、こんなもの、こんなもの」

といい妖夢は剣でマスタースパークを斬ろうとする。

マスタースパークと妖夢の剣がお互い互角にぶつかりあう。

そして、

妖夢「はあはあはあ、今のは流石の私も危なかったわ」

なんと、妖夢はマスタースパークを斬ったのだ!

魔理沙「なんて奴だ! マスタースパークを斬りやがった」

悟空「なんて奴だ! マスタースパークを斬りやがった!」

「靈夢「こりゃ、とんでもない奴ね」

妖夢「私を舐めるんじゃないわよ」

そして、再び構え出す妖夢

そして、それに合わせて魔理沙も構え出す。

妖夢「はぁー!!」

まず、先手を取る妖夢。

妖夢はさつきよりも速く魔理沙に近づく

魔理沙「なんて、速さだ！」

だが、魔理沙は先程、妖夢の攻撃を避けた時、妖夢の攻撃パターンをしつかりと観察していたので、しつかりと攻撃を躲していき、もう、一度距離をとり遠距離攻撃をする魔理沙。

お互い互角のバトルを繰り広げていく。

妖夢が近づき剣で魔理沙を斬ろうとすれば魔理沙は妖夢の攻撃を躲して距離をとり遠距離攻撃をする。

果たして、近距離戦を得意とする妖夢と遠距離戦を得意とする魔理沙  
果たしてこの戦いどちらが勝利を手にするのだろうか。

# 妖夢のスピードを攻略せよ！魔理沙の作戦！！

## 第22話

魔理沙と妖夢の闘いが始まり約10分がたった。

魔理沙「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

妖夢「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

2人の体力は限界が近づいていた。

妖夢「まさか、人間がここまでやるとわね」

魔理沙「ははは、人間を舐めるなよ」

と闘いの間に会話を始める2人

妖夢「お互い体力は限界が近い。一気に決めるわよ!!」

といい妖夢は再び剣を構える。

魔理沙「望むところだぜ!!」

といい魔理沙もミニ八卦炉を構える。

そして、魔理沙は下を向き

魔理沙（しかし、どうしたらいいんだ、近距離じゃ奴には勝てない。かといって、遠

距離からの攻撃も剣で弾かれちゃう）

と魔理沙は心の中で考えていると、

妖夢「この状況で考え事とは、余裕ね」

と妖夢がいった。

魔理沙はすぐに妖夢の方向く。

すると、そこには目の前で剣で斬りかかる妖夢がそこまで来ていた。

魔理沙「まずい!!」

と、いきなり妖夢の攻撃を躲す魔理沙。

魔理沙は、頬をかすめたがギリギリで避けることが出来た。

魔理沙は頬を手で触り血を出している事を確認した。

魔理沙「よくも私の顔に傷を付けやがったな」

と、魔理沙は妖夢を睨む。

妖夢「そちらが、考え事をしており余裕そうでしたので斬らせてもらおうと思いま  
して」

と、妖夢も魔理沙を睨みかえす。

霊夢「魔理沙の奴何手こずってるのよ、早く決めなさいよね」

悟空「そういうなよ、霊夢相手もかなり強えしな」

霊夢「それでも、さっきの攻撃は危なすぎよ!!」

悟空「魔理沙だつて作戦を考えたんだよ」

霊夢「作戦？」

悟空「ああ、そうだ。このまま闘いが続いてもお互いに体力を使い果たして引き分けて終わるだけ。だから、魔理沙は妖夢に対するトドメの一撃を考えてんだと思うぞ」

霊夢「なるほど、作戦か、確かにあの妖夢つて奴、魔理沙がいくら遠距離から攻撃をしても全部攻撃を剣で弾いてるわね」

魔理沙（あいつを倒すには、一体どうしたら）

妖夢「あら、また考え事？」

「いい今度は後ろに回り込み攻撃を仕掛ける妖夢」

魔理沙にとっては完全な死角だった。

妖夢（よし、決まった）

と妖夢は確信をした。

しかし、魔理沙は、

魔理沙「おっと」

「いい後ろを振り返ることすらなく妖夢の攻撃を躲す。」

妖夢「なに!!？」

妖夢は驚く

妖夢（今のは、完全に死角だったはず、一体、どうやって躲したの）

魔理沙（まさか、後ろに回り込んで攻撃してくるとわな。でも、あいつ私が後ろからの攻撃を躲して驚いてるみたいだな。……そうか、あいつは私が気を感じれる事を知らないんだ!!）

と魔理沙は何かを思いついたようだ。

魔理沙「おい、半人半霊!この鬨い私がもらったぜ!!」

と魔理沙は叫ぶ

妖夢「なに!？」

とその言葉に驚く妖夢

妖夢「さっきの攻撃をたまたま躲せたからって、いきになるなよ人間!!」

といい魔理沙に剣を向ける妖夢

すると、魔理沙が、

魔理沙「魔符「スターダストレヴアリエ」」

魔理沙は妖夢に多数の弾幕を放つ

妖夢「そんな物、全部斬り裂いてくれる!」

と妖夢は弾幕を斬ろうとする。

しかし、魔理沙の放った弾幕は妖夢に一発も当たることなく妖夢の回りに弾幕を撃つ



ている。

妖夢「何処に撃っている！」

と魔理沙の方を向く妖夢。

しかし、魔理沙が撃った弾幕のせいで周りに爆風がたち魔理沙の姿が見れない。

妖夢「なんだと!!」

と焦る妖夢

魔理沙「これで、お前は私が何処にいて、いつ攻撃してくるかわからないはずだ!!」

と妖夢にいう魔理沙

妖夢「考えたわね。しかし、この爆風じゃ貴方も私がどこにいるのか分からないん

じゃない?」

魔理沙「それは、どうかね」

魔理沙「恋符」「マスタースパーク」

と魔理沙は妖夢にマスタースパークを撃つ

魔理沙のマスタースパークは妖夢に一直線に飛んでゆく。

そして、妖夢の目の前にいく。

妖夢「何!?!」

突然、爆風の中からマスタースパークが飛んできて焦る妖夢

妖夢「くそ!!」

といい急いで剣で斬ろうとするが時すでに遅し。

妖夢にマスタースパークが直撃する。

そして、しばらくして爆風が晴れた。

そこには、マスタースパークをまともに食らい倒れている妖夢がいた。

魔理沙は妖夢に近寄る。

妖夢「う、うう、ううう」

なんと、妖夢は意識を保っていた!!

妖夢「一体、どうやって私に、こうげ、きをあ、てたの、かしら」

と妖夢は言葉が途切れながらも魔理沙に聞く

魔理沙「私達は気づつてのを感じとれるんだ!だから、あの爆風の中もお前の動きが

手に取るように分かるんだぜ!!」

と魔理沙に説明する。

妖夢「まさか、そんな、こと、が、できる、なんて、ね」

といい妖夢は気を失った。

霊夢「あんたにしては、随分と手こずつてたじゃない」

と霊夢が魔理沙に近づいていった。

魔理沙「まあな、こいつのスピードは本当に凄かった。あと少し遅かったらアウトつてシーンも何度かあったしな」

霊夢「ふうん」

と魔理沙にいう霊夢

悟空「おい、おめえ達話はその辺にしてもういくぞ！」  
と悟空がいい。

霊夢・魔理沙「わかった（ぜ）」

と2人は言葉を返した。

そして、悟空と霊夢と魔理沙は奥へ進んでいった。

そして、少し歩いた所に大きな桜の木があった。

悟空「なんだ？あのでっけえ木は？」

霊夢「桜の木かしら？」

魔理沙「桜の木だな」

といい桜の木に近寄る3人

すると、後ろから声が聞こえる。

???「ようこそ、冥界へ」

3人はすぐに後ろを振り返る

すると、そこには女性がいた。  
果たして彼女は何者だろうか、そして、この桜の木とは。

## 春を返せ！ 霊夢 V S 幽々子！！ 第23話

声のした方向をすぐに振り向く3人  
するとそこには、女性がいた。

??? 「どうも、こんにちは」

女性は笑みを浮かべながら3人に挨拶をする。

悟空「オツス」

悟空も軽く挨拶を返す。

すると、女性は悟空の方に目をやり

??? 「あら、元気の良い子ね♪」

と笑みを浮かべ楽しそうに笑う女性

すると、悟空は少し嫌な顔をした。

そして、悟空は女性に、

悟空「オラ、子供じゃねえぞ」

といった。

すると、女性は、

??? 「あらあら、ごめんなさい。うふふ」

と明らかに悟空を子供扱いしていた。

女性にとっては、悟空はただの霊夢と魔理沙の付き添いで来たただの子供だと思っ  
ているようだ。

そんな、会話をしていると横から霊夢が、

霊夢 「この子は、子供じゃないわ。私の師匠よ!!」

と威圧を込めて、女性を睨むようにいった。

??? 「貴方は博麗の巫女?」

霊夢 「ええ、そうよ」

??? 「ふふふ」

再び笑みを浮かべる女性

霊夢 「なにがおかしいのよ!!」

と霊夢は、女性に腹を立てていう。

??? 「だって、まさか、あの博麗の巫女がこんな子供の弟子だと思っておかしくってね」

霊夢 「あんた、ほんと人をイライラさせるのが上手い奴ね。」

そして、霊夢は少し黙って、

霊夢 「いいわ、貴方を退治してあげる!!!」

と一気に溜めた声を吐き出す勢いで言う霊夢

霊夢 「それに、この春が来ない理由もあんたのせいでしょう？」

??? 「ええ、そうよ」

霊夢 「なんで、春を奪ったの？」

と女性に聞く霊夢

??? 「それはね、後ろを見てみなさい」

そういつて、3人は後ろの桜の木のある方を振り向く。

??? 「その桜にわね、誰かは分からないけど封印されてるみたいなの、それで、その封印を解くにはその桜を咲かせる必要があるの、でも、その桜、西行妖は、放っておいても桜は咲かないのよ。だから、私が幻想郷中の春を奪って西行妖を咲かせようと思ったのよ♪」

と女性は説明する。

すると、霊夢が、

霊夢 「要するにあんたは、自分の好奇心の為だけにこの幻想郷の季節のバランスを悪くしたのね」

と怒りの混じった声で言う霊夢

??? 「ええ、そうよ。いいじゃない別に1回や2回春が来ない年があったって」

霊夢「何を言ってるの幻想郷にわね。春を待つてる妖怪や人が沢山いるの! 貴方一人のわがままの為に大切な春を奪わせる訳にはいかない! 今すぐ、貴方を退治させて貰うわ」

そして、戦闘態勢をとる霊夢

すると、後ろから悟空が、

悟空「霊夢、おめえあいつと闘うんか?」

と霊夢に聞く悟空

霊夢「勿論」

という。

悟空「でも、あいつの強さはかなりのもんだぞ?」

霊夢を心配する悟空

すると、霊夢が

霊夢「確かにあいつの強さは普通じゃないわ。でも、幻想郷の季節を自分だけの為におかしくしたあいつが許せない! それに、何よりこの闘いで、今の自分の強さを知りたいの悟空に気の読み方を教えてもらった今、私は、どれだけ上手く闘えるのか知りたいの! だから、悟空、お願いこの闘いは、私一人ですべて!」

と熱く語る霊夢



そんな霊夢を見て悟空は、

悟空「ああ、この闘いおめえに任せる。頑張れよ霊夢！」

と霊夢の心配をするのをやめ魔理沙と一緒に少し後ろの人にさがる悟空。

霊夢も再び闘いに備えて構え出す。

霊夢「そう言えばまだ名前を聞いていなかったわね？あんだ、名前なんていうの？」

???「私の名前は、西行寺幽々子、亡霊よ」

霊夢「そう、幽々子っていうのね。私は、もう知つてると思うけど博麗霊夢、博麗の

巫女よ」

闘いの前に自己紹介をする2人。

幽々子「博麗の巫女、人間の中ではトップに立つ存在。いいわ、私が倒してあげる」

幽々子は、構えだす。

そして、幽々子がまず手始めに軽い弾幕をいくつか霊夢に向かって放つ。

霊夢は、勿論そんな弾幕簡単に躲して行く。

幽々子「やつぱり、この程度じゃ躲されちゃうか」

霊夢「どうしたの？貴方の力はそんなもの？」

幽々子「いいえ、まだまだこれからよ」

どうやら、これからが幽々子の本気の闘いのようにだ。

幽々子は、霊夢を睨みつける。

それに合わせて霊夢も幽々子に睨み返す。

お互いもの凄い気迫での睨みつけ合う。

そして、

霊夢「はぁぁー!」

霊夢が弾幕を放つ。

その弾幕は、スピードも密度もかなりのものだった。

だが、その弾幕をなんと幽々子はいとも簡単に通り抜ける。

そして、

幽々子「亡郷」「亡我郷」「さまよえる魂」

幽々子は、スペルカードを使い先程放った霊夢の弾幕よりも遥かに速さも密度も超え

る弾幕を放つ。

幽々子「これが、人間に避けられるかしら?」

幽々子は、霊夢を見ていう。

しかし、霊夢は、

霊夢「ふん」

と鼻で笑いながら

細かな隙間を見つけていき弾幕を躲して行く。

幽々子「なに!？」

流石の幽々子も霊夢も弾幕を避けていく軽やかさに驚く

霊夢「どうかしら？避けきったわよ」

幽々子「まさか、人間があれを避けきるなんて、流石、博麗の巫女ね」

と霊夢を褒める幽々子

霊夢「あら、あんなの私にとつちや楽勝よ」

と霊夢もいきり立つ。

幽々子「だけど、もうお終いよ」

幽々子「はあ！」

幽々子は、能力らしき物を放つ。

霊夢は、幽々子の能力をギリギリで躲す。

霊夢「今の能力は？」

突然放たれた幽々子の能力、霊夢はギリギリで幽々子の能力を躲したが果たして幽々子の能力は、なんなのか？

## 死を操る幽々子 第24話

霊夢「今の能力は？」

突然、幽々子が放った能力に驚く霊夢。

幽々子の放った能力はフランの破壊の能力に勝るとも劣らない力をもっていた。

霊夢「なんて能力なの!! 当たったら洒落にならないわね」

と流石の霊夢も焦りを隠しきれない。

幽々子「よく、避けたわね」

クスリと笑いながら言う幽々子

霊夢「当たり前でしょ、あれぐらいよ躲せてあたり前よ」

と霊夢は強気な言葉で返す。

でも、勿論 霊夢にとって余裕などなくさっきの攻撃も結構ギリギリであった。

魔理沙「おいおいおい、霊夢の奴ヤバいんじやねえか?!」

昔ながらの親友の魔理沙は、霊夢に余裕が無いことは、すぐに分かった。

悟空「でえじょうぶだ! 霊夢がああ程度でやられるわけねえ」

そんな魔理沙の不安を消し去るように悟空が魔理沙に言った。

魔理沙は、悟空の方に顔を向き

不安げでどこか焦りげな表情で、

魔理沙「でも」

と小声になりながら魔理沙は言う。

そんな、不安そうな魔理沙を見て悟空は魔理沙に言った。

悟空「霊夢なら でえじょうぶだ。それは、おめえが一番わかってんだろ？」

と優しい声で呟くようにいう。

すると、魔理沙は、悟空の目をしっかりと見て、

魔理沙「そうだな!!」

と一言 悟空に言葉を返した。

霊夢「さつきの能力は、一帯なんなの？」

霊夢は、幽々子に問いかける。

幽々子「死を操る能力よ」

幽々子は、霊夢の問いかけに答える。

霊夢「何ですって!!」

霊夢は、驚いた。

悟空「なんて奴だ！」

悟空も幽々子の言葉を聞き驚きを隠せない。

魔理沙「おい悟空 今 あいつなんて言っただけだ？」

魔理沙は、距離があつたため上手く幽々子の声を聞き取れなかつたようだ。

魔理沙は、悟空に問いかける。

悟空「あいつは、死を操れるみてえだ」

悟空は、少し驚きながらも魔理沙に答える。

それを聞いた魔理沙は、

魔理沙「なんだって!!死を操る!!そんなの一発 当たつたらアウトじゃないか!」

魔理沙は、力がこもつた声で悟空に言う。

魔理沙「もし、あれが霊夢に当たつたら……」

魔理沙は、下を向きながら言った。

そんな魔理沙を見て悟空は、

悟空「でえじょうぶ、きつと霊夢なら……」

飽くまで悟空は、霊夢を信じているようだ。

だが、魔理沙は下を向き霊夢が心配のようだ。

悟空「魔理沙！おめえが霊夢を信じなくてどうすんだ!!おめえは、霊夢は、勝てねえ  
と思ってるのか？」

うじうじとした魔理沙に喝を入れる悟空

魔理沙も悟空の声が届いたらしく、再び顔を上げた。

魔理沙「そうだな！霊夢は負けない。霊夢は、今まで数多くの妖怪を倒してきたんだ  
！」

と悟空の一言で霊夢を信じ出した。

霊夢「死を操る能力か……」

霊夢は呆然となりながら呟く

霊夢「ふふっ」

しかし、霊夢は、少し笑い出した。

幽々子「あら？何 笑ってるのかしら？」

と霊夢の笑いを疑問に思う幽々子

霊夢「笑ってごめんなさいね。でも、私 嬉しくってこんなに強い奴と戦えてね」

霊夢は、悟空っぽいセリフを言う。

そして、次の瞬間

霊夢「はあ」

霊夢は、その瞬間 幽々子に近づきパンチを放つ。

幽々子は、すぐに霊夢の攻撃に反応して躲す。

幽々子（危ない！なんてスピードなの？油断してたとは、いえ ちよつと危なかったわ）

幽々子は、霊夢のスピードに驚いたようだ。

そんな幽々子に追い打ちをかけるように霊夢が連続でパンチとキックを撃つ。

だが、

幽々子「はあ!!」

なんと、幽々子は攻撃を躲しつつ弾幕を放った。

霊夢「うわー」

霊夢は、8メートルくらい吹き飛ばされた。

幽々子は、反撃とばかりに弾幕を放つ。

霊夢「くっ」

急いで体制を立て直す霊夢。

だが、体制を立て直した所で目の前から弾幕がきていた。



霊夢は、急いで弾幕を放ち相殺させる。

霊夢「はあ、はあ、はあ、はあ、今のは、危なかったわ」  
息を切らしながら言う霊夢

幽々子「よくあんな一瞬で相殺 出来たわね」

幽々子は、ふふふつと笑いながら言う。

そして、

幽々子「じゃあ、次いくわよ」

そう言つて、弾幕を放つ幽々子

霊夢は、急いで躲していくが先程 至近距離で受けた弾幕のダメージが大きく体が上  
手く動かない。

そして、

霊夢「うあー」

霊夢は、弾幕に当たってしまった。

そして、そのまま地面に頭から落ちていく霊夢

だが、霊夢は体のバランスをとり地面に着地した。

霊夢「はあ、はあ、はあ」

だが、ダメージを結構食らってしまったているようだ。

霊夢は、力を振り絞って幽々子の前まで飛ぶ。

幽々子「あら、まだ飛ぶ力が残っているのね。だけど、いくら貴方が私を倒そうとしても、私が死を操る能力がある限り貴方にほぼ勝ち目は無いわよ」

幽々子は、自身満々で言った。

だが、霊夢は、

霊夢「それは、どうかしら？ 私、貴方に勝つ方法を思いついたわよ？」

と幽々子に言った。

幽々子「そんなのハツタリでしょ？」

幽々子は、霊夢が言ったことはハツタリだと思い気にしなかった。

霊夢「ハツタリかどうかは試してみれば分かるわ」

そう言つて霊夢は、幽々子にパンチを仕掛けた。

果たして、霊夢が言ったことはハツタリなのか？

それとも、本当に死を操る幽々子を倒す方法を思いついたのか？

## 幽々子を破れ！ 霊夢の奥義 第25話

幽々子にパンチをする霊夢

しかし、体力が減ってしまっているせいで先程よりもスピードは遅い。

幽々子は、霊夢のパンチをいとも簡単に躲す。

霊夢「くっ」

だが、霊夢は諦めずひたすら幽々子にパンチを放つ。

霊夢「ダーダダダダダダ」

霊夢は、一心不乱に攻撃をしていく。

幽々子（さつきよりもスピードが落ちてる。やっぱり私を倒す方法なんてハツタリだったのかしら？）

そう幽々子は、思いながら霊夢にカウンターをする。

霊夢は、少しだけ吹き飛ばされたが何とか体制を立て直した。

魔理沙「おい、悟空!!!このままじゃ霊夢がやられちゃう助けに行こうぜ!!!」  
と焦りながら必死に魔理沙は悟空に言った。

しかし、悟空は焦っている魔理沙に対して冷静に返答した。

悟空「いや、これは霊夢が自分の成長などを確かめる為の戦いだ!たとえ、今 霊夢を助けに行ったところで霊夢は、オラ達の助けはいらねえって言うとおもうぞ」

魔理沙「でも、このままじゃ霊夢が……」

魔理沙は、悟空に反発する。

魔理沙は、それだけ親友の霊夢が大事なのである。

悟空「おい、魔理沙。よく考えてみる!霊夢がただヤケクソで戦ってるだけだと思っ  
か?」

悟空は、魔理沙に言った。

魔理沙「どう言うことだ?」

魔理沙は、悟空の言葉の意味がイマイチ分からなかった。

魔理沙「どう見ても、霊夢が押されているぞ」

魔理沙は、霊夢の方を向き答えた。

悟空「確かに今は、押されている」

魔理沙「今は??」

魔理沙は、悟空の 今 と言う言葉に反応した。

悟空「ああ、そうだ!」

魔理沙「何言つてんだよ！悟空!!どう見ても霊夢が逆転しそうな要素はどこにも無いぜ！一帯、何を根拠に？」

魔理沙は、焦りながらも悟空に聞いた。

悟空「根拠なんてねえさ。ただ霊夢には、作戦があるんだと思っぞ！」

魔理沙「作戦？そう言えばさつき霊夢があいつを倒す方法を思いついたとか言つてたけどよ？本当に作戦なんてあんのか？」

悟空「ああ、ある。その証拠に霊夢は、幽々子に急に攻撃した。まるで、何かを幽々子にしてもらおうと思つてゐてえにな！」

魔理沙は、手を顎に当てて考え出した。

魔理沙「何かつて、……………まさか!!!」

魔理沙は、何か閃いたようだ。

魔理沙「でも、一帯なんで？」

悟空「さあな、それはオラにもわかんねえ。だから、今は取り敢えず霊夢を応援すつぞ!!」

そして、悟空と魔理沙は、再び霊夢の方を向いた。

霊夢「はあ、はあ、はあ」

霊夢は、息を切らしていた。

幽々子「一带、何度同じ事を繰り返すのかしら？」

幽々子は、何度も何度も攻撃をしてくる霊夢に少し飽きを感じてきた。

幽々子「もう飽きたからもうそろそろ終わらせるわね」

そう言つて、幽々子は霊夢に弾幕を放った。

霊夢は、残った体力を振り絞つて何とか弾幕を躲して行く。

幽々子「いい加減に諦めたらどうかしら？」

幽々子は、逃げる霊夢を見て少しイライラしてきた。

霊夢（早く、早く、アレをして来なさい）

霊夢は、悟空の言う通り何かを狙っているようだ。

幽々子「霊夢ちゃん、私ねもう飽きたのそっちが逃げてばかりだったらもう終わら

せるわね♪」

幽々子は、微笑みながら霊夢に告げた。

そして、

幽々子「はあああ!!!!」

幽々子は、死の能力を霊夢に放った。

しかし、その瞬間

霊夢（来た!!!）

霊夢は、そう思い死の能力に自ら全速力で近づいていった。

魔理沙「なに!!？」

悟空「霊夢、一帯あいつは……」

流石の悟空達もその予期せぬ霊夢の行動に驚きを隠せない。

幽々子「何？やつと諦めたのかしら??フッフ」

幽々子は、完全に勝ちを確信した。

霊夢は、そのまま死の能力に突進しようとする。（勿論、当たったら死ぬ）  
そして、死の能力に当たる1メートル手前まで来た。

魔理沙「もう、ダメだ！」

魔理沙は、目を瞑って霊夢を見ないようにする。

その時、

霊夢「夢想天生!!!」

なんと霊夢は、夢想天生を使った。

そして、そのまま死の能力を何も無いように通り越して行く。

そして、そのまま幽々子の目の前に行く。

幽々子「何!!?」

流石の幽々子も予想外過ぎて驚きを隠すことが出来ない。

霊夢「驚いてる余裕なんてあるのかしら?」

幽々子「何!?!」

霊夢は、スペルカードを構える。

霊夢「流石のあなたもこの距離なら躲せないでしょ」

幽々子「しまった!!」

霊夢「霊符「夢想封印 集」」

霊夢は、幽々子に超至近距離で夢想封印を放った。

しかも、その夢想封印は、今までの夢想封印とは違い霊夢の夢想封印のエネルギーが

集まって出来ていた。

幽々子「ぐわあぁー!!!」

幽々子は、そのまま夢想封印 集に飲み込まれ吹き飛ばされた。



そして、少しして霊夢は地面に降りた。

そして、悟空と魔理沙の方を向き一言

霊夢「勝ったわよ」

と告げた。

悟空「霊夢、おめえやつぱり凄えな！まさか、あそこで夢想天生を使うとわな」

霊夢「誰でもトドメを刺す瞬間が一番 油断するからね。私は、ただそこを狙っただけよ」

魔理沙「よくわかんねえけど、取り上げず凄かったぜ霊夢」

霊夢「ふふっ、ありがと」

霊夢は、少し照れくさそうに言った。

## 帰ってきた春 第26話

見事 幽々子を倒した霊夢

魔理沙 「霊夢やっぱりお前は、凄いぜ!!」

魔理沙は、興奮気味にいった。

霊夢 「ありがとうね」

霊夢は、少し微笑む。

そして、そのままどこかに歩を進ませる。

魔理沙 「どこに行くんだ?」

急に歩き出した霊夢に尋ねる。

霊夢は、魔理沙の方を振り向き

霊夢 「あいつの所よ」

と言いながら指で霊夢が場所を示した。

魔理沙は、霊夢の指先の方向を向いた。

そこには、瀕死状態の幽々子が倒れていた。

霊夢は、そのまま幽々子に近寄っていった。

悟空と魔理沙も霊夢について行く。

幽々子「う、ううう」

幽々子は、微かに声を出していた。

霊夢「まさか アレをあの距離から食らって意識があるなんて」

霊夢は、驚きの表情を見せながら言った。

幽々子「ふふふ、私って結構しぶといのよ」

幽々子は、倒れながら話す。

だか、すぐに幽々子は、口を閉じ

周りも少し無言の空間が広がる。

その時、

幽々子「私の負け。完敗よ」

幽々子は、自分の口から負けを認めた。

その言葉は幽々子にとってはとても重く

人間に負けた自分が今でも信じられないようだった。

霊夢「まあ、取り敢えず私の勝ちなのよね」

霊夢は、ホツとしたような顔で幽々子を見る。

幽々子「ええ、そうよ」

「霊夢「じゃあ、春は返してくれるわね」

幽々子「もちろん」

幽々子は、霊夢に微笑みながら言った。

「霊夢もそんな幽々子に微笑み返す。」

幽々子「ねえ、春を返す前に一つ聞きたいことがあるの?」

「霊夢「あら、何かしら?」

幽々子「さつき貴方は一帯どうやって死の能力を突破したの?あの状況から避けることは不可能だと思うのだけど?」

幽々子は、死の能力を突破された方法が分からなかったようだ。

「霊夢は、幽々子に説明をすることにした。」

「霊夢「実は、私周りから浮いた存在になれる技があるの」

幽々子「浮いた存在?」

幽々子は頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。

「霊夢「そう、技の名前は夢想天生。周りからの攻撃を一切受けない私の究極奥義よ」

「霊夢は簡単ながらも夢想天生の説明をした。」

幽々子「ふふふつ、驚いたわ。まさか、そんな技が使えるなんてね」

幽々子は自分は最初から勝ち目がなかったのだと思った。

幽々子「ふふつ、もう疲れちゃったわ」

幽々子はそう言いながら立ち上がった。

霊夢「あら、まだ立ち上がれるのね」

幽々子「まあね」

そして、幽々子は桜の木の所に近寄った。

すると、桜の木に吸収されていくエネルギーのようなものが消えた。

幽々子「春は返したわ」

幽々子はニツコリとし霊夢達に言った。

霊夢は、

霊夢「そう」

と一言だけ返した。

魔理沙「まあ、何はともあれこれで異変解決だな!!」

霊夢「えええ！」

悟空「ああ！」

霊夢の活躍で見事異変を解決した。

悟空「そんじゃ、もう帰るか」

幽々子「あら、もういつちやうの？」

幽々子は、悟空に言った。

幽々子「そう言えば君は一体なんだったの？霊夢ちゃんの師匠って聞いたけど？」

幽々子は、今更になって悟空のことを聞いた。

霊夢「そう言えば、まだ悟空のことを話してなかったわね」

悟空達説明中

幽々子「あらあら、悟空ちゃんてそんなに凄かったの!!」

幽々子は悟空のことを聞き少し驚いた。

幽々子「てことはやつぱり霊夢ちゃんより強い悟空ちゃん？」

悟空「まあな」

悟空はニヒヒツとした笑いを見せながら幽々子にいった。

幽々子「ふふふ、やつぱり最初から私に勝ち目なんてこれっぽっちも無かったのね」

霊夢「まあ、そういうことね」

霊夢「それじゃあ説明も終わったし私達帰るわね」

幽々子「そう？もう少しいればいいのに」

霊夢「そうはいかないわ。本当に春が帰ってきたか調べないといけないしね」

幽々子「それもそうね」

そう言つて霊夢達は冥界を後にした。

そして、少ししていつもの世界に戻つてきた。

魔理沙「やっと戻つてくれたぜ」

霊夢「そうね」

霊夢達が戻つて来た時には日はすっかり沈んでいた。

魔理沙「もう、こんな時間か」

魔理沙は月を見上げながら言った。

霊夢「そうね。早く帰つて夕食の用意をしないと」

魔理沙「ははは、お前は悟空の分も作らないといけないから大変だな」

霊夢「ほんとそれよ!!」

悟空「まあ、いいじゃねえか一人前の飯が増えたぐれえ」

霊夢「何処が一人前よ!!」

霊夢達は飛びながら話をしていた。

そして、少しして

魔理沙「じゃあ、私こっちだから。じゃあな」

霊夢「さよなら」

悟空「またな」

魔理沙と別れた。

霊夢「さてと、私達もさっさと博麗神社に帰りましょ」

悟空「そうだな」

そう言つて悟空と霊夢はスピードを上げた。

そして、間も無く博麗神社に着いた。

霊夢「やつと着いた」

そして、霊夢は辺りを見渡す。

するとそこには桜の木が花を付けていた。

霊夢「やつと幻想郷に春が来たわね」

霊夢は桜の木に近づき桜の花を見た。

その時、後ろから悟空が

悟空「おーい、どうした霊夢、早く飯にしようぜ」

と叫んだ。



靈夢「あいつは、やっぱり花より団子ね」

靈夢はクスツと微笑み悟空に

靈夢「わかったわー！」

と叫び返した。

そして、靈夢は悟空と共に博麗神社に入っていった。

## 萃夢想編

### 3日に1回の宴会 第27話

幻想郷には、春が無事に戻って来た。

しかし、それとは裏腹に幻想郷には、おかしな事が起こり始めていた。

霊夢「うーん、おかしいわね」

霊夢は、何か考え事をしていた。

悟空「どうしたんだ霊夢？」

霊夢「最近、宴会が多すぎるのよ」

霊夢は怒鳴るような声で悟空に言った。

悟空「宴会？ああ、最近いろんな奴らが集まってるあれか。そんなに多いか？」

霊夢「多いわよ！悟空は参加してないから知らないと思うけど3日に1回のペースでやってるのよ!!」

霊夢の言う通り悟空は宴会などの行事には興味がなくいつも博麗神社で寝ていたのであった。

悟空「でも、それって春が来るのが遅かったから一気にやってるんじゃないか？」

悟空がそういうと霊夢は少し考える動作を入れた。

霊夢「いいえ、これは恐らく誰かが意図的にやってるんじゃないかと私は思ってるの」

悟空「意図的に？」

悟空は首を傾げて霊夢に言う。

霊夢「ええ、そうよ」

霊夢は、怒りの表情をなくし真剣な表情に変わる。

悟空「宴会で何かあったのか？」

悟空も真剣な目つきになり霊夢に尋ねる。

霊夢「いいえ、直接何かあったわけじゃないわ。でも、宴会のとき何処からか怪しい気を持った奴が周りにいるような気がする」ときがあるの」

悟空「怪しい気？」

悟空は気と聞きなおさら真剣な眼差しで霊夢を見た。

霊夢「ええ、そうよ。ただ周りを見渡しても誰もいないの」

悟空「なるほどな」

悟空は手を顎に合わせて下を向き少し考える動作を入れる。

そして、少ししてから顔を上げて悟空が霊夢に

悟空「なあ、霊夢次の宴会ってこの博麗神社で3日後にやるんだったな」

次の宴会の場所と時間を確認した。

霊夢「そうだけど？」

霊夢は悟空にそうだと伝える。

すると悟空は、

悟空「そうか、なら次の宴会オラも参加するぞ!!」

悟空は、次の宴会に参加すると言い出した。

霊夢「え、いいの？」

急な悟空の参加に霊夢は驚いた。

それもそのはず、今までは、いくら悟空に宴会に参加しない？と聞いてもずっと断つてたからである。

霊夢は、この時改めて悟空の強い奴と戦いたいという思いを知った。

悟空「ああ、いいぞ！オラ前の異変の時一回もたたかわなかったらな体がウズウズしてて」

悟空は、小さな子供のようなキラキラ輝いた目になった。

霊夢「あのねえ、異変は遊びじゃないのよ！下手をすれば死んじゃ……まあ、あんななら大丈夫か」

と霊夢はやれやれとした感じで悟空に言った。

霊夢「まあ、悟空が一緒に調べてくれるんなら理由は何でもいいわ」

霊夢は、まったくと言わんばかりな目で悟空を見る。

すると、悟空はその霊夢の目に気づき慌てて霊夢に言った。

悟空「そんな目するなよ。確かにオウ強い奴と戦いたいと思ってる。でも、それよりも大きい理由もあつぞ！」

すると霊夢は、

霊夢「それよりも大きい理由？」

霊夢は、悟空の言った事をリピートして悟空に聞いた。

悟空「ああ、そうだ」

霊夢「一体何よ？」

霊夢は、悟空に聞く。

悟空「それはだな、最近おまえと魔理沙、2人共宴会が忙しくて最近 修行してねえだろ？だから、早くこの宴会つちゆう奴の騒ぎを解決しておめえ達に修行つけてやろうと思つてな！」

と悟空は言った。

霊夢「修行かく、そういうえば最近は、宴会ばかりで全然修行できてなかったわね」

霊夢もここ最近の事を振り返って考えた。

そう、あの春雪異変が解決してから霊夢と魔理沙は宴会のせいでもっと修行をしていなかったたのである。

霊夢「そうね。それじゃあ早くこの異変を解決して修行しましょうか！」

霊夢は、悟空に微笑みながら言った。

悟空「おう！」

悟空もニツコリとした笑顔で言葉を返した。

〈3日後〉

そして、あつという間に3日がたった。

霊夢は、昨日の夜から朝まで宴会の用意をしていた。

霊夢「あゝ、疲れた」

悟空「おめえ、なんかすんげえ疲れてんな」

霊夢「当たり前でしょ！昨日からずっと宴会の準備で大変だったんだから!!」

霊夢は、悟空に怒鳴りつけた。

悟空は、霊夢が準備をしている間ずっと寝てたのである。

悟空「悪いいゝ、手伝おうと思ってたんだけど眠くてさ」

悟空は、手で頭をかきながら言った。

霊夢「全くもう」

霊夢は、ふんつとといった表情で悟空に言った。

悟空「まあまあ、そう怒んなくて宴会の時バツチリ犯人を見つけてやつからさ」

悟空は、急いで霊夢の機嫌をとるように言った。

霊夢「わかったわ。その代わり絶対にこの異変の主犯をみつけなさいよ！」

霊夢は、力強くいった。

霊夢「それじゃあ私、宴会まで寝とくから宴会の30分前に起こしてね」

と言い寢室に霊夢が入っていった。

霊夢は、宴会の準備のせいであまり寝てなかったからである。

悟空は、

悟空「わかった」

とだけ言っておいた。

〈数時間後〉

悟空「霊夢、あと30分で宴会でだぞ」

悟空は、霊夢を起こした。

霊夢「あれ、もうそんな時間？」

と目をこすりながら起きる霊夢

霊夢と悟空は、博麗神社の外にでる。

もう、すでに何人かの妖怪などが集まり始めていた。

悟空「いよいよ、宴会だな」

霊夢「ええ、そうね」



## 謎の霧 第28話

霊夢が目を覚ましあと10分で宴会が始まろうとしていた。

悟空「なあ、霊夢 本当に変な気を感じたんか？」

悟空は、霊夢に確認をとる。

霊夢「ええ、間違いなく」

悟空「それならさ、何処から気を感じたりしたんだ？遠くの方か近くの方か？」

悟空は、謎の気について霊夢に質問を重ねていく。

霊夢「何処から気を感じたって言われると答えられないわ」

と霊夢は言った。

悟空は、霊夢の方を向き

えつ、という表現をして

悟空「どういう事だ？」

と霊夢に聞く。

霊夢は、顎に手をあてて

霊夢「いや、なんて言えばいいのか分からないんだけど 色んなところから気を感じ

るのよ」

となんともあやふやな事を言った。

悟空「色んなところから気を感じる？てことは、今回の異変は複数人で行われてるってことか？」

霊夢「いいえ、そうじゃないは、恐らく異変を起こしているのは1人だけよ」と霊夢は答えた。

悟空「じゃあ、なんで色んな所から気を感じるんだ？」

と悟空は質問する。

すると、霊夢は少しキレて

霊夢「ああもう それが分からないから困ってたんじゃない!!」

と声をあげて言った。

悟空と霊夢がそんな事を話しているうちに宴会の時間がやってきた。

すると、周りから変な気を感じ始めた。

悟空「あれ、どっからか気を感じるぞ」

と言い出した。

霊夢も悟空と同じように気を感じ

霊夢「そうよ！この気よ!!この気がよく宴会の時に感じられる変な気なの!!」

と言った。

「どうやら、霊夢の言う通りこの宴会は、誰かが意図的にやっている可能性が高いようだ。」

悟空「この気、一体何処から出てんだ？」

悟空は、そう言い周りを見渡す。

しかし、いくら周りを見渡そうとも周りには宴会で盛り上がっている者と霧ぐらいしか無かった。

悟空（別にめちやくちや怪しい奴もいないし怪しい物もねえなあ）

と悟空は思った。

悟空は、少し霊夢に質問をした。

悟空「なあ、霊夢　いつも宴会の時　この気を感じんだよな？」

霊夢は、

霊夢「ええ、そうよ。いつも宴会の時が来ると絶対にこの気を感じるわ」と言った。

悟空は、手を顎にあてて少し考える。

すると、急に悟空が

悟空「なあ、霊夢　他になんかねえのか？」

と聞いた。

霊夢「他になにか？」

霊夢は、悟空の言葉をリピートする。

悟空「ああ そうだ。この変な気 以外にいつも宴会の時に感じるものとかねえのか？」

霊夢は、少し考える。

そして、周りを見渡した。

霊夢「そうねえ、強いて言うならいつも霧があるわね」

霊夢が霧を見ながら言った。

悟空は、

悟空「霧？」

と言い周りの気を見渡す。

悟空（そう言えば、周り霧がいつぺえあるな）

悟空「もしかして!!」

悟空は、何か閃いたようだ。

悟空「おい、霊夢 異変の主犯の居場所が分かったぞ!!」

と霊夢の方を振り向き言った。

霊夢「え!!本当!!」

霊夢は悟空の言葉を聞き驚く。

悟空「ああ」

悟空は、相槌を返す。

霊夢「それじゃあ、早く異変の主犯の場所を教えなさい」

霊夢は、悟空に異変の主犯の場所を聞いた。

すると、悟空が予想もしない言葉を返した。

悟空「まあ、教えろって言っても実は近くにいたんだけどな!」

なんと、悟空いわく異変の主犯が近くにいるようだ。

霊夢「近くですって!?!」

霊夢は、驚きながら周りを見渡す。

しかし、宴会できた妖怪ぐらいしか周りにはいなかった。

霊夢「別に何もないじゃない?まさか、この宴会に来てる妖怪の中に主犯がいるなんていわないわよね?」

悟空「そうじゃねえよ、ほら、もつと周りを見てみろって!」

悟空が言う。

だが、いくら霊夢が周りを見渡そうとも特に怪しそうな者は誰もいなかった。

霊夢「いくら周りを見たって別にだれもいないわよ？」

悟空に訪ねる霊夢

悟空「そんな事ねえってほらおめえの目の前に」

と悟空は言った。

霊夢「目の前？」

と言い前を見る。

霊夢「別に霧 以外なにも見えな……まさか!!」

霊夢は、何かに気がついた。

霊夢「そうか、そう言うことね。悟空」

そう言い悟空の方を向く霊夢

悟空は、コクツと頷く。

霊夢「なるほど、この霧自体が犯人だったってことね。そりやきずかないわけだ」

霊夢は、ハアッと一息いれる。

そして、霊夢は大きな声で

霊夢「出て来なさい!!そこにいるのは分かってるわよ!!!」

と大声で叫んだ。

宴会に来ていた妖怪達は、一瞬霊夢の方を見たがすぐに宴会のムードが戻った。

そして、霊夢が叫んでから少しして周りに飛び散っている霧が集まり始めた。徐々にその霧は人の形を片どってゆく。

??? 「よく私の存在に気付いたわね」

その声とともに霧の塊から鬼が出てきた。

悟空 「おめえがこの異変の主犯か？」

悟空は、鬼（鬼と言っても女の子の姿をした鬼）を訪ねる。

??? 「ええ、そうよ！」

鬼は誤魔化すことなく正直に答えた。

霊夢 「なんでこんなに宴会をしたのよ？」

今度は霊夢が鬼を訪ねる。

鬼は、

??? 「だって、今年の春は来るのが遅かったじゃない」

と答えた。

霊夢 「確かにそうね。でも、流石にこれは宴会の量が多すぎずわ」

と鬼に言う霊夢

しかし、鬼は

??? 「別にいいじゃん。私は賑やかなのが好きなのよ」

と言った。



## 悟空 V S 萃香 第29話

霊夢「賑やかなのが好きですって？」

霊夢が鬼に言う。

??? 「そう。私はこうやって賑やかな宴会でお酒を飲むのが大好きなんだ」

そういいながら腰に付けていたひょうたんで酒を飲み出す。

??? 「ふう、やっぱり酒はいいね」

素晴らしい一人 美味しそうにお酒をのむ。

霊夢「あのねえ、あんた一人の楽しみの為にみんなに迷惑がかかってるのよ!!」

霊夢が鬼に文句を言う。

すると、鬼はお酒を飲むのをやめて、

??? 「迷惑だつて!!」

と霊夢を睨みながら言った。

霊夢「そう！迷惑なのよあんたのやってることわ」

霊夢は、鬼に追い打ちをかけるようにさらに文句を言う。

鬼も少しムツとして

??? 「それは、ただお前が迷惑なだけだろ!!よく周りを見てみるよ」

そう言つて周りに指さす鬼

霊夢は、鬼に言われた通り周りを見渡す。

そこには、宴会を楽しむ妖怪達がいた。

??? 「ほら、みんな楽しそうじゃないか！」

と霊夢に力強くいう。

しかし、霊夢も負けじと

霊夢 「これは、あんたがみんなにこうなるようにしたんでしょ!!!」

と言いつ返す。

勿論 霊夢の言ったことは正論で鬼は言いつ返す事が出来ない。

??? 「まあ、そうだけどさ」

といい下を向く鬼。

霊夢 「そうでしょ。じゃあ、早く宴会の騒ぎを終わらせなさい」

霊夢が鬼にいう。

鬼は少し考えた。

そして、

??? 「わかったよ」

といい鬼は宴会の騒ぎを終わらせる事を納得したようだ。  
しかし、

??? 「そのかわり私と戦いなさい!! 私に勝ったら宴会の騒ぎはこれでお終いよ」  
なんと、その条件をのむ為の条件を付けてきた。

しかも、その条件は力が最強の鬼に勝つたらという事である。

おそらく鬼は、絶対に自分は負けなれないと思いいこの条件を付けたのだろう。

??? 「ほらほらほら、どうする? 私と戦うかい?」

鬼は霊夢と悟空を挑発する。

すると、霊夢はフツと笑い

霊夢 「いいわ! その勝負のつてあげる!!」

といった。

勿論 戦闘力では鬼の方が上である。

??? 「まさか、本当にこの条件で乗ってくれるとわな流石 博麗の巫女だ」

と霊夢にいう鬼

すると、霊夢が

霊夢 「あら私がいつ戦うっていったのかしら?」

といい出した。

鬼も悟空も えっ となる。

??? 「だって今 お前勝負にのってやるって言ったじゃないか？」  
鬼が霊夢に訪ねる。

霊夢 「ええ、言ったわよ？」

霊夢は鬼に答える。

鬼は頭がこんがらがってきて

??? 「どういうことだ？」

と霊夢に聞いた。

霊夢 「私は確かに勝負にのるっていった。でも、私が戦うなんて一言も言ってないで  
しよ？」

そういうながら悟空の方を見る霊夢

??? 「おいおい、まさか私の相手がその子供だったのか？」

鬼は、悟空を見ながら言う。

悟空 (オラ子供じゃねえぞ)

霊夢 「ええ、そうよ。何か不満かしら？」

霊夢が鬼に言う。

??? 「当たり前だ！いくら鬼でもこんな子供を痛めつけるのは、嫌いなんだよ!!」

と鬼が言う。

すると、霊夢が

霊夢「あら、あなたこいつに勝てるとおもってるの？」

霊夢が鬼に言う。

鬼は少しムツとして、

???「当たり前だろ!!こんな子供に私が負ける訳無いだろ!!」

鬼は言い出す。

悟空も流石にその言葉を聞き少しイラツときた。

悟空「何言ってるんだ!オラとおめえだとオラの方が強いと思つぞ!」

悟空が鬼に言う。

すると、鬼も

???「何言ってるんだい?私が勝つに決まってるだろ!」

と言い2人は少し言い合いをした。

そして、少しして

???「わかった。なら勝負だ!」

と鬼は悟空に挑戦する事にした。

悟空「ああ、いいぜ!!」

悟空もその挑戦を受け入れる。

そして、鬼は戦闘体勢をとる。

そんな、鬼に悟空は、

悟空「ちよつと待て、ここで戦ったら宴会をしている妖怪に被害が出る。場所を変えるぞ!!」

といい悟空が飛び出す。

鬼もその意見には同感し場所を変える事にした。

鬼は悟空について行く。

ついでにその後ろから霊夢もついて行く。

そして、少しして平野についた。

悟空「この辺でいっか」

といい平野に降りる悟空

すると、少しして鬼と霊夢も降りてきた。

???「なるほど、ここをお前の痛い目に合う場所を選んだわけか」

とどこぞの王子のセリフを言う。

悟空「ああ、そうだ!ただ痛い目に合うのはおめえの方だ」

と悟空は言葉を返した。

??? 「ふくん、大した自身だね」

鬼はまだ悟空が強いとは思っていない。

悟空 「そういえばおめえの名前はなんだ？」

悟空が鬼に名前を聞く。

??? 「私の名前は伊吹萃香だ。お前の名前は？」

萃香も悟空の名前を聞く。

悟空 「オラは悟空だ！よろしくな!!」

いつもの挨拶をする。

萃香 「よろしくつて……今から始まるのは戦いだぞ」

そういいながら戦闘体勢に入る萃香

悟空もそれに合わせて戦闘体勢をとる。

萃香 「まずはそっちから来ていいよ」

萃香は悟空にハンデを与える。

勿論 悟空の強さを知らないからである。

悟空 「そうか、なら遠慮なく！」

そういいながら悟空は白い炎のような物を纏い萃香にパンチをくらわせようとす。

しかし、

萃香「よっと」

なんと萃香は悟空のパンチをいとも簡単に躲した。

悟空（なに!!）

悟空は、驚いき一旦距離をとる。

悟空（オラの攻撃を躲しやがった。なんて、スピードだ!）

悟空は、萃香に驚く。

しかし、それは萃香も全く同じで

萃香（あいつ何てスピードだ!ただの子供かと思つてたらとんでもない奴みたいだな）

と萃香も悟空に驚く。



## 萃香の力 第30話

悟空も萃香もお互い思っていた以上に強く驚いていた。

悟空「おめえ強えな。まさか、あのスピードの攻撃を躲すとわな!!」

萃香「それはお互いさまだ!まさか、あんなスピードで攻撃してくるとわな。悟空お前は普通の子供じゃないな!!」

と悟空に言った。

悟空は、頭をかき

悟空「オラ子供じゃねえぞ」

ともはやお決まりと言うべき言葉を言う。

萃香「子供じゃない?」

頭にクエスチョンマークを浮かべる萃香

だが、能天気なのか

萃香「まあ、なんでもいいや」

と萃香は言葉を流した。

萃香「それよりも、早く続きをやろうか!」

そうやって戦闘体勢をとる萃香

悟空も「おう」とだけ言葉を返して戦闘体勢をとる。

そして、お互いに睨み合い先にどちらが動くかを考える。

周りの草は風で揺れて緊張感が走る。

その時、

萃香「はあ!!」

先に萃香が攻める。

萃香の連続パンチが悟空を襲う。

悟空は萃香の呼吸に合わせて攻撃を躲していく。

だが、あまりにも萃香の攻撃が俊敏過ぎ躲しきる事が出来ず悟空は萃香の攻撃を直撃してしまった。

萃香の攻撃を受けた悟空は数十メートル飛ばされ岩にぶつかる。

萃香「どうだ!!」

萃香は、手を組みドヤ顔をする。

しかし、悟空はすぐに戻ってくる。

だが、体は傷がつきそれなりのダメージを受けてしまっているようだ。

悟空「まいったな、まさか、スピードもあそこまでとは」

悟空は萃香の強さを実感した。

萃香「ふん、まーね」

と萃香が言う。

だが、悟空は

悟空「だが勝った気になるのはちよつと早えぞ！」

悟空「はああ!!」

悟空はスーパーサイヤ人になる。

悟空「さあ、第2ラウンド始めっぞ!!」

悟空の髪は金色に輝き

悟空の周りからは黄金色のオーラがにじみ出る。

悟空の変わりように驚いた萃香は、

萃香「なんだそれ？」

と悟空に言った。

悟空「これは、スーパーサイヤ人。おめえならただ見た目が変わっただけじゃないの  
がわかつたろ？」

萃香「ああ、なんかこうビリビリくるような力を感じるよ」

素晴らしいお互い構え出す。

悟空「今度はこっちから行かせてもらっぞ!!」

そう言つて悟空は萃香にパンチを放つ。

そのパンチは先程の悟空のパンチよりも遥かに鋭く速いパンチだった。

萃香は、腹にそのパンチを直撃してしまう。

萃香「ぐはあ!!」

口から唾液がとぶ萃香

悟空は、萃香を追い詰める為に更に連続で攻撃をする。

悟空「だりやりやりやりやりやりやりや!!!」

悟空が萃香の腹に約10発のパンチを食らわせる。

すると萃香は、その場に膝をつく

萃香「ぐっ!うっっ」

萃香(なんて力だ!こうなったら)

だが萃香も意地で立ち上がる。

悟空「もうやめろ!おめえじゃオラには勝てねえ。降参をお勧めする」

悟空は萃香に降参を進めた。

しかし、萃香は

萃香「何言つてんだ!まだ、私の力はみせきれていないんだ!この戦い私が勝つてみ

せる」

そして、萃香が構え出す。

悟空「おめえがそこまで言うならオラもどことん付き合つてやつぞ！」  
そういう悟空も構え出す。

萃香（スピードじゃあいつには勝てない。こうなつたら!!）

悟空は萃香にパンチをする。

しかし、萃香は悟空のパンチを避けようとしなない。

悟空（諦めたんか？）

と悟空は思いそのままパンチを食らわせようとする。

その時!!

萃香が急に消えた。

悟空のパンチは萃香には当たらなかつた。

悟空「なんだ!!」

といい萃香のいた場所を見る悟空

するとそこには霧があつた。

悟空「なにー!!」

と驚く悟空

そして、霧が集まり萃香が姿を現わす。

萃香「はっはん、どうだ!!」

萃香は、腕を組みニヤリとする。

悟空「おめえ、今何したんだ？」

悟空はさつきどうやって萃香が避けたのかが全く分からなかった。

萃香「実は私、密と疎を操れる能力があるんだ!だから、さつきみたいに霧になって

悟空の攻撃を躲したのさ」

なんと、萃香は霧になり悟空の攻撃を躲したようだ。

悟空（なるほど、そういうえばおめえ宴会の時に霧になつてたな）

萃香「さあ、これからが本当の戦いだ!!」

萃香が構え出す。

それに合わせて悟空も構える。

そして、悟空が再び萃香にパンチを放つ。

だが、いくらパンチを食らわせようとしても萃香がすぐに霧になり悟空の攻撃が躲される。

萃香「どうした? 攻撃が当たらないぞ!!」

素晴らしいながら萃香が霧から一気に実体化し悟空にパンチする。

悟空「ぐはっ」

悟空は萃香の攻撃をまともに受けた。

いくらスーパーサイヤ人の悟空でも鬼の攻撃はかなり効く。

悟空は、腹を抑える。

悟空「くっ」

萃香「どうだ！私の能力は!!」

なんと萃香がスーパーサイヤ人の悟空を押ししていく。

霊夢（嘘！悟空が押されている!!）

霊夢は萃香の強さと能力に驚く。

悟空「くっ、何て奴だ！あれじゃあ攻撃が当てられねえぞ」

悟空は、少し焦りを感じる。

だが、

悟空「ははははは」

悟空は笑い始めた。

萃香「悟空なんで笑ってんだ？」

悟空に聞く萃香

悟空「いや、面白くてよ！おめえとの戦い!!まさか、幻想郷でスーパーサイヤ人のオラを追い詰める奴がいるなんてな!!!」

なんと、悟空はこの状況で戦いを楽しんでいた！



## スーパースァイヤ人2登場 第31話

悟空（さて、どうすっかなあ）

悟空は萃香に対してどう攻めるかを考えていた。

その時、

萃香「こんな時に考え方か？」

と言いつつ悟空の目の前に行き萃香はパンチをしようとしていた。

悟空は、急いで萃香のパンチを躲す。

そして、そのまま萃香のカウンターパンチを放つ。

しかし、悟空のパンチが当たる前にやっぱり萃香が霧と化し悟空の攻撃が当たらない。

悟空「やっぱり、当たんねえか」

少しだけ悟空にも焦りの表情が出てきていた。

萃香「ふふふ、どうやら少しは焦ってきたようだな！」

再び実体化した萃香がいう。

悟空「ああ、まあな！おめえは強えよ幻想郷で戦ってきた誰よりも強え!!」

そう言い悟空は構え出す。

萃香「強いかな…嬉しいことを言ってくれるね。ならもつと凄いのを見せてやるよ!!」  
そう言いながら構え出す萃香

そして、

萃香「鬼神「ミッシングパールパワー」」

萃香がスペルカードを使った。

その瞬間、萃香の体が見るみる大きくなってゆく。

悟空「な、なんだ!!」

悟空は、萃香に驚いた。

なんと、萃香が巨大化したのである。

萃香「どうだ!!」

萃香の声が目元に響き渡る。

悟空「な、なんて奴だあんな事が出来るなんて…」

悟空の額から汗が溢れ落ちる。

霊夢「まさか、幻想郷にあんな化け物がいたとわね」

遠くから見てる霊夢も萃香の変わりように驚いていた。

萃香「さあ、第3ラウンド開始だ!!!」

そういいながら萃香は大きな拳でパンチを打つ。

悟空は間一髪で躲した。

萃香のパンチは地面に地割れを作りかなりの威力を持っていた。

悟空「あ、危ねえ」

悟空もその威力に驚く。

だが、萃香の猛攻が続く。

萃香「だりやりやりやりやりやりやりやりやりやりや!!!」

数えきれないほどの攻撃が悟空を襲う。

悟空はなんとか躲していくが徐々に余裕がなくなつてゆく。

そして、

萃香「だりやあああ!!」

悟空「うわあー!!!」

悟空に萃香の攻撃を直撃してしまった。

悟空は地面に強く激突し倒れこむ。

悟空「くっ!!」

だが、まだ意識はあった。

そんな悟空に萃香は、「トドメだ!!」

といいパンチを放った。

ドンツと萃香のパンチが地面を叩きつけた。

萃香はニヤツと微笑み地面から手を離す。

しかし、萃香がパンチしたところに悟空はいなかった。

萃香「何!!」

萃香は周りを見渡し悟空を探す。

すると後ろから

悟空「波ーーーーー!!!」

悟空の声が聞こえた。

萃香が後ろを振り返ると悟空はかめはめ波を撃っていた。

悟空のかめはめ波はもう目の前に来ており巨大化した体を霧にする時間は萃香にはなかった。

悟空は勝ちを確信した。

そのまま悟空のかめはめ波は萃香に飛んでゆく。

しかし、萃香はフツと微笑み

萃香「霧符「雲集霧散」」  
スperlカードを使った。

その瞬間、萃香の目の前に霧が現われた。

かめはめ波はそのままその霧に当たる。

すると、その霧が壁になりなんとかめはめ波が相殺されてしまった。

悟空「何!!!」

流石の悟空も驚きを隠せない。

萃香「ふう、今のは危なかったよ！」

萃香は悟空を見ていった。

悟空（まさか、瞬間移動で後ろに回り込んでからのかめはめ波を防がれるなんて!!）

悟空は呆然とする。

しかし

悟空（やっぱり、あれしかないか!!）

かめはめ波を防がれた悟空には何か考えがあった。

悟空「ははははは」

再び笑い出す悟空

そして、悟空が力強くこう言い放つ

悟空「おい、萃香!!おめえに凄えもの見せてやる!!!」

萃香は、腕を組み首を傾げて「凄いもの?」

と言った。

悟空「ああ、そうだ!!」

萃香「まあ、なんでもいいや!力を出し惜しんで負けたら悔しいもんな!!」

萃香は悟空が本当の力を見せてくれると思つたようだ。

そして、悟空はスーパーサイヤ人の状態で

悟空「はぁー!ー!ー!ー!!!」

と叫ぶ。

その瞬間、悟空の黄金色のオーラが更に濃くなりビリビリと電気のような物も悟空を包む。

悟空「これがスーパーサイヤ人2だ!!!」

悟空はスーパーサイヤ人2となった。

霊夢「あれが悟空の2つ目の変身!!まさか、2つ目でここまでこのまでの力があるなんて!!」

悟空のスーパーサイヤ人2の気は霊夢のところまで強く届いた。

霊夢もスーパーサイヤ人2を見たのは初めてなのでスーパーサイヤ人2にかなりの

驚きをみせる。

萃香「こ、これがお前の力なのか！」

萃香はスーパーサイヤ人2の悟空を目の前にして震えていた。

萃香（ま、まさか、ここまでの力を持っているなんて!!!）

悟空のスーパーサイヤ人2に霊夢も萃香も驚きを隠せずにはいた。

悟空「さあ、最後の第4ラウンド始めようぜ」

そうやって悟空は構え出す。

萃香もとりあえず構え出す。

果たしてスーパーサイヤ人2の力とはどれほどの物なのか！

悟空は萃香に勝つことが出来るのだろうか!!

次回いよいよ悟空と萃香の決着がつく。

## ついに決着！ 第32話

ついに幻想郷では、初めて悟空がスーパーサイヤ人2となった。

周りの草木は悟空から出る気でザーザーと揺れている。

萃香「お前、まさかこんな力を持っているなんてな!!」

額から冷や汗を流しながらも力強く萃香は言った。

悟空「まあな！」

悟空は構えを取りながら言った。

萃香も悟空が構えたのに合わせて構えだす。

悟空「それじゃあ、行くぞ!!」

そう言って超スピードで萃香に近寄る悟空

そのスピードはとも素早く萃香に霧になる時間さえ与えなかった。

悟空「どうした隙だらけぞ!!」

そう言って悟空は萃香の腹に重い一撃を打つ

萃香「ぐはっ！」

萃香は腹を抑えて膝を地面につけた。



そして、巨大化もなくなり元の大きさに戻った。

霊夢「なんてデタラメなスピードなの！目で追うのがやつとよ!!」

霊夢は悟空のとてつもないスピードに驚く。

霊夢「それにあのスピード……あれがスーパーサイヤ人2……」

あまりの凄さに言葉を失いかける霊夢

スーパーサイヤ人2は幻想郷ではそれほど凄いのであった。

萃香「くっ」

萃香は腹を抑えながらも立ち上がった。

萃香「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

ダメージが大きく息を切らしていた。

そんな萃香を見て悟空は一言

悟空「どうやら力に差がつき過ぎちまったようだな」

と萃香に言った。

だが、萃香は

萃香「力の差がつき過ぎちまっただっただって？」

と腹を抑えるのをやめ構えながら言った。

悟空「まだやる気か？」

悟空は言った。

萃香「当たり前だ!!」

そう言つて萃香は

萃香「酔神「鬼縛りの術」」

とスペルカードをつかい鎖を出した。

その鎖で萃香は悟空に攻撃をした。

勿論 悟空はそんな攻撃いとも簡単に躲す。

そして、そのまま萃香にパンチを食らわせようと近く。

その時、

萃香「今だ!!」

なんと萃香は悟空が攻撃してくることを予測しており悟空がパンチを放つのと同時

に霧となった。

悟空「なに!?!」

悟空は自分のパンチの勢いを急ブレーキして殺す。

その悟空が止まった一瞬のうちに萃香が実体化する。

そして、

萃香「はぁー！ー！！」

萃香は悟空の後ろから全力のパンチを悟空に放つ。

悟空「しまった!!」

とつさのことに流石のスーパーサイヤ人2でも反応が遅れてしまった。

だが、しかし、

悟空「はぁー！ー！！」

悟空は一気に気を解放する。

悟空から爆風のような気が溢れ出す。

萃香はそのまま悟空の気に吹き飛ばされてしまった。

萃香「くっ!!」

そのまま数十メートル吹き飛ばされてしまう萃香

しかし、意地でなんとか態勢を立て直す。

萃香「くそー！ー！」

そう言いながら悟空の方を向く萃香

すると、

悟空「かめ」

なんと悟空はかめはめ波の構えを取っていた。

悟空「はめ」

萃香（ヤバイ! 急いで霧にならないと!!）

そう言つて霧になろうとする萃香

しかし、思つた以上に自分の体の限界が近く霧になる体力がなかった。

萃香「霧になれない!!」

悟空「波——!!!」

悟空はかめはめ波を放つた。

霧になれない萃香は取り敢えず

萃香「霧符「雲集霧散」」

霧で壁を作つた。

悟空のかめはめ波はそのまま霧に激突する。

萃香「ぐっ!!」

頑張つて悟空のかめはめ波を耐えようとする萃香

しかし、

萃香「うわ——!!!」

悟空のかめはめ波の威力が高すぎて霧の壁が壊されてしまった。

萃香「ちくしょう!!」

萃香はかめはめ波に飲み込まれる。

霊夢「勝負あつたみたいね」

霊夢は悟空の勝利を確信した。

悟空「ふう」

悟空はスーパーサイヤ人2を解き倒れた萃香の方に向かう。

ついでに霊夢も萃香のところに向かう。

萃香「う、ううう」

萃香はかろうじて意識があつた。

どうやら最後に使った雲集霧散でかめはめ波でのダメージを最小限まで抑えたよう  
だ。

悟空「おい、大丈夫か？」

悟空は倒れている萃香に尋ねる。

萃香「う、結構ヤバイかも」

萃香はボロボロになりながらも答える。

霊夢「あんた凄いわね。まさか、あれを食らって生きてるなんて」

萃香「当たり前だ! 鬼をなめるなよ!!」

萃香は倒れながらもいう。

そして、萃香が

萃香「助けてくれ」

と言ってきた。

悟空「もう、周りに迷惑をかけねえか?」

悟空は萃香に尋ねた。

萃香「ああ、勿論だ」

萃香はもう周りに迷惑をかけるようなことはしないと約束をした。

悟空「そうか!!」

そう言つて悟空は萃香に右手を構える。

そして、「はあ!!」悟空は萃香にエネルギー弾を放つた。

その瞬間、萃香の元気が戻り萃香が立ち上がる。

萃香「これは一体?!」

萃香は自分が回復したことに驚きを隠せない。

悟空「オラの気を少し分けてやった。おめえならそれだけでも十分に動けるはずだ」

悟空は萃香に説明をする。

萃香「なるほど！でも、どうして私を助けたんだ？」

萃香は自分を助けてくれた悟空に疑問を持つ。

悟空「そんなの決まってだろ」

悟空はニツとする。

悟空「また、おめえと戦えてえからだ！」

と言った。

萃香「戦いたい？」

悟空「ああ、そうだ！おめえとの戦いすんげえ楽しかったまたいつか戦おうぜ！」

そう、悟空は純粹に萃香との戦いが楽しかったのである。

萃香「まったたく、お前は凄い奴だよ！」

萃香も微笑みを浮かべる。

## 修行編2（界王拳）

### 霊夢・魔理沙 新たなる技 第33話

悟空が萃香を倒し1週間がたった。

宴会の騒ぎは無事に収まり悟空は再び霊夢と魔理沙に修行をつけていた。

霊夢「はあ！はあ！」

魔理沙「はあ！はあ！」

霊夢と魔理沙が組み手を取っている。

以前の修行とは違い肉体を鍛える修行がメインとなっていた。

霊夢「ダー!!」

霊夢が魔理沙の腹にパンチを放つ。

魔理沙「ぐはっ！」

魔理沙が大ダメージを受ける。

そんな魔理沙に霊夢は追い打ちをかけるように顔にパンチしようとする。

霊夢「ハー!!」

その時、



悟空「ストップだ霊夢!!」

悟空が霊夢を止める。

魔理沙は膝と手を地面につける。

魔理沙「くっ!!」

だが魔理沙はすぐに立ち上がる。

魔理沙「痛えな霊夢! 怪我しちゃうじゃねえか」

魔理沙が霊夢に文句を言う。

霊夢「あら? 貴方が私についてこられないのが悪いんじゃない」

霊夢は魔理沙を挑発する。

魔理沙「何ー!!」

そう言つて再び構え出す魔理沙

しかし、悟空が「おい、2人とも組み手は一回ストップだ」といい2人の間に入って止める。

そして、一回博麗神社の縁側に3人は座った。

霊夢「ふう」

一呼吸する霊夢

悟空が霊夢の方を向く。

悟空「霊夢やけに今日、気合いこもってるじゃねえか？」

悟空が霊夢に言った。

霊夢「まあね」

霊夢は相槌をうつ。

悟空「やっぱり前と違って直接 体を鍛える修行だからか？」

悟空は霊夢に尋ねた。

霊夢「まあ、それもあるわね」

霊夢は曖昧な返答をした。

魔理沙「それもって…てことは他にも気合いがこもってた意味があんのか？」

悟空と霊夢の会話に魔理沙も割り込んだ。

霊夢は少し考え込む

そして、

霊夢「実はね…」

霊夢が口を開いた。

そして、霊夢が前にあつた悟空と萃香の戦いの話をした。

魔理沙は驚愕した。

魔理沙「あの宴会の時にそんなことがあつたのか！」

と驚きながら言う魔理沙

魔理沙「それにやっぱりあの時 感じた 化け物みたいな気は悟空だったんだな」

魔理沙はスーパーサイヤ人2の気を感じとっていたようだ。

しかし、まだ魔理沙には引つかかることがある。

魔理沙「で、その話と霊夢のやる気 何が関係あるんだ？」

魔理沙が霊夢に言う。

霊夢「そんなの決まってるでしょ！」

霊夢は気迫のこもった声で言う。

霊夢「この幻想郷にはスーパーサイヤ人の悟空と渡りあえる者が存在する。てことは、私達は、すくなくともスーパーサイヤ人の悟空とまともに戦えるようにならないといつかとんでもなく強い妖怪が異変を起こした時、私達はその妖怪に負ける可能性だけであるの!!」

と周りが一度静まり返るような力のこもった声で言う霊夢

悟空は腕を組み

悟空「なるほどな」

と言った。

魔理沙も同様に腕を組み霊夢の考えを理解したようだ。

魔理沙「霊夢、お前の考え良くわかったぜ！確かにそうだな。私も幻想郷の異変解決をしなければならぬ。そのためにもっと強くなりたいけないな」

霊夢に押されたように魔理沙も気合いを出す。

そして、霊夢と魔理沙は同時に立ち上がり

霊夢・魔理沙「よしっ」

と言った。

霊夢「悟空、修行の続きしましよ」

と霊夢が悟空にいった。

魔理沙「そうだぜ！」

と魔理沙も悟空を後押しする。

すると悟空が腕を組んで下を向いて何かを考え出した

霊夢「どうしたの悟空？」

悟空が何を考えているのか気になる霊夢

悟空「うん、いや、ちよつとな！」

と言った。

周りは少し静まり返り3人は無言になった。

そして、少しして悟空が顔を上げた。

そして、霊夢と魔理沙に一言告げた。

悟空「おめえ達、そんなに強くなりてえんか？」

悟空のその言葉に対して霊夢と魔理沙は声を合わせて

霊夢・魔理沙「当たり前よ（だぜ）」

と言った。

そんな霊夢と魔理沙を見て悟空は少し微笑み

悟空「そうか」

と言った。

霊夢「何よニヤニヤして私達に何かいいたいわけ？」

と悟空に言う霊夢

すると、悟空から予想もしない言葉が返ってきた。

悟空「いや、オラが言いたいのは、おめえ達 新しい技を覚えたくないかってことだ」

霊夢「新しい技?!」

霊夢は、一瞬その言葉に興味が湧く。

しかし、

霊夢「いや、技はいいわ」

霊夢は断った。

魔理沙「何で断るんだ？悟空の技を教えてもらえるんだぜ？」

魔理沙が霊夢に尋ねる。

霊夢「いい魔理沙？技は後で覚えればいいの！今は自分自身が強くなるのが優先

!!」

霊夢はきつぱりと言った。

魔理沙は「えー」と言う表情をするが、霊夢の言った言葉も一理あるので

魔理沙「まあ、そうだな」

といった。

悟空「なんだ？2人とも技の修行受けねえのか？」

悟空は2人に尋ねる。

霊夢「ええ、今は強くなるのが優先！技はその後 教えてちょうだい」

そう悟空に霊夢は言った。

悟空「そうか、残念だなせつかく一気に気を上げる技なのに。まあ、あの技は危険だ

しこれがいいかもな」

悟空は少し残念そうな表情をする。

その時!!

霊夢・魔理沙「一気に気を上げるだつてー！ー！ー!!!」

悟空の言った言葉に反応する2人

悟空は、えっ となる。

霊夢「どうしてそれを先に言わないのよ!!」

悟空に詰め寄る霊夢

魔理沙「そうだぜ！悟空!!」

魔理沙も悟空に詰め寄る。

2人の強い視線を浴びる悟空

果たして悟空が霊夢達に教える技はなんなのか!!

## 界王拳 第34話

靈夢と魔理沙の強い視線を浴びる悟空

靈夢「そんな技があるんなら早く教えなさいよ!!」

靈夢が威圧のこもった声で悟空に言う。

悟空「え、でも、おめえ達 今 技はまた今度にするって言ったじゃねえか？」

悟空は靈夢が技を教えて欲しいのか欲しくないのかわからなくなった。

靈夢「あのねえく」

靈夢が手を頭に当てる。

靈夢「私が言いたいのは、まず強くなりたいてってことなの!!だから、さつき技を教えてやるって言われた時その技を完全に使いこなせるようなレベルになるまで技を教えてもらうのは待とうと思ったのよ!!でも、その技で気を上げれるならその技を教えてもらいたいのよ!!」

靈夢が悟空に自分の思っていることの説明をした。

悟空は手をポンツと叩き

悟空「なんだ、そういうことか」



と言った。

霊夢「まあ、それはいいとして、早く技のやり方を教えて！」

霊夢が悟空をせかす。

悟空は立ち上がり3人は縁側から少し距離をとった場所に行った。

魔理沙「で、悟空 まずその技の名前はなんなんだ？」

魔理沙は、技の名前を尋ねる。

悟空「ああ、界王拳ってんだ」

魔理沙に返答する悟空

魔理沙「界王拳？」

悟空「ああ、パワー スピード あらゆる戦闘能力を倍増させる大昔に界王様か

ら教えてもらった技さ」

悟空が軽く技の説明をする。

霊夢「界王様？」

とその説明の中に出てきた界王様と言う人物が気になった霊夢

悟空「ああ、界王様ってのは各銀河わ見守っている神様だ!!」

界王様の説明をする悟空

霊夢「銀河を見守っている神様ですって！てことは普通の神よりも凄いの？」

霊夢が界王様について質問を重ねる。

悟空「ああ、それぞれの星にいる神様の中で頂点に立つ人だぞ!!」

と悟空は言った。

霊夢は唾然とした。

そう幻想郷には神は存在するがその上が存在しない。

霊夢は別の世界で神をも超える存在がいた事を知り驚きを隠せない。

しかし、魔理沙はイマイチ話の意味が分からず

魔理沙「なんかよく分かんねえけど取り敢えず凄え人から教えてもらった凄え技なん

だな!!」

と言った。

悟空「まあ、そう言う事だ!!」

と返答する悟空

霊夢「まあ、取り敢えずその技の手本を見せてちょうだい」

霊夢が悟空に手本を頼んだ。

悟空は「ああ」と言って頷いた。

そして、悟空は気を貯める体勢になる。

悟空「はぁーはぁー!!!」

そして、

悟空「界王拳!!!!!!」

悟空は界王拳を使った。

その瞬間、

悟空は白色でも金色でもない赤色のオーラが悟空を覆った。

悟空「これが界王拳だ!!」

しかし、霊夢と魔理沙はあんまり驚かなかった。

悟空「あれ、なんだおめえ達この技 凄くねえか?」

魔理沙「いや、確かに凄いぜ、でも」

霊夢「いつも使っているスーパーサイヤ人の方が凄いんじゃないの?」

そう霊夢と魔理沙はスーパーサイヤ人に見慣れており界王拳ではあまり驚けなかったのだ。

魔理沙「そうだ!悟空その界王拳って奴よりもスーパーサイヤ人のなり方を教えてくれよ」

霊夢「そうよ!スーパーサイヤ人よ!!!あれを教えて欲しいわ」

2人は界王拳にはあまり興味を持たずそれどころかスーパーサイヤ人のなり方を教えろと言ってきた。

しかし、悟空は

悟空「スーパーサイヤ人はサイヤ人っていう種族しかねないんだ。ついでにサイヤ人ってのは……」

霊夢と魔理沙にスーパーサイヤ人に慣れないことを説明する。

魔理沙「なくんだ、スーパーサイヤ人には慣れないのか」

少しガツカリする魔理沙

霊夢「そうね」

と言って霊夢もガツカリする。

そんな2人を見て悟空が

悟空「まあまあ、界王拳つてのも結構気が上がんぞ!!」

といった。

霊夢「でも、スーパーサイヤ人よりは弱いんでしょ?」

霊夢が文句を言う。

すると、悟空が

悟空「いや、そんな事ねえぞ!!」

と言った。

そして、

悟空「はぁー！！！！！！！！！！」

そして、気合いを込める悟空！！！！！！

悟空「50倍界王拳！！」

悟空は界王拳の倍率をなんと50倍まで上げた。

悟空の周りの赤いオーラが更に濃くなる。

悟空「どうだ！！これでスーパーサイヤ人と同じぐれえの強さだろ？」

と霊夢と魔理沙に言う悟空

霊夢「す、凄い！！スーパーサイヤ人の状態とほとんど強さが変わらないじゃない」

悟空「ああ、界王拳つてのは体力さえあれば無限に倍率を上げて無限に強くなれん

だ！！」

魔理沙「さすが神様の頂点に立つ人が教えた技だぜ！！」

さつきまで界王拳を批判した2人が界王拳を褒める。

すると、その時

悟空が界王拳を解く。

そして、

悟空「はぁ、はぁ、はぁ」

悟空は息を切らした。

魔理沙「おいおい、どうしたんだ悟空？」

悟空に尋ねる魔理沙

悟空「いや、実はよ。界王拳は気を一気に爆発させる代わりに体力をゴツソリ削っち

まうんだ」

悟空が界王拳の最大の弱点を話す。

霊夢「何よそれ!!じゃあ、そんなに実戦じゃ使えないじゃない?」

と霊夢が言った。

悟空「まあ、今オラは50倍でやったからな。普通に2、3倍ぐらいならそんなに影響はねえからでえじょうぶだ」

悟空は霊夢に言った。

霊夢「結局、体力がないとスーパーサイヤ人並みの強さには出来ないじゃない!!」

霊夢が文句を言う。

魔理沙「まあまあ、それでも界王拳は強いんだから一緒に練習しようぜ!!」

文句を言う霊夢を止める魔理沙

次回いよいよ界王拳の修行開始!!

## 界王拳の修行!! 第35話

霊夢「はあ、まあ いいわ早く界王拳の練習をしましょ」

霊夢はため息をつきながら言う。

魔理沙「そうだぜ!!早くやろうぜ!!」

霊夢と魔理沙は早くしようとしめかす。

悟空「ああ、わかってる」

悟空は霊夢と魔理沙を見て言った。

霊夢「で、やり方は……」

霊夢がやり方を聞いた。

悟空「ああ、やり方はだな」

悟空はそう言っつてやり方を説明した。

悟空「やり方は体じゅうの気をコントロールするんだ」

悟空はいきなり無茶振りをいう。

魔理沙「体じゅうの気をコントロールそんな事できるのか!?!」

悟空「ああ、最初のうちはなかなか難しいけどよ。慣れば力もスピードも破壊力も

防御力もあらゆる戦闘能力を一気に増幅させることが出来る」

霊夢「戦闘能力を増幅……」

霊夢は悟空の言葉をリピートして悟空に尋ねる。

悟空「ああ、そうだ。界王拳はそういう技だからな!!うまくいけば2倍、3倍、4倍と使いこなせる」

と悟空は言った。

魔理沙「まあ、取り敢えず早く練習しようぜ霊夢!!」

魔理沙が霊夢をせかす。

霊夢は、魔理沙の方を見て「そうね」といった。

そして、霊夢と魔理沙の界王拳の修行が開始された。

霊夢「はああああああ!!!」

魔理沙「だああああああ!!!」

霊夢・魔理沙「界王拳————!!!」

2人は気合いを込めて界王拳を使つた。

しかし、2人を赤色のオーラは覆う事は無く。

2人に変化は見られなかった。



悟空「違えぞ おめえ達。それはただ気を上げてるだけだ!!」

霊夢と魔理沙に言う悟空

霊夢は悟空に

霊夢「コツか何かないの？」

と聞いた。

魔理沙「そうだけ悟空！体じゅうの気をコントロールするって言われてもイマイチ分からないぜ」

魔理沙は霊夢に続いて悟空に言う。

悟空「コツか〜」

悟空は腕を組み考え込む

悟空「コツって言われてもオラは感覚でやってるからな……」

そして、また考え込む悟空

悟空「強いて言うなら心を落ち着かせてその状態から一気に爆発させる感じだ」

霊夢「気を落ち着かせて一気に爆発させる」

魔理沙「そんな事出来るのか？」

魔理沙は少し不安を覚える。

悟空「出来る！おめえ達なら大丈夫だ!!」

悟空は魔理沙を励ます。

魔理沙は「そうだな」とだけ言い再び霊夢と界王拳の練習をする。

霊夢「ふう……」

魔理沙「はあ……」

一呼吸入れて落ち着く2人

そして、

霊夢・魔理沙「界王拳!!!」

界王拳と言い一気に気を解放する2人

しかし、

霊夢「はああああああ!!!」

魔理沙「だああああああ!!!」

2人は力み過ぎる。

悟空「ダメだダメだ!!」

霊夢と魔理沙を止める悟空

悟空「2人とも力み過ぎてんぞ!!」

霊夢と魔理沙に言う悟空

霊夢「今のも違うのか、はあ」

ため息をつく霊夢

魔理沙「本当に私達に出来るのか？」

2人は少し不安を持ち始めた。

悟空は、そんな2人を見て

悟空「でえじようぶだ。おめえ達には才能があつからな!!」

2人を励ます悟空

霊夢「でも、なかなか出来ないじゃない」

魔理沙「そうだぜ！悟空は簡単に出来るかもしれないけど私達には難しんだぜ」

完全にマイナス思考になる2人

しかし、悟空はそんな2人に対して

悟空「そんな事ねえぞ、オラだつて界王拳を覚えるのすんげえ時間がかかったんだぞ」

2人に言う悟空

すると、霊夢が「そうなの？」と言った。

悟空「ああ、何ヶ月か掛かったぞ」

悟空はそう言う。

魔理沙「悟空が何ヶ月も掛かったのか！じゃあ、私達はもつと時間がかかるんじゃないか」

と魔理沙が言った。

しかし、悟空は

悟空「そんな事ねえぞ!! さっきの2回目ですで既に惜しいところまで来てたぞ!!!」

と悟空は言った。

霊夢「あれ、惜しかったの?」

霊夢が悟空に聞く。

悟空「ああ、後半の方に少し力み過ぎていたが前半の方はほぼ完璧だったぞ!!!」

と悟空は言った。

すると、霊夢と魔理沙は少し元気を取り戻した。

霊夢「もう少し頑張りましょうか魔理沙」

魔理沙に言う霊夢

魔理沙も

魔理沙「そうだな! もう少し頑張るか!!」

2人はプラス思考になった。

その後、霊夢と魔理沙の修行が続いた。

↳1週間後↳

霊夢・魔理沙「界王拳!!」

2人の界王拳は1週間続いていた。

2人は一瞬だけ赤色のオーラが現れるようになっていた。

魔理沙「くそ、また失敗だぜ……」

魔理沙が言った。

しかし、前のように完全なマイナス思考ではなかった。

霊夢「まあまあ、一瞬だけあの赤色のオーラが出るようになったじゃない!」

魔理沙に言う霊夢

魔理沙「そうだな!!」

魔理沙は霊夢に言う。

そんな2人に横から悟空が

悟空「おめえ達、1週間でここまで感覚をマスターするとわな」

悟空は2人に少し驚きの表情を見せる。

霊夢「でも、後一歩つてところで失敗するのよね〜」

霊夢が悟空に言う。

魔理沙「そうだぜ!成功したと思ったら失敗で終わってしまうんだよね〜」

魔理沙も似たような事を言う。

悟空「それはやつぱりおめえ達が最後に力んじまってんだ。誰でも気を上げるときは力んじまうもんだ」

霊夢「そうね。じゃあ次はもっと力まないようにするわ」

そう言つて2人は再び界王拳の修行をしようとする。

すると悟空は、

悟空「おい、おめえ達、今日の修行はおしまいだ」

そう言つて沈みかけの太陽を指 指す悟空

魔理沙「もう、こんな時間なのか！」

霊夢と魔理沙は修行に集中しすぎて時間の経過に気づいていなかった。

魔理沙「じゃあ、私は帰るな！」

魔理沙は帰つていった。

霊夢「私達も夕ご飯にしましょうか」

といい悟空と霊夢は博麗神社に入った。

## 永夜異変編

## おかしな夜 第36話

修行で疲れた霊夢はすっかり眠ってしまった。

悟空（最近、毎日頑張ってんな霊夢）

心中で呟く悟空

悟空「さて、オラも寝るか」

そう言って悟空も眠りにつく。

く数時間く

悟空と霊夢が

悟空「ふあああ、よく寝た」

霊夢「うー、よく寝た」

と言い目を覚ました。

霊夢「おはよう」

と悟空に言う霊夢

悟空は「おはよう」と言葉を返す。

そして、布団から立ち上がる霊夢

霊夢「うう」

霊夢は大きく伸びをした。

そして、

霊夢「なんか朝って感じがしないわね」

と言葉を漏らす。

悟空も同様に立ち上がり

悟空「ああ、オラもだ」

と言った。

霊夢「なんでかしら？」

と霊夢が言う。

すると、悟空が

悟空「取り敢えず縁側に行って太陽の光でも浴びようぜ」

と言った。

霊夢は、

霊夢「そうね」

とだけ言葉を返し先に縁側に向かった。



悟空も霊夢の後を追うように縁側へ向かう。

そして、縁側に着いた悟空と霊夢

しかし、そこには想像もしていなかった光景が広がっていた。

悟空は思わず

悟空「なあ、霊夢オラ達って数時間は寝たよな？」

と霊夢に聞いた。

霊夢は、

霊夢「ええ、そのはずよ」

と霊夢も今の状況がイマイチ理解が出来なかった。

そう悟空と霊夢の前には月明かりに照らされた夜が広がっていたのだ。

悟空「これは……そう言うことだな！」

と霊夢の顔を見て言う悟空

霊夢も

霊夢「そう言う事のようにね」

と言葉を返す。

霊夢「そうこれは、異変よ!!!」

霊夢が叫び気味に言った。

悟空「ああ、間違いなさそうだな！」

素晴らしい月を見上げる悟空

すると、さらに悟空が何かに気づく

悟空「おい、霊夢あの月なんかおかしくねえか？」

霊夢に言う悟空

霊夢もすぐに月を見上げる。

霊夢「確かに何かおかしいわね」

霊夢も月の異変に気付く。

その月は普通の人間ではまずおかしいと気づかないであろう。

悟空「どうやら、今回の異変は少しばかり大変そうだな！」

と悟空が言った。

しかし、霊夢は

霊夢「そんな事ないわよ、もう誰がこの夜にしたか見当はついてるわ」

なんと霊夢は誰が夜をおかしたのか分かったようだ。

悟空「本当か霊夢！」

霊夢に尋ねる悟空

霊夢「ええ、本当よ！」

どうやら霊夢は本当に異変の犯人に心当たりがあるようだ。

霊夢「こんな事が出来るのはあいつしかないわ」

そう言つて神社の庭に出る霊夢

そこで霊夢は

霊夢「出てきなさい紫!!」

なんと紫を呼んだ!!

悟空「紫!!」

紫と聞いて驚く悟空

すると、その時 空間に切れ目のような物が現れた。

そこから女性が出てくる。

そう紫である。

紫「呼んだかしら霊夢？」

紫は霊夢に尋ねる。

霊夢「ええ、呼んだわ!!」

紫に言う霊夢

そして、強い眼光で睨みつけ

霊夢「紫!!あなた夜の境界をいじったわね!!」

とிட்டた。

すると、

紫「ええ、いじったわよ」

と誤魔化す事なく正直に答える紫

悟空「なんでそんな事をしたんだ紫!!」

霊夢と紫の会話に横から入る悟空

紫「実は、もう気づいてると思っただけど月が偽物にすり替えられてるのよ」

霊夢「それなら私達も気づいたわ」

紫「そう、月の光は夜を生きる妖怪にとつてはとても大事な物!!だからこの夜が終わ

るまでに私は夜の境目をいじつてこの夜の間を月を取り返そうとおもったのよ」

と紫が説明した。

悟空「なるほど、おめえはちゃんとした理由があつてこそその異変なんだな!」

悟空は紫の事を理解した。

紫「さすが、悟空君 話が早くて助かるわ」

霊夢「まあ、取り敢えず本物の月を取り返せばいいのね」

霊夢が紫に尋ねる。

紫「ええ、そうよ!」

と紫は霊夢に答えた。

悟空「じゃあ、3人でさっさと異変解決に行こうぜ」

と悟空が霊夢と紫に言う。

それに対して霊夢は

霊夢「そうね」

と言い異変解決に行く事を決める。

紫は えっ となり

紫「手伝ってくれるの？」

と霊夢に聞いた。

霊夢「当たり前じゃない！異変解決は私のいや巫女としての役目なんだから!!」

と霊夢は強気で言った。

紫「前のあなたならお金を上げないと絶対に動かなかつただろうに…変わったわね霊夢」

紫は ふふっ と笑いながら霊夢に言った。

霊夢「そんな事ないわよ！今も昔も私は私よ!!」

と紫に言う霊夢

すると、横から悟空が

悟空「いや、霊夢おめえ変わったと思つぞ!! 最初オラが来た時なんか修行なんかめんどくせえて言つて言つてなのに今じゃ積極的に修行に励んでるじゃねえか」といった。

霊夢は、少し頬を赤らめ

霊夢「そんな事ないわよ」

と照れたように言つた。

紫「ふふふ、茶番はここまでにして早く異変解決に行きましようか」

紫は少し微笑みながら言つた。

霊夢「当てはあるの?」

霊夢が紫に聞く。

紫は一言「ないわ!」とだけ答えた。

悟空「当てはねえんか……」

悟空は考え込む

しかし、霊夢は

霊夢「当てがなくても取り敢えずそこら中を回つてれば見つかるでしょ」

と能天気な事を言つた。

悟空と紫は顔を合わせて ふつ と笑う。

霊夢はそんな2人を見て「なによ！」と言った。

紫「いや、何にもないわよ。確かにそれが一番マシなやり方と思っただけ」と紫は言った。

悟空「オラも紫と同じだ」

悟空もそう言う。

霊夢「そう、それならいいんだけど」

と霊夢は言葉を返した。

## 消えた人里 第37話

悟空と霊夢と紫は奪われた月を取り戻すため霊夢を先頭に月を奪った主犯を探していた。

悟空「なあ、霊夢どこ向かったんだ？」

悟空は霊夢に尋ねる。

霊夢「何処って言われてもねー」

霊夢は悟空に対しての返答に困ってしまった。

霊夢「まあ、適当に探しましょ」

結局思いつかず適当に動き回ることにした。

そんな、霊夢を見て紫が

紫「そんなんじや、きりが無いわよ」

と呟いた。

霊夢「じゃあ、何処に向かえばいいのよ!!」

紫に反発する霊夢

紫は少し考える動作をする。



その時、悟空が急に止まり何かに反応する。

そんな悟空を見て霊夢が尋ねる。

霊夢「どうしたの悟空？」

悟空は何処かを指し指し

悟空「なあ、霊夢あつちの方って確か人里つてのがあつたよな？」

悟空は霊夢に尋ねる。

霊夢は悟空の指し指した方を向く。

そして、

霊夢「ええ、そのはず……!!」

と言おうとした時、霊夢もあることに気づく。

紫はそんな悟空と霊夢を見て

紫「どうしたのよ？」

と尋ねた。

すると、霊夢が一言

霊夢「人里に住んでる人達の気が感じられないのよ！」

と言った。

紫は困惑し

紫「それはどう言うことよ!!」

と言った。

すると、悟空が

悟空「簡単に言うとなが消えたって事だ!!」

と言った。

それを聞いた紫は

紫「すぐに人里へ向かうわよ!!」

紫が素晴らしい全速力で3人は人里のあった方へ向かった。

数分後

悟空と霊夢と紫は人里があった所にたどり着いた。

しかし、そこには人里も住んでいた人々も誰一人としていなかった。

悟空「なあ、霊夢ここが元々人里があった所か?」

悟空は人里に1度も言った事がないので霊夢に確認をとる。

霊夢「ええ、そのはずよ。前まではここで人が住んでいたはず……」

元々人里があった所を見ながら霊夢は言った。

だが、しかし、

紫「えっ、ふつうに人里あるわよ?」

なんと、紫には人里が見えているのである。

悟空も霊夢も えっ と反応をする。

悟空「オラには人っ子一人見えねえぞ」

霊夢「私もよ」

しかし、以前として悟空と霊夢には人里は見えない。

だが、その時悟空が

悟空「いや、待てよ。あの辺から気が感じっぞ!!」

なんと消えた人里から気を感じとったのである。

悟空は即ぎに気の感じた方を振り向く。

霊夢と紫もすぐに悟空の振り向いた方向を見る。

そこには、水色の髪に青い帽子に青い服を着た女性が立っていた。

霊夢「あれは、人？」

霊夢が悟空と紫に尋ねる。

紫「どう見てもそうでしょ！」

そう言つて、悟空と紫と霊夢はその青い女性の方へと向かった。

そして、女性の前に降りる悟空 霊夢 紫

??? 「誰だ!!」

すると女性は即座に警戒をしてきた。

霊夢「私達は……………」

霊夢が説明をしようとした時、

???「さては、お前達 夜に里を襲おうとしたんだな!!この妖怪め!!」

どうやら霊夢と悟空と紫は敵だと勘違いされているようだ。

霊夢「いや、私達は……………」

霊夢が再び説明をしようとした時、

???「ええい、妖怪め!!人里を襲うつもりだな!!だが、人里は隠しておいた!!」

なんと、人里を隠したのは目の前にいる女性であった。

霊夢「あんたが人里を隠したの?」

霊夢は確認をとるように聞く。

???「ああ、そうだ!お前達のような奴らから人里を守るためにな!!」

女性は悟空と霊夢と紫を睨みつけながら言う。

そんな女性に対して紫は

紫「でも、私には普通に人里の人達が見えるわよ?」

と女性に言った。

女性は少し驚き

??? 「お前達は一体!!」

と言ってきた。

そんな女性を見て霊夢が

霊夢 「安心しなさい。私には見えないから」

と言つてあげた。

悟空も

悟空 「オラも見えねえぞ」

と言つた。

女性はしょんぼりして

??? 「そんな情けかけられても」

といった。

だが、それを言うのと同時に女性はあることに気がつく。

女性は悟空の方を振り向き

??? 「子供!!」

と驚きながら言つた。

悟空はいつもながら

悟空 「オラ子供じゃねえぞ」

と言い返す。

??? 「子供じゃない？」

その言葉に少し言葉を持った女性

??? 「どう見ても子供じゃないか！こんな夜中に子供が出歩くなんて!!」

女性は悟空に言った。

悟空「だから、オラ子供じゃねえって!!」

だが、悟空は即座に言い返す。

すると、霊夢が横から

霊夢「ええい、今はそんなのどうでもいいわよ!!取り敢えず私達は敵じゃない!早く

人里を戻さない!!」

女性に対して言う霊夢

??? 「それは出来ない!どうせお前達は里を襲おうとしてるんだろ!!」

霊夢に対して言う女性

霊夢は、

霊夢「そんなんじゃないわよ!」

と言い返す。

しかし、女性は聞く耳持たず

??? 「ええい、嘘つけ!!今すぐお前達を倒してやる!!!」

そう言つて戦闘体勢をとる女性

霊夢はため息をつき

霊夢 「ええい、もうなんだっていいわ!!!」

そう言つて霊夢も戦闘体勢をとる。

紫は「あらあらあら」と言つて霊夢と女性から少し距離をとつた。

それに合わせて悟空も少し霊夢と女性から距離をとり紫の横に立つた。

果たして謎の女性はどれほどの力を持っているのだろうか!!

次回、勝負開始だ!!!!

## 靈夢 V S 慧音 第38話

なんだかよく分からないが慧音の勘違いから勝負になってしまった。

靈夢「あんたがその気ならこつちだつて容赦しないわよ!!」

靈夢が女性に忠告をする。

???「私は里を守るの!!だから貴方を絶対に倒す!!!」

しかし、女性は靈夢達を完全に敵だと思っている。

靈夢「だから私達は敵じゃないって……まあ、いいわ。それより貴方名前は？」

靈夢は女性に名前を尋ねる。

???「私の名前上白沢慧音!貴様を倒すものだ!!」

何処その合体戦士のようなセリフを言う慧音

靈夢「そう慧音って言うのね。私は博麗靈夢よ!!」

靈夢も名前を名乗る。

慧音「さあ、自己紹介はこの辺にして戦いのスタートだ!!」

そう言つて慧音は大量の弾幕を放つ。

しかし、靈夢はいとも簡単にその弾幕を躲していく。



霊夢「そんな攻撃 私には当たらないわよ!!」  
素晴らしい霊夢は弾幕を放つ。

その弾幕は慧音の放った弾幕より威力も密度も速さも全てが上だった。  
慧音は、「なに!!」と驚きの表情を見せる。

しかし、すぐに冷静になり的確に霊夢の弾幕を躲けていった。

霊夢「へえ、少しはやるじゃない!!」

霊夢は慧音を感心する。

霊夢「でも、いつまで避け切れるかしら!!」

そう言ってさらに弾幕の数を増やして慧音に放った。

慧音も流石に焦り出す。

慧音「くっ!!」

ギリギリで弾幕を躲していく慧音

霊夢「なかなかしぶといわね!!」

霊夢は常に弾幕を出し続ける。

慧音「私をなめるなよ!!」

素晴らしい弾幕を避けていく慧音

霊夢「ちっ!!」

霊夢は弾幕を出し終えた。

なんと、慧音は霊夢の弾幕を全て避け切ったのである。

慧音は今しかないと言わんばかりに

慧音「始符「エフエメラリテイー37」」

スperlカードを使った。

その瞬間、慧音は魔法陣のようなものを出しそこから小さい無数の弾幕を放った。

霊夢はすぐに反応してその弾幕を避けてゆく。

だが、しかし、その数があまりにも多すぎて霊夢も余裕がなくなってくる。

霊夢「ヤバイ!!」

とつさに霊夢はヤバイと声を出した。

その瞬間、霊夢は弾幕に当たってしまった。

そして、さらに追い打ちをかけるように霊夢に多くの弾幕が当たってゆく。

慧音は、「よし!!」とガッツポーズをとる。

霊夢は爆風に包まれてしまった。

そして、慧音は悟空と紫の方を振り向き

慧音「おい、お前達もさっきのやつみたいになりたくなくなかったらここから立ち去るこ

とだな!!」

といった。

すると、悟空と紫は ふつ と笑う

慧音はすかさず

慧音「なにかおかしい!!」

と言った。

悟空は、

悟空「おめえ、よく爆風を見てみる!!」

と慧音に言った。

慧音は、「爆風だど?」といい霊夢を包んだ爆風の方を振り向く

すると、そこには、

慧音「なんだと!!」

慧音は驚きの表情を見せる。

そう、そこには、なんと霊夢がいたのだ。

霊夢「ふう」

霊夢は一息出して爆風から姿をあらわす。

そして、慧音を見て

霊夢「なかなか、やるわね!!」

と一言放った。

慧音「ちっ、まだ生きてたのか!!」

慧音は、少し焦り出す。

霊夢「当たり前よ!あの程度でやられる私じゃないわ!!」

霊夢は慧音を見て言う。

慧音は、

慧音「1度耐えたくらいで調子にのるな!!」

そう言って再びスペルカードを構え出す慧音

そして、再びスペルカードを使おうとする。

しかし、

慧音「始符「エフェメラ……」」

慧音がスペルカードを半分ぐらい言った所でスペルカードを唱えるのをやめる。

その理由は、

霊夢「遅いわよ!!」

そう、霊夢が目の前まで一瞬で来たのである。

そして、霊夢は慧音に0距離から

霊夢「霊符「夢想封印」」

霊夢は夢想封印を放った。

慧音は勿論避けることが出来ず夢想封印を直撃してしまう。

慧音「うわー！！！！」

そう叫びながら吹っ飛ばす慧音

そして、数メートル離れた所で岩にぶつかる。

霊夢「勝負あつたみたいね」

霊夢は慧音に近づかながらいった。

慧音「ぐっ、くっ、！！」

慧音はかなりのダメージを受けたようだ。

だが、そんな状態でも慧音は

慧音「くそー！！」

そう言つてボロボロの体にムチを打ち立ち上がる。

慧音「私は里を里のみんなを守るんだ！」

素晴らしいフラつきながら構え出す。

しかし、その構えには、力が無く戦える状態では、なかった。

そんな、慧音を見て霊夢が、

霊夢「いい加減にしなさい！！」

と一言、慧音に言った。

慧音は、驚く。

しかし、靈夢は、更に続けて

靈夢「私達は、人里を襲おうなんてこれっぽっちも考えていないわ!! けれどころか人里が人里の人達が消えたのを心配して来たのよ!! それなのに貴方は、何も聞かずあつて早々 私達を敵扱い!!」

靈夢が慧音に怒りをぶつける。

悟空も紫もそれに驚き靈夢の元に行く。

悟空「靈夢そこまで言わなくてもいいじゃねえか」

紫「そうよ、相手も悪気があつたわけじゃないしね」

悟空と紫は靈夢を止める。

しかし、靈夢は、

靈夢「いいのよ! こんな人の話もろくに聞かない奴なんだから!!」

と悟空と紫に反発する靈夢

すると、その時 目の前から「すまなかつた」と声が聞こえた。

その声の方を向く3人

そうそこには、慧音がいたのである。

慧音「すまなかつた。勝手に敵だと決めつけてしまつて」  
慧音は体を90度近くまで折り曲げ霊夢達に謝罪をする。

## 迷いの竹林 第39話

慧音との勝負に見事勝利した霊夢

慧音「疑つて本当にすまなかつた」

心から謝罪する慧音

霊夢「あら、やつと私達が敵じゃないって分かつてくれたのかしら？」

霊夢は、腕を組みながら言った。

慧音「ああ、言い訳かもしれないが私は人里を守ることばかり考えていてどうやら目の前にいる奴が敵か味方かも判断出来なかつたようだ。どうか、許してくれ」

慧音は再び体を90度近くまで折り曲げ霊夢達に言う。

そんな慧音を見て霊夢は、

霊夢「もう、いいわよ。頭をあげなさい」

と優しい声で言った。

慧音は、言われた通り頭を上げる。

すると、霊夢は少し微笑み

霊夢「あなたは、人里を守りたかつた。ただそれだけなんですよ？そんなあなたが謝



る必要はないわ」

と言った。

慧音は「ありがとう」と一言返した。

と その時、紫が横から

紫「つて、こんな所でこんな事してる場合じゃないじゃない!!」

それに合わせて、霊夢も悟空も あっ となる。

悟空「そうだ忘れてたそう言えば月を隠した主犯を探すんだった!!」

霊夢「そういえば、そうだったわね」

霊夢も悟空もすっかりと忘れていた。

すると、慧音が

慧音「お前達、月を隠した奴をさがしてるのか？」

と霊夢達に尋ねる慧音

霊夢は、

霊夢「ええ、そうよ」

と言葉を返す。

すると慧音は何処かを指 指し

慧音「月を隠した奴らなら多分あったの竹林の中にいると思うぞ」

と言った。

その言葉に驚き

霊夢は、「本当!!」と確認をとる。

慧音「ああ、なんか知らねえけど最近怪しいやつらが竹林に建物を建てて何かやってるって噂なんだ。だから、おそらくそいつらが月を隠したんだと思うぞ」

なんと慧音は、月を隠したやつらに心当たりがあったのである。

この情報は霊夢達にとっては、かなり大きな情報であった。

霊夢は、慧音に強く「ありがとう!!」と言った。

慧音は、

慧音「いや、こつちもかなり迷惑かけてしまったし」

と遠慮げに言う。

紫「例え そうだとしてもその情報は助かったわ。ありがとう」

悟空「そうだぞ。おめえに合わなかったらもつと色んな場所を探してたと思っぞ」

と悟空と紫も慧音にお礼を言う。

霊夢「それじゃあ、目指す場所もわかったことだし急ぎましようか」

そう言って飛び出す霊夢

悟空も「待てよ、霊夢!!」と言って急いで霊夢を追いかける。

紫は、やれやれ といった表情をしたあと慧音に「それじゃあね」と言い霊夢と悟空を追いかけた。

慧音（そういえば、結局あいつら何者だったんだ？）

慧音の中には少し疑問が残った。

霊夢「そろそろ竹林に着くわよ！」

悟空に知らせる霊夢

悟空「お、以外に近いんだな!!」

そう返答する悟空

すると、紫が

紫「じゃあ、そろそろ降りるわよ」

と言った。

悟空は、

悟空「飛んでさがさねえんか？」

と紫に尋ねる。

紫「飛んでたら竹で建物がどこにあるか見えないじゃない」

と紫は言った。

霊夢は、「なるほどね」と言い竹林の入り口に降り立つ。

霊夢「ここが竹林、随分広そうね」

霊夢がそう呟く。

紫「ここは、広いってもんじやないわ。ここは、迷いの竹林よ!!」

と紫が言った。

悟空は、すかさず「迷いの竹林？」と尋ねる。

紫「ええ、ここは迷いの竹林 入ったら2度と出てこれないって言われている場所よ

！」

紫が説明する。

霊夢「2度と出てこれない!!」

その言葉に少し恐怖心を覚える霊夢

すると、悟空が

悟空「何びびってんだ？迷ったら飛んででればいいじゃねえか？」

と霊夢に言う。

霊夢は恐怖心は消え「それも、そうね」といった。

紫「さあ、お喋りはそこまでよ！早く異変の主犯を探すわよ!!」

そう言つて竹林に早々 入って行く紫

霊夢も「待つてよ紫!!」と言いながら急いで竹林の中に入って行く。

それに続き悟空も入って行き3人は竹林の中にあるという謎の建物を探すことにした。

（10分後）

霊夢「ないわね」

と言葉を溢す霊夢

悟空「なんかよくわかんねえけど、この中じゃ方向の感覚も気も上手く捉えることが出来ねえしな」

そう迷いの竹林の中では完全に方向感覚が消えそれどころか気もまともに感じるこ  
とが出来なかった。

紫「それが迷いの竹林とまで言われる理由よ」

と悟空にいう紫

霊夢「でも、この調子じゃあかなり時間がかかっちゃうわよ」

と紫に言う霊夢

紫は、

紫「そんなこと言われてもねえ」

と言葉を返す。

悟空「まあ、今は、ひたすら歩いて怪しい建物を見つけるしかねえんじゃねえか？」

悟空が霊夢に言う。

霊夢は、少しため息をつき

霊夢「それしかなさそうね」

と言った。

　　→更に10分後→

霊夢「……………」

悟空「……………」

紫「……………」

霊夢と悟空と紫は、無言で歩いていた。

その時、

霊夢「ああ、もう何処に行けば良いのよ!!」

霊夢が痺れを切らす。

紫「まあまあ、きつともうすぐ着くわよ」

霊夢をなだめる紫

しかし、霊夢は、

霊夢「その言葉ば5分前も聞いたわよ!!」

と紫に文句を言う。

その時、横の方にあつた茂みがガサゴソ動いた。

3人はすぐに反応し茂みの方を向く。

そして、その茂みから

??? 「動くど打つ。間違えた。打つと動くだ。今すぐ動く」  
と言い何者かが飛び出してきた。

果たして茂みから飛び出してきたのは誰なのか!!

## 因縁の戦い 霊夢 v s 魔理沙 第40話

急に何者かが茂みの中から飛び出してきた。

霊夢と悟空と紫はすぐさまその飛び出してきた者の正体を確認する。

そこには、予想もしない人物がいた。

魔理沙「貴様が異変の主犯か……てっ!! 霊夢と悟空それと隙間妖怪じゃないか!!」

そう茂みから飛び出して来たのは魔理沙であった。

霊夢「あら、魔理沙じゃない?」

魔理沙を見て言う霊夢

悟空「なんでおめえがここにいるんだ?」

悟空が魔理沙に質問をする。

魔理沙「そんなの決まってるだろ!! この異変を解決するためだ!!」

そう魔理沙も同様に異変解決をしに来たのである。

霊夢「どうして、この場所がわかったのよ?」

霊夢が魔理沙に尋ねる。

魔理沙「人里にいる慧音ってやつから聞いたんだ! 霊夢達がこの竹林に行ったってな



!!  
」

霊夢「そう。じゃあ、貴方も月を隠した奴を探すのを手伝いなさい」

と魔理沙に言い竹林を歩き始める霊夢

すると、魔理沙が「ちよつと待て!!」

そう言つて霊夢を止める魔理沙

そして、魔理沙は紫を指 指し

魔理沙「こんな夜にしたのはお前だろ!!紫!!」

と紫に言う魔理沙

紫は「ええ、そうよ」と魔理沙に言葉を返す。

すると、今度は霊夢と悟空を見る魔理沙

魔理沙「異変の主犯はこいつなんだろ!!なんで、一緒にいるんだよ!!」

霊夢と悟空に力強く言う魔理沙

悟空「違えぞ魔理沙 たしかに夜を長引かせてるのは紫だけだよ……」

悟空は急いで魔理沙を落ち着かせるようにいう。

霊夢「そうよ。実は、月が何者かに隠されちゃつてそいつらを探すために夜を長引か

せてるのよ!」

霊夢も急いで魔理沙に説明をする。

しかし、魔理沙は、

魔理沙「月が隠された事より夜が終わらない事の方が大問題だ!!そっちが紫の味方を  
するなら霊夢お前を倒してやるぜ!!」

そう言つて戦闘体勢に入る魔理沙

霊夢も「全くもう!」と言い同様に戦闘体勢をとつた。

悟空は急いで

悟空「落ち着け 霊夢、魔理沙!」

と2人を止めに入る。

しかし、2人は聞く耳持たない。

そして、

霊夢・魔理沙「はあ!!」

2人は同時に弾幕を放つ。

周りは爆風で覆われてゆく。

それと同時に2人が宙に飛び上がる。

悟空と紫も やれやれ という感じで霊夢と魔理沙を追いかける。

魔理沙「巫女のくせに異変の主犯に協力するなんて!!」

魔理沙が霊夢に言い放つ。

霊夢「だから、こつちも訳ありなんだって!!」

霊夢は魔理沙に言い返す。

魔理沙「そんなの言いわけだけだぜ!!」

そう言つて魔理沙は、

魔理沙「魔符」「スダードラストレヴアリエ」

スペルカードを使う。

しかし、霊夢は、魔理沙のスダードラストレヴアリエに対抗するように

霊夢「霊符」「夢想封印」

夢想封印を使う霊夢

そして、魔理沙のスダードラストレヴアリエと霊夢の夢想封印が激しく衝突しあう。

激しくぶつかつて行くエネルギーとエネルギー

お互い一步も引かない展開になった。

そして、お互いに弾幕がきれる。

霊夢「なかなかやるじゃない魔理沙!!」

そう魔理沙に告げる霊夢

しかし、魔理沙は、

魔理沙「そんな褒められ方してもあんまり嬉しくないぜ」

と言いまに二八卦炉を構える。

そして、そのまま

魔理沙「恋符」「マスタースパーク」」

魔理沙は、とっておきの技のマスタースパークを放つ。

その威力はとんでもなくまともに食らったら霊夢でも危ない。

霊夢「くっ!!」

霊夢は急いでマスタースパークを躲す。

霊夢「危ないわねー!!」

霊夢が魔理沙に言う。

魔理沙「まさか、躲されるなんて！」

魔理沙は少ししよんぼりする。

その時!!

悟空「おい、あれ!!!」

悟空が急に叫び出す。

霊夢と紫と魔理沙はすぐさま悟空の方を振り向く。

悟空は竹林を指 指していた。

悟空「あそこなんか変な建物あんど」

悟空がそう言ったので3人はすぐそこをふり向く。

そこには、怪しげな建物が建っていた。

霊夢「きつと魔理沙のマスタースパークで竹が燃えて無くなって奇跡的に出てきたのね」

霊夢が説明気味に言う。

紫「そうみたいね」

紫（ちよつと展開がごり押しな気が……）

霊夢「魔理沙、一時休戦、異変の主犯は、この中にいるわ」

と魔理沙に告げる霊夢

魔理沙「異変の主犯って、月を隠したやつか？」

魔理沙は霊夢に尋ねる。

霊夢「ええ、そうよ」

と言う霊夢

魔理沙「そいつらから月を取り返したらあの夜も終わるんだよな？」

魔理沙は更に質問を重ねる。

霊夢「ええ、勿論!!」

霊夢は答える。

魔理沙「わかった。じゃあ、休戦だ!! 異変の主犯を倒しにいくぞ!!」  
そうやって魔理沙は謎の建物の方に向かった。

それに続いて、霊夢と悟空と紫も魔理沙の後を追うようについていく。

果たして建物の中には一体何者がいるのだろうか!!

次回いよいよ建物の中に侵入だ!!

## 魔理沙 v s 鈴仙 第41話

前回、魔理沙がマスターズパークで奇跡的に建物を見つけることに成功した悟空 霊  
夢 魔理沙そして、紫

4人は、無事、謎の建物へとたどり着いたのであった。

霊夢「どう見ても怪しい建物ね」

霊夢が建物を見上げながら言う。

紫「まあ、ここでもほぼ間違いないでしょ」

そう言って建物の中へと入って行く紫

悟空と霊夢と魔理沙も急いで紫の後を追う。

く建物の中へ移動く

悟空「広いところだな」

悟空が辺りを見渡しながら言う。

悟空の言う通り建物の中は広く普通に迷子になってもおかしくないレベルであった。

紫「ふふふ、悟空君 迷子になっちゃダメよ」

悟空をおちよくふ紫

悟空「オラ、迷子になるような歳じゃねえぞ！」

と紫に言い返す。

紫「ふふふ、ごめんなさい」

完全に紫は悟空を弄んでいた。

霊夢「2人ともふざけるのはもうおしまいよ」

霊夢が急に立ち止まり目の前を睨む。

悟空と紫と魔理沙はすぐさま霊夢が睨んだ方を見てみる。

そこには、ウサギのような耳の女性がいた。

???「遅かったわね。もう、全ての扉は封印したわよ。これで、もう姫を連れ出すこと

は出来ないわね!!」

と霊夢達を警戒しながら言ってくる。

霊夢「姫？」

霊夢は、少し首を傾げる。

???「あれ、よく見たら月の連中じゃないじゃない？」

そう言っつて、警戒をとく女性

霊夢「貴方 何者なの!!」

霊夢が威圧を込めていった。



??? 「私は鈴仙・優曇華院・イナバ。あなた方は？」

悟空 「オウは、孫悟空」

魔理沙 「私は霧雨魔理沙 普通の魔法使いさ」

紫 「私は八雲紫よ」

霊夢 「そして、私は、博麗霊夢 月の異変を解決にきたのよ！」

霊夢達は、それぞれ自己紹介をする。

鈴仙 「ふくん、まあ月の連中じゃ無くて良かったわ」

霊夢 「月の連中？」

霊夢が尋ねる。

だが、そんな霊夢の言葉に鈴仙はその大きな耳をかすことはなく

??? 「貴方達、人間には関係ないわ。早く帰りなさい」

と霊夢達に言う。

そこですかさず

紫 「あら、私は妖怪よ」

と紫が言った。

鈴仙 「妖怪だろうと人間だろうとどっちでもいいわ。邪魔なのよ、とにかく」

鈴仙は威圧を込めながら言ってきた。

霊夢「そうはいかないは、月を返してもらうまで生憎 私達は帰れないのよ!!」  
霊夢は鈴仙に言い返す。

鈴仙「帰らないのなら力づくで帰ってもらうことになります」

鈴仙は、霊夢達に警告する。

すると、霊夢は、鈴仙を鼻で笑い

霊夢「あんたごとくがそんなこと出来るわけないでしょ!」

霊夢が明らかに鈴仙の事を見下している。

鈴仙は、その言葉を聞き少し頭に血が上った。

鈴仙「出来るわけないですって、いいわ じゃあ、私の力を教えてあげる!!」

鈴仙は、戦闘態勢に入る。

霊夢「やれやれ、実際に痛い目に合わないといけない見たいね!!」

そう言いながら霊夢も戦闘態勢に入った。

霊夢「それじゃあ、こっちから行かせてもらうわよ!」

そう言つて霊夢が攻撃をしようとした時、

魔理沙「ちよつと待つて霊夢!!」

と言つて魔理沙は霊夢を止めた。

霊夢「なによ!!」

霊夢が魔理沙の方を振り向く。

魔理沙「お前、ここに来る前　慧音と戦ったんだろ？じゃあ、次は、私の番だぜ!!」  
と魔理沙は、霊夢に言い放つ。

霊夢は、頭をぼりぼりかき

霊夢「わかったわよ」

と言った。

霊夢　自身も今日だけで慧音　魔理沙の2人と戦っていたので少し疲れていたの  
ある。

魔理沙「よし、じゃあ　そのウサギ野郎　私が相手だぜ!!」

魔理沙は、鈴仙を指差しながら言った。

鈴仙「まさか、1人で戦うの？」

魔理沙に尋ねる鈴仙

魔理沙は、「ああ、もちろんだぜ!」と言い戦闘態勢をとる。

鈴仙「まさか、1人で来るとわ。まあ、いいか」

そう言って鈴仙も戦闘態勢をとる。

お互いに睨み合う魔理沙と鈴仙

沈黙の空間が2人に走る。

鈴仙「はあ!!」

鈴仙は、手からエネルギー弾を放つ。

魔理沙「よっ!!」

魔理沙は、サイドステップを使い冷静にそれを避けた。

そして、そのまま

魔理沙「はあ!!」

と鈴仙と同様にエネルギー弾を放つ。

しかし、

鈴仙「そんな物、当たらないわ」

鈴仙は、ウサギのごとく高くジャンプして

鈴仙「ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、ダ」

と多くの弾幕を放つ。

流石の魔理沙も「なに!」と声をもらす。

だが、魔理沙は、バックステップをしてその弾幕を避ける。

悟空「すんげえ、戦いが始まったばかりなのに もう、あんなに激しい戦いになつてんぞ」

と2人の戦いを見て興奮する悟空

紫「確かに凄い戦いね！それにしても あの魔法使いがここまで強くなってるなんて驚いたわ」

紫も2人の勝負をまじまじ見ながら言った。

霊夢「2人とも 話は後 今は魔理沙の戦いを見るわよ」

魔理沙（弾幕の数も威力もかなりのもんだな）

鈴仙（あの弾幕を躲すなんて これは、とんでもないやつね）

魔理沙も鈴仙もお互いの強さが大体分かってきた。

魔理沙・鈴仙（でも、私は負けない!!）

そう心中で呟きその瞬間お互いに弾幕を撃ち合う。

果たしてこの戦いどちらが勝つのか！

そして、姫や月の連中とは一体誰のことなのだろうか！

## 弾幕 v s 弾幕 第4 2話

魔理沙「だりやりやりやりやりや!!」

魔理沙が両手を交互に動かし連続で弾幕を放つ。

その弾幕は、先程まで放っていた弾幕よりも鋭く、そして、速かった。

鈴仙は、その弾幕を見て、とっさに（ヤバイ）と悟った。

鈴仙は、弾幕を避ける事だけに集中する。

鈴仙「よっ!」

そう声を漏らしながらギリギリ弾幕を避けて行く。

だが、弾幕の速さに合わし切る事が出来なかった。

鈴仙は、『シュツ』と頬をかすめる。

このままでは、まずい。

そう考えた鈴仙は、魔理沙の弾幕を躲しながらも弾幕を放った。

魔理沙は、急に飛んできた弾幕に驚き一度、弾幕を放つのをやめ、鈴仙の弾幕を避けた。

魔理沙「やるじゃないか!!」

鈴仙「そつちこそ!!」

お互い鋭い目で睨み合う魔理沙と鈴仙

そう、どちらも強さを認め合った証拠である。

魔理沙と鈴仙は、再び戦闘態勢をとる。

鈴仙「幻爆」「近眼花火（マインドスターマイン）」

先にスペルカードで先制攻撃を仕掛ける鈴仙。

魔理沙「よっ!」

魔理沙は、サイドステップで躲していく。

しかし、鈴仙の放ったスペルカードは、四方八方に爆風のようなエネルギー弾を出し

ており一度や二度、躲した所では、躲しきれなかった。

無駄な無い動きで躲していく魔理沙

しかし!

魔理沙「おわっ!」

その声と共に足を踏み外してしまった。

鈴仙は、チャンスとばかりに魔理沙にエネルギー弾を放つ。

魔理沙は、体のバランスを崩してしまって動く事が出来ない。

魔理沙に鈴仙のエネルギーが迫ってくる。

しかし、魔理沙は、諦めなかった。

魔理沙「魔符「ミルキーウェイ」」

なんと、魔理沙は、体勢が崩れた状態でスペルカードを使った。

そのスペルカードは、星のような形の弾幕であった。

魔理沙のミルキーウェイと鈴仙の近眼花火が激しくぶつかり合う。

『ドンっ』その音と同時に相殺し合う。

魔理沙「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

鈴仙「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

お互い息を切らしてしまう。

それもそのはず、お互い限界近くまで弾幕をあれだけのペースで出していたのである。

もう、2人の体力は、残りわずかであり 恐らく先に攻撃を当てた方の勝ちであろう。

魔理沙は、拳を『ギユツ』と強く握る。

魔理沙「次で終わりにするぜ！」

魔理沙は、鈴仙を睨みつけて言い放つ。

鈴仙「私は負けない！」

鈴仙は、体中からオーラのようなものを出し



鈴仙「幻爆」「近眼花火（マインドスターマイン）」「

鈴仙は、全身で一気にエネルギー弾を四方八方に放つ。

そのエネルギー弾は、恐らく鈴仙が今日 戦った中では一番の威力を持つてるであろう。

霊夢「凄い！なんて威力よ!!」

悟空「鈴仙の気が全方位に物凄い威力で放出されている。文字通り最終兵器と言うべきだな」

霊夢「火事場の馬鹿力か。厄介ね、これは」

魔理沙は、バックステップにサイドステップなどを駆使して、そのエネルギー弾をギリギリで避けていく。

途中、一度髪の毛と腕をかする事があったが冷静に気を見極めしつかりと躲して行く。

鈴仙「はあ!!」

避ける魔理沙に当てようと必死にエネルギー弾を放つ鈴仙

建物の中は、ボロボロになっていき爆風も凄い。

しかし、魔理沙は、鈴仙に近づいて行く。

勿論、危険は、承知の上である。

そして、魔理沙はミニ八卦炉を構える。

魔理沙「恋符…」

魔理沙は、八卦炉にエネルギーを溜め始める。

鈴仙は、それを見て焦りエネルギー弾の速さを更に上げた。

しかし、魔理沙は、そんな事おかまいなし

魔理沙「マスター…」

更にミニ八卦炉にエネルギーを溜める。

ミニ八卦炉には、小さなエネルギー弾が出来ており物凄いエネルギーが溜まっていた。

鈴仙「くっっ！」

鈴仙は、エネルギー弾を出しながらも少し空中へと逃げる。

しかし、魔理沙は、鈴仙を逃がさない。

魔理沙は、大きくジャンプをする。

すると、鈴仙は、チャンスと思い

鈴仙「空中じや避けられないわよ!!私の勝ちよ!!」

そう言つてエネルギー弾からエネルギー波に変えた。

しかし、魔理沙は、ミニ八卦炉に溜めたエネルギーを鈴仙のエネルギー波の上で滑ら

せる。

『ヒュルルルルン』

魔理沙は、そのままエネルギー波をたどっていきついに鈴仙の目の前にきた。

鈴仙「は!!」

予想外の避け方に驚く鈴仙

魔理沙は、すかさず驚いている鈴仙に向かってミニ八卦炉を向ける。

魔理沙「スパーク!!!」

そして、長時間溜めたマスタースパークを放つ。

マスタースパークは、鈴仙を包み込む。

鈴仙「うわぁー!!!」

鈴仙は、特大ダメージを食らってしまった。

そのまま壁に激突する鈴仙

鈴仙「くっ!」

鈴仙は、体中に傷がつきとも、戦える状態ではなくなった。

魔理沙「はあ、はあ、はあ」

魔理沙もかなりの体力を使ってしまい限界が近い。

そのまま膝をと手を地面につけた。

霊夢「大丈夫、魔理沙？」

霊夢は、すかさず魔理沙の所へと向かう。

そう霊夢は、魔理沙を心配してるのである。

魔理沙は、霊夢の方を振り向き

魔理沙「ああ、なんとか」

と言い立ち上がる。

悟空と紫もすぐに魔理沙の元へと来た。

悟空「大丈夫か、魔理沙？」

悟空も霊夢と同様に魔理沙に大丈夫かを尋ねた。

魔理沙は、「ちよつと、疲れたが大丈夫だぜ！」

と悟空に元気よく言った。

悟空「そうか、でも、一樣 気を分けとくぞ」

そう言つて悟空は、小さなエネルギー弾を手からだし、魔理沙に放つた。

魔理沙「おっ!!」

その瞬間、魔理沙の気が少しだけ回復した。

魔理沙「なんか、元気が出て来たぞ？」

悟空「オラの気を少し分けておいたぞ」

そう悟空は、自分の気を相手に分け与える事が出来るのである。  
魔理沙「レミリアの時にやってたやつか、ありがとよ悟空！」  
悟空にお礼を言う。

## 月を返せ!八意永琳 第43話

無事に魔理沙の回復を確認した霊夢は、鈴仙の方を見て

『タッタッタッタッ』

と足音をたてながらゆつくりと鈴仙に近寄る。

霊夢「さあ、月を返さない!」

鈴仙「う、うう、ううう」

倒れた体に鞭を打ち立ち上がろうとする鈴仙

しかし、

『バタンッ』

再び体を地面に落とし倒れ込んでしまった。

霊夢「もう、貴方に力は残ってないんですよ?」

倒れ込む鈴仙を見下ろすように見る霊夢

その表情には、圧倒的な威圧感が溢れ出ていた。

そして、再度 霊夢は、鈴仙に言う。

霊夢「月を返しなさい!!」

鈴仙は、そんな霊夢に逆らう事は到底出来ない。

悟空、魔理沙、紫は、異変解決を確信した。

しかし、鈴仙が予想外の言葉をこぼした。

鈴仙「私じゃ無理なのよ」

鈴仙は、自分では出来ないかと主張した。

霊夢「はあ！」

霊夢は、思わず声を漏らす。

それを聞いた悟空、魔理沙、紫は、霊夢の近くに行つた。

鈴仙「この月を隠したのは私じゃないわ」

鈴仙は、再度 霊夢達に言う。

魔理沙「じゃあ、誰が月をかくしなんだ？」

鈴仙「この廊下のや更に奥にいる方よ」

鈴仙は、永遠にあるのではないかとも思える廊下の方に指を指して言った。

霊夢と魔理沙と悟空と紫は、ジッとその廊下の先を見る。

霊夢「そう、わかつたわ。じゃあ、月を隠した奴の所まで歩いてやろうじゃないの！」

霊夢が気合を入れる。

そうして、4人は廊下を歩き出した。

と、思いきや急に霊夢が鈴仙の方を振り向く。

霊夢「そういえばこの建物はなんなの？」

鈴仙（今更……）

そう今更ながらこの建物が何なのか霊夢達は、把握 出来ていなかった。

鈴仙「ここは、永遠亭 月の奴らから隠れ住むために建てた場所」

鈴仙は、軽くだが説明をした。

どうやら、この建物は、永遠亭と言いつ月の連中から隠れるために建てられたようだ。

この説明を聞いた4人は、勿論 ある疑問が頭に残る。

そう、それは、

霊夢「さっきから言ってる月の連中って誰なの？」

そう月の連中である。

霊夢達は、ここに来て何度も耳にした単語であり1番の謎でもあった。

鈴仙「……」

しかし、鈴仙は、口を開くことはなかった。

まるで、誰かを隠してるかのように

霊夢は、そんな鈴仙を見て

霊夢「言いたくないならいいわ。この先にいる奴らに聞くだけだから」



そう言つて廊下を歩き始めた。

悟空、魔理沙、紫も霊夢に続き長い廊下を歩き始めた。

（10分後）

霊夢「……………」

魔理沙「……………」

悟空「……………」

紫「……………」

4人は無言で廊下を歩いていった。

分かつてはいた事だが、廊下は長く本当に永遠に続いているのではないだろうかとも思えるほどだった。

『タッタタッタ』

あまりにも4人が無言過ぎるので足音が耳に入ってくるほどでもあった。

そんな状況、霊夢と魔理沙が耐えられる筈がなく。

霊夢「ああー!!」

魔理沙「ああー!!」

と呻き声を出す2人

悟空「どうしたんだ？」

すかさず2人に尋ねる悟空

霊夢「この廊下 長すぎんのだよ!!」

ついに霊夢が愚痴をこぼした。

それにつられるように魔理沙も

魔理沙「本当 そうだけ。ちよつと長すぎるぜこの廊下」

霊夢と似たような事を言う。

悟空「おめえ達、前に冥界でも似たようなこと言つてなかつたか?」

悟空が霊夢と魔理沙に言った。

霊夢「そう言えば、言つてたわね」

と霊夢が答えた。

魔理沙「あん時も あの階段きつかったからなく」

魔理沙も悟空に返答する。

悟空「よく考えてみるよ!前は階段だったんだぞ!階段に比べたら廊下なんて楽なものじゃねえか」

悟空は、自分なりの言葉で必死に霊夢と魔理沙を元氣付ける。

霊夢「確かにそうだけど」

魔理沙「まあ、階段よりは、マシだな」

と同意し合う2人

とそんな会話をかわしている

紫「悟空君、霊夢、白黒魔法使いおしやべりは終わりのようよ」

そう呟き紫が足を止めた。

理由は、もう言うまでもないであろう。

そう4人の前には白色の髪の女性が立っていたのである。

その女性は、さつき戦っていた鈴仙よりも強い気を持っており威圧感もかなりの物だった。

???「ようこそ、永遠亭へ。私は、八意永琳と申します」

女性は、まず自己紹介を軽くして来た。

霊夢達も

霊夢「私は、博麗霊夢　博麗の巫女よ」

魔理沙「私は、霧雨魔理沙　普通の魔法使いだぜ！」

悟空「オラは孫悟空　この2人の付き添いだ」

紫「私は、八雲紫　幻想郷の妖怪の賢者よ」

それぞれ自分流の自己紹介をしていく。

永琳「あなた方人間と妖怪が私達になんのようなのですか？」

永琳が霊夢達に質問をした。

勿論 その質問の回答は、

霊夢「そんなの決まってるでしょ。異変解決よ!!」

である。

永琳は、少し首を傾げて「異変解決?」と霊夢の言葉を繰り返して質問を重ねた。

魔理沙「ああ、そうだけ!お前だろ月を隠した奴は!!」

魔理沙が永琳に指を向ける。

永琳は、腕を組み少し考える動作をとった。

そして、

永琳「ええ、確かにそうよ!!」

と永琳が答えた。

霊夢は、それを聞き即座に

霊夢「なら、月を返しなさい!!」

と言った。

すると、永琳は、

永琳「いいわよ」

とすんなり答える。

4人は、あまりにもあっさり過ぎたので少し戸惑う。  
しかし、現実には、そう甘くはない。

永琳「ただし……………」

## 永遠亭の過去 第44話

永琳「ただし月を返すのはこの夜が終わってからよ！」

永琳は、腕を組み霊夢達に告げた。

霊夢達は、少し えっ となる。

しかし、すぐに我に帰り永琳にツツコミを入れた。

霊夢「なんで今じゃダメなのよ！」

永琳「それは、鈴仙にも聞いたでしょ。月の連中から姫さまを守るためよ！」

永琳は、冷静に返答した。

その時、ふと魔理沙が何かを思った。

魔理沙「そう言えば、月の連中って一体 なんなんだよ？」

そうそれは、言わずもながら月の連中である。

霊夢達は、まだ、1度もその説明をされていなかったのだ。

永琳は、手を顎につけて少し考える。

そして、

永琳「別に言ってもいいか」

と呟いた。

永琳「いいわ。説明してあげる」

永琳は、霊夢と目を合わせる。

永琳「この永遠亭の主人、輝夜と言う方がいるの」

永琳は、説明を始めた。

おそらく、とても長〜い話しになるであろう。

霊夢「輝夜？それって貴方達が言う姫様なの？」

霊夢は、永琳の説明の合間に口をはさむ。

永琳「そうよ。姫様とは、蓬莱山 輝夜様の事よ。ついでに、私は、姫様の従者よ」

説明の間に霊夢に返答する。

霊夢「ふ〜ん、で、その輝夜がどうしたったのよ？」

質問を重ねていく霊夢

永琳「せっかちねえ。言われなくても今から説明するわよ」

そう霊夢に告げる永琳

霊夢は、質問をやめ静かに永琳の話を聞くことにした。

そして、永琳は、再び説明に戻る。

すると、いきなり永琳がすごいことを言い出した。

永琳「で、その姫様は、昔 月に住んでいたの。」

なんと姫様（輝夜）とは、地球の住人ではなく月の住人であった。

霊夢と魔理沙と紫には、驚いた表情が一瞬浮かぶ。

それもそのはず、彼らにとっては、月の住人すなわち宇宙人

悟空以外は、宇宙人とは、当たり前だが戦ったことはないのである。

しかし、すぐにその驚きは消え再び真剣な表情に戻る。

永琳「でも、ある日……」

そう言つて下を向く永琳

永琳「そうある日 姫様は、罪を犯してしまったの」

永琳は、暗い過去を振り返るようにどこか悲しめな目をしていた。

そして、少し昔を振り返っているのか黙り込む永琳

霊夢「その罪つてのは？」

そんな永琳を見て急かす霊夢

永琳は、顔をゆつくりとあげる。

永琳「その罪つていうのは、不老不死の薬を飲んだの」

なんと、姫様（輝夜）が犯した罪とは、不老不死の薬を飲んだ事である。



永琳「不老不死の薬とは、名の通り歳をとらなく死ぬ事もなくなる。月では、それ、とても重い罪であったの」

そうゆつくりと告げる永琳

霊夢達は、それを聞いて大体は、察した。

紫「なるほどね、それで刑罰としてここ（地球）に送られたってところかしらね」

と紫が永琳に言った。

永琳は、「その通りよ」と返答する。

霊夢と魔理沙は、とてもスケールの大きい話しだったので理解するまで少し間があったがすぐに理解した。

しかし、この話には、疑問が残る。

霊夢「ちよつと待って、刑罰で地球に送られたのになんで今 月の奴らから逃げてんの？ていうか、そこが知りたいんだけど！」

そうそれは、勿論 なぜ月の住人から隠れているかである。

永琳は、説明を続けた。

永琳「それは、刑罰が明けて月から迎えが来たの。でも、姫様は、月には、帰りたいがらなかった。だから、私と姫様は、隠れる事を決意したの。ついでに、月を隠した理由は、その追つてが幻想郷に来るための道を閉ざすため」

永琳は、一息出す。

永琳「これで、大方 説明は、終わったわ」

そう霊夢達に告げる永琳

霊夢「成る程、貴方達が月を隠した理由は、よく分かったわ」

霊夢は、永琳に告げる。

永琳は、霊夢の方を向き

永琳「じゃあ、見逃してくれるかしら？」

と霊夢に頼んだ。

霊夢「ダメよ」

なんと霊夢は、一言ダメと力強く言った。

永琳「どうして？夜が明けたら返すわよ？」

再び霊夢に頼む永琳

しかし、霊夢の気持ちは、揺るぎない

霊夢「ダメっていつてるでしょ！」

永琳「もう、強情ね」

と霊夢に言う。

霊夢「私は博麗の巫女なの！私は、異変を解決するためにここに来た。だから、私自

身の力で異変を解決するまでは、絶対に帰ったはしないわ!!」

そう霊夢には、霊夢なりのプライドがあるのである。

いくら、相手に理由があろうと幻想郷に異変を起こしてる限り霊夢は、その異変を自分で解決する。

永琳は、はあ と息をもらす。

永琳「本当は、力で解決したくわないのだけれどしようがないわね!」

そう言うのと永琳は、戦闘体勢をとった。

霊夢「どうやら、痛い目に会いたい見たいね」

霊夢も同様に構え出す。

霊夢「貴方がその気なら私は容赦しない!!かかってきなさい!」

霊夢は、威圧感に溢れる大きな声を放つ。

その言葉には、永琳に対しての威嚇。

そして、必ず勝つと言う気合いの意味が込められていた。

永琳「普通の人間が私に勝てると思わない事ね!」

こうして、2人の戦いが始まった。

悟空と魔理沙と紫は、戦いに巻き込まれないように少し距離をとる。

果たして、霊夢と永琳どちらが勝つのか!

そして、永琳の実力とは、どのくらいのものなのだろうか！

## 靈夢 V S 永琳!! 第45話

靈夢「はあっ!!」

靈夢は、挨拶代わりに右手からエネルギー弾を放った。

威力的には、大したものではないがスピードは、とてつもないものであった。

しかし、永琳は、体をほんの少し動かし冷静に躲す。

靈夢「へえ、今のを躲すのね」

靈夢は、右手を下ろし永琳に告げた。

永琳「私にあの程度の攻撃じゃ当てられないわよ」

そういいながら強い眼光で靈夢を見る。

その目には、絶対の自信を感じるほどであった。

靈夢は、少しながら恐怖を感じてしまった。

靈夢「あれを一回 躲したぐらいで調子に乗るんじゃないわよ!!」

そう言って一気に永琳に近づく。

靈夢「どりゃあ!!」

靈夢は、パンチを永琳に放った。

しかし、そのパンチは、永琳によつて的確に躲されてしまった。

霊夢「なに!!」

驚く霊夢

しかし、その驚きは、パンチを躲されたからではない。

そう、永琳は、手にエネルギーを溜めていたのである。

永琳「はあっ!!」

永琳は、そのままエネルギー弾を霊夢に放った。

霊夢は、急いで避けようとしたがパンチの勢いが残っており体を動かすことが出来なかつた。

『バンッ!』

そして、無残にも爆音が鳴り響く。

霊夢は、エネルギー弾に超至近距離から食らってしまったのである。

霊夢「うわーうわー!!」

そのまま霊夢は、吹き飛ばされてしまった。

『ドンッ』

霊夢は、背中を強く壁にぶつける。

霊夢「う、うう」

そのまま体を床に落としてしまう霊夢

魔理沙「霊夢ー!!」

魔理沙は、驚き霊夢の名前を呼ぶ。

悟空と紫も唾然としてしまい霊夢の方を向く。

そんな3人を見て永琳は、

永琳「人間にしては凄かったけど所詮 私にとってはこの程度なのよ!」  
と告げる。

魔理沙と紫は、すぐさま戦闘体勢をとる。

2人には、怒りの表情が浮かび上がっていた。

永琳「2人がかり? まあ、どっちでもいいけど」

そう言つて永琳も戦闘体勢をとる。

悟空「待てお前達!!」

悟空が2人を止める。

魔理沙「なんだよ悟空!!」

魔理沙は、悟空の方を振り向き悟空に尋ねる。

悟空「よく見てみろよ」

そう言つて悟空が何処かを振り向く。

魔理沙「なんだよ、そっちに何かあるのか？」

そうブツブツ言いながら魔理沙は、悟空の振り向いた方を見る。そして、魔理沙は、目を見開く。

そう悟空と魔理沙の見た方には、立ち上がった霊夢がいたのだ。

霊夢「ちよつと、魔理沙、紫　まだ私は負けてないわよ！」

永琳「なに!!」

永琳もすぐさまそっちに振り向く。

霊夢「私はしぶといのよ！」

素晴らしいながら戦闘体勢をとる霊夢

永琳「まさか、あの距離からの攻撃を耐えるなんて！」

永琳は、少し硬直する。

永琳（少しはやるようね）

そう心中で呟き。

永琳「いいわ、私の本気を見せてあげる!!」

永琳は、そう霊夢に告げた。

そして、

永琳「天丸」「壺中の天地」





霊夢「夢符「二重結界」」

なんと霊夢もスペルカードを使った。

しかも、そのスペルカードは、攻撃用ではなく自分の周りに結界のような物を張るものであった。

『ドドドドドドドドーン』

永琳が放った弾幕は、次々と霊夢の結界にぶつかり消滅していく。

霊夢「残念、惜しかったわね！」

全ての弾幕を防ぎきった霊夢は、結界をといた。

悟空「すげえ、霊夢あんなことまで出来たんか」

永琳「まさか、防がれるなんて！」

永琳には、焦りの表情が浮かんでいた。

霊夢「さーて、次はこっちの番ね！」

そう言つて霊夢は、スペルカードを構える。

霊夢「霊符「夢想封印」」

霊夢の使つたスペルカードは、勿論 夢想封印である。

『シューーン』

霊夢の夢想封印は、風を切る音を出しながら永琳を襲う。

永琳は、驚きとつきに夢想封印を躲していく。

『シユーン』『シユーン』『シユーン』

しかし、いくら避けようとも次々と弾幕がくる。

永琳は、弾幕が来るたびに、避ける作業を繰り返していた。

『ドンツ』『ドンツ』『ドンツ』

永琳の躲した弾幕は、壁に次々と激突していく。

そして、

『ダーーーーーーン』

ついには、その音と共に廊下の天井と壁が崩れ落ちてしまった。

永琳「な、建物が！」

慌てる永琳

しかし、その中 霊夢、魔理沙、悟空、紫は、とんでもないものを目撃した。

霊夢「こ、これは、一体!!」

魔理沙「一体、どうなってるんだ？」

魔理沙も周りをキョロキョロする。

悟空「わかんねえ」

紫「一体、これは！」

4人は、慌てふためき今の状況がよく分からない。  
一体、4人が目撃したものは！

## ついに完成！界王拳！！ 第46話

霊夢の夢想封印によつて壁　そして、天井が崩れ落ちてしまった永遠亭。  
しかし、霊夢達は、そこで何かを目撃した！！

霊夢「こ、これは、一体！！」

驚き周りを見渡す霊夢

そこには、なんと宇宙空間のような空間が広がっていたのである。

悟空「一体、どうなったんだ？」

首を傾げる悟空

すると、永琳が「ふっ」と笑う。

霊夢は、その笑いにすぐさま気づく。

霊夢「ちよつと、何よ！ここどこよ！！」

霊夢がそう言ったとき！

なんと、さつきまであつた床が消えた。

霊夢「えっ！！」

驚く霊夢

床がなくなったそこはもはや完全な宇宙空間と言っても過言ではないだろう。

霊夢達はもはや訳がわからず てんやわんや する。

そんな霊夢達を見て永琳は説明を始めた。

永琳「ここは、偽の月と地上の間 貴方達は偽満月の幻想に騙されてここに来たのよ！」

なんと、霊夢達は、偽満月の幻想に騙されていたのである！

衝撃の事実を伝えられた霊夢達

これは、流石の霊夢達でも万事休す かと思われたとき!!

霊夢「なんだそういう事」

霊夢は、なんの焦りも見せなかった。

いや、霊夢だけでは ない。

悟空も魔理沙も紫も何一つ焦りの表情を見せない。

永琳は、そんな霊夢達を見て、

永琳「あら、思ったより余裕そうね」

と問いかけた。

霊夢「当たり前でしょ!こんな事で焦ってたら巫女は務まらないわ」

永琳に返答する霊夢

永琳は、少し沈黙する。

霊夢達が焦って乱れなかったのが見当違いだったのだろう。すると、永琳が沈黙している間に紫がある事に気付いた。

紫「ちよつと3人とも あれ見てみなさい!!」

そう言つて指を指す紫

悟空、魔理沙、霊夢は、紫が指 指した方向に振り向いた。

霊夢「あ、あれは」

静かに霊夢は、答えた。

悟空「月じゃねえか」

そうそこには、隠された筈の月があつたのである!

「魔理沙「一体、なんで! あいつが隠したんじゃ無かつたのか?」

紫「確かその筈だけど」

霊夢達は、訳がわからず疑問が生まれて来た。

永琳「確かに月は隠したわ」

そんな霊夢達を見て答える永琳

霊夢「じゃあ、なんでここにあるのよ!」

霊夢が永琳に尋ねた。

永琳「さあ、なんででしょうね」

しかし、永琳は、霊夢達をじらし答えようとしなかった。

霊夢「答えないの? なら、いいわ。ここが、どこであろうと私は目の前にいる敵を倒すだけよ!!」

そう言つて霊夢は、戦闘体勢をとる。

永琳「次はさっきのようにはいかないわよ!」

と言い永琳も同様に戦闘体勢をとった。

霊夢「……………」

永琳「……………」

お互いに睨み合う2人

おそらく、お互いにどちらが先に攻めるのか伺つてるのであろう。

霊夢「はあああ!!」

その中で先に攻めたのは霊夢であった。

霊夢は、永琳に鋭いパンチを連続で放つてゆく。

そのパンチは、先ほどよりも素早く、そして、重かった。

しかし、永琳は、見事なまでに霊夢のパンチを躲していく。

そして、



永琳「はあ！」

『ダンッ！』

カウンターパンチを放つ永琳

霊夢「ぐはっ!!」

口から唾液が飛び散り腹をおさえる霊夢

そんな霊夢に追い打ちをかけるように

永琳は、霊夢にエネルギー弾を放つ。

霊夢「うわー!!」

数メートル吹っ飛ばされる霊夢

しかし、幸い壁がなかったお陰で背中を激突させる事はなかった。

霊夢は、吹き飛ばされてる中 一回転して体勢を立て直す。

霊夢「はあ、はあ、はあ」

だが、霊夢は息を切らしてしまった。

霊夢「霊符」「夢想封印」

霊夢は、やけくそで夢想封印を使った。

永琳「同じ技は、くらわないわよ！」

永琳「天呪」「アポロ13」

そう言つて夢想封印に対して弾幕を放つ永琳

勿論 放つた目的は、夢想封印を相殺させるためである。

『ドンッ』『ドンッ』『ドンッ』『ドンッ』

霊夢の夢想封印は、永琳のアポロ13によつて相殺されていった。

霊夢「なに!!」

流石の霊夢も焦り出した。

霊夢（こうなつたら一か八か……）

霊夢は、焦りの中で何かを考える。

恐らくそれは、霊夢の最後の手段であろう。

『ヒュッ』

その時、霊夢の目の前から風を切る音が聞こえた。

そう永琳が一気に目の前まで来たのである。

永琳「貰つたわ!!」

そう言つて両手を合わせて霊夢に向けた。

これは、霊夢の敗北か

そう思われた時

霊夢「界王拳!!」

なんと霊夢は界王拳を使った。

勿論、実戦では、愚か練習でも一度も成功させた事はなかった。

永琳は、霊夢が界王拳を使った衝撃で吹き飛ばされてしまう。

永琳は、少し吹き飛ばされたところで体勢を立て直し霊夢を見た。

永琳は、驚いた。

そう霊夢の体からは、赤いオーラが出ていたのである。

永琳「どうなってるの!？」

戸惑いを隠せない永琳

霊夢は、そんな永琳を見て答えた。

霊夢「これは、界王拳！私の奥の手よ!!」

霊夢が永琳に言う。

永琳は、首を傾げて「界王拳？」と霊夢の言葉をリピートするように尋ねた。

霊夢「ええ、界王拳 あらゆる戦闘能力を増幅させるつい最近 悟空に教えてもらっ

た技よ!」

言い終えた霊夢は、一呼吸出す。

霊夢「ふう」

そして、集中しだす霊夢

霊夢「そして、これが……………」

全身に力を込めていく霊夢

霊夢「はああああ!!」

周りがある赤いオーラが更に濃くなっていく。

霊夢「10倍界王拳——!!」

## ついに登場 永遠亭の姫様！ 第47話

霊夢「100倍界王拳!!」

そう叫び赤いオーラを濃くしていく霊夢

悟空「すごい、霊夢まさかこんな土壇場で界王拳を完成させるなんて！しかも、一気に100倍まで上げやがった!!」

霊夢が界王拳を使ったことに未だ驚きを隠せない悟空

いや、悟空だけではない勿論 魔理沙そして、紫さえも驚きを隠せずにいたのである。

魔理沙「ちつ、霊夢に先を越されちゃったようだな！」

魔理沙は、少し微笑み ライバルとして先を越された悔しさ

そして、霊夢が強くなったと言う嬉しさがその言葉には、込められていた。

霊夢「はあ!!」

霊夢が急に永琳に一瞬で近づく

そして、見事なまでの一撃を永琳にくらわせた。

そのパンチの重さ 速度ともに今までの霊夢とは、比べ物にはならないものであつ

た。

永琳「なっ!」

流石の永琳もその速度のパンチを躲すことが出来ず直撃してしまう。

永琳「ぐはっ」

と声を出し腹をおさえる。

霊夢は、そんな永琳を見下ろし

霊夢「どうやら差がつきすぎてしまったようね」

と言った。

永琳「くっ!」

挑発された永琳は、苦しむのをやめ再び戦闘体勢をとる。

その時、

『ビリビリ』

霊夢の体から電気の走る音が流れる。

霊夢「流石の私も10倍界王拳は、そろそろ限界みたいね」

素晴らしいながら永琳を睨む。

霊夢「次で決めるわよ!!」

霊夢は、スペルカードを構えた。

霊夢 「霊符 「夢想封印」」

そのまま霊夢は、夢想封印を使う。

『ヒューン』『ヒューン』『ヒューン』

霊夢の弾幕がとてつもない速度で永琳に飛んでいく。

永琳（もう ここまでね）

永琳は、顔を落とし負けを確信した。

霊夢（勝った!!）

そう心中で呟く霊夢

そして、永琳に残り1メートルまで迫る弾幕

その時!!

『ヒューン』

その音と共に永琳が消えた!!

霊夢 「なに!!」

驚く霊夢

そして、後ろから気を感じた。

霊夢は、すぐさま後ろを振り向く。

??? 「大丈夫 永琳？」

そこには、永琳と女性が立っていた。

どうやら、その女性が永琳を助けたようだ。

永琳「大丈夫です。姫様」

なんと永琳は、女性に対して姫様と言った。

霊夢「姫様ですって……」

すぐに姫様と言う言葉に反応する霊夢

輝夜「そう私はこの永遠亭の姫 蓬萊山輝夜よ!」

輝夜が霊夢の方を振り向きながら言った。

輝夜「よくも永琳を傷つけたわね!」

そして、怒りの表情を見せて霊夢を睨みつけた。

その迫力は、とてつもなく威圧感だけで体が固まってしまいそうな程であった。

霊夢「そっちが月を隠したからでしょ!」

輝夜にいい返しながら一度界王拳を解いた。

輝夜「月は朝になったら返す。永琳もそう言ったはずよ」

輝夜は、怒りの混じったような声で霊夢に言い放つ。

霊夢「そんなの関係ないわよ」

輝夜「関係ないですって!」



輝夜は、強い眼光で霊夢を睨む。

輝夜「月を隠す事になった元の原因は私！月を返して欲しいなら私と戦いなさい!!」

輝夜は、霊夢に言った。

永琳「姫様！わざわざ姫様が戦わなくとも……」

輝夜の顔を見て言う永琳

輝夜「いいのよ！私が戦いたいだけだから。それに、貴方の仇もとりたいしね」

輝夜や微笑んだ顔で永琳を見て答えた。

すると、霊夢は、「ふんっ」と鼻で輝夜を笑う。

霊夢「たしかに貴方の気は大きいわ。だけど、10倍界王拳を使った私には、貴方は

絶対になわなない！」

霊夢は、自分は絶対に勝つと言い切った。

しかし、輝夜は、何一つ動揺しなかった。

輝夜「たしかに普通に戦ったら私には勝ち目がないでしょうね」

輝夜が言った。

霊夢「でしょ？なら早く諦めてくれないかしら」

と降参を進める霊夢

しかし、輝夜は「ふふっ」と笑う。

霊夢「何がおかしいのよ!!」

輝夜「私は、こう言ったのよ。普通に戦ったら負ける。そうあくまで普通に戦ったらの話よ」

輝夜が言った。

霊夢は、ポカーンとなる。

だが、すぐに我に返って、

霊夢「じゃあなに? 貴方は凄い戦い方でもするのかしら?」

霊夢が輝夜に質問する。

輝夜「それは、戦えば分かるわ!」

そう言って輝夜は戦闘体勢をとった。

霊夢「まったく! いいわ。私の力見せてあげるわよ! 10倍界王拳」

霊夢は、10倍界王拳を使い戦闘体勢をとる。

霊夢「……………」

輝夜「……………」

お互い睨み合い様子を見合う。

魔理沙「バカなやつだぜ！ 霊夢は、界王拳を使っているんだぞ！ いくらあの姫様つてやつが強くて、霊夢に勝てるわけじゃないか」

魔理沙は、霊夢の勝利は確実だと思っっているようだ。

しかし！

悟空「それは、どうかな」

悟空が魔理沙に呟く。

魔理沙「どう言うことだ悟空？」

思わず悟空に質問をする魔理沙

紫「分からないの？」

その会話に入るように紫が言った。

魔理沙「分からねえよ！ なんだよ霊夢は勝てないって言うのか？」

魔理沙は、少し怒りの混じった声でいった。

悟空「まあ、落ち着けて魔理沙。たしかに霊夢は強い。けどまだあいつは界王拳に慣れきっていない。その状態で欲張って10倍なんて使っただぞ。そんな体力が持たねえじゃねえか」

悟空が魔理沙に説明する。

魔理沙「たしかにそうだけど……でも、霊夢ならあいつを界王拳での体力切れにな

るまでに倒せるだろ?」

そう、悟空の説明だけでは霊夢が負ける可能性は、かなり低いのである。

悟空「いや、さっきあの輝夜ってやつ永琳を助けただろ?」

魔理沙「ああ、そう言えば助けてたな」

悟空「その時、輝夜の動き見えたか?」

悟空が魔理沙に言う。

魔理沙は、少し考える動作をいれる。

魔理沙「そういえば、見えなかつた!あの時、霊夢の夢想封印をくらいかけの永琳が急に消えたのが見えただけで……」

そうである輝夜は、周りの者が認識することが不可能な程の速度で永琳を助けていたのである。

その速度は、悟空ですら捉えることが出来ていなかった。

果たして、輝夜とはどんな能力を持った者なのか!

## 靈夢敗北！恐るべし輝夜の能力 第48話

ついに現れた異変の主犯 蓬萊山輝夜

靈夢は、異変を解決すべく最後の戦いを始めた。

『ヒューーン』↑界王拳独特の効果音

靈夢「はああ！」

靈夢は先制攻撃を仕掛けるべく輝夜に超スピードで近づきパンチを放った。  
しかし、

靈夢「ぐはっ！」

気がつくくと靈夢は、輝夜にカウンターを食らっていた。

靈夢「くっ！」

腹を抑えて一度距離をとる靈夢

輝夜「あらあら、貴方の実力はそんなもの？」

輝夜は、余裕の表情を浮かべて靈夢をみる。

靈夢は、少しイライラして、

靈夢「一度カウンターを合わせたぐらいで調子に乗るんじゃないわよ！」

『ヒューーン』

そう言つて再び超スピードで輝夜に接近する。

霊夢「だりやああ!!」

そして、輝夜に向けてパンチを放った。

その速度は、凄まじく普通の者では避けることが出来ないであろう。

しかし、『スカッ』

なんと、霊夢のパンチが当たる瞬間 輝夜が消えたのである。

霊夢「何!!」

驚く霊夢

輝夜「どこを見てるのかしら?」

その声と共に後ろから輝夜が霊夢にパンチを放った。

いくら、界王拳を使っている霊夢でも急な後ろの攻撃には、反応することが出来ずそのままパンチを食らってしまう。

霊夢「うわー!!」

数メートル吹き飛ばされてしまう霊夢

霊夢「くっ!」

しかし、霊夢は空中で一回転し体勢を立て直した。

霊夢「はあ、はあ、はあ」  
息を切らす霊夢

魔理沙「なんて奴だ！ 霊夢にカウンターを合わせやがった。いや、それだけじゃないあいつの動きが捉えられない!!」

驚く魔理沙

悟空「確かに、一体どうやってんだ？ まさか、咲夜みてえに時間を止めてるのか？  
………」

悟空が時間を止めていると推測を入れた。

確かに輝夜の瞬間移動できな動きは、時間を止めているしか考えられないことであつた。

紫「まあ、恐らくそうね……」

紫も悟空の考えに同感する。

その時、

永琳「いいえ、違うわ」

永琳がこちらの話を聞いており悟空達に言った。

永琳「姫様の能力は、時間を止めているわけではないわ」

そういいながら悟空達の方に体を向ける永琳

永琳「そう、姫様の能力は、永遠と須臾を操る能力よ」

輝夜の能力を教える永琳

しかし、悟空は「須臾なんだそれ? うめえんか?」

当たり前だが須臾の意味を知らなかった。

永琳「食べ物じゃないわ! 要するに一瞬の事。姫様は、その一瞬を集めて自らの時間を作ってるのよ」

簡単に説明をする永琳

しかし、悟空は首を傾げる。

悟空「要するにどういう事だ? 時間を止めるのと一緒じゃねえんか?」

と次々と永琳に質問をしていく。

永琳「まあ、例えば時間の流れを砂時計と例える。砂の流れは時間の流れとして、流れる粒一つ一つが須臾。一瞬の時間よ。時間とは無数の短い時間が積み重なっており、連続したように見えるけれど実際は、短い時間の集まりなの。砂時計って全部繋がって見えるけど実際は砂の集まりでしょ。そして、さつき貴方達が言ってた時間を操る事とは、砂の量を増やせば早く砂を落とすは時間が早くなる。砂の量を減らせば砂は遅く落ちるは時間が遅くなる。そして、流れる砂を0にすれば時間が止まるってわけ



よ。それに対して姫様の能力は、その砂の一粒一粒を小瓶に写すような物なのよ。そして、小瓶に砂を保存することが永遠を操ると言うこと。そして、その小瓶に溜めた時間を一気に使う。これが須臾を操る能力」

永琳が細かく説明をした。

悟空「よく、わかんねえや」

しかし、悟空はイマイチ永琳の説明の意味が分からなかった。

紫「要するに人が判断出来ないような一瞬で動くことが出来るのよ」

紫がささやくように悟空に言った。

悟空「なんだそういうことか」

やっと理解することの出来た悟空

一方その頃 霊夢は

霊夢「だりゃ！」

輝夜にひたすら攻撃を繰り返していた。

輝夜「どうしたのスピードが落ちてきてるわよ」

そう言つて霊夢にパンチを食らわせる。

そう霊夢は界王拳の負担もあり体力が底を尽きようとしているのである。

そして、ついに

霊夢「はあ、はあ、はあ」

その息切れとともに霊夢から赤いオーラが消えてしまった。

霊夢「なっ!」

驚く霊夢

そんな霊夢を見て輝夜は、「あらあら、赤いオーラ消えちゃったわね」

少し微笑みながら言う輝夜

霊夢「ちっ」

舌打ちをする霊夢

輝夜「それじゃあ、反撃といくわよ!」

そう言つて霊夢に近づく。

輝夜「はあ!」

そして、霊夢にパンチを放った。

霊夢「ぐはっ!」

口から唾液が飛ぶ霊夢

しかし、輝夜は、追い打ちをかけるように、

輝夜「だりやりやりやりやりや!」

と連続攻撃を霊夢に放つ。

霊夢「くっ！」

そう声をもらしながら苦しむ霊夢

輝夜は、そんな霊夢を見下ろすように見る。

輝夜「これで終わりよ!!」

輝夜は、霊夢に力を込めたパンチを放った。

今の霊夢にそれを避ける気力は ない。

霊夢（負けた）

霊夢は、心中でそう呟く。

その時！

『。パシッ』

輝夜のパンチが何者かによって受け止められた。

輝夜「なに！」

驚く輝夜

そう言うまでもないであろう輝夜のパンチを受け止めたのは、悟空である。

霊夢「悟空！」

霊夢は悟空の名前を呼ぶ

悟空「ふう、あぶねー。おい、大丈夫か霊夢」

霊夢 「助けてくれたの？」

悟空 「あたりめえだろ」

霊夢 「ありがとう」

悟空にお礼を言う霊夢

## 輝夜を破れ！悟空出動！！ 第49話

輝夜「あら、お仲間？」

一度パンチした手を戻す輝夜

輝夜（この子、さっきのパンチを簡単に受け止めた）

霊夢「ありがと、悟空。それじゃあ、あとは私に任せなさい」

霊夢が再び輝夜の顔を見る。

しかし、悟空は、「いや、ここはオラがやる。」

と霊夢に言った。

霊夢「えっ」

と反射的に声を上げて悟空を見る霊夢

霊夢「なんで、こいつは私が相手してたのよ！」

霊夢が悟空に言い放つ。

霊夢は、このまま負けて終わるのが嫌なのであろう。

悟空「ダメだ、界王拳を10倍まで上げてたんだぞ。おめえには、体力が残ってねえだろ」

と霊夢に言う悟空

これは、悟空の優しさなのかも知れない。

霊夢は、顔を落としシヨンボリとする。

霊夢「分かったわよ」

霊夢がささやくように言った後、霊夢は、魔理沙と紫の所に行った。

悟空「ありがとよ、霊夢」

悟空は、ささやくような声で霊夢に言った。

輝夜「あら、貴方一人で戦うの?」

輝夜は悟空を見て言う。

悟空「当たり前えだ」

そう言つて輝夜を睨む悟空

輝夜「貴方みたいな子供に私が倒せるかしら?」

悟空をあざ笑うかのように言う輝夜

悟空「オラ子供じゃねえぞ」

輝夜「子供じゃない?」

その言葉に疑問を持った輝夜は悟空の体をジーツと見つめた。

輝夜「どこからどう見ても子供じゃない?」

と悟空に言う。

悟空は、少しムツとなる。

輝夜「まあ、子供だろうが大人だろうがどっちでもいいの。問題は、君が私より強い  
か弱いかなのよ」

輝夜が悟空を見下すように言った。

すると、悟空は、ふつ　と笑う。

悟空「それならオラの方が強いと思っぞ！おめえはオラには敵わねえ」

悟空が口調を少し強くして言う。

輝夜はその言葉に驚く。

輝夜「私より強いですって！」

怒りの混じった声で言う輝夜

そんな輝夜に対して悟空は、「まあ、見てろって」

といい気を溜める体勢をとる。

悟空「はあああ！」

迫力のある声とともに悟空の髪が逆立ち金色に輝く。

流石の輝夜もそれを見て驚きを隠せない。

輝夜「す、すごい！近くにいますだけでも迫力だけで潰されそうだわ」

輝夜が目を見開き悟空を眺める。

悟空「さあ、始めようぜ！」

そう言つて戦闘体勢をとる悟空

すると、輝夜は、「ふふふ」と笑みをこぼす。

悟空「なにがおかしい？」

輝夜に尋ねる悟空

輝夜「貴方は、強い。でも、強い方が勝つとは限らないわよ！」

意味ありげな言葉を放ち戦闘体勢をとる輝夜

悟空「……………」

輝夜「……………」

お互いに睨み合う二人

物音一つ無いなか先に仕掛けるのは、どっちなのか！

悟空「はああああ！」

先に仕掛けたのは、悟空であった。

悟空は、超スピードで輝夜に近づきパンチを食らわせようとする。

しかし、

輝夜「はあああ！」



輝夜は、須臾を操り悟空にカウンターを仕掛けた。  
その時！

『パシッ！』

なんと、悟空は、パンチをしようとした腕を自分を守るように動かし輝夜のパンチをガードしていた。

輝夜「なに！」

驚く輝夜

悟空は、少し微笑み

悟空「破ったぞ！おめえの須臾を操る能力を」

輝夜は、動揺を隠せない。

今まで誰にも破られなかった能力が破られたのだから。

輝夜「ちっ！」

そう舌打ちをして須臾の能力を使い悟空の横に回り込んだ。

悟空「ここだあ！」

しかし、悟空が右手をなぎ払うようにして横にいる輝夜に攻撃した。

輝夜は、急いで攻撃を躲す。

幸い悟空の手が短いこともあり頬をかすめるだけですんだ。

霊夢「なっ!!」

魔理沙「なっ!!」

紫「なっ!!」

永琳「なっ!!」

離れて見ていた4人は、悟空が攻撃を当てたことに驚く。

それもそのはず4人は、全く輝夜の動きが見えなかったのだから。

悟空「かすつたぞ!!」

そう言いながら輝夜を見る悟空

輝夜は、啞然としていたがすぐに我に帰り

輝夜「まぐれ よ!!」

と悟空に言い放つ。

悟空「ああ、まぐれ さ」

そう言った再び無言で構え合う2人

悟空「だりやああ!!」

その中、再び悟空が先制攻撃をしかける。

悟空は、輝夜に回し蹴りをした。

と思いきや。

『パシッ!』

回し蹴りをするふりをして輝夜の須臾の操る能力での攻撃を防御した。

輝夜「なっ!」

驚く輝夜

悟空「こつちだ!」

そう言つて誰もいない左側にキックを放つ悟空

すると、悟空がキックを放つた方向から輝夜が現れる。

輝夜「うっ!」

輝夜は、そのまま悟空のキックを食らつてしまった。

悟空「へへへ」

紫「霊夢、輝夜の動きがみえた?」

霊夢「いや、全然」

永琳「ひ、姫様!」

魔理沙「おっ!」

驚きを隠せない4人

悟空「おめえ一瞬の時間を増やす事が出来んだろ?能力を使った後おめえの攻撃して

きた直後の動きをオラ予想したのさ」

悟空が説明をしてあげる。

輝夜は、それを聞き「そういう事」と軽く言葉を返す。

そう言って輝夜の目つきが変わる。

悟空「にひひ、やつと本気出してくれたか」

そう言って強い目つきで輝夜を見る。

悟空「なら、オラも全開でいくぜ!」

その声とともにお互い強く睨み合う。

果たして勝利は、どっちに輝くのか!

## 輝夜の本気！であるか悟空の新たなる変身 第50話

ついに本気を出した輝夜

しかし、本気をだしたのは、輝夜だけではない。

悟空「オラも本気でいかせてもらっぞ！」

そう言つて悟空は、気を溜める体制をとる。

そして、悟空「はああ！」

悟空の金色のオーラが濃くなり周りからは電気がビリビリと出ていた。

悟空「これがスーパーサイヤ人2だ！」

それを見た輝夜そして、魔理沙に紫に永琳は、驚きの表情を見せる。

魔理沙「すげえ、あれが悟空の力かよ！」

紫「私もおどろいたわ！」

魔理沙と紫も悟空と一緒にいたが始めてみる変身にワクワクしている。

輝夜は、心の底から焦り

輝夜「もう、貴方を子供だとは思わないわ！」

そう言つて能力を使い悟空の目の前に移動する輝夜

しかし、

悟空「だりやあ!」

悟空は、タイミング良く輝夜を殴る。

輝夜「ぐはあ!」

腹に直撃してしまう。

悟空「だりやああー!」

悟空は、そのままキックで輝夜を吹き飛ばす。

魔理沙「流石、私の悟空だぜ!」

霊夢「あら、悟空は私のよ?」

永琳（ちつ、さっきの巫女の戦いを踏み台に姫様の戦いの癖をみていたわね）

内心でイライラしながら呟く永琳

輝夜「……………」

輝夜（こうなったら!）

輝夜は、心の中で何かを考える。

悟空「どうした来ねえんか?」

悟空が輝夜を挑発する。

輝夜「はあああ！」

輝夜は、能力を使わず悟空に突っ込んでいった。

悟空「ふっ」

そう息をもらしながら悟空も輝夜 同様 真っ向から突っ込む。

悟空「だりやりやりやりや！」

輝夜「だりやりやりや！」

だが、もはや一方的な流れになった。

輝夜「ぐはあ！」

とダメージを受けて行く輝夜

もう戦いは、圧倒的かそう思われた時！

悟空「だりやあああ！」

悟空は輝夜の顔にパンチをくらわせようとする。

霊夢、魔理沙、紫、そして、永琳は、勝負あつたと確信した。

しかし、

悟空「ぐはあ！」

なんと気がついていたら悟空が腹にダメージを受けていた。

霊夢「なっ！」

驚く霊夢

いや、霊夢だけでは、ない。

魔理沙も紫も永琳も呆然となっていた。

紫「まさか!」

紫が何かに気づいた。

霊夢「なによ紫なにかわかったの?なんで悟空がダメージを受けてるの?」

紫に慌てた様子で聞く霊夢

紫「もしかしてだけど、輝夜は、一瞬の間に攻撃をしたんじゃない?」

紫が霊夢に言った。

霊夢「一瞬の間に?」

だが、霊夢はイマイチわけが分からず首を傾げる。

紫「彼女は、自分の能力で一瞬の間を動く事が出来る。で、彼女は、今までは、その能力を使って攻撃を当てる直前にしてたの。でも、今の彼女は、攻撃をする直前にしてたのではなく、もう、攻撃をした後まで一瞬を増やしたのよ」

紫が説明をした。

霊夢「なるほどね。もう、既に攻撃を受けていたら悟空も止める事が出来ないってわけね」



霊夢も理解して感心する。

輝夜「本当は、こんな卑怯な事はやりたくなかった。でも、君の強さが分かったからこそその行動よ」

輝夜からは、こんな事は、やりたくなかったというのを見れば分かる。

悟空「ははは、こりや参ったな」

そんな事を悟空が言っている

悟空「ぐはっ！」

再び一瞬の間に攻撃をされる悟空

悟空「くっ！」

流石の悟空も腹に数発食らうとそれなりのダメージが入る。

輝夜「勝負あつたみたいね」

輝夜は構える事なく悟空に言った。

だが、悟空は、「まだだ！」

と言い放つ。

輝夜「何まだやるの？たしかに君は強い。私よりも遥かにね。でも、君は私に攻撃を食らわせる事が出来ないの。いくら、強くても能力に差があつたみたいね」

輝夜が悟空に言う。

そう輝夜の言う通り戦いでは、悟空が圧倒的であった。

しかし、能力により戦いを有利に進められるのは、悟空ではなく輝夜なのである。

悟空「そう言う訳じゃねえよ」

しかし、悟空は輝夜に言い返した。

悟空「オラが言いたかったのは、この上を見せてやるって事だ!」

輝夜「何言ってるの?」

輝夜は、意味が分からなかった。

魔理沙「なんだ?悟空の奴 一体 何をやる気だ?」

紫「分からないわ」

永琳(一体、何を?)

勿論、意味が分からなかったのは、輝夜だけではなく魔理沙に紫、そして、永琳も悟空の言葉の意味が分からない。

しかし、霊夢は、「まさか!」と何かを察したようだった。

悟空「別に隠してたわけじゃねえんだ。幻想郷では、ここまでの力はいらねえと思っ

てたんだ！でも、幻想郷は、相手より強ければ勝てるわけじゃねえ」

悟空が意味ありげな言葉を並べる。

輝夜「ちよつと、貴方 一体 何言ってるの？」

輝夜が悟空に言った。

すると悟空は、「ふっ」と笑う。

そして、

悟空「はあああああ!!」

今までにない叫び声を上げる悟空

その叫び声は、長く続いた。

そして、

悟空「だりやあああ！」

その叫びとともに悟空は、まばゆい光に包まれた。

『ビリビリビリビリ』

悟空から電気のような音が出ていた。

いや、それだけではない。

なんと悟空の金色の髪が悟空の身長と同等の長さまで伸びていたのだ！

悟空「待たせて悪かったな！この変身は随分久しぶりなんだ!!」

輝夜「なっ!」

輝夜は、驚きを隠せない。

そう目の前にいる悟空は、もはや次元が違うのであった。

魔理沙「な、なんじやありや!悟空の髪が伸びた。いや、それよりもこの押しつぶされるような気!これが、悟空の本当の本気か!」

霊夢「まさか、これ程の変身をもっているなんて!スーパーサイヤ人3つて所かしら」  
霊夢は、その変身に興味を持つ。

果たしてスーパーサイヤ人3とはどれほどの変身なのか、輝夜能力を破る事は出来るのか!

## ついに決着！最強のスーパーサイヤ人3！！ 第51話

輝夜（次元が違いすぎる！）

スーパーサイヤ人3の悟空を目の前に体が硬直する輝夜

悟空「どうした。来ねえんか？ならこつちから行くぞ！」

『ヒュン』

霊夢「速い！」

魔理沙「なんてスピードだ！」

その速度は、霊夢達がギリギリ見えるか見えないかな速度であった。

輝夜「ちっ！」

焦りから急いで能力を使う。

輝夜「だりゃあああ!!」

能力を使っている間に悟空にパンチを放つ輝夜

しかし、

『ガシッ』

なんと能力の使ってる中 悟空が動いたのである。

悟空「無駄だ、今のオラが立ってる所はあんたの能力の遥か先だ」

そのまま受け止めている手を離して、

悟空「だりやあああ!」

悟空は、輝夜にパンチを放った。

輝夜「ぐはっ!」

空高く吹き飛ばされる輝夜

その時、悟空の体から、

『ビリビリ』

と筋肉が音をたてる。

悟空「このスーパーサイヤ人3は、体力があんまし持たねえんだ。次で決めっぞ」

悟空は、右手に小さなエネルギー弾を作る。

悟空「はっ!」

そして、悟空は、エネルギー弾を放った。

その速度は、凄まじくとてつもない。

輝夜「くっ、」

輝夜にもはやそれを避ける力はない。

そして、そのまま

『ドンッ!』

その爆音とともに悟空のエネルギー弾を直撃してしまった。

そこで、悟空が我に帰る。

悟空「しまった! やりすぎた!!」

スーパーサイヤ人3を急いで解く悟空

だが、時すでに遅し輝夜は、爆風の中にとらわれていた。

霊夢「まさか! 殺しちゃった!!」

魔理沙「やりすぎだぜ! 悟空!!」

紫「あらら」

3人も悟空が輝夜を殺してしまったのではないかとあせる。

だが、しかし、

永琳「心配は要らないわ」

永琳が冷静に3人に言った。

魔理沙「何言ってるんだよ! さっきあいつ思いつきり爆風に飲み込まれてたじゃねえ

か」

焦った感じという魔理沙

永琳「まあ、みてなさい!」

しかし、まだ冷静なままの永琳

悟空「かめはめ波じゃ危ねえと思ってエネルギー弾にしたんだけどな」

悟空も心配になってくる。

そして、爆風が晴れるのを待つ4人

しばらくして爆風が晴れた。

すると、その爆風の中には輝夜がいた。

なんとあのエネルギー弾に当たり死ぬどころか傷一つ体につけていなかったのだ!

輝夜「いてててて」

そう言いながら悟空達の元へ降りてくる輝夜

霊夢「なっ!」

魔理沙「嘘だろ!」

流石の2人も驚きを隠せない。

すると、永琳が横から

永琳「あら、何驚いてるのかしら? さつき説明したでしょ姫様は、不老不死になる薬

を飲んでしまったと…」

と永琳が説明した。



そう思い返してみれば輝夜は、不老不死なのである！

悟空「そういや、おめえ不老不死だったな！」

輝夜に言う悟空

輝夜「ええ、そうよ。だから、私を殺すことは不可能なのよ」

輝夜がドヤ顔で言った。

悟空「そうなんか……」

と言う悟空

そして、

悟空「じゃあ！もういっちょ行くか！」

そう言い再び戦闘体勢をとった。

輝夜は、慌てて両手を前に出し「タイム！タイム！」と叫んだ。

悟空は、一度 戦闘体勢を解き

悟空「なんだ？」

と輝夜に言った。

輝夜は、「ふう」と口から息を出す。

そして、

輝夜「降参よ」

そう言い両手を軽く上に上げる。

悟空「えっ」

悟空は、判断が遅れて言葉をもらす。

輝夜「降参、私の負けよ」

再び降参と言いなおす輝夜

悟空「なんでだ? おめえ負ける事ねえじゃねえか?」

疑問に思つた悟空は、輝夜に尋ねた。

輝夜「あのねえ、私だつて皮膚感覚はあるのよ! 例え死ななくてもとてつもない痛みが私によぎるのよ」

そう説明する輝夜

悟空「そうなんか? まっ、いつか」

そう言葉を返し霊夢達の方へ向かう悟空

悟空「おーい、霊夢。勝負ついたぞ」

そう言つて霊夢のところにたどり着く悟空

霊夢「お疲れ様」

そう一言 悟空に返す霊夢

魔理沙「悟空、凄えな! あんな力を持つてるなんて!」

魔理沙が興奮気味に悟空に言った。

悟空「にひひ、まあな！」

悟空は、笑顔を溢して言った。

一方、輝夜と永琳は、

輝夜「ごめんなさい。仇取れなかったわ」

永琳に悲しげな表情で言う輝夜

永琳「いいのですよ。姫様」

そう言つて笑顔で輝夜を見る永琳

輝夜「ありがとう」

輝夜は、そう言葉をこぼした。

と会話をしていると霊夢が輝夜と永琳のものに近寄つてきた。

霊夢「ちよつと、貴方達 早く月を返しなさい」

霊夢が輝夜と永琳の顔を睨むようにみて言った。

輝夜と永琳は、少ししよんぼりしたような顔になる。

すると、後ろから紫が「ねえ？」と輝夜と永琳に声をかけた。

永琳「何かしら？」

永琳が紫に尋ねる。

紫「貴方達つて確か月の奴らから隠れるために月を隠したのよね？」

永琳「ええ、そうよ」

永琳に確認をとる紫

すると、紫が「ふふっ」と笑う。

輝夜と永琳は、首を傾げる。

そして、次の瞬間 紫の口から物凄い事が言われる。

紫「それなら、月を返して大丈夫よ。博麗大結界で守られてるから月の奴らはこっちに来れないから」

なんと、幻想郷には、博麗大結界というものがありそれがある限り月の連中は、こっちに来れないのである！

輝夜も永琳もそれを聞き驚きを隠せない。

輝夜「それじゃあ、私達が今までやってきた事って……」

紫に尋ねる。

紫「そうね。無駄だったんじゃない？」

と紫が言葉を返した。

輝夜と永琳は、今まで以上にへこむ。

霊夢「まあ、取り敢えず分かったでしょ？早く月を返しなさい」

霊夢が輝夜達に言う。

輝夜「分かったわ。月は返すわよ」

輝夜は、月を返すと言った。

↳数時間後↳

霊夢達は、無事に博麗神社へと帰った。

勿論、月は、元に戻っており異変は無事

解決された。

## 修行編3（魔法拳）

### 魔理沙 新たなる技を目指して 第52話

月の異変を解決して1週間が経った。

輝夜の言葉通り幻想郷には月が戻り幻想郷には、再び平和が訪れていた。

一方 霊夢達は、

霊夢「だりやりやりやりや！」

魔理沙「だりやりやりやりや！」

と言う感じで以前と同様に修行をしていた。

魔理沙「どりやあ！」

魔理沙が霊夢に対して物凄いスピードの弾幕を放つ。

『ヒュン、ヒュン、ヒュン、ヒュン』

しかし、霊夢は、それを軽やかなステップで見事に躲していく。

魔理沙「ちっ！」

舌打ちをする魔理沙

霊夢「はあ！」

その時、霊夢が魔理沙の弾幕をかいくぐりながらエネルギー弾を放った。  
魔理沙「なに！」

驚く魔理沙

魔理沙は、急いで横に避ける。

『シューーン』

魔理沙の真横を通る霊夢のエネルギー弾

魔理沙「あつぶねえ」

そう言いながら飛んでいったエネルギー弾に目をやる魔理沙  
すると、

霊夢「はあ！」

魔理沙の油断を狙い更にエネルギー弾を放つ霊夢

魔理沙「なっ！」

驚く魔理沙

魔理沙は、とつさにエネルギー弾を出しなんとか相殺させる。

霊夢は、少し微笑み「やるじゃない！」

と魔理沙に言った。

魔理沙「ふう、危なかったぜ」

と声をもらす魔理沙

霊夢「それじゃあ、次行くわよ！」

そう言つて霊夢が気を溜める体制をとる。

そして、

霊夢「界王拳!!」

霊夢が界王拳を使った。

魔理沙「くっ、凄い気だぜ」

少し怯む魔理沙

だが、霊夢は御構い無し。

霊夢「だりやあああ！」

そのまま魔理沙に近づく。

そして、『ドンッ』

魔理沙の腹に思い一撃を食らわせる霊夢

それを見た悟空は、慌てて「ストップだ！」

と声をかける。

魔理沙「いてててて」

腹をおさえる魔理沙



魔理沙「少しは、手加減しろよな霊夢」

そう霊夢に言う魔理沙

霊夢「私、手加減は嫌いなものよ」

霊夢は、そう魔理沙に言葉を返す。

悟空「全くおめえ達仲がいいのか悪いのかよく分かんねえぞ」

そう苦笑いを挟みながら言う悟空

3人は、一度縁側に座った。

霊夢「ふう」

一呼吸出す霊夢

おそらく、界王拳にまだ慣れていないので疲れたのであろう。

魔理沙「いいなあ、霊夢は界王拳が出来て」

突然、魔理沙が言葉をもらす。

悟空と霊夢は、魔理沙の方を振り向いた。

霊夢「なによ？急に？」

霊夢が魔理沙に言った。

魔理沙「いや、なんとなく思っただけだぜ」

そう言つて黙り込む。

霊夢「なに言ってるのよ。魔理沙もなんか惜しい所まで出来てるじゃない」

そう霊夢の言う通り魔理沙は、界王拳を使うと一瞬では、あるが赤いオーラがにじみ出るのである。

霊夢「きつと、あと少しで魔理沙も出来るわよ！」

霊夢は、自分なりの励まし方で魔理沙を慰める。

魔理沙「違うんだ霊夢」

すると、急に魔理沙が喋り出した。

魔理沙「確かに界王拳は何か惜しい所まで来てるんだ。でも、そこで終わってしまうんだ」

霊夢「終わってしまう？」

魔理沙「そうだけ、出来ると思ってもなんか出来ねえんだよね」

魔理沙は、ため息をつきながら言った。

そこで悟空が、「もしかして…」

悟空が顎に手を当てながら何かを囁いた。

魔理沙「どうしたんだ悟空？」

それに、疑問を覚えた魔理沙は、悟空に尋ねる。

悟空「いや、もしかしてだけど、魔理沙には、界王拳があつてないんじゃないか？」

魔理沙は、首を傾げた。

一体、悟空は、なにが言いたいのだろうか。

悟空「簡単に言うとなら魔理沙おめえって気で戦ってるっていうより魔法つちゆうもんで戦ってんだろ？」

悟空が説明を始めた。

悟空「だから、おめえ自身 魔法を普段から使ってるから気を使った界王拳に対応しきれないんだ」

それを聞き魔理沙は頭にクエスチョンマークを浮かべる。

霊夢「要するに貴方じや界王拳を使えないって事よ」

横から霊夢が魔理沙に言った。

魔理沙「界王拳を使えないだって!!」

やっと、話を理解した魔理沙は驚きを隠せない。

それもそのはず今まで必死になってやってきた事が出来ないのだから。

魔理沙「なんだよ。それじゃあ、今までの練習は、無駄だったって事かよ……」

そう言いながら下を向きへこむ。

しかし、そんな魔理沙を見て悟空が「それでもねえぞ」

と言った。

魔理沙は、すぐさまその言葉に反応し悟空の方に振り向く。

そして、勢いのある声で、

魔理沙「どう言う事だ！悟空!!」

と顔を悟空の方に寄せながら言う。

悟空「いや、界王拳は、気に対応してるって事は、魔法に対応した技もあるんじゃないかと思ってるな。だから、界王拳の要領で何かを少し変えれば魔法に対応した界王拳も出来るんじゃないかかなと思ってるな」

と自身の考えを伝える悟空。

魔理沙「成る程、魔法に対応した界王拳か……………」

顎に手を当てながら考える動作をする魔理沙

魔理沙「で、それってどうやるんだ？」

だが、結局 悟空にやり方を聞く。

しかし、

悟空「わかんねえ」

なんと悟空も分からないと答えた。

魔理沙「なんだって！」

予想外の事に驚く魔理沙

悟空「だって、魔法なんてオラ達の世界で使ってる奴なんていなかったんだ。急にそんな事言われてもよ」

悟空も困りはててしまった。

魔理沙は、手を顔に当て、

魔理沙「なら、どうすりゃ良いんだよ……」

と考え込んだ。

果たして魔理沙は、界王拳の代わりとなる新たなる技を見つける事が出来るのだろうか。

## 新たな技を求めて!いざ紅魔館へ! 第53話

3人は、考えたどのようにしたら界王拳の代わりが出来るのか。

霊夢「そういえば?」

その時、霊夢はある事を思いついた。

魔理沙「どうしたんだ? 霊夢?」

霊夢の言葉に反応しすぐに魔理沙が霊夢に訪ねた。

霊夢「いや、もしかして、本当に雲を掴むような話かもしれないけど」

霊夢が少し考えた表情になる。

魔理沙は、霊夢の方に顔を寄せる。

魔理沙「なんでもいいから、取り敢えず教えてくれよ」

魔理沙が霊夢に言った。

その後、数秒 沈黙の空気になる。

霊夢「紅い霧の異変 覚えてる?」

すると、霊夢が聞き返すように言った。

魔理沙「紅い霧? ああ、あの吸血鬼達の奴か」

魔理沙は、少し考える動作を入れた後、すぐに思い出した。

悟空「そういうや、オラが幻想郷に来てのはじめての異変がそれだったな」

悟空もその異変を思い出した。

霊夢「そう、その異変よ」

魔理沙は、少し首を傾げる。

魔理沙「で、あの異変がどうしたんだ？」

魔理沙は、まだイマイチ霊夢が言いたいことが分からない。

霊夢「で、あの吸血鬼がいた建物あるじゃない」

魔理沙「紅魔館のことか？」

霊夢「そう そんな名前の建物」

魔理沙「でも、紅魔館と界王拳の代わりの技 何か関係あんのか？」

魔理沙が霊夢に言った。

霊夢「あら、忘れちゃったの？ いるじゃない紅魔館に魔法に詳しそうな奴が！」

魔理沙は、少し考えた。

魔理沙「パチュリーの事か！」

そうである。

パチュリーは、数多くの本を読み魔法の知識も豊富である。

そんなパチュリーなら界王拳の代わりになる技を知っているかもしれない。  
そう霊夢は、考えたのである。

悟空「なるほどな!確かにあいつなら何か分かるかもしんねえ!」

悟空もそれに共感する。

魔理沙「それじゃあ、早速 紅魔館へ行こうぜ!」

すると、魔理沙が急に紅魔館へ行こうと言ったのだ。

霊夢「今から行くの!」

霊夢が驚く

それもそのはず、今はもう日が沈もうとしていたのである。

魔理沙「ああ、そうだぜ!」

しかし、魔理沙は、行く気満々であった。

霊夢は、ため息をつく。

そして、

霊夢「分かったわ」

しぶしぶ霊夢は、言った。

魔理沙「よーし、それじゃあ行くぞ!!」

そう言って魔理沙は、飛び立った。



魔理沙に続いて霊夢と悟空は、やれやれと言う感じで魔理沙の後を追った。

（数分後）

『ストツ』

霊夢達が紅魔館に着いた。

霊夢「ふー、やっと着いた」

霊夢が息をもらす。

魔理沙「何言ってるんだ霊夢。ここまで10分もかかってないじゃねえか」

霊夢「私にとっては、1分でも長いのよ」

悟空「懐かしいな」

悟空が紅魔館を見上げる。

悟空（オラの異変解決はここから始まったんだよな……………）

久しぶりに来た紅魔館を懐かしく思う悟空

霊夢「まあ、取り敢えず早くパチュリーの所へ行きましょ」

そう言つて霊夢は、紅魔館の門へと足を進めた。

そう言つて3人は、門の方へと向かった。

「ぐくぐく」

すると、いびきのような物が聞こえて来た。

誰のいびき かと言うと

美鈴「ぐくぐく」

そのいびき はあの門番のいびきであった。

悟空「あいつ寝てんのか？」

悟空が美鈴を見て言った。

霊夢「そう見たいね……」

3人は、呆然となった。

3人の頭によぎったことは、門番が寝ていていいのか? という事であった。

霊夢は、美鈴に近寄る。

そして、

霊夢「起きなさい!!」

霊夢は、美鈴の耳に向けて大声を放った。

美鈴「うわわわわ!!」

突然の大声に驚く。

美鈴が声の方を振り向く。

美鈴「霊夢さん！それに、魔理沙さんに悟空さん」

ここで霊夢達の存在を初めて確認した。

悟空「よう、美鈴 久しぶりだな」

悟空が美鈴に挨拶をする。

美鈴「お久しぶりです。悟空さん そして、皆さん」

美鈴も霊夢達に挨拶をした。

魔理沙「お久しぶりじゃないぜ！門番が寝ててどうするんだよ」

魔理沙が美鈴にツツコミを入れる。

美鈴「いや、最近 疲れてまして……」

美鈴が頭をポリポリかきながら言った。

美鈴「まあ、それはさておき どうなされましたか？」

魔理沙「実はな……」

魔理沙が説明を始めた。

〈魔理沙 説明中〉

美鈴「なるほど、それでしたら どうぞ」

美鈴が門を開けた。

霊夢「あら、門番がこんな簡単に門を開けていいの?」

美鈴に訪ねる霊夢

美鈴「あなた方は、特別ですよ。以前、フラン様の件ではお世話になったので」

美鈴は、丁寧な言葉使いで霊夢達を通した。

霊夢「そう」

そう言つて霊夢達は、紅魔館へと歩を進めた。

『キィ〜』

扉を開ける霊夢

「あら、お客様?」

すると、急に声が聞こえた。

そう、言うまでもないであろう

咲夜「あら、貴方達 久しぶりね」

そう十六夜 咲夜である。

『ヒュン』

一瞬で目の前に現れる咲夜

咲夜「どうしたの？何か用かしら？」

要件を訪ねる咲夜

魔理沙「いや、ちよつとパチュリーに会いたくてよ」

魔理沙が咲夜に言う。

咲夜「そうパチュリー様ですか」

そう言つてクルンと振り返り後ろを向く咲夜

咲夜「案内します。着いて来て下さい」

そう言いながら歩を進める咲夜

霊夢達は、咲夜に着いていった。

く1分30秒後く

咲夜「着きました。ここがパチュリー様のいる図書館です」

やつと、パチュリーの部屋に着いた。

悟空「おう、ありがとな咲夜」

お礼を言う悟空

咲夜「いいえ、あなた方にはフラン様のお世話になったので」

どうやら紅魔館の中では、フランの件での悟空の活躍がとても高評価されているよう

だ。

咲夜「それでは、私は仕事に戻ります」

そして、咲夜はお辞儀をした後、

『ヒュン』

その効果音と共に姿を消した。

霊夢「相変わらず、凄い能力ね」

霊夢がそう呟く。

## 新たな技！その名は魔法拳！！ 第54話

魔理沙「この先にパチュリーがいるんだな！」

そう言つて扉を開ける魔理沙

『ギィ〜』

そこには、前と同じように多大な量の本が本棚に隙間なく並んでいた。

魔理沙「おつ、相変わらず凄い本の数だな」

魔理沙が先の中に入りあたりを見渡す。

霊夢「まったく、よくこんな数の本を読めるわね」

霊夢が続くように入り中の様子を見る。

その時！

??? 「誰かしら？」

奥の方から声が聞こえた。

その声は、パチュリーとは異なる声であった。

3人は、すぐさま声のした方を振り向く。

すると、そこには小さな翼を生やし赤色つぽい髪の女性が立っていた。

悟空「誰だおめえ？」

悟空は、女性に訪ねる。

??? 「私は、この図書館を管理している小悪魔と申します」

女性は、礼儀正しく名を名乗った。

小悪魔「それより、貴方達は一体？」

小悪魔が再度、悟空達に訪ねた。

悟空「オラは孫悟空！」

霊夢「私は博麗霊夢　博麗の巫女よ」

魔理沙「私は霧雨魔理沙　普通の魔法使いだぜ！」

3人は、それぞれ挨拶した。

すると、小悪魔が驚いた表情になる。

小悪魔「孫悟空って、あのフラン様に勝ったあの孫悟空ですか！」

どうやら、小悪魔にも悟空の活躍が伝わったようだ。

悟空「まあな」

悟空は、あっさりとした返事をする。

小悪魔「まさか、そんな方達に会えるなんて。あの時は、ちようど用事で外出してたので会えて嬉しいです」



小悪魔は、テンションが上がっていく。

小悪魔「つと、それはさておき。今回はどうして紅魔館へ？」

しかし、すぐに冷静になる。

魔理沙「ああ、ちよつとパチュリーに会いたくてよ」

小悪魔「パチュリー様ですね。それなら奥の方にいるはずですよ」

悟空達は、言われた通り奥へと進んだ。

そして、そこには本を読んでいるパチュリーがいた。

魔理沙「よお、パチュリー！」

パチュリーを呼ぶ魔理沙

パチュリーもその声に気づき魔理沙の声の方を振り向く。

パチュリー「あら、貴方達 久しぶりね」

パチュリーは、悟空達を見る。

悟空「オツス」

パチュリーの目線に対して挨拶で返す悟空

パチュリーは、魔理沙に視線をやる。

パチュリー「何か用かしら？」

要件を訪ねるパチュリー  
魔理沙「実はさ……………」

く魔理沙 説明中く

魔理沙「て、ことなんだ。何かいい技ないか？」

魔理沙の質問に対して考え出すパチュリー

パチュリー「うん」

魔理沙（やっぱり、そんな都合のいい技ないのかな）

そう心中で呟く魔理沙

その時!!

パチュリー「そういうえば、その界王拳に似た技を本で見た気がするわ」  
パチュリーがそう呟いた。

魔理沙は、すぐさま その言葉に反応する。

魔理沙「本当か、パチュリー!!その本は、どこにあるんだ!!」

テンションが上がり興奮する魔理沙

パチュリー「まあまあ、落ち着きなさい」

と言いつつ一度魔理沙を落ち着かせる。

パチュリー「小悪魔」

そして、パチュリーは小悪魔を呼ぶ。

小悪魔「なんででしょうか、パチュリー様？」

すぐさまパチュリーの横につく小悪魔

パチュリー「ちよつと、あそこの本棚の4番目の右から9冊目の本を取ってきてくれる」

そう頼み込むパチュリー

小悪魔「分かりました」

そう言つてすぐさま本を取りに行く小悪魔

小悪魔「お待たせしました」

小悪魔は、パチュリーに言われた通りの本を一冊取ってきた。

魔理沙「なんだそれ？」

それを見て言う魔理沙

パチュリー「ああ、これは魔法の特殊な技が載った本よ」

そう説明するパチュリィ

そして、本を開けるパチュリィ

『パラパラパラ』

パチュリィ「ここよ!」

そう言つて、852ページを開けた。

魔理沙は、すぐさまそのページを覗き込む。

そこには!

【体中で魔法をコントロールして瞬間的に魔力 及び 身体能力を強化する技】

と記されていた。

魔理沙「すげ〜!まさしく、界王拳の魔法バージョンじゃねえか!」

そう言いながらきめ細かく本を読んでいく魔理沙

魔理沙「使い方も界王拳とそっくりだぜ!元々 気でやってた所を魔法に変え

ちよつとアレンジすればすぐに出来るぜ!」

本を一瞬で読み上げる魔理沙

パチュリィ「気に入つて貰えたようね」

魔理沙に呟くパチュリィ

魔理沙「ああ、サンキューなパチュリィ!」

魔理沙は、パチュリーにお礼を言う。

しかし、魔理沙には まだ、疑問が残っている。

魔理沙「そう言えば、この技の名前ってなんなんだ？」

パチュリーに訪ねる魔理沙

パチュリー「名前なんて無いわよ貴方で考えなさい」

そう魔理沙に言い放つパチュリー

それを聞き魔理沙は、考え込んだ。

魔理沙「名前は無いのか、うーん」

両腕を組む魔理沙

魔理沙「うーん」

そして、更に考え込んだ。

魔理沙「界王拳に似てて、その魔法バースジョンだから……」

界王拳の魔法バースジョン名前に悩む魔理沙

そして、

魔理沙「魔法拳」

そう呟く魔理沙

その名前を聞き霊夢は、魔理沙を訪ねた。

霊夢「魔法拳?」

魔理沙「ああ、私の技。名前は魔法拳だぜ!!」

魔理沙は、そう言いきった。

悟空「魔法なのに拳なんか?」

どことなく矛盾している技名が気になる悟空

魔理沙「そんな細かいこと気にすんなって」

しかし、魔理沙は、そう言葉を流した。

パチュリー「まあ、なんでもいいわ。とりあえず、私 この後用事があるの その本  
貸してあげるから悪いけど返って貰えない?」

そう頼み込むパチュリー

魔理沙「この本 貸してくれんのか!」

それを聞き魔理沙は目を輝かせる。

パチュリー「ええ、貸してあげるわ」

再度そう言うパチュリー

魔理沙「サンキュー パチュリー」

魔理沙は、そうお礼を言って、3人で紅魔館を後にした。

## 魔法拳 完成！ 第55話

ついに新たな技「魔法拳」のヒントを得た魔理沙は、  
いよいよ魔法拳の練習に取り掛かろうとしていた。

博麗神社に戻ってきた霊夢達

空は日が沈みすずに6時であった。

魔理沙「さて、魔法拳試してみるぞ」

テンション ノリノリで言う魔理沙

そこに、霊夢がツツコミを入れる。

霊夢「ちよつと、もう6時よ！試すのは、明日にしましょ」

しかし、魔理沙がそんなこと聞くわけがなく

魔理沙「何言ってるんだ！まだ6時だぜ」

笑顔を思い浮かべながらいった。

霊夢は、そんな魔理沙を見て「はあ」ため息をつく。

霊夢「分かったわよ。じゃあ、今日中にその技を覚えなさい！」

そう魔理沙に言う霊夢

魔理沙「ああ、ほとんど界王拳と同じだし 多分 練習も必要ないかも知れないぜ!」

魔理沙は、明るい声で言った後 パチユリーから借りた本を開ける。

魔理沙「えっと、なにになに」

そう言いながら本を読む魔理沙

そして、

『パタンツ』

本を閉じた。

魔理沙「よし、やっぱり界王拳でやった気のコントロールを魔法でやって、細かい微調整をすればすぐ出来るぜ」

ニツと微笑みながら魔理沙は言った。

魔理沙「よっと」

1度、本を縁側に置く魔理沙

そして、

魔理沙「よし、やってみるぞ!」

そう掛け声を出した。

悟空と霊夢は、魔理沙を見守るようにみる。

どうやら、魔法拳を試してみるようだ。



魔理沙は、気を溜める体制をとった。

魔理沙「はあああああ!!」

体中の魔力を集中させる魔理沙

『ベリベリ』

周りからは電気のような物も飛び出ている。

霊夢「魔理沙の気が上がっていく!」

悟空「ああ、本当に界王拳にそっくりだ」

悟空と霊夢も少し驚きの表情を見せる。

そして、

魔理沙「だあああああ!!」

魔理沙が大きな掛け声を挙げた。

『ビューン』

一瞬、魔理沙から凄まじい風が起きる。

そして、魔理沙からオレンジ色のオーラが放たれた。

悟空「凄え、本当に界王拳と同じぐれえのパワーアップだぞ!」

霊夢「まさか、練習なしでやるなんて!」

いきなり技を使った魔理沙に驚く霊夢

魔理沙は、自分の体を見渡す。

魔理沙「す、凄え、力が溢れてくるぜ！」

興奮する魔理沙

魔理沙「霊夢、悟空やったぜ！魔法拳使えたぜ!!」

悟空と霊夢を見る魔理沙

霊夢「凄いじゃない魔理沙！」

霊夢は魔理沙を褒める。

悟空「ああ、まさか、1発で出来るなんてな！」

悟空も魔理沙を褒める。

魔理沙「へへへ、界王拳の練習をしたお陰だぜ！感覚はほぼ同じだからな！」

と魔理沙は言った。

魔理沙「それにしても、凄え体力が持ってかれるぜ」

魔理沙は、体力の消耗を実感する。

悟空「それは、まだ、おめえが界王拳じゃなかった魔法拳に慣れてねえからだ。何度

も使っているうちにすぐ慣れっさ！」

そう魔理沙に説明をする悟空

魔理沙「そうだな！」

そう言つて魔理沙は、魔法拳を解いた。

霊夢「で、魔法拳 思つてたよりも随分 早く出来たけど これからどうする?」

霊夢が魔理沙に聞く。

魔理沙「そうだな」

魔理沙も考え込んだ。

魔理沙「もう、今日は解散で……」

と魔理沙が解散しようと言おうとした時!

悟空「なあ、おめえ達」

悟空が横から霊夢と魔理沙に声をかける。

そして、悟空こら衝撃の一言が放たれた。

悟空「オラと戦わねえか?」

なんと急展開!!

悟空が戦わないかと言うのだ!!

霊夢「悟空と!!」

驚く霊夢

いや、霊夢だけでは、ない。

魔理沙「悟空とか!」

魔理沙も同様に驚いている。

悟空「ああ、そうだ!」

しかし、悟空は真剣な眼差しでいう。

霊夢「一体、何のために?」

魔理沙「そうだけ悟空!」

悟空に訪ねる2人

すると、

悟空「知りてえんだ」

と言い出した。

魔理沙「知りたいって何を知りたいんだ?」

悟空に訪ねる魔理沙

悟空「前におめえ達と戦ったことあっただろ?」

霊夢「ああ、そういうえば悟空に弟子入りしてすぐの時にそんなことあったわね」

悟空「オラ知りてえんだ。おめえ達がその時からどれぐれえ強くなったか!」

そう悟空は、界王拳に魔法拳を覚えた霊夢と魔理沙がどれほど成長しているのかを知

りたいのである。

霊夢と魔理沙もすぐその悟空の心情を察した。

霊夢「悟空、貴方の言いたいことは分かったわ！」

霊夢がそう悟空に呟いた。

魔理沙「ああ、悟空 私達がどれほど強くなったか教えてやるぜ！」

魔理沙は、悟空に言い放った。

悟空は、少し微笑んだような顔になり「ああ」と言った。

もはや、この3人は、すぐにお互いの気持ち分かるまでに強い絆で結ばれていた。

悟空「ありがとうよ、2人共！」

そう言つて3人は、一定間隔の距離を取る。

霊夢「言つておくけど、手加減は、しないわよ!!」

魔理沙「本気で行かせてもらうぜ!!」

そう言つて霊夢は、界王拳

魔理沙は、魔法拳

を使った。

悟空「すんげえ、気だ！最初に戦つた時と大違いだぞ！」

そう言つた後、「はああああ！」

気合いを込める悟空

そうスーパーサイヤ人になつたのである。

悟空「オラもいきなりスーパーサイヤ人で行かせてもらおうぞ!!」

そう言つて戦闘体勢を取る悟空

霊夢「望むところよ!」

魔理沙「望むところだぜ!」

そう言つて霊夢と魔理沙も戦闘体勢をとつた。

## 限界パワー炸裂!! 第56話

悟空「来い2人共!!」

そう悟空が声をかける。

その声と同時に霊夢が悟空に超高速で接近しパンチを放つ。

悟空（前とスピードが大ちげえだ!）

そう心中で呟きながら悟空は、霊夢のパンチを受け止めた。

悟空「ぐっ!」

しかし、思ってたより霊夢のパンチの威力が高く怯んでしまう。

だが、「だりやああ!!」

その雄叫びとともに霊夢にキックを放った。

霊夢「ぐはっ!」

数メートル吹き飛ばされてしまう。

悟空は、そんな霊夢に更に追撃をしようとする。

その時!

魔理沙「だりやああ!!」

魔理沙が悟空に物凄い密度の弾幕を放った。

悟空「なに！」

悟空は、霊夢の方に目を奪われてしまっており魔理沙を注意していなかった。

悟空は、そのまま攻撃に反応することが出来ず、

『ドドドドドドドドドドドドドドドド』

弾幕の嵐を食らってしまおう。

霊夢「ナイス！魔理沙!!」

魔理沙「へっへっくん、どんなもんだぜ！」

ドヤ顔をする魔理沙

悟空は、爆風の中に埋もれてしまっている。

しかし、

悟空「はあああああ!!」

爆風の中から悟空の叫び声が聞こえる。

その叫び声と共に爆風が消し飛んだ。

そして、晴れた爆風の中から電気のような物も纏ながら悟空が出てきた。

そうスーパーサイヤ人2である。

悟空「やるじゃねえかおめえ達！」



悟空は、霊夢達に言う。

霊夢「スーパーサイヤ人2ね」

霊夢が悟空をまじまじと見る。

魔理沙「いざ敵になるとんでもない圧力だぜ」

2人は、武者震いをした。

悟空「今度は、こっちの番だ！」

悟空が霊夢に接近する。

霊夢「は、速い！3倍界王拳！」

悟空の超スピードに対応するため霊夢は、界王拳を3倍まで上げた。

悟空「ダダダダダダダダ」

だが、悟空の猛攻は激しく3倍界王拳でもすぐに限界が来た。

霊夢（このままじゃマズイ！）

霊夢は、状況を打破すべく

霊夢「10倍界王拳!!」

界王拳を一気に10倍まで上げた。

霊夢「だりゃあ！」

そして、そのまま悟空の攻撃をかわしていく。

悟空「やるな! 霊夢!」

悟空がパンチの合間に霊夢にいう。

霊夢「悟空こそ!」

「霊夢も悟空に言葉を返す。

悟空「ダダダダダ」

霊夢は10倍界王拳を使ったものの多少のパンチを躲わせるようになったぐらいであり、まだ、有利なのは悟空であった。

霊夢「くっ!」

霊夢が押されていく。

悟空「貰ったぞ!」

そう言って大振りのパンチを霊夢に放った。

だが、しかし!

魔理沙「はぁー!」

なんと、横から魔理沙が的確に悟空だけを狙いエネルギー波を放った。

悟空「なっ!」

魔理沙の放ったエネルギー波は、今までのものとは桁違いであった。

悟空（魔法拳を10倍まで上げたな！）

流石の悟空もマズイと思い霊夢への攻撃を辞め魔理沙の攻撃を躲す。

魔理沙「大丈夫か霊夢!!」

霊夢「大丈夫よ!」

なんとか、ピンチを免れた霊夢

魔理沙「霊夢、今度は一人で飛び込むなよ!」

霊夢「へへ、わかってるわ」

そう言いながら霊夢と魔理沙は構える。

悟空「なかなか、やるじゃねえか!おめえ達!!」

悟空が2人に言う。

霊夢「そっちこそ!分かってちやいたけどとんでもない力ね」

魔理沙「本当だぜ!まさか、霊夢と私が界王拳と魔法拳を10倍まで上げても勝てな

いなんて」

悟空「はは、オラだって修行してんだそう簡単には、負けねえぞ」

3人は、自分の思っていることを言葉に出す。

そして!

『コロン』

その音と共に霊夢、魔理沙、悟空は、姿を消した。

いや、姿を消したのではない。

尋常ではない速度で動いているのである。

『ドンッ』『ドンッ』『ドンッ』

そして、激しく力と力がぶつかり合い物凄い音を立てる。

霊夢「だりゃあ!」

霊夢がパンチを放つ。

悟空「はっ!だりゃあ!!」

しかし、悟空は霊夢のパンチを簡単に受け止めカウンターを放つ。

霊夢「くっ!」

少し怯む霊夢

魔理沙「はあー!」

だが、すぐに魔理沙が霊夢の援護すべくエネルギー波を使う。

しかし、

悟空「はあー!」

今度は、悟空も魔理沙の攻撃に備えており

魔理沙に向かってエネルギー波を放つ。

悟空のエネルギー波は、魔理沙のエネルギー波を相殺する。  
そして、

『ヒュン』

魔理沙に瞬間移動で近づき

悟空「はぁー!!」

近距離からエネルギー波を放った。

魔理沙「うわー!!」

魔理沙は、エネルギー波に飲み込まれてしまう。

『バタンツ』と魔理沙は強く地面に激突する。

魔理沙「くっ!!」

そして、魔法拳も解けてしまった。

霊夢「魔理沙!」

霊夢はすぐさま魔理沙の元へと向かう。

だが、

『ヒュン』

今度は、霊夢の方へ瞬間移動し

悟空「だりゃああ!!」

と回し蹴りを放った。

霊夢「ぐっ！」

霊夢も魔理沙と同様に吹き飛ばされてしまう。

勿論、界王拳は解けてしまった。

霊夢「ぐっ！ぐあ！」

魔理沙「くっ！ぐっ！」

倒れこむ2人

悟空は、そんな2人を見て、

悟空「今日はここま……………」

とその時！

霊夢「まだよ！」

なんと、霊夢が立ち上がった！

いや、霊夢だけではない

魔理沙「私もだぜ！」

魔理沙も立ち上がった。

悟空「何言ってるんだ！もう、お前達は、」

霊夢「まだだっって言ってるでしょ！」

魔理沙「そうだぜ悟空」

2人は悟空に言う。

悟空「おめえ達……」

悟空は、考える。

そして！

悟空「なら、限界までかかってこい！おめえ達の本気を見せてみろ!!」

そう悟空は、言い放った。

魔理沙「ああ、そうさせてもらうぜ！」

## 限界突破!! 第57話

悟空（まさか、まだ戦うなんてな）

そう心中で呟く悟空

霊夢「魔理沙、こうなったら」

魔理沙「そうしかないみたいだな！」

霊夢と魔理沙は、何かをするつもりであった。

きつとそれが2人の最後の手段であろう。

悟空を睨みつける2人

悟空「どうした2人とも、何かするんじやねえのか？」

魔理沙「ああ、するつもりだ！」

霊夢「悟空、貴方は物凄く強い」

悟空を見ながらいう霊夢

霊夢「だけど私達は貴方に勝つ！」

そして！



霊夢・魔理沙「行くぞ！悟空!!」

叫ぶような大きな声で言い放った。

霊夢「はあああああああ！」

魔理沙「はあああああああ！」

そして、2人は、同時に気を溜め始めた。

悟空（すげえ、一体こいつらのどこにこんな力が眠っていたんだ!）

悟空も驚愕する。

そして、

霊夢「20倍界王拳!!!」

霊夢が一気に界王拳を20倍まで跳ね上がらせた。

悟空（ありったけの力を解放したか!）

霊夢は、自分の限界まで界王拳を使った。

いや、霊夢だけではない。

魔理沙「う、うう！私は悟空の技ではなく自分の技で限界なんて超えてやるんだ!」

魔理沙は、まだ気を溜める。

そして！

魔理沙「はあああああ！20倍魔法拳!」

魔理沙も霊夢と同時に20倍まで引き上げた。

魔理沙「これが私の全てだぜ！」

霊夢には濃い赤色、魔理沙には濃いオレンジ色のオーラがまとわりつく。

悟空「まさか、20倍まで上げるなんて！」

悟空も2人の限界のパワーアップを見て驚愕する。

しかし、悟空は怯むことはなかった。

悟空「驚いたぞ2人共！まさか、そこまで強くなつとわな」

悟空は、少し微笑んだ顔で言う。

霊夢「まあね！」

魔理沙「取り敢えず今の私達の限界の力だぜ！」

そう言葉をかましあつた後、

『ヒュン！』

3人は、超高速で動き空中で物凄い気がぶつかり合った。

『ドンッ』『ドンッ』『ドンッ』

3人は、全力を出しぶつかり合う。

霊夢「はあ！」

霊夢が悟空にパンチを放つ。

悟空「だりやあ！」

悟空はそのパンチをギリギリで受け止める。

悟空（さつきよりパンチの威力が遥かに上がっている）

魔理沙「はああああ！」

霊夢のパンチを受け止めている途中の悟空に弾幕を放つ。

その速度は、凄まじく避けることが出来なかった。

悟空「なに！」

悟空は、弾幕をモロに食らってしまった。

悟空（弾幕の威力もさつきまでとは桁違いだ！）

悟空は、そのまま弾幕に飲み込まれてしまう。

しかし！

悟空「はああああ！」

悟空は、気合いで弾幕をかき消した。

悟空「だりやああ!!」

そして、そのまま魔理沙に接近する悟空

だが、

霊夢「だりやああ!!」

霊夢が悟空に接近しキックを放った。

悟空「なっ！」

悟空はそのままキックを直撃してしまふ。

しかし、悟空は回転して体制を立て直した。

悟空「やるじゃねえか！おめえ達！」

悟空が2人を褒める。

霊夢「はあ、はあ、はあ、まあね」

魔理沙「はあ、はあ、はあ、私達の本気の手だぜ！」

2人は、悟空に言った。

しかし、2人がしやべっている時あからさまに息を切らしている。

どうやら、限界の力で戦ったせいで体力がそんなに残っていないようだ。

それは、ここにいる霊夢、魔理沙、そして悟空は、すでに気づいている。

霊夢「はあはあ、魔理沙このままじゃバイわよ」

小声で言う霊夢

魔理沙「ああ、確かにそうだな、はあはあ」

魔理沙も小声で返す。

霊夢「このままやつても私達の体力切れで負けになっちゃうわ。こうなったら！」

魔理沙「こうなったら、なんだよ？」

霊夢「次の一撃で決めるわよ！」

霊夢が魔理沙に言った。

魔理沙は、少し微笑み「そう言うことか」と言葉を返す。

悟空「どうした。作戦は決まったんか？」

なかなか攻めてこない霊夢達に言う悟空

霊夢「ええ、決まったわよ！」

そう言いながら霊夢は、スペルカードを構えた。

いや、霊夢だけではない。

魔理沙もスペルカードを構えた。

悟空「そう来たか」

悟空がそう呟いた次の瞬間！

霊夢「霊符」「夢想封印 集」

霊夢が夢想封印のエネルギー波バージョンを使った。

魔理沙「恋符」「マスタースパーク」

魔理沙は、お馴染みの技マスタースパークを使う。

『ドゥーーーーーン』

2人のエネルギー波が合わさり物凄い力になった。

悟空（これがおめえ達の限界か受けて立つぞ！）

悟空「かくめくはくめく波ーーーーー!!!」

悟空はかめはめ波を放った。

『ギューーン』

エネルギーとエネルギーが激しくぶつかり合う。

霊夢「ぐ、ぐぐ」

魔理沙「く、ぐあ」

悟空「う、うう」

押されまいと必死に頑張る3人

霊夢「ぐああああ!!」

その時、霊夢が火事場の馬鹿力で一気に気を上げた。

魔理沙も霊夢につられて、「だりやあああ!」と魔力をあげる。

徐々に悟空のかめはめ波が押されていく。

霊夢「だりやああ!!」

魔理沙「どりやああ!」

2人はここぞとばかりに力を入れる。

悟空（2人共すんげえパワーだ！）

悟空「おめえ達、よくここまで成長したな！」

そう悟空が言い放った瞬間

悟空「はあああああ！」

悟空の金色の髪がぐんぐん伸びていく。

そう、スーパーサイヤ人3である。

今まで、押ししてた霊夢達であったが悟空がスーパーサイヤ人3になった瞬間、一瞬で押し返されてゆく。

霊夢「なんて、パワーなの！」

魔理沙「もうだめだ！」

その瞬間2人のスペルカードがかき消された。

悟空のかめはめ波は、そのまま2人に向かって飛んでいく。

このままでは霊夢達が死んでしまうかもしれない。

その時！

『キュイン』

悟空のかめはめ波が曲がった。

いや、悟空が曲げたのである。

霊夢達は、かめはめ波の衝突をなんとか免れることができた。



## 平和な日常 第58話

『ヒュー』

霊夢と魔理沙は、力を使い果たし地面に一直線に落ちていく。

『バタンッ』

そして、強く地面に打ち付けられた。

魔理沙「いてててて」

霊夢「ぐっ、流石に20倍界王拳は無理しすぎたかしら」

倒れこみながら言う2人

『スタッ』

悟空「おめえら大丈夫か！」

悟空は、すぐさま倒れ込んだ2人の元へ駆け寄った。

霊夢「全然、大丈夫じゃないわ」

霊夢は冷静に悟空に返答する。

魔理沙「ああ、身体中がズキズキと痛むぜ」

悟空「やつぱり、20倍まで上げたんもだけどその状態でスペルカードなんか使った

から」

悟空は、心配そうな声で言った。

霊夢「ぐつ、ぐぐ」

霊夢が体を無理やり起こす。

魔理沙「よつこらしよつと」

魔理沙も霊夢と同時に体を起こした。

悟空「立って でえじようぶ なんか？」

悟空が2人に言った。

霊夢「ええ、なんとかね」

そして、ふつと空を見上げる霊夢

そこには、月が登っていた。

魔理沙「もうすっかり暗くなっちゃまったな」

魔理沙の言う通り3人が戦ってる間にもう7時半になってたのである。

霊夢「ほんとね」

魔理沙「なんか、今から帰るのしんどいし今日ここで泊まっていいか？」

魔理沙は、疲労が溜まっていたので帰る体力がなかったのである。

霊夢は、勿論とだけ言い返して博麗神社の中へと入ってき その日は、すぐに寝た。

く翌朝く

霊夢「うくくん」

霊夢が目を覚まし背伸びをする。

そして、横を見る。

悟空と魔理沙は、まだ寝ていた。

霊夢「起きなさい2人共」

霊夢が2人に声をかける。

魔理沙「うつく」

悟空「ふあああ？」

すると、悟空と魔理沙が目を覚ました。

魔理沙「ふわあく」

そして、大きなあくびをする。

魔理沙「そういや私 神社に泊まったんだったな」

魔理沙が寝ぼけ眼の目を擦りながら立ち上がった。

霊夢「もう朝なんだからしつかりしなさい」

そんな魔理沙を見てかつを入れる霊夢

悟空「ふわあく、オラ腹減ったぞ」

悟空が腹を抑えながら言う。

霊夢「朝食作るから少し待ちなさい」

そう言つて霊夢は、台所の方へ向かった。

〈数分後〉

霊夢「出来たわよ」

霊夢が机の上に大量の食べ物並べる。

悟空「お、飯飯」

魔理沙「相変わらずすげえ量だな」

魔理沙は、並べられた料理を眺めながら言った。

霊夢「悟空は、これでも足りないくらいなのよ」

霊夢が椅子に座る。

悟空「ガブツガブツガブツガブツ」

悟空は、物凄い速度で食べ物を食べている。

いや、もはや吸い込んでいるの方が正しいのかもしれない。

魔理沙「はは、流石だな」

魔理沙が悟空に言った。

悟空「ぼうが、ぼんぼごどねーぼ（そうか、そんなことねーぞ）」

すると、悟空が食べ物をお口に詰めながら魔理沙に返答する。

霊夢「食うか喋るかどっちかにしなさい」

思わずツツコミを入れる霊夢

悟空「んん」

『ゴクツ』

すると、あろうかとか口に詰め込んでいた食べ物を一気に胃へと運んだ。

霊夢（ちゃんと、噛みなさいよ）

悟空「ふはー、やっぱり霊夢の飯はウメエなあ」

悟空が霊夢に言った。

霊夢「その言葉は、聞き飽きたわよ。毎日 言ってるじゃない」

霊夢がめんどくさそうに返答をする。

すると、魔理沙が横から、

魔理沙「確かに霊夢 料理の腕上がってると思うぞ」

霊夢「また、そんなお世辞言っちゃて」

魔理沙「本当だって悟空の為に毎回あの量の飯を作ってるから徐々に料理が上手になってるじゃないか」

魔理沙が霊夢を褒めまくる。

霊夢「もう、魔理沙ったら」

霊夢が照れ臭そうな顔をした。

魔理沙（よし、霊夢を褒めておけば何かと役に立つだろ）

そんな会話をしながら3人は、食事を進めた。

〜数分後〜

悟空「いや〜、食った食った」

悟空は、腹をポンポン叩かながら言った。

魔理沙「ほんと、朝からこんなに食べたのは久しぶりだぜ」

霊夢「これだけ作ってもすぐなくなるなんてね」

霊夢は、空になった皿を見る。

霊夢「洗い物大変なのよね〜」

魔理沙の方をチラッと見ながら言う霊夢

魔理沙は、その霊夢の目線にすぐさま気づく

魔理沙「わかったよ。手伝えばいいんだろ」

そう言つて魔理沙は、皿を集める。

霊夢は、ニヤツとしながら

霊夢「あら、悪いわね〜」

と言った。

魔理沙「ちつともそんなこと思っただけに」

そう愚痴をこぼす魔理沙

〜数分後〜

魔理沙「終わった〜」

魔理沙と霊夢は、洗い物を終えた。

霊夢「私は毎日朝からやってるんだからね」

つかれている魔理沙に霊夢は言った。

そして！

霊夢「さてと」

そう言っただけに向かう霊夢

魔理沙「どこ行くんだ霊夢？」

霊夢に訪ねる魔理沙

霊夢「何って修行に決まってるじゃない」

霊夢は、魔理沙に返答する。

魔理沙「こんな朝からか！」

時計をチラ見しながら言う魔理沙

霊夢「あら、これが私のスケジュールよ」

そう言いながら外に行った。

魔理沙「なあ、悟空 霊夢って毎日あんなことしてんのか？」

魔理沙は悟空に小声で訪ねる。

悟空「ああ、夜の異変が終わってから界王拳を使いこなすとか言って毎日界王拳の練習をしてんだ」

魔理沙「でも、霊夢の奴、十分 界王拳を使いこなしてるじゃないか？」

悟空「オラもそう思うんだけどな」

悟空がそう呟くように言った。

魔理沙は、少し考える動作を入れる。

そして！

魔理沙「ちよっと私 霊夢と一緒に修行するぜ」

そう言って魔理沙は、霊夢の後を追う。



## 風神録編

## 博麗神社の危機！ 第59話

霊夢「よし、取り敢えず3倍界王拳までは余裕で耐えられるようにしておかないとね」  
そう言つて霊夢は、気を溜める体制をとる。

その時

魔理沙「おーい、霊夢！」

魔理沙が霊夢の元へと駆け寄つてきた。

霊夢「どうしたの魔理沙？」

魔理沙「私も修行するぜ！」

魔理沙が霊夢に修行すると言う。

霊夢「そういえば、あなた魔法拳覚えたばかりだもんね。いいわ、一緒に修行しましよ」

魔理沙に言う霊夢

悟空「全く、おめえ達よく修行するようになったな」

悟空がそう呟きながら神社から出てきた。

霊夢「あら、私はただ界王拳の完全マスターを目指してるだけよ」

魔理沙「界王拳の完全マスター？」

霊夢「あ、いや正式に言えば界王拳を超える技を目指してるの」

魔理沙「界王拳を超える技だって！」

その言葉に驚く魔理沙

それもそのはず、界王拳は、自分の戦闘力を増幅させる技

そんな技よりも凄い技が霊夢達に出来るのであろうか。

魔理沙「流石 霊夢だなもうその先の強さを目指してるなんて」

魔理沙が霊夢に驚く。

霊夢「でも、あくまで目指しているだけ。まずは、界王拳を使いこなさなくちゃね」

霊夢の思いは更に上へ上へと上がることに悟空と暮らしている間に闘いの楽しさを

知ったのであろう。

その時!

霊夢「誰か来る！」

霊夢が気を感じ取った。

魔理沙「ほんとだ、結構でかい気がこっちに向かってるぞ」

魔理沙もその気を感じ取った。

霊夢「参拝客かしら？」

霊夢が夢のこもった言葉を言う。

魔理沙「何言つてんだ。こんな神社に参拝客が来るはずねえだろ」

遠回しに霊夢をデイスる魔理沙

霊夢「なんですつてー！」

霊夢が魔理沙を睨む。

魔理沙「すまんすまん」

魔理沙は、霊夢の視線を感じとりすぐさま謝った。

悟空「霊夢の知り合いじゃねえんか？」

霊夢「知り合いって言われても私知り合い少ないから違うと思わよ」

霊夢の知り合いでもない。

一体、誰がここに向かつてきているのだろうか。

悟空達は、少し待つことを決めた。

数分後

霊夢「来た！」

ついに謎の気の正体が現れた。

??? 「やっと着いた」

その声と共に女性が博麗神社に現れた。

魔理沙「どうやら、さっきの気の正体は、こいつみたいだな」

霊夢「そう見たいね」

悟空「油断するなよ。おめえら程じゃねえけど凄え気だ」

3人は、その女性を睨む。

霊夢「あなた何者？」

霊夢が女性に質問をした。

女性は、霊夢達に気づく。

『タッタタッタ』

ゆつくりと霊夢達の元へと近寄ってくる。

そして、霊夢の顔を見るなり

???「貴方がこの神社の巫女ですか？」

と訪ねてきた。

霊夢は、勿論「そうだけど」と女性に言う。

霊夢「て、それよりも貴方一体誰よ！」

???「私は山の上にある神社の巫女です」

なんと謎の人間の正体は巫女であった。

悟空「おめえ巫女なんか？」

悟空が女性に確認を取るように聞く。

すると、女性は、悟空の方を向き

??? 「そうよ、僕」

と悟空に言った。

僕と言つてることから恐らく悟空を子供扱いしてるのであろう。

霊夢「それよりその山の巫女が私たちに何の用なの」

霊夢が女性に問い詰める。

??? 「そうですね、先に言っちゃうとこの神社を潰します」

なんと、急展開 女性は冷静そうに見えるがとんでもないことを言いだした。

勿論、霊夢達は、訳がわからずに困惑した。

霊夢は、すぐさま「なんですって！」

と言ひ女性を鋭い眼光で睨みつける。

??? 「まあまあ、一度落ち着いて下さい」

女性は、霊夢を落ち着かせる。

しかし！

霊夢「これで落ち着いてられるわけないでしょ！」

迫力のある声を出す霊夢

それもそのはず自分の住まいが潰されると聞いて落ち着ける訳がないのである。

??? 「落ち着いてもらわないとこっちも説明出来ないのよ」

女性は困ったような顔で霊夢に言った。

霊夢は、一度呼吸を整える。

霊夢 「はああ、ふう〜」

大きく深呼吸を取る。

霊夢 「オツケー、落ち着いたわ、早く説明して頂戴」

霊夢が女性にそう言った。

??? 「分かりました。説明しますね。実は山の上にいる神様達が信仰の集められない神社は、我々に受け渡すか、潰してしまいなさい との事です」

と説明をした。

霊夢 「それだけ?」

説明の短さに戸惑う霊夢

??? 「はい、これだけです」

女性は笑顔で霊夢に告げた。

霊夢は、少し考える。

女性は、そんな霊夢を見かねて、

???「今、考えなくてもいいです。また、今度伺うのでその時に受け渡すか潰すかだけ考えといて下さい」

そう霊夢に言い女性は、山の方へと飛んで行った。

霊夢「ちよ、待ちなさい」

と慌てて止めようとしたが時すでに遅し女性は、遙か先に行ってしまった。

霊夢達は、呆然と立ち尽くす。

恐らく今の自分達の状況にまだ頭の思考が追いついていないのであろう。

神社を急に潰すと言われてしまったのだから……

霊夢「一体、なんなのよ！」

少々怒りの混じった声を出す霊夢

魔理沙は、霊夢を心配そうな目で見る。

魔理沙「なあ、霊夢？」

そして、霊夢に問いかけた。

魔理沙「本当に神社をどうするんだよ？」

霊夢「博麗神社は私の物よ潰しもしないし受け渡す気もないわ」

そう魔理沙に告げた。

魔理沙「でも、山の神が言ってんだろ？なんとかなるものなのか？」  
魔理沙は、更に霊夢に質問を重ねた。  
霊夢は、少し考えた。



## 山の神社へ！ 第60話

あれから霊夢達は一度 博麗神社の中に入り今後の考察をした。

霊夢「今回の件をまとめると山の神が信仰のない神社を潰すか受け取るかをしており、博麗神社は残念ながらあまり信仰がなかった。その事から博麗神社を潰すか受け渡すかを選べることね」

大体の内容をまとめた霊夢

この事から魔理沙と悟空と共にまず何をすべきか3人は、話し合った。  
そこで魔理沙が一つ意見を出す。

魔理沙「まあ、なんやかんや言っても結局その山の神って奴に会うのが1番早いんじゃないか？」

魔理沙の出した意見は、普通だが1番、今後の可能性を感じるものであった。

霊夢「たしかにそれしかないわよね」

霊夢が魔理沙に呟く。

魔理沙「だろ、こういう場合は直接 本人達のところに行って話合うのが1番早いんだぜ」

そう言つて魔理沙が立ち上がり箒を手取る。

そんな、魔理沙を見て霊夢が「ちよつとまつて魔理沙」と魔理沙を止める。

魔理沙は、霊夢の言葉にすぐに反応し霊夢の方を向く。

魔理沙「どうしたんだ霊夢？」

霊夢「たしかに神達に会つて話合ふのは賛成よ。でも、この問題は、博麗家の問題  
私1人で解決するわ」

真剣な眼差しで魔理沙にそう告げたのであつた。

勿論、魔理沙は困惑する。

魔理沙「何言つてるんだよ霊夢？私達、親友だろ？」

悟空「そうだぞ、霊夢」

悟空も魔理沙に加勢し霊夢に言つた。

悟空「いくら自分の問題でも周りの人を頼ることも大切なんだ」

霊夢「でも、今回は神々も関わっている。もし、大変な目にあつたら私じゃ責任とれないじゃない」

そう霊夢は、悟空と魔理沙を心配して言つてるのである。

魔理沙「ちよつと待てよ霊夢！私はともかく悟空は大丈夫だろ」

霊夢「それでもこれは私の問題、異変でもなんでも無いのに貴方達を巻き込まないわ」  
霊夢は、頑固として魔理沙と悟空に言った。

だが、その程度で引き下がる悟空達では無い。

悟空「何言つてんだ霊夢。オラは、ここに住んでんだぞ？もしここが潰れちまつたら住む場所無くなるじゃねえか？」

悟空が正論を言った。

たしかに悟空は、博麗神社にお世話になつてる身　悟空が霊夢を手伝うのは当たり前なのである。

霊夢は、悟空のセリフを聞き少し考えた。

霊夢「わかったわよ」

霊夢が悟空に許可を出す。

だが、

霊夢「でも、悟空だけ。魔理沙はダメよ」

魔理沙をキリツと睨みつけながらいう霊夢

魔理沙「はあ、なんでだよ！」

勿論、魔理沙は反発する。

霊夢「さつきから言ってるでしょ。これは異変じゃないの私個人の問題　魔理沙に

は、関係ないでしょ」

しかし、悟空とは違い特に理由のない魔理沙を危険な目に合わせるわけにはいかない。

そんな気持ちから、霊夢は魔理沙に言ってるのである。

勿論、魔理沙もその事を分かっている。

だが、魔理沙も魔理沙で霊夢の役に立ちたい。

そんな気持ちがあるのである。

魔理沙「じゃあ、こうしよう」

そこで魔理沙が一つのアイデアを思いついた。

魔理沙「私は、あくまで修行の為に霊夢達について行く」

霊夢「修行の為？」

魔理沙「そう修行の為だ！だから霊夢を手伝いたいとかそういう気持ちは一切ない！

これならどうだ！」

魔理沙の案は単純なものであった。

勿論、魔理沙も自分で言いながらもそれは、理解している。

霊夢は、少し考え込んだ。

そして、

霊夢「分かったわ。私の負けよ。魔理沙も一緒に行きましょ」

霊夢が魔理沙にも許可を出した。

魔理沙「よっしゃー！」

魔理沙は、ガッツポーズをとる。

霊夢「ただし！危ないと思つたらすぐに逃げなさい。分かった!!」

霊夢が魔理沙に忠告をする。

魔理沙「分かつてゐるって」

魔理沙は、ニヤツと満面の笑みを浮かべた。

く数分後く

霊夢達は、大体 行く用意を整えた。

霊夢「よし、それじゃあ行くわよ！」

そう言つて飛び出す霊夢

悟空と魔理沙もすぐさま後を追つた。

魔理沙「なあ、霊夢、山つて言つてもどこの山に向かうんだ？」

霊夢「取り敢えず、あいつが飛んで行つた方に向かいますよ」

魔理沙「あいつが飛んで行つたのってこつちだよな？こつちの方にある山といえ

……あつ！」

魔理沙が何かに気がついた。

霊夢「急に何よ」

霊夢は、すかさず魔理沙を訪ねる。

魔理沙「もしかして、あいつの神社がある山って妖怪の山じゃねえのか！」

魔理沙のその言葉を聞き、

霊夢「たしかに！こっちは妖怪の山だわ！」

と言った。

悟空「妖怪の山？」

妖怪の山とは、何か知らない悟空

霊夢「ああ、妖怪の山は、昔から住みついてる妖怪がたくさんいる山なの。普通の人

間ならまずいかないでしょうね」

悟空「へえ、幻想郷ちゆうのはいろんなところがあんだな」

魔理沙「何 今更言ってるんだ」

魔理沙が悟空にツツコミを入れる。

そんなこんな会話してる間に妖怪の山 付近にたどり着いた。

悟空「ひえ、でつけえ山だなく。山を見下ろしながらいう悟空」

魔理沙「たしかにそうだな。で、霊夢このでかい山からどうやってあいつの神社を探

すんだ？」

「そう山がでかい分、それだけ神社を探すのが困難なのである。

霊夢「そんなの決まってるでしょ」

しかし、霊夢は至って冷静

だが、

霊夢「そんなの歩いて探せばいいじゃない！」

と言いつ出した。

魔理沙「歩いてだって！」

勿論、魔理沙はそのセリフに驚く。

魔理沙「空から探した方がいいだろ」

霊夢「バカ、空から探したら木で見えないじゃない」

そうである。

この山は、自然豊かその状態で空から探してもきつと見つからない。

霊夢は、それを考え歩く事を提案したのである。

## 人間は盟友！ 第61話

霊夢と魔理沙それに悟空は、妖怪の山を歩いていた。

『ザーツザーツ』

妖怪の山の中は草木が充満しており木で太陽の光もろくに届いていない程であった。

魔理沙「薄気味悪い場所だな〜」

魔理沙は、何処と無く震えた声で言った。

霊夢「何、魔理沙まさか怖いのか？」

魔理沙「こ、こ、怖くなんてないぜ！」

霊夢「あら、それにしても震えてるじゃない」

魔理沙「これは、ただ寒いだけだ！」

意地を張る魔理沙であるが内心は、かなり怯えている。

魔理沙（くそ〜、薄気味悪すぎだぜ）

魔理沙は、霊夢の後ろに隠れるように歩いた。

霊夢（まったく）

霊夢は、心の中で優しく呟いた。



悟空「そういや、霊夢」

その時、悟空が霊夢に質問をかける。

霊夢「どうしたの悟空？」

霊夢は、悟空の方に顔を向けた。

悟空「この山のどっかに神社があるのは分かってつけど一体、今どっちを目指して歩いてんだ？」

霊夢「そんなの決まってるでしょ」

霊夢が言葉を溜める。

そして！

霊夢「適当に決まってるじゃない!!」

どう考えても堂々と言えるセリフでは無い。

だが、霊夢は、ドヤ顔で言った。

勿論、悟空は驚く。

悟空「適当に歩いて大丈夫なんか？」

霊夢「大丈夫、大丈夫。歩いてたらいつかはつくでしょ」

悟空「そんなもんか」

悟空は、腕を組みそれでいいのかと思いつつながら霊夢の後をついて行く。

く数分後く

しばらく、歩いた霊夢達

すると!

すこし離れたところにキラツと光る物が見えた。

そう太陽の光である。

霊夢「見て、あそこ木があまり生えて無いから太陽の光が見えるわよ」

魔理沙「本当だ!」

そう言つて3人は、すぐさま太陽の光が見える方へと向かった。

そして、太陽の光があるところにたどり着いた。

そこでは、

『ザバァンザバァン』

と音が聞こえた。

そうそこにあつたのは川である。

悟空「川じゃねえか」

悟空が川を見下ろした。

霊夢「ほんと、綺麗な川ね」

そう言つて霊夢は、手で水をすくい水を飲む。

霊夢「うん、美味しいわ」

魔理沙「でも、まさか、こんなところに川があるなんてな」

霊夢「まあ、ここは自然豊かだし川の二つや二つあっても不思議じゃないんじゃない」とそんな会話をした。

その時！

??? 「誰だ！」

後ろの方から声が聞こえた。

霊夢達は、恐る恐る後ろを振り向く。

??? 「なんだ、人間じゃないか」

そこには、青い髪の少女が立っていた。

見た感じ霊夢達に敵意は持っていない。

恐らく、この川に住む妖怪か何かであろう。

霊夢「あなたは一体？」

??? 「私は、河城にとり この山に住んでるカツパさ」

どうやら、少女はカツパで名前は、河城にとり と言うらしい。

霊夢は、にとりの挨拶のある点に注目した。

霊夢「あなたこの山に住んでるの？」

そうそれは勿論、この山に住んでるといふ事である。

この山に住んでいるのならきつと神社の場所もわかるはず霊夢はそう予想したのであった。

にとり「そうさ、私はこの山に住んでるのさ。でも、それがどうかしたのか？」

霊夢「実は、この山の何処かにある神社に行きたいのよ。何処にあるか知らない？」

霊夢の質問にとりは、考え込んだ。

そして！

にとり「ああ、知ってるよ」

にとりの返答は、霊夢の予想通り知っているといるというものであった。

霊夢「ほんとう！」

ワントンボ声が高くなりながら霊夢は言った。

霊夢「じゃあ、その神社は何処にあるの？」

さっきの質問に続けて言う霊夢

しかし、にとりの回答は、

にとり「それは、教えられないよ」

なんと、場所は教えられないと言うものである。

霊夢は、すかさず聞き返す。

霊夢「どうしてよ」

今度は先程の声とは違い鋭く威圧がこもっていた。すると、にとりの回答は至ってシンプルであった。

にとり「危険だからさ」

そう危険だからである。

霊夢「はあ、それあなたは関係ないでしょ！私達が行くだけなのよ」

にとり「ダメだ！あそこは簡単に人間が立ち入りできる場所じゃない！盟友をそこに行かせるわけ無いだろ！」

と言い出した。

魔理沙「盟友？なんで私達が盟友なんだ？」

盟友と言う言葉に疑問を持つ魔理沙

にとり「カッパと人間は昔から盟友と言われているんだ」  
にとりが軽く説明をする。

霊夢達は、困り果てた。

一体、どうしたら神社の場所を教えてもらえるのか。

流石のにとり もそんな霊夢達を見て少し戸惑った。

そこで、一つのアイディアを出した。

にとり「そうだ。じゃあ、こうしよう」

霊夢達は、すぐさま にとりの方に耳を傾ける。

にとり「私に勝つことが出来たらここを通してあげる」

なんと、そのアイデアは、以外や以外にとりに勝つことがだ。

霊夢は、逆に戸惑ってしまふ。

それもそのはず見た目じよう とても にとりが戦える妖怪には見えないのである。

霊夢「本当にそれでいいの？」

霊夢は、にとり に再度確認した。

にとり「ああ、これで私に買ったら神社の場所を教えてやる」

にとり は、自信満々の表情で言った。

霊夢は、少し困惑したが神社を探すためならしよがないそう思い にとり との戦

いをすることにした。

果たして にとり は一体、何を考えているのだろうか。

そして、この にとり の余裕の表情

次回、にとり との戦いスタートだ!

## 霊夢 VS にとり 第62話

山の神社の場所を探すためにとり と勝負をすることになった。にとり に勝つことが出来れば神社の場所を教えてもらえる。

勝てなければ返される。

そのどちらかだ！

果たして霊夢達は、にとり に勝つことが出来るのだろうか！！

霊夢 「分かったは、その勝負のつてあげる！」

にとり 「そう来なくちゃね」

ご機嫌そうな笑顔を見せるにとり

霊夢 (どう見ても戦闘に適した体じゃないけど………本当に大丈夫なのか……?)

霊夢は、重苦しい顔でにとりを見た。

にとりは、すぐさまその霊夢の顔に気づく。

にとり 「そんな、顔しなさんなって」

にとりは、笑顔で霊夢に言った。

魔理沙 「なあなあ霊夢？」

小声で魔理沙が霊夢を呼んだ。

霊夢「どうしたの？」

霊夢も魔理沙と同様に小声にする。

魔理沙「お前、あいつと戦うのか？」

霊夢「ええ、そうしないと神社の場所教えてくれないみたいだしね」

魔理沙「でも、どう見てもあいつ戦闘慣れしてるように見えねえぞ？もし、大怪我でもさせちまったらどうするんだ？」

霊夢「私だって力加減ぐらい出来るわよ」

魔理沙「でもよお？」

霊夢「もう、どうせあいつと戦わないと神社の場所分らないんだししようがないでしょ」

霊夢達がそんな会話をしていると ずっと 黙ってた にとりがしびれを切らした。にとり「いつまで話したんだよ！戦うんなら早くしよう!!」

魔理沙「しようがねえ、霊夢ちゃんと手加減しろよ」

魔理沙が霊夢に そつと言った。

霊夢「分かってるわよ」



そう言つて霊夢がにとりに近づいて行つた。

霊夢「待たせて、悪かつたわね。それじゃあ、戦いましょうか」  
そう言いながら戦闘体勢をとる霊夢

すると！

にとり「あ、ちよつと待つて」

そう言つて一度、にとりは、草木の生えている方に向かつた。

霊夢「えっ？」

霊夢が困惑する。

そして、少しして

にとり「お待たせ〜！」

にとりは、川に戻つてきた。

霊夢「全く、どこ行つてたのよ」

そう言いながらにとりの方を振り向く。

そこには！

にとりの姿がなかつた。

霊夢「えっ？」

戸惑う霊夢

にとり「ふふふ、驚いてるみたいだね！」

だが、確かににとり は近くにいた。

霊夢「一体、どうなってるの？」

にとり「これは光学迷彩スーツ」

霊夢「光学迷彩スーツ？」

頭に疑問符を浮かべる霊夢

にとり「簡単に言えば姿を消せる服さ」

霊夢「でも、それ反則じゃないの？」

にとり「勝負に反則なんてものないのさ」

そう言つてにとり は構え出した。

勿論、にとりが構えているのは霊夢達には見えていない。

霊夢「まあ、いいわ。ちょうどいいハンデね」

そう言つて霊夢も構え出した。

にとり（ハンデって……）

にとりは、ハンデという言葉に少し戸惑ってしまつてる。

にとり（まあ、いつか）

だが、特に気にするのをやめ戦いに集中することにした。

そして！

にとり「はあ！」

にとり　が霊夢にエネルギー弾を放つ。

霊夢「ふん」

しかし、霊夢は鼻で笑いながら軽くエネルギー弾を躲した。

にとり「私の場所がわからないのに避けるなんて凄い動体視力だな」

にとりは、霊夢に関心を抱いた。

霊夢「あれぐらい避けれるに決まってるでしょ」

にとり「なら、これならどうだ！光学」「ハイドロカモフラージュ」

今度は、スペルカードで攻めた　にとり

そのスペルカードの弾幕は、数がとてつもない量であった。

姿が捉えられないプラスこのスペルカード

にとりは、勝ちを確信した。

だが、しかし！

『ヒュンヒュンヒュン』

霊夢は、高速で身を動かし軽やかに弾幕を躲していった。

にとり「な、なに!？」

流石のにとりも焦りを感じた。

その間に、

霊夢「ふう〜」

霊夢は、全ての弾幕を避け切っていた。

にとり「まさか、全部 躲すなんて！」

霊夢「私を見くびりすぎたみたいね。私はそんじやそこらの奴とは、レベルが違うのよ」

にとり「確かに、お前は、私より、いやこの山にいる半端な妖怪達より全然強いみたいだな」

にとりは、今になって霊夢と言う名の人間の強さを実感した。

にとり「確かに、お前は私のスペルカードを全て避けることが出来た。だが、それは、あくまで守り私の姿が見えないお前は私にダメージを与えられないはず！この戦い私が負ける事はないんだ！」

そう、その通りである。

にとりは、光学迷彩スーツによって姿をくらましている。

普通の者ならば、にとりの場所が捉えられず、にとりに攻撃することが出来ない。

そう、普通の者ならば……

霊夢「そうね。確かに貴方の姿は、見えないわ。でも……」  
『ヒューン』

霊夢が高速で移動をする。

そして！

『バゴン』

そのような音が鳴り響いた。

そう、それは、

にとり「なっ!!」

『バタンツ』

そう霊夢がにとり を攻撃した音である。

にとり「くっ!どうして」

にとりは、訳がわからず混乱する。

そんな、にとりを見て霊夢が説明を始めた。

霊夢「貴方の姿は確かに見えないわ。でも、姿が見えなくても貴方からは、気配が出ている。私は、それを感じとっただけよ」

そう、その通りである。

霊夢は、相手の気を読むことができる。

るので、いくら姿を見えなくしようと最初からにとりが勝つことはなかったのである。

## 超高速の天狗 第63話

前回、あっけなくにとりに勝利した霊夢

にとり「気配を感じれる。まさか、人間がそんなこと出来るなんて思ってたよ」  
にとりは、顔をしょんぼりとさせる。

霊夢「まあ、人間でも出来る奴はそうそういないわ。てか、今はそれを置いといて……」

と言おうとした瞬間

にとり「神社の場所だろ」

と霊夢よりも先に口にした。

そして、山の頂上の方を指差すにとり

にとり「神社はあそこ。山の頂上にあるのさ」

霊夢達は、頂上の方に目をやる。

霊夢「そう、あそこにあるのね」

にとり「ああ、だけど本当に行くのか？あそこには神もいるんだぞ？」

にとりは、霊夢達が本当に行っても大丈夫なのか心配なのである。

河童とは、それだけ人間のことを思っていると言う事でもある。

すると、霊夢はにとりに眩く。

霊夢「大丈夫よ。私は博麗の巫女そんなじゃそこの奴には負けないわよ」

その言葉だけを残して霊夢達は、歩き出した。

にとりは、そんな霊夢達を見送るように見続けた。

そして、しばらく歩いた霊夢達

魔理沙「いや、凄かったなあ光学迷彩スーツだったけ？あんなのもし気を読むこと

が出来なかったら簡単には突破出来なかっただろうな」

魔理沙がふと思いつ出したかのように眩く。

霊夢「まあ、気は誰でも感じる事が出来るもの。あいつは自分の装備に自信があったのだけどその気を感じるということ自体を知らなかった。あいつの敗因は、それだけよ」

などとさっきの戦いを振り返っていた。

その時！

悟空「何か来るぞ！」

と悟空が大声で言った。

霊夢「本当だわ。よくわからないけどかなりの速度ね」



そうその通りである。

何者かが霊夢達に接近していたのだ。

その速度は、もしかすると霊夢すらも上回っているのかもしれない。

一体、霊夢達に接近しているのは、何者なのだろうか。

そして！

『ヒューーン』

『ストツ』

ついにその正体の者が目の前にありだった。

そして、霊夢達を見るなり

??? 「あやややや」

と言い出した。

その姿は、背中に大きな黒い翼をつけている女性であった。

霊夢 「貴方、何者？」

霊夢がその女性に睨みつけながら言った。

??? 「霊夢さんですね」

霊夢は、驚いた。

それは、勿論どうして、自分の名前を知っているのかと言うことである。

霊夢「貴方どうして私の名前を」

霊夢が女性に訪ねた。

???「あら、霊夢さんだけじゃないわよ。そっちにいる金髪の魔法使いは、霧雨魔理沙。

そっちの子供は、孫悟空」

なんと、霊夢だけでなく魔理沙や悟空の名前まで知っていた。

悟空「なんでオラ達の名前知ったんだ？」

霊夢に続いて訪ねる悟空

???「それは、ですね」

女性は、焦らすように言い始めた。

???「知ってる理由はですね」

霊夢は、そんな女性に少しイライラを感じ始めた。

霊夢「ええい、早く理由を説明しなさいよ！」

そして、女性に物凄い迫力のある声を出した。

女性は、ビクツとなり、焦らすのをやめた。

???「実は見てたんですよ」

霊夢「見てた？」

???「はい、今までの貴方達の異変解決などを見ていたんですよ」

なんと、女性は、霊夢達を見ていたのである。

勿論、そんなことを言われて霊夢達が戸惑わない訳がない。

霊夢「ちよつと、待つて。いまいち話の意味がわからないんだけど」

霊夢が女性に言った。

そんな、霊夢を見て女性が説明を始めた。

??? 「実は、私 新聞記者なんです」

霊夢「新聞記者？」

??? 「はい！だから、よくあなた方の活躍を新聞に書かせていただいていたので貴方方を知っているのです」

そう女性は、記者だったのである。

実は、霊夢達が異変解決をしている時、裏で霊夢達を見ていたということだ。

霊夢「へえ、なるほどね」

やつと、理解をする霊夢

魔理沙「で、その新聞記者が私たちに何のようなんだ？」

魔理沙が横から女性に言った。

女性は、ハツとなった。

??? 「そうだ、忘れてました。実は、山に侵入者が現れたとのことで私はここによばれ

たんです」

霊夢「侵入者？」

???「はい、侵入者です」

魔理沙「それって、もしかして……」

悟空「オラ達のことか？」

???「どうやら、そのようです」

な、な、なんと、妖怪の山で霊夢達は、侵入者扱いされていた。

霊夢「てことは、貴方がここに来た目的は……」

???「はい、侵入者を追い払えとのもので……」

その言葉を聞きすぐに霊夢は、

霊夢「なんだ、結局、貴方も敵ってことね」

と言い構え出した。

???「いや、私は正直やりたくないんですよ。ても、貴方達を通したら後で他の奴ら

がうるさいから」

そう言いながら女性も構え出した。

お互いに睨み合う2人

その時！

悟空が横から女性にこう言った。

悟空「そういや、お前名前なんてんだ〜？」

そう、その通りである。

向こうは、こちらの名前、全員知っていたがこっちは、誰一人として女性の名前を知らなかった。

???「おっと、失礼。私の名前は、射命丸文 天狗よ」  
急いで名前を教える文

果たして、この後 どうなってしまうのだろうか。

## 恐るべし文のスピード戦術! 第64話

霊夢達が山の頂上を目指していると山に住む射命丸文が現れた。

天狗は、霊夢達を侵入者だと判断し追っ払おうとする。

果たして、霊夢達はどうなってしまうのだろうか!

霊夢「……………」

文「……………」

お互い様子見としている。

この無言の空間は一瞬の油断さえも許されない。

『ザーツザーツ』

木々が音を鳴らしながらなびいている。

その瞬間!!

『ヒュン』

『ヒュン』

霊夢と文が同時に動き出した。

『ダダタダダダ』

そして、打撃音が周りに響き渡る。  
そして、

霊夢「だりやああ！」

霊夢がその中で先に攻撃を当てた。

文「うっ」

文は少し後ずさりして体制を立て直す。

霊夢「貴方、なかなかやるじゃない」

文「褒められて光栄ですよ」

そう言いながら再び2人はぶつかりあった。

霊夢「だりやりやりやり」

文「だりやりやりやり」

2人は、気合いを込めたパンチを連続して放つ。

その時！

文「はああああ！」

今度は、文が霊夢に攻撃を命中させた。

霊夢「くっ！」

霊夢は、すぐさまバイと感じ距離を取ろうと後ろにさがる。

しかし、

文「おっと、逃がしませんよ」

すかさず距離を取る霊夢に近づき

文「だりやりやりや!」

と追い打ちをかけるように攻撃を重ねた。

流石の霊夢も文の攻撃ペースが速すぎて躲すことが出来なかった。

『ドントッ』

霊夢は、そのまま強く地面に背中をつけた。

霊夢「くっ!」

だが、霊夢はすぐさま体を起こす。

霊夢「なかなかやるじゃない」

霊夢は、文を睨みつけながら言った。

文「私のスピードは幻想郷でもトップクラス。たとえば、攻撃力、防御力が負けていた

としてもスピードで補えるんですよ」

霊夢「なるほどね」

霊夢「でも、私は負けないわよ!」



そう言って再び構え出す霊夢

文「私だって負けませんよ！」

文も同様に構え出す。

霊夢「だりやああ！」

霊夢は、正面から文に突っ込んで行った。

文「正面から来ますか」

そう言って文は、霊夢の攻撃を躲した。

霊夢「なに！」

まさか、攻撃を躲すとは思っていなかった霊夢！

文「ガラ空きですよ。はあ！」

そして、文はそのまま体制が崩れている霊夢に攻撃を放った。

霊夢「ぐはっ！」

霊夢は、そのまま吹き飛ばされてしまう。

だが、吹き飛ばされている中でなんとか体制を立て直した。

霊夢「危なかった」

文「どうですか霊夢さん私のカウンターは、私のスピードあつてのことなんですが」

霊夢「ええ、まさかあんなところでカウンターしてくるとは、思わなかったわ」

「霊夢は、冷静な表情で言った。

だが、冷静なのは表情だけ心ではかなりの焦りが浮かんでいた。

霊夢（くそく、一体どうしたらいいの。あのスピードに対応するには言いたい）

霊夢は、文の攻略手段を考えた。

その時!

霊夢「そうだわ!」

霊夢がある事を思いついた。

文「あら、何かスピードを破る作戦でも思いついたんですか?」

霊夢「ええ、そんなところよ」

そう言いながら霊夢は、スペルカードを構えた。

文は、驚いた。

それもそのはず、あんな自信満々だったのにただスペルカードを一枚構えただけだったのだから。

文「作戦って、たかがスペルカードですか。期待はずれですね」

文が霊夢を見くびるような言い方で言った。

だが、霊夢は、そんな文に言葉を返そうとはしない。

そして、

霊夢「霊符「夢想封印」」

霊夢は、自慢の技 夢想封印を放った。

文「やれやれ、そんなもの私が避けれないわけないじゃないですか」

そう言つて夢想封印を避けようとする文

だが、しかし！

文「何！」

文は驚きの光景を目撃する。

そうそれは、

『ドドドドドド』

なんと、文に夢想封印が当たるのではなく夢想封印が文の周りに放たれているのである。

そうこれは、かつて魔理沙が妖夢にとつた目くらまし作戦である。

文「くっ！」

文は、夢想封印が地面に衝突した時に出了た爆風に包み込まれてしまった。

霊夢「これであなたは私の姿は見えないはずよ」

そう言いながら2枚目のスペルカードを構える。

そして、

霊夢「霊符「夢想封印」」

再び夢想封印を放つ霊夢

今度は、文の周りではなく文じしんを狙って。

文「いや、これは驚きました。だけど、残念ですね」

文が何かを呟いた。

そして!

文「風符「天狗道の開風」」

なんと、文は爆風の中からスペルカードを放ったのである。

しかも、そのスペルカードは、物凄い風を起こし爆風を吹き飛ばしてしまった。

いや、爆風を吹き飛ばしたただけではない。

霊夢の夢想封印すらも相殺してしまった。

霊夢「何!」

流石の霊夢も驚きを隠せない。

文「いや、お見事でした。あと、ちよつとでアウトでしたよ」

霊夢「まさか、あんなスペルカードを持つてたなんて」

文「私は、風を操る能力を持っているんです。爆風で目くらましを狙ったのは、よかつ

たんですけど相手が悪かったですね」

そう、文は風を操ることが出来る。

そんな相手に爆風の目隠しなんて意味がなかったのだ。

霊夢「チツ、まだ勝負は終わってないわよ」

そう言つて霊夢は、またまた構え出した。

この状況、霊夢は絶対のスピードを持つ文を倒すことが出来るのであろうか。

## 勝利を掴め! 3種の夢想封印 第65話

霊夢（正面から行っても恐らく躲されてしまうわ。やっぱり……）  
霊夢が心中でそう囁いたあと！

『ヒュン』

超高速で空へと飛んだ。

文（おや?）

次は、一体何を考えているのだろうかと思っただけであらう。  
だが、霊夢のとった作戦は至ってシンプルなものであった。

霊夢 「霊符」「夢想封印 散」

「霊符」「夢想封印 散」

文「成る程、その手ですか」

そう、スペルカードの二枚重ねである。

霊夢は、数で押し切ろうそう考えたのであろう。

しやし、そんな甘い考えが通用する訳もなく。

『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』

文は、超高速で次々と弾幕を躲して行く。

文「なかなかの作戦ですが、所詮 私にかければ朝飯前ですよ」  
そう言いながら、全ての弾幕を文は、躲しきった。

霊夢「やつぱり、ダメか」

霊夢は、少し焦りを感じ始めた。

一体、どうすれば文に攻撃を当てる事が出来るのだろうか。

霊夢は、考え込む。

その時！

文「おっと、また、考え事ですか？でも、今度は時間をあげませんよ」

霊夢が文の対策方を考えている間に文が超高速で霊夢に接近した。

そして！

文「だりやりやりやりや!!」

そのまま近距離で弾幕を霊夢に放った。

霊夢「まずい！」

霊夢は、とっさにその弾幕避けていく。

だが、『パンツ』

1発、被弾してしまった。

霊夢「うわー!」

霊夢は、そのまま地面に落ちる。

霊夢「くっ!」

魔理沙「おいおい、霊夢の奴押されてるじゃねえか!」

離れて見ていた魔理沙も流石に心配を感じ始めた。

それもそのはず、目の前で数々の強敵を倒してきた親友がこうも簡単に押されているのだから……。

霊夢「くそ〜!」

霊夢が悔しそうな顔をする。

文「どうやら、私が押しているみたいですね」

文が笑顔で霊夢に言った。

……)  
霊夢（あいつを倒すにはあいつの動きを止める必要がある。でも、一体どうやって

そう普通にやっても文のスピードには、勝てない。

だが、裏を返せばスピード以外は、文に勝っている。

その証拠にまだ、霊夢は息を全然切らしていない。



だから、スピードさえ止めて仕舞えば霊夢に勝機はあるのだ!!  
文「はあ!!」

その時、文が霊夢に不意打ちをした。

霊夢「なっ!!」

霊夢は、とつさに腕を十字に構え防御をした。

霊夢「不意打ちなんて卑怯よ!」

霊夢が文に叫ぶ。

文「何言ってるんですか。戦闘中に考え事をする方が悪いじゃないですか。それに、結局 私のパンチ手で防御してるじゃないですか。今、絶対決まったと思ったんですけどね」

文は、霊夢にそう言った。

その時!

霊夢（防御……そうだわ!）

なんと、霊夢は防御という単語から一つの作戦を思いついた。

霊夢が微笑みを浮かべる。

霊夢「そうか、その手があつたわね」

そして、独り言を喋り始めた。

文「その手?」

霊夢の言葉に疑問を持つ文

霊夢「思いついたのよ、貴方のスピードを攻略する方法を!」

文「私のスピードを攻略? 寝言は寝て言ったださいよ霊夢さん。貴方に私のスピードが破れる訳ないじゃないですか」

文は、霊夢を小馬鹿にした言い方をする。

霊夢「まあ、そう言っただけで済むのも今のうちよ!」

そう言っただけで済むのも今のうちよ!

そして!

霊夢「霊符「夢想封印」」

霊夢は、夢想封印を放った。

文「また、夢想封印ですか。懲りないですね」

そう言っただけで済むのも今のうちよ!

その時!

その夢想封印は、文ではなく文の周りに放たれていたのである。

文は、驚いた。

そうこれは、先程破れてしまった目くらまし作戦と同じ工程であったのだから。

霊夢の夢想封印は、そのまま地面に衝突し爆風を巻き上げる。

文「また、これですか」

文は、拍子抜けした。

それもそのはず、これと同じ展開を先程やられたばかりなのだから。

文「何回もやればうまくいくつもんじゃないんですよ！」

文「風符「天狗道の開風」」

文は、先程使ったスペルカードを使い爆風を吹き飛ばす。

その時！

霊夢「霊符「夢想封印 瞬」」

霊夢は、文が爆風を吹き飛ばすのと同時にスペルカードを使った。

果たしてこのスペルカードはなんなのか！

文は、霊夢がスペルカードを使ったことには気づいていない。

『ヒューーン』

文「どうですか。また、爆風をはらいましたよ」

文は、霊夢の方を振り向く。

しかし！

文「何！」

文は驚いた。

そう、先程、霊夢がいた方を振り向いた文であったがなんとそこに霊夢の姿がなかったのである。

霊夢が動いた感じはなかったのに……

文は、困惑してしまった。

その時!

霊夢「夢符「二重結界」」

文の後ろの方から霊夢の声が聞こえた。

そう霊夢は、文の後ろに周り混んでいたのである。

文は、急いでスペルカード宣言が聞こえた後ろを振り向く。

その時!

『ギューン』

文の周りに結界のようなものがまとわりついた。

文「これは!!」

文は、驚きを隠せない。

霊夢「驚いたかしら?」

そんな、文を見て霊夢は声をかけた。

文「これは、一体！」

文が霊夢に尋ねた。

霊夢「それは結界よ」

霊夢が説明を始めた。

文「結界？でも、霊夢さんが相手を捕まえる技を持つているなんて」

霊夢「いいえ、これは相手を捕まえる技じゃない。そうこれは本来 防御のために使う技。ただ、それを応用して、自分ではなく相手に結界を張ったってわけよ」

文「成る程」

文は、納得する。

そして！

霊夢「これで決めるわよ！」

そう言つて また、スペルカードを構える霊夢

霊夢「霊符」「夢想封印 集」

そして、霊夢は、威力重視のよ夢想封印 集を放った。

文は、結界のせいで身動きを取ることが出来ない。

文「くっ！」

そして、そのまま文は夢想封印に飲み込まれてしまった。

## ついに到着!山の神社 第66話

前回、見事 文に攻撃を当てた霊夢

文「うわゝゝ!」

文は夢想封印のエネルギーの中に飲み込まれてしまった。

文を飲み込んだエネルギーは物凄くこの一撃に全てを賭けている。

そのような気持ちちが表面上に現れているようでもあった。

『バタン』

文は、倒れ込んでしまった。

文「く、くゝ」

文の体は、ボロボロになっていた。

どうやら、勝負有りのようだ。

霊夢「私の勝ちみたいね」

霊夢が文に近づき言った。

文「そう見たいですね」

文は、ゆつくりと微笑みながらそう返す。

魔理沙「おーい、霊夢ー！」

その時、魔理沙と悟空が小走りで霊夢と文の元にやってきた。

その表情には安堵の表情が浮かんでいた。

霊夢「あら、魔理沙」

霊夢は、そんな2人を見て優しく微笑む。

魔理沙「凄かったぜ、霊夢！まさか、こいつにあんな的確な夢想封印をあてるなんてな!!」

霊夢「それほどでもないわよ」

霊夢は静かな声で魔理沙に言った。

その時、

悟空「なあ、霊夢？」

悟空が疑問を持ったかのような顔つきで霊夢に声をかけた。

霊夢「何、悟空？」

悟空「さつき夢想封印と夢想封印 集 の間に夢想封印 瞬 々の使ってたよな？」

あれ、なんなんだ？」

そう、悟空の疑問は、もちろんそれであった。

文「あく、あれですね。実は私も気になっていたんですよ」

どうやら、疑問を持っていたのは悟空だけでなく文もだった。

霊夢が夢想封印 瞬 を使った時、霊夢は姿を消した。

そして、気がつけば文の後ろに回り込んでいたのである。

そんな、技を目の前で見ても疑問を持たないわけがなかった。

霊夢「あく、あれね」

霊夢が納得したかのような顔をする。

そして、驚きの言葉を放った。

霊夢「簡単に言えば瞬間移動ね」

な、な、なんと霊夢は瞬間移動したと言うのである。

魔理沙「しゅ、瞬間移動だっ！」

魔理沙は、声を荒げて驚いた。

いや、驚いたのは魔理沙だけではない。

悟空も文も呆然状態になり驚いていた。

悟空「おまえいつのまに瞬間移動なんて覚えたんだ？」



悟空は、驚いた表情を浮かべながら霊夢に尋ねた。

霊夢「あゝ、実は裏で練習してたのよ。ほら、朝 私が界王拳の練習してるでしょ。その時、毎日 少しずつ練習してたらいつのまにか出来るようになったのよ」

そう霊夢は、界王拳の修行の合間にも新たな技を考えていたのである。そして、それをこのような実戦で成功させる。

これは、霊夢の才能かもしれない。

文「成る程、どうりで私も知らないわけですよ」

文は納得したような顔つきで言った。

魔理沙（へえ、やっぱり霊夢 裏で頑張ってたんだな）

魔理沙も改めて霊夢の凄さを実感したのであった。

霊夢「それじゃあ、行きましようか」

ある程度、話が終わった霊夢が再び山頂を目指そうとした。

文「あやや、もう行っちゃうんですか？」

文が霊夢に尋ねた。

霊夢「ええ、急がなきゃいけないからね」

霊夢がそう文に言葉を返す。

文「急がなきゃいけない? 那样的いえば、靈夢さん達がどうして妖怪の山なんかに来ているんですか?」

「そういえば、文は、靈夢達がどうして妖怪の山に来たのかわからなかったのである。」

靈夢「そういえば話してなかったわね」

「そう言つて靈夢が説明を始めた。」

「靈夢の説明中」

文「あやや、そんな大変な事になつてたんですか!」

靈夢達の状況を知つた文は、驚きを隠せなかった。

靈夢「まあね」

文「そう言う事でしたら。山の天狗達には私からはなしておきますから、どうぞ山頂へ向かつてください」

靈夢「そうして、貰えると助かるわ。ありがとう」

靈夢は、文にお礼だけ言つて、再び山頂目指して歩き始めたのであった。

く一時間後く

文と別れてから一時間がだった。

未だに霊夢達は、山頂を指指して歩いている。

魔理沙「はあ、まだつかねえのか？」

魔理沙が少々疲れを感じ始めていた。

それもそのはず霊夢達が神社を出てからすでに3時間がたったのである。

疲労が溜まり始めてもしようがないのだ。

霊夢「あと、少しよ。頑張りなさい」

霊夢がそう励ます。

魔理沙「その言葉さつきも聞いたぜ」

だが、魔理沙の機嫌は、一向に悪くなるばかりである。

その時!!

悟空「あれなんだ？」

悟空が目の前を指指しながら霊夢と魔理沙に尋ねた。

霊夢・魔理沙「あれ？」

そう言いながら振り向く2人

そこには、神社があつたのである。

魔理沙「お、こんな森の中にたつてる神社ってことは！」

魔理沙のテンションがあがっていく。

霊夢「どうやらそう見たいね」

そう、目の前にある神社は、例の山の神社である。

魔理沙「よし、ラストスパートだ！」

先ほどの疲れが嘘のように魔理沙は、一番乗りで神社の方へと走っていった。

霊夢と悟空もその後を追うように神社に近づく。

そして！

魔理沙「着いたぜ！」

魔理沙がそう一言放った。

どうやら目的地にたどり着けたようだ。

霊夢「ふう、やつとね」

霊夢も一呼吸出す。

ここまで、河童や天狗と戦うハプニングもあつたがついにたどり着くことが出来たよ  
うだ。

次回、いよいよこの神社の管理人との直接 話し合いの開始である。

果たして、博麗神社の運命はいかに!!



## 巫女 v s 巫女 第 6 7 話

ついに妖怪の山の頂上にある神社にたどり着いた霊夢達

霊夢 「ここが例の神社ね……」

霊夢は、まじまじと神社を見つめていた。  
すると、

??? 「あれ、あなたは？」

神社の中から見覚えのある女性が出てきた。

霊夢 「あなたは！」

霊夢は驚いた。

そう目の前に現れた女性は、あの時 神社を潰すか受け渡せと言ってきた女性であったのだ!!

霊夢 「あなたはさっきの!!」

霊夢は目を鋭くして女性を睨みつけた。

??? 「博麗神社の巫女じゃありませんか」

女性は、微笑みながら霊夢達の方へ近づいてくる。

??? 「どうしたんですか？ わざわざこんな所まで来て？」

霊夢 「そんなの決まってるでしょ！ 貴方達に話があったからよ！」

霊夢が威圧のこもった声で女性に言った。

女性は、首を傾げて へえっ という表情で霊夢を見る。

霊夢 「何よその顔。神社の件よ神社の!!」

霊夢がそういうと女性は、

??? 「嗚呼、そのことですか。神社を受け渡すか潰すか決めたんですか？」

霊夢 「そんなわけないでしょ！ 私は受け渡す気も潰す気もないわ、あんた達にそれを伝えに来たのよ！」

霊夢は、自分の思いを女性に伝えた。

??? 「はあ」

そんな霊夢を見て愚かさを感じたようなため息をついた。

??? 「いいですか？ 貴方の神社は信仰が全然集まっていないのです。今回の件は、貴方の神社を助けるという事にも繋がるんですよ」

霊夢 「それは、貴方達の理屈でしょ！ 信仰だったこれから集めていけばいいし！」

それを聞き女性は少し表情を曇らせる。

??? 「いいですか、もしこのまま信仰心を集めることが出来なければ幻想郷は、力を失っ

てしてしまうのです。そう貴方が信仰を集めることが出来なければ幻想郷から奇跡を起こす力がなくなってしまうのですよ」

霊夢「そんなもの私の力でなんとかしてやるわよ！」

お互いの意見を言いあう2人

???「神を祀る人間が祀られることもある。巫女が神になることだってある。貴方にその覚悟があるのですか？」

霊夢「別に神になるならなんて関係ない！私は私のやり方でやっていくだけよ！！」

霊夢がキツパリとそう言い切った。

女性は、一度 冷静になる。

そして！

???「そうですか。なら、現人神の力を見て考えなさい。この守矢神社の巫女！東風谷早苗の力をね！！」

そう言って戦闘体勢をとる東風谷早苗

霊夢「やれやれ、結局は力が全てなのね。いいわ、その勝負受けて立つわよ！！」

霊夢も早苗と同様に構えをとった。

そのとき、魔理沙が霊夢に声をかけた。



魔理沙「おい、霊夢！」

霊夢「何よ」

霊夢が魔理沙の方を振り向く。

魔理沙「お前、今日で3回目の戦いじゃねえか。流石に体力がやばいんじゃないか？」  
そう霊夢は、ここまで来るときに河童やら天狗やらと戦って来たのである。

流石の霊夢も1日に3回も戦うのは疲労が溜まるであろう。

だが、霊夢は!!

霊夢「何言ってるのよ。まだ3回目じゃない。私の体力を甘く見ないで頂戴」

霊夢は、微かな笑顔を浮かべてそう言った。

魔理沙「でもよ！」

しかし、やはり心配なのか霊夢を気にかける魔理沙  
すると、

悟空「いいじゃねえか」

悟空が横から魔理沙に言った。

悟空「こいつは霊夢の問題だ。無理にオラ達が入るはよりも霊夢自身が解決するのが  
1番いいはずだ」

魔理沙は、顔を落として少し考え込んだ。

そして、顔を上げる魔理沙

魔理沙「わかったぜ、だけど、霊夢絶対に勝てよ!!」

そう一言霊夢に言い放つ魔理沙

霊夢は、親指を立てて godサインをしながら、「もちろんよ」といった。  
魔理沙と悟空は、少し離れ霊夢の戦いに巻き込まれないようにする。

早苗を睨む霊夢

霊夢「よし、それじゃあ見せてやるわよ！博麗の巫女の力を!!」

そう言つて戦闘体勢をとる霊夢

早苗「ふふ、現人神の力を見せて上げるわ！」

そう言いながら早苗も構え出した。

前代未聞の巫女対巫女

果たして勝つのは、博麗か、それとも守矢なのか！

ついに、戦いの火花が幕を切った。

『ヒュンヒュンヒュンヒュン』

『ヒュンヒュンヒュンヒュン』

まずは、お互い超高速で様子見をしながら攻撃を重ねて行く。

霊夢「だりやりやりやりやりや!!」

早苗「だりやりやりやりや!!」

お互い超高速で動いている合間に攻撃を挟んでいく。

見た感じでは、2人の実力は、ほぼ互角

どちらが勝ってもおかしくないのである。

『スタツ』

『スタツ』

一度、お互い動きを止めた。

霊夢「はあ、はあ、やるじゃない」

早苗「そつちこそ」

悟空「ひえく、すんげえ戦えだ」

離れて見ていた悟空は、唾然となっていた。

魔理沙「確かに、あの2人凄い攻撃とスピードだぜ」

早苗「思ってたより全然強いじゃないですか」

早苗は、霊夢の強さを実感したようであった。

霊夢 「ふん、私を甘く見ない方が良いわよ」

早苗 「ええ、そうですね。ここからは全力でいかせてもらいます」

そう言いながら構えをとる早苗

霊夢 「全力か、面白いじゃない」

霊夢も早苗と同様に構えをとった。

悟空と魔理沙が見守る中 博麗神社の未来をかけた戦い お互い一步も譲らない展開へと来て来た。

見た感じでは2人は、互角。

だが、早苗は本気を出すと云っている。

果たして、この戦い勝利を飾ることができるのは、

博麗神社の巫女 博麗霊夢 か それとも、守矢神社の巫女 東風谷早苗なのか！

## 恐るべし守矢の巫女!! 第68話

前回、神社をかけて戦いを始めた霊夢と早苗

お互い巫女ということもあり現在 互角の戦いを広げていた。

早苗「はああああ!」

霊夢「だりやあああ!」

『ドンッ』

お互い重いパンチを同時に放つ2人

そのパンチとパンチのぶつかり合いの威力は凄まじいものであり地面にクレーターのような物を作るほどであった。

その後、間をほぼ開けることなくお互いにパンチを連打しあう2人

霊夢「だりやりやりやりや!!」

早苗「だりやりやりやりや!!」

お互い一步も譲らない激しい攻防戦へとなっていた。

霊夢が早苗にパンチを放つと早苗は霊夢のパンチを躲しそのままカウンターを放つ。

しかし、霊夢はそのカウンターを受け流しさらにカウンターをするという状況が続い

ていた。

魔理沙「見た感じほぼ互角。どっちが勝っても不思議じゃないぜ」

魔理沙は、祈るように霊夢を応援していた。

魔理沙の言う通り今の状況では霊夢が勝つ確率は 二分の一 霊夢が負けてもおかしくないのである。

激しい攻防の中一度2人は動きを止める。

早苗「はあ、はあ、はあ、はあ」

霊夢「はあ、はあ、はあ、はあ」

2人の息が乱れていた。

どうやら、体力が切れ始めたようだ。

早苗「まさか、ここまでついてくるなんて」

霊夢「そっちこそ」

お互い強い眼光を浮かべ睨み合う。

早苗「だけど、まだまだこれからですよ」

霊夢「こっちだつて」

再び構え出す2人

だが、今回は早苗の構え方が少し違った。

そう、スペルカードを構えていたのである。

霊夢（スペルカード！）

霊夢がそれに気づき少し動揺する。

早苗は、スペルカードを放った。

早苗「祈願「商売繁盛守り」」

その瞬間、早苗から無数のお札が飛ばされた。

そのお札は威力自体はあまりないものの密度、量などは今まで霊夢が見てきたスペルカードの中ではトップクラスであろう。

霊夢は慌ててお札を躲していく。

霊夢（なんて量なの!!）

霊夢もそのお札の量に驚く。

『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』

霊夢がいくら避けようとも次から次へと飛んでくるお札。

流石の霊夢も体力がやばくなり始める。

霊夢「このままじゃまずい！」

霊夢は焦りを感じ始める。

そして、

『シユン』

霊夢は、お札を頬にかすめる。

霊夢「なっ！」

頬から血がしたたれる霊夢

だが、そんな霊夢を待つことを知らない早苗のスペルカード

霊夢「夢符」「二重結界」

霊夢は、一度 体制を立て直すべく二重結界を張り早苗のスペルカードを防いだ。

早苗「なに！」

二重結界が誤算だったのか戸惑う早苗

早苗は、体力の消耗を抑えるため一度スペルカードを解く。

霊夢もそれに合わせて二重結界を解いた。

霊夢「はあ、はあ、はあ、はあ」

霊夢の体力は限界まで来ていた。



早苗「まさか、あれを防ぎきるなんてね」

霊夢「博麗の巫女をなめないことね」

早苗「ふふ、でも 貴方かなり息を切らしてるじゃありませんか。そんな、状態で私に勝てるんですか？

霊夢「あら、それはお互いさまでしょ？」

早苗「まあ、そうですね」

合間に短い会話を入れる2人

だが、その会話の中でもお互い最大限まで警戒を入れていた。

早苗（まさか、あのスペルカードを防ぎきるのは誤算だったわ。こうなったら）

早苗は呆然と立ちながら心中でそう呟いた。

どうやら、早苗はなにかをするようだ。

早苗は、スペルカードを構える。

霊夢（また、スペルカード）

心中で驚く霊夢

そして、先程よりも鋭い目をする早苗

どうやら、早苗は、何か凄い事をするようだ。

果たして、それは……

霊夢は、先程よりも警戒を強める。

そして!

早苗「スペルカード!! 奇跡「白昼の客星」」

早苗がスペルカードを放った。

その瞬間!

『ピカーン』

空が神々しいばかりに光輝く。

魔理沙「なんだ、なんだ? 一体、何が起こってんだ?」

悟空「分んねえ、ただあいつがやったってことは間違いないねえ」

その異様な光景に驚きを隠せない2人

霊夢「これは、一体」

霊夢は、上空を見上げ唾然となっていた。

その時!

『ヒューーン』『ヒューーン』『ヒューーン』

光の中から弾幕が飛んで来たのである。

そうあの眩いばかりの光は、早苗のエネルギーそのものだったのだ。

霊夢「なっ！」

空中から飛んでくるエネルギーに驚く霊夢

だが、すぐに我に帰り弾幕を避けていった。

『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』

超高速で弾幕を避けて行く霊夢

だが、いくら霊夢が避けようとも光の中からいくつもの弾幕が飛んでくる。

結界を張りたいたいところだがこの弾幕は、先程のスペルカードとは威力が桁違いであった。

おそらく、結界など張ってもすぐに壊されてしまう。

霊夢は、そう考えひたすら避け続けた。

魔理沙「なんて、スペルカードだ。でも、霊夢だつて負けちやいねえ。しっかりと避けている。まだまだ、分からないぜ」

悟空「いや、かなりマズイぞ」

魔理沙「何がだ？ 霊夢　しっかりと攻撃を避けれてるじゃねえか？」

魔理沙とは、裏腹に霊夢のピンチを感じ取る悟空

一体、この状況何が不利なのだろうか。

悟空「霊夢の奴は、確かに攻撃を避けている。でも、それとは逆に体力もかなり消耗してんだ」

魔理沙「体力だって！」

悟空「ああ、このまま避け続ける事が出来てもきつといつか体力切れになっちまう。

おそらく、早苗の考えはそれだと思っぞ」

魔理沙「な、なんだって！」

それを聞いた魔理沙は、霊夢に目をやる。

確かに霊夢のスピードが落ちて来ていた。

早苗（ふふふ、もう少しでも体力切れですね）

どうやら、本当に夕早苗の狙いは体力を消耗させる事であった。

このままでは、霊夢の体力が切れてしまう。

一体、霊夢はどうするのであろうか!!

## 早苗を突破せよ！ 霊夢の作戦！ 第69話

早苗のスペルカード 白昼の客星を避け続ける霊夢  
しかし、それは己の体力を削ることになっていた。

霊夢「くっっ！」

霊夢はミリ単位で早苗のスペルカードを避けていた。

『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』

しかし、早苗の弾幕はそんなこと御構い無し

次々と霊夢に対して弾幕が飛んでくる。

霊夢（このままじゃ負ける！）

心中でそう叫ぶ霊夢。

そして、徐々に追い込まれていき何ヶ所か弾幕をかすめ始めた。

早苗「これで終わりですよ」

早苗はもう霊夢は避け切れない。

そう判断し勝ちを確信した。

その時！

早苗の弾幕が消えた。

早苗「なにつ!」

早苗が焦りの表情を見せた。

「どうやら早苗も早苗で体力を使い切ってしまったようだ。」

霊夢「どうやら、体力切れはお互い様みたいね」

霊夢がフツと笑みをこぼす。

早苗「くつ、あと少しだったのに」

魔理沙「ふう、危なかったぜ。どうやら、あつちも体力が限界みたいだな」

悟空「嗚呼、これならまだ分かんねえぞ!」

魔理沙「だけど、霊夢も体力が残りわずかなのも事実だ。どうする気だ霊夢」

不安そうな目を浮かべながら霊夢を見る魔理沙

だが、霊夢の闘志はまだまだ残っていた。

霊夢「さあ、反撃と行くわよ!」

「そう言っつて早苗に突っ込む霊夢」

早苗「くつ!」

身構える早苗

霊夢「だりやりやりやりやりや」

早苗「だりやりやりやりやりや」

そして、お互い激しい攻防戦を広げ始めた。

だが、先程よりもやはり動きが落ちている。

それだけ、2人の体力がヤバイということだ。

このまま続ければ両者体力切れでダブルKOになるであろう。

恐らく霊夢自身もそれには気づいている。

霊夢はあくまで勝ちにこだわるためダブルKOは霊夢にとって負けと同じなのである。

一体、霊夢はどうするのであるのか！

霊夢（一体、どうすれば……）

霊夢は、どうするべきかパンチの合間に策を練っていた。

早苗「だりやりやりやりや」

霊夢（そういえばこいつ……）

そこで、ふと霊夢が何かを思ったようだ。

霊夢（少し危険だけどこれしかないわね）

どうやら、早苗を倒す方法を思いついたようだ。  
今日で3回目の戦い!

体力がヤバイ霊夢は一体どうするのであるのか。

霊夢「よっ」

霊夢は、一度 早苗と距離をとり攻防戦を抜け出した。  
そして、

霊夢「はあ!」

霊夢は早苗に対してエネルギー弾を放った。

どうやら、遠距離戦に切り替えたようだ。

早苗「なに!」

突然のエネルギー弾に戸惑う早苗

しかし、そのエネルギー弾は速度が遅く早苗はすぐさま避ける事が出来た。

早苗「今のは一体?」

突然、放たれたエネルギー弾

しかし、そのエネルギー弾は速度も無ければ威力もなかった。  
いくら体力を消耗してとは言えこの威力はおかしい。

早苗は疑問符を頭に浮かべた。



霊夢「だりやりりや」

しかし、そんな早苗に考える間もなく霊夢は弾幕を放った。

だが、やはりその弾幕には威力がほとんどない。

早苗「一体、なにを？」

そう思いながら 弾幕を避けて行く早苗

早苗「そんな、弾幕じゃわたしには当たらないわよ！」

そう霊夢に言いながら霊夢の弾幕をかいくぐり早苗はエネルギー弾を霊夢に放った。

『ヒューン』

そのエネルギー弾は霊夢のエネルギー弾とは裏腹に威力もスピードもかなりのものであった。

霊夢「よっと」

だが、弾幕を避ける事に慣れている霊夢はあっさりとそのエネルギー弾を躲した。

早苗「そつちもこれくらい威力の弾幕を打ったらどうかしら？」

霊夢を挑発する早苗

だが、霊夢はその言葉を見せず再び威力のない弾幕を放った。

霊夢「だりやりりや」

早苗は、少しイライラした表情を見せる。

それもそのはず、全く本気を出さずに弾幕を自分に飛ばしてくるのだから。まるで、舐められているように感じているのである。

早苗「その程度の弾幕 わたしが食らうわけないでしょ」

そう言いながらスペルカードを構える早苗

早苗「奇跡」「白昼の客星」

そして、スペルカードを放った早苗

そのスペルカードは先程 霊夢をピンチに追いやった白昼の客星であった。

早苗「これで終わりですよ」

しかし、霊夢は「待ってたわよ!」と叫ぶ。

そして、

霊夢「夢符」「二重結界」

霊夢は結界を張り早苗のスペルカードを防御する。

早苗「また、その結界ですか。でも、その程度の結界ではわたしの白昼の客星を防ぎ

きることは出来ませんよ」

そう言いながらさらに弾幕の量を増やす早苗

その弾幕は次から次へと霊夢の結界を襲う。

霊夢「くっ!」

『ビシビシ』

結界にヒビが入り始める。

このままでは二重結界が壊されてしまう。

一体、霊夢はどうするのであろうか！

魔理沙「おいおい、霊夢の奴なにやってんだよ！このままじゃやられちゃうぞ!!」

魔理沙は、心配そうな眼差しで霊夢を見る。

この状況どう見ても霊夢が不利な状況

魔理沙が心配するのも無理ないのである。

だが、この男は違った。

悟空「いや、そうでもねえみてえだぞ」

どうやら、悟空は霊夢の作戦に気がついたようだ。

魔理沙「どういことだよ悟空？」

そんな悟空の方を振り向いて尋ねる。

悟空「それは見てればすぐにわかっぞ」

悟空は魔理沙にそれだけ言って再び霊夢の方に目をやる。

一体、霊夢の作戦とはなんなのか。

霊夢は早苗に勝利することはできるのであるだろうか!  
次回、ついに決着だ!!

## ついに決着！巫女と巫女 第70話

前回、靈夢に白昼の客星を放った早苗

その威力はとてつもないものであり当たれば靈夢の負けはほぼ確定である。

靈夢はそれに対して二重結界を張りなんとか早苗の攻撃を防いでいた。

早苗「ダダダダダダダ」

早苗の弾幕の数と密度は物凄いものであり靈夢の二重結界も限界が近づいていた。

『ビシビシ』『ビシビシ』

弾幕が当たることには少しずつ音を立てながらヒビの入っていく二重結界

恐らくもって後1分といったところだろう。

魔理沙「おいおい、靈夢の奴やばいじゃねえか？本当に大丈夫なのかよ悟空」

心配そうな眼差しを浮かべながら悟空に尋ねる。

だが、悟空は一切の表情を変えないことなく、「大丈夫だ」とだけ魔理沙に言った。

魔理沙「なんでわかんだよ？どう見ても靈夢が押されてるじゃねえか！」

少し気迫を感じる感じで言う魔理沙

それだけ、霊夢の事が心配なのであろう。

悟空はそんな魔理沙を見て少しかわいそうに思えてきた。

親友でありライバルであるものが目の前でピンチにあっているのである。

たしかに魔理沙が霊夢の心配をするのは当たり前のこと悟空はそう考えたからである。

悟空「心配すんなって魔理沙! 霊夢ならでえじようぶだ。あいつがそう簡単に負けるはずねえだろ」

悟空はいつものように明るいい声を出し魔理沙を励ました。

魔理沙「でもよ!」

しかし、魔理沙はまだ悟空に何か言おうとする。

悟空は、魔理沙が何かを言う前に霊夢達の戦いを指 指した。

悟空「見てみるよ」

悟空は、そう一言 魔理沙に言った。

魔理沙は、霊夢と早苗の方を見る。

そこでは、以前として霊夢が早苗のスペルカードに押されていた。

魔理沙「何だよ、悟空? やっぱり、霊夢の奴ピンチじゃねえか」

悟空「いや、全体を見るんじやなくて、早苗つて奴を見てみるよ」

悟空がそう言いで魔理沙は早苗の方を振り向く。

そこには、予想外の光景が広がっていた。

早苗「はあはあはあはあ」

そう早苗が息を切らしていたのである。

頬からは汗が滴れて完全に体力が限界であることが悟れた。

それを見てやつと魔理沙は察した。

魔理沙「まさか、霊夢の狙いは!!」

そう叫び気味に言う魔理沙

悟空「ああ、そういうことだ」

悟空は、そんな魔理沙を見てそう言葉をこぼした。

霊夢（あと、少しね）

いつ壊れてもおかしくない二重結界を盾に　ふつ　と笑いながらそう心で呟く霊夢

早苗「あら、何を笑っているのかしら？この状況　あなたに勝ち目はないわよ！」

そう言いながら一気に追い打ちをかけようとする早苗

そして、

早苗「これで終わ……」

と勝ちを宣言しようとした時、早苗は声が急に途切れてしまった。

『バタンッ』

そして、早苗はその場に急に倒れこんでしまう。

一体、何が起こったのだろうか！

悟空「勝負あつたみてえだな」

悟空が倒れ込んだ早苗を見てそう宣言した。

魔理沙「みたいだな」

魔理沙も悟空に合わせて宣言した。

そして、2人は霊夢の元へ近寄った。

霊夢「はあはあはあはあ」

霊夢は両膝を地面につけ息を切らしていた。

どうやら、霊夢もかなり体力を使っていた様だ。

あとちよつとで霊夢もやられていたのかもしれない。

魔理沙「大丈夫か霊夢！」

そんな霊夢に急いで駆け寄り声をかける魔理沙と悟空



霊夢「あら、魔理沙 悟空。私なら大丈夫よ」

霊夢はよろめきながらもすぐに立ち上がった。

魔理沙「おいおい、無理するんじゃないぞ?」

霊夢を心配する魔理沙

霊夢「だから、大丈夫だって」

だが、霊夢も魔理沙に心配をかけまいと強がりと言う。

恐らく実際は立っているのもきついほど体力を消耗しているのに……

魔理沙「それにしてもスゲ〜な霊夢あんな作戦を思いつくなんて」

霊夢「あら、魔理沙も私の作戦に気づいてたのね」

魔理沙「ああ、悟空にヒントをもらってたな」

霊夢と魔理沙は軽く会話を交わす。

その内容は、霊夢の逆転の方法であった。

早苗「作戦?」

早苗は遠くから倒れこみながらも聞き耳をたてていた。

霊夢「あら、まだ意識があつたのね」

そういいながら3人で早苗の方へと近寄っていった。

早苗「作戦って一体、何をしたんですか？」

早苗が驚いた様に霊夢に尋ねた。

そう早苗にとっては突然、自分の体が動かなくなり倒れ込んだのである。

焦っても当たり前のことであつた。

霊夢「あれ、貴方自分で気づいてないの？」

早苗「えっ？」

だが、早苗は何も理解していない様子

霊夢はその表情を見て呆れた顔をした。

霊夢「貴方の体が動かなくなつたのは体力切れよ」

霊夢が早苗に説明を始める。

早苗「え、体力切れ？」

体力切れという言葉聞き驚く早苗

霊夢「ええ、貴方は途中 私に勝つために必死になりすぎて自分の体力のことを考えていなかったのよ。そこで私は貴方にスペルカードを使わせて貴方に体力を一気に使わせたわけ。まあ、私の結界もあと少しで破られそうに危なかつたけど」

霊夢は、簡単に説明をする。

早苗は、ただ無言でその説明を聞いていた。

早苗「まさか、そんな簡単な罠にかかるなんて……私もまだまだ未熟者ね」  
早苗は、しょんぼりとした顔を浮かべる。

「どうやら、負けたことが相当悔しい様だ。」

だが、霊夢はそんな早苗の表情など御構い無し

霊夢「まあ、それは置いといて」

早苗の目の前に立つ霊夢

そして、早苗に何か言いたそうに霊夢は早苗を睨みつけた。

一体、早苗はどうなってしまうのであろうか。

少し離れた茂み

そこでは何者かが霊夢と早苗の戦いを観察していた。

『ザーツザーツ』  
??? 『データ保存。データ保存』

## 靈夢の強さ 第71話

前回、戦いの末早苗から勝利を成し遂げた靈夢

靈夢は倒れこむ早苗の目の前に立ちなにかを言おうとしていた。

そう、それは勿論

靈夢「さあ、神社の件どうしてくれるのかしら？」

靈夢の放った言葉は神社のことである。

そう元々この戦いは博麗神社の運命をかけていたもの

早苗に勝利した靈夢が神社のことを聞くのは当たり前である。

早苗「ああ、そのことですな」

早苗は自分の体に鞭をうち

倒れこんだ体をなんとか起き上がらせた。

靈夢「勿論、私が勝ったんだから神社の件は無しよね？」

靈夢はニヤつとした顔で早苗の顔を覗き込みながら言った。

しかし、その早苗の表情には、何か迷いの様なものを感じ取れ靈夢の話をしつかりとは聞いていないようだった。

霊夢「何よそんな顔しちゃって？」

霊夢はそんな早苗を見かねて声をかける。

早苗は、はっ、とした表情を浮かべ霊夢の方を見た。

霊夢「さつきからなに考え込んでるのよ？」

霊夢が心配そうに早苗に問いかけた。

早苗「あ、いや、こつちのことです。気にしないで下さい」

しかし、早苗は顔に作った様な笑顔を浮かべ話をそらした。

だが、霊夢は、「何に悩んでいるの？」と早苗に再び問いかけをする。

その言葉を聞いた早苗は、また、険しい顔に戻ってしまった。

霊夢「何よ！いつまでもそんな顔されてもこつちは話にくいのよ！」

痺れを切らした霊夢は威圧のある声を出す。

そして、少しの間があいた。

霊夢達は、早苗が口を開けるまで待ち続ける。

その時！

早苗「悔しいんです」

その言葉は、静かながら霊夢達の耳に反響して聞こえる。

早苗「私は、貴方よりも信仰をずっと集めています。信仰は力に変えることができます。だから、信仰の多い私の方が圧倒的に有利だった。でも、それなのに何故、私は貴方に勝てな勝ったのですか、それが私には分かりません。お願いです。なんで私は負けたんですか？ 教えてください！」

若干、口調が荒くなりつつ霊夢に尋ねる早苗

そう基本巫女などは信仰が多ければ強くなれる。

だが、実際は、信仰の多い早苗は敗北し信仰の少ない霊夢が勝利を勝ち取った。

それが、早苗にとって意味が分からなかったのである。

悟空「おめえ、そんなことも分かんねえのか？」

横から聞いていた悟空が早苗に言った。

早苗「えっ？」

突然、悟空が喋り出したことに驚く早苗

しかし、悟空はそんな驚いている早苗の表情を無視して話を続ける。

悟空「霊夢はな今までずっと自分の意思で修行してきたんだ」

早苗「自分の意思で修行？」

悟空「ああ、そうだ」

早苗「でも、たかだか修行ぐらいで信仰の力を超えれるとはとても……」

悟空「いや、そんなことねえ。実際、霊夢の奴前までは修行がでえつ嫌いで全然、修行していかなかったんだ。正直言つて、そんな時の霊夢はあんまりてえしたことなかった。だけど、いつの日か霊夢が自分の意思でオウに弟子入りを志願してきたんだ。それから、毎日毎日めつちりと修行してここまで強くなれたんだ。信仰の力に頼っていたおめえが今まで頑張つて修行してきた霊夢に勝てるわけねえだろ！」

悟空は、若干厳しめに早苗に告げる。

早苗は、少し考えこんだ顔をした。

そして、

早苗「確かにそうですね」

冷静な口調を取り戻し微かな笑みを浮かべながら早苗はそう告げた。

早苗「え、弟子入りつて!!」

そう言いながら悟空を2度見する早苗

それを見た霊夢がすかさず、

霊夢「とつ、それを話したら長くなるからまた今度ね」



と早苗を止めた。

早苗は、頭に疑問符を浮かべながらも霊夢に止められたので気にするのをやめた。

霊夢「てか、それより神社の件なだけど？」

霊夢が早苗に質問した。

早苗「ああ、神社の件ですわね」

そう言いながら考え込む早苗

早苗「実はこの奥の湖にこの話を持ちかけた。守矢の神がいます。神社の件の事はその神と話し合って下さい。正直、私に出来ることはありません」

霊夢「わかったわ。その神を説得すれば今回の件は無しになるのね」

霊夢が早苗に確認をとる。

早苗「ええ、説得できたら出すけどね」

霊夢「なあくに、もし、話し合いで解決しなかった時は、直接、体に教えればいいのかよー！」

どうやら、霊夢は話し合いが成立しなかった場合、実力行使に出るようだ。

それを聞いた早苗は驚いた。

早苗「何言ってるんですか！相手は神ですよ！いくら、貴方が強くてもそんな体力の消耗した状態で戦えば確実に殺されてしまいます！」

早苗が霊夢にそう言い張る。

霊夢「それなら大丈夫よ！もしもの時は、神よりも恐ろしい者が私達の味方についているから！」

そう一言のこして早苗の言う神様のいる湖へと霊夢達は向かっていった。

果たして、一体この後霊夢達にどのような困難が待ち受けているのであろうか。

そして、神の実力とはどれほどのものであろうか！

いよいよ、風神録も終盤に突入

霊夢達は神に勝つことが出来るのであろうか!!

# ついに登場！守矢の神 第72話

## 前回

早苗に勝利を果たした霊夢

霊夢は、早苗に神社の件について話をする。

しかし、残念ながら早苗は所詮 神社の巫女そのような話は一切 早苗が決めることは出来なかつた。

早苗によるとこの奥にある湖に守矢の神がいておりその神に話せば今回の件がおさまるかもしれないとのことである。

霊夢達は、博麗神社のため神と会いに行くことにした。

霊夢「この先にあいつの言つてた湖があるのよね」

そう言いながら霊夢は、茂みの中を悠々と歩いていく。

魔理沙「ああ、そのはずだぜ」

魔理沙がそう霊夢に言葉を返しながら霊夢の後について歩いてきた。

魔理沙「それにしてもよ霊夢。本当に話し合いで解決できなかったら神様つてのとた

たかうのか?」

魔理沙は心配したような目を浮かべ霊夢に尋ねた。

霊夢は、そんな魔理沙の目には気付かず、

霊夢「あたりまえでしょ! そうしなきやこれから私も悟空と住む場所がなくなっちゃうじゃない」

と少しきつめに言葉を返した。

悟空「だけだよ、霊夢 魔理沙の思ってることも恐らく一理あんど。今のおめえは体力がそんなに残っちゃいねえ。そんな状態で戦ったら勝ち目はねえってことぐれえ自分でわかってんじゃねえか?」

悟空が魔理沙の味方をするように霊夢に言った。

恐らく、悟空も霊夢のことが心配になってきたのであろう。

霊夢は、歩きながら顔を落と少し考え込んでしまう。

そして、しばらく霊夢のその顔が上がることはなかった。

そんな霊夢を見て魔理沙は、

魔理沙「それならこうしようぜ霊夢、本当におめえがヤバイ時は私達が助ける。別に

最初から手伝うわけじゃねえしそれならいいだろ？」

魔理沙が、そう霊夢に語りかけた。

霊夢は、下がった顔を上げて、

霊夢「分かったわ。本当にヤバイ時だけ魔理沙と悟空の力を借りることにするわよ」とため息混じりの声で言った。

魔理沙と悟空は霊夢が了承してくれたことに喜びお互い顔を合わせ ニツ つと笑った。

悟空「お、見えてきたな！」

そんなこんな話してる間に湖が見えてきた。

霊夢「あらほんと意外と近くにあるのね」

そう言いながら小さな茂みを抜け湖にたどり着いた霊夢達。

そこには、もはや言葉では表せないような大きな湖が広がっていた。

霊夢「ここに例の神様がいるのよね？」

再度、確認をとる霊夢

魔理沙「ああ、そのはずだぜ。さっきの緑髪の奴も言ってたしなこの先の湖にいるって」

「魔理沙がそう霊夢に返答する。

しかし、

霊夢「うくん？」

と首を傾げ頭に疑問符を浮かべる霊夢

どうやら、何か疑問を持っているようだ。

魔理沙「どうしたんだよ霊夢？」

魔理沙は、そんな霊夢の表情を不思議に思い声をかけた。

霊夢「おかしくない？」

霊夢がそう一言告げる。

魔理沙「何がだ？」

霊夢「だって、神様つてのは物凄い力の持ち主なんですよ？そんなのがこの湖にいたら普通 気を感じ取れるはずでしょ？でも、さつきからこの湖からは気を感じ取れないのよね」

魔理沙は、それを聞き慌てて気を探る。

魔理沙「本当だぜ、霊夢の言う通り気をまったく感じれない」

魔理沙も霊夢に言われてその事に気付いた。

魔理沙「てことは、あいつに騙されたってことか？」

霊夢「その可能性が高いわね」

霊夢がそう呟やく。

悟空「ここは、一回引き返した方が良さそうだな」

悟空もそう告げ3人は、守矢神社に向けて引き返そうと茂みの方を振り向いた。

その時！

???「あら、貴方達は誰かしら？」

と湖の方から声が聞こえた。

霊夢達は、えっ となりなが再び湖の方を振り向いた。

そこには、物凄い威圧感の出している紫色の髪の女性が立っていた。

霊夢達は、見た瞬間 この人が例の神様だと悟った。

その理由は、簡単 威圧感の割にその女性から気を感じる事が出来なかったからである。  
る。

普通ならば気を抑えてない限り周りで察知する事が可能

しかし、目の前の女性は気を抑えているようには見えない。

そう気そのものが無いような感じである。

そのような者が普通の人間なわけがない 霊夢達はそうかんがえたのである。

???「あれ、お前は博麗の巫女か」

女性は、軽く笑顔を浮かべながら霊夢の方を見た。

だが、そこにいる霊夢達は、何やら疑問そうな表情を浮かべている。

??? 「おや、そんなに驚いてどうしたんだい？私はまだ何もやってないよ」

と霊夢達に言った。

霊夢 「あなた、一体何者！」

??? 「何者って守矢神社の神だけど？」

霊夢 「いや、そう言う意味じゃないわよ！どうして、貴方から気を探ることが出来ないのよってことよ！」

霊夢が少し叫び気味に言う。

すると、女性は少し微笑みながら

??? 「なんだそんなことかい」

と言った。

霊夢 「そんなことじゃないわよ！いいから早く説明しなさい!!」

霊夢が痺れを切らしたかのように女性に尋ねる。

??? 「はいはい、わかったよ」

そう言いながら女性は説明を始めた。

??? 「まあ、説明と言っても簡単な事だけどね。それは、私が纏っている気が神の気だ



からよ」

霊夢「神の気？」

その単語に疑問を持つ霊夢

??? 「ええ、そう神の気。要するに神が纏う気の事。だから、貴方達のような普通の人間には感じることが出来ないのよ」

と細かめに説明をする女性

しかし、そんな女性の言葉に疑問を持つ悟空

悟空「いや、ちよつと待ってくれ、仮におめえが纏つてる気が神の気だとして、オラ知り合いに結構、神様いるけどおめえみたいに気を感じ取れねえ神様は初めてだぞ？」

悟空が霊夢に続いて女性に質問をかけた。

??? 「神に知り合いなんて、顔の広い子供だねえ」

知り合いに神がいると聞いて驚く女性

悟空の言う通り悟空の知り合いの神様は気を感じとれる。

だが、一体、なぜ目の前の彼女の神様の気を感じることができないのであろうか。

## 神の気とは？ 第73話

前回、ついに戦いに守矢の神に遭遇することの霊夢達

だが、不思議な事にその神からは気を感じることが出来なかつた。

それに疑問を持った悟空は、何故 気を感じる事が出来ないのか直接 質問したのであつた。

??? 「神に知り合いなんで、顔が広い子供だねえ」

少々、驚いた表情を浮かべながら女性は悟空に言った。

悟空は、その言葉を少し不愉快に感じる。

そう、その理由は勿論これである。

悟空 「オラ、子供じゃねえぞ！」

もはや、お約束と言つても過言ではないであろう。

悟空は、子供と言われた事に対して不愉快に感じたのである。

??? 「おや、それは失礼したね」

女性は、くくくつと笑うながら悟空に返答した。

恐らく、子供じゃないという事を信じていないのであろう。

霊夢「あの、もうそっちの話はいいかしら？」

見かねた霊夢が横から声をかけた。

???「ああ、すまない。話が逸れてしまつて。なんで、気を感じないかであつたな」

霊夢の方を振り向く女性

???「まあ、なんで気を感じる事の出来る神と気を感じられない神がいるかだが、その

理由は簡単だ。神の気を纏えるレベルに達しているか達していないかだ」

女性がそう悟空に説明する。

だが、それを聞いた悟空は新たな疑問を浮かべる。

悟空「じゃあ、オラの知つてる神様達よりおめえは強えつてことか？」

そう、もし、女性がいう事が正しいのであればこの女性は気を感じる事のできる界王神様よりも遥かに強いという事である。

まあ、恐らく目の前にいる女性は界王神よりは強いとおもうがそれでも、目の前の女性がとてもその神の領域に出してるとは思えない悟空

しかし、女性は、首を横に振つた。

???「いいや、確実にそういうわけではない」

そう悟空に告げる女性

悟空「なんでだ？」

??? 「神の気を纏える強さはその世界のレベルに比例するからよ」

悟空 「世界のレベル？」

悟空がリピートするように女性に返答した。

??? 「そう、世界のレベル。例えばこの幻想郷 強者などが結構いるけど小さな世界に過ぎない。で、君がいた世界がもしこの幻想郷よりも遥かに大きく強者が沢山いるとしたらその世界に相当する強さを持っていないと神の気を纏えないってことよ。だって、神の気を纏える程の強さのやつがポンポンでてきてもおかしいだろ？ そうならないうちやんと世界は調整されているんだよ。大体、割合で言えば一つの宇宙に2人ぐらい神の気を纏える奴がいるようにな」

女性が話を短くまとめ悟空に説明した。

悟空 「成る程な」

霊夢 「この幻想郷は、狭いしそんな強大な力を持っていなくても神の気を纏えるってことか」

魔理沙 「それに比べて悟空の世界はとても広いから神の気を纏うにはかなりの力があるわけだな」

話を聞き納得する霊夢達

??? 「おいおい、一応言っておくが幻想郷でも神の気を纏うには結構な力が必要なんだ

ぞ」

女性は、自分が弱いと思われぬようにしっかりとそう言葉を付け足した。

霊夢「わかつてるってそのくらい」

霊夢が女性にそう言葉を返す。

??? 「あれ、そういうえば私達 氣の話してるけどお前達は一体、なんの目的で来たんだ？」

女性が ふと そう霊夢に尋ねた。

霊夢もすっかりと本来の目撃を忘れており思わず「あつ」と言葉を出してしまう程であつた。

霊夢「そうよそうよ、こんな話をしに来たんじゃなかったわ」

ふと、我に帰る霊夢

霊夢「あんたに言いたい事があるのよ！」

そう言うのと霊夢は、目の色を変えた。

??? 「なんだい。そんな怖い目をして？」

急に表情を変える霊夢に驚く女性

まあ、無理もない。

今の霊夢は、先程と違い殺気が若干ながら混じっているのだから。

霊夢「私が何をしに来たかわかってるかしら?」

霊夢は、そつと女性に尋ねた。

??? 「えっ?」

突然の質問に戸惑う女性

??? 「何をしに来たかっていわれてもな〜」

女性は、少し考えたがどうやら分からないようだ。

霊夢「分からないのね。それなら、教えてあげるわ。私は、博麗神社をあんたから守

るために来たのよ!」

霊夢が女性に威圧のこもった声でそう言った。

女性は、「あ〜、そのことか」と軽く言葉を返す。

霊夢「そのことかですつて!」

まるで、意識する必要も無いような感じで言う女性に腹をたてる霊夢。

霊夢「そんなことじゃないわよ! 私にとっては何よりも大切な事なのよ!」

霊夢が怒鳴るように言う。

??? 「何言ってるんだ。信仰もロクに集まらなかったクセに!」

霊夢「余計なお世話様よ。大体、あんたが祀つても信仰が増えるとは限らないでしょ！」

???「信仰は、0から減る事は有り得ない。今の幻想郷に足りない物は神を信じる心。貴方も巫女なら判るでしょう？」

霊夢「あんたの力なんて借りなくても私の力で信仰なんて集めてやるわよ！」

霊夢がそう言った瞬間、女性が顔色を変える。

そして！

???「神社は巫女の為にあるのではない！神社は神の宿る場所！そろそろ神社の意味を真剣に考え直す時期よ！」

先程までの和やかな声とは裏腹にとても険しい声へと変わる女性

恐らく、霊夢の発言に苛立ちを感じたのであろう。

???「貴方に最後の忠告をするわ。このまま帰るのであれば今回は見逃してあげる。でも、帰らないのならここで倒させてもらおうわ」

女性は霊夢を強く睨みつけながらいう。

だが、霊夢の回答は、勿論、

霊夢「上等よ！戦ってやるわよ！どうせこうなる事は予想してたしね」

???「身の程知らずね。神の強さを教えてやるわ！かかって来なさい！」

そうやって女性が戦闘体勢をとった。

霊夢「ええ、そうさせてもらうわ！」

そう言いながら霊夢も構え出す。

が、霊夢は、ここだとあることを思い出した。

霊夢「そういえば、まだ名前を聞いていなかったわね」

???'「私の名前は、八坂神奈子よ」

霊夢「そう、神奈子ね！私は、もう知ってるとは思うけど博麗霊夢！そして、後ろにいる2人が孫悟空と霧雨魔理沙よ！」

軽く自己紹介だけはしておく霊夢

???'「さあ、自己紹介は終わり！はじめるわよ！」

そう言いながらものすごい気迫を出す神奈子

果たして霊夢は、守矢の神 神奈子に勝つことは出来るのであろうか!!



## 神に挑め！ 霊夢 VS 神奈子 第74話

霊夢「……………」

神奈子「……………」

お互い物凄い気迫を立てながら睨み合う2人

恐らく、お互いにどちらが先に攻撃を仕掛けるのか様子みしてるのであろう。

悟空「魔理沙、オラ達は少し下がつとくぞ」

悟空は、近くには戦いに巻き込まれる可能性がある。

そう考え魔理沙に告げた。

魔理沙「ああ、そうした方が良さそうだな」

魔理沙も悟空の考えてることをすぐに悟ったようで少々 霊夢達と距離をとった。

霊夢（気をきかせて下がってくれたのね）

霊夢は魔理沙達が距離をとったのを確認した。

そうもし自分のせいで魔理沙達が巻き込まれてしまつては元も子もない。

霊夢は、これで周りを気にせず本気で戦えるのである。恐らく、悟空もそれを思ってから後ろへ下がったのだろう。

神奈子「どうした、攻めてこないのかい？」

様子見に痺れを切らした神奈子が霊夢に尋ねる。

霊夢「それじゃあ、遠慮なく行かせてもらおうわ」

『シューーン』

霊夢が超高速で神奈子に接近した。

そして！

霊夢「はああ!!」

霊夢が右手で強烈なパンチを放った。

だが！

神奈子「ふっふっふ」

神奈子は笑っていた。

その瞬間、霊夢の顔が青ざめる。

そう何故かというと、

神奈子「博麗の巫女の攻撃力はこの程度かい？」

そう言いながら神奈子は霊夢のパンチを片手で受け止めていたからです。

魔理沙「な、なんて奴だ！ 霊夢の攻撃を片手で止めやがった」

その光景に驚きを隠せない魔理沙

悟空「こりゃあ、霊夢の奴 少しヤバイかも知んねえなあ」

悟空の顔にも険しい表情が浮かぶ。

霊夢「チツ」

霊夢は、舌打ちをしつつ一度バックステップで神奈子と距離を取る。

霊夢「なかなかやるじゃない」

神奈子「ふん、お前が大したことないだけだ」

その言葉に少し霊夢はイラツとする。

霊夢「私が大したことないですって！」

霊夢の表情が徐々に険しいものへと変化していく。

そして！

霊夢「いいわ、なら見せてあげるわよ！ 私の本気を！」

そう言いながら霊夢が気を溜める体制をとる。

そうこれは界王拳の構えだ。

魔理沙「やめろ、霊夢！」

界王拳を使おうとする霊夢に叫ぶ魔理沙

魔理沙「おい、霊夢！おまえ、まだ、体力を回復仕切ってねえだろ！そんな、状態で

界王拳を使ったら体が持たねえぞ!!」

魔理沙は、そのまま霊夢にそう言い続けた。

しかし！

霊夢「どうせ、このまま戦っても負けるだけでしょ？なら、自分のやれるだけのことをやつときたいのよ！」

と魔理沙に反発する霊夢

魔理沙「でもよ！」

魔理沙が何か言おうとした時、悟空が魔理沙の言葉を遮るようにこういった。

悟空「霊夢の好きにやらせてやろうぜ」

その言葉には、とても重みのような何かが魔理沙には感じ取れた。

魔理沙「なんで、そんなこと言うんだぜ！悟空！このままじゃ霊夢の体が壊れちゃうかも知んねえんだぞ！」

悟空「霊夢は、今までいろんな奴と戦ってきた。毎回、自分を限界まで呼び込んでな！勿論、オラも少しは心配してるさ。でも、オラは思うんだ。それでこそ霊夢じゃない

かってな！」

悟空のその言葉から少し沈黙が流れる。

魔理沙「そうだな、そうだよな！いつも、全力で戦う。それが博麗の巫女つてもんだ！分かったぜ！霊夢、お前の好きなようにやってくれ！」

魔理沙が霊夢にそう叫んだ。

霊夢「ふっ」

その声を聞いた霊夢は、一呼吸出す。

そして！

霊夢「2倍界王拳」

霊夢は、2倍界王拳を使った。

ちなみに何故界王拳を2倍にしか上げないのかと言うと体力がないからである。

神奈子（急にあいつの力が増幅した！）

その急激なパワーアップに驚く神奈子

神奈子（しかも、さっきの会話からすると奴の体力はほぼ残っていない。その状況でここまで気を上げるなんて！ふふ、少し博麗の巫女を舐めていたようね）

霊夢「さあ、始めましょ！」

霊夢が構えをとり神奈子に言う。

神奈子「ねえ、一つ聞いていいかしら？」

霊夢「何よ！」

神奈子「その赤い気はなんなの急激に気が増幅してるんだが」

霊夢「ああ、これね。これは、界王拳 あらゆる戦闘能力を増幅させる技よ」

神奈子「あらゆる戦闘能力を増幅だつて……こりゃ、舐めてかかったらヤバイかもね」

そう軽く会話を交わし再び構え出す2人

そして！

霊夢「はあああああ！」

神奈子「だりやあああああ！」

2人は、同時に接近しパンチを放った。

『ドンッ』

2人のパンチを中心に周りに小さなクレーターができる。

神奈子（さつきよりも威力が増している！）

神奈子は、霊夢の力が増加することに気がついた。

霊夢（力の差がほぼなくなってる。これなら）

そう言つて一気に追い打ちをかけようとする。

霊夢「だりやりやりやりやりやりや」

霊夢は、休む間なく神奈子に攻撃していく。

『シユン』『シユン』『シユン』

神奈子は、その攻撃をギリギリのペースで避けていく。

魔理沙「霊夢が押ししている。勝てる！勝てるぞ！」

魔理沙はこのまま押し切れればきつと霊夢は勝てる。

そう考えたのである。

魔理沙の言う通り今 神奈子は防戦一方であり攻撃する隙すらなかった。

霊夢「だりやりやりや」

霊夢は、休まず攻撃をし続ける。

その時！

神奈子「おっ！」

神奈子は、ほんのわずか体のバランスを崩してしまった。

霊夢は、その隙を見逃さまいと

霊夢「10倍界王拳！だりやあああああ!!」

一瞬ながら界王拳を10倍まであげその攻撃に自分の全てをかけた。

魔理沙「やったぜ!!」  
魔理沙も勝ちを確信する。



## 博麗の巫女。まさかの敗北 第75話

## 前回

界王拳を使い勢いをつける霊夢

神奈子も急激な霊夢のパワーアップを前に防戦一方になってしまっていた。

だが、霊夢は今日妖怪や早苗との戦いもあり体力の消耗が激しい！

霊夢は、一気に決めるべく界王拳を10倍まで上げ全力でパンチを放つ。

果たして、そのパンチの結果は!!

霊夢「10倍界王拳、だりやああ!!」

霊夢は、瞬間的に界王拳を10倍にしパワーを上げパンチを放った。

その威力は、凄まじいものであり恐らく守谷の巫女である早苗なら一発アウトであろう。

『ドンッ!!』

「靈夢のパンチが神奈子にそのまま衝撃を与える。しかし！」

靈夢「なっ！」

靈夢が何やら驚いた表情を浮かべた。

いや、靈夢だけではない。

周りで見ていた悟空と魔理沙でさえも

魔理沙「あ、ああ」

悟空「なんてやつだ」

などと言葉を詰まらせながらそう言う程であった。

一体、靈夢に何が起こったのであろうか。

それは！

「ふ、ふ、ふ、ふ」

不気味に響く笑い声

そうこの声の主は言うまでもない神奈子である。

神奈子「残念だったな」

一体、何が起こったのであろうか。

靈夢達は、一瞬 思考が追いつかなかった。

だが、霊夢達はすぐに我に返り今起こっている状況を理解した。そう神奈子が霊夢のパンチを受け止めていたのである。

霊夢は、体力が残りわずかだとしても確かに本気で神奈子にパンチを放った。

だが、実際は目の前で神奈子がギリギリの所で手を腹の前にやり綺麗に霊夢のパンチをうけとめたのである。

霊夢（一体、どうして！）

霊夢がそんな事を考えていると、

神奈子「はあ!!」

神奈子が霊夢にパンチを放った。

そのパンチは先程放ったパンチよりも鋭く。そして、速かった。勿論、そんなパンチ霊夢が避けれるわけもなく。

霊夢「ぐはあ！」

と血を吐きながらパンチをくらってしまった。

そして、そのまま霊夢は、

霊夢「うわー！ー！」

と吹き飛ばされてしまったのであった。

『ドンッ』

そして、そのまま近くにあった木に激突してしまった。

霊夢「う、うう」

そのまま赤いオーラが消えうつ伏せに倒れこんでしまう霊夢。

神奈子は、そんな霊夢にゆっくりと近寄る。

そして、ついに霊夢の目の前まで来た。

神奈子「ふん、博麗の巫女ともあろうものが情けないね」

神奈子は、そのまま霊夢に話しかける

霊夢「あ、なた、一体、どうや、って、」

霊夢は倒れこみながらも神奈子に尋ねる。

すると、神奈子は、ニヤリっ と笑みを浮かべる。

神奈子「どうやって？そんなの簡単さ。ちよつと神の本気を出しただけさ」

神奈子は、霊夢をどことなく見下しながらそう言った。

魔理沙「本気を出したただけだっ！」

遠くから聞き耳を立てていた魔理沙が思わず声を出した。

それもそのはず、今まで防御ばかりだったのは神奈子がただ単に遊んでいたからで

あり本気を出していなかったのだから。

悟空「これが戦闘に適した神の力か……」

悟空も思わず息を飲んだ。

周りには、静かな空気が舞う。

その中で神奈子が呟いた。

神奈子「まあ、取り敢えず。これで終わらせてもらおうよ」

そう言つて右手にエネルギーを溜める神奈子

恐らく、霊夢にトドメを刺すきであろう。

神奈子「これで終わりよ！はあ!!」

神奈子はそのまま物凄い威力のエネルギー弾を放つ。

『ヒューーン』

そのまま霊夢の元へと飛んで行くエネルギー弾

霊夢は、敗北を確信する。

その時！

『ヒューン』

悟空が目の前に現れた。

そして、

悟空「だりやあああ！」

と悟空は、スーパーサイヤ人になる。

悟空「はっ！」

さらには周りに気のバリアを張る。

神奈子の放ったエネルギー弾は、

『ドドンッ』

と音を出しながら悟空のバリアによって消し去られた。

悟空「ふう」

一呼吸出しながらバリアを消す悟空。

悟空は、そのまま霊夢の方を振り返った。

悟空「危なかった霊夢！」

悟空はそう霊夢に一言かける。

「霊夢「まあ、もう瀕死状態だけどね」

霊夢は軽く笑みを浮かべ悟空にそう告げた。

悟空は軽く笑みを霊夢に浮かべ返す。

神奈子「お、お前、一体いつのまにこんな所に!?!それに神が金色に変わっている!」

一瞬にして霊夢と神奈子の間に入り神の色が変わった悟空に驚く神奈子

悟空「オラは瞬間移動が使えるのだ。それで霊夢の所まで移動したんだよ」

神奈子「瞬間移動だって！」

瞬間移動と予期せぬ単語を聞き驚きを隠せない神奈子

いや、正確には瞬間移動に驚いてるのではなくこんな子供が瞬間移動と言う器用な技を使っていることに対して驚いているのであろう。

神奈子「まさか、そんな技を使えるとはな予想外だったわ」

神奈子は、悟空に目をやり驚きの表情を浮かべ続ける。

そこで、新たな疑問が神奈子をおそう。

そうそれは、悟空の髪が金色に輝いていることである。

しかも、ただ輝いているだけでなく金色になった瞬間、悟空の戦闘力が一気に増加した。

神奈子にとっては今 目の前でとても複雑なことが起こっているのである。

神奈子は、疑問を晴らすべく金色の髪がなんなのか訪ねることにした。

神奈子「あと、その金色の髪は一体なんなんだ。それになった瞬間戦闘力が急激に増加したようだがけど？」

悟空「ああ、これかこれはスーパーサイヤ人ただの変身さ」

悟空は神奈子にそう告げた。



## 神との決戦！頑張れ悟空！！ 第76話

神奈子「スーパーサイヤ人？」

聞きなれない単語に神奈子は首を傾げる。

悟空は、そんな神奈子を見てスーパーサイヤ人についての説明をすることにした。

悟空「スーパーサイヤ人ってのは穏やかな心を持ったサイヤ人が怒りをきっかけに変身することの出来るサイヤ人独自の变身さ。ちなみにこのスーパーサイヤ人になったサイヤ人は、戦闘力が大幅に増加する」

神奈子「まさか、そんな変身をもっているなんて！お前は、一体 何者なんだ!？」

悟空「孫悟空、サイヤ人さ」

神奈子は、あまりのパワーアップの大きさに驚きを隠せないようだ。

神奈子（さっきの私の一撃をかき消したことから嘘ではない。こいつとの戦闘は避けたいところだな。まあ、こいつは見た目的に恐らく博麗神社とは縁が無いはず。ただの連れだろ戦いにはならないはずだ）

神奈子は、悟空の戦闘力には驚いたものの戦闘にはならないと踏み自分を落ち着かせる。

だが、しかし、

悟空「おい、おめえここからはオラと戦わねえか？」

神奈子「えっ？」

突然のセリフに理解が遅れる神奈子

悟空は、そんな神奈子を見て、

悟空「こつからは、オラが霊夢の代わりに戦うそれでいいか？」

と再度、神奈子に説明した。

神奈子は、驚きと疑問を持つ。

それはどんな疑問かと言うと勿論これである。

神奈子「お前が博麗神社のために戦うのか!？」

そう、神奈子の疑問は何故神社とは無縁そうな悟空が博麗神社をかけた戦いに参加するのかと言う疑問である。

悟空「簡単さ。オラ博麗神社に住まわせて貰ったんだ。だから、博麗神社が無くなったらちつとオラも困るんでな」

神奈子は、その言葉を聞き少し考えた。

どうやら、神奈子も悟空を相手にするのは少々分が悪いと考えたようだ。

そこで、神奈子が一つ提案を出す。

神奈子「なるほど、そう言うことか。ならこうしよう。博麗神社が無くなった後、お前は守矢神社に住まわせてやる。それなら、別にいいだろ？」

悟空は、それを聞き「えっ」と思わず言葉をこぼしてしまった。

神奈子「守矢神社はいいぞ〜！博麗神社とは違って信仰も高い。どうだ、お前のような実力のある奴が博麗神社なんかには勿体ない。守矢神社に来るべきだ」

神奈子は、悟空との戦闘を回避しようと悟空を口車に乗せようとする。

しかし！

悟空「断る」

悟空は、一言、断る。とだけ神奈子に言う。

神奈子「なっ！」

神奈子は、悟空が断ることをどうやら予想していなかったようで驚きが一層大きい。

悟空「オラは今まで霊夢や魔理沙と一緒に異変解決を頑張ってきたんだ」

神奈子「異変解決だど？」

悟空「ああ、そうだ。そして、そこで一緒に強くなってきた。そんな仲間を裏切るの  
はオラの性に合わないんでな」

悟空がキツパリと神奈子にそう言う。

神奈子「ふん、どうやら戦いは避けられないか」

ここで神奈子は、博麗神社を潰すには悟空との戦いが必要だと気づいた。

神奈子「いいわ、やってやろうじゃない。見せてあげるわ、神の本気を! はあああああ!」

その瞬間、神奈子の周りに紫色のオーラが出る。

しかし、そのオーラからは何一つ気を感じることが出来なかった。

どうやら、神の気のようにだ。

神奈子「これが神の力よ!」

悟空「気は感じねえのになんて、威圧感だ!」

悟空は、少し武者震いした。

悟空「霊夢、こっからはバトンタッチだ。下がってくれ」

そう言つて悟空は、「はあああああ!」と気合いを入れスーパーサイヤ人2になる。

霊夢は、そんな悟空を見て、「分かったわ」とだけ告げ魔理沙のある方向へふらつきながら歩みよつていった。

悟空「さつきよりも戦闘力が上がったようだな」

神奈子「それはお互い様じゃないのか?」

悟空「まあな」

悟空と神奈子が軽い会話を交わしたその刹那

『ヒュン』『ヒュン』

悟空「だりやあああ！」

神奈子「だりやあああ！」

『ドンッ』

二人は、一瞬で接近し合いお互い本気のパンチを打つか合う。

その威力は、凄まじく拳と拳がぶつかった瞬間周りにその音が反響する程であった。

霊夢「くっ、なんてパワーなの！」

魔理沙「物凄いパワーだぜ!!」

離れて見ていた二人にもその威力が伝わっていた。

悟空「やるじゃねえか」

神奈子「そっちこそ」

悟空・神奈子「ふっ」

お互いに一瞬笑みをこぼす。

そして！

『ヒュンヒュンヒュン』『ヒュンヒュンヒュン』

『ドンドンンドン』

『ドンドンンドン』

二人は、超高速で動きそして、お互いパンチを放ちあった。

お互いほぼパワーもスピードも互角で一歩も譲らない展開へとなった。  
そのパンチの中で、

悟空「波ー!!」

悟空は、一瞬の隙を見つけたかめはめ波を放った。

神奈子「なっ!」

突然のかめはめ波に驚く神奈子

しかし!

神奈子「だりやあああ!」

神奈子は、かめはめ波に対抗すべくエネルギー波を放った。

『ヒューン』『ヒューン』

『ドゥーン』

『ドーン』

お互いのエネルギーとエネルギーがぶつかり合い。そして、お互いに相殺し合った。

悟空「はあはあはあ」

神奈子「はあはあ」

お互い息を切らし合う二人

魔理沙「ひえー、なんて、戦いだ。まさか、幻想郷にスーパーサイヤ人2の悟空とここまでやりあえる奴がいるとわな。神つてのはここまで強いのか！」

魔理沙は目を丸くし目の前で起こっている戦いに驚きを隠せないようだ。

霊夢「悟空の奴ヤバいわよ！」

霊夢が急に喋り出した。

魔理沙「悟空がヤバい？何言ってるんだ霊夢。悟空の奴別に押されてねえじゃねえか？」

魔理沙は霊夢の発言に疑問を持った。

霊夢「ええ、たしかに悟空と神奈子って奴は互角よ。今わね」

## 相性最悪? 第77話

魔理沙「今は、つてどういうことだよ霊夢。どうみたつて悟空は、押されてねえじゃねえか?」

霊夢が口ずさんだ言葉がどうにも納得 出来ない魔理沙は、霊夢に尋ねた。

霊夢「悟空とあの神様よく見比べてみなさい」

霊夢が魔理沙の方を振り向くこともなく呟く。

魔理沙は、その軽い反応にすこしイラツとしたが特に気にするのもアレかと思ひ霊夢の言う方向へと目を向けた。

そこには!

悟空「はあはあはあはあはあ」

神奈子「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

以前として息を切らしながら構える二人がいた。

その光景にはどうみても悟空が押されている感じは感じれなかった。

魔理沙「なんだよ。やつぱり両方ともお互いに息を切らし合つてるじゃねえか?」

だが、霊夢が魔理沙のその発言を取り消させるように魔理沙にこう言った。



霊夢「何言ってるのよ。その息切れの違いを良く聞いてみなさい」

魔理沙「息切れの違いだって？」

その言葉を聞いた魔理沙が聞き耳を立て二人の息切れを聞く。

悟空「はあはあはあはあはあはあ」

神奈子「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

魔理沙「なっ！」

そこでやっと魔理沙があることに気づいた。

霊夢「やっと気づいたのね」

魔理沙の反応から魔理沙が気づいたことを確認する霊夢

魔理沙「ああ、微かだけど悟空の息切れの方が激しい。悟空は、あいつよりも体力を

消費してる」

そう悟空の息切れは、神奈子に比べると息切れが激しい。

これは、悟空の体力が神奈子よりも消耗していると言うこと、霊夢はこのことにいち早く気づき悟空が押されているといったのである。

魔理沙「だけど、おかしくねえか？」

魔理沙が霊夢に尋ねる。

そう魔理沙は何か不可解な点を見つけたのである。

霊夢「あら、魔理沙も気づいた」

魔理沙「ああ、悟空の奴はこんな簡単に息を切らしたらはしねえはずだぜ。でも、今回はなんだかいつもよりも早く息を切らしている。どうしてだ？」

そう魔理沙の見つけた不可解な点とは悟空の体力である。

確かにスーパーサイヤ人2は、体力の消耗が激しい変身。

しかし、今回はそれがあまりにも激しすぎる。

いくら、スーパーサイヤ人2だとしても悟空は、かなりの体力をつけ備えているはずなのに……

魔理沙は、それについて考え込んでしまう。

霊夢「もうかして、本当にもしかしてだけど」

霊夢が急にそう呟きだす。

どうやら、霊夢は何かに気がついたようだ。

魔理沙「なんだ、何か分かったのか？」

霊夢の反応から霊夢が何かに気づいたことを察し霊夢に尋ねる魔理沙

霊夢「多分、あいつの気のせいじゃないかしら」

魔理沙「気？あの神の気のことか？」

霊夢が注目したのはあの神の気のことであった。

しかし、一体 神の気と悟空の体力何が関係するのであろうか？

魔理沙は、そのことについて霊夢に尋ねた。

魔理沙「一体、神の気だとなんで悟空の体力が減るんだ？」

霊夢「いい、あの神の気つてのは多分 神の領域に踏み入れてるものにしか感じるこ  
とが出来ない気なの」

魔理沙「うんうん」

霊夢「でも、悟空は確かに強いけど神と言う名の領域には入り込んではいない。だから、神の気を感じる事が出来ないわけよ」

魔理沙「神の気を感じれないからどうだって言うんだ？」

霊夢「悟空は普段、戦闘では相手の気を感じそこから相手の動きを読み取り動きを最小限まで抑えているのよ。でも、今の戦いでは悟空は相手の気を読むことが出来ない。だから、余計な動きが入ってしまいいつもより多くの体力を使ってしまうているのよ」

霊夢がそう説明をした。

魔理沙は、その説明を聞きハツとし、そして、理解した。

魔理沙「成る程な。だから、悟空の体力の消耗が激しいのか」

霊夢「ええ、気を感じることを中心に戦ってきた悟空にとつてはかなり相性が悪いわね」

そこで魔理沙が少し焦り出す。

魔理沙「じゃあ、もしこのまま戦いが進んだら悟空は！」

少し叫び気味の声を上げながら霊夢に尋ねる。

霊夢「負けるでしょうね」

そんな魔理沙とは対照的に腕を組み静かに答える霊夢

魔理沙「負けるでしょうねって！お前は悟空が心配じゃないのかよ！」

若干のパニック状態になってしまう魔理沙

霊夢「落ち着きなさい魔理沙。私達がパニックになっても戦いの状況は変わらないのよ。私たちは、ただ悟空を信じ続けましょ」

魔理沙「待ち続けるっていったってこのままじゃ悟空は！」

霊夢「大丈夫よ！悟空は今までどんな状況でも必ず勝利を掴んできた。きつと、今はあれだけすぐに神の気の攻略法を見出して絶対に勝つはずよ」

霊夢のその言葉には悟空への想いがこもっておりとても、力強さを感じとった。

魔理沙もその言葉を聞き一度 落ち着きを取り戻す。

魔理沙「そうだな、悟空は今まで勝ってきたんだ。神だろうが何だろうが悟空ならきつと勝つてくれるよな！」

いつものように前向きな言葉をこぼす魔理沙。

霊夢 「そうよ、悟空が負けるわけないじゃない」

霊夢も魔理沙に合わせてプラス思考の言葉を並べる。

そう悟空は幻想郷に来て一度も負けたことがない。

そんな、悟空ならば神の気という気を感じ取れない不利な状態でもきつと逆転の糸口を見つけ出すはず。

霊夢達は、それを信じ悟空を見守り続けるのであった。

## 頭脳戦? 悟空の戦略 第78話

悟空「はあはあはあはあ」

激しく息を切らしてしまっている悟空

悟空（くそ、相手の気が感じれねえから動きに無駄が出来ちまう。早いところなんとかしねえと やべえぞ）

悟空は、心中でかなり焦っていた。

恐らく、この焦りは幻想郷に来てから最も大きな焦りであろう。

悟空は、普段相手の気を感じそこから動きを最小限に抑える。

しかし、今の敵は気を感じることが出来ない。

悟空にとっては何よりもやりにくい相手なのである。

恐らく、神奈子もそのことには気づいているだろう。

神奈子「おい、どうした。徐々に息切れが激しくなってるじゃないか」

悟空に更に体力を使わせようと挑発を入れる神奈子。

悟空もそれが挑発だと言うことには気づいた。

しかし、

悟空「言ってくれるじゃねえか。だりやああ!!」

悟空は、周りに黄金色のオーラを纏い一気に神奈子に急接近する。

後先考えずに行動する。

これは、サイヤ人の血のせいなのだろうか。

神奈子（ふん、自ら体力を削りに来るとはな）

そう言つて神奈子は構えを取る。

その時！

悟空「はあ！」

悟空は神奈子に接近しながら気弾を放った。

神奈子「なに！」

その行動は、予想しておらずとつきに避けようとする神奈子

しかし！

『ヒューン』

なんと、その気弾は神奈子に当たることなく神奈子の真上を飛んで言った。

神奈子「なんだと！」

予想外の気弾の軌道に戸惑う神奈子

その時！

悟空「だりやあああ!」

『バコンッ』

神奈子「ぐはあ」

気弾に神奈子が目を取られているうちに悟空は、神奈子に全力でパンチを放った。基礎的な攻撃力などは、悟空の方が上なので神奈子は大ダメージを食らってしまった。

神奈子「ぐはあ!」

腹を抑えて苦しみ出す神奈子

悟空「どうだ!」

悟空は、そんな神奈子にドヤ顔をする。

神奈子「はあ、はあ、く、くそ!まさか、気弾で私の注意を引きつけてその隙に攻撃するとは!」

悟空「普通に戦ってもおめえの方が有利だかな。ちよつと、頭を捻らせてもらったぞ!」

神奈子「ふん、これは一本 取られたな。だが!」

そう言いながら再び構え出す神奈子

神奈子「所詮は子供騙し二度目はない!」

神奈子が悟空に言い切る。



しかし、

悟空「それはどうかかな」

と神奈子に晒しをかけた。

神奈子「ほう、もう一度やる気か？」

神奈子が悟空に尋ねる。

悟空「まあな」

悟空は、それだけ返し、「はあー」と再び気弾を放った。

それと同時に悟空が神奈子に急接近する。

神奈子「同じ手はもう食らわないわ！」

悟空の放った気弾は神奈子の上の方を通って行った。

しかし、神奈子は先程のように気弾に目をやらず迫ってくる悟空に狙いを定めた。

悟空が目の前までやってくる。

悟空「だりやあああ！」

そして、悟空は神奈子にパンチを放った。

しかし、神奈子は先程とは違い悟空をしつかりと捉えていた。

神奈子「だりやあああ！」

神奈子は悟空よりも長い大人の腕を生かし悟空にパンチを放つ。

その時!

『ドンッ』

神奈子「なに!」

なんと、神奈子の後ろから先程 悟空が放った気弾が神奈子に直撃した。

神奈子は、少し怯んでしまった。

背中に痛みを感じる神奈子

悟空は、その隙に出していたパンチを神奈子に直撃させた。

『バコンッ』

悟空のパンチは綺麗に神奈子の腹を捉える。

神奈子「ぐはあ!」

神奈子の口からは唾液が飛び出した。

神奈子「はあはあはあはあ」

神奈子は、強く腹を抑えそのまま地面に降り膝をつく。

神奈子「ま、まさか、気弾をUターンさせてくるなんて!」

そう悟空は一発目に出した気弾をフェイントに見せかけ気弾をコントロールし神奈子に当てたのである。

悟空「どうやら、戦闘での経験の差が出たみてえだな」

悟空が神奈子を見下ろすように言う。

神奈子「くそ！」

悔しそうな顔を浮かべる神奈子

魔理沙「ひえ〜、悟空の奴まさか、あんな方法で攻撃をあてるなんて！」

遠くから見ていた魔理沙が悟空の攻め方に驚きを隠せない。

霊夢「一度目はフェイントをかけ、二回目はフェイントと見せかけての気弾が本命  
流石のあいとも予想外過ぎて態様出来なかったようね」

悟空「はあはあ、どうだ、降参すつか？」

悟空が神奈子に尋ねる。

神奈子「はあはあ、冗談じゃないわよ！降参なんかしてたまるか！」

そう言いながら神奈子は痛みに耐え立ち上がる。

悟空「無理すんなって。神の気は分かんねえけどかなり消耗してんじゃねえか？」

神奈子「それはお互い様よ。貴方だってかなり息が上がってるじゃない」

悟空「ははは、やっぱりバレちまったか」

神奈子「当たり前よ。元から体力を消耗してる状態だったくせに」

悟空「まあ、そうだな」

軽く会話を交わした二人は、一瞬笑みを浮かべ再び戦闘体勢をとった。

霊夢「体力は互角つてところかしら？」

霊夢がポツリと呟く。

魔理沙「ああ、きつとそのぐらいだぜ。それに、しても悟空の奴 さつきまで体力で押されてたくせにまさか、ここまで巻き返すとわな」

魔理沙は、改めて悟空の強さを実感したのであった。

悟空「ふっ」

神奈子「ふっ」

二人一緒ずつ笑みをこぼし合う二人。

恐らく、二人にとってはこれが挨拶代りなのだろう。

悟空「だりやああ！」

神奈子「はああああ！」

そして、笑みをこぼし合った後、二人は一気に急接近し合った。

果たしてこの戦い勝利を手にするのは悟空か、それとも神奈子か！

## 悟空 v s 神奈子！ 第79話

悟空と神奈子は超高速で動きお互い攻撃を重ねていた。

『ヒュン』

『ヒュン』

『ドーン』

拳がぶつかり合うたびにクレーターができ、激しく動き回るたびに風が切られて行く。

二人の戦いはもはや幻想郷にとって次元が違うものであった。

悟空「だりやりやりやりや!!」

神奈子「だりやりやりやりや!!」

お互いのパンチはまるで鏡のように威力を相殺し合う。

霊夢「な、なんて、戦いなのに！」

魔理沙「まさか、ここまで接戦になるなんて驚いたぜ！」

遠くから見ていた霊夢と魔理沙も驚きから啞然としてしまう。

しかし、二人には驚き以外に別の感情もあった。

そうそれは、「ワクワク感」である！

どうして、そのような心情が生まれたかというと！

幻想郷には、まだまだ強い者がいると言う証明が目の前でされているからである。

今までの敵はせいぜい能力を使ってなんとかスーパーサイヤ人2の悟空と戦えるかなレベルが限界だった。

だが、今 目の前にいる神奈子は神の気と言うハンデはあるにせよ何一つとして能力を使わず悟空と渡り合っている。

これは、霊夢達が戦ってきた中ではダントツで一番強いといってもいいであろう。

霊夢達は、そんな奴が目の前にいて嬉しいのである。

きっと、これは悟空の心情が移ったのであろう。

霊夢「頑張れ」

魔理沙「悟空」

二人は、そのように思いながら悟空をおうえんするのであった。

神奈子「だりやりやり」

悟空「だりやりやりや、りや!!」

神奈子「グハッ!」

悟空は、パンチの嵐の中 全力パンチを一発 神奈子に命中させた。

神奈子「ぐ、ぐぐ」

腹を抑えて苦しみ出す神奈子

どうやら、それなりのダメージが通ったようだ。

神奈子「チツ、命中しちまったよ」

神奈子は、少しそう言葉をこぼす。

だが、次の瞬間!

『ヒュン』

神奈子は、一瞬で悟空に近づき悟空に不意打ちを仕掛けた。

神奈子「はあ!!」

神奈子のパンチが悟空めがけて飛んで行く。

悟空「ふんっ」

『ドーン』

その瞬間、パンチがヒットした効果音が流れた。

一体、悟空はどうなってしまったのであろうか。

その結果は以外なものであった。

神奈子「あ、ああ」

息が詰まったような声を出す神奈子

一体、何が起こったのであろうか。

神奈子を見てみると、そこには予想外の光景が広がっていた。

そうその光景は、もう恐らく察しているのであろう。

悟空「だりゃー!」

悟空が神奈子の腹に攻撃を命中させていたのである!

神奈子は頭が混乱した。

一体、どうやって神の気を感じ取れない中 不意打ちの攻撃にカウンターを合わせたのかと。

神奈子「い、一体、どうやってカウンターを!」

パニックになってしまった神奈子は、一度 脳を整理するべく悟空にどうやってカウンターの合わせてきたのかを尋ねた。

だが、悟空の回答はシンプルなものであった。

悟空「なに、簡単なことさ、おめえの動きに慣れてきたのさ!」

神奈子「慣れてきただって!」



な、なんと、悟空がカウンターを当てた方法はただの慣れだと言うのである。

まだ、10分も経っていないのにそんな発言をする悟空に驚きを隠せない神奈子

悟空「ああ、そうだ。おめえは確かにつええだがおめえの動きにはある程度法則性があるんだ」

神奈子「法則性だど！」

悟空「ああ、例えばおめえは右でパンチを放った後 確実に左にステップして攻撃を躲す。おめえにはこんな感じの法則性がいくつもあつたんだよ」

どうやら、悟空はこのような法則性をすぐに見つけ出しカウンターを狙ったようだ。

神奈子「まさか、あんな短い組み手の間にそこまでのことを見抜かれているとはな！

ほんと君は一体、何者なんだ！」

神奈子は一度、冷静に立てなおし悟空にそう尋ねた。

悟空「孫悟空、ただのサイヤ人さ」

神奈子「サイヤ人？」

聞き慣れない単語に疑問符を浮かべる神奈子

悟空は、そんな神奈子を見 サイヤ人の説明をした。

悟空「あ、サイヤ人つてのは戦いに適した民族のことさ！」

神奈子「戦いに特化したか、どうりで強いわけだ」

悟空「ま、取り敢えず会話はこの辺にしといてさつきと続き始めようぜ！」

サイヤ人の説明を終えた悟空は早く戦おうと神奈子に催促した。

神奈子「どうやら、サイヤ人というのは戦いが好きなようね！いいわ、始めましょ！」

そう言いながら構え出す神奈子

悟空もそれに合わせて構えをとった。

神奈子「そういえば、さつき動きに法則性があるって言ってたけど、そんなこと私に話しても良かったの？もし、私がさつきの動きの法則と全く違う動きをしたらあなたついてこれないんじゃないの？」

自分の弱点を教えてくれた悟空に尋ねる神奈子

その言葉を聞いた悟空は、ふつと笑う。

そして、こう言った。

悟空「癖つてのは、そんな簡単に直せるもんじゃねえぞ」

## 神の超本気！行くぜ！スーパーサイヤ人3！！ 第80話

神奈子「ふっ、だりやあああ！」

神奈子は一呼吸出した後、一気に悟空との距離を詰める。

そして

『ドゥーン』

神奈子は、風をも切る速度のパンチを放った。

そのパンチの威力は、恐らく今日、神奈子がして来たパンチの中では一番のものであろう。

だが！

『ヒュン』

悟空は、パンチが当たる瞬間姿を消す。

いや、正確には超高速で神奈子の後ろに回りこんだのである。

神奈子「なに！」

その悟空の速度に驚く神奈子

悟空「だりやあああ！」

悟空は、そんな神奈子に考える間を与えることなく回し蹴りを放った

神奈子「ぐはっ!」

神奈子は、見事にその回し蹴りを食らってしまった。

神奈子「くっ!」

神奈子は、一度体を回しバックして悟空との距離をとった。

神奈子「くそ!人間如きに押されてしまうとわ!」

神奈子は強く歯を噛み締める。

恐らく、人間の子供に押されている自分が許せないであろう。

しかし、悟空はそんな神奈子を見てイラツとした。

その理由は、一体!

悟空「本気を出せ!」

急にそう言葉をこぼす悟空

神奈子「なに!」

急な悟空の言葉に驚きを隠せない神奈子

恐らく、悟空の言葉に脳が追いついていないのであろう。

悟空「この幻想郷にいるやつらは基本的には必殺技、オラで言うかめはめ波的な立ち位置の技はスペルカードっちゃうのです。おめえも持ってんだろ?スペルカードを

！」

そう悟空が神奈子が本気を出していないと思った理由はスペルカードである。幻想郷の住人はこれを使いこなし戦いを有利に運ぶ。

しかし、神奈子はまだ、一度もスペルカードを使っていない。

これは、すなわち まだ、本気を出していないも同然なのである。

神奈子「ふははは、ははははは」

急に笑い声を響かせる神奈子

神奈子「そうさ、まだ、私はスペルカードを残しているのさ」

神奈子が悟空にそう告げる。

悟空「なんで、スペルカードを使わねえんだ？」

神奈子「そんなこと言わなくてもわかるだろ。人間如きにスペルカードは不要。そう

考えてたからさ。今までは」

悟空「今までは？」

その言葉に反応し首を傾げる悟空。

神奈子「ああ、そう今まではな。だが、今は違う！人間にもこれほどの者がいると知っ

たからな」

悟空「てことは」

神奈子「ああ、今からが本番だ。私の本当の本気を見せてやる!」

そう言い神奈子は薄っすらと笑みを浮かべ構え出した。

勿論、その構えはスペルカードの構えである。

悟空「こい!」

悟空は、体に入力神奈子の攻撃に備える。

神奈子「私にスペルカードを使わせたことを後悔させてやる!神符「水眼の如く美し

き源泉」

その瞬間、神奈子から水源から湧き出る水の如く青色の弾幕が四方八方に放たれた。

その威力は、数が多い割にかなりの威力とスピードを持っていた。

『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』

悟空「なんでスピードだ!」

迫り来る弾幕に驚きを隠せない悟空。

『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』

悟空は、負けじと超高速で神奈子の弾幕を躲してゆく。

神奈子「ほく、なかなか粘るじゃないか。でも、いつまでもつかない!」

悟空を嘲笑うかのように神奈子は弾幕の数を増やした。

『シュッ』

悟空は、頬に弾幕をかすめた。

悟空「くっ！」

少しずつだが悟空は神奈子の弾幕に押され始めた。

神奈子の弾幕は悟空の頬をかすめ髪をかすめ腕をかすめてゆく。

そして

『ドーン』

悟空「うわー！」

悟空は、弾幕を直撃してしまった。

『ドドドドドドドドドドドド』

次々と悟空にダメージを与えてゆく神奈子

悟空は、爆風に包まれてしまった。

神奈子は、それを見て一度 スペルカードを解除する。

神奈子「決まったね」

神奈子は、勝ちを確信した。

霊夢・魔理沙「悟空！」

離れて見ていた二人もこの状況に焦りを感じ始めた。

その時!

「はあああああ!!」

爆風の中から叫び声が響いた。

そうこの声の主は勿論!

神奈子「なに!」

その声に気づいた神奈子は、爆風の方に振り向く。

『ヒューーーーン』

叫び声と共に吹き飛んでゆく爆風

悟空「だりやあああ!」

そう言うまでもないこの声の主は悟空のである!

神奈子「ちつまだ行きてたか!しぶとい奴め!」

そう言いながらも一度スペルカードを構える神奈子  
しかし!

神奈子「なっ!」

神奈子は、悟空を見て何やら驚いた。



神奈子「一体！」

動揺を隠せない神奈子

その先にいる悟空は、なんと髪が長く伸びていたのである。

そうこれは、スーパーサイヤ人3

悟空が今のところ幻想郷においてなつた最強形態である。

霊夢「悟空」

悟空の生を確認した霊夢は安堵の表情を浮かべた。

魔理沙「流石悟空だぜ！あのスペルカードの攻撃に耐えるなんてな！」

神奈子「一体、その姿は、」

驚きの表情を浮かべつつ悟空に尋ねる神奈子

悟空「これはスーパーサイヤ人の壁を超えたスーパーサイヤ人をさらに超えたスーパーサイヤ人その名もスーパーサイヤ人3だ！」

神奈子「まさか、そんな変身を残していたなんて、強さもさつきとは全く違う」

悟空「当たり前めえだ。この姿は体力を大幅に持っていく代わりにものすげえ力なん

だ。と、まあ、話はこのへんにしてさっさと続きを始めようぜ」

神奈子「ちっ、どうなるか分からないけど私も神としての意地があるのやってやるわよ！」

そう言っつて神奈子は戦闘体勢をとった。

悟空も神奈子に合わせ同様に戦闘体勢をとる。

## 神を越えし悟空 第81話

神奈子（さつきまでの姿の2倍、3倍、いや、4倍近くはパワーアップしている）

スーパーサイヤ人3の気迫で武者震いを起こす神奈子

無理も無いスーパーサイヤ人3は、スーパーサイヤ人2の4倍もの力を持っている。

スーパーサイヤ人2とやつと互角の神奈子では到底勝てる相手ではないのだ。

だが！

神奈子（だけど私は負けない！）

スーパーサイヤ人3を目の前にしても神奈子の闘志はまだ燃え尽きていなかった。

これは、恐らく神としての「誇り」〈プライド〉〈意地〉この3つから成り立っているものであろう。

悟空「どうした。かかってこねえんか？もしかして降参か？」

固まっている神奈子に声をかける悟空

神奈子「いいえ、ちよつと考え事をしてただけよ。それじゃあ、続きと行きましようか」

そう言いスペルカードを持つ神奈子

そして、

神奈子「スペルカード、神符「水眼の如く美しき源泉」」

神奈子は、先程 悟空を追い詰めたスペルカードを放った。

『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』

四方八方へと飛んで行く弾幕

流石のスーパーサイヤ人3もこれを避けるのは至難の技か。

そう思われた時！

悟空「はああああ！」

なんと、悟空は避けるのではなく 気で周りにバリアを張った。

神奈子「なに！」

予想外のことに頭の回転が追いつかない神奈子

『アウン』『アウン』『アウン』

神奈子の弾幕は無残にも悟空のバリアによってかき消されていってしまった。

悟空「ふう」

全ての弾幕を防ぎ終えた悟空は一呼吸出す。

そして、ニツと神奈子に笑みを浮かべた。

神奈子「わ、私の弾幕をかき消しただと！」

驚きを隠せない神奈子

そんな、神奈子を見て悟空はこう言った。

悟空「残念だったな！オラに同じ技は二度は通用しねえ！」

神奈子「ちっ、こりゃほんとのバケモンだね」

神奈子は、改めて悟空の強さを教えられたのであった。

悟空「ほんじゃ、今度はオラの方から行かせてもらうぞ！」

急に神奈子に言う悟空

そして、

『ヒュン』

神奈子「なに！」

神奈子に急接近する悟空

その速度は今までのものとはレベルが違い神奈子は悟空の動きを捉えることはできなかつた。

悟空「だりゃあ！」

『ダンッ』

悟空は、そのまま超高速で近づいてきた自分に戸惑ってしまっている神奈子にパンチを放った。

神奈子「ぐはっ！」

口から唾液が飛び出す神奈子

だが、悟空はそんな神奈子に御構い無し。

悟空「だりやりやりやりやりや！！！」

と神奈子に追撃をした。

神奈子「ぐ、ぐはっ、げほ……！」

悟空のパンチを一発食らうことに痛そうな声を上げる神奈子

神奈子「ぐっ！」

神奈子は、地面に降り座り込み地面に手をついた。

神奈子「はあ……はあ……はあ……！」

激しく息が乱れてしまう神奈子

悟空「勝負あったみてえだな」

悟空は、そんな神奈子の目の前に降り立ちスーパーサイヤ人3を解いた。

神奈子「な、なにを言っているの。まだ、終わって無いわよ」

そう言いながら立ち上がる神奈子

しかし

『バタンッ……』

神奈子は、息をつくまでなく再び倒れこんでしまった。

悟空「無理すんな。おめえにもう戦う力は残っちゃいねえ。このまま続けても無駄だ」

神奈子を心配するように言う悟空

神奈子は、少し表情が暗くなる。

だが、すぐに今の立場を理解した。

そして、「わかった。降参さ。私の負けだ」神奈子は、負けを認めた。

恐らく、このまま続けてもスーパーサイヤ人3には絶対に勝てない。

そう考えたのであろう。

「おーい、悟空ー！」

その時、後ろの方から声が聞こえた。

そう、霊夢と魔理沙である。

二人は、駆け足で悟空と神奈子のいる所へ向かってくる。

霊夢「勝ったのね」

悟空の近くに来るやいなやそう悟空に言う霊夢

悟空は、首を コクリツと動かし霊夢に返答した。

神奈子「私の完敗だよ。博麗の巫女」

神奈子は、急に近づいてきた霊夢に対してそう告げた。

それを聞いた霊夢は神奈子の方へと目をやる。

神奈子「私の負けだ。博麗神社の件は無しと言うことにするよ」

神奈子は、何処と無く悲しめな目をしていた。

そんな神奈子を見て霊夢は、神奈子にこう告げた。

霊夢「神社は神を宿る場所であつて、巫女のものではない」

このセリフは、戦うまえ神奈子が霊夢に告げた言葉である。

一体、何故 霊夢はこんなことを言つてるのであろうか。

霊夢「博麗神社を潰したりあげたりすることは出来ないけど、これからは、私も私なりにこれからの博麗神社のことを考えることにするわ」

どうやら、霊夢は悟空と神奈子が戦つている間ずっとこのようなことを考えていたようだ。

神奈子は、その言葉を聞き笑みを浮かべた。

神奈子「どうやら、私は少々 博麗の巫女を舐めていたようだな」

神奈子は、霊夢の言葉から霊夢は博麗神社を自分のものだけじゃなく神のものでもあると理解してくれたことを喜んでいるのである。

霊夢「貴方のおかげよ。貴方が博麗神社を奪おうとしなかったら神社において本当に



大切なことにはきつと気づかなかつた。ありがとう！」

そう言いながら神奈子に手を差し出す霊夢

神奈子は、その手をしっかりと握った。

この瞬間、博麗神社の問題は解決を迎えたのであつた。

—————

近くの茂み

『ガサゴソ』

??? 「データ保存。データ保存。データ保存」

『ブーーーーーン』

## 修行編4 (瞬間移動)

### 新たな技を求めて 第 82話

#### 前回

ついに博麗神社の問題を解決することに成功した霊夢達

霊夢達は、あの後 神奈子に別れを告げ無事に博麗神社に帰ってきた。

霊夢「うー、やっと終わったー！」

霊夢が大きく伸びをしながらそう言う。

それもそのはず霊夢達が博麗神社に帰ってきた時間はすでに6時を過ぎていたのである。

ちなみに魔理沙とは、帰る途中で別れている。

悟空「すんげえ、疲れてるじゃねえか霊夢」

霊夢「まあね」

霊夢がそう相槌を返す。

どうやら、何人もの相手と戦ったので疲労がたまってしまったようだ。

悟空は、そんな霊夢を気遣いこう言った。

悟空「明日の修行は休みにすつか？」

霊夢は、その言葉を聞き耳をピクンツと動かす。

悟空「おめえ、かなり疲れてるみてえだし一日ぐれえ修行休んだ方がいいんじゃないかねえか？」

悟空は、霊夢の疲労を考えた上での言葉を出した。

しかし

霊夢「修行はやるわよ！」

なんと、霊夢は気合のこもった声で修行を休む事を拒否した。

悟空「え、でも、おめ……………」

霊夢「私がやるっていつてるからやるのよ」

霊夢は、悟空の言葉を遮り明日も修行をやると言い切る。

一体、なぜここまで修行がやりたいのだろうか？

悟空は、そう疑問に思った。

そして、悟空は霊夢に尋ねることにした。

悟空「どうして、そこまで修行がしてえんだ？」

霊夢は、悟空の方を振り向く。

そして、そこから思わぬ発言が飛び出した。

それは！

霊夢「そんなのきまつてるでしょ。教えてほしい技があるのよ」  
なんと霊夢は悟空に技を教わりたかつたのである。

悟空「教えてほしい技？」

悟空は、再度 確認を取るように霊夢に尋ねた。

霊夢「ええ、そうよ」

どうやら、霊夢は本当に教えてもらいたい技があるようだ。

それを確認できた悟空は、次の質問へと移った。

その質問の内容は言うまでもないであろう。

悟空「いつてえ、何を教えて欲しいんだ？」

そう悟空の質問は何の技を霊夢が覚えたいと思ってるかである。

霊夢が覚えたい技次第では少々無理なものもあるからだ。

言えば一番大切なのは覚えたい技といっても過言ではない。

だから、悟空は今のうちに霊夢が何の技を覚えたいか確認をとつたのである。

しかし！その質問に対しても霊夢から思わぬ返答が飛んできた。

そうそれは、こうである。

霊夢「瞬間移動よ」

その言葉を聞き悟空の頭の中が一瞬 真っ白になった。

悟空「……………」

ポーッと立ちすくんでしまう悟空

何故、悟空がここまで驚いたかと言うと霊夢は夢想封印 瞬 という瞬間移動とほぼ同じような技を持っているのである。

その技を持っているのにも関わらず瞬間移動を覚えたいと言った霊夢に頭の回転が追いつかなかったのである。

悟空「なんで、瞬間移動なんだ？かめはめ波とかならまだ、分かっけどおめえ瞬間移動みてえな技持つてるじゃねえか？」

悟空は、思った疑問を内側に隠し切れずすぐさま霊夢に尋ねた。

すると、霊夢はこう言った。

霊夢「確かに私の使う夢想封印 瞬 は、悟空の瞬間移動と似た技よ。二箇所を除いてね」

どうやら、霊夢によると悟空の瞬間移動と霊夢の 夢想封印 瞬では二箇所、違うところがあるようだ。

悟空「二箇所？」

霊夢「ええ、二箇所よ」

悟空「その二箇所ってなんだ？」

悟空は、その違う点が分からず霊夢に尋ねた。

それを聞いた霊夢は違う点の説明を始める。

霊夢「そうねえ。まあ、まず一つ目は体力の消耗ね」

悟空「体力の消耗だって？」

霊夢「ええ、実はあの技 界王拳程じゃないけどかなりの体力を持っていくのよね。だから、白熱した戦いの途中で使うと一気に不利になると言う使い勝手の悪い技なのよ」

その言葉を聞き悟空は、ピンツときた。

そうそれは今日どうして霊夢があんなに体力を消耗してたかである。

霊夢は、文と戦う中盤ぐらいまでは大量に体力が余っていた。

しかし、文との戦いが終わった瞬間、ものすごい体力の減りであったのだ。

悟空は、文との戦いで何故そんなに体力が減っていたのか実は謎に思ってたのである。

だが、その謎もここまでさっきの霊夢の言葉で悟空の謎は晴れたのであった。

悟空「なるほどなあ」

相槌を打つ悟空

そして、「で、二つ目の理由はなんなんだ？」とすぐに二つ目の理由も聞き出した。

霊夢「それは、今から話すからそんなに急かさないで」

次々質問してくる悟空のペースに押される霊夢は一度頭の整理も入れ一呼吸入れた。

霊夢「いいわ。二つ目の理由わね」

霊夢が二つ目の理由を話し始めた。

霊夢「そう二つ目の理由はズバリ 発動までの時間よ」

悟空「時間だって？」

一つ目の時と似たような反応をする悟空

霊夢「ええ、夢想封印 瞬 に限ったことじゃないけどあれはいちいちスペルカードを構えて宣言をしなくちゃいけないのだからその分 時間かかるし相手に今から瞬間移動するってこともすぐにはれちやうのよ。これが二つ目の理由の内容よ」

確かにそうであるスペルカードを使うときは必ず宣言しないとイケない。

つまり、今から瞬間移動をしないと教えないとイケないである。

恐らく、霊夢はそのことメインで悟空に瞬間移動を教わろうとしたのであろう。

悟空「う〜ん」

悟空は、少し考え込む。

霊夢「そんな、考え込む程？ちょっと教えてくれればいいだけよ」

考え込む悟空を見てもしかして教えてもらえないのではないかそのような不安を抱いてしまう霊夢

しかし、悟空は、「いや、瞬間移動だろ？別に教えてやつぞ」と霊夢に返答した。霊夢は、教えてもらえることに「ほっ」と安堵の息を出す。

悟空「ただ……」



## 疲れた肉体 第83話

悟空「ただ、瞬間移動はオラもかなりの時間をかけてやっとできた技なんだ。もしかすつと、少し時間がかかるかもしれないねえ。そうしたら基礎的な力の修行が疎かになつちまうそれでもいいのか」

悟空がそう霊夢に説明する。

「そう瞬間移動は悟空がヤードラット星で長い時間をかけてやっと出来るようになった技」

正直なところ霊夢が、出来るようになるのは恐らく数ヶ月先であろう。

だが、霊夢は、「そんなの承知の上よ!」と言葉を返す。

悟空は、その言葉を聞き コクリツ と首を縦に振った。

悟空「おめえの意思の硬さはよくわかった」

悟空は、優しさのある目で霊夢を見る。

悟空「じゃあ、まあ今日はもう疲れたし寝よおぜ。飯は明日の朝にたらふく食つてな  
!」

そう言葉を放ち神社の方へと足を動かす悟空

霊夢もそのあとを追うように神社の中へと入っていった。  
そして、二人はしばしの間 睡眠をとるのであった。

〜数時間後〜

悟空「ふわあ〜」

霊夢「ふわあ〜」

同時に目をさます霊夢と悟空

時計を見ると朝の8時を指していた。

悟空「ひえ〜、結構寝ちまつてたな」

悟空が時計を見てそう呟く。

それもそのはず、悟空と霊夢が睡眠をとった時間は7時頃 単純計算だと13時間は  
寝ていたことになる。

霊夢「まあ、昨日は色々あったし たまにはこれだけ寝てもいいじゃない」

そう言いながら立ち上がる霊夢

その時！

『ぐう〜』

何やら大きな音が鳴り響いた。

霊夢は、すぐさまその音の方向を振り向く。するとそこにはお腹を抑える悟空がいた。

なんで、お腹を抑えている理由はもはやいうまでもないであろう。

悟空「腹へった」

そう悟空は、昨日から何も食べていなくお腹が減っていたのである。

さっきの大きな音も悟空の腹の音であったのだ。

霊夢「ふふ」

そんな、豊かな悟空を見て笑みをこぼす霊夢

そして、悟空にこう言葉をかけた。

霊夢「朝食にしましょうか」

霊夢のその言葉に悟空はすぐさま反応する。

悟空「飯だつて！」

その声は、無邪気な子供そのものであった。

霊夢と悟空はすぐさま台所へと移動する。

そして、こういう時のために先作りしておいた朝食を二人は食べるのであった。

く数分後く

悟空「ふう、食った食った」

悟空は腹をパンパン叩きながら言った。

大量に作っていた朝食を数分で食べきってしまった。  
過去最高の食いつぶりであった。

恐らく、かなりお腹を空かせていたのであろう。

その時！

魔理沙「やつほー！」

魔理沙が神社にやってきた。

魔理沙「あれ、今 朝食を食べ終わったところか？」

魔理沙がそう霊夢に尋ねる。

霊夢「ええ、そうだけど」

霊夢は、魔理沙を相槌を返すように答えた。

魔理沙「珍しいなあ。いつもなら私が着く頃にはとつくに飯を食い終えてるくせに」  
魔理沙が疑問そうな顔を浮かべ霊夢に言った。

悟空「昨日の戦いで疲れてつい寝過ぎちまってよ。魔理沙は疲れてねえんか？」

魔理沙「ああ、私の体は丈夫だからなちよつとやそつとじや疲れないぜ！」

あまり疲れてない事をいいことに少し自慢もかけて体が丈夫と言い張る魔理沙

その時、

霊夢「あんた、昨日一回も戦闘してないでしょ」

と霊夢がそう言葉をこぼした

それを聞いた魔理沙は、「あつ」と言葉を詰まらせる。

そして、「だははは、そういえばそうだったな」

少々、笑いを交えて誤魔化そうとする魔理沙

恐らく、心ではかなり恥ずかしがっているであろう。

霊夢「まったく」

そんな、魔理沙を見て霊夢はほんの少し笑みを浮かべた。

魔理沙「と、そんな話は置いといて早く修行しようぜ」

話を変えるようにそう言う魔理沙

それと、同時に霊夢の顔の表情が若干変わる。

霊夢「あ、そのことなんだけど」

魔理沙に声をかける霊夢

魔理沙「なんだ？」

魔理沙は、霊夢の言葉に反応しすぐさま霊夢の顔を真剣に見た。

霊夢「実は、今日から新しい修行を始めようと思ってるね」

霊夢が魔理沙にそう言葉をかけた。

魔理沙「新しい修行？」

霊夢の言葉をリピートし再確認をとる魔理沙

霊夢「ええ、新しい修行よ」

霊夢は、その言葉にもしつかりと答える。

魔理沙「一体、なんの修行をやるんだ？」

新しい修行と言うことに少し興味を持つ魔理沙

霊夢「瞬間移動よ」

霊夢はそんな魔理沙に対してあっさりとそのういった。

魔理沙「えっ？」

霊夢の言葉を聞き少し困惑する魔理沙

その理由は、言うまでもないこれである。

魔理沙「霊夢、お前 瞬間移動に似た技持つてるじゃねえか？」

そう、魔理沙も悟空と同じように霊夢は瞬間移動を使えることに対してなぜそんな事を言うのか疑問を持ったのである。

霊夢「あゝ、それは、ね……………」

〈 霊夢 説明中 〉

霊夢は、理由を全て話し終えた。

魔理沙「なるほどなあ。確かに霊夢の夢想封印 瞬 は、あんまり戦いの中や戦いの前に使うのには適していない。いわば、諸刃の剣みたいなもんか」

霊夢の説明を聞いた魔理沙は腕を組みながらしっかりと霊夢の言った事を認識した。

霊夢「ええ、それに比べて悟空の瞬間移動は戦いの中でもおおいに応用ができる上に相手の気さい感じればどこでもいける分 移動にも役に立つ」

魔理沙「なるほどなあ」

霊夢の言葉に相槌を打つ魔理沙

そして！

魔理沙「わかったぜ！私も一緒に瞬間移動の修行をしてやる！」

魔理沙は、霊夢にそういった。

霊夢「え？」

その言葉を聞き動揺する霊夢

霊夢「別にわざわざ 私に合わせてくれなくてもいいのよ。瞬間移動の練習が増えれば肉体的な修行の時間が削られてしまう。そうになると、やっぱり瞬間移動の修行をしなければよかったですと後悔してしまうかもしれないわ」

自分の修行にわざわざ合わせようとしてくれる魔理沙に気遣う霊夢

しかし、魔理沙は「気遣いは無用だぜ霊夢。実を言うと私も少し瞬間移動をやったかっただよな」と言葉を返した。



## 瞬間移動の条件 第84話

魔理沙「ま、なんやかんやいっても善は急げだ。早く瞬間移動やってみたいぜ！」  
そう言うのと先々と玄関の方へ向かっていく魔理沙

どうやら、反応からみるに魔理沙も瞬間移動をおぼえたかったようだ。

霊夢は、そんな魔理沙を見て「まったく」と一言 微かな笑みを浮かべながら言った。  
そんな、霊夢を見て悟空が、

悟空「まあ、あいつもあいつで強くなりたいたんだろ。あいつ、結構 負けすぎれえみ  
たいだからな！」

と魔理沙に同情するよなに眩く。

そう、今となつては霊夢ともそれなりに差をつけられてしまった魔理沙

魔理沙は、その差を少しでも埋めようと人一倍修行にはげんでいるのであった。

霊夢「たしかに」

霊夢も魔理沙のその心情に気づいていたらしく悟空に相槌を返す。

その時！

魔理沙「おーい、悟空、霊夢早く来いよー!!」

先に外に出ていた魔理沙が待ちきれず大声で悟空と霊夢をよんだ。

霊夢「すぐに行くわよ」

霊夢は、その声の大きさに合わせた声で魔理沙に言葉を返した。

そして、悟空の顔をみる霊夢

霊夢「じゃあまあ、いきましようか」

悟空「そうだな」

そう言つて二人は魔理沙の待つてゐる神社の庭へと向かつた。

魔理沙「遅いぜ、霊夢」

外ではすでに魔理沙が準備運動をしながら待つてゐた。

魔理沙「お前が最初に瞬間移動の修行をしたいつていったんだから、もっと、早く出て来いよな」

魔理沙がぐちぐちと愚痴をこぼした。

霊夢「はいはい、ごめんなさい」

霊夢はそんな魔理沙に適当に謝る。

魔理沙「心がこもつてない！」

そんな、霊夢の誤り方に対しふくれっ面になる魔理沙

悟空「おいおい、オメーら喧嘩はやめろよ」

そんな、二人を見て笑みを浮かべながら止めに入る悟空

魔理沙「だって、霊夢が〜」

まるで、子供のような言い訳をしようとする魔理沙

悟空「魔理沙、そんな事言っていると修行する時間がなくなっちゃうぞ」

霊夢「そうよ。早く瞬間移動使えるようになりたいんでしょ？」

魔理沙「む〜、なんか、納得行かないがわかったぜ」

魔理沙は、文句を言うのをやめた。

それを見計らった悟空は、

悟空「さて、茶番も終わったみてえだし、そろそろ修行始めつか！」

と二人に声をかけた。

霊夢「ええ！」

魔理沙「ああ！」

その声に対して二人は気合のこもった返事をする。

悟空「と、その前に……」

悟空が修行をする空気の中言葉を挟む。

魔理沙「どうしたんだぜ、悟空？はやく、瞬間移動の修行をしようぜ」

悟空をせかすように魔理沙がいった。

悟空「まあ、焦んなって魔理沙」

そんな、魔理沙を見た悟空は一旦、魔理沙を落ち着かせる。

悟空「まず、瞬間移動の練習をする前にあらかたの説明をするぞ」

そう悟空は、一番説明が難しい瞬間移動のやり方をやりながら教えるのではなく、やる前に教えようと考えたのである。

これは、すなわちそれほど瞬間移動が複雑であることも意味した。

二人もすぐさまその事を察した。

悟空「まあまず、瞬間移動で一番大切なのは、相手の気を読む事だ」

そう瞬間移動と言えばまずこれ悟空の使う瞬間移動はキビトなどの瞬間移動とは違い相手のいる（相手の気を感じる）場所でない瞬間移動は出来ないのである。

魔理沙「まあ、それなら私たちには問題ねえな」

霊夢「そうね。気を感じる能力はとくに私たちは習得しているしね」

そう霊夢達は、悟空との一番初めの修行ですでに気の読み方をマスターしている従ってこれは霊夢と魔理沙は大丈夫であった。

悟空「そして、次は気のコントロールだ。まあ、簡単に言えば気と体を一体化させる感じだな。気のコントロールは瞬間移動のエンジンみたいなもんでこれが出来なきや

話になんねえ」

そう悟空の言う通り気をコントロール出来なければエンジンのない車と同じように動くことが出来ない。

だが、

魔理沙「これも大丈夫だな」

霊夢「ええ、そうね」

とあっさりと言葉を返した。

そうこの二人は気（魔法）のコントロールが大切な界王拳と魔法拳をマスターしている。

すなわち、もうすでに気のコントロールも完璧なのであった。

そう考えると今までしてきた修行は瞬間移動にとつて大いに役立っているのである。

しっかりと今までの努力は繋がっているのであった。

悟空「ああ、おめえらの言う通りこれはおめえらならでえじようぶだ。ついでに、オラが子供になってすぐの時は体が小さくなつたせいで上手いこと気と体を一体化させれず出来なくなつちまつたことがあるぞ。て、まあ、そんな事は置いといて3つ目だ。ちなみにおめえ達に足りねえのもこれだぞ」

どうやら、次に説明する奴がまだ霊夢と魔理沙にとって足りていないものらしい。

一体、それはなんなのか！

霊夢（私たちにたりていないものか）

魔理沙（一体、なんなんだ？）

二人は少しワクワクしながら悟空の言葉を待った。

そして！

ついでに悟空が口を開いた。

悟空「おめえ達に足りてねえものは、ズバリ。集中力だ」

悟空は、少し集中力の部分を強めに言う。

しかし、それを聞いた霊夢と魔理沙はポカーンとしていた。

それもそのはず、魔理沙はともかく霊夢の集中力はかなりのものであり普通の人とは

比べものにならないのだから。

霊夢「悟空、私自分で言うのも何だけど結構、集中力ある方よ」

霊夢は、悟空にそう質問した。

悟空「ああ、そんな事はオラも分かってんぞ」

霊夢「じゃあ、どうして？」

霊夢は、更に質問を重ねる。

すると、「うくん」少し悟空は考え込んでしまう。

「どうやら、説明方法に困っているようだ。」

悟空「うくん、説明の仕方があつてはるかかわかねえけどよ。瞬間移動をする時の集中力は普通に集中するんじゃないやなくて、そうだな〜例えばばめちやくちや強え奴と戦えてワクワクしながら真剣に戦つてると見たいな明るく集中するって感じだ」

悟空が訳も分からない例えをした。

勿論、霊夢はそれを聞いてなおさら頭が混乱する。

無理もない悟空の説明があまりにも理解しづらかったのだから。

「だが！」

「わかるぜ」

## 瞬間移動の特訓開始! 第85話

「わかるぜ」

突如 周りに響き渡る声

そう、この口調からして恐らく彼女の声であろう。

霧雨魔理沙の声!

悟空と霊夢はすぐさま魔理沙の方を振り向く。

霊夢「わかるってまさか、今聞いた意味のわからない説明の意味がわかったの?」

霊夢がキョトンとした表情で魔理沙に尋ねた。

そんな霊夢の質問を聞き魔理沙は手でグツトをつくる。

霊夢「それじゃあ、ちよつと 分かりやすく説明しなさい。楽しく集中するって意味を」

霊夢が魔理沙をせかすように言った。

それを聞いて魔理沙は霊夢にこう言う。

しかし、そのセリフは少し予想外のものであった。

魔理沙「霊夢 お前このまえ神様と戦った時どんな気分だった?」



魔理沙は質問を質問で返した。

霊夢「はっ？ そんな事聞いてなにになるのよ？」

魔理沙の質問に疑問を持つ霊夢

魔理沙「いいから、教えてくれって」

しかし、至つて魔理沙は真剣な眼差しをしていた。

霊夢もその魔理沙の目を見て質問に答えることにした。

霊夢「どうって言われてもめっちゃくちや強くて世の中上には上がいるんだなあって  
思ったぐらいよ」

魔理沙「それだよ！」

霊夢が言葉を使い終えるのとほぼ同時に声を上げる魔理沙

霊夢は、えっ、と言葉をこぼし呆然としてしまう。

魔理沙「お前、世の中上には上がいるとわかった時、きつと自分もこうなりたい相手  
が同じ幻想郷の住人なら私だつてつてそんな事を考えただろ？」

霊夢「まあ、そうね」

魔理沙「瞬間移動も同じなんだよ。自分もきつと出来るはず、きつと出来るそんな感  
じの事を考え、なおかつ、リラックスし一気に集中する。これが瞬間移動をするために  
必要な集中力じゃないのか？」

魔理沙がズバリっといった感じで悟空の方をみる。

悟空「嗚呼、なんとなくだがそんな感じだ。瞬間移動はただ単に意識を集中すれば出来るもんじゃなく。出来ると信じて集中する。まるで、強え相手と戦ってその相手みたいに強くなりたいって思うみたいにな」

魔理沙の説明は説明の苦手な悟空が思っていた事をそのまま訳したかのような見事な説明であった。

霊夢「なるほどねえ。ただ、集中するんじゃなく出来ると信じて集中するか……。魔理沙 あんたたまには役に立つじゃない」

悟空の説明の意味が理解出来なかった霊夢にとって今の魔理沙の説明は瞬間移動を覚えるにあたって大いに近道になった。

魔理沙「だろ」

少し威張った顔をする魔理沙

しかし、その顔はすぐさまに逸れる。

何故かというと、

魔理沙「て、たまにはってどういう事だぜ」

そう霊夢が中途半端に魔理沙をデイスったことに対して魔理沙はツツコミを入れたのであった。

靈夢「冗談よ。冗談」

少々苛立つている魔理沙に対して獸を落ち着かせるように手を前後に動かして魔理沙をおとなしくさせる靈夢。

魔理沙「まったく。せつかく教えてやったのに」

魔理沙がブツクサ文句を言う。

靈夢「ごめんってば」

魔理沙に謝る靈夢

その時！

悟空「おめえら一体、いつになったら瞬間移動の練習を始める気だ？」

いいあつている二人の会話の間に入るように悟空は言った。

魔理沙「そうだな。そろそろ始めるか」

悟空の言葉を聞いた魔理沙は少し落ち着き冷静になった。

靈夢「そうね。時間もだんだんと過ぎてきたし」

靈夢も魔理沙同様に落ち着き真剣な表情を浮かべる。

少し沈黙の空間が流れる。

そして！

悟空「それじゃあ、始めるぞ。まず、お前たち指を額に当てるんだ」

悟空が元気のある声を上げる。

「どうやら、今から、本格的に瞬間移動の練習の開始のようだ。」

霊夢と魔理沙は悟空に言われた通り額に指を当てる。

悟空「よし、とりあえず まあ」

そう言つて10mぐらい距離をとる悟空

悟空「とりあえず、オラの気を読み取ってくれー!!」

距離をとった悟空は霊夢と魔理沙に声が届くよう少し叫び気味に言う。

霊夢「わかったわー!!」

魔理沙「わかったぜー!」

2人は悟空同様大きな声で悟空に返答した。

そして!

霊夢「……………」

魔理沙「……………」

2人は、額に指を当てながら悟空の気を感じとる。

悟空「いいぞ、いいぞ」

2人の気を読む感じまでを見た悟空はそう言葉をこぼす。

悟空「よし!今だ!さっき言ったみたいに集中するんだ!!」

タイミングを見計らった悟空は2人に告げる。

霊夢「……………」

魔理沙「……………」

2人の表情は何一つ変わらないが2人は一気に集中力を上げた。

その集中力は、先程 説明したように出来ると信じて一気に集中力を高めるものであった。

しかし、

霊夢「……………」

魔理沙「……………」

2人は1ミリも動く事はなかった。

霊夢「うはあくく」

一度 集中力を切る霊夢

それに合わせて、

魔理沙「う、ううく」

魔理沙も集中力を切り全身の力を抜いた。

悟空は、一度 霊夢と魔理沙に近寄る。

そして、こう告げた。

悟空「失敗みてえだな」

その言葉はかなりの重りがあつた。

霊夢「なんですよ。今、さっき言った通りにしたわよ」

瞬間移動を失敗した霊夢が少し焦りの表情がみえた。

魔理沙も霊夢と同じような表情を浮かべる。

そんな、2人を見て慰めがわりにこう言う。

悟空「多分だけど まだ、おめえ達は瞬間移動に慣れていないだけだと思うぞ。こん

な、感じてやってればきつといつか出来るはずだぞ！」

## 瞬間移動マスターへの道 第86話

あれから、3時間後……

霊夢「やつぱり、そう簡単には出来ないか……」

魔理沙「ああ、少し瞬間移動のことを甘く見過ぎたみたいだな」

少々、怒りの交じった声で言う霊夢と魔理沙

そう、彼女達は、あれから3時間 休憩無しで瞬間移動の修行をし続け集中力が落ちて来てしまったのである。

悟空は、いち早くその事に気がつき霊夢達にこう言った。

悟空「おめえ達、さつきよりも集中力が落ちてんぞ」

その声は、少し霊夢と魔理沙のことを心配しているような優しさの感じられる声であつた。

霊夢と魔理沙はその言葉を聞き ふっ と我に帰る。

どうやら、自分達の感情が不安定になっていることに気づいたようだ。

霊夢「いけない、いけない、私とした事が少し焦つちやてみたいね」

そう言い軽く深呼吸する霊夢

同様に魔理沙も「たしかにそうだな。時間はまだまだあるんだ気楽に行こうぜ」とい  
い深呼吸をする。

どうやら2人とも感情が安定したようだ。

霊夢「そうね。私達少し焦ってた見たい。魔理沙の言う通り時間はまだまだあるし落  
ち着いて頑張りましよ」

そう言つて霊夢と魔理沙は再び黙り込み集中力を高めようとする。

その時！

悟空「ストップだ。おめえたち」

急に悟空は声をあげ霊夢と魔理沙を止めに入った。

霊夢と魔理沙は、その急な声に驚き、

霊夢「なによ、悟空」

魔理沙「どうしたんだぜ？」

と悟空に尋ねた。

悟空は、一度2人との距離を詰める。

そして、こう告げた。

悟空「今日の修行はここまでだ」

その言葉は実に軽いものでありながら霊夢達の心に深く突き刺さった。



霊夢「はあ？」

思わず素っ頓狂な声を上げる霊夢

おそらく、悟空の言った言葉が以外すぎたのであろう。

魔理沙「どうしてだよ」

霊夢の声に対してほぼ間を空ける事なく魔理沙は言った。

恐らく2人とも悟空の言葉が納得出来ないのである。

霊夢「まだ、始めてから全然時間が経ってないじゃない。それなのにどうして？別に

体力も使ってないし」

霊夢が少し焦りながら悟空に文句を言う。

しかし、悟空の返答は簡単なものであった。

悟空「それが原因だ」

その言葉は、あっさりと霊夢と魔理沙に届く。

しかし

霊夢「えっ？」

霊夢は、少し困惑する。

どうやら、悟空の言葉の意味がわかっていないようだ。

魔理沙「どういことだ悟空？」

霊夢の声に続くよう魔理沙が尋ねる。

悟空「おめえ達、自分では気づいてねえかもしれないねえけど会話の中に焦りがあるんだ」

霊夢「焦り？」

霊夢が悟空の言葉の一部をリピートする。

悟空「ああ、そうだ」

霊夢「でも、それが一体？」

悟空に質問を重ねる霊夢

悟空「さつきも言ったる瞬間移動は集中力が命だ。生半かな感情のままやっても逆に

感覚が狂って逆効果になっちまう」

悟空は、そう2人に説明をした。

霊夢「なるほどねえ」

魔理沙「たしかに私たちは今少し焦っちまってる。このままやっても絶対にできな

いってわけか」

2人は、悟空の簡単な説明を理解した。

いや、簡単だからこそ2人は理解できた。

2人は顎に手をやり少し考える体制をとる。

どうやら、このまま修行を続けるかどうか悩んでいるようだ。

悟空に止められたもののやはり今の2人にとって修行は日課1日でも欠かしたくないものなのである。

霊夢「うーん」

魔理沙「うーん」

考え込む霊夢と魔理沙

どうしても修行を中断することに納得出来ない2人

悟空はそんな2人をみてどうするべきか考える。

そして、ある決断をした。

悟空「よし、じゃあ これからしばらくは 朝は瞬間移動の練習 昼は瞬間移動にも

関わる気のコントロールが重要な界王拳と魔法拳の強化にするか」

悟空の考えは、結構 まとまっており霊夢と魔理沙もその意見に同意した。

霊夢「それ良いわね」

霊夢は、思わずそう言葉をこぼす。

いや、霊夢だけではない魔理沙も

魔理沙「それ良いな」

と悟空のアイディアを褒める。

悟空「よし、そうと決まれば今からは界王拳と魔法拳の修行をすつぞ」  
悟空は気合のこもった声で霊夢達に告げた。

霊夢「えええ！」

魔理沙「おう！」

2人もその掛け声に合わせて気合を入れなおす。

どうやら、本場に今から界王拳（魔法拳）の修行に切り替えるようだ。

霊夢「て、私たち界王拳と魔法拳 完ぺきに使いこなしてるけど一体なんの練習をすれば良いのよ」

霊夢が思わず悟空にツッコミを入れた。

そう、よくよく考えてみれば2人はもう界王拳（魔法拳）を使いこなしてる今更練習することなんてなかったのである。

だが、2人は界王拳も魔法拳も完ぺき一体なにを練習するのであろうか。

と、その時、魔理沙が呟く。

魔理沙「そんなの決まってるだろ！界王拳と魔法拳を超えた技を作るんだよ！」

魔理沙は、目を輝かせながらそう言った。

霊夢「それいいわね！私も界王拳を超える技を覚えて見たかったし」

霊夢も魔理沙の意見にはノリノリである。

しかし！

悟空「ダメだ！」

悟空は、2人の喜びを遮るように言った。

魔理沙「ダメってどういうことだよ。悟空から界王拳と魔法拳の修行って言ったん

じゃないか」

魔理沙が不満そうな声で悟空に言った。

悟空「オラはあくまで界王拳と魔法拳の修行って言ったんだ。例えば、すぐに倍率の高い界王拳（魔法拳）を出せるようにするとか、倍率を30倍ぐらいまで耐えるようにするとかだ」

霊夢「でも、それよりやっぱり新しい界王拳を超える技を覚えた方が効率いいんじゃない？」

霊夢が悟空の言葉に反するように言う。

悟空「いや、今 おめえ達は新しい技 瞬間移動の修行をしてる。なのに、さらに新しい技なんて覚えようとしたらこんがらがっちゃうって逆効果だ」

悟空のその口調は少し厳しいものであった。

霊夢と魔理沙は少し呆然とする。

「どうやら、悟空の言葉が心に響いたようだ。」

魔理沙「それもそうだな」

悟空の意見に同意する魔理沙

霊夢「そうね」

それに続けて霊夢も悟空の意見に同意する。

「どうやら、悟空の考えが伝わったようだ。」

## 界王拳を我が物に！ 第87話

朝の瞬間移動で集中力を使い果たしてしまった霊夢&魔理沙は、気分転換も入れて界王拳（魔法拳）の修行に変更した。

魔理沙「それじゃあ、始めるか！」

『バキッ』

地面に落ちてる木の枝を踏む魔理沙

そして、それと同時に気を溜める体制を取っていた。

魔理沙「魔法拳10倍だ!!!」

『ボウッ』

魔理沙のその雄叫びと同時に大きな光輝くオレンジ色のオーラ魔理沙を包んだ。

悟空「ひえ〜、魔理沙なんか前より魔法拳の高倍率を早く出せるようになってんじゃ

ねえか？」

大きく光輝くオレンジ色を見上げながら悟空は、そう呟く。

魔理沙「へへへ、実は私も霊夢と一緒に結構、裏で魔法拳の修行をしてたんだぜ」

魔理沙がニツと笑ったような顔でそう呟く。

そして、霊夢も「へく、あんたも結構努力してるのね」と言葉をこぼしつつ気を溜める体制をとる。

そして、

霊夢「界王拳10倍よ!!」

『ボウツ』

その瞬間、霊夢の周りにも色は違うが魔理沙と同様に大きな光輝くオーラが現れた。

悟空「ひえく、霊夢おまえも一瞬で界王拳を10倍まで上げれんのかく」

思っていた以上の2人の成長ぶりに驚きを隠せない悟空

悟空は、この瞬間この2人 界王拳の修行いらなかつたんじゃねえかとも思うほどであつた。

霊夢「で、悟空」

その時、霊夢が悟空に声をかける。

悟空「なんだ、霊夢？」

その言葉に対して返答する悟空

霊夢「さつき倍率を上げる修行やすぐに高倍率を出す修行とかいつてたけど具体的に  
はどんな修行がいいのかしら？」



そう霊夢の言う通り悟空のいった奴を鍛えるのは確かに大切だが具体的にはどのような修行をすればいいか2人は知らないのである。

悟空「そうだな」

顎に手を当て少し考える悟空

恐らく、悟空もまさか霊夢達がここまで界王拳を使いこなしてるのは想定外だったのであろう。

悟空「そうだ！」

その時、急に悟空が声を上げる。

どうやら、いい修行方法を思いついたようだ。

霊夢「なにになに？」

悟空の「そうだ」と声に対してせかすように言う霊夢

悟空「まあまあ、焦んなって 取り敢えず2人とも一度、界王拳（魔法拳）を解いてくれ」

2人に要求を出す悟空

2人は、一度 悟空の言う通り界王拳（魔法拳）を解いた。

『ヒュウん』

『ヒュウん』

霊夢「言われた通り解いたけど。一体、どうすればいいの?」  
界王拳を解いた霊夢が尋ねる。

しかし、悟空の返答は、以外ならものであった。

悟空「おめえ達、倍率無し<sup>の</sup>界王拳と魔法拳を使ってくれねえか?」

悟空が2人にそう言った。

勿論、その言葉に霊夢と魔理沙が疑問を持たないわけがない。

霊夢「え、それなら10倍の方が修行にいいんじゃないの?」

魔理沙「そうだけ、悟空。なんで、わざわざ体に負担を少なくするんだ?」

霊夢と魔理沙は、疑問に思ったことを悟空にぶつける。

しかし、悟空は、「まあ、やってみてくれ」とだけ言葉を返し後は何も言わなかった。

霊夢と魔理沙は、しぶしぶ悟空の言う通り普通の界王拳と魔法拳を使う。

霊夢「界王拳」

魔理沙「魔法拳」

とくに倍率のない普通の界王拳（魔法拳）を発動した2人

霊夢「悟空、これでいいの?」

再度、確認を取るように尋ねる霊夢

恐らく、今となつては長期間耐えられる程度の界王拳（魔法拳）を使うのか疑問なので

あろう。

だが、その疑問も次の悟空の一言で全てはらされるのであった。

悟空「ああ、それでいい。そして、3時間そのままだ」

霊夢「3時間ずつこのままねえ。って、ええ!!」

ノリツツコミのように驚く霊夢

いや霊夢だけではない魔理沙も同様に驚いている。

魔理沙「悟空、ずっとこのままずっと魔法拳を使ったままにしろってことだよな？」

確認を取るように魔理沙は尋ねた。

悟空「ああ」

悟空は、魔理沙にそう相槌を返す。

霊夢と魔理沙は一度顔を見合わせて苦笑いした。

霊夢「まさか、こんな修行方法を思いつくなんて」

悟空「実は、オラも昔 スーパーサイヤ人を完全に自分のものにするためにずっとスーパーサイヤ人の状態をキープして生活してたんだ。おかげでオラは今スーパーサイヤ人になつても通常状態とほぼ同じぐれえの体力で動ける」

魔理沙「ははは、よくこんなこと思いつくぜ」

魔理沙は、感心したように悟空の顔を見る。

悟空「まあ、初めのうちは少しきついかも知んねえけど慣れば楽だから頑張れよ2人共!」

気合いのこもった声で告げる悟空

霊夢「わかったわよ! やってやるわ!!」

悟空の声に続き霊夢も気合いのこもった声を出す。

魔理沙「まったく、とんだ修行方法だぜ」

そう言いながら ふっ と笑う魔理沙

どうやら、この修行に満更でもないようだ。

悟空「ついでにだけど別に体は動かさなくていいぞ。あくまで界王拳に対しての耐久力をつけるだけだからな。別に縁側に座ってるだけでもいいぞ」

そういつて悟空は神社の縁側に腰をかけた。

霊夢と魔理沙も悟空に続き縁側に座る。

勿論、界王拳と魔法拳をした状態で。

ここから、霊夢と魔理沙の界王拳（魔法拳）の耐久力の修行が始まったのであった。

〈1時間後〉

魔理沙「ぜえぜえぜえ」

霊夢「ぜえぜえ」

流石の霊夢と魔理沙も動かないとはいえ息がみだれ始めた。

逆にいえばそれだけ、界王拳（魔法拳）の状態を普通と同じように使いこなすのは、難しいと言うことである。

ここに来て2人はこの単純そうな修行の苦しさを理解するのであった。

→更に1時間後→

霊夢「くっ！」

魔理沙「ぐっぐぐ」

苦しそうな表情が霊夢と魔理沙に浮かび始める。

どうやら、この修行思ってた以上にきついようであった。

→そして、ついに合計3時間後→

悟空「よし、3時間たったぞ」

悟空が霊夢と魔理沙にそう言葉をかける。

その瞬間！

『ヒュウん』

『ヒュウん』

瞬時に界王拳（魔法拳）をとく霊夢と魔理沙

『バタンッ』

『バタンッ』

そして、間を空けることなく縁側に倒れこんだ。

霊夢「はあはあはあはあはあはあ!!!」

魔理沙「はあはあはあはあはあはあはあはあ!!!!」

息が荒れる2人

どうやら、この修行 単純そうでかなりしんどいようだ。

## 新たな異変の足音 第88話

界王拳（魔法拳）の3時間 耐久をした霊夢と魔理沙は体の筋肉が悲鳴をあげていた。

霊夢「はあはあはあはあはあ」

魔理沙「はあはあはあはあはあはあ」

激しく息を切らしている霊夢と魔理沙

どうやら、この修行思っていた以上にきつかったようだ。

霊夢「くっ、体中の筋肉がミシミシいってるわ」

縁側で寝転がりながら言う霊夢

魔理沙「ああ、かなり体力は使うと思っていたがまさかここまでとわな」

霊夢の言葉に続くよう魔理沙も言った。

悟空は、そんな霊夢と魔理沙をみて、

悟空「まあ、この修行は最初の方はきついかも知んねえけどよ。慣れてくれば案外

簡単な修行になっぞ。実際、オラもスーパーサイヤ人でやった時そうだったしな」

と声をかける。

恐らく悟空は自分の経験をもとにした上で霊夢と魔理沙にこのような言葉を掛けて

いるのであろう。

勿論、霊夢と魔理沙もそのことには気づいていた。

その時！

霊夢から思いもよらぬ発言が飛び出した。

霊夢「と、そんな話は置いといて悟空つきはどんな修行をする？」

悟空「えっ!?!」

魔理沙「えっ!?!」

霊夢のその衝撃な一言に開いた口が塞がらない悟空と魔理沙

それもそのはず今、霊夢と魔理沙は界王拳（魔法拳）の耐久が終わってまだ3分ぐら

いしか休憩していないのだから。

流石の悟空もその言葉に対して反論の意見を述べる。

悟空「何言ってるんだ霊夢。おめえ達は今 界王拳の耐久をしたばかりじゃねえか。

今、次の修行なんてしたら体がぶっ壊れちまうぞ」

魔理沙「そうだが、霊夢。流石のお前でも今 次の修行に移ったら流石に体がぶっ壊

れちまうぜ」

魔理沙も悟空に続いて反論を述べる。

それは、恐らく霊夢のことを心配してるからこそ出た言葉であろう。



しかし、霊夢もなかなかの強情ぶりで、「なぐに、言ってるのよ。私は全然疲れてないわよ」

そう言いながら霊夢は縁側から立ち上がった。

霊夢「ほくらね。全然普通でしょ」

そう言いながら軽く動き回る霊夢

その時！

『バタンッ』

霊夢は地面に倒れこんでしまった。

悟空「ほら、言わんこつちやねえ。そんな、体で無理すつから」

そう今となつては霊夢も魔理沙もふつうに立っているだけでもかなりギリギリの状態程度の体力しか余っていなかったのである。

悟空は、そんな霊夢に近づき小さな声で再びこう告げる。

今日の修行はここまでだ　と。

流石の霊夢も今のこの状況では悟空の言うことを断ることが出来るわけもなく。

霊夢「わかつたわよ」

と言い意地をはるのをやめた。

そのセリフを聞いた悟空は小さな体で霊夢を持ち上げ神社の中へと霊夢を運んだのであった。

そして、今日の修行を終えることにしたのであった。

ちなみに魔理沙もかなり疲れてたようなのでこの日は神社に泊まった。

ついでにこのあと神社の中で話し合った予定のだが、霊夢と魔理沙が瞬間移動をマスターするまではどうやらこの界王拳（魔法拳）の修行を続けることになった。

要するに瞬間移動はできるまで続けそのついでに界王拳（魔法拳）の修行もやるということである。

霊夢と魔理沙は、瞬間移動なんて簡単そんなの数日で終わるだろう。そう考えた。

しかし、現実はそんなに甘くはなかった。

（時は一気に進み半年後）

霊夢達は、あの日以来毎日 瞬間移動と界王拳（魔法拳）の修行を続けた。だが、思っていたよりも瞬間移動は難しくついに半年が経ってしまった。

霊夢「ついにあれから半年が経ってしまったわね」

霊夢が瞬間移動の修行をしている時にボソリと呟いた。

魔理沙「ほんと、それなだけ。まさか、半年経つても出来ないなんてな」

霊夢の言葉を聞いた魔理沙も思い返すようにそう呟く。

その時！

悟空「おい、おめえ達何やってんだ？」

少し離れた位置で瞬間移動の移動先役をする悟空が大きな声で霊夢達に尋ねた。

ちなみにこのころになると悟空も少し成長して霊夢と同じくらいの身長になっていた。

魔理沙「わりい。わりい。ちよつと話してただけだすぐに修行に戻るぜ」

そう言いながら魔理沙は、瞬間移動の構えを取る。

その顔は、いつにも増して真剣だった。

霊夢「そろそろ本当に瞬間移動のマスターをしないとね」

霊夢もいつにもない真剣な顔を浮かべる。

どうやら、2人とももうそろそろ完全させないといけないと思いはじめたのであろうと、その時!!

『ゴロゴロゴロゴロ』

その瞬間、地面に地響きが起こる。

## 緋想天編（前半）

## 博麗神社崩壊！ 89話

突如大きな音とともに神社に地震が起こった。

『ゴロゴロゴロゴロ』

魔理沙「う、うわわわわ」

急な地震に動揺したのか魔理沙は大きな声を上げる。

それもそのはず、この地震はたまに起こるような軽い地震ではなかった。

恐らく古い建物ぐらいなら壊してしまうほどのものである。

誰だつてこんな状況におかれたら戸惑ってしまうだろう。

しかし、この状況でも冷静な人物がいた。

霊夢「ちよつと、急いで飛ぶわよ！」

そうそれは霊夢である。

霊夢は、この状況で冷静かつ瞬時に空を飛ぶと言う判断をした。

理由は、説明するまでもないであろう。

霊夢と魔理沙、そして、悟空は舞空術を使い空へと逃げる。

魔理沙「ふく、ビビったぜ」

魔理沙が一息出す。

悟空「まさか、幻想郷で地震が起きつとわな」

霊夢「確かに珍しいわね」

そう言い霊夢は、険しい顔をした。

魔理沙はその霊夢の顔を見て瞬時に霊夢がなにを考えているか悟った。

魔理沙「おい霊夢まさかお前、異変とか言わないだろうな」

そう魔理沙の悟ったことは霊夢が異変とこの地震を考えていることである。

霊夢は、基本的にこんな真剣な顔になるのはそれぐらいしかないからであろう。

霊夢「まだ、確実にそうだとはいえ決めつけたわけじゃないけど、あくまで疑いがあるっただけよ。流石の私もたかだか地震ぐらいで……」

『ドンッ』

霊夢の声を遮るように大きな音が地面の方から聞こえた。

霊夢「えっ?」

霊夢は喋るのをやめ神社の方へ目をやる。

それに合わせるように魔理沙と悟空も神社に目をやった。

この時、霊夢は少しイヤな予感がしていた。

地震が起きてて神社がドンツそうこの状況どう考えてもそうである。

魔理沙「ありやりや」

神社に目をやった魔理沙が力が抜けたような声でそう呟いた。

悟空「こりや、大変だな」

魔理沙に続いて悟空も似たような声を出す。

霊夢「……………」

霊夢に関してはもはや空いた口が塞がらなかった。

その目には絶望　口には焦りからの震えが見られる。

『ゴロゴロ……………』

つと、そのタイミングでちょうど地震が収まった。

霊夢「……………」

地震が収まった後も固まったまま微動だにしない霊夢

魔理沙は、そんな霊夢を見かねて霊夢の肩に手をかけてあげ声をかけてあげた。

魔理沙「おい、霊夢。取り敢えず、一回　降りようぜ」

いつもよりも人一倍小さな声で言う魔理沙

恐らく精一杯　霊夢を気遣っているのであろう。

霊夢は、そのまま無言のまま地面に降り立つ。

そして、神社に目をやった。

もうここまでできて説明はいらないだろうが、そうさっきの地震で博麗神社が崩れたのである。

魔理沙「まあまあまあ、そう気を落とすなつて霊夢」

精一杯 霊夢を励まそうとする魔理沙

霊夢「別にいいわよ魔理沙。そんな無理に励まそうとしてくれなくても」

霊夢は、微かながら魔理沙に微笑む。

霊夢「起こったしまったことはしょうがない。神社は頑張つて自分で直すわ」

そして、ポジティブ発言をする霊夢

その霊夢には先程までの暗い表情は消えておりいつもの明るい表情に戻っていた。

と、その時!

悟空「なあなあ、魔理沙」

悟空が急に魔理沙に声をかけた。

悟空「博麗神社で地震が起こったけどお前ん家は大丈夫なんか?」

悟空のその言葉を聞いた瞬間 顔が青ざめる魔理沙

そうよくよく考えてみれば神社が崩れてしまうほどの大地震 魔理沙の家が大丈夫な確率は限りなくゼロに近いのである。



箒に飛び乗る魔理沙

魔理沙「霊夢すまねえ私ちよつと自分の家を見てくるぜ！」

そう一言だけ残し魔理沙は箒を走らせ……、その時！

霊夢「ちよつと待ちなさい」

魔理沙を止めに入る霊夢

一体、どうしたのであろうか。

そう思った次の瞬間

霊夢「私も行くわ」

なんと、霊夢も魔理沙の家を確認しに行くのである。

もちろん、このことに魔理沙が疑問を持たないわけではない。

魔理沙「何言ってるんだ霊夢？お前、今自分の神社で忙しいだろ？私についてきても時

間の無駄だぜ」

霊夢「確かにそうかもしれない。でも、確かめたいのよ」

魔理沙「確かめたい？」

霊夢の意味ありげな言葉に対しさらに疑問を持つ魔理沙

魔理沙「一体、何を確かめたいんだ？」

魔理沙が霊夢に尋ねる。

だが、恐らく魔理沙はもう大方予想がついてるであろう。一体、霊夢が何をいうか。そして、次の瞬間見事魔理沙の予想が的中した。

霊夢「そんなの決まってるでしょ!これが異変かどうか調べる為よ!」

その言葉には、迫力があり崩れた神社に響き渡る声であった。

魔理沙「でもよ?それって、無駄足になるかもしれないねえぞ?地震なんて低確率だがぶつうに起こるしよ」

霊夢「それでもいいわ。あくまで私の目的はこれが異変かどうか調べることだし」

霊夢は、真剣な表情でそう言う。

流星の魔理沙もそんな真剣な霊夢の言葉を抑え込むことが出来ず「わかったぜ。じゃあ、一緒に行こうぜ」と霊夢の意見を尊重するのであった。

魔理沙「悟空、お前も来るか?」

霊夢に続き悟空に目をやる魔理沙

どうやら、このノリで悟空も誘おうと考えたようだ。

悟空「うゝん、暇だろうしオラも行くぞ」

ここは流星、悟空と言うべきであろう特に考えることもなく簡単に了承してくれた。

霊夢「よくし、そうと決まれば早くいくわよ!」

霊夢がそう掛け声を2人にかける。  
そして、

『ビューーン』

『ビューーン』

『ビューーン』

3人は超高速で魔理沙の家へ向かったのであった。

## 魔理沙の家へGO 第90話

悟空、霊夢、そして、魔理沙は地震の影響で魔理沙の家が崩れてないかとそのついでにこれが異変であるかの調査を兼ねて魔理沙の家に向かっていた。

『ビューーン』

『ビューーン』

『ビューーン』

3人は、なかなかのスピードを出しながら空を飛行していた。

そんな、最中

魔理沙「そういういえば私ここ最近、神社に泊まってばかりで二週間ぐらい家に帰ってなかったな」

と魔理沙は呟いた。

そう実は、界王拳（魔法拳）の修行を始めてから魔理沙はほぼ毎日体がボロボロになり博麗神社に泊まることが増えていたのである。

霊夢「確かにそうね。あんた、最近博麗神社に泊まるのが癖になってるんじゃないの？」

ジト目で魔理沙の方をみる霊夢

おそらく、一人分 食事を作る量が増えた事に対しての軽い恨みのようなものである。  
う。

魔理沙「しよすがねえだろ。お前と違って私は毎日わざわざ博麗神社まで行ってるんだ。少し泊まったぐらいでそんな目するなよな」

霊夢の目に対して言葉で反論する魔理沙

だが、そんな魔理沙の言葉も次の霊夢の一言で全て論破されるのであった。

霊夢「あんたの少しは2週間に一回泊まらない日があるぐらいか！」

少し怒りの混じった声で言う霊夢

その言葉には迫力が詰まっており魔理沙も少し怯むほどであった。

魔理沙「しよすがねえだろ。私だって魔法拳で疲れてるんだから」

少し暗く寂しいような声で言う魔理沙

おそらく、これで霊夢の同情を誘っているであろう。

しかし、こんな簡単に同情する霊夢ではない。

霊夢「そんな、かわいそうな乙女みたいな反応されても残念ながら私は同情なんてしないわよ」

霊夢は魔理沙に対して冷たく当たる。

だがこれは、魔理沙に対しての嫌がらせではなく。

霊夢がすぐさまこれは魔理沙の演技だと悟ったからである。

これは、俗に言う長い付き合いってやつであろう。

魔理沙「ちつ、女心がわかってないぜ、霊夢は」

霊夢のあまりにも薄情的な言葉に対して拗ねた顔をする魔理沙

おそらく、これも霊夢の同情を誘った魔理沙の作戦であろう。

だが、しかし、次の瞬間これが裏目にでるのであった。

霊夢「はっ、私女よ！女が女心分からないわけないでしょ！」

凄じ剣幕で魔理沙に突きつける霊夢

恐らく、魔理沙の言葉が少しイラツときたのであろう。

まあ、それもそうだろう。

まるで、自分は男みたいな言い方を魔理沙にされたのだから。

魔理沙は、霊夢の剣幕に少しビビり

魔理沙「ご、ごめん、だぜ」

と少々震え声になる。

しかし、次の瞬間

霊夢「ふふ、冗談よ冗談」

霊夢は、満面の笑みを浮かべつつ魔理沙にそう告げる。

魔理沙「えっ？」

魔理沙は、一瞬 思考が追いつかず言葉に詰まってしまった。

そんな魔理沙を見て霊夢が魔理沙に告げる。

霊夢「あんたがなんか拗ねたような演技をするから私もあんたに合わせて怒った演技をただけよ。ふふふ」

少々笑いが混じりつつも最後まで説明をし終える霊夢

魔理沙「なんだよ。本当に霊夢が怒ったかと思っただじやないか！」

霊夢の演技に騙されたのが悔しかったのか今度は割とガチで拗ね出す魔理沙  
つと、その時

悟空「おい、おめえ達！」

悟空が急に霊夢と魔理沙に声をかけた。

霊夢「なに、悟空？」

急な悟空の言葉に対して疑問を持った霊夢

悟空「オラ行ったことねえからわかんねえけどよ。魔理沙の家って魔法の森つちゆうところなんだよ？」

霊夢「ええ、そうよ。でも、それが？」

霊夢は少し疑問を持ったような顔をする。

悟空は、そんな霊夢の顔を見て指を下に指した。

そして、こう告げる。

悟空「ここつてもう魔法の森じゃねえんか？」

その言葉を聞いた瞬間

霊夢「えっ！」

魔理沙「えっ！」

2人は、少し驚き同時に地面の方を睨みつけた。

そこには草木が茂森が広がっていた。

そう魔法の森である。

魔理沙「あはは、つい話しに花を咲かせちまつたぜ。悟空が言わなきや自分家通り越

すところだつてぜ」

じゃ感、笑いながら言う魔理沙

霊夢「本当にそうよ。悟空が言ってくれなきや危なかつたわ」

霊夢がボソリと呟く。

その時！

悟空「うん？うん？」



悟空が地面に顔をやりながら魔法の森を見渡していた。

この行動を不審に思ったのか魔理沙は悟空に尋ねた。

魔理沙「どうしたんだ、悟空？」

その言葉を聞いた悟空は魔理沙の方に顔をやる。

悟空「あ、いや、すんげえ広い森だけど魔理沙の家ってどこなんだと思つてな」

そう悟空が地面を見渡していた理由は、こんな広い森のどこに魔理沙の家があるのか疑問に思つたからであつた。

魔理沙「なんだそんなことか」

理由を知つた魔理沙は少し顔に笑みを浮かべこう言つた。

魔理沙「この森は私の庭みたいなものだぜ？」

少しいきつたような声を浮かべる魔理沙

だが、魔理沙の言う通りここは魔理沙の庭みたいなものそう簡単に迷子になつたりはしないのである。

悟空「ひえ、こんな同じ景色が広がるようなところが庭みたいなんか」

魔理沙の言葉であつけにとられてしまった悟空

そして、すかさずこの質問をした。

悟空「じゃあ、後どれくらいで魔理沙の家に着くんだ？」

魔理沙「えくと、今はここだから」

魔理沙は、悟空の言葉に対して考察を入れる。

しかし、魔理沙から返ってきた言葉は実に不安なものであった。

魔理沙「あー!!」

急に叫び声を上げる魔理沙

霊夢も悟空もその急な叫び声に驚きを隠せない。

霊夢「どうしたのよ魔理沙？」

霊夢は、魔理沙に叫び声の理由を訪ねた。

すると、魔理沙は急に「ははは」と笑い出す。

そして、こう告げた。

魔理沙「わりい。通り過ぎちまった」

## 深まる異変の謎 第91話

霊夢「通り過ぎたって……しつかりしなさいよ魔理沙！」

怒鳴るように言う霊夢

まあ、無理もないであろう。

もし、今起こっているのが異変だとすれば早く異変の主犯を見つけないと次は何をし  
てくるか分からないのだから。

魔理沙「す、すまん」

魔理沙も勿論、そのことは理解している。

魔理沙は、すぐに霊夢に謝りユーターンして自分の家へと向かった。

悟空と霊夢もすぐさまその後を追う。

〜1分後〜

魔理沙「あそこだ！」

魔理沙は、飛びながら木などが比較的生えていない場所を指差した。

どうやら、魔理沙の家にとどり着いたようだ。

『トン』

『トン』

『トン』

足音と共に魔理沙の家の前に降り立つ3人

その前には、古臭い一軒家が立っていた。

悟空は、そんな家を見上げる。

悟空「ひえ、魔理沙ってこんなところに家あのか！」

思わずそう声をこぼす悟空

それもそのはずその家の横には木々が生い茂っておりどう考えても生活の環境ではなかった。

しかし、魔理沙はその言葉を聞きツツコミをいれる。

魔理沙「おいおい、そんなこと言ったら博麗神社だって森の真ん中にあるじゃねえか」

そうその通りである。

普段は長い階段の上にあるから分かりづらいが実際は、博麗神社も森のど真ん中にあるのである。

悟空「ハハハ、そういうえばそうだな」

悟空は魔理沙の言葉を聞き博麗神社も森のど真ん中ということを思い出した。

2人は、少し話に花を咲かせてしまう。

と、その時

霊夢「ちよつと、2人とも世間話しは後でいいかしら？」

霊夢が2人に声をかけた。

そうここに来た目的は単に遊びに来たわけではない。

魔理沙の家の確認に来たのである。

魔理沙「あ、悪い悪い霊夢そういえば地震の影響の確認だったな」

そう言いながら魔理沙は、家の周りをぐるつと一周する。

どうやら、問題があるかどうか確認しているようだ。

魔理沙「うくん」

家の周りをくまなくチェックする魔理沙。

その結果！

魔理沙「おい、霊夢。私の家 地震の影響は受けてないみたいだぜ」

なんと、魔理沙の家は崩れるどころか地震が起きた痕跡も残っていないかった。

しかし、それは不自然なこと神社が壊れるほどの大地震 魔理沙の家が崩れていない

わけがないのである。

霊夢「じゃあ、さっきの地震は一体？」

頭に疑問符を浮かべる霊夢

その時！

悟空「おい、2人共」

悟空が2人に声をかけた。

霊夢「何、悟空？」

魔理沙「どうしたんだ？」

急な悟空の声に返答する悟空。

一体、悟空はどうしたのであろうか。

悟空「おかしくねえか」

悟空は、鋭い目をし真剣モードで霊夢と魔理沙にそう言った。

だが、霊夢と魔理沙はポカーンとする。

何故かというと勿論これである。

魔理沙「一体、何がおかしいんだ？」

そう、2人には一体何がおかしいのかまだ、分からないのである。

そんな、2人を見兼ねて悟空はこう言った。

悟空「周りをよく見てみる」

その言葉と同時に左右に首を動かして周りを確認する素振りを見せる悟空。

霊夢と魔理沙も悟空に合わせて左右を見る。

しかし

霊夢「別に変わったことはないけど？」

そこには、木々や植物が生い茂るだけであつた。

どこを見ても怪しい点なんて見つからない。

そんな、霊夢と魔理沙を見かねて悟空は更にヒントを出す。

悟空「もつと、よく見てみるよ。ほら、植物が濡れてるじゃねえか」

霊夢「濡れてる？」

魔理沙「濡れてる？」

2人はハモリながら悟空の言葉を取りピートする。

そして、再度 植物に目をやった。

魔理沙「確かに2週間前に帰って来た時よりも植物に水つけがあるけど？」

霊夢「こんなのただ雨が大量に降っただけでしょ」

霊夢の言う通り植物達が濡れている理由などただ雨が降っただけ、そう、ただ雨が降っただけであろう。

霊夢「あつ！」

と、ここでやつと霊夢も不自然な点に気づいたようだ。

魔理沙「なんだ、霊夢？」

その急な霊夢の声に反応する魔理沙

この反応からを見るにどうやら魔理沙はまだ、気づいていないようだ。

そんな、魔理沙を見兼ねて霊夢がこう言う。

霊夢「魔理沙、あんた2週間ぐらい博麗神社に泊まってたわよね？」

霊夢が魔理沙に質問をするように言う。

急な霊夢の質問に魔理沙は、困惑しつつも「え、ああ、確かに泊まってたぜ」と答えた。

霊夢「その時、雨って降ったかしら？」

曇り掛けるように魔理沙に尋ねる霊夢

魔理沙は、顎に手を当て思考する。

そして、この答えにたどり着いた。

魔理沙「いや、一度も降ってなか………あっ!!」

ここにきてやっと魔理沙も気づいたようだ。

霊夢「やっと、気づいたみたいね。そう、ここの植物の濡れ具合を見る限り物凄い雨が長時間降ったことがわかる。でも、博麗神社ではそんな雨は一度も降っていなかったわ。てことは、ここ数日ここだけが大雨に見舞われたってことね。まるで、神社で起きた地震みたいに」



そうその通りである。

ここにそんな大雨が降ったのなら神社の方にも多少の雨は降るはず、しかし、実際はそんな雨は一ヶ月ぐらいは降っていない。ここだけが大雨と言うのはおかしいのである。

悟空「地震といい。大雨といい。これは、ほぼ確定みてえだな」

悟空がボソリと呟く。

魔理沙「ああ、そうだなこれは、」

霊夢「異変ね!!」

魔理沙と霊夢が言葉が繋がるようにそう言った。

そう悟空の言う通り決められた位置だけの雨　決められた位置だけの地震これは、もはや異変以外の何者でもないであろう。

霊夢「そうと決まれば早く異変の主犯を見つけろわよ!!」

霊夢がそう2人に掛け声した。

その時!

『ポツポツポツ』

## 謎の緋色の雲? 第92話

『ポツポツポツポツ』

霊夢、魔理沙、そして、悟空の上から水滴が落ちてきた。  
そう雨である。

霊夢「やだ、雨」

急な雨に不満を覚える霊夢

そうなにを隠そう霊夢は雨が大ッ嫌いなのであった。

魔理沙「とりあえず、私の家に入ろうぜ!」

霊夢の不満そうな顔を見た魔理沙はすぐさま霊夢に言った。

恐らく、霊夢が雨を嫌っていることを知っていたのであろう。

霊夢「そうね」

流石の霊夢もこの意見にはすぐに乗る。

まあ、それもそのはずである。

普通、雨が降っている中外にいたいと思う奴は、まあ、まず、いない。

それは、世間一般的なものである。

そうして、霊夢と魔理沙は家の中へ歩を進めるのであった。  
その時！

悟空「おい、霊夢、魔理沙。ちよつと待ってくれ！」

そそくさと家の中に逃げ込もうとする霊夢と魔理沙を悟空は驚きのある声を出し止めた。

声の反応から察するに恐らくだが何かを見つけたのであろう。

霊夢と魔理沙はそう思考する。

霊夢「どうしたの悟空？」

魔理沙「また、何が見つけた？」

2人は早く家に入りたいという気持ちを押し殺し一度、悟空の方へ振り向いた。  
しかし、そこにいた悟空は、「……………」と無言のままただ空を見続けていた。

いや、正確には霊夢と魔理沙に上を見ると合図を出しているのであろう。

霊夢と魔理沙は恐る恐る空を見上げる。

そして、そこにある光景を目の当たりにするのであった。

霊夢「こ、これは？」

魔理沙「なんか、見たことあるような無いような」

霊夢と魔理沙は、少し頭の回路を巡らす。

そうそこにはなんと緋色の雲が広がっていたのであった。

霊夢「緋色の雲か……」

それを見て少し考察する霊夢

その時!!

『ザーツザーツザーツ』

急に雨の勢いが霊夢の考察を邪魔するように勢いを増した。

霊夢「わ、ちよっ!」

急な雨の増加に慌てる霊夢

実は、巫女服 結構、寒いようだ。

霊夢「雲は後!家に入りましょ!!」

そう言つて、1人家の中に直球する霊夢

悟空と魔理沙もすぐさまその後を追つた。

『ドンッ』

魔理沙の家に無事3人とも入り込み勢いよく扉を閉める悟空

魔理沙「とりあえず、雨が止むまでここで待機だな」

魔理沙が仕切るようにそう言つた。

霊夢「そうね。それまで、あの雲の考察でもしまししょうか」

そう言いながら魔理沙の家の中に置いてあつた椅子に座り込む霊夢。魔理沙も霊夢の席の机越しでついに置いてある椅子に座り込む。

しかし、以前として立ちすくんでるものが一名いた。

魔理沙は、それに気づき声をかけた。

魔理沙「おい、悟空もとりあえず座れよ。まだ、椅子余つたんだからさ」

誘うようにいう魔理沙。

そう悟空は霊夢と違い一度も魔理沙の家に来た事がなかつたのでどのように行動すれば良いか分からないのである。

だが、悟空が固まっている理由はそれではない。

そう、悟空はそんなことより遥かに気になる事があるようだ。

悟空「魔理沙つて、案外家散らかつたんだな」

あまりにも女の子にはとても失礼な言葉であるが流石は悟空

そこは、ストレートに言うのであつた。

しかし、それは無理もないことであつた。

何故なら、魔理沙の家はほぼ足の踏み場もなく。

そこら辺に魔法の道具を置きっぱなしで挙句の果てにはキノコまで落ちていた。

普通、家の中にキノコが落ちてることは、まあ、ないであろう。

魔理沙「おい、悟空！そういうことは気づいても言わないのが常識だろ！」

悟空の気遣い0の言葉にムツとなる魔理沙

まあ、確かに始めてきた家に来た男の言葉が「散らかってるな」だったら結構、心に  
来るであろう。

悟空「わ、わりい」

流石の悟空も今のは酷すぎたと思わずに誤った。

魔理沙「まったく。今度からは気をつけろよ」

悟空が案外すぐに謝ったので魔理沙の怒りも薄らいだ。

まあ、実際問題 これだけ家が汚い方が悪い気がしない気しないのだが……。

と、その時！

霊夢「その2人。もういいかしら？」

霊夢が悟空と魔理沙に声をかけた。

恐らく、この2人はどうでも良いことで話が盛り上がっているので早くして欲しいの  
であろう。

悟空「あ、ああ」

これ以上、霊夢を刺激してはいけなさと感じた悟空は速攻で椅子に座り込む。

霊夢「まったく。余計なことで時間を使うんだから！」

霊夢が少し怒った口調でそう言った。

魔理沙「まあ、まあ、そんな怒るなよ霊夢。とりあえず、さっきの緋色の雲の考察にでも戻ろうぜ」

怒っている霊夢を抑えるように言う魔理沙

そして、少しでも機嫌を損ねないようにすぐに先程の話に戻したのであった。

魔理沙「えっと、まず、あの緋色の雲だけど前にどつかで似たような見たことある気がするんだよね？」

魔理沙は、顎に手をやり少し考察した。

さっきの霊夢といい今の魔理沙のセリフといいどうやら2人とも似たような物を見た事があるようであった。

2人の人物の意見が揃うことからそれは間違えないであろう。

だが、肝心のその似たのが思い出せない。

2人は、悩みに悩んだ。

と、その時！

悟空「もしかしてだけど、あれじゃねえか？ほら、あのコウモリみてえな奴」

悟空が口を開けた。

そして、悟空の言葉を聞いた瞬間、2人は ハッ となる。

魔理沙「そうだ。あの吸血鬼のレミリアって奴だよ！あいつ確か前に赤い霧を出してただろ！」

魔理沙は、自身満々でそう言った。

そうかつて異変を起こしたレミリア・スカーレットは幻想郷の空を霧で赤く染めたのである。

今の緋色の霧はそれによく似ていた。

だが、しかし！

霊夢「違うと思うわ」



## 真犯人を求めて！ 第93話

霊夢「それは、違うと思うわ」

霊夢がポツリと呟いた。

それはレミリアはこの異変とは無関係と呟いた事にもなる。

勿論、魔理沙がその言葉に対してツツコミを入れないわけがない。

魔理沙「なに言ってるんだよ霊夢。この状況どう考えてもあの吸血鬼野郎が犯人だろ  
！」

魔理沙は、口調を強めていった。

無理もない。折角、手がかりをつかんだのにそれを霊夢に否定されてしまったのだから。

霊夢「まあまあ、少し落ち着きなさい」

霊夢は、そんな魔理沙の表情を瞬時に読み取り魔理沙をなだめる。

魔理沙はその言葉を聞いて一度落ち着きを取り戻した。

霊夢「やっと落ち着いたみたいね」

魔理沙の落ち着きを確認する霊夢

魔理沙「ああ」

魔理沙は、そんな霊夢に対して相槌で言葉を返した。

霊夢「よし。じゃあ、説明するわよ。何故、あの吸血鬼が関わってないか」

霊夢がそう言い説明を始めた。

霊夢「まず、1つ目あいつはあくまで霧であつて雲ではないのよ」

まず、霊夢の1つ目の説明はそう雲と霧の違いである。

もし、今のこの雲がレミリア達の仕業であれば何故、わざわざ霧から雲に切り替えたのであろうか。と言うことになってしまふのであつた。

魔理沙「確かに言われてみればそうだな。だけど、それだけでは、あいつらが犯人ではないと言い切れないんじゃないか」

魔理沙もその事には納得した。

しかし、魔理沙の言う通りこれだけじゃ情報不足である。

ただ、悟られないように雲に変えた可能性も十分考えられないこともないのであつた。

霊夢「ええ、確かにこれだけじゃなんとも言わないわね。でも、魔理沙思い返してみなさい。どうして私達がここに来たのかを」

その言葉を聞いた魔理沙は顎に手をあてる。

魔理沙「どうしてって、博麗神社で地震が……あつ！」

魔理沙が何かを閃いたかのように言葉が途切れた。

魔理沙「そうか、霊夢 そう言う事か！」

そして、霊夢が言いたい事を魔理沙は理解したようだ。

霊夢「ええ、その通りよ。2つ目の理由はあいつらに地震を起こす力が無いということ。そして、仮にあつたとしても地震を起こした事に対して何一つとしてメリットがない。その2点を踏まえればあいつが犯人の確率は限りなくゼロに等しいのよ」

その霊夢の説明は根拠をしっかりと捉えておりとても正確なものであった。

魔理沙も悟空もその説明には納得せざるおえない程に……。

悟空「なるほどな、確かにそう考えつとレミリア達の可能性は確かに薄い。いや、むしろゼロだ」

どうやら、3人の中からはレミリアに対してのうたがいは消えたようだ。

しかし、それと同時に問題も出てきてしまった。

その問題とは、もはや、言うまでもないであろう。

魔理沙「じゃあ、結局 この異変は一体誰が起こしてるんだ？」

そうレミリアの疑いが晴れたのと同時に手がかりも消えてしまったのである。

それは、霊夢と魔理沙そして、悟空をさらに困惑させてしまった。

その時!

霊夢「やつぱり、自分たちで探しに行くしかないか」

霊夢がポツリとそう呟く。

魔理沙「探しにいくって手がかりをか?」

魔理沙が確認を取るように霊夢に尋ねた。

霊夢「ええ、そうよ。少なくとも今ここで悩んでるよりはマシだろうしね」

そう言いながら窓を見つめる霊夢

『ポツポツポツ』

雨は、先程よりは弱くなっていったがまだ降っているようであった。

霊夢「見た感じあと数分でやみそうだし、やんだらすぐに行くわよ!」

雨の調子を判断した霊夢は、すぐさま後雨がどのくらい降るのか予想し魔理沙と悟空に告げた。

く10分後く

窓からは太陽が光を刺してきた。

霊夢「どうやら、やんだみたいね」

霊夢が外の様子を確認する。

魔理沙「ああ、綺麗に雲がなくなってるぜ」

魔理沙も霊夢と同様に窓の景色をみる。

そして、雨がやんだのを確認した。

霊夢「よいしょっと」

椅子から立ち上がる霊夢

霊夢「それじゃあ、行くわよ！異変の犯人探しに」

気合いのこもった声で言う霊夢

魔理沙と悟空もその霊夢の気合いの合わせて！

悟空「おう！」

魔理沙「ああ!!」

と相槌を打った。

『ガチャ』

扉を開ける霊夢

そこには、さつきとは打って変わってしっかりと太陽が顔をのぞかせていた。

魔理沙「いや〜、見事に晴れてんな〜」

空を見上げながらいう魔理沙

それもそのはず、数分前に凄雨雨が降ってきたのにすぐにやんでしまったのだから。

霊夢「それじゃ、行くわよ!」

そう言いながら青空のもと飛び去る霊夢

魔理沙と悟空もすぐさま霊夢の後を追うように空へと飛んだ。

悟空「おい、霊夢。異変の主犯を探すのはいいけどよどうやって探すんだ?」

ふと、飛びながら呟く悟空

確かに悟空言う通りこのままヤケクソでとんでもそう簡単には異変の犯人を見つけることは出来ない。

悟空は、霊夢に何か考えがあるのか尋ねたのである。

魔理沙「確かにそうだな。霊夢、一体どこに向かうんだ?」

悟空に合わせて言う魔理沙

魔理沙も悟空の言葉を聞き自分たちが何処へ向かうのか気になったのであろう。

霊夢「そうねえ」

霊夢もどうやらそこまでは考えておらず少し考え混んでしまう。

と、その時!

霊夢「え?」

霊夢が何かに視線を向けた。

## 謎の雲目指して！ 第94話

霊夢「あそこよ！」

霊夢が視線を一点に集中させながらそう告げた。

悟空と魔理沙は「あそこ？」と少し疑問に思いながら霊夢の視線の先に目をやった。

そこには!!

『ぐおお〜』

と溢れんばかりの緋色の雲が集まっていた。

その雲の量は、例えるならば溢れた水のように山の頂上に密集している。

まあ、要するに怪しいのである。

魔理沙「ありやりや、まさか、探しにいかうとしたら既にあんなに怪しい場所がある  
とわな」

魔理沙は、少しつままないようなラッキーなような複雑な気持ちになった。

魔理沙は、少し異変を楽しんでる面もあるでこのような簡単な感じは嫌なのであ  
う。

霊夢「まあ、これはラッキーと捉えて早く行きましょ！」

そんな魔理沙の心を読み取ったのか、霊夢は魔理沙にそう声をかけた。

「なんやかんやいったも最近、霊夢も異変を楽しむようになって来てしまっているのだから、魔理沙と心情は一緒なのであろう。」

「前までは異変をめんどくさがっていたのに随分と変わったものである。」

「何故こうなったかは、もはや皆も分かるであろう。」

悟空「あつち確か妖怪の山つちゆうとこだな。よし、速く行くぞ!二人とも」

「そう、彼のせいである。」

「霊夢と魔理沙の師匠になった彼だからこそ戦いの楽しさを二人に伝えることが出来たのである。」

「異変を楽しむのは、どうかと思うが……………」

霊夢「ええ!」

魔理沙「ああ!」

悟空の言葉に対して気合のこもった声を返す二人

『ビューン』『ビューン』『ビューン』

そして、3人はその声と共に速度を上げ雲の元へ向かうのであった。

〈数分後〉



霊夢「よし、やっと着いたわね」

霊夢がそう2人に声をかけた。

そして、山を見上げる3人。

魔理沙「やっぱり、この上だけ雲は晴れてないみたいだな」

そう魔理沙の言う通り山の頂上は緋色の雲で覆われており以前訪れた時と比べ山に迫力が増していた。

だが、こんな迫力で恐る霊夢と魔理沙ではない。

彼女達にとってはこんな日常茶飯事大したことでは無いのである。

幻想郷とは、実に不思議な場所であり誰が何をするかわからない恐怖に毎日襲われているのである。

悟空「よし、行くぞ！」

悟空が2人にそう掛け声をかけた。

その声はいつにも増して気合が込められており霊夢、そして、魔理沙を引き立たせるエンジンにもなった。

そして、3人は山の頂上を目指し空高く上がるのであった。

数分後

霊夢達は無事 緋色の雲の所まで登りつめた。

霊夢「やっと着いたわね」

霊夢は、そう言いながら一呼吸出す。

そして、周りの光景を見渡した。

霊夢「まったく、本当に凄い雲ね視界が曇って奥まで見えないわ」

その光景は、霊夢の言う通り雲に覆われており視界がぼやけていた。

要するに死角が多くなっていたということだ。

悟空「油断するなよ。霊夢、魔理沙 急に敵が襲い掛かってくつかもしんねえからな」

その光景を見た悟空は、霊夢と魔理沙に身構えるように命令をだす。

まあ、それもそうであろう。

今の自分達の状況は敵の本拠地に飛び込んだも同然いつ襲われても不思議じゃないのである。

霊夢「わかってるわよそれぐらい」

そう言いながら周りに集中する霊夢

その時!

??? 「おや? 天狗ではない。河童でもない。幽霊でもない。にんげんだなんて……。山

の上まで人間が来るなんて珍しいですわ」

何やら不気味な声が聞こえた。

その声に対して警戒を入れる悟空、霊夢そして、魔理沙。

霊夢と魔理沙は、声の発信源が分からず少し戸惑ってしまふ。

その時、「上だー」急に叫びながら2人にそう告げる悟空

霊夢と魔理沙は、悟空の言う通りすぐに上を見た。

そこには、紫っぽい髪の色をした女性がプカプカと浮いていた。

霊夢は、すぐさまその女性に対して「何者！」と口調を強めていった。

その言葉を聞いた女性は、クスツと笑った後、霊夢達にこう告げた。

??? 「私の名前は永江衣玖と申します」

女性は、霊夢に対し礼儀正しく返答をした。

見た目的にも異変を起こしそうな雰囲気のない女性であったがこの雲の中から出て

きた謎の存在 霊夢ら更に質問を重ねた。

霊夢 「衣玖って言うのね、じゃあ、次の質問をするわ！」

そういつた直後、衣玖に対して指を指す霊夢

霊夢 「貴方は、何者なんでこんな雲を出したの？」

どうやら、霊夢はこの雲を出したのはこいつで間違いないと考え衣玖にこの雲の事に

ついて尋ねたようだ。

衣玖「別に私は悪いことをしようとしてこんな雲を持ってきたわけじゃないわ。私達はね異変を知らせに来たのよ」

その言葉を聞いて一瞬 言葉が詰まる霊夢達

それもそのはず、異変の主犯だ!と思つた奴が異変を知らせに来たと言うのだから……。

そんな、霊夢達の心を察したのか衣玖が説明を始めた。

衣玖「私達は異変を伝えるために空を泳ぐ竜宮の使いなの」

悟空「竜宮の使い?」

悟空がリピートするように尋ねる。

衣玖「ええ、そうよ。私達は竜宮の使いとして、色々な自然現象を伝えるためにいろんなところを回っているの」

衣玖がコツコツと説明を続けていく。

と、その時!

霊夢「自然現象って…、一体どうやって伝えるのよ」

霊夢が衣玖の説明に割り込むようにして言った。

確かに霊夢の言う通りである。

ただ空を泳いでるだけで自然現象を伝えられるわけがない。

霊夢は、どうやらまだ、衣玖の事を疑っているようだ。

霊夢「それに、この雲を出したのはあなたでしょ？ 私達はそれを異変だと思ってるんだけど？」

## 緋色の曇の眞実 第95話

衣玖「この雲が異変……。ふふふ」

衣玖は靈夢の言葉聞き少し笑みをこぼした。

その笑みはまるで靈夢を見下したかのように靈夢の心に入り込んでくる。

そして、それが徐々に靈夢に怒りの感情を浮かべさせた。

靈夢「何笑ってんのよ！」

靈夢の眼光が鋭くなる。

その迫力はまるで目の前にいる獲物に襲いかかるトラのような感じを漂わせた。

そんな靈夢の表情を見かねた衣玖は靈夢に囁いた。

衣玖「顔が怖いわよ」

その声はなんの動揺も感じられなく靈夢が怒っていることに対してまるで無関心だった。

靈夢「悪かったわね！この顔は生まれつきよ！それより早く説明しなさいよ。この雲がなんなのかを！元より私達はこの雲目的でここに来たんだから」

表情はまだ怖わっているものの少し心を落ち着かせた靈夢は雲の説明を要求した。

衣玖「分かったわよ。私達が自然現象を伝えに来たって事はさつき話したわよね」  
魔理沙「ああ、それで世界を回ってるんだよね」

衣玖の言葉に対して温厚な言葉を返す魔理沙

だが、この後に続いて霊夢が「そんな、話はどうでもいいわ！それより早く雲の説明をしなさいよ！」と少し尖った口調で衣玖に言った。

どうやら霊夢の苛立ちはおさまっていないようだ。

しかし、そんな霊夢とは対照的に衣玖は、「気が早いわよ。順を追って説明するから少し待ちなさい」と優しい口調で言葉を返した。

それを聞いた霊夢はこれ以上イライラしているのはみつともないと感じ取り軽く深呼吸し自分を落ち着かせた。

衣玖「落ち着いたみたいね」

霊夢の深呼吸を見た衣玖は霊夢が落ち着きを取り戻したことを確認する。

霊夢「ええ、少し焦ってたみたいだけど落ち着いたわ。話の続きをして頂戴」  
どうやら、霊夢は完全に落ち着きを取り戻したようだ

まあ、霊夢が怒っているのもよく考えれば普通なのである。

今まで住んできた思い出の神社が壊れてしまったのだから。

どんな人でもきつと自分の家が壊されたら怒りを持つはず霊夢が怒るのも不可解な

ことではないのである。

衣玖「じゃあ、さっきの続きをするは、私達は世界を回ると同時に今みたいに緋色の雲を出したり緋色の霧を出したり、時には、空全体を緋色に染める時もあるわ。私達は数々の緋色の物を使い分けそして、その種類で一体何が起こるのかを教えているのよ」

話を聞く限りどうやら本当に衣玖は敵ではないようだ。

ただ単に自然現象を伝えに來ただけ何一つとして幻想郷に害を与えていなかったのである。

霊夢「なるほどねえ。種類を使え分ける事によって何が起こるのかを区別してる。よく、考えられてるわね」

さっきの言葉を聞いた霊夢は完全に衣玖にたいしての敵意は消え去った。

どうやら衣玖のことを信頼したようだ。

だが、しかし、こうなってくると少し疑問が出て來てしまった。

悟空「じゃあ、緋色の曇って一体何を伝える奴なんだ？」

悟空が衣玖に尋ねる。

そうよくよく考えてみれば確かにその通りである。

衣玖は今この地に緋色の曇を広げた。



という事は、つまり幻想郷で自然現象が起こるという事である。

悟空達は、その返答を待った。

しかし、その返答は実に以外なものであった。

衣玖「緋色の曇は大地を揺るがすと言う意味よ」

その言葉を聞いた瞬間、悟空、魔理沙、そして、霊夢が硬直状態になってしまう。

そして、数秒間 無言の空間が流れたのであった。

魔理沙「おい、今なんて言った？」

この無言の空間を終わらせるべく魔理沙は確認を取るように再度 衣玖に尋ねた。

衣玖「緋色の曇は大地を揺るがすもの まあ、要するに地震のことよ」

今度は直接 地震と言う単語を口から吐き出す衣玖

その言葉を聞き霊夢達は確信をもった。

霊夢、魔理沙、悟空は一度顔を見合わせる。

それと同時に3人とも首を同時に縦に振る。

どうやら、3人とも考えたことは同じのようだ。

3人は、再度 衣玖の方へと顔を向けた。

そして、衣玖にこう告げる。

霊夢「地震ならもう起こったわよ！」

衣玖「えっ！」

霊夢の発言が予想外だったのか衣玖は素っ頓狂な声を響かせた。

衣玖「もう、地震が起こったですって！」

再度 確認をとるように確かめる衣玖

霊夢「ええ、起こったわ！てか、最初はそれについて調べてたしね」

霊夢に確認をとる衣玖であったが勿論 霊夢の解答が変わるわけではない。

衣玖は少し考える表情を浮かべた。

そんな表情を不審に思ったか霊夢が尋ねた。

霊夢「ちよつと、ちよつと、そんな険しい表情を浮かべてどうしたのよ？」

衣玖の顔を覗き込むように尋ねる霊夢

衣玖「いや、少し不自然なのよ」

霊夢「不自然？」

衣玖の言葉をリピートするように尋ねた。

衣玖「ええ」

衣玖は相槌を打ちすぐに集中し自分だけの空間に入り込んだ。

そんな、衣玖を見て疑問に思った霊夢は直接 衣玖に尋ねる。

霊夢「一体、何が不自然なのよ？」

その言葉を聞いた衣玖は視線を霊夢の方に移す。

そして、霊夢の目を見た。

霊夢のあまりに真剣そうな目に誘われたか衣玖が事情を説明し始めた。

衣玖「実はこの曇 自然現象がおこったら消えるのよ。でも、さつき地震があつたのに全然曇が変えようとしな。一体、どうして……」

そうこの曇は、地震を知らせたための曇なので本来起こつた後ならば曇は消えるはずなのである。

だが、現に今も曇は消えることなくプカプカと浮き続けている。

衣玖はこの事について考えていたのであつた。

## 試し打ち? 神社の地震の謎 第96話

衣玖「うゝん」

霊夢達が体験した地震が何なのか考察する衣玖

しかし、いくら考えようともその疑問はこの曇のようにはれることがなく衣玖を更に惑わすばかりであった。

だがしかし、そんな疑問を打ち払うかのように彼が囁いた。

悟空「てことは、やっぱり誰かが起こしたんじゃないかねえか?」

そうその彼とは勿論、悟空である。

悟空も衣玖と同様に自分で考察を入れておりその結果やはりこれが一番近いと判断したのであった。

霊夢「誰かがやったか?。まあ、たしかに今のこの状況それが一番確率が高いわね」

霊夢も悟空の意見に賛成するように回答する。

まあ、たしかに言われてみればそうである。

本来ならもう消えるはずの曇が消えていない。

つまり、その本来の地震が来る前に誰かが博麗神社で異変を起こしたということであ

る。

確かに考え戻せば博麗神社にだけ地震が起こった時点でどう考えても自然現象ではないのである。

何故なら、地震は、広範囲にわたって起こるもの綺麗に博麗神社だけ地震が起こりました。なんて、ことは まあ、まずないであろう。

衣玖「誰かか……」

悟空と霊夢の言葉を聞いた衣玖は少しばかり考える動作を入れた。

そして、次の瞬間何かを思いついたように大きな声を出した。

衣玖「まさか!!」

その声には、驚きが混じっていた。

どうやら、犯人に心当たりがあるようだ。

魔理沙「なんだ、なんだ、急に大きな声だしやがって!」

どうやら、魔理沙は衣玖の急な驚きの声に逆に驚いてしまったようだ。

まあ、確かに目の前で人が大きな声を出したら驚くのも普通であろう。

衣玖「あら、ごめんなさい」

衣玖は、すぐさま軽い謝罪を魔理沙に行う。

と、その時。

霊夢「ちよつと、ちよつと、そんなんどうでもいいから早く今何が分かったか教えなさい。まあ、どうせ犯人のことだろうけど」

ここは、流石霊夢と言うべきであろう。

すぐさま、衣玖が犯人に検討があると予想し衣玖に問いただしたのだ。

衣玖「あら、よく私が犯人に見当があるとわかりましたね」

霊夢「あの状況であんな反応されて分からない方がおかしいっての！」

霊夢は、なにやらイライラしたようすでそう回答する。

まあ、霊夢にとってはその犯人は神社をぶつ壊したいいわば許せぬ相手。

1秒でも早くその犯人について知りたいのである。

衣玖「まあ、まず落ち着きなさい。そのあと私の思ったことを全て話してあげるから」  
この場ですぐに名前を言っても恐らく霊夢は興奮状態のまま冷静さが戻らないそう考えた衣玖は一度話を止めたのであった。

今日は常に怒りの感情を出してしまう霊夢。

その感情はちよつとやそつとのことでは、無くなることもない。

何故なら、自分の思い出を壊されたのだから。

自分が住んで来た所とは、言い換えれば自分を育ててくれた場所であるのである。

きつと、どんな人でも自分が生まれてからずっと住んでた場所を壊されればたちまち

怒りが込み上がり怒り悲しむであろう。

霊夢は、衣玖の言う通り自分自身を落ち着かせる事にした。

恐らく霊夢も自分自身で気づいているのである。

今日の自分はいつもと違ふと……。

（5分後）

霊夢「おっけ。落ち着いたわ」

どうやら、本当の本当に落ち着きを取り戻したようだ。

悟空もそんな霊夢を見て「お、やっといつもの霊夢らしくなったな」と呟いた。

恐らく、今の今まで怒りで顔が硬直していたのである。

衣玖「どうやら、落ち着きを取り戻したみたいですね。それでは、説明します。貴方

達が体験した地震はなんなのかを……」

衣玖の顔つきが真剣な物へと変化し霊夢達の顔をみる。

衣玖「まず、貴方達が体験した地震は恐らく試し打ちよ。まだ、本当の地震ではない

わ」

魔理沙「試し打ちだつて！」

衣玖「ええ、そうよ。あの方が恐らく試し打ちしたのよ」

霊夢「あの方？」

衣玖のあの方と言う言葉に対して敏感に反応する霊夢

霊夢「あの方って一体誰なの？」

そして、すぐさまあの方という人物の名前を尋ねた。

まあ、確かにあんな言い方をされては誰だって気になるであろう。

衣玖「それは、もう直接あの方の方へ行っただ方が速いわ。あの方はこの曇を更に上  
がった先にいます」

だが、衣玖の回答はどうやら直接行っただ方が速いとのこと。

霊夢「わかったわ」

どうやら霊夢も自分達で行った方が効率がいいそう考えたようだ。

だが、それにおいて問題点が一つある。

それは！

魔理沙「あの方って奴の所に行くのはいいけどよ。本当にそいつが犯人って言い切れ  
るのか？もし、ただの濡れ衣になったら大迷惑だぜ？」

そうその問題とはそいつが本当に犯人かである。

これはあくまで衣玖の予想で話を進めただけ魔理沙はそれ相当の理由が無いのにあ  
の方という奴の所に行くのが嫌なのである。

衣玖「それは、大丈夫よ。こんな事をするのは世界であの方ぐらい」



魔理沙「そうか？それならいいんだけどよ」

衣玖がそこまで言うので魔理沙も衣玖の事を信じることにした。

衣玖「そして、本当の悲劇を止めるのもあの方」

ボソリと衣玖が呟く。

霊夢「ん？何か言った？」

その声を微かながら聞き取った霊夢は衣玖に尋ねた。

衣玖「いいえ、なにも。それよりもさつきも言ったけどあの方はこの曇の更に上にいるは行く準備が出来たなら早く向かいなさい」

## 雲の上を目指して！ 第97話

霊夢 「言われなくても向かわせて貰うわ」

そう言いながら霊夢は上に顔を向ける。

霊夢 「この上ね」

そして、霊夢はポツリと雲を見ていった。

恐らく、この異変もいよいよ終盤だという思いが込み上がってきているのであろう。

『ビューン』

そして、霊夢は雲の上を目指して飛び立った。

悟空と魔理沙もすぐさま後を追うように飛び出す。

さあ、いよいよ異変の主犯の元に向かう霊夢達。

一体、この先に待ち受けているのは何者なのだろうか！

魔理沙 「おい、霊夢」

空の上を目指している時に魔理沙声をかけた。

霊夢は、すぐさま魔理沙の方へと顔を向け「何、魔理沙？」と尋ねる。

魔理沙「相手は地震を起こすとか無茶苦茶な事が出来るやつだぞ！お前に勝てるのか？」

魔理沙は、少し不安げな目をしている。

もつと言えばその目自身も勝てるのかと訴えているような感じであった。

霊夢「あんた前にも似たような事言つてたわよね。大丈夫きつと勝てるわよ」  
だが、霊夢は魔理沙とは打つて変わつてとてもポジティブ思考。

負けることなどまるで考えていないのである。

魔理沙「でもよ。もしもつて事があるじゃねえか」

霊夢「もう、うるさいわね。そんなに怖いんなら帰ればいいじゃない！」

霊夢は、魔理沙のうじうじした表情にしびれを切らした。

魔理沙「私はお前を心配してやってんだ。どうせお前よくも私の神社を！とか言つて正面から突撃するだろ」

そう魔理沙は、しつかり霊夢が異変の主犯の元に着いたら何をするのか考察し霊夢のことを心配させているのである。

霊夢の性格上 恐らく霊夢は正面から突撃すると予想して……………。

霊夢「あのねえ。いくら私でもよくわからない相手に正面から行くわけないでしょ！

たぶん……」

魔理沙「ほら、そのたぶんってなんだよ!」

魔理沙が霊夢のボソリと言った言葉も聞き逃さずしつかりとツツコンでいく。

ちなみにこの口喧嘩は結局数分続いたのであった。

霊夢「あくもう面倒くさい。分かったわよ! 無茶な行動はしないわ! これならいいでしょ!」

魔理沙「ああ、真正面からいくなんて言語道断だからな」

この口喧嘩の結果、霊夢は魔理沙に負け無茶な事をしない事を誓わされたのであった。

まあ、これは魔理沙が霊夢の事を思つてのこと霊夢もきつとその事を分かっているからこそいう事を聞いたのであろう。

なんやかんや霊夢も魔理沙の事を思っているのである。

悟空「おい、お前達話はもう終わりみたいだぞ」

ちようど2人の口喧嘩が終わったタイミングで声をかける悟空。

言葉から読み取るに恐らく目的地が目の前なのであろう。

霊夢と魔理沙は周りを見渡した。

その時！

霊夢「へ〜〜」

魔理沙「お〜〜」

霊夢と魔理沙が声を上げた。

その声は恐らく感激を意味する声。

一体、霊夢と魔理沙は何を目撃したのであろうか。

それは……。

霊夢「綺麗な景色ね」

そうそれは景色であった。

霊夢達は知らない間に雲の上まで上がっており、そこからは雲と雲から少し出た山の頂上みたいな部分がいくつか見えた。

その景色は実に幻想的で霊夢と魔理沙に感動を示したのである。

悟空「多分ここが衣玖がいつてた地震を起こした張本人がいるとこだな」

そう言いながら悟空が近くにあった山の頂上みたいなところに足を下ろす。

霊夢と魔理沙も悟空に次いで地面に足を下ろした。

周りを見渡す霊夢

霊夢「上から見上げる感じで見たらきれいだっただけどいざその目線の高さでみると殺

風景な所ね」

魔理沙「でも、私はこういう所嫌いじゃないぜ」

なんだか、急にこの場所の評価をしていく霊夢と魔理沙

霊夢「て、今はそんな事どうでもいいわ。早速、異変の主犯を探すわよ」

そう言つて異変の主犯を探すため歩き出す霊夢

しかし、悟空はそんな霊夢に対して「どうやら、そんな必要はねえみてえだぞ」と呟いた。

霊夢は、「え?」と言いながら悟空の方を振り向く。

そこには、少し首を上に向けていた悟空がいた。

霊夢と魔理沙はすぐさま悟空の目線の方向に目をやる。

そこには!!

??? 「ふふ、やっと来たようだね」

そこには青髪の少女がいた。

この少女は一体!

『スー』

『バタツ』

少女は地面に足をつける。

そして、霊夢達に近づいて来た。

霊夢は、その少女に対して視線を強める。

霊夢「あなたが異変の主犯？」

???「まあ、そんな所だな」

霊夢の元に近づいて来た少女は笑顔でそういった。

果たしてこの少女は一体!!

いよいよ異変も終盤だ!

## 異変の目的? 第98話

霊夢「あら、異変の主犯だつてあつさり認めるのね」

霊夢は近づいて来た少女に対して気合いのこもった声でいった。

しかし、少女はそんな霊夢の声にはうろたえることなくそれどころかニコツと笑顔を浮かべる。

その笑顔は恐らく喜びを表す笑顔、少女は霊夢達が来たことに対して喜んでいるのであろう。

???「ここで主犯であることを隠しても何にもならないだろう?それに私はお前たちが来るのを待ってたんだ!」

笑顔いっぱい顔で少女はそう告げる。

しかし、そんな笑顔な表情とは裏腹な表情で霊夢達は「えっ?」と声をもらした。待ってたとは一体どういうことなのだろうか?

そう疑問に思った魔理沙が少女に尋ねる。

魔理沙「おい、待ってただってどういう事だ?」

魔理沙は少女の言葉をリピートするように尋ねた。



すると、その言葉に食いついたか少女は舞い上がったような気分になり霊夢達にこう告げた。

???「ああ、そうさ！お前たち異変解決の専門家だろ？」

そういいながら少女はまるで霊夢達を挑発するかのような表情を浮かべる。

そう例えるならまるで小動物を追い込んだ人間のような表情。

おそらく、彼女は霊夢達を自分と平等の存在とはちつとも思っていないのだろう…。

霊夢はそんな表情を浮かべる少女に少し苛立ちをおぼえた。

霊夢「ええ、そうよ。けどそれがどうかした？」

霊夢が返答するときの声に若干怒りが混じる。

しかし、少女は鈍感なのかそんなこと一切気づくことはなかった。

それどころか、「そうか、やっぱり異変解決の専門家か！やっとなって来てくれたんだな！」

と急にキラキラした目を浮かべるありさまである。

話についていけない悟空、霊夢、魔理沙はボーゼンとなってしまうた。

霊夢「ちよつと、ちよつと、やっとなって来てくれたとかどう言う意味よ！」

話が遅れまいととっさに少女に尋ねる霊夢。

まあ、確かにこの少女さつきから自分のペースで話を進めているので第二者目線の霊

夢達では話についていけないのである。

??? 「意味なんかないわよ!ただお前達を待つてたんだよ!いつも異変解決ごっこをしているお前らをな」

霊夢 「はっ?」

魔理沙 「はっ?」

2人は思わず声をあげた。

いや、正確には少女が何を言ったのかイマイチ理解できなかったのであろう。

少女は確かに今、異変解決ごっこといった。

霊夢は少女に尋ねる。

霊夢 「ごっこってどう言うことよ!それに貴方なんで私達が異変解決を行なってることを知っているの?少なくともここには初めて来たはずよ?」

??? 「ふっふっふ」

すると、少女は少し不気味な笑みを浮かべる。

そして、説明を始めた。

??? 「実はだな私今までずっとお前たちのことを見てたんだ」

霊夢 「私達を見ていた?」

??? 「そうその変な男が幻想郷に来た時もそのあと起こった異変の時もずっとずっとお

前たちのことを見ていた。ちなみに見ていた理由は暇つぶしさ」

魔理沙「暇つぶし？」

???「そうさ、周りを見てみなよ」

霊夢達は少女に言われた通り周りを見渡す。

言うまでもないであろうが見えるのは雲ばかりでたまに山の先端が少し見えるくらいの景色ばかりであった。

???「どうだ？こんなところでただ単にいたら何にも面白くないだろ？だから、私はたまに地上を見て暇を潰していたってわけさ。ちなみにどうやって見てたかと言うとまあ、私の隠された能力という事にしておいてくれ。ついでに分かりやすく言えばお前たちがテレビを見る感覚だ」

今までの話をまとめるとこの少女はやることなく異変解決をしている霊夢達をどうやら覗き見してたようだ。

恐らく、異変解決にごっこをつけているのは霊夢達が遊んでいると考えたからであろう。

確かによくよく考えてみれば霊夢達は異変解決を辛く思いながらも楽しんでた。だからこそ第三者目線の少女は寂しかったのであろう。

自分だけが誰とも遊べないことが……

霊夢「なるほどね。読めたは、恐らく貴方はそれで自分も異変解決ごっこをやりたいとか思ってたわざと異変を起こしたってところかしら?」

??? 「大正解! いや、流石 博麗の巫女 わかってるな。そう私も遊びたいのよ。妖怪達が遊んでみたいに貴方達とき」

少女は自分の事を理解してもらえなかったからかなり喜んでるようだ。

しかし、霊夢は、「ふざけないで!」と言いながら不意に怒りの表情を表した。恐らく、少女がわざと異変を起こした事に対して腹が立ったのであろう。

よくよく考えてみれば霊夢の前にいる少女は神社を壊したまぎれもない犯人。霊夢が怒っても当然なのである。

自分の神社を壊した奴がこんなふざけた奴だとわかったらなおさら…。

??? 「な、なんだよ! あんなのただの試し打ちじゃないか! あれを見てみろ!」  
そう言いながらある場所に指指す少女

霊夢達は少女に言われた通りその方向に振り向く。

そこには!

霊夢「あ、あれは?」

## 緋想の剣！ 第99話

霊夢「あ、あれは？」

少女が指 指した方を振り向いた霊夢は不意に声をあげた。

その声は恐らく疑問と驚きによるもの。

一体、霊夢は何をみたのであろうか？

悟空と魔理沙も霊夢に続いて少女が言う方向を振り向く。

そこには！

そこには、謎の剣のようなものが地面に刺さっていた。

いや、正確には刺していたと言う方が正しいのであろうか。

少女は、その剣にゆつくりと近づき、そして、「よいしょつ」といい剣を持ち上げた。

霊夢「一体なんなのその剣は？」

霊夢が少女に問いかけた。

見るからに強そうなオーラがにじみ出ている剣。

疑問に思わない方が異常であろう。

??? 「これは緋想の剣、人の気質を丸裸にする剣よ。私はこの緋想の剣を緋色の霧を寄せ集めそして、地震を起こしたの」

話から察するにどうやら、この剣を使って博麗神社に地震を起こしたようだ。

そして、ここで霊夢があることに気がつく。

霊夢 「その剣で地震を起こせる。博麗神社の地震は試し打ち…。まさか、あなた!」

霊夢の顔に動揺の表情が浮かんだ。

その動揺は焦りによるもの…。

霊夢の額から汗がにじみ出る。

??? 「感がいいわねえ。流石、そうあなたの思ってる通りよ」

そう言つて少女は剣を振りかざす。

魔理沙と悟空は、「えっ?」っと声を上げ話についていけないようだ。

魔理沙 「おい、霊夢。さつきから何言つてんだ? 私たちにも説明してくれよ」

魔理沙が霊夢に説明を要求する。

無理もないさつきから霊夢と少女2人で話が進んでおり魔理沙と悟空がおいでいられるのだから。

霊夢は、そんな魔理沙に対して簡単に説明をすることにした。

霊夢「よく聞きなさい魔理沙。あいつはあの剣を使い博麗神社に地震を起こした。こ  
こまでは、分かるわね」

魔理沙「ああ、まあ、そこまでなら分かるぜ？ だけど、おまえが動揺している意味が  
イマイチピンとこねえ」

霊夢「あいつは、さつきそれを試し打ちっていったのよ。よく考えてみて試し打ちが  
あるってことはどういうことは……」

魔理沙「え、そりゃあ、本番が……、あつ！」

どうやら、ここで魔理沙も気づきたようだ。

霊夢「ええ、そうよ。試し打ちがあるってことは本番があるってこと……。多分、あ  
いつは次に本番つまり大地震を起こすつもりなのよ！」

霊夢は目を鋭くし少女を睨みつける。

???「いや、私の思ってること全て読みとるとは流石としか言いようがないね。そう  
あなたの言う通り私は大地震を起こすつもりよ。この幻想郷を脅かすほどの大地震を  
ね」

少女は若干の笑みを浮かべながらそう言った。

恐らく本気でやる気なのであろう。

しかし、勿論、霊夢達がそんなことを許すわけがない。

霊夢「なめきったものね!言っておくけどあなたが本気でそんなことをするのなら私はあなたを倒す!天人だろうが変人だろうが私の仕事は一つ!異変を起こす奴を退治するだけよ!」

霊夢の声には気合がこもっており本気の眼差しで少女を睨みつけた。

少女は、そんな霊夢の表情を見つめる。

???「そうそう!その意気込みが欲しかったのよ!私はいつまでも退屈な天界ぐらしは嫌なのよ!」

霊夢「ふん、どうやら、戦いの準備は出来てるみたいね。いいわ、私が相手になってあげる。そして、そのあと神社の修理をやってもらおうわよ!」

そう言いながら霊夢は戦闘体制をとる。

少女も霊夢の体制に合わせて自分も構えをとった。

右手には剣を持っており迫力もなかなかのものであった。

魔理沙「おいおい、霊夢が戦うのか?」

とつさに構えをとった霊夢に魔理沙が口を挟む。

霊夢「当たり前でしょ。私はあいつに神社を壊されたんだから」



魔理沙「いや、でもよ。最近、私全然実戦で戦ってないじゃねえか」

霊夢「次、譲るから今回だけは私に譲りなさい」

戦闘体制をとっていた霊夢であったが何故か魔理沙ともめあいになり一度、戦闘体制を解く。

少女もその光景をみて、「えっ?」と思わず声をあげた。

まあ、それもそのはず今から戦うぞつてところで相手が喧嘩し始めたら誰だつて戸惑うであろう。

悟空「魔理沙、ここは霊夢に譲つてやったらどうだ? 霊夢はきつと博麗神社を壊されたことまだ根に持つてるはずだ。きつと、この戦いは霊夢にとつて特別な戦いのはずだ」

霊夢と魔理沙の口喧嘩をしているのを見た悟空は魔理沙に譲つてやれと言う。

悟空も分かっているであろう。

霊夢は博麗神社を壊された。いわば、この戦いは霊夢にとつて絶対に負けられない戦い。

ここで、自分や魔理沙が戦うべきではないと…。

悟空の言葉を聞いた魔理沙は渋々といった表情で「分かったよ」と告げ霊夢に戦いを

譲った。

??? 「喧嘩は終わった?」

1人取り残された表情はこちらの言い争いが終わった事を確認する。

霊夢 「ええ、待たせて悪かったわね。それじゃあ、始めましょうか!」

そう言いながら再び戦闘体制をとる霊夢。

??? 「どうやら、今度は本当に始めるみたいだね」

少女も霊夢と同様に構えをとった。

お互い構えをとり警戒し合う二人。

と、ここで霊夢がある事を思う。

それは、

霊夢 「そう言えばあなた名前は?」

そう今更ながら霊夢は少女の名前を聞いていなかったのである。

少女は軽く笑みを浮かべこう言った。

??? 「比那名居天子。ただの天人よ」

## 番外編

## 最強の邪念降臨!! 博麗の奇跡! 第100話【記念】

ここは幻想郷さまざまな種族が暮らす不思議な世界。

その種族を大きく分けると「人間」「妖怪」「神」と3つの種類に分けられる。

この物語はその中の妖怪と戦う人間、博麗霊夢、霧雨魔理沙、そして、幻想郷にやってきた小さな戦士 孫悟空の物語……。

く場所はこの世く

ここはあの世 この世を去ってしまった物達が送られる場所である。

そこでは、ある女性によって天国行きか地獄行きかが仕分けされていた。

??? 「貴方はただ自分の気分次第で数多くの人間を暗殺しましたね。これは、考える必要はありません。地獄行きです」

この閻魔大王の立ち位置の女性の名は四季・映姫・ヤマザナドゥ 特徴はなんといつてもこの緑色の髪の毛である。

死妖↑(死んだ妖怪の略)「は、おいおい? 閻魔様それはないぜ! 幻想郷では妖怪が人

間を襲う。そして、妖怪は人間に退治される。そうやって、バランスをとってるはずだ。それなのになんで俺が地獄なんだよ!」

どうやらこの妖怪自分が地獄行きになった事に対して納得がいかなきようだ。

まあ、自分が地獄行きになって異論しない方がおかしいであろう。

しかし、映姫にとってこれはもはや日常茶飯事

何故なら、地獄行きになった物は必ずこのような言い訳をするのだ。

映姫は、「はあ」と少しため息をついた後、慣れた口調で死妖に説明をする。

映姫「確かにそうよ。幻想郷はバランスをとらないといけないわ。でも、貴方がやった事はそんなんじゃないわ。ただの人殺しよ」

映姫は、ストレートにそう言った。

しかし、そんな事で死妖が納得するわけではない。

理由は、簡単、

死妖「はあ?人殺しが幻想郷のバランスをとることだろ!」

そう今映姫が言った事は何一つ回答になっていないのである。

死妖は映姫を強い眼光で睨みつける。

映姫は、そんな死妖をみて再び大きなため息をついた。

どうやら、反抗する死妖に対しめんどくさがっているようだ。

映姫「それじゃあ詳しく説明するわ。貴方は、まず、森に入ってきた人を狙って数多くの人を殺してきた。でも、貴方はその後、すぐに森の中に入り息を潜める。しかも、貴方が人を殺すときは大抵ほかの妖怪にやられむしゃくしゃしている時だけ。つまり、貴方はただのストレス発散の為だけにやってたのよね？」

その言葉を聞いた妖怪は口をもぐもぐさせる。

妖怪「そ、それは……」

そして、更に言い訳を重ねようとした。

しかし、そんな悪あがきが通用するわけがない。(10000字地点)

映姫「幻想郷のバランスは、妖怪が人間を殺し人間が妖怪を退治するのよね？じゃあ、なんで貴方は殺したらすぐに逃げるの？結局、貴方 怖いんでしょ死ぬのが。人間に退治されるのが怖いんでしょ？それで、退治されないように逃げてたのに何がバランスですか！貴方はバランスの事なんて考えてないじゃないですか！」

死妖が言い訳を言う間もなく映姫がそう口を挟んだ。

死妖は、顔を地面に落とす。

どうやら、言い訳が尽きてしまったようだ。

映姫「どうやら、言い訳が尽きたようね。そこに地獄の案内人がいるからそつちに行きなさい」

そう言いながら映姫は指を指す。

そこには、なんだか不気味そうなオーラを放った人が1人立っていた。

その後ろにも100人程 死んだ妖怪や人が並んでいた。

恐らくその100人もこの妖怪と同様 地獄行きになった妖怪なのであろう。

そして、その1番前にいる不気味なオーラを放った人間が恐らく地獄への案内人  
……。

死妖は、どうやら観念したようでその方向へと歩いて行くのであった。

映姫「ふー、やっと今日の分の死人の仕分けが終わったわね」

大きく背伸びをする映姫。

その姿は先程の怖い雰囲気は無く可愛らしい女の子のものであった。

と、その時!

??? 「映姫様」

1人の女性が映姫の名前を呼びこちらに近づいてきた。

映姫「あら、小町 今日サボらずに頑張ったわね」

この女性の名は小野塚小町 背中に大きな鎌を持っており三途の川を死者達一緒に

渡るのが仕事。

まあ、簡単に言うくと死神である。

小町「ひどいですよ。私だつてたまには真面目に仕事をする日だつてありますよ」

映姫の言葉に対して膨れっ面になる小町

実は、この小町 結構、仕事をサボることが多く頻繁に映姫に怒られてるのであった。

映姫「あらあら、これがこれからも続いてくれればいいのですけどね」

映姫は、ふふふつと笑いながらそう告げた。

なんだか、とても微笑ましく感じる。

ここまでは……。

映姫「あ、そうだ。小町、あれの確認ちゃんとしたわよね」

はっ、と映姫が思いついたように言った。

小町「あれ？」

小町は頭に疑問符を浮かべる。

どうやら、あれがなにかピンとこないようだ。

映姫「魂の浄化装置よ何百年も邪気を取り込んだから多分あと少しで破裂するつて地

獄を担当してる奴が言つてたでしょ？」

魂の浄化装置とは地獄に落ちた者達から邪念を絞り出す機会である。

どうやら最近になりその浄化装置の調子が悪くなってきたようだ。

その言葉を聞いた瞬間、小町の顔が青く染まり始める。

映姫もすぐさま小町の表情がおかしいことに感づいた。

映姫「貴方、まさか!!」

映姫が焦ったような表情を浮かべた。(2000字地点)

それもそのはず、何故なら先程、魂の浄化装置に100者数の魂を浄化しに行ったのだから……。

もし、そんな状態の浄化装置に100も魂を入れたら大惨事どころではないのである。

映姫「すぐに地獄へ向かうわよ!!」

映姫が勢いよくそう告げた。

映姫の額からは汗がにじみ出ており小町もここで自分がやった失態の大きさを理解した。

そして、恐る恐る映姫に尋ねる。

小町「そ、そ、そんなにヤバイんですか?あの浄化装置が破裂したら…」

その小町の声は若干ながら震えており動揺しているのが一目でわかる。

映姫「ヤバイって、そんな言葉一言では収めきれないわ。何百年も溜め込んで来た邪



念があの中には詰まってるのよ！そんなのが破裂してみなさい！この世もあの世も終わりよ！」

小町「ひ、ひえ〜!! 映姫様すみません」

小町は涙目になりながら映姫に謝罪をした。

映姫「そんなの後でいいわ！とりあえず、急いで地獄に向かうわよ！」

そう言いながら小町と映姫は地獄へと急ぐのであった。

果たして2人は無事間に合うのであろうか！

〜場所は変わり浄化装置前〜

地案（地獄の案内人）「ふ〜、ついたついた」

地案は100の魂を引き連れやつとの思いで浄化装置前に着いた。

浄化装置前まではいうほど距離も無いのだが実はこの地案は新人で今日は初の仕事であった。

周りから見れば地獄の案内人ということもあり少々不気味な見た目をしているが最近の若者みたいな性格をしている。

地案「え〜と、確かこの浄化装置の中にこの魂達を詰め込めばいいんだな」

新人の地案は浄化装置が限界近いことを知っているわけもなく。

浄化装置へと近づいていく。

そして、ついに「おい、お前達この入り口の中に入るんだ!」と死妖達に命令を出した。

あの世での決まり事で死んだ魂はここで働くものに逆らってはいけないので死妖達は泣く泣く浄化装置の入り口へと入っていくのであった。

1人、また1人と浄化装置の中へと入っていく魂達。

『メシメシ』

そして、それと同時に小さなながらメシメシという音が響いた。

地案「あれ、浄化装置ってこんな音なるんだ。もしかして、この音が邪気を抜かれて  
いる時の音なのか?」

しかし、残念ながら今 浄化装置を担当しているのは新人の者。

この音が不自然な物だとは気づかず どんどん魂を入れていくのであった。(300  
0字地点)

恐らく、皆気づいていると思うがこの音はひび割れの音である。

しかも、そのひび割れは地案の立っている位置のちやうど逆側に広がっており残念な  
がら地案はそのひび割れに気づくことはなかった。

そして、そのままついに99人もの魂が浄化装置へと入ってしまった。

残るはラスト1人である。

地案「よし、お前がラストだな。さっさと入れ！これで、今日の仕事は終わりだ！もうすぐ仕事が終わるといふ気持ちからか少しラストの一人をせかす死案。

死妖は、しぶしぶその中に入っていったのであった。

『ウィーーン』

魂から邪念が洗い流される死妖

死案「よし、これで今日の仕事は終わりだな」

死案は大きく背伸びをした。

そして、そのままリラックスをする。

と、その時！

『メシメシ』

『バキッ』

『バリッ！』

ついに限界を迎えた浄化装置は限界は爆発してしまった！

死案「な、なんだ！」

死案もこんな事態は流石の予想外！

爆発した浄化装置にあっけにとられ固まってしまった。

『ヒューーン、ヒューーン』

浄化装置から湧き出る謎の紫色の気体。

恐らく、邪気の塊であろう。

その邪気は、どうやら体がなく新たな体を探しているようだ。

死案「な、なんだ。あ、あの変なのは…」

死案は硬直した体を動かすことが出来ずただ呆然とそな気体を見つめる。

と、その時!

『ヒューーン』

邪気が死案の姿を確認し死案に一気に迫った。

恐らくだが体のない邪気は死案の体に乗っ取ろうと考えたのであろう。

死案「く、くるなー!!」

死案は必死にそう叫ぶ。

しかし、邪気は止まる事なく死案に迫ってくる。

そして、ついに死案との距離も1mをきった。

死案も「もう、駄目だ」と覚悟し目を瞑る。

その時!

『ヒューン』

「間に合ったみたいですね」

死案「えっ？」

邪気に当たると思い目を瞑った死案であったがなかなか当たらないうえに声が聞こえたので死案は今の状況を確認するため恐る恐る目を開けた。

そこには、小町がいた。

どうやら、小町あの短い時間の間に死案を抱きかかえ邪気から逃げたようだ

死案「こ、小町さん？」

小町「ええ、そうですよ」

死案「私を助けてくれたんですか？」

死案は小町が何故ここにいるのか疑問に思いながらもまず、1番重要な事を尋ねた。

小町「ええ、そうですよ。私の能力、距離を操る能力でなんとか助けられました。」

小町は、そんな死案にニツと笑顔を浮かべて返答する。

そう実は小町 距離を操るといふ能力を持っており先程、邪気にあたりかけた死案を助け出し邪気から隠れる事に成功したのである。

ちなみに映姫は小町のように距離を操れないので走ってこちらに向かってきているようだ。

そして、邪気に対しては浄化装置の裏に背もたれするように隠れておりなんとか邪気の死角に入っている。

死案「でも、一体 小町さんが何故ここにここは小町さんの担当場所じゃないはず」

小町「いや、それには色々あります」

小町は片手を頭にかけて苦笑いをした。(4000字地点)

小町「まあ、今はそれより早く逃げて下さい。さつきは私の距離を操る能力でなんとかりましたがこの能力そう何度も連続で出来ないんですよ」

素晴らしいながら小町は指を目の前に向けて指した。

小町「ここを走っていけば恐らく逃げる事が出来ます。私が囷になるのでその内にごうか逃げて下さい」

死案「でも、それじゃあ、小町さんが……」

新人という事もあり上司である小町を囷にすることに戸惑いを持つ死案。

小町「実はですね。あれが出てきてしまったのは私のせいなんです。本来ならわたしが浄化装置の確認をしつかりとしていけば貴方にも迷惑がからなかったんですよ」

素晴らしいながら小町は頭を落とす。

小町「すみませんでした」

そのすみませんでしたと言う言葉には本当に小町の気持ちが込められており生半かな謝罪ではないことは感じ取れた。

死案「そうでしたか。でも、これは小町さんのせいだけではありません。私が死人達

をあの浄化装置に入れる時、しっかりと確認をしていたらこんなことにはならなかったのです」

そういうながら死案も小町と同様に頭を下げた。

小町「お前は悪くない。お前は仕事をしっかりと果たしてミスをしたんだ、それに引き換え私は仕事をサボってこんな事態を起こしてしまった。だから、頼む。私は戦闘も得意なんだ。だから、早く逃げてくれ！」

小町は死案に頼み込むように言った。

流石の死案もこのままここには逆に小町さんを困らせてしまおうと考え「分かりました」と言つて早々と逃げて言ったのであった。

『バタバタバタバタ』

もうスピードで逃げる死案。

しかし、そんな速度で逃げれば勿論、足音が出てしまい予想通り邪気に見つかってしまった。

『ビューーン』

死案を見つけた邪気はすぐさま死案目掛けて突進する。

しかし、

小町「はあ！」

『シユーン』

小町はそんな邪氣目掛けて思いつきり背中に背負っていた鎌を振り下ろした。

『シャキン』

見事、その鎌は邪氣に命中する。

気体という事もあり簡単に切れ鎌は気体を真つ二つにした。

『シユン』

だが、勿論、そんな事をしても無駄であった。

相手は気体 いくら切ろうがそんな事関係ないのである。(5000字地点)

『ビューン』

それどころか、死案に逃げられた事を理解した邪氣は標的を小町に変え小町目掛け一氣に突進してきた!

小町「なっ!」

鎌を振った事もあり体制がまだ整っていない小町。

そんな状況で動ける事もなく小町は負けを覚悟した。

その時!

「はあ!」

『ボンッ』



負けを覚悟した小町だったがなんと邪気に当たる瞬間、邪氣目掛けて氣団が飛んできた。

氣団はそのまま邪気を飲み込む。

小町「えっ？」

急に飛んできた氣団に驚きが隠せない小町

小町は、氣団が飛んできた方向を恐る恐る振り向く。

そこには！

映姫「危ないわねえ」

そこには、映姫がいた。

どうやら、先程の氣団は映姫が放ったものようだ。

小町「映姫様！」

小町はすぐさま映姫の真横に行く。

映姫「どうやら、浄化装置から邪氣が出てしまったようね」

小町「はい、すみません。私の失態で……」

暗い顔を浮かべる小町

だが、映姫はそんな小町とは真逆の表情で、「今はそんなこと言わないであの邪気を消

し去るわよ!」と小町に命令を出した。

小町はその威勢のいい映姫につられて気合が入る。

小町「分かりました映姫様!」

そう言つて小町と映姫は戦闘体勢をとつた。

『ヒューーン』

2人に近寄る邪気。

小町と映姫はそんな邪気に対して手を向けて「はあ!」と気団を放つた。

だが、

『ヒューン』『ヒューン』

邪気もそう甘くはなかつた。

邪気は見事その気団を避ける。

そして一気に2人との距離を一気につめた。

映姫「はっ!?」

そして、そのまま映姫の目の元へと迫る邪気。

映姫と邪気との距離は1mをきつており恐らくもう避けるのは無理であろう。

映姫は反射的に腕で体を守ろうとする。

だが、勿論、気体の敵にそんなことをしても無意味 映姫は負けを覚悟した。

その時！

小町「映姫様っ！」

『バツ！』

なんと、小町が映姫目掛けて飛んで行く邪気に対して映姫をかばうように大の字に体を広げ映姫の盾となった。

小町「うわああああああ!!」

小町の周りに邪気を取り囲むように広がる。

映姫「こ、小町！」

映姫は、すぐさま小町を助ける為、気団を放とうとした。

しかし、

映姫「くっ！」

映姫は気団を出すのをためらった理由は勿論 小町を傷つけてしまう恐れがあるからである。

小町「うわああああああ!!」

邪気にまとりつかれ苦しむ小町

そして、ついには！

『ボン』『ボン』『ボン』『ボン』『ボン』『ボン』

小町の四肢から順番に巨大な赤ん坊のような手足に変わり胴体、そして、顔までもがまるで巨大な赤ん坊のような姿になってしまった。(6000字地点)

しかし、ただの赤ん坊ではない。

まるで宇宙人のような独特な姿をしていた。

映姫「こ、これは一体!」

その異様な姿になってしまった小町に驚く映姫。

それもそのはず、その化け物には小町と確認できる部分が少しも残っておらず小町の気配も消え失せてしまったのだから。

映姫「こ、小町ー!!」

化け物になってしまった小町に対して必死に名前を呼ぶ映姫

しかし、その声は小町に届くことはなかった。

そして、小町を飲み込んだ邪気はこう叫ぶ。

「ジャネンバ、ジャネンバ」

その赤ん坊はジャネンバとばかり叫んでいる。

映姫「ジャネンバ?」

映姫は、その言葉を耳にし赤ん坊をジャネンバと呼ぶことにした。

映姫「く、よくも小町を!」

小町を飲み込まれた事に怒りを持った映姫はいくつかの気団をジャネンバに放つ。

映姫「はあああああ！」

その気団には1発1発力が込められておりジャネンバの周りに大きな爆風がたった。

映姫「やったか！」

その爆風を見た映姫はジャネンバへのダメージを確かめた。

『シューーン』

徐々に爆風が晴れてくる。

流石のジャネンバもあれほどの気団を食らって無事なわけがない映姫はそう考えながら爆風が晴れるのを見届けた。

しかし！

映姫「なっ!?？」

現実はその甘くはなかった。

爆風が晴れたなかからなんと、「ジャネンバ、ジャネンバ」ほぼノーダメージのジャネンバが姿を現した。

これには流石の映姫も声が上がらない。

何故なら、さっきの攻撃は映姫の全力の攻撃だったのである。

それがノーダメージだったということはかすなわち映姫の勝率は限りなくゼロに等

しいということ…。

映姫「まさに化け物ね」

映姫は苦笑いしながら呟いた。

その笑みは恐らく絶望を表す笑み。

そう映姫は察したのである。

自分に勝ち目はないと…。

ジャネンバ「ジャネンバ？」

そんな、映姫を見ていたジャネンバは映姫がもう攻撃して来ないことを確認して、

ジャネンバ「ジャネンバ！」

と叫びながら映姫に向かってエネルギー弾を放った。

そのエネルギー弾にはかなりの威力が込められており食らえばただごとではないであらう。

しかし、映姫にそれを避ける気力があるわけもなくジャネンバのエネルギー弾を直で受けてしまった。

『ドン』

映姫「うっ！」

数メートル程吹き飛ばされてしまう映姫。

体へのダメージも大きく映姫は倒れ込んでしまった。(7000字地点)

映姫「くっ！せっかく小町が私をかばってくれたのに…」

あまりの自分への不甲斐なさに腹をたてる映姫。

まあ、無理もない自分の力がまったく及ばないのだから。

ジャネンバ「ジャネンバ、ジャネンバ」

ジャネンバが急に叫び出す。

恐らく、わたしにトドメを刺すのね。

映姫は、そう考えて死を覚悟した。

もう、映姫にはジャネンバの攻撃を避ける体力は残っておらずただ攻撃を待つことしかできなかつた。

次くれば間違えなく死ぬのに…。

映姫「ふふふ、私の人生もこれで終わりか…」

思わず声に出す映姫。

その表情は絶望に染まっており笑っていた。

そう人間は恐怖を超えると笑ってしまうのである今の映姫がまさにその状況。

『ヒューン』

右手に紫色のエネルギーを溜めるジャネンバ。

その手にはエネルギーが圧縮されていた。  
とてつもないエネルギーが…。

死を覚悟した映姫はただそれを見続ける。

そして!

ジャネンバ「ジャネンバ!」

『ヒューーン』

ジャネンバは右手からエネルギー弾を放った。

それをみた映姫はゆっくりと目を瞑り死を待ったのであった。

しかし!

映姫「あれ?」

いくら経とうがジャネンバのエネルギー弾は映姫の元へとんでこない。

えっ?と思つた映姫は恐る恐る目を開けた。

そこには!

ジャネンバ「ジャネンバ、ジャネンバ、ジャネンバ」

『バン』『バン』『バン』『バン』



ひたすら四方八方にエネルギー弾を飛ばしているジャネンバがいた。どうやら、このジャネンバあんまり知能がないらしく映姫に対しても特に興味を持たなかったようである。

映姫「ふ〜」

ひとまず、一息出す映姫

どうやら、映姫もジャネンバに知能があまりないことに気づいたようだ。

ジャネンバ「ジャネンバ、ジャネンバ」

何度もジャネンバと囁きながらエネルギー弾を放つジャネンバ。

そのエネルギー弾は四方八方へ連続に放たれていた。

狙ってないにせよ、流石に危ないと思った映姫はジャネンバから距離をとる。

映姫「派手にやってくれますねえ」

そう呟きながら映姫は周りを見渡した。

その瞬間、先ほどまで若干あつた余裕そうな顔が映姫から消える。

映姫「あ、あ、ああ」

唇を震わせ映姫。

そう映姫は、恐怖を感じたのである。

今までに味わった事のない恐怖を……。

恐らく映姫は何かを目撃してしまったのであろう。

それは!

映姫「あの世に結界が…」

そうあの世のそこら中に結界のようなものが張られているのである。

それもただの結界ではなく、まるでキャンデーのような塊で多数の色がありそれがいくつも集まりあの世を埋めていたのである。

一体、いつの間にこのような結界が出来てしまったのだろうか…。

映姫は、考察をいれる。

しかし、その謎もすぐに解けるのであった。

ジャンンバ「ジャンンバ、ジャンンバ」

ふとエネルギー弾を出し続けるジャンンバを見る映姫。

映姫「そういえばあのエネルギー弾やけに適当に打たれてるわね…。まさか!」

そう言いながらジャンンバの放ったエネルギー弾を目で追う映姫。

どうやら何かに気がついたようだ。

『ヒューン』

『ドンッ』

ジャンネンバのエネルギー弾が壁に激突した。

その時！

『ビシッビシッ』

なんとそのジャンネンバのエネルギー弾に当たった一部が結界にのみ込まれたのであつた！

その結界は周りの結界と同様で色あざやかなキャンデーのようなものであつた。

映姫は確信した。

ジャンネンバはエネルギー弾を当ててあの世を封印していることに…。

映姫「このままじゃマズイ！」

立ち上がりジャンネンバに戦闘体制をとる映姫

映姫「もし、このままジャンネンバにあの世を封印されたらあの世とこの世がメチャクチャに…。それだけは阻止せねば」

そう言いながらダメージを負った体でジャンネンバに接近した。

恐らくさつき遠距離からの攻撃が効かなかったので接近して一気に決めようという作戦であろう。

ジャネンバ「ジャネンバ、ジャネンバ」

知能があまりないジャネンバも流石に接近されては本能的に攻撃を行うもの。ジャネンバは、映姫に対してエネルギー弾を5、6発放った。

映姫「くっ!」

とつさに突っ込んだので反撃された後のことを考えていなかった映姫。

映姫は、急いで急ブレーキをかけサイドステップで逃れようとする。

だが、時すでに遅し

映姫「ぐあああ!」

サイドステップをしたおかげで直撃ではないものかなりのダメージを映姫は負ってしまった。

映姫「くっ!」

倒れ込んでしまう映姫。

映姫の右腕には血が滲んでいた。

そう今の一撃で右手をやられたのである。

普通の者ならばこの状態どう考えても立ち上がることは出来ない。

誰もがそう考えるであろう…。

しかし!

映姫「はあ、はあ、はあ、はあ」

なんと映姫は賢明にも立ち上がった。

体はヨレヨレで限界は近く

もはやジャンンバを倒すほどの力どころか動くだけでも精一杯の体力であろう。

ジャンンバ「ジャンンバ？」

流石のジャンンバはまだ、立ち上がる映姫に対し疑問符を浮かべていた。

それは、恐らく何故まだ立ち上がれるのだろうか？と言う疑問。(90000字地点)

いくら考える能力の少ないジャンンバでもその異様なまでの映姫の闘志には凄いと感心しているのである。

だが、しかし、映姫がいくら立ち上がろうともう映姫には勝ち目がない。

ジャンンバもそのことは理解している。

ジャンンバはゆつくりと映姫に対して手を向けた。

恐らく、最後のトドメということであろう。

『ジャンン』

右手にエネルギーをためていくジャンネンバ

そのパワーはとうに映姫を殺せる力を超えていた。

恐らく、確実に殺すためエネルギーを限界までためているのであろう。

映姫「くっっ！」

流石の映姫もヤバイことを悟る。

まあ、それもそのはず目の前にいるジャンネンバは確実に自分を狙っているのだから  
…。

と、その時!

映姫「ここはやはりあの者たちに頼むしか…」

映姫は、そう一人言をこぼした。

映姫「私が戦っても勝てる見込みはゼロ。もう奴を倒せるのはあの方たちしかないな  
い。そう!博麗霊夢達しかない!」

な、なんと、どうやら映姫は博麗霊夢に頼もうというのだ。

まあ、たしかに映姫に比べれば遥かに勝てる可能性がある存在。

映姫はそのように考えたのであろう。

映姫「逃げるのは恥だが。ここは、それしか無いんだ。はあ!」

そう言いながら映姫は地面に向かってエネルギー弾を放つ。

すると、エネルギー弾の当たった地面はみるみる爆風を巻き上げた。

ジャネンバ「ジャネンバ!?」

それに驚いたジャネンバは一度エネルギーを溜めるのを止めてしまう。

映姫「今だ！」

ジャネンバが気を溜めるのをやめ怯んだ隙を見た映姫は速攻で走り出した。

もし、これで逃げきれず博麗霊夢にこのことを伝えられなければあの世もこの世も崩壊してしまう。

映姫は、そう頭に叩き込み全力で走るのであった。

くそして、数分後く

ジャネンバ「ジャネンバ？」

映姫によって起こされた爆風がはれてきた。

周りを見渡すジャネンバ。

しかし、そこにはすでに映姫の姿はなく、ジャネンバはここで映姫に逃げられたことを確信した。

ジャネンバ「ジャネンバ———  
!!!!!!」

逃げられてしまったことに対して怒りの表情を浮かべるジャネンバ。

それもそのはず先ほど確実に映姫を倒せると思った挙句逃げられてしまったのだから。

怒ったジャネンバは、両手を大きく広がる。

そして!

ジャネンバ「ジャネンバ!!」

と叫び四方八方に大量のエネルギー弾を放った。

勿論、当たったところは結界に覆われてしまっている。

ジャネンバは、怒りのあまり我を忘れがむしやらに攻撃するのであった。(1000

0文字地点)

果たして、あの世はどうなるのであろうか!

〈場所は変わり博麗神社〉



悟空「ひえ、お前達かなり瞬間移動が惜しいとこまで出来るようになったじゃねえか」

博麗神社では、いつもと同様に霊夢と魔理沙の瞬間移動が行われていた。

霊夢「何が惜しい所よ。さつきから空にばっかり移動してるんですけど？」

惜しいという割に全然惜しく無いことをツツコム霊夢。

ちなみに今の霊夢達の瞬間移動の出来は悟空が子供の姿になったばかりのように空の方に移動してしまうというものである。

魔理沙「そうだけ悟空。さつきから上にばっか行っちゃまって全く完成には程遠いぜ」  
そう言いながら魔理沙はため息をついた。

まあ、それもそれはず実は霊夢と魔理沙この修行を始めてもう一ヶ月半になるのである。

それなのにまだ、出来てないことに対して自信をなくして行ってるのであろう。

悟空「何言ってるんだ魔理沙。おめえ達めちやくちや凄いで。前にも言ったかも知んねえけどよ。オラ瞬間移動ができるようになるまでめちやくちや時間かかったんだ。たつた、一ヶ月で未完成にせよ体をどこかに飛ばすことが出来てんのは、十分すげえぞ」

悟空は、そう言うのとニツと笑みを浮かべ霊夢達を見る。

そして、霊夢と魔理沙はその笑みにつられたようにお互い「フツ」と笑みを浮かべた。

「霊夢「まあ、完成に近かれ遠かれにせよ。まだまだ未完成しばらくは使い物にならないわね」

「そう言いながら太陽の方に目をやる霊夢

「霊夢「もうすっかり太陽も上がってお昼時ね。なんか、疲れたから休みましようか」

「霊夢は、悟空と魔理沙にそう声をかけた。

「悟空「ああ、今日は3時間ぐれえは瞬間移動の練習をしたみてえだし霊夢の言う通り休憩にすつか」

「そう言いながら霊夢と魔理沙の顔を見る悟空

「その後、3人は神社の中に入りしばしの間休息をとることにした。

「魔理沙「いや、なんか、体は動かしてないけど瞬間移動は気を集中させるからかなり疲れが溜まるぜ」

「座敷に腰を下ろした魔理沙はそう呟いた。

「霊夢「まあ、その辺は、まだ、私達が気を完全に我が物に出来てない証拠。慣れればきつともっと楽になるはずよ」

「霊夢と魔理沙はそう言い軽く雑談を交わす。

霊夢「そう言えば悟空あんた少し背が伸びたんじゃない？」

霊夢が不意に悟空の方を振りむいていった。

悟空は、キョトンとした表情を浮かべ「そうか？」と相槌をうつ。

魔理沙「あく、たしかに伸びたな。もう少しで私達よりも背が高くなりそうだぜ」

悟空「そうなんか、オラあんましそういうの気にしねえからよくわかんねえや」(11000字地点)

— 霊夢と魔理沙に悟空は身長の話をされるがとくに気にしたことないので返答に困る悟空。

と、その時！

悟空「んっ!!？」

悟空の目がキリツと際立つ。

それに気づいた霊夢は、「どうしたの悟空？」と悟空に声をかけた。

すると、悟空は不思議そうな表情で「いや、なんか、こつちに何か来てないか？」と霊夢に尋ねた。

魔理沙「何言ってるんだ悟空？前にも話したけどここから人里までは結構距離がある上に妖怪に会つちまう可能性があるだろ？だから、ここに人はこねえし妖怪もこの鬼巫女に恐れてこねえぜ」

しかし、魔理沙はすぐに悟空の言うことを否定した。

そう人里から博麗神社に来る人など余程のバカ以外はまずありえない。

霊夢と魔理沙はその事をよく理解してるのである。

と、その時!

霊夢が魔理沙を強く睨みつける。

一体、どうしたのであろうか?

いや、理由など簡単か…。

霊夢「ちよつと、魔理沙。鬼巫女つて誰のことよ?」

鋭い眼光を浮かべ魔理沙を睨みつける霊夢。

その目はまるでカエルを見つけたへびのような目をしていた。

流石の魔理沙も命の危険を感じる。

魔理沙「じよ、冗談だよ。冗談」

広げた手を上に上げ降参をとる魔理沙。

しかし、霊夢のはそんな事で許すわけがない。

霊夢「ふ、ふふ、鬼巫女がそんなんで許すと思う」

不気味な笑みを浮かべ魔理沙に接近する霊夢。

魔理沙は、「助けてくれ!」と叫ぶ。

一体、この2人は仲がいいのか悪いのかよく分からないものだ。と、その時!

悟空「おい、やつぱり誰か来てる。おめえ達気を探ってみろ!」  
とつさに大きな声を上げる悟空。

流石の霊夢と魔理沙もおふぎけをやめ真剣に気を探った。

霊夢「ほんとだわ。誰かがこつちに来てる!」

悟空「今は石段を上がってるってところだな」

霊夢「敵かしら?こんなところにふつうの人間が来るはずないし」

霊夢は少し警戒を強める。

魔理沙「でも、あんまりでつかい気じゃねえしよ。まだ、敵と決めつけるのは早いんじゃないか?」

霊夢「それでも警戒しとくに越したことはないわ。とりあえず、見に行きましょう」  
そう言いながら立ち上がり玄関に向かう霊夢。

悟空は、急いで霊夢を止めた。

悟空「まで、霊夢。もし、敵だったら危ねえ。3人で固まって行動すつぞ」

悟空がそう霊夢に命令をだした。

霊夢は首を上下に動かす。(12000字地点)

その後、3人同時に神社の庭へとでる。

霊夢「もうすぐ石段を上がってくるわね」

警戒をしつつ待つ霊夢達。

『パキ』

『パキ』

小さな足音をが聴こえてきた。

恐らくこの音は小枝を踏んでいる音であろう。

そして!

悟空「みえてきたぞ」

悟空がそう声をこぼした。

霊夢と魔理沙は戦闘体制をとる常に攻撃が出来るように構えているのだ。

だが、しかし、石段を上がってきたのは予想外の物であった。

映姫「う、うう」

そうそれは、映姫である。

ジャンンバからなんとか逃げ出した映姫はこの世において博麗の巫女に今のあの世の

現状を知らせにきたのである。

『バタッ』

石段を上がるや否や倒れこむ映姫。

無理もないギリギリでジャンンバから逃げてきたのである体力を使い果たして当然といえば当然だ。

急に倒れこんだ映姫を見た霊夢と魔理沙、そして、悟空はすぐさま映姫に近寄る。

映姫の体の傷を見る霊夢。

霊夢「大変！この子ケガをしてるみたい」

霊夢は、少し勢い付いた声で魔理沙に言った。

魔理沙「ほんとだぜ。霊夢、すぐに神社の中に運ぶぞ」

そう言いながら映姫を抱きかかえる魔理沙。

悟空「見た感じ敵じゃなさそうだけど、こいつ一体誰だ？」

魔理沙に抱きかかえられた映姫を見つめながらそう呟く悟空。

霊夢「今はそんな事 どうでもいいわ！たとえこいつが敵だろうと味方だろうとケガを早く治さない」と

霊夢は真剣な口調でそう告げた。

早歩きで神社の中に映姫を連れていく魔理沙と霊夢と悟空。

霊夢「よし、取り敢えず布団の上で寝かせましょ」

映姫を背負った魔理沙に対してそう言葉をかける霊夢。

魔理沙「ああ、わかった」

魔理沙は霊夢の言う通り映姫を布団の上にゆっくりと置いた。

映姫は、布団の上で軽く呼吸音を鳴らしながら寝つく。

傷は深いが特に命をおびやかしてはないようだ。

霊夢「ふー、どうやら、命には別状は無いっぽいわね」

少し安堵したのか深呼吸をする霊夢。

どうやら、霊夢少し映姫が来たことに驚いたようだ。

いや、正確には知らないものが急に神社に来て倒れこんだと言う事に驚いたのである。  
う。

魔理沙「なあ、霊夢、こいつケガしてるけど誰だかわかるか?」

魔理沙が霊夢に尋ねた。

霊夢「いいえ、人里でも見たことない顔だわ。悟空は知ってるこの子について」

悟空「わりの。オラもこんな奴を見たのは初めてだ」

霊夢「やっぱりそうよね」

初めて見た女性に対して誰も知っておらず少し考え込む霊夢達。



悟空「でも、ひとつだけ分かることがあつぞ」

霊夢「あら偶然、私も分かることがあるわよ」

魔理沙「私だつてあるぜ」(13000字地点)

そう言いながら真剣な眼差しを浮かべあう3人。

そして、声を揃えてこう言った。

「何かヤバいことが起きてるみてえだなー」

声が大モつたのを確認した3人は少し硬い顔を浮かべた。

悟空「やつぱり、おめえ達も気づいたみてえだな」

悟空が霊夢と魔理沙にそう告げた。

霊夢「ええ、もちろん」

そう言いながら映姫に体を近づける霊夢。

霊夢「この子の腕とか見たらよくわかるわ。この子相当鍛え込まれた体してるわ」

霊夢がそう言葉を並べる。

すると、魔理沙がその霊夢の言葉に続くようにこう言った。

魔理沙「だけど、鍛え込まれているそいつがこれほどまでにボロボロになっていると

いう事は、こいつよりも遥かに強い奴が現れてこいつをここまでボロボロにしたと言う

事……」

た。  
霊夢と魔理沙の説明は悟空が思っていることと全く同じで悟空は「ああ」と声を出した。

悟空「取り敢えずここで変に考察してもややこしくなるだけだし。少し手当てしてこいつの回復を待つか」

悟空が霊夢と魔理沙にそう告げると霊夢と魔理沙は、「ああ」と相槌を打った。

〈30分後〉

映姫「う、うう、はっ!?」

映姫がついに目を覚ました。

映姫「こ、ここは!」

慌てた表情を浮かべる映姫。

恐らく、今の状況がイマイチ掴めないであろう。

映姫「確か、ジャネンバから無我夢中で逃げて…」

少しづつ記憶を呼び覚ましていく映姫。

そして!

映姫「そうだ！私、博麗の巫女に助けを求めにきたんだ。てことは、ここは博麗神社。私もしかして神社の前で倒れちゃったのかしら。手当てまでしてもらっているみたいだし…」

今の状況を少しづつ理解していく映姫。

と、その時！

霊夢「やつと、起きたみたいね」

そう言いながら隣の部屋から映姫の元に現れる霊夢。

いや、霊夢だけではない霊夢の後からついてくるように魔理沙と悟空も映姫の寝ている部屋に入ってきた。

魔理沙「お、起きたみたいだな」

悟空「取り敢えず一安心つてところだな」

霊夢達は映姫の起きたことを確認した。

映姫「手当てをしてくれたみたいですね。ありがとうございます」  
入ってきた3人に対して軽くお礼をする映姫。

霊夢「お礼なんていいわよ急に神社に来て急に倒れられたらそうするしかないでしょ」

少し照れ気味にそう言う霊夢。

映姫「神社、てことはここは博麗神社で間違いないですね!」

少し興奮気味でそう言う映姫。

「どうやら、やっとジャンペンバから逃げ切り助けを求める事に成功した実感が湧いてきたようだ。」

悟空「その口調からするにやつぱりたまたま神社に来たわけじゃねえみてえだな」(14000字地点)

映姫の言葉に対し的確に返答する悟空。

映姫は、そんな悟空に対して目をやった。

映姫「ええ、その通りですよ。なかなか、察しがいいですね」

悟空「おまえみてえな肉体を持ったやつがあそこまでボロボロになってんだここにいる2人もそのことには気づいてる」

自分は何も喋っていないのに自分の全てを知ってるかのように喋る悟空に対して少し驚く映姫。

しかし、映姫はその表情を表に出す事なく淡々と会話を続けていく。

映姫「どうやら、そこまで分かってるなら私が言う事は一つです」

「素晴らしい一呼吸する映姫。」

そして!

映姫「あの世とこの世を救って下さい！」  
と、勢いづいた声で言った。

霊夢「あの世とこの世？」

魔理沙「一体、何をいつてるんだ？」

霊夢達は戸惑ってしまう。

まあ、いきなり言われた言葉があの世界やらこの世界やらよくわからない単語を使われているのである。

分からなくて当然。

霊夢「ちよつと、あんたそれだけじゃ意味わかんないわよ。もつと、詳しく説明しなさいよ。なに、今幻想郷で一体なにが起こってるのよ？」

霊夢が映姫に質問を重ねまくる。

そんな、霊夢を見た悟空はゆつくりと霊夢に囁く。

悟空「そんないつぺんに質問してもこいつを困らせるだけだ。順を追って説明してもらうんだ」

その言葉を聞いた霊夢は一度落ち着く。

霊夢「たしかにそうね」

霊夢がゆつくりと悟空に返答した。

悟空は、そんな霊夢に相槌をし映姫の方を振りまいた。

悟空「すまねえ、少し話が逸れちゃった」

悟空が軽く映姫に謝る。

映姫「いいいえ、私がいきなりあの世とこの世を救って下さいなんていったから話がややこしくなっちゃったのです」

そう言い謝り返す映姫。

映姫「それじゃあ、一から説明をしていきます」

そう言いながら真剣な眼差しで霊夢達を見る映姫。

と、その時、「ちよつと待ちなさい」と霊夢が映姫が説明をするのを止めた。

霊夢「説明の前に名前を教えてくださいるかしら？」

そのセリフを聞いた映姫は、はっとした表情になる。

映姫「そう言えばそうでした。まだ、名前を言っていないませんでしたね。私の名前は四

季 映姫・ヤマザナドウと申します」

礼儀正しく名前を言う映姫。

霊夢もそれに続いて名乗ろうとする。

しかし!

霊夢「私は……」

映姫「博麗霊夢さんですね」

霊夢「え？」

困惑する霊夢。

それもそのはず今初めて自分は映姫に対して名乗ろうとしたのに映姫は自分の名前を知っていたのだから…。

霊夢「一体、なんで私の名前を？」

困惑した霊夢はそのまま映姫に尋ねた。

すると、映姫は微笑を浮かべ「霊夢さんだけではありません。そっちにいる金髪の方が霧雨魔理沙さんそして、そっちにいる男の方が孫悟空さん」と言いなんと悟空と魔理沙の名前まで知っていた。(15000字地点)

魔理沙「な、なんで、私たちの名前が分かるんだ！」

驚きながら映姫に尋ねる魔理沙。

映姫「分かったと言うより知ってたですね。私貴方がたのことずっと見てましたから」

霊夢「見てたですって？」

映姫の言った言葉に反応する霊夢。

霊夢「何、あなたさつきから私たちの理解を上回ることばかり言ってるわよ？」

流石の霊夢も頭がこんがらがってしまおう。

映姫は、そんな霊夢達を見かねてこう言った。

映姫「分かりました。私が誰で一体なんでここに来たのかを一から詳しく説明しましょう」

霊夢「そうして頂戴」

霊夢もすぐにそう頼む。

映姫「え、まず、私が誰かを説明するとですね。実は私世間一般に呼ばれる閻魔大王なんです」

霊夢「閻魔大王ですって!?!」

魔理沙「え、閻魔大王って、あ、あの閻魔大王か……!」

いきなり映姫が自分が閻魔大王と凄い事をいだし驚く霊夢と魔理沙。

映姫「ええ、そうです。あの閻魔大王です。私は死者が天国か地獄どちらに行かせるべきなのかを決めるのが仕事。だから、毎日この世に暮らすものがどのような行いをしているのかを監視しております」

この映姫の説明を聞いた霊夢はピンときた。

霊夢「なるほどね。私たちの事を知っていたのはこの世を監視している時に私達も見



ていたからね」

映姫「はい、そうです。私はこの世を常に見て回っています。なのでこの世にいる人の名前は全員覚えていきますよ」

悟空「なるほどな、じゃあ、比較的最近幻想郷にきたオラのことを知っていてもおかしくねえってわけだ」

3人は映姫の事を少しだけ理解できたようだ。

霊夢「なるほどね。あなたが閻魔大王って事が分かったらさっきのこの世とあの世を救ってくれっえ言う言葉の意味も分かってきたわ」

魔理沙「ああ、私も分かってきたぜ。多分、あの世で何かヤバいことが起きてんだな！」

そう言いながら映姫に対しての視線を強くする。

映姫「ええ、さすがです。実はあの世が大変な事になっているのです！このままじゃこの世もあの世もあいつに狂わされてしまうのです！」

さっきの温厚な声とは裏腹に焦った声で言う映姫。

唇は震え冷や汗もかいていた。

悟空「一体、あの世で何があったんだ？」

そつと映姫にそう尋ねる悟空。

映姫「実は……………」

く映姫、説明中く

魔理沙「な、なんだって!あの世でそんな事が起きてるのか!」(16000字地点)  
事情を聞いた魔理沙はとっさに大きな声を出した。

映姫「はい。もし、このままジャンバを自由にさせては結界である世を完全に封印してしまいます」

依然として唇を震わせながらそう告げる映姫。

生き物か唇を震わせるのは余程の恐怖そして、不安を抱えている時、映姫は今まさにその状況なのだ。

霊夢「もし、あの世が封印されたらどうなっちゃうの?」

霊夢は、恐る恐る映姫に尋ねた。

映姫「……………」

映姫はしばし無言になってしまふ。

そして、震えた唇をなんとか動かしよう告げた。

映姫「地獄にいる死者はほとんど蘇り。はたまた、天国にいる死者はそのまま結果に封印されてしまいます」

霊夢達は言葉を失ってしまった。

今、映姫が言った言葉に対しての理解がまだ追いついていないのであろう。

霊夢「ちよ、ちよつと待ちなさい！なんでそんな都合よく地獄の奴は生き返るのよ！普通なら地獄のやつもそのジャンネンバとか言うやつで結界で封印されるんじゃないの？」

霊夢の言う通りである。

普通ならばランダムに結界を張ってるジャンネンバは結界に地獄の者達も封印してしまはず、しかし、映姫はなんと蘇ると言ったのだ。

映姫「それは、ジャンネンバの張る結界がほとんど邪念で作られているからです」

霊夢「邪念ですって？」

映姫「はい、ジャンネンバは邪念が元となってできた存在。なので、気のほとんどが邪念の塊なんです」

霊夢「でも、一体、それとこれがどうだったのよ?」

霊夢の疑問は更に膨れあがった。

映姫「いいですか? 地獄とは詳しく言えば一部の者は邪念を抜かれ新しい肉体を持ちますが数や邪念が大きすぎるといふ都合じようまだ、浄化出来ない者の置き場所なんです。まあ、つまり邪念を持ったものの溜まり場なのです。邪念を持った者を邪気で封印できると思いますか?」

映姫の説明は分かりやすく霊夢はすぐに理解した。

霊夢「な、なるほど、邪気で邪気は封印出来ない。だから、ジャンバの放つ邪気では邪気を持つ地獄の者達を封印できないと言うことね」

霊夢は映姫の言った事を軽くまとめた。(17000字地点)

映姫「ええ、その通りです。因みに地獄自体は封印されてしまうので行き場がなくなった地獄の者達が自動的にこの世に蘇ってしまうのです。恐らくあと数分後にはこの世に地獄に落ちた者が舞い戻ってきてしまいます。そうなればこの世が大変な事に……」

霊夢「あ、あと数分ですって!」

あまりの時間の短さに驚く霊夢。

いや、霊夢だけではない。

魔理沙「おいおいおい、その地獄の奴らを蘇らせるのを防ぐ事は出来ねえのか？」と、魔理沙もかなり焦った表情でそう言った。

映姫「もう手遅れです。蘇ってしまつた者は再び倒すしか…」

映姫は顔を下げ悲しげな表情を浮かべる。

それもそのはず自分の部下のせいでこんな大惨事になつてしまつたのだ責任を感じないわけがない。

霊夢「くっ!?」

魔理沙「どうすればいいんだ」

霊夢と魔理沙ま徐々に焦りが激しくなつてきた。

その時、この男が喋り出した。

悟空「どうしたんだ、おめえ達。そんな暗い顔して…」

その男は勿論、孫悟空である。

霊夢「どうしたつて、悟空聞いてなかつたの？地獄の者がこの世に蘇つてくるのよ！能天気な表情の悟空に少し怒りを持ちながらそう言った。

しかし、悟空はこう言い返す。

悟空「蘇つてくるんなら倒せばいいじゃねえか？」

霊夢「あのねえ。倒せばいいってそんな数じゃないのよ？」

悟空に鋭い言葉で言い返す霊夢。

流石の悟空も返す言葉がないか、そう思われた。

悟空「なら、おめえはもう諦めんのか?」

悟空は霊夢の目を見つめそう言った。

霊夢「えっ?」

霊夢は悟空の言葉に思わず相打ちをうった。

悟空はそんな霊夢に畳み掛けるようにこう言った。

悟空「オラは諦めねえぞ。戦う前から諦めんのはオラには似合わねえからな」

悟空の言葉は霊夢と魔理沙、そして、映姫の心にグサってささった。

悟空「おめえ達に聞くぞ。おめえ達は、諦めんのか?諦めねえのか?」

霊夢と魔理沙は無言になってしまう。

その時!

映姫「私は諦めたくありません!」

なんと、1番 絶望していた映姫が1番最初にそう言った。

映姫「こうなった半分は私のせいなんです。私がすっかり小町に言っただけならなかった。だから、せめての罪滅ぼしです。私は戦います」

なんと、体がポロポロなのに映姫は戦うと言いきったのである。

流石の霊夢と魔理沙もそんな映姫を見てクヨクヨしてられる訳もなく。

霊夢「分かったわよ。やってやるは！やってやるは！やっつてやろうじやないの！幻想郷をかけた生者  
vs 死者の大戦争を！」

魔理沙「ああ、私もやってやるぜ」

映姫に後押しされたから霊夢と魔理沙のテンションが一気に上がった。

悟空「ああ！」

悟空も霊夢と魔理沙に続いてそう言ったのであった。：18000文字

霊夢「ところで、蘇ってきた地獄の奴らはなんとかするにしてもジャネンバの方はどうするの私達が死者と戦っている間きつと奴はあの世をもっと荒らすはず、そうなれば、もっとヤバいことになりかねないわよ」

霊夢は、冷静に考え悟空達にそう言った。

映姫「た、確かにそうですね」

映姫も霊夢の考えに同意する。

確かにこのままジャネンバを放置しすぎては何を起こすか分からない。

霊夢達は考え込んだ挙句、結局決まった考えは、

霊夢「やっぱり分散するしか無いわね」

そう分散である。

2人が死者と戦い残り2人がジャネンバの元へ行く。

これしか無い。と霊夢達は考えた。

すると、映姫は難しい顔になる。

霊夢はすぐさまその映姫の顔を読み取り映姫に尋ねた。

霊夢「どうしたのそんな難しい顔して?」

映姫「いや、その作戦はいいんですけど一つ注意点があったので…」

映姫がそう霊夢達に告げた。

霊夢「注意点?」

霊夢はリピートするように尋ねた。

魔理沙「注意点って、一体なんだ?」

魔理沙も映姫にたずねる。

映姫「それはですね。もともとあの世とは死者が行くところ普通は生身の人間は入れないのです。今回は、それを破って無理矢理入ろうと思うのですがそれにおいて、やはり、幻想郷に来てまだそんなに経ってないものを入れるのは逆にあの世を壊してしまう可能性があるので。幻想郷に馴染みきってないものを無理矢理あの世に突っ込むのはやはり…」



そういいながらチラツと悟空の方を向く映姫。

霊夢「なるほど、つまり悟空はあの世つまりジャネンバの方に活かせる事は出来ないってことね」

映姫「はい」

どうやら、悟空はジャネンバの方に行く事は出来ないようだ。

これは、霊夢達にとつてかなり痛い。

魔理沙「マジかよ、ジャネンバって奴はかなり強いみたいなのに悟空が来れないとなるとかなりヤバいな……」

魔理沙はそう呟く。

悟空「まあ、それはしょうがねえぞ魔理沙。よく考えてみればオラはよそ者やっぱり本当に幻想郷を救うのはお前たちである出来だとオラは思うしな」

不安そうな魔理沙の顔を見かねた悟空は魔理沙にそう囁いたのであった。

魔理沙「ああ、確かにそうだな」

悟空の言葉を聞き確かにその通りだと思つた魔理沙は不安そうな顔をやめ再び気合のこもつた顔に戻つた。(19000文字地点)

霊夢「まあ、とりあえず、悟空が来れないとなると映姫は怪我を負ってるしやっぱりジャネンバと戦うのは私たちに見たいね魔理沙」

魔理沙「ああ、そうだな」

どうやら、これでジャネンバの方へ行くメンバーとあの世から降りてくる地獄の者達を倒すメンバーが決まったようだ。

メンバーは悟空&映姫は死者を倒しに霊夢&魔理沙はジャネンバの元へいく。と、その時!

霊夢「この気は?」

このタイミングでちょうど霊夢が何かに気がついた。

いや、霊夢だけではない悟空と魔理沙も何かを感じとって表情をしている。

悟空「どうやら、来たみてえだな」

魔理沙「ああ、分かったたはいいけどすげえ数の気だぜ」

そう悟空達を感じとったのは例の蘇った地獄の者達の気である。

と、その時!

映姫「あなた方相手が来たってわかるんですか?」

驚いたような表情で映姫がいった。

そうよくよく考えてみると映姫は霊夢達が気を感じることが出来るのを知らないのである。

霊夢「ええ、それなりに修行して相手の場所や強さがわかるようになったのよ」

霊夢が映姫にそう返答した。

映姫「それは凄い！それじゃあ、あいつらが蘇ってきてる場所はどこか教えてもらえますか？」

映姫は、霊夢に尋ねた。

霊夢「分かったわ。ええ」

そっくりながら気を探る霊夢。

そして！

霊夢「なっ……」

霊夢の顔色が変わった。

悟空はすぐさま霊夢に尋ねる。

悟空「どうした霊夢？」

霊夢「う、嘘でしょ！悟空、魔理沙、死人がどこで蘇るか探ってみてよ」

霊夢は慌てた様子でそういった。

魔理沙「ど、どこでって、この方角なら人里の方だけ……。何！あいつら人里の真上で蘇ってやがる！」

映姫「な、なんですって！」

魔理沙と映姫は驚愕した顔を浮かべる。

すると、悟空が慌てて、「おい、おめえ達オラの肩に掴め!」と言った。  
霊夢と魔理沙はすぐさま悟空の肩を掴む。

映姫「え、一体、何を?」

しかし、映姫は何故 霊夢達が肩を掴んだのか意味が分からず困惑する。  
そんな、映姫を見かねた霊夢が映姫に対し「早くしなさい!」と言った。

映姫は、わけがわからないまま悟空の肩を掴む。

その瞬間!

『ヒュン』

悟空は瞬間移動し人里まで移動した。

映姫「え?」

突然、人里にワープした映姫はわけが分からず固まっていた。

そんな映姫に対して霊夢が軽く説明をする。

霊夢「実は悟空、瞬間移動つてのを使えるのよ」

映姫「瞬間移動!そんな事が…!」

瞬間移動と言うとんでもない体験をした映姫は驚きを隠せなかった。(20000文

## 字地点

霊夢「ちよつと、驚くのは後にして、上を見なさい」

映姫は、言われた通り上を振りまいた。

そこには！

悟空「ひえゝ、こりやすげえなあゝ」

そうそこには数えきれないほどの蘇った死者がいた。

人里の真上に空間の穴の様なものが空いておりそこから死者が出てきているはようだ。

霊夢「どうやら、あの穴がああの世に繋がってるみたいね」

霊夢がじつと穴を見つめる。

魔理沙「それにしてもまさか人里の真上で蘇ってくるなんて、こりや下手すりやかなりの被害が出ちまうぞ」

魔理沙が少し焦り気味にそう言った。

確かにこのまま戦つては人里の人々に被害がでかけない。

悟空達は考えるどうすれば人里への被害を減らすことが出来るのか。

悟空「取り敢えず、霊夢に魔理沙おめえ達はいいつらが湧き出ている穴を通るんだ。

多分、あそこがああの世とこの世の境目のはずだ」

悟空がそう霊夢と魔理沙に命令を出す。

しかし、その命令は霊夢と魔理沙にさつきとあの世に行けたのこと確かに元の作戦では霊夢と魔理沙はジャネンバの所は行く予定であったが今はそんな事を言つてられる状況ではない。

このままでは人の命がかかっているのだから。

疑問に思つた霊夢は悟空に尋ねる。

霊夢「いいの?このままじゃ人里が大変なことになるわよ?あいつらを何人か倒してから言つても遅くないと思うけど?」

霊夢はあくまで人の命を優先した考えを持っており今すぐあの世に行くことに少し戸惑いを持っている。

悟空「いや、オラ達がこうしてる間もジャネンバっちゆう奴は更に地獄を荒らしてんだろ?もし、ジャネンバが何かして手遅れになったらおしめえだ。だから、一分一秒でも早く止めねえと手遅れになる前にな...」

魔理沙「でも、それじゃあ人里が大変な事になっちゃうかも知んねえじゃねえか?もし、人里の人々が何十人も殺されたらそれはそれで手遅れつて言うんじゃねえか?」

悟空の早く行けと言う命令に対し戸惑いを持っている霊夢と魔理沙。

まあ、それもそれは今自分達がこのままあの世に行つたらある意味人里を見捨てた

事になるのである。

それは、霊夢達にとっては一番避けたいことの一つ。

そんな、霊夢達の表情と感情を悟った悟空は2人にこう言った。

悟空「でえじようぶだ。ここにいる人たちをぜってえに殺させたりしねえ」

その言葉を聞いた霊夢達は思わず「えっ？」と言葉をこぼす。

霊夢「そんな事が出来るの？」

霊夢は悟空に詰め寄る様に聞いた。

悟空「出来るかどうかは分かんねえ。ただ、やるつきやねえ」

悟空は、今までにないほどの気合のこもった声でそう告げる。(21000字地点)

魔理沙「悟空、お前一体どうするつもりだ？」

魔理沙は、少し不安そうな声を浮かべつつ悟空にそう聞いた。

すると、悟空は若干の笑みを浮かべ作戦を伝えた。

悟空「なあに、簡単さ。まず、オラが空であいつらと戦う。その間に映姫に人里の人

達を非難させてもらうのさ」

悟空の作戦は実に単純かつ正確なものであった。

魔理沙「映姫に人里の人達を非難させてもらってその間に奴らと戦うだって！確かに

そうすれば人里の人々を逃せばにそのあと奴らが人里に降り立ったとしてもすでに非

難が完了した人里では被害が出ない」

霊夢「でも、映姫が人里の人達を逃してる間、悟空あなた一人であの数を相手にするの?今も湧き続けてぎつと100人以上はいるわ。しかも、その中にはぎつと強い妖怪とかもいる。いくら悟空でも危険すぎる」

悟空の意図は分かったにせよ。

どう考えても悟空に対して危険すぎるこの作戦にあまり同意できない悟空。

悟空「だけど、それしかねえんだ。頼むおめえ達オラの作戦に乗ってくれ…。こうしてる間にもあいつらが人里に降りてくる可能性もあるんだ。もうじかんがねえ」

悟空は霊夢達にお願いするように頼んだ。

霊夢と魔理沙も流石にこれほど熱意のこもった感じに言われては断る事が出来ず…。

霊夢「分かったわよ、悟空。あなたに人里を託すわ。絶対に守りなさい!」

霊夢が悟空に気合のこもった声でそう告げた。

魔理沙「よく、考えてみれば、悟空ならどんな相手も瞬殺できるな。変な心配はいらないか。悟空お前に人里を任せませ」

霊夢と同様に魔理沙も気合のこもった声で悟空にそう告げる。

悟空「おめえ達…。ああ、ありがとよ。絶対、人里守ってやつから、おめえ達も絶対にジャンパつちゆうやつを倒せよ!」



悟空がそう返答すると霊夢と魔理沙は「うん」と言わんばかりに首を縦に振りそして、空に出来た謎の空間の穴に向かって行ったのであった。

道中、蘇った死人達に攻撃はされたが霊夢達のスピードについていけるものはなく霊夢と魔理沙はそのまま穴の中に飛び込んだのであった。

悟空「よし、霊夢達は無事に穴を通れたな、じゃあ、オラ達の方もやつか！」

そう言いながら映姫の方を見る悟空

映姫「分かりました。ただ、本当に私は戦わなくていいのですか？」

再度、確認するように尋ねる映姫。

悟空「ああ、おめえは人里の人達を非難させてくれ。そうじゃなきゃ下手すりゃ人里の人達を人質に取られかねえしな」

悟空はそう映姫に告げ大量の蘇った死人がいるところまで全速力で飛び出した。

『ビューン』

飛び立った悟空の背中を見た映姫は、「頑張つて下さい」と小さな声で告げ人里の非難作業を始めるのであった。

『ビューン』

蘇った死人（これからは蘇った死人を死人と呼びます）の目の前にたどり着いた悟空。

死人達の目線は一気に悟空に集中した。

死人「なんだ?おめえは」

死人の中の一人が悟空にそう告げる。

悟空「オラは孫悟空、おめえ達を倒しにきた!」

悟空はそう言いながら100人ぐらいの死人を見つめる。(22000字地点)

死人「倒しにきただつて」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

その瞬間、周りにいた死人達全員が一斉に笑い出した。

そう悟空をなめているのである。

死人「おい、てめえ」

そう言いながら一人の死人が悟空に近寄る。

そして!

死人「オラ達は地獄にいた。つまり巨大な邪気を持つてることだな。そんな奴らの目の前に急にきて倒すとかほざくんじゃねえぞ!」

そう言い終えた瞬間、死人は悟空めがけてパンチを放った。

不意打ちな上に近距離の攻撃いくら悟空でもこれを避けるのは厳しいか…。

そう思われた瞬間!

悟空「よっと」

悟空は、その声を発しながら体を折り曲げ死人のパンチを躲した。

いや、躲すだけではなくその折り曲げた体を戻す反動でそのままカウンターパンチを悟空は放った。

死人「なに!!？」

流石の死人も自分の攻撃が避けられると思っておらず動揺する。

しかし、戦いの中で動揺するのは命取り結局 死人は悟空のカウンターパンチを避ける事ができず吹っ飛んでいったのであった。

それを見た周りの死人達は、悟空を只者ではないと思ひ。

先ほどとは真逆で悟空に対し一気に警戒心を高める。

悟空「今度はおめえ達だ！だりゃ！」

そう言いながら死人達に一気に接近する悟空。

そして、悟空vs死人達の壮絶なバトルが始まったのであった。

くく一方、霊夢と魔理沙サイドではくく

霊夢達は空間の中を現在通過していた。

霊夢「あれが出口かしら?」

霊夢が不意にそう声をかける。

「どうやら、あの世が見えてきたようだ。(23000字地点)

魔理沙「ああ、多分そうだけ。きっとこの先には映姫の言ってたジャンンバって奴がいるはずだ」

そう言いながら更に加速しだす二人。

その時!

霊夢「なっ!!?」

魔理沙「えっ!!?」

あの世付近にきた瞬間、霊夢達の顔が急にこわばる。

いや、正確には焦っているのだろうか。

霊夢と魔理沙は額から汗が滴り落ち落ちる。

そう冷や汗である。

なぜ、急に焦りだしたかと言うと勿論、理由は、

霊夢「な、なんて大きな気なの!」

そうあの世の方から馬鹿でかい気が感じとられたのである。

こんなでかい気をもったものは幻想郷で見たことがない。

霊夢と魔理沙は、察したそうこの気の正体こそ！

霊夢・魔理沙「これがジャネンバの気！」

そうジャネンバの気である。

映姫が言つてた通りそのジャネンバの気は凄まじい者であつた。

魔理沙「な、なんてこつた！ここまで馬鹿でかい気をもつてるとわな」

そう言いながら苦笑いを浮かべる魔理沙。

いや、正確には苦笑い以外どのような顔をしたらいいのか分からないのである。

霊夢と魔理沙は、ここに来てジャネンバの恐ろしさに気づいたのであつた。

しかし、もうここまで来て後に引くことは出来ない。

霊夢達は不安を押し殺し空間の中を進み続けた。

そして、霊夢と魔理沙は数分後無事抜け出した。

そうあの世にたどり着いたのである。

霊夢「ここがあの世？」

そう言いながら周りを見渡す霊夢。

周りにはジャネンバが張ったキャンディーのような結界が広がっておりとてもあの

世と呼べる景色ではなかつた。

その景色を見た魔理沙は思わずこう言葉をこぼす。

魔理沙「なんか、変なところだな」

魔理沙の言う通り周りは変な景色で覆われており普通に生きていくぶんにはまず見ない景色であった。

その感情をあえて言葉で伝えるとしたら始めて海外に行き海外の景色を見た感覚だろうか。

周りにあるものが全て始めてでそれが逆に不安を与えるような感じである。

霊夢「とりあえず、ジャネンバの方へ向かいますよ。気を感じとった感じジャネンバはこの方角を3キロいったところにいるはずよ」

魔理沙「ああ、わかったぜ!」

魔理沙がそう返答をしたのを確認した霊夢は、すぐに飛び立ちジャネンバの方へと向かった。

勿論、魔理沙はその後を追うようにして向かうのであった。

〽数分後〽

霊夢「見えた!」

急にそう声を荒げる霊夢。

「どうやら、ジャネンバを見つけたようだ。」

魔理沙「ついにたどり着いたな霊夢！」

魔理沙は、意気込みがてら霊夢にそう告げる。

霊夢「ええ、そして、私たちの幻想郷をかけた戦いの始まりよ！」

そう霊夢が言うのと同時にジャネンバの目の前にたどり着く二人。

ジャネンバもすぐに霊夢達の存在に気がついた。

ジャネンバ「ジャネンバ？」（24000文字地点）

急に飛んで来た霊夢達を不自然に思うジャネンバ。

ジャネンバは、霊夢達を見つめ続ける。

魔理沙「ひえく、映姫の言う通り本当に赤ん坊みたいな奴だぜ」

霊夢「でも、気をつけなさい。こいつの強さは本物よ。今もこいつの気の圧力だけで

ペツシヤンコにされちやいそうよ」

霊夢と魔理沙がそう会話をした瞬間！

ジャネンバ「ジャネンバ！」

ジャネンバは不意に気弾を二人めがけて放った。

「どうやら、ジャネンバは霊夢達を本能的に敵だと認識したようだ。」

霊夢「うおっ!?」

魔理沙「あぶねっ!!?」

しかし、霊夢達はそんな不意打ちの攻撃すらも余裕を持ちながら躲した。お互いに反対方向に避けあった霊夢と魔理沙。

そして、霊夢が魔理沙にこう告げた。

霊夢「今よ魔理沙! 挟み撃ちで一気の方をつけるわ!」

霊夢が大きな声で魔理沙にそう告げた。

その言葉を聞き取った魔理沙は、「ああ!」と相槌を打ちそして、ミニ八卦炉を取り出す。

それに合わせて霊夢もお札を取り出した。

ジャネンバ「ジャネンバ?」

霊夢と魔理沙が左右に分かれたのでどちらを攻撃すればいいかわからずただ首を動かし2人の姿を確認するジャネンバ。

どうやら、ジャネンバは戸惑ってしまっているようだ。

霊夢と魔理沙はこれはチャンスと思ひ込み。

ジャネンバに対して同時にスペルカードを放った。

霊夢「霊符」「夢想封印」

魔理沙「恋符」「マスタースパーク」



『デウーン』

『デウーン』

右からは霊夢の夢想封印、左からは魔理沙のマスタースパークが放たれジャネンバは完全に逃げ道を失ってしまった。

『ドンッ!!』

2人の攻撃は見事ジャネンバを捉えた。

ジャネンバは爆風の中にとらわれてしまう。

魔理沙「やったぜ霊夢！」

魔理沙がはしやいだ声でそう霊夢に告げた。

霊夢「ええ、案外呆気なかったわね」

霊夢も魔理沙のはしやいだ声を聞いたのと同時に勝利を確信し気を楽にした。

いくらジャネンバでも夢想封印とマスタースパークの挟み撃ちに耐えられるわけがな

い。2人はそう考えたのである。

だが、しかし

「ジャネンバーーーーー!!」

爆風の中からそう声が響いた。

霊夢と魔理沙は思わず「えっ！」と言葉をもらす。

徐々に晴れていく爆風。

霊夢と魔理沙は唾を飲み込んだ。

霊夢「ま、まさか!」

魔理沙「う、嘘だろ!」

霊夢達は驚愕した。

そう!

ジャネンバ「ジャネンバー!」

そう言いながら周りにある爆風を一気に吹き飛ばすジャネンバ。

なんと、ジャネンバは夢想封印とマスターパークのダブル攻撃を耐えきったのであった。

流石の霊夢と魔理沙も言葉を失ってしまふ。

最高火力ではないにせよ。

自分達の自信技をダブルで当てても倒せなかったのだから…。(25000文字地点)

ジャネンバ「ジャネンバ!」

そんな、戦意喪失してしまった2人に対してここぞと言わんばかりに両手を広げ気弾を同時に放った。

霊夢「なっ!?」

魔理沙「えっ!?？」

その気団の速度は最初に放たれた気弾とはスピードもパワーももの凄いなものであった。

流石の霊夢達もそんな気弾を避けきれぬわけがなく手を十字に構え防御体制をとった。

『ドントッ』 『ドントッ』

同時に気弾を食らってしまう霊夢と魔理沙。

その威力は予想通りいや、それ以上に強力な威力を持っており霊夢と魔理沙は二人とも数十メートル吹き飛ばされてしまった。

霊夢「くっっ！」

魔理沙「くっっ！」

聞いてた以上にジャンバが強く焦り始める霊夢と魔理沙。

霊夢「思ってた以上の強敵だわ」

霊夢がそう言葉をこぼす。

また、反対側に飛ばされた魔理沙も同じような事を言った。

魔理沙「なんて、強さだ。下手すりゃ私達よりも強いぜ」

夢想封印とマスタースパークを耐えられた事に答えた2人はどうするべきか考察す

る。

だが、ジャネンバがそんな考察をさせてくれる時間をくれるわけもなく。

ジャネンバ「ジャネンバー……!」

と叫びながら霊夢と魔理沙分この2人に対して無数の気弾を放った。

数が増えたにも関わらずとんでもない威力を持っているジャネンバの気弾。

2人は、これ以上気弾に当たってはいけない!と考え取り敢えずあれを使うのであつた。

あれとは勿論、

霊夢「20倍界王拳!」

魔理沙「20倍魔法拳!」

そう界王拳と魔法拳である。

2人は、この技を使い一気に全ステータスを底上げした。

そして!

霊夢「だりやあああああ!!」

魔理沙「どりやあああああ!!」

なんと、2人はジャネンバが気弾を放ってるなか少々ゴリ押しであるが気弾を避けつ

つ一気にジャネンバに接近する。

そして！

霊夢「はあ！」

魔理沙「はあ！」

仕込まれていたかと思うほどの同時パンチを放った。

ジャネンバは攻撃の反動で倒れこむ。

20倍界王拳と20倍魔法拳、流石のジャネンバもこれをくれば大ダメージのはず

…！

霊夢達は心中そう眩いたのであった。

一度、パンチした腕を引っ込めジャネンバとの距離をとる2人。

魔理沙「やったか？」

霊夢「分からないわ！」

今のが効いたのかまだ自信を持ってない2人は一度、界王拳と魔法拳を解きつつジャネンバを観察したのであった。

すると、「ジャネンバ？」そう声を出しながらあつさり立ち上がるジャネンバ。(26000字地点)

霊夢と魔理沙は、顔を硬直させる。

魔理沙「おい、霊夢なんでだよ!今のパンチは私の本気のパンチだけ?なんで、あいつにダメージがねえんだよ」

魔理沙が震えた声でそう告げた。

確かにその通りである。

いくら強かろうと流石の霊夢と魔理沙の同時攻撃を無傷で耐えるのはおかしい。

魔理沙は、そのことについて指摘するのであった。

霊夢「もしかして?」

そこで、霊夢がある事に気がつく。

魔理沙「なんだ霊夢?何かわかったのか?」

霊夢が何かわかった事をすぐに感じとった魔理沙が霊夢に尋ねる。

すると、霊夢は冷静な口調でこう言った。

霊夢「多分だけどあいつの体って丸っこいからじゃないかしら?」

魔理沙「ああ、確かにそうだけ。ただ、それが一体?」

魔理沙は霊夢が何を言いたいのかイマイチ分からない。

すると、霊夢は正確に説明をし出した。

霊夢「あいつその丸っこい体をクッションにして私たちの攻撃を軽減させているのよ

!」

霊夢が勢い任せな感じでそう告げる。

魔理沙「な、なるほど、確かにそれなら私たちの攻撃があんまり通ってないのも納得できるぜ」

霊夢の言いたいことを理解した魔理沙。

しかし、それにおいて問題も出てきてしまった。

魔理沙「え、じゃあ、あいつにどうやって大ダメージを与えればいいんだよ？あいつ自身の体がクツションがわりになってるってことはわたしたちがあいつにダメージを与えられる方法が思いつかないぜ」

魔理沙は、少し動揺したような表情でそう告げた。

しかし、「ふっ」と霊夢は軽く顔に笑みを浮かべた。

普通ならばこの状況どうすればいいのか分からず焦ってしまうであろう。

しかし、何故か霊夢は違ったのであった。

こんな状況の中、霊夢は笑みを浮かべたのである。

魔理沙「おい、霊夢何笑ってんだよ？私達今すげえやばい状況なんだぜ。どうして、そんな時に笑いが起きるんだ？」

魔理沙は霊夢に尋ねた。

いや、尋ねざるおえなかつたのである。

こんな、状況で何をしたらいいのかわからないなか、魔理沙に残された選択肢は霊夢の若干の余裕が何か確認するかぐらいであったのであった。

すると、霊夢は再び軽く笑みを浮かべ魔理沙にこう告げる。

霊夢「決まってるでしょ! 作戦を思いついたからよ」

魔理沙「えっ?」

霊夢の言葉を聞き思わず、えっ、と言ってしまう魔理沙(27000字地点)

魔理沙「本当か霊夢、本気に奴を倒す方法を思いついたのか!」

魔理沙は、興奮気味になり霊夢に確認を取るように尋ねる。

霊夢「ええ、そうよ。とつてもいい作戦を思いついたわ。ただ…」

霊夢が言葉を濁す。

魔理沙「ただ、なんだ?」

魔理沙は、すぐさまそれにくいつき尋ねた。

すると、霊夢は、魔理沙に真剣な目つきを向けこう告げた。

霊夢「この作戦は魔理沙あなたがカギよ!」

魔理沙「私がかギ?」

急に自分がかギといわれ少し焦り出す魔理沙。

すると、そんな魔理沙を見た霊夢は再度魔理沙に言った。



霊夢「いい、魔理沙！この作戦の失敗か成功は貴方にかかっているの！」

魔理沙「いい、一体、どういう事だ？」

魔理沙が霊夢に尋ねる。

霊夢「な〜に、簡単よ。私が奴の注意を引きつけるから、その間に貴方はマスタースパークのエネルギーを溜めるのそして、エネルギーが最大まで溜まったらマスタースパークを奴の腹にぶち当たるのよ！貴方なら一分あればエネルギーを最大まで溜められるでしょ。流石の奴もマスタースパークのフルパワーをくらっては軽傷じゃすまないはず」

霊夢の作戦をまとめると、どうやら霊夢が囷となるので魔理沙がその間にマスタースパークのエネルギーを溜める。そして、エネルギーが最大まで溜まったら一気にエネルギーを解放してジャンボを吹き飛ばすという作戦である。

魔理沙「な、なるほど。確かに威力重視の私のマスタースパークのフルパワー更には20倍魔法拳を加えればジャンボも倒せるかもしれない。わかったぜ、霊夢お前の作戦乗ったぜ！」

霊夢「あんたに任せたわよ！」

作戦をまとめた霊夢と魔理沙は、作戦通り魔理沙は20倍魔法拳を使いミニ八卦炉を構え魔力を溜め始めた。

魔理沙「はああああああ!!」

ミニ八卦炉は徐々にエネルギーが溜まっていき威力を高めていく。

霊夢は、そんな魔理沙を見て、「任せたわよ魔理沙」とだけ呟くと「20倍界王拳!」と叫びながら一気にジャネンバに接近した。

霊夢が急に近づいてきたのでジャネンバは慌てて気弾を何発か霊夢に放つ。

しかし、霊夢は20倍界王拳を使っておりそのおかげでスピードが上がりジャネンバの無数の気弾を見事に躲けていく。

ジャネンバ「ジャネンバ!」

先程とは全然違う霊夢のスピードに驚きの表情を見せるジャネンバ。

霊夢は、ジャネンバがそれで驚いている間にジャネンバの顔面の目の前まできた。

そして!(280000字地点)

霊夢「だりやりやりやりりりや!!」

と言う叫び声と同時にジャネンバの顔面向かって連続パンチを放った。

しかし、

『ぼよん、ぼよん、ぼよん、ぼよんれ

しかし、ジャネンバにはその柔らかく丸い肉体がクツシヨンのようになりやはり思うようなダメージを与えることが出来なかった。

霊夢「くっつ！」

これ以上やっても体力の無駄遣いそう考えた霊夢は一度ジャネンバと距離をとろうとする。

しかし！

『ガシッ』

霊夢「なっ！し、しまった！」

なんと、一度距離をとろうと油断した隙にジャネンバの大きな手につかまってしまった。

霊夢「くっつ！はあああああああ！」

霊夢はなんとかして抜け出そうとする。

しかし、この赤ん坊を巨大化させたようなジャネンバは普通でないほど握力を持っていた。

ジャネンバ「ジャネンバ」

ジャネンバは表情何一つ変えないまま更にあげる。

そうジャネンバは霊夢を握りつぶそうと考えたのである。

『グギギギギ』

霊夢「く、このままじゃ体中の骨がくだ、かれ、る。はや、く、逃げな、きや」

「靈夢の体は少しずつ圧縮されていき体中の骨が悲鳴を上げ始めた。

まだ、魔理沙のマスタースパークが溜まるまで30秒ほど時間がかかる。

ここそのままでは、潰されるのも時間の問題、靈夢は考えるどうやって抜け出そうかと…。

そして、靈夢はある作戦を思いついたのであった。

靈夢「く、この手から逃げ出すにはあれしかないか」

そう一言だけ告げると靈夢はわずかに動く手首を器用に動かしポケットに入っているスペルカードを出した。

そして、こう宣言する。

靈夢「神霊」「夢想封印 瞬」「」

そう夢想封印 瞬である。

靈夢は、このスペルカードを使い見事ジャンバの手の中からレポートをし抜け出すことができた。

しかし、この技は諸刃の剣。

そうこの技を使ってしまうと…。

靈夢「はあ、はあ、はあ」

そう体力がごっそり持っていかれるのである。

ただでさえ20倍界王拳を使い体力がゴツソリ削られているのに夢想封印 瞬まで使った霊夢の体はかなり体力を失っていた。

霊夢「はあ、はあ、はあ」

息を切らしている霊夢。

すると、ジャネンバはその息切れの音を聞きとつたか、霊夢に近づいてきた。

ジャネンバ「ジャネンバ」

一歩一歩ゆっくりと近づいてくるジャネンバ。

ジャネンバの速度はゆっくりであったがジャネンバとの距離は約10メートルほどしかなく次にジャネンバに捕まればアウトであった。

霊夢「く、魔理沙まだたまらないの！」

とつさに魔理沙に尋ねる霊夢

魔理沙「まったくくれ、あとほんのすこしだ！」（29000文字地点）

しかし、魔理沙のエネルギーはまだ溜まっておらずかなりのピンチを迎えてしまう。

魔理沙のエネルギーはあと少しで溜まるというが果たしてジャネンバが霊夢の元へ辿り着くのが先かそれとも魔理沙のエネルギーが溜まるのが先かギリギリの戦いになった。

ジャネンバ「ジャネンバ」

霊夢が弱つてすることに気づいたか余裕の表情を浮かべ霊夢に近づいていくジャネンバ。

霊夢とジャネンバとの距離は残り5メートルとなった。

霊夢の頭に敗北と言う文字が横切る。

つまり霊夢はこの戦い負けたと確信したのであった。

と、その時!

魔理沙「よし、溜まったぜ!」

まさにグッドタイミング魔理沙のミニ八卦炉は七色に輝き出す。

そうこのミニ八卦炉に物凄いパワーが圧縮されているのであった。

『ビューン』

ミニ八卦炉を固定しつつ一気に霊夢とジャネンバの元へ駆け寄る魔理沙。

もうすでに霊夢とジャネンバの距離は3メートルをきつていた。

魔理沙「まずい、このままじゃ霊夢が!」

そう思い急いでジャネンバに接近する魔理沙。

と、ここで魔理沙が近づいてきていることに霊夢は気がついた。

霊夢「まったく遅いのよ魔理沙」

霊夢が軽く笑みを浮かべそう言った。

しかし、どう考えても魔理沙よりも先にこいつが私の所へ来る。そう考えた霊夢は、残りの力を使いジャネンバに気弾を放った。

しかし、その気弾にはあまり威力がこもっていない。

パッと見ミスショットにみえるその気弾。

ジャネンバもあまり威力がこもっていないだったので気にすることなく霊夢に接近しようとする。

しかし、ジャネンバはこれがミスショットではないことを実感するのであった。

『ヒューン』

あまり威力のこもっていない霊夢の気弾であったが位置は正確でありジャネンバの顔に直接飛んであった。

『ドンっ！』

ジャネンバに見事命中する気弾。

しかし、威力がなかったこれでは流石のジャネンバにもたいしたダメージはないように思われる。

しかし、それは大きな間違いであることが次の瞬間思い知らされることになる。

ジャネンバ「ジャネンバ！」

急に苦しみ出し顔を抑えるジャネンバ。

なんと、あの低威力の気弾にたいして大ダメージを与えていたのである。  
ジャネンバ「ジャネンバ!!」

そう叫びながら片目を抑えるジャネンバ。

もうここでお気づきであろう。

そう霊夢はジャネンバの目に気弾を投げつけたのである。

かつて、悟空が大猿ベジータにやったように……。(30000文字地点)

流石のジャネンバも目を攻撃されてはたまったものではない。

ジャネンバは足を止めてうずくまっていた。

そして、その間に霊夢の元にたどり着く魔理沙。

魔理沙「やるじゃねえか霊夢」

霊夢を褒める魔理沙

まあ、確かに一人で命がけの時間稼ぎをしたのである。

これは褒められて当然と思っただけなのである。

霊夢「ふ、早く決めてちょうだい」

霊夢は、魔理沙にそう一言だけ伝える。

魔理沙は、そんな霊夢にたいして「ああ」とだけ相槌を打つ。



そして！

魔理沙「マスタースパーク（フルパワー）」

魔理沙はマスタースパークを放ったそのマスタースパークは今までの数倍の力を持つっておりジャンバはそのままマスタースパークの中に飲み込まれてしまった。

ジャンバ「ジャンバーー！」

マスタースパークをくらった瞬間そう叫ぶジャンバ。

しかし、勿論ジャンバを助けるものなど誰もおらずジャンバはチリになってしまったのであった。

魔理沙「やったか？」

霊夢なら確認をとるように尋ねる魔理沙。

霊夢「ええ、どうやらそう見たいね」

霊夢もそのあと見渡したがどこにもジャンバの姿が見えずどうやらジャンバを倒すことに成功した。

霊夢達はそう心に呟く。

魔理沙「いやー、それにしても凄い敵だったぜ油断してたら多分普通に負けてたぜ」

魔理沙は、少しハラハラしたような表情でそう言った。

その魔理沙の表情には喜びも混じっておりどうやら相当嬉しいようだ。

ここまでは……。

霊夢「ん?」

ここで霊夢があることに気がつく。

霊夢「魔理沙、あれ何かしら?」

そう言いながら一点を指差す魔理沙。

魔理沙は、「えっ?」と言葉をこぼしつつ霊夢の指差す方へと振り向いた。

魔理沙「なっ!?」

その瞬間魔理沙の顔が険しくなる。

霊夢も「嘘でしょ」と呟いた。

そう霊夢達の見たものは!

霊夢「煙が煙のようなものが一点に集まっていく!」

そう煙であった。

しかし、勿論ふつうの煙ではない。

なんと、その煙からは気が感じ取れたのである。

とてつもなく悪い気を…。

『ビューーン』

煙は徐々に人のような大きさに型取られる。

そして！

ジャネンバ「ハツハツハツハ」

なんも、ジャネンバが復活したのであった。

しかも姿は大きく変わっており人間サイズになり紫色と赤色がメインになっている。

魔理沙「おいおいおい！嘘だろ霊夢」

魔理沙は、すぎるように霊夢に尋ねた。

どうやら、目の前で起きたことを信じたくないようである。(31000字地点)

しかし、無情にも霊夢は首を横に振り魔理沙にこう告げる。

霊夢「どうやら、本気のマスタースパークが効かなかったみたいね」

その言葉は魔理沙の心にグサツとささった。

魔理沙「おいおい、霊夢。私はフルパワーで放ったんだ。それで倒せないわけないぜ。

ていうか、それが効かなかったんじや私達の勝機はほぼないぜ！おまけにめちやくちや

強そうなルックスになってるし」

焦り気味にそういう魔理沙。

どうやら、ジャネンバを仕留めれてないなんて考えたくもないのであろう。

理由は、そう！魔理沙も言ったがこつちの最高火力であるマスタースパークのフルパ

ワーを耐えられてしまったのである。

これが意味することは、すなわち敗北。

そう霊夢達は自分達の限界を使っても倒せなかったと言うことを実感させられたのである。

しかも、ジャンバは先程よりもパワーアップしておりもはや桁違いの強さを持っている。

しかし!

霊夢「だからって戦わない訳にはいかないでしょ! いい、魔理沙子の戦いはこの世とあの世全てをかけた戦いなこの戦いに負ければ幻想郷は終わりなの」

素晴らしいながら霊夢はジャンバにたいして戦闘体制をとった。

先程の戦闘で体力をかなり削ってしまったのにもかかわらず…。

そんな、霊夢の姿を見た魔理沙は、自分が怯えているのを恥ずかしく思えてきた。

だってボロボロの霊夢がここまで戦う意思を見せているのである。

逆にここで戦わなかったら後悔する。

魔理沙は、そう考えたのであった。

魔理沙「確かにそうだな霊夢。そうだ! 私たちは負けられないんだ! この戦いは幻想郷をかけた戦いその戦い私も悔いが残らないよう全力で戦ってやるぜ!」

素晴らしいながら霊夢の横に並ぶようにし戦闘体制をとる魔理沙。

そんな、魔理沙にたいして霊夢が少しからかうように「あらあら、さっきのマスターパークでかなり体力を使っちゃったんじゃないの？」と呟いた。

魔理沙「それはお互い様だぜ。お前だつてかなり体力がヤバいくせに」

魔理沙も負けじとそう言い返した。

二人の顔には若干の笑顔が混じっていた。

そう今の単純な会話ですらも二人にとつては安らぎの会話であつたのだ。

霊夢「魔理沙よく聞きなさい。確かに奴の気はかなり増加したわ。でも、その分奴は小型化し人間みたいな姿になつてるの」

魔理沙「ああ、でも、一体それがどうしたんだ？」

霊夢「よく考えて見なさい。あんな姿になつたつてことはさっきまであいつのクツシヨンとなり体を保護していた体の丸みがなくなつてきているのよ。てことは、少なくともさつきよりダメージが通りやすいということよ！」（32000字地点）

その霊夢の言葉を聞いた魔理沙は思わず「な、なるほど！」と言葉を発した。

魔理沙「てことは、ジャンンバに二人掛かりで戦い原子レベルまで粉々にしてやれば！」

霊夢「ええ、まだ勝利の可能性があるわね」

霊夢「行くわよ! 魔理沙!!」

掛け声をかける霊夢。

魔理沙は、その掛け声にたいして、「ああ!」といった。

そして!

霊夢「20倍界王拳!」

魔理沙「20倍魔法拳!」

ダメ元で一気に界王拳と魔法拳を20倍まで上げるのであった。

『ビューーン』 『ビューーン』

その瞬間、瞬時にジャネンバに近づく霊夢と魔理沙。

そして!

霊夢「はあ!」

魔理沙「だりゃあ!」

二人はジャネンバに同時パンチを放った。

そのパンチには威力が込められており普通の妖怪程度なら一撃アウトであろう。

しかし!

『スカッ』 『スカッ』

霊夢「なっ！」

魔理沙「えっ！」

なんと、霊夢達の攻撃が当たる瞬間、ジャネンバが消えた。

霊夢達は、「えっ」と心中思いつつ周り見渡す。

すると、15メートル程だろうか。

なんと、ジャネンバが元の場所から15メートルも移動してたのである！

霊夢と魔理沙は戸惑った。

それもそのはず今の今までここにいたのに攻撃が当たる直前にジャネンバが消えたのだから…。

霊夢「一体、どうして？」

少し考察を入れる霊夢。

しかし、その瞬間！

『ヒュン』

霊夢「えっ！」

『バゴーン』

なんと、一瞬、ジャネンバがどうやって移動したのか考えていた間にジャネンバが一瞬で霊夢に迫りそして、霊夢の腹めがけてパンチをはなったのであった。

霊夢「ガハッ!」

口から唾液が飛び出す霊夢。

霊夢は、そのまま倒れ込んでしまった。

ジャネンバ「ハッハッハッハ」

倒れ込んだ霊夢を見下すように立つジャネンバ。

そして、ジャネンバが霊夢にたいして手を掲げる。

そうトドメの一撃を放つつもりだ。

しかし!

ジャネンバ「ジャネ……!」

魔理沙「魔符「スターダストレヴァリエ」」

『ヒューン』『ヒューン』『ヒューン』

そうはさせないぞ!と言わんばかりにスペルカードを使う魔理沙。

近距離でのスペルカード流石にジャネンバもこればかりは避けられないだろう。

魔理沙は、そう考えた。

『ドン、ドン、ドン』

三発ほど当たる弾幕。

この流れに入ったら抜け出すことは普通できない。



魔理沙は、やったぜ！と心の中でつぶやいた。  
しかし！

『ヒュン』

魔理沙「なっ！」

4 発目が当たる直前だろうか。

ジャネンバが姿を消した。

いや、正確には20メートル後ろに下がったのである。

あの近距離からのスペルカード普通ならば避けることが出来ないはず…。

しかし、そんな考えとは裏腹にジャネンバは3発ほどしか受けずたいしたダメージにならなかった。(33000字地点)

魔理沙「一体、どうやって！」

困惑する魔理沙。

ジャネンバ「ジャネンバ！」

今のは危なかったぞ！と言わんばかりの表情でジャネンバが魔理沙に言った。

魔理沙「おい、大丈夫か、霊夢！」

魔理沙は倒れこむ霊夢に声をかける。

霊夢「う、」

霊夢が声わずかに聞こえた。

どうやら、意識はあるようだ。

魔理沙「立てるか霊夢」

そういいながら霊夢の肩を持つ魔理沙。

しかし、霊夢はもはや立つ体力すら残っておらずまた、すぐに倒れ込んでしまう。

霊夢「ぐ、ごめん、結構、きつ、い、わ」

途切れ途切れに霊夢はそう言った。

ジャネンバ「ハ、ハ、ハ、ハ」

ジャネンバがじわりじわりと近づいてくる。

恐怖を感じとった魔理沙は霊夢にこう言った。

魔理沙「おい、立てよ霊夢! 私一人じゃ何もできないぜ」

魔理沙の目からは涙がにじみ出ている。

これは、恐怖からの不安と霊夢が倒れてしまったという悲しみ2つからくるものであ

ろう。

霊夢は、そんな魔理沙の表情を見つつこう伝えた。

霊夢「魔理、沙よく聞きなさい。あい、つ、の、能力が、分かった、わ」  
意識が飛びそうな中、霊夢は必死に魔理沙に言葉を放つ。

霊夢「あいつの能力、は、恐らく、小町の、能力で、ある。距離を、操る、能力よ。映姫、が、言ってた、で、しよ。あいつ、は、小町、のから、だ、を乗っ取っ、て実体化、したって」

言葉を出すごとに詰まりが酷くなる霊夢。

魔理沙「距離を操る能力。そんなこと言われてもどうしたらいいんだぜ」

魔理沙は、自分の涙を拭きたり霊夢に尋ねる。

しかし

霊夢「、、、、、、」

霊夢からの返答はなかった。

魔理沙「おい、霊夢、霊夢ー!!」

何度も何度も霊夢を呼びかける魔理沙。

だが、霊夢からは一向に返答はこなかった。

魔理沙は、霊夢の心臓に手を当てた。

『ドクン、ドクン、ドクン』(34000文字地点)

魔理沙「まだ、息はある」

とりあえず、霊夢が生きてたことに安堵を持つ魔理沙。

しかし、魔理沙は考える。

霊夢が戦えない今、距離を操る能力を持つジャンンバをどうやって倒そうかと…。

『ビシ、ビシ、ビシ』

ジャンンバは足跡を響かせ残り10メートル程まで迫ってきていた。

魔理沙「クソ、一体どうしたらいいんだ!」

魔理沙は、頭を抱え込み考え込んだ。

と、その時!

『こつちです』

魔理沙「えっ?」

どこからともなく声が聞こえた。

魔理沙は周りを見渡す。

しかし、その声の主のようなものをいくら探そうとも姿が見えなかった。

魔理沙「誰だ!」

魔理沙がそう叫ぶ。

すると、またしても

『こつちに来て下さい』

さつきと全く同じ声が響いた。

その声は魔理沙から見て右斜め前の方から聞こえてくる。

この声の主が誰か分からず不審に思う魔理沙。

しかし、後ろからはジャンネバがもう5メートル程まで迫っており魔理沙に考える余裕はなかった。

魔理沙「くそっ！今はこの声の主をしんじるしかねえ！」

魔理沙は、そう叫ぶと地面に気弾を放った。

そう目くらましである。

ジャンネバ「ジャンネバ！」

気を読むことのできないジャンネバにとってこれは1番厄介なことであった。

ジャンネバは、爆風の中急いで魔理沙に駆け寄った。

しかし、これがジャンネバのミスであった。

魔理沙「だりやりやりやりや」

爆風の中、弾幕を放つ魔理沙。

そうジャンネバとは違い魔理沙は相手の気を感じることが出来るのである。

ジャンネバ「!!」

流石のジャンネバも爆風の中 急に飛んでくる気弾に対応など出来るわけもなく。

『ドン』『ドン』『ドン』『ドン』『ドン』

いくつもの魔理沙の気弾を全部受けてしまった。

魔理沙は、その弾幕でジャネンバが怯んでいるすきに霊夢を抱え声のした方向へ飛んで行ったのであった。

く数分後く

ようやく爆風が晴れ始めた。

ジャネンバは、周りを見渡す。

しかし、勿論、魔理沙の姿はそこにはなかった。

ジャネンバ「ジャネンバー!」

怒ったようにそう叫ぶジャネンバ。

そして!

『ビューーン』

まだ、遠くへは行ってはいないはず!と考えたのか魔理沙を探し始めたのであった。

く魔理沙サイドく

魔理沙「確か声が聞こえたのはこの辺の筈だな」

魔理沙は、ジャンンバが自分達を見失つてる間に謎の声の発信源へと辿りついていった。

魔理沙「随分飛んだけど、ここは元々 天国だった場所か？」

封印されていてよく分からないが結界の中に自然のようなものが見え魔理沙はここが天国だと仮定する。

そんな事を行っていると再び。

『こつちです』

謎の声が聞こえた。

魔理沙は、霊夢を抱きかかえつつ正確な声の場所を探していく。(35000文字地点)

そして！

ついにその声が発せられていた結界を見つけた。

魔理沙「ここか？」

魔理沙は、謎の声に尋ねる。

すると！

結界の表面に人が映り出した。

恐らくこの結界の中に閉じ込められた人かつ謎の声の正体であろう。

結界の中にいたのは女性で巫女のような服を着ていた。

『ええ、そうです』

結界の中から女性のような人が魔理沙にそう言った。

魔理沙「お前がさっきの声の……」

魔理沙が女性に尋ねる。

女性「はい、そうです。私は先程あなたをこつちに呼んだ者」

女性の口調は礼儀正しく優しさも感じ取れた。

魔理沙は、尋ねる。

勿論、内容は、

魔理沙「お前、一体なにもんだ!」

そうこの女性が一体何者かである。

しかし、ここで女性から思わぬ事を言われるのであった。

『うくん、そうですね。分かりやすく言えば博麗家の先代の巫女、博麗靈夢と申します』

な、なんと!このお方は、先代の巫女であった。

魔理沙「な、なんだって!」

驚愕の事実を聞いた魔理沙はとてつもない衝撃を受けた。

魔理沙「て、て、てことは、あなたは、れ、れ、霊夢のせ、せ、先祖とい、いうわけ



ですか」

驚きのあまり言葉が詰まりまくり自分でも何を言ってるかよく分からなくなった。

『はい、そうです』

魔理沙とは裏腹にあつさりと返答をする靈夢。

魔理沙「一体、そんな先代の巫女がなんのようですか？」

魔理沙が靈夢に尋ねる。

『そんなのこゝと決まっていますよ。この結界を壊してください。あの邪念の塊を倒すために！』

先程までの穏やかさとは真逆で気合いのこもったその声には魔理沙も一瞬戸惑うほどであった。

魔理沙「こゝ、壊す？」

魔理沙が靈夢にリピートするように尋ねた。

『はい、この結界を壊して頂ければ我々は現博麗の巫女の体に入り邪念と戦います。まあ、体を操作するのは現博麗の巫女、博麗靈夢ですけど』

どうやら、この靈夢は、今ジャンパの放った結界により周りと同じように結界に封印されてしまったのである。

魔理沙「ちよ、ちよっと待て！」

靈夢の話聞いた魔理沙が少し戸惑った表情を表した。

魔理沙「現博麗の巫女って靈夢の事だろ。なんでわざわざ靈夢の体の中に入るんだよ！それに入ったとしても靈夢の体は見ての通りボロボロとても戦える体じゃないぜ」

『よく考えてみて下さい。私たちは死んだ者。もう体は無いのです。だから、生きている者の体を借りるしか方法はありません。きっと邪念も生きていた方の体に乗っ取ったのはずです」

魔理沙「た、たしかにあいつは小町って言う奴の体に乗っ取ったって聞いたが…」  
どうやら、死んで肉体のない者は肉体のある者に取り付く必要があるようだ。

『そして、現博麗の巫女がいくらボロボロであろうと私たちが体に入りエネルギーを分け与えれば回復しなおかつ私たちの力を全て現博麗の巫女、そう博麗靈夢に密集させることが出来るのです」

話を聞く感じどうやら、靈夢の体は大丈夫なもよう。

これで魔理沙の疑問もなくなったはず…。

しかし、魔理沙は、あと一つ疑問があるようだ。

魔理沙「ちよつと待てさつきからお前、我々や私たちって言うてるがお前以外にもそこに誰かいるのか？」

魔理沙は、靈夢に尋ねた。

『あれ、言つてませんでしたか』

靈夢がそう答えると結界に何人か人が映りだした。

そここの人達は！

『私達は、1代目から12代目まで全て揃っています』

な、なんと先代だけでなく歴代の巫女が勢揃いしていたのである。

魔理沙「ちよ、ちよつと待てお前達12人で靈夢の体に入る気か？」

魔理沙は、歴代の博麗家に尋ねる。

『当たり前です。あなたも分かるでしょ。奴はそうでもしないと倒せないって』

魔理沙「でも、そんな事して靈夢の体は大丈夫なのか？」

魔理沙は、不安げに尋ねた。

『よく考えて下さい。邪念は何百体と言う悪霊の塊で出来ているのです。その魂達が一  
人に入っているのにその方の肉体は滅んではいません。と言うことは、その面において  
は安全ととれます』

靈夢の話は根拠が存在しており説得力は高かった。

魔理沙は思ったことは、この博麗家を信じるしかないと…。

幸いにも魔理沙はジャネンバにまだこちらの居場所がバレておらず時間が結構あつた。

さらに靈夢と喋ってる間 少し体を休めたこともあり体力を回復させることが出来た。

魔理沙は、今しかないと思いきに一気に魔法拳を20倍まで上げる。

そして、ミニ八卦炉を構えた。

魔理沙「はあああああ」

そして、エネルギーを溜め始める魔理沙。

そうこれは先程赤ん坊の姿のジャネンバを吹き飛ばしたマスタースパーク（フルパワー）である。

溜めるのには1分かかると言うデメリットがあるがジャネンバに見つかっていない今これをする大チャンスであったのである。

〜1分後〜

魔理沙「よし、溜まった!」

虹色に輝くミニ八卦炉。

そして、そのままそのエネルギーを「マスタースパーク!!」と叫びながら放出した。

『ドゥーン』

結界にぶち当たる魔理沙のマスタースパーク。

これは流石にジャネンバの結界と言えど壊せたかと思われた。(37000字地点)

しかし！

『シューッーン』

エネルギーがつき威力が落ちて行くマスタースパーク。

魔理沙は、結界に目をやった。

しかし！

魔理沙「なにっ!?？」

驚きのあまり声を出す魔理沙。

なんと結界には何一つヒビが入っていないなかったのである。

これには流石の魔理沙も歴代の巫女も予想外！

『な、なんて硬い結界なの！』

魔理沙「まさか、私のマスタースパークで壊れないなんて！」

そう言った瞬間！

魔理沙「ぐっ！」

膝を地面に落とす魔理沙。

そうあのマスタースパーク（フルパワー）は威力と引き換えに体力をこつそり持つて行ってしまう技。

魔理沙は、今ので体力を失ってしまったのである。

魔理沙「くそっ!なんで壊れないんだよ!」

希望がなくなりそれが怒りへと変わる魔理沙。

と、その時!

『バキッ』

わずかながら結界にヒビが入った。

魔理沙「えっ?」

あまりにも突然のひび割れに戸惑う魔理沙。

魔理沙「今なんでヒビが入ったんだ!マスタースパークでは恐らく無いしそっちで何

かやったのか?」

魔理沙は巫女達に尋ねた。

『いえ、なにも。あなたが喋った瞬間に急にヒビ割れが…』

どうやらヒビが入った理由は巫女達も分からないようだ。

魔理沙「私が喋った瞬間?私が喋ったのは、くそっ!なんで壊れないんだ、はず」

魔理沙が自分の喋った言葉を思い返す。

すると、

『バキッバキッ』

再び結界にヒビが入った。

『やはりそうです。その言葉の中に何かこの結界を壊す単語が入っているのです』

魔理沙「何か壊す単語だつて？」

そう言い魔理沙は、一言一言何に結界が反応したのか調べ始める。

魔理沙「ええつと確か最初は…」

魔理沙「くそつ！」

『ビシッ』

魔理沙「え？」

いきなり結界にヒビが入った。

どうやら、「くそつ！」と言う言葉で反応したようだ。

『なるほど、もしかするとこの結界 悪口に弱いのかもかもしれませんね』

魔理沙「悪口？」

『はい。試しにもつといろんな悪口を行ってみて下さい』

それを聞いた魔理沙は、言われた通り

魔理沙「バカ、アホ、マヌケ、クソ野郎！」

となんとも言えない言葉を連発した。

すると、

『バキッバキッバキッバキッバキッ』

かなりの勢いで結界にヒビが入っていく。

魔理沙は、確信した。

ジャンネンバの結界、そして、恐らくジャンネンバ自身も悪口に弱いと。

魔理沙「なるほど、本当に悪口に弱いんだな。それじゃあ」

「ここは魔理沙の将来に関わるのでカットします」

魔理沙「ふう、これだけ言えばボロボロだろ」

そう言いながら魔理沙は結界を見た。

しかし、結界は思ったよりも分厚くまだ、貫通はしていない模様。(38000字地点)

魔理沙自身そろそろ声も枯れ始めた。

魔理沙「はあ、はあ、はあ」

少し息を切らす魔理沙。

まあ、無理もないあれだけ言い続ければ流石に体力的にもきついであろう。



しかし、恐らくあと2回ほど言えば壊れるぐらいまで结界をした。少し休憩を挟み喉の調子を整え再度魔理沙は、口を大きく開けた。そして！

魔理沙「バ……」

『スタツ』

魔理沙が叫ぼうとした時、嫌な音が後ろから聞こえた。

魔理沙は、一瞬体が凍ったように動かなくなる。

ゆっくりと後ろを振り返る魔理沙。

そこには！

ジャネンバ「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

ジャネンバがいた。

どうやら、叫びまくってる間にすぐそこまでできてしまっていたようだ。

魔理沙「いつのまに！」

戸惑う魔理沙。

すると、後ろから先代の巫女達が魔理沙に言った。

『あと少しです。そいつはほつといてあと2回ほど悪口を言うのです』

その言葉を聞いた魔理沙は少し落ち着きを取り戻す。

そして!

魔理沙「バカヤロー!」

と叫んだ。

『ビシッ』

結界のヒビが更に大きくなる恐らくあと一回、あと一回で壊れるであろう。

しかも、

ジャネンバ「ぐあああああ!」

どうやら、予想通りジャネンバ自身も悪口には弱く苦しみ出した。

魔理沙は、この隙を見逃さまいと口を大きく開ける。

そして!

魔理沙「このク……」

魔理沙が叫ぼうとした瞬間

『ガシッ』

ジャネンバ「はあ、はあ、はあ」

な、なんと、ジャネンバは距離を操り魔理沙の前に来て魔理沙の右手で首を押さえつ

けていた。

魔理沙「ぐ、ぐぐ」

苦しみだす魔理沙。

まあ、無理もない首を締め付けられているのだから…。

『なっ？！』

結界の中から見えていた歴代の博麗の巫女達も流石にヤバイと感じとった。

これを言葉で言い表すならそう逆転負けというものである。

魔理沙「ぐ、ぐぐ」

なんとか抜け出そうとこころみる魔理沙。

しかし、ジャネンバの握力は強く徐々に苦しくなってくる。

このままではまずい！

魔理沙は、そう考えた。

どんどん意識が遠のいていく魔理沙。

その時！

「はあー！」

『ヒューーン』

『ドーン』

ジャネンバ「ぐはっ！」

どこからともなく気弾が飛んで来ジャネンバに当たった。

ジャネンバは一瞬怯み魔理沙の首を離してしまふ。

魔理沙は、苦しみつつも気弾が飛んで来た方向を振り向く。

そこには!

霊夢「はあ、はあ、はあ」

なんと、霊夢が意識を取り戻していた!

恐らく、タイミング良く意識を取り戻したのであろう。

しかし…。

『バタンッ』

今のでまた体力を使ってしまい気を失ってしまった。(39000字地点)

魔理沙「霊夢!」

再び倒れた霊夢を心配する魔理沙

ジャネンバ「ジャネンバ」

再び魔理沙の首を締めようと手を伸ばす。

しかし、魔理沙も霊夢が繋いでくれたこのチャンス逃すわけにはいかない!

そう考えジャネンバの手が自分の首にたどり着く前に急いで魔理沙は叫んだ。

魔理沙「このクソ野郎!!」

『バリントッ』

魔理沙「ぐっ！」

魔理沙は、再び首をしめつけられる。  
しかし！

『ヒューーン』

魔理沙が壊した結界から何かが12個飛び出した。

その飛び出した12個の何かは霊夢の周りにまとわりつく。

そして、そのまま霊夢の体の中に入っていったのであった。

く霊夢の心の世界く

『起きるのです。現博麗の巫女』

霊夢が心の中で霊夢に話しかける。

霊夢「ん？あなたは？」

霊夢はずっと気絶していたので目の前にいるのが誰か分からない。

『私は博麗霊夢。先代の巫女です』

霊夢「先代の巫女？」

『はい。そして、この周りにいるのは』

霊夢「周り?」

そういいながら周りを見渡す霊夢

そこには!

『私は2代目の博麗の巫女』

『私は3代目の博麗の巫女です』

『私は4代目の博麗の巫女だぜ』

『うちは5代目の博麗の巫女やで』

『私はえつと多分6代目の巫女かな?』

『私は7代目の巫女』

『私は8代目ですよ』

『私は9代目の博麗の巫女でございます』

『10代目の博麗の巫女やで〜』

『11代目の巫女や』

『12代目の巫女よ。久しぶり霊夢』 ↑一様、霊夢のお母さんなので霊夢の事を知っている。

全ての巫女が霊夢の心の中に入り込んでいた。

そう先程霊夢の体に入ったものはこれだったのである。

霊夢 「これが全員博麗の巫女…」

少し戸惑う霊夢。

『私達は先程、金髪の方に結界から出してもらったのです。あの邪念を倒すために』

霊夢 「金髪の方？あ、魔理沙の事ね。あいつなかなかやるじゃない。でも、貴方達幽霊だから体がないんじゃないの？」

霊夢が霊夢に尋ねる。

『そういえば貴方にはまだ話し終えていませんでしたね』

霊夢 「なにを？」

霊夢の意味深な発言に少し疑問を持つ霊夢

『実は私達あなたと一体化しようと思ってるのです』

霊夢 「一体化？」

『はい。私達12の博麗の魂+貴方の魂が貴方の体で一つに超人的な力を得るのです。勿論、命に別状はありませんしこの戦いが終わったらこの体からは必ず出て行きます』

霊夢 「なるほどね。なんとなくだけど分かったわ」(400000字地点)

そう言いながらキリツとした目で霊夢をみる霊夢。

『あの邪念は、そこらへんにいる妖怪とは次元が違います。やつを倒せるのは私達博麗の巫女のみ！あなたも博麗の巫女ならどうかこの作戦になって下さい！あなたの許可

がなければあなたと一体化は出来ないのです』

その言葉を聞いた霊夢は、考えるまでもなく即答でこういった。

霊夢「あいつを倒すにはもうそれしかない。分かったわ! やつてやろうじゃない博麗家全員の融合を!」

霊夢は、気合いがこもった声で歴代の巫女達にそう言った。

それを聞いた霊夢は、少し微笑みながらこういうのであった。

『ありがとう』

その言葉を霊夢が放った瞬間!

『しゅーん』

博麗の巫女達が溶けるように霊夢自身の魂に入っていくのであった。

魔理沙「ぐ、ぐぐ」

首を絞められ苦しむ魔理沙。

そう悪口を言うまでは良かったのであったがそのあとまたすぐに首を掴まれてし



まったのである。

魔理沙の目から徐々に光が薄れていく。

魔理沙は、ここで思う。

もう、ダメだ！

と、その時！

『ベヒーモン』

倒れていた霊夢の体が急に光出したのであった。

ジャンンバ「ジャ、ネンバ」

ジャンンバはその光を直接目に浴びてしまった。

そして、思わず魔理沙をはなし両手で目をふさぐ。

魔理沙「ふ、おそいぜ」

そう言いつつ霊夢の方を振り向く魔理沙。

そこには！

霊夢「待たせたわね。魔理沙！」

霊夢の体は金色の光を放ち髪型なども微妙に変わっていた。

ただ、魔理沙は気づくそんな外見のわずかな変化よりもっと大きな変化を…。

それは、気の大きさである!

あの金色に輝く霊夢そこから溢れ出す気は今までの霊夢の20倍界王拳の強さと比べ10倍、いや15倍ほどの気を持っていた。

恐らく、これが博麗家全ての力が一体化の強さであろう。

その霊夢の姿を見たジャネンバは、魔理沙に対しての興味は完全になくなり霊夢一点を見つめる。

ジャネンバ「ジャネンバー!」

そして、大きさジャネンバと叫び一気に気をあげた。

霊夢「ふん、弱い犬ほどよく吠える。さっさと、来なさいよ!」  
ジャネンバを煽る霊夢。

その表情は余裕で満たされており絶対の自信を感じ取れた。

その言葉に少しいらだちを覚えたジャネンバは戦闘体制をとる。

そして!

『ビューーン』

先程と同様に距離を操る能力を使い霊夢の前までワープした。  
そのまま霊夢の腹に向かって全力でパンチを放つジャネンバ。

しかし！

『シユン』

ジャネンバのパンチが当たる瞬間、霊夢が姿を消す。(41000字地点)

ジャネンバは驚いた表情を浮かべ周りを見渡した。

すると、後ろから「こつちよ」と声が響く。

ジャネンバは、「えっ?」と言った表情で後ろに振り向いた。

その瞬間！

『バコン』

ジャネンバ「ぐ、ぐがが」

霊夢は振り向いたジャネンバの顔面めがけてパンチを放った。

霊夢「ふん、ノロマね」

顔を殴られ座り込むジャネンバ。

それと、同時にどうして霊夢が後ろに現れたか戸惑いの表情も浮かべた。

霊夢「どうやら、私が急に後ろに現れて戸惑ってるみたいね」

ジャネンバ「ぎ、ぎぎぎ」

苦しんでいるジャネンバを見下すように言う霊夢。

霊夢「いいわ。教えてあげる。冥土の土産に持って行きなさい。と、言ってもあんた

もう死んでたわね」

さつきまであそこまで苦戦していたジャネンバをまるで子供のようにもて遊ぶ霊夢。今の霊夢の強さは半端ではないのである。

霊夢「私はね。歴代の巫女達と一体化したことで一時的に瞬間移動ができるようになったの。私一人じゃなかなか完成までは出来なかつたけど今の私は一人じゃない! 歴代の巫女の力が揃っているからこそ出来た技よ! まあ、ようするにあんたのように距離を操るインチキ瞬間移動じゃなくて本当の瞬間移動を私は身につけたってわけ」

魔理沙「は、は、は、まさかあの強さに加えて瞬間移動まで出来るのかよ霊夢。こりやとんだ化け物だな」

見ていた魔理沙ですらそのチート的な強さに唖然としてしまう。

ジャネンバ「ぐ、ぎぎぎ」

ジャネンバは、負けまいと必死に立ち上がる。

霊夢「あら、私のパンチを受けてまだ立てるのね。やっぱり、強いわあんた!」

そういいながら霊夢もジャネンバと同様に再び構え出した。

ジャネンバ「はああああ!」

今度は、距離を操らず真つ向勝負に出るジャネンバ

どうやら、ジャネンバ自信も相当焦ってるようだ。

しかし、そんな抵抗今の霊夢に効くわけがなく。

霊夢「だりや！」

ジャネンバが攻撃してくるタイミングに合わせ霊夢はカウンターを入れた。

ジャネンバ「ぐはっ!!？」

口から唾液が飛び散り吹き飛ばされるジャネンバ。

魔理沙「つ、強い！まさか、ここまで強いなんて！」

さつきまで絶対に勝てないと諦めていた敵を追い込んでいることに驚きの表情を浮かべる魔理沙。

霊夢「ふん、雑魚ね。これ以上やっても無駄よ」

そういいながら霊夢はスペルカードを構えた。

そのスペルカードは今までに見たことのないスペルカード。

恐らく博麗家全ての力が込められたスペルカードであろう。(42000字地点)

ジャネンバ「ぐ、ぐぎぎぎ」

ジャネンバはそのスペルカードを避けるためなんとか立ち上がるが体がボロボロであつた。

霊夢は、そんなジャネンバを見てこう告げる。

霊夢「れいれいふ霊霊符「まじまじ邪気封印」」

その瞬間、霊夢のスペルカードは虹色に輝き出した。

それもただの虹色ではない。

それはもはや言葉で言い表すのは不可能なほどの美しであった。

『ヒューーン』『ヒューーン』『ヒューーン』

邪気封印は基本的には夢想封印と同じような軌道をしジャンネンバにせまっていくのであった。

ただちがうのはマスタースパークすらもしのぐ威力に夢想封印をしのぐ密度とスピードを持っていた。

ジャンネンバにそんなのを避ける体力は勿論残っていない。

ジャンネンバは、そのまま!

『ドン』『ドン』『ドン』

と、被爆するのであった。

しかし、この技は少し変わっていた。

ジャンネンバ「ぐ、ぐあ!」

なんと霊夢の弾幕を受けたジャンネンバは吹き飛ばすのではなく光を放ち始めた。

そんな、ジャンネンバを見て霊夢が呟く。

霊夢「あ、そうそう。言ってなかったわね。このまま貴方を殺したら持ち逃げされ

ちやうから。しつかりと返してもらおうよ」

霊夢がそんな意味深な発言をした瞬間！

ジャンネバ「ジャンネバー……！！！！」

ジャンネバの体から溢れんばかりの光が浮き出た。

近くにいた魔理沙もその眩しきで思わず両手で目を覆う。

そして、その光は5秒もしないうちに消えるのであった。

光が消えたと分かった魔理沙はジャンネバの方を振り向く。

そこには！

魔理沙「あそこに倒れてる人は……。赤い髪の毛にあの鎌もしかしてあいつは映姫の

言ってた！」

そこには、なんと女性が倒れていたのであった。

魔理沙はボロボロの体を起こしゆっくりとその女性に近づいていく。

そして、女性の目の前まできた。

魔理沙「こいつは、映姫の言ってた小町ってやつか!？」

そうその女性は小町であった。

霊夢「正解よ。魔理沙」

魔理沙に次いで小町による霊夢

魔理沙「おまえ、まさかこいつだけを助け出したのか?」

霊夢「ええ、そうよ。私のスペルカードは邪気封印すなわち邪気のみを封印する技。邪気に乗っ取られていたこいつは邪気ではないしね」

霊夢のあまりの凄さに言葉を失う魔理沙。

魔理沙「おまえ、やっぱり凄いや霊夢!」

思わず声に出して魔理沙は言った。

しかし、霊夢は首を横に振り

霊夢「いいえ、これは歴代の博麗の巫女のおかげで出来た技。別に私が強いわけじゃないわ。もつと言えばこよ巫女達を制御してた結界を破壊した魔理沙の方が凄いわよ」

魔理沙「私はただ無我夢中で:」(43000文字地点)

魔理沙が少し照れくさそうにそう返答する。

そんな、魔理沙の表情を見た霊夢は「ふふふ」と少し笑った。

と、その時!

霊夢「おわつと」

霊夢の体から急に光が出てきた。

そう、それは勿論



霊夢「どうやら、さよならみたいね。みんな」

『そう見たいですね』

そう、これで歴代の巫女達とはもうお別れなのである。

霊夢「私達に力を貸してくれてありがとうね」

霊夢は、とっさにお礼をいった。

『あら、私達は博麗の巫女異変解決が仕事です。お礼なんていらないうじゃないですか』  
霊夢はニコツとした表情で霊夢に言った。

そして！

『さようなら』

そう一言だけはなち巫女達は姿を消すのであった。

霊夢は、再度心の中で呟く。

ありがとう。と…。

くその後く

無事、ジャネンバを倒した霊夢と魔理沙は小町を抱えこの世へと戻った。

悟空達は無事 悪霊達を全滅させたらしく里には何一つとして被害は無かった。

悟空達と合流した霊夢と魔理沙は取り敢えず背負っている小町と自分たちの傷の手当てをするため博麗神社へと戻った。

霊夢と魔理沙はともかく小町はかなりの重体でなかなか目を覚まさなかつた。

しかし、映姫の必死の看病もあり無事3日後に小町は目を覚ました。

その後、体を安静にするため1日博麗神社に泊まり翌朝あの世へと帰って言った。

勿論、小町は1日中 映姫の説教を受けたと言う。

あの世へ帰った2人はその後数日かけて結界を全て壊しまたいつもの日常へ戻ったのであった。

## 緋想天編（後半）

## 力の源？天人の桃 第101話

霊夢「言っておくけど私は一切手を抜かないわよ！たとえ天人だとしてもね」  
そう言いながら霊夢は天子を睨みつける。

天子は、そんな霊夢の言葉を聞き「ふふっ」と笑みを浮かべた。

天子「ええ、いいわよ。そっちの方が私は楽しいしね」  
そう言いながら剣を霊夢に向ける。

そして！

天子「だりやあ！」

そう言いながら霊夢に接近する！

霊夢「なにつり？！」

流石の霊夢も急に接近してきた天子に驚く。

天子はその隙を見て大きく剣を振りかざした。

天子の速度は流石、天人と言うべきか他の妖怪とは比べものにならない。

靈夢に対して剣を振り下ろす天子。

しかし、その瞬間！

靈夢「界王拳！」

界王拳を使った靈夢はすぐに両手を上に向ける。

『バシッ』

天子「なっ！」

その瞬間、天子は驚いた。

その理由はなんと！

靈夢「ふんっ」

なんと！靈夢は、真剣白刃どりをしたのである！

あれだけの速度で振り下ろされたにも関わらず咄嗟の判断力！

流星の天子も少し靈夢を舐めていたことに気づく。

天子「ちっ」

剣を止められた天子は少し剣をねじって剣を靈夢の手から抜かせた。

『ヒュン』

そして、瞬時に靈夢と距離を取る

天子「まさか、あれを受け止めるなんて…。それに、その赤いオーラ。一体、なんな

んだ？」

動揺を見せる天子。

それもそのはず、いくら霊夢達を見てたとはいえ軽く見ていた程度。

流石に界王拳の事を知るはずがないのである。

霊夢「これは界王拳。あらゆる戦闘能力を増幅させる技よ」

天子「増幅させる技だと！まさか、そんな事が出来るなんてしかもあんな一瞬に……」

霊夢「こんな瞬間的に出来るようになったのは最近。この数ヶ月、私と魔理沙は必死に瞬間移動の練習の合間に界王拳の練習をしたの。あんだ、さつき暇だから異変を起こしたって言ったわよね。てことは、私の考察だけど多分あんだ修業してないでしょ？普通、修業してるなら暇な時間なんてないしね。と、なると、恐らくあなたの強さは才能ね」

少し見下し気味に言う霊夢。

霊夢「仮に私に戦いの才能がなくあんだに戦いの才能があつたとしても必死に努力すればそんな差はいつの間にか無くなる。そして、ついには才能がなかったものも才能のあるものを越してしまうのよ」

霊夢の言葉には一つ一つ気持ちが伝わっていた。

それもそのはず、もし仮に悟空と出会わずあの頃のように全く修業をしていなかった

ら今の一撃できつとやられた。霊夢は、その事を理解しているのである。

天子「ふふふふふふ」

急に笑い出す天子。

霊夢「なに、笑つてるのよ？」

不意に笑い出した天子を不気味に思いつつ霊夢はそう尋ねる。

天子「あなたの言う通りよ。私は修業なんて全くしてなかつたわ。でもね、私にとつてはそんな事関係ないのよ」

意味深な発言をする天子。

霊夢「修業が関係ないですって？」

天子「ええ、全くよ」

そう言いながら天子は帽子に付いている桃を一つとる。

天子「あなたの考察には一つ間違えがあるわ。あなた私が才能で強くなつたつて言つたわよね？」

天子は若干、笑みを浮かべつつ霊夢にそう言った。

霊夢「ええ、それが？」

霊夢は、天子がなにを言いたいのか分からず少し困惑する。

天子「実はそれは大きな間違いよ。私だつて昔は全然大した事がなく。そして、めつ

ちやくちや弱かつたのよ。でもね……」

そう言いながら桃に目を向ける天子。

そんな、天子を不気味に思つた霊夢は天子にこう告げる。

霊夢「なに？言いたい事ならさつきと言つてくれる？私、あんたに神社を壊された恨みをかえしたくてうずうずしてるの」

その言葉を聞いた天子は、ニヤリツと笑う。

天子「まあまあ、あと少しで終わるわよ」

そう言いながら話を続けた。

天子「そう、これのおかげで強くなれたの！」

桃に目をやる天子。

そして！

『がぶっ』

思いつきり口を開けて桃にかぶりついた。

『がぶっ』『がぶっ』『がぶっ』

ものの数秒で桃を食べ終わる天子。

霊夢は、訳が分からず困惑する。

天子「ふっ」

桃を食べ終えた天子は笑みを浮かべた。

霊夢「なによ?急に桃なんて食べたりにして」

天子の行動が予測不可能過ぎて困惑する霊夢。

その言葉と表情を見た天子は霊夢を嘲笑いながらこう言った。

天子「まだ、分からないのか?博麗の巫女の感は凄いとおもってたがそれほどなんだな」

挑発気味に言う天子。

霊夢「なんですって!」

煽り耐性がないのか我をすぐに忘れる霊夢。

天子はそんな霊夢の表情を見ながらこう言った。

天子「ヒントを上げるわ。私の強さは才能でも修業でついたものでもない。そして、あなたに勝てないと悟った私は桃を食べた。どう?これでわかったかしら?」

霊夢に軽くヒントを上げる天子。

天子のヒントを聞いた霊夢は顎に手をやり少し考察を入れる。

霊夢「才能でも修業でもない事から何かで強くなったということ。そして、桃は私に勝てないと思ったから食べた」

その言葉を自分自身で発した瞬間。



ハッ！とした表情を浮かべる霊夢

霊夢「まさか、さっきの桃は！」

天子に勢いよく霊夢はそう言った。

天子「やつと分かったみたいだね。そう、あの桃こそが私の強さの秘訣。あの桃には身体能力を上昇させる能力があるのよ！」

そう霊夢に告げると天子は気を溜める体制をとった。

天子「はああああああああ！」

どんどん気が上がっていく天子。

その強さははるかに先程の力をしのいでいた。

霊夢「くっ！」

そして、ものの数秒で天子の気の上昇は止まった。

天子「ふふふ」

少し笑みを浮かべる天子。

その表情からは圧倒的な自信が見えた。

霊夢「ふん、まさか、そんな方法を使ってくるなんてね」

天子「いや、まさか、暇つぶしのつもりが生死を分ける戦いになるとは思ってたからね。少々悪いがパワーアップさせてもらった」

そう告げた瞬間。

天子は、戦闘体制をとる。

天子「さあ！続きをやろうか」

霊夢にそう告げる天子。

霊夢「望むところよ！」

霊夢もそう言葉を返しながら構えをとった。

『ヒューーン』

風がなびく中お互い様子を見ながら構えあっていた。

そして！

『ヒュン』 『ヒュン』

同時に飛び出す霊夢と天子！

霊夢「だりやあ！」

霊夢は天子の剣を警戒しつつ先にパンチをする。

霊夢「もらったわ！」

しかし！

天子「ふんっ」

天子はそう言葉を吐きながら体を折り曲げ霊夢のパンチを躲した。  
霊夢「なにつ!?？」

流石の霊夢もそれは予想外。

天子に攻撃を避けられた霊夢は完全にガラ空き状態になってまう。  
天子は、その隙に思いっきり剣を霊夢に対して振った！

# 10倍界王拳! 霊夢vs天子 第102話

『ヒューン』

霊夢に向かって勢いよく剣を振りる天子

しかし、霊夢はなんと!

「く、だりやあー!」

崩れた体制から無理矢理回し蹴りをした!

回し蹴りは天子の剣にぶち当たる。

『パン』

剣は天子の手から抜け数十メートル先へと飛ばされた。

天子「しまった!」

剣を飛ばされたことに動揺する天子。

霊夢は、その一瞬を見逃さなかった!

霊夢「今だ!」

そう言いながら天子の腹に思いっきりパンチをした。

『ドゴンッ』

パンチは見事、直撃する。

天子「ぐ、ぐぎぎぎぎ」

天子は腹に手を抑えて膝立ち状態になってしまった。

霊夢は、そんな天子を見てこう言った。

霊夢「どうやら、自分の力を過信し過ぎたみたいね。動きに無駄が出来てしまったよ  
うよ」

その言葉を聞いた天子は腹の痛みをこらえつつ立ち上がる。

天子「く、まるで自分が最強みたいに」

そう言いながら天子は構えを取る。

霊夢「あら、私は自分が最強だとは思ってないわよ。むしろおもいたくもないわ」

そう言い天子と動揺に構えをとる霊夢。

天子「何故だ？生きる者は全て最強を目指しそして、過信したものは自分が最強だと  
錯覚するはず……」

その言葉を聞いた霊夢は一瞬「ふっ」笑った。

霊夢「よく考えてみなさいよ。自分が最強だと思っただけなのよ。ただ、ひたすらにね」  
じゃない。私はね、強くなりたいたいだけなのよ。ただ、ひたすらにね」

霊夢は天子にそう告げると「10倍界王拳!!？」を使い天子に接近した。

霊夢「貴方の剣は吹っ飛ばした!これで正々堂々バトルよ!」

霊夢「だりやあ!」

そう言いながらパンチを放つ霊夢。

しかし!

『ガシッ』

天子はその攻撃を片手で受け止める。

天子「ぐ、なんてパンチだ。手が痺れる!」

霊夢のパンチの威力に驚く天子。

しかし、霊夢はそんな天子に驚く暇をなくすように逆の手でさらにパンチを放つ。

霊夢「だりやあ!」

『ガシッ』

しかし、流星は天人である。

天子は瞬時に霊夢のパンチに反応しもう片方の手で霊夢の手も受け止めた!

天子「ぐ、ぐぐぐ」

なんとか堪える天子。

しかし!

霊夢「甘いわよ!」

そう言いながら天子に蹴りを入れる霊夢。

天子「ぐはっ！」

霊夢の手を受け止めており両手がふさがっていた天子は蹴りを受け止める事が出来ず直撃してしまった。

『ヒューン』

『クルクル』

『スタツ』

しかし、天子はなんと空中で体を回して立て直り華麗に着地した。

天子「はあ、はあ、はあ」

しかし、いくら立て直したとはいえダメージを受けたのは確か、天子は息を切らしてしまふ。

霊夢「まだ、立てるとわ。流石に頑丈ね」

まともに蹴りを食らったのにまだ、倒れない天子に少し驚く霊夢。

天子「はあ、はあ、当たり前だ」

息を切らしながらそう答える天子。

霊夢「これはまだまだ面白くなりそうね」

そう言いながら構えをとる霊夢。

魔理沙「ひえ、あいつ霊夢の蹴りを受けて立ち上がりやがった！なんて、頑丈な奴だ」

思わず口から言葉が飛ぶ魔理沙。

悟空「ああ、でも、凄いのはあいつだけじゃないぞ」

そう言いながら霊夢の方を見る悟空。

魔理沙はそんな悟空の言葉に少し疑問を持つ。

魔理沙「霊夢？確かに凄いがあいつはいつものことじゃねえか？」

悟空「気づかぬえか？霊夢の奴、界王拳を10倍まであげたのに息を切らしてねえ」

その言葉を聞いた魔理沙はハツとした表情で霊夢を見る。

魔理沙「た、確かに！でも、なんでだ？界王拳は体力を使っちゃうのにな？霊夢の奴とんでもない体力でもつけたのか！」

その言葉を聞いた悟空は「いや、そういうわけじゃねえ」と呟いた。



悟空「確かに少しはそれもあるだろうがあいつが界王拳を使っても息を切らしてない理由がもう一つある」

魔理沙「もう一つだつて？」

悟空の意味深な言葉に思わず反応する魔理沙。

魔理沙「一体、どういうことだ悟空？」

魔理沙は悟空が何を言いたいのかわからず直接尋ねた。

悟空「おめえ達。最近、瞬間移動の練習の合間に界王拳と魔法拳の練習をしてただろ？」

魔理沙「ああ」

悟空「その成果が出てきたつて事さ。霊夢の体が完全に界王拳の圧力に対応出来るようになったんだ。だから、低倍率の界王拳を使つてる分にはきつとほとんど霊夢自身の負担にはならねえ」

その言葉を聞いた魔理沙は思わず「成る程」と言葉を漏らした。

魔理沙「でも、そのこと自体に霊夢は気づいているのか？」

悟空「さあな、ただ、少なくとも気づきかけてるんじゃないやねえか？」

悟空は魔理沙にそう返答する。

天子「くっ、ちよつと押ししてるからって図になるんじゃないわよ!」

そう言うのと天子は霊夢に一気に接近する。

そして!

天子「だりゃあ!」

先ほどの霊夢と動揺にパンチを放つ天子。

しかし、霊夢はすぐに天子の動きに対応する。

霊夢「はあ!」

霊夢は天子のパンチに対して対象的になるようにパンチを重ねた!

『ドオン』

拳と拳が衝突しあう。

そして!

霊夢「だりやりやりやりやりや!!」

天子「だりやりやりやりや!」

霊夢と天子の同時ラツシユ攻撃が始まった！

2人のパンチは風を切りながら激しく衝突しあう。

どちらも押し負けておらず全くの互角であった。

しかし！

天子「ふん」

天子はラツシユ中の手をグーからパーへと変えた。

そして！

天子「はあ！」

0距離エネルギー弾を放ち霊夢の意表をつく！

霊夢「なっ！」

流石の霊夢もそんな0距離エネルギー弾を避ける事が出来ず。

『ドンッ』

と直撃してしまった。

数メートル吹き飛ばされる霊夢。

天子はその隙にさらにエネルギー弾を叩き込んだ！

天子「だりやりやりやりやりや!!」

無数のエネルギー弾が霊夢に向かって飛んでいく！

霊夢はとっさに両手を地面の方に向けエネルギー波を放った!

霊夢「はあああ!」

霊夢はそのエネルギー波を推進力に使い上へと勢いよく飛びギリギリで天子の弾幕を躲した。

霊夢「今のは危なかった」

流石の霊夢も今の天子の攻撃は予想外過ぎ驚きを隠せない。

天子「まさか、あんな一瞬であんな方法を思いつくなんて」

どうやら、天子も天子で霊夢に驚いているようだ。

このバトルどうやら現段階の2人の実力はほぼ互角。

勝利を手するのは戦闘テクニクのようなようだ。

お互いどれだけ相手の予想外の事をできるかが勝利へのカギである!

## 一か八かの大勝負 第103話

『ヒューン』

天子に少し近づいていく霊夢。

霊夢「あんた、やるわね。正直ここまでとは思ってなかったわ」

霊夢はそう天子に告げる。

そのセリフには天子への尊敬が感じとられた。

しかし、そのような心情になったのは霊夢だけではない。

天子「あら、それはこっちのセリフよ。桃を食べた私をここまで追い詰めるなんて驚いたわ」

そう天子の方も霊夢の強さに驚きを隠せずにした。

お互いがお互いの強さを認めあつたのである。

霊夢は即座に構えをとった。

霊夢「でも、それもここまでよ！」

霊夢の目には炎が映し出されておりどうやらかなり燃えているようだ。

そのセリフを聞いた天子は「ふっ」と笑みを浮かべこう告げた。

天子「あら、私だって負けないわよ！」

そう告げると霊夢と同様に構えをとる天子。

『ひゅ〜ん』

風がなびく中、お互いを睨み合う二人。

そして！

『ヒュン』『ヒュン』

2人は同時に動き出した！

霊夢「だりやりやりやりやりや！」

天子「だりやりやりやりやりや！」

お互いに距離を取り合い弾幕を放ち合う2人！

どうやら、今度は遠距離戦で勝負するようだ。

『ドン』『ドン』『ドン』『ドン』

お互いほぼ互角の威力と密度と数で飛んでいく弾幕。

どうやら、今現状の2人は寸分の狂いがないほど実力が一緒と言っていていいであろう。

このまま弾幕を打ち続けてもお互い体力を消耗するだけ。

恐らく2人はそう考えている。

靈夢「このままじゃキリがない。やっぱりこっちから仕掛けないと。でも、あいつには中途半端な作戦は聞かない。一体どうすれば…」

天子を倒す手段を考える靈夢。

しかし、どう考えても実力がおなじこの状況。

なにか大きなことをしない限り天子を倒すことは出来ない。

靈夢は、考えに考えた。

そして、1つの作戦が頭によぎる。

靈夢「こうなったら一か八か…」

そう言葉をごぼすと靈夢は弾幕を放つのをやめひたすら避けることに専念する。

『ヒュン』『ヒュン』『ヒュン』

ギリギリで攻撃を避けまくる靈夢。

靈夢は避けるだけで一切の攻撃をやめた。

天子「く、ちよこまかと」

天子は今が攻め時とばかりにバンバン弾幕を放つ。

しかし、天子もここで違和感に気づいた。

それは、勿論、何故靈夢が攻撃をしてこないかである。

普通ならばこの状況攻撃をしなければ畳み掛けられる可能性が高い。

なのに霊夢はただ避けているだけだというのはどう考えても不自然であった。天子は考える。

何故、霊夢が攻撃をしてこないのか。

そこである一つの可能性が天子の頭の中をよぎった。

天子「まさか…」

言葉濁す天子。

天子「まさか、あいつは私のエネルギー消耗を狙っているのか？」

そう天子は霊夢が自分にエネルギーを使わせまくろうとひたすら避けまくってるのではないかと考えたのである。

たしかにその作戦ならば今霊夢が攻撃をしていない理由に納得がつく。

しかし！

ふん、甘いな。博麗の巫女。確かにその作戦ならば私を倒すことにつながる。

しかし！それまで貴様が私の弾幕を避け切れるという保証がない！

このペースの弾幕ごとき私はあと数分はもつ。

流星のお前もそれまで避けきれないはずだ！

天子はそう心で呟き。

弾幕の数を少しだけ減らし長期戦に備えた。



霊夢「弹幕の数を減らした？」

急に弹幕の数が減ったことを疑問に思う霊夢。

霊夢は少し考察を入れた。

何故、天子が弹幕の数を減らしたのかと…。

霊夢「成る程、そういうことか…」

考察をした霊夢は天子がなにを考えているか大体を把握した。

霊夢はチラッと天子の方を振り向く。

残念ね。あんたのその考察は間違えよ。

霊夢は心でそう呟いた。

霊夢「あと、10秒ほどかしら…」

避けながらそう呟く霊夢。

どうやら、あと10秒後霊夢は何かを仕掛けるようだ！

天子「ち、思ったより避けるじゃない！だけどこれならどうかしら」

天子はそう霊夢に告げると霊夢を囲むように弹幕を放つ天子。

そう霊夢の素早い動きを封じようとしているのである。

霊夢は、思うように動くことが出来ず…。

『シュツ』『シュツ』

何発か弾幕をカスってしまおう。

もはや、ここまでか！

そう思われた瞬間！

霊夢「ふっ」

霊夢は、軽く笑みをこぼす。

その瞬間！

霊夢「甘いわよ！」

そう言うのと天子に正面から突っ込んでいく霊夢。

天子「なに！」

流石の天子もそんな行動は予想しておらず動揺した。

しかし、天子は霊夢のその行動以外に驚いたことがある。

それは！

なんと、霊夢は両手を合わせそこにエネルギーを圧縮させていたのである。

天子は霊夢を正面から見ていなかったたので霊夢がエネルギーを溜めていることに気

づかなかったのだ。

そう霊夢の目的は天子のエネルギー消耗ではなく霊夢自身がエネルギーを溜めるこ

とだったのだ!

霊夢は、そんな天子の表情をみてこう告げた。

霊夢「やっと気づいたようね!でも、もう遅いわ!」

天子に霊夢がそう告げると霊夢はあの言葉を発する。

霊夢「かゝめゝはゝめゝ」

その言葉は悟空が今までよく耳にしてきたあの言葉であった。

悟空「霊夢、あいつまさか!」

魔理沙「嘘だろ!霊夢!」

離れて見ていた2人もあの霊夢の掛け声と構えに目を疑う。

天子「く、はじき返してやるわ!」

そういうと天子は弾幕を放つのをやめエネルギーを溜め始める。

しかし!

霊夢「そんな、即席でエネルギーを溜めた技になんて負けないわよ!波——!!」

そう言いながらなんと霊夢はかめはめ波を放った！

勿論、悟空がこの技を教えた事などなく。

霊夢は、見よう見まねでかめはめ波を放ったのである。

天子「くっ、だりやあ！」

天子も負けじとエネルギー波を放った。

『ドンッ』

2人の技が激しくぶつかり合う。

しかし、技の威力は一目瞭然であつた。

『ぎゅ〜ん』

霊夢のかめはめ波がどンドン天子のエネルギー波をおしていく。

そもその話そんな即席で出した技が数十秒溜めて出したかめはめ波に敵うわけもなく。

『デウーン』

霊夢のかめはめ波は天子のエネルギー波を押し切り天子を飲み込んだのであつた。

天子「ぐわあ！」

かめはめ波の勢いとともに数十メートル吹き飛ばされてしまう天子。

そして！

## 『バタン』

勢いよく地面と激突してしまった。

天子「ぐ、ぐは」

天子はかなりのダメージを受けておりもうこれ以上戦うのは不可能であろう。そう考えた霊夢は天子の元へと駆け寄るのであった。

## 神社の再築 第104話

『コツコツコツ』

小さく足音を立てながら天子に近寄る霊夢。

天子は体中傷だらけになっており戦闘不能状態であつた。

霊夢「どうやら、勝負あつたみたいね」

霊夢は倒れた天子にそう告げる。

その言葉を聞いた天子は何処かしら悔しげな顔を浮かべた。

天子「まさか、人間に負けるなんて……」

天子は片腕を抑えつつよろよろの体を無理矢理起こす。

それを見た霊夢は流石に驚き「驚いた。まだ、立てるなんてね！」と声をもらした。

天子「当たり前よ。こう見ても結構頑丈なんだから」

霊夢達がそんな感じで会話をしていると……。

「お〜〜い」

何処からか声が聞こえた。

その声の主は勿論。

魔理沙「お〜い」

そう勿論、魔理沙である。

戦闘が終わった事を確認した魔理沙と悟空は霊夢と天子の元へと近寄った。

そして、駆け寄るや早々に物凄い勢いで魔理沙が霊夢に話しかける。

魔理沙「凄かったぜ霊夢！まさか、悟空の技を使うなんて！」

魔理沙は、目を輝かせながら霊夢にそう告げた。

まあ、それもそれは先程のかめはめ波は本当に凄いさく見てた悟空と魔理沙を感動させるほどであったのだから。

しかし、霊夢は…。

霊夢「使ったっていつでも見様見真似よ。溜めるのにも時間がかかったうえに威力も悟空のものより小さいしね」

と、どうやら、あんまり自分が凄い事をしたと霊夢はそれほど思っていないようす。

悟空「何言ってるんだ霊夢。初めてであれだけの威力を出せるなんて凄えじゃねえか」

霊夢とは対照的に先ほどのかめはめ波はすごいと褒める悟空。

しかし、霊夢は、「ふふ、そうだといいいけど」と悟空の言葉を軽く流すようにそう言うのであった。

霊夢「ま、かめはめ波の話は置いて」

そう言いながら天子を鋭く睨みつける。

それはまるでカエルを見つけた蛇の目であった。

天子は思わず体が硬直してしまう。

天子「な、な、なんだ？」

口を震わせながら尋ねる天子。

すると、霊夢は天子の顔を覗き込むように顔を近づける。

そして、ボソリと呟くように天子に言った。

霊夢「あんた、神社の件ちゃんと覚えてるわよね」

その言葉を聞いた天子は少し脳を巡らせる。

そして！

天子「神社。ああ、私が壊したやつか」

と、霊夢の言葉を聞き即座に思い出す天子。

天子が神社の事を覚えてるのを確認した霊夢は少し笑みをこぼし天子にこう告げる。

霊夢「そうそうその神社よ。勿論、直してくれるんでしょうね？」

天子「え？」

霊夢の急な言葉に頭がこんがらがる天子。



そんな天子を見てもう一度霊夢は言った。

霊夢「いや、だから神社の再築の話よ。あなた、自分で壊したんだから勿論直してくれて当然よね」

その言葉を聞いた瞬間、少し言葉を濁らせる天子。

天子「あ、いや、そんなこと言われても……」

霊夢から視線を逸らしながら天子は告げた。

すると、霊夢は天子に向けて手を大きく広げる。

霊夢「なら、しようがないわね。あの世にいる映姫や小町によろしくね」

実に満面の笑みでそう告げる霊夢。

そう霊夢は天子に脅しをかけているのである。

手にエネルギーを溜めていく霊夢。

流石の天子もこれには命の危機を感じ「わ、わかった」と慌てて霊夢に言うのであった。

霊夢は手を向けるのをやめる。

霊夢「そう、それでいいのよ。元はといえばあんたが神社を壊したんだから」

天子「く、こんなことなら地震なんて起こすんじゃないわ……」

天子はここでやっと自分がした事を後悔するのであった。

それから一ヶ月後

ついに博麗神社の再築が終了した。

霊夢「うわ〜〜」

悟空「へ〜〜」

魔理沙「お〜〜」

一ヶ月ぶりに見る我が家を見て感動する霊夢。

天子ひきいる人里の腕っ節の大工が集まった結果、なんとたつたの一ヶ月で神社の再築を終わらせることができたのである。

ちなみに霊夢は神社が完成するまでの一ヶ月間は魔理沙の家で暮らしていた。

霊夢「まさか、一ヶ月で完成するなんて少なくともあと三ヶ月はかかると思ってたわ」  
綺麗に建て直された神社を見渡しながらそう告げる霊夢。

魔理沙「確かにな、一ヶ月で完成させるなんて並みの腕じゃ出来ないぜ」

新しく建て直された神社をまじまじと見続ける霊夢と魔理沙と悟空。  
と、その時！

悟空がある者を見つける。

悟空「あれ？あいつ天子じゃないか？」

そうそれは勿論、天子であつた。

天子「ふい〜」

神社の柱にもたれかかり座り込む天子。

霊夢達は天子の元へと駆け寄っていった。

霊夢「久しぶりね」

天子に近づくなりそう告げる霊夢。

天子「あゝ、博麗の巫女か……。約束通り神社の再築は終わったぞ」

疲れた表情でそう告げる天子。

悟空「なんか、おめえすげえ疲れたねえか？」

その言葉を聞いた天子は少し大きめな声をあげる。

天子「当たり前だろ！毎日毎日朝早くに起きては夜中まで仕事。体が持ったもんじゃないよ。普通の人間なら今頃、過労死で死んでるね」

愚痴をこぼすかのようにそう告げる天子。

霊夢「あら？でも、元はといえばあんたが原因でしょ？これに懲りたら二度と地震なんて起こさない事ね」

霊夢の言うことが正論過ぎ反論できない天子。

天子「くく、取り敢えず、約束は果たしたしもう私は帰らせてもらおうよ」

そう告げると再び天界向かって飛び立とうとする天子。

魔理沙「なんだ？もういくのか？」

そんな天子を見て思わず魔理沙は天子に声をかけた。

天子は少し振り返り「当たり前前だろ。私はもう疲れたし天界に戻りたいんだ」と魔理沙に告げた。

魔理沙は、ふくと声をもらす。

霊夢「そうじゃあ帰るんなら最後にもう一度行っておくけど次、こんなことしたら本当に命はないわよ」

飛んでいく瞬間の天子に捨て台詞のようなものを吐く霊夢。

天子は「わかってるよ」っと返答し天界へ帰って行くのであった。

霊夢達もこれでまた、無事にいつもの生活へと戻って行くのであった。

??? 異変

## スキマ妖怪からの依頼 第105話

無事、神社が再築されて一週間がたった。

霊夢「うくん、やっぱり我が家はいいわね〜」

霊夢が神社を見渡しながらそう告げる。

霊夢の言葉は弾んでおり本当に神社が直った事への喜びが聞いてとれた。  
すると…。

魔理沙「おまえ、神社が直ってからずっとそういつてるぜ。いい加減言うのをやめたらどうだ」

と魔理沙が霊夢に呟くように言った。

実は魔理沙がそう告げたのにも意味がある。

それは…。

魔理沙「神社が直って一週間、毎日その言葉を聞いてるぜ」

そう実は霊夢はこの言葉を毎日言っていたのである。

流石の魔理沙も毎日同じことを呪文のように言う霊夢に少し忠告を込めて告げたの

であった。

しかし、霊夢は、「あんたも家が壊されたら私の気持ち分かるわよ」と魔理沙に言い返す。

そうよくよく考えてみれば自分の家を失ったことのない魔理沙が霊夢の心情を理解することは出来ないのである。

人は物を失って初めて物の大切さに気づくのだから。

魔理沙は、少し言葉がつまる。

しかし！

魔理沙がこの程度の返答に押される訳もなく。

魔理沙「いや、確かになるかもしれないけどおまえみたいに何回も言ったりしないぜ」と少し感情のこもった声で言った。

恐らく、自分の忠告を霊夢に言い返された事に腹が立ったのであろう。

霊夢「そんなに何回も言っつてないわよ！」

魔理沙「いや、いつてるぜ！」

口喧嘩を始める2人。

しかし、これも見慣れた者。

悟空は軽く笑みを浮かべて2人に告げた。

悟空「おめえ達の言い争いもよくみつけどな」

その言葉を聞いた瞬間2人は少し頬を赤らめる。

そして、即座に喧嘩を止めるのであった。

それを確認した悟空は、「口喧嘩も終わつたしそろそろ修行始めつか！」と勢いのもつた声で2人に告げるのであった。

最早、悟空にとって喧嘩をやめさせる事は朝飯前レベルである。

魔理沙「でもよ、悟空今日は何の修行するんだ？瞬間移動はつい3日前に完璧にマスターしたし昨日みたいに組み手ばかりだと流星にあきちまうぜ」

魔理沙が悟空にそう尋ねる。

そう実は霊夢と魔理沙は神社が再築されてる一ヶ月の間もずっと瞬間移動の特訓をしておりいつの間にか瞬間移動ができるようになっていたのであった。

霊夢「確かにそうよね。組み手だけだったらぶつちやけ悟空に教えて貰わなくても出来ちゃうしね」

霊夢も魔理沙の意見を尊重する。

悟空は少し考えた。

霊夢達には一体どんな修行をつけてやればいいのかと…。

正直、今の霊夢達は強い2人がかりなら悟空のスーパーサイヤ人3と互角いやもしく

はその上をいくかもしれない…。

悟空は思ったもしかするともう自分がこの2人を鍛える必要はないのではないかと…。

自分が亀仙人から独立したようにこの2人もそろそろ独立どき悟空はそう考えるのであった。

と、その時！

『びゅん』

空間に裂け目が出来た。

そうこれは！

紫の能力隙間である。

紫「やつほく」

紫が隙間から顔をのぞかせた。

霊夢「あら、紫じゃない」

魔理沙「久しぶりだな紫！」

霊夢と魔理沙は紫の元へと足を運ぶ。

紫「よいしょつと」

隙間から出てくる紫。



紫「おひさ、靈夢に魔理沙そして、悟空」

陽気な声で挨拶をする紫。

靈夢「一体、どう言う風の吹きまわし。あんたがここにくるなんて」

紫「あら、2週間前にもここに来たのよ。ただその時、なんか神社が工事されてて貴方達がいなかったけど」

靈夢「あくちよつとこつちにも色々あつてね」

苦笑いしながら誤魔化す靈夢。

紫「工事の所にいた青髪の女の子に聞いても場所を知らないっていうしまつたくも  
う。第一神社が壊れたならまず私に報告しなさいよ。一樣、貴方の生活費を免除して  
るのは私なんだから」

少し靈夢に説教する紫。

靈夢も今回ばかりは少し反省し「は〜い」と返事するのであった。

悟空「で、紫。一体、何があつたんだ？」

唐突に紫に質問する悟空。

悟空「おめえが来たってことは何か起きたってことだろ？」

その言葉を聞いた瞬間、紫は、ふふふつと笑みを浮かべる。

紫「流石、悟空ね。私の行動はお見通しって事かしら」

悟空「お見通しって程じゃねえさ。ただ、おめえがここに来る時って大抵何かあった時だろ」

紫と軽く会話を交わす悟空。

すると。

霊夢「何？まさか異変？」

霊夢は唐突に紫に尋ねる。

何故、そのような事を確認するかというところと紫がわざわざ直接霊夢達に知らせに来るとすれば考えられる可能性は異変ぐらいしかないからである。

つまり、霊夢は異変が起こった事を前提に異変かどうかを紫に尋ねたのである。

しかし、紫の返答は霊夢の考えとは反していた。

紫「いいえ。異変じゃないわ」

なんと、紫がわざわざ知らせに来たのは異変の事ではなかったのである。

これは、流石の霊夢と魔理沙、そして、悟空も予想外であった。

魔理沙「異変じゃないのか！わざわざお前が来たぐらいなのに」

驚いた表情を浮かべつつ尋ねる魔理沙。

紫「ええ」

非常に落ち着いた感じで相槌をうつ紫。

悟空「なら、一体、おめえはオラ達に何を知らせに来たんだ？」

悟空は紫に尋ねた。

紫は少し考え込んだ顔を浮かべる。

そして…。

紫「うゝん。そうね。正しく言えば知らせに来たというより依頼しに来たかしら」と悟空達に告げた。

霊夢「依頼？」

紫の言葉をリピートするように尋ねる紫。

霊夢「一体、貴方が私たちに何を依頼するのよ？」

紫「実は…」

## 謎の3人組? 第106話

霊夢「依頼ですって!あなたが!」

紫の思わぬ発言に頭の中が追いつかない霊夢。

しかし、そうなるのも無理はない。

紫は、知つての通り幻想郷の大賢者であり言わば中心的存在。

そんな存在が依頼なんかを出してくるといふ事は余程の事ではないのである。

悟空「一体、依頼ってなんだ紫?」

紫に尋ねる悟空。

その目にはどこかしら迫力を感じた。

悟空が真剣になつた証拠である。

そんな、悟空の表情を感じ取つた紫は悟空達に依頼の説明を始める。

紫「今から3、4週間前のことかしら。私の耳に1つの情報が入つて来たのよ」

霊夢「情報?」

紫の言葉に対しリピートするように尋ねる霊夢。

紫「ええ、情報よ。そして、その情報つてというのが人里で黒いフードを被つた怪しい

3人組が人里を徘徊してゐるって言うのよ」

紫はそう悟空達に告げた。

その話を聞いただけならばただよく分からない3人組が歩いてるだけのようにも聞こえる。

しかし、そんな単純な話ではないことは紫の表情が説明しなくとも教えてくれた。

魔理沙「3、4週間前だとすると霊夢の神社が壊れてて私の家で住んでた時だな。だから、私たちの所には情報が入ってこなかったのか」

魔理沙は手を顎にあて考えるように告げた。

霊夢「ええ、きつとそうね」

霊夢も魔理沙の意見に同意する。

しかし、霊夢は今そんなことはどうでも良かった。

今、霊夢が知りたかったのはズバリ！

不安そうな表情の紫を見つめる霊夢。

霊夢「ねえ、紫。さっきの話からするとただ里にフードを被った怪しい3人組が現れただけのようだけど。具体的にそいつらは一体、何をしたの？いくら、あんたの頼みでも理由なしにその3人組を倒しに行くことはできないわ」

そう霊夢が知りたかったのはその3人組が具体的に何をしたかである。

そう流石に怪しいからと言う理由では霊夢達も動きたくても動けないのであった。紫の表情が少し曇る。

まるでなにかを思い出しているかのようにな……。

紫「理由になるかどうかは分からないけれど実はその3人組……。もの凄い力を持っているのよ。しかも、霊夢達を探しているわ」

紫は、ザッと霊夢達に説明する。

悟空「もの凄い力だつて? 一体、なんでそんなことが分かるんだ? まさかりで暴れたのか!」

悟空は眉を寄せる。

しかし、紫はゆっくりと首を横に振った。

紫「いいえ。あの3人組は人里を荒らしていないわ」  
「えっ」

思わず声を漏らす悟空達。

それもそのはず人里を襲った事すらない奴らなのに何故、紫がここまで怯えさらにはその3人組が凄い力を持っていると知ってるのだから。

霊夢「ちよつと待ちなさいよ。紫、じゃあ、どうしてあなたがそんなにその3人に怯えているのよ。別に人里を襲ってないんでしょ?」

霊夢が紫に告げる。  
すると……。

ギョツ、と紫は自分の着ている衣服の袖をもった。  
そして、そのまま袖を捲り上げる。

霊夢達は驚愕した。

なんと、めくらられた紫の袖の下には包帯がぐるぐる巻きにされていた。

そこには、若干、赤色の染まつてる部分もある。

霊夢「そ、その怪我。まさか！」

霊夢は何かを察したかのように大きな声を上げた。

紫はコクリと首を前に傾げる。

紫「ええ、そうよ。3人組の奴らにやられたのよ。油断してたとはいえ一瞬でね」

霊夢「詳しく説明して頂戴」

霊夢は強い意志を浮かべ紫に告げた。

紫は、頷きそのまま説明をした。

紫「実は一週間前、私は人里で3人組にあつたの。見た瞬間に分かつたわ。黒いフードを被つていてなおかつ3人もいたからね。私はそのまま3人組に話しかけたわ。「ねえ、あなたが噂の3人組」ってね。その時の私は特に警戒もしなかつたわ。何故なら

その3人組から特に凄いエネルギーを感じなかったから。でも、それは大きな間違えだったわ。そう3人組の内の1人が私に向かって手を掲げたのよ。そして、その手にはエネルギーが溜められていて、その時に初めて気づいたわ。ヤバイってね。私は急いで避けようとした。でも、時すでに遅し。気がついたら私は相手の攻撃をもろに受け倒れたいたわ。右手からは血が流れ出ていて大ダメージを受けてしまったの。倒れている私は動くことが出来なかった。その時、私を攻撃したやつが私の顔を覗き込んだの。私はいこう思ってたわ。殺されるってね。だけど、攻撃が降りてこない、少し不思議に思っているって黒いフードの奴らが口を揃えてこういったの。「博麗霊夢、霧雨魔理沙、孫悟空という奴らをしらないか？」ってね。恐怖した私はとっさに首を左右に振った。すると、3人組はなにも言わず何処かへ行ってしまったわ」

紫は長々と説明をした。

霊夢「成る程ね。紫をそこまで追い詰める奴ら。しかも、狙いが私たち」

そう告げると霊夢は魔理沙と悟空の方をチラツと向き共に目を合わせあった。

霊夢「わかったわ、紫。あなたの依頼を受けることにするわ」

紫「本当!」

霊夢のセリフを聞き思わず大きな声を上げてしまう紫。

霊夢「ええ、本当よ。どうやら、そいつらの狙いは私達みたいだし。それにあなたを



「ここまで追い詰める連中。少し興味が湧いてくるじゃない」

霊夢はギョツツと拳を強く握りしめた。

霊夢「よくし、そうと決まれば善は急げよ。悟空、魔理沙、準備は出来てるわね！」

霊夢が悟空と魔理沙に確認をとる。

勿論、2人は「ああ！」と相槌を打ち準備万端であった。

紫「え、もう行くの？」

準備の早い3人に戸惑う紫。

霊夢「当たり前でしょ。別に今片付けようが後から片付けようが同じだしね」

霊夢はそうとだけ告げると舞空術で一気に空の彼方へ飛んで行くのであった。

悟空と魔理沙もそのあとをすぐに追う。

紫「やれやれ、相変わらずね」

そう告げると紫は笑みを浮かべその後が続くように飛び立つのであった。

## 深まる3人組の謎 第107話

『ビューーン』

全力で飛ばしていく霊夢達一行。

その速度は凄まじく数キロ離れた人里に1分足らずでたどり着いた。

霊夢「ついたわ！」

急ブレーキをかけ霊夢が言った。

紫「はあ、はあ、はあ、はあ、全くなんてスピードよ」

紫は息を切らしながら霊夢に告げる。

それもそのはず、今の霊夢達のスピードは以前までのスピードとは全くのケタ違い。

その上、息も全く乱れていなかったのだ。

恐らく、今の霊夢の実力は妖怪である紫と互角いやもしかすると超えてるかも知れないのである。

魔理沙「まあ、私達も結構頑張って修行してきたからな」

疲れてる紫に対してニヤつとした笑みを浮かべつつ告げる魔理沙。

霊夢「と、話はその辺にしてそろそろ例の3人組を探すわよ」

そう告げると霊夢は人里の地面へと足をつけた。

悟空達も霊夢に着いて地面に降り立つ。

その時、

悟空「ん〜？」

悟空は、何やら疑問そうな顔を浮かべた。

霊夢はすぐさま悟空のその表情に気づく。

霊夢「どうしたの悟空？」

悟空「いや、ちょっとおかしいと思っただけな」

霊夢「おかしい？」

悟空「ああ」

そういうと悟空の顔はさらに険しくなる。

悟空「なあ、紫その黒いフードを着た3人組つてのは数週間前に現れたんだよね？」

紫「ええ、そうよ。私も一週間前に実際に見たしね」

紫の発言を聞いた悟空は更に表情を曇らせる。

悟空「ならやつぱりおかしいぞ」

魔理沙「だから、何がおかしいんだぜ？」

悟空「よく考えてみるんだ2人とも紫を倒すほどの腕の持ち主なのにおめえ達その3

人組の気を感じとったことあるか？」

その言葉を聞いた瞬間、霊夢と魔理沙の表情は一瞬固まってしまった。

魔理沙「そういえばないぜ。ここ最近そんな奴らの気を感じたことなんて一度も」

霊夢「たしかにそうよね。紫を倒す程の腕がある奴らならこの幻想郷どこにいても感じとれるはず」

霊夢と魔理沙も悟空と同様不自然な矛盾が自分の中に生まれてしまった。

たしかに霊夢や魔理沙の言う通りそんな奴らの気を一度たりとも感じ取れたことがなかった。

もし仮に気を抑えてるだけだとしても紫がそいつらに攻撃された時に少なくとも悟空がその気を感じとってるはずなのである。

悟空「とりあえず、今は考えてもどうにもなんなえし3人組を探すぞ」

疑問を吹っ切ったように悟空は霊夢と魔理沙に告げる。

霊夢と魔理沙は少しニヤツとする。

そして、声を揃えて、

「そうね！」

「そうだな！」

と言うのであった。

人里はそれなりに広く更に相手は気を感じる事が出来ない霊夢達は三人組をみつける事が出来るのであろうか！

## 迫る影！ 現る最悪の敵！ 第108話

悟空「とりあえず、オラはこつちを探してくる。オメエ達はそつちとそつちに手分けして行つてくれ」

悟空は、左右の分かれ道を指で指しながら霊夢達に命令を出した。

霊夢と魔理沙はコクリと頭を上下に動かす。

それを確認した悟空は次に紫の方へ目をやった。

悟空「紫、おめえは人里の奴らに片っ端からその黒いフードの奴らの情報を集めてくれ。何週間も前からいる奴らだきつと少しぐれえは人里の人達もそいつらの情報を持つてるはずだしな」

紫「わかったわ」

紫はそう告げると早速行動にうつった。

悟空達も紫が行動に移るのに合わせてそれぞれ違う道へ行き同時に3人組を探し始めるのであった。

走りながら周りを確認する悟空。

しかし、悟空は探しながらもあることを考えていたのであった。

悟空「気が感じ取れないってことは3人組の奴らは気のコントロールが出来るのか？」

そうそれはやはり相手の気が感じ取れない理由である。

幻想郷にはまだ気を完璧に操れる奴は数えられる程しかないうえに気のコントロール自体理解してないものが多いのだ。

そんな中完全に気をゼロにする奴がいるのはおかしいと悟空は思っているのである。と、その時！

ビュン

どこからともなくエネルギー波が悟空目掛けて飛んできた。

悟空「っ!!?」

ヒュン

悟空は慌ててその攻撃を避ける。

そして、そのエネルギー波の方へ振り向く悟空。

そこには、まさに紫が言ってた通りの人物といっても過言ではない黒いフードで身を纏った人物が立っていた。

違うところを強いて言うのであればそれは1人しかいない事である。

悟空は、身構えた。

というより悟空の本能が悟空を身構えさせた。

フードの人物は、そんな悟空にのっそのっそとゆっくり近づいてくる。

フード「貴様が孫悟空か！」

フードの人物は低い男性のような声で悟空に威圧をかけるように言った。

悟空「おめえ! 一体、何もんだ! 何の目的でオラや霊夢や魔理沙を探している!」

悟空は一定間隔を置きつつとつさに質問を質問で返す。

フード「質問をしているのはこっちだ! もしお前がちゃんと質問を答えないのであったら。周りにいる人里の奴らを殺す!!?」

フードの人物は悟空に脅しをかけように告げた。

流石の悟空も人里の人達に被害を出すわけにはいかない。

そう考え相手の質問に冷静な口調で返し始めた。

悟空「ああ、オラは孫悟空。おめえの探してたやつの人さ」

ギロリッ

悟空が名前を名乗った瞬間フードの隙間からものすごい目線で悟空を睨みつけた。

フード「ほく、そうか、やっぱ貴様が孫悟空か。かなりの力を3つ感じたからもしやと思って3人で別れて貴様らを拌みにいったがどうやら正解だったみたいだな」



悟空「3人で別れてだと！てことは、まさか、霊夢と魔理沙の方にも！」

悟空はフードの男を睨みつける。

フード「ああ、恐らく今頃、俺たちみたいこんな会話をしてるか。もしくは、殺しあつてるかだな。はははははは」

悟空「殺し合いだと！てことは、まさか、貴様ら！」

フード「ああ、その通りさ。俺たちの目的は貴様らの命だよ！」

そう告げた瞬間！

シュン

悟空「!?？」

フードの人物はとてつもないスピードで悟空に接近する。

そして！

バゴーン

物凄い一撃を悟空に与えた。

ビューン

勢いよく吹き飛ばされる悟空。

そして！

ドンッ

そのまま誰かの家に激突してしまった。

キヤーーーー

うわーーーー

周りにいた人里の人達はパニックを起こしてしまう。

そんな人里の人達を見かねて悟空はとっさに「急いで逃げろ！」と叫んだ。

周りにいた人達は悟空の言葉を聞いた瞬間。

我先にと言わんばかりに次々と逃げていった。

悟空は立ち上がる。

悟空「人里の人達はみんな避難した。これでおめえと本気で戦えるぜ！」

そう告げると悟空は戦闘態勢をとった。

相手もそれに合わせて戦闘態勢をとる。

悟空「一樣、戦う前に名前ぐれえ教えてくれねえか？」

悟空がそう告げるとフリードの人物は予想外の回答をした。

フリード「人造人間26号！」

その言葉を聞いた瞬間、悟空の顔つきが変わった。

悟空「なんだと！人造人間!!」

悟空は少しパニック状態になる。

悟空「一体、どういう…」

悟空が質問しようとした瞬間！

シュン

バゴーン

26号は悟空に接近し回し蹴りを悟空に浴びせた。

悟空「ぐはっ！」

直撃してしまう悟空。

26号「質問の時間は終わりだ」

倒れこむ悟空を見下すように告げる26号。

悟空「ぐっ!!?」

シュン

悟空は26号から一定間隔の距離をとった。

そして！

悟空「はあ!!」

悟空は金色のオーラを纏い始めた。

そうスーパーサイヤ人である。

悟空「だりゃあああ！」

スーパーサイヤ人となった悟空は一気に26号へと接近した。

そして、勢いそのままに26号の顔面を思いつき殴り飛ばす。

ドンッ

強く地面に激突する26号。

流石にこれは大ダメージは免れないはず。

悟空は心でそう呟いた。

しかし！

26号「ふふふ。ふはははははは」

倒れた26号は急に笑い始める。

そして！

26号「よっこらしよ」

まるで何事もなかったかのように立ち上がった。

これには流石の悟空も驚きを隠せない。

今の一撃はたしかに決まったはずだったのにほとんどダメージが入っていないのだから。

## 年末スペシャル【メタ回】本編とは関係ありません。

明希「いや、今年も今日でいよいよ最後か。色々思い返してみるとあつという間だったな」

博麗神社の縁側に腰をかけながら呟くp主こと明希。

どうやら今年のことを振り返りながら身を休めていたようだ。

しかし…。

「……明希……!!!」

突如、博麗神社に響く声。

ビクッ

思わず明希は背筋がぴーンと伸びた。

明希はゆっくりと声のした方向に振り向く。

そこには！

霊夢が立っていた。

いや、霊夢だけではない。

その後ろには悟空と魔理沙も一緒にいる。

明希「なんだよ霊夢！さっきの大声は近所迷惑じゃねえか！」

明希は耳を抑えながら霊夢に告げた。

しかし、霊夢は明希に反論するようにこう告げる。

霊夢「なに言ってるのよ！このあたり他に人が住んでないんだから近所迷惑になるわけがないじゃない！」

明希「あつ」

霊夢の正論すぎる言い回しに言葉を奪われかてしまう明希。

焦った明希は話を変えるようにこう告げた。

明希「と、そんな事よりお前さっき俺の名前呼んでたけどどうしたんだ？」

明らかに動揺した口調で明希は言った。

霊夢「どうしたんだって、どうしたもこうしたものないでしょ！」

再び怒鳴り声をあげ夢想封印の構えをとる霊夢。

流石にこれはまずいと思った魔理沙は急いで霊夢を止めにかかった。

魔理沙「ちよ、ちよつとまで、霊夢。夢想封印はヤバイつて！明希はただの人間なんだからそんな打つたら死んじまうぞ！」

魔理沙の両腕を後ろから取り押さえる魔理沙。

ここでやっと霊夢も我に帰ったか夢想封印の構えを解く。

それを観た明希は「ふう〜」と安心し霊夢に尋ねた。

明希「で、一体どうしたん霊夢？なんでそんなにキレてんの？」

霊夢が起こらないよう細心の注意を払いながらたずねる明希。

しかし、霊夢はどうやらまだ完璧に怒りが沈んでないようで明希にこう告げた。

霊夢「あんた自分で分らないの？」

霊夢の言葉はどことなく冷たく明希を見下しているようだった。

私の表情は明らかに戸惑ってしまっている。

すると、そんな私を見かねてから悟空がそつと私の耳に口を当て霊夢が何故、怒っているのかを教えてくれた。

悟空「実は……………」

悟空が教えてくれた瞬間、私は顔を抑えた。

そして、「そういうことか…」と小さく呟いたのであった。

霊夢「ふん。やつとわかったみたいね」

霊夢が半分キレた表情で私に言ってきた。

明希「でもよく霊夢。投稿ペースが遅くなったからつてそこまでキレることあるか？」

私はキレた霊夢を刺激しないように注意しながら霊夢にそう告げた。

そう霊夢がキレている理由は投稿ペース低下に対してキレているのである。

霊夢「はっ！あんたそれまじで言ってるの？」

そう告げた瞬間、霊夢は私の目の前に立ち鋭くかつ貪欲な視線を私に向けた。

私は直感で感じとった。「殺される」と…。

バツ

その瞬間、私と霊夢の間に入る悟空。

悟空「おい、待て霊夢。もうそろそろ年も開けるし明希かって休みたくて休んでるんじゃないんだからさ。許してやろうぜ…」

悟空はそう告げると霊夢に少し微笑んだ顔を向ける。

そんな悟空を見た霊夢は「はあく」と大きくため息をつき。

霊夢「しょうがないわねえ。悟空に免じてここ一ヶ月の動画投稿低下は許してあげるわ」

その霊夢の言葉を聞いた瞬間、私は「ほっ」と一息つく事が出来た。

喧嘩が終わった事を確認した魔理沙は、やっとかと言わんばかりに少しテンションを上げてこう言った。

魔理沙「よくし、それじゃあ、仲直りも住んだ事だし広間の方へ行って今年の事につ



いて語ろうぜ！」

魔理沙がそう告げた瞬間、私と霊夢と悟空はお互いに顔を合わせ少し笑みを浮かべた。

そして！

明希「そうしようか」

霊夢「そうしましょうか」

悟空「おう。面白そうじゃねえか」

と魔理沙の意見にノリノリになりそのまま4人は広間の方へ向かったのであった。

く広間へ移動く

明希「よっこらしよと」

広間に着くやすぐに触りこむ私。

それに続いて霊夢と魔理沙と悟空も互いにちやぶ台越しに円になるように座った。

魔理沙「よし、それじゃあ、忘年会といきますか」

魔理沙が俺たちにそう伝える。

どうやらこの忘年会の進行役は魔理沙が担当するようだ。

魔理沙「じゃあ、まず、今年あつた1番の出来事を話してくれ。あ、ちなみに物語の中の一年ではなくリアルの一年として見させてもらうぞ。まあ、要するにこの東方龍球

伝が始まってからの感想を述べてくれればいい。左から順番にまず、悟空からだ」  
そう告げると悟空に視線を送る魔理沙

悟空「まず、オラからか：そうだなあ」

腕を組み考え込む悟空。

そして！

悟空「やつぱり、この幻想郷に来た事だな！」

そう言いながら霊夢と魔理沙の顔を順番に見つめるように見る悟空。

悟空「今までオラは強え奴と沢山戦ってきた。でも、ここにいる幻想郷の奴らはめちゃくちゃ強えつてわけではねえが不思議な能力を持っていて、こんな戦い方もあるんだなあとか思いながらオラ自身沢山のことを学ぶ事が出来たしな」

なるほど。思わずそう言葉を零してしまうような悟空の発言を聞いた3人は心の中で呟いた。

確かに悟空にとって幻想郷にいるものはさほど強くない。

しかし、その強さすらもおぎなえかねない能力というハンデを持っているのである。

その能力によるトリッキーな戦いかたは悟空に新たな戦い方を教え悟空を進化させた一面もあるのである。

きつと、悟空はその事について感謝の気持ちを込めこの場を借りこの発言をしたのであろう。

魔理沙「えー、悟空さんありがとうございます。さて、続きまして博麗さんどうぞ」  
悟空の思った以上の真面目な発言のおかげか魔理沙の進行役魂に火がついたかそれほどぼつく発言する魔理沙。

霊夢「え、次は私？うーん。そうね」

次は自分だとは思ってなかったのか慌てて考え出す霊夢。

そして、そのまま数分が流れた。

霊夢「よし。決まったは」

かなり考え込んだ挙句、どうやらやつと今年一番の出来事を思いついたようだ。

魔理沙「お、やつと決まったか。なら早く行ってくれだぜ」

時間が空いたせいかわ魔理沙のやる気も消えておりいつもの口調に戻ってしまったていた。

霊夢「そうね。やっぱり私にとって一番な出来事は……くっ」

急に歯を強く噛み締め額に怒りマークを浮かべる霊夢。

魔理沙「ん、どうしたんだ霊夢？」

その霊夢の異様さに瞬時に気づいた霊夢は魔理沙に告げた。

すると、霊夢は少し声を荒げこう告げる。

霊夢「私にとって1番の出来事は神社が地震でぶち壊されたことよ」

霊夢のその発言を聞いた瞬間思わず私たちは「あっ」と声を上げてしまった。

そうじつは霊夢本編内で一度神社を壊されてしまっておりその事が霊夢の頭の中に深くきざみこまれていたのである。

霊夢「あゝ、あの日の事を思い返すだけで腹が立ってくるわ。あの天人やろう今度あつたらもう一回ぼろぼろにしてやるんだから」

どんどんと怒りの感情をこみ上げる霊夢。

そんな霊夢を見た魔理沙はなにかを感じ取ったか少し慌てた口調で霊夢に告げた。

魔理沙「まあまあ、霊夢落ち着いて落ち着いてもうそろそろ年が開けるのにそんなにイラついてちゃ越せるもんも越せなくなっちゃうぜ。いまは忘年会だしパーっと楽しもうぜ」

その魔理沙の台詞を聞いた瞬間、霊夢は「確かにそうね」と小言を呟き再び笑顔に戻した。

それを確認した私たちは「ほっ」と一息つき再び忘年会の続きをする事にした。

明希「えゝ、霊夢が言い終わつたし次はオレだな！」

やっと、自分の番が回ってきたぜ。と言わんばかりに声を荒げる私。

自分で書くのもおかしいが少し年末で興奮しているようだ。

しかし、そんな興奮とは裏腹に魔理沙からは残酷な台詞を言い渡されてしまった。

魔理沙「あー！！」

急に叫び声をあげる魔理沙。

思わず私は「どうした！」と魔理沙に聞き返す。

パンっ魔理沙は両手を合わせ私に謝るようにこう告げた。

魔理沙「すまねえ明希。予定の3000字を超えちゃった。悪いがお前の出来事を言ってる暇がなくなっちゃったから。また、来年年」

明希「な、なんだと！」

魔理沙の発言に思わず声を荒げる私。

霊夢「あら、もうそんなに書いたのね。じゃあ、最後にさっさと読者の皆さんにメッセーヂを送って終わりましょうか」

悟空「ああ、そうだな。オラ達がこうやってバカやれんのも読者の皆さんがいてこそだもん」

そう告げるやすぐに全員がこちらの方に振り向く。

霊夢「え、今年の2月5日から投稿を始めた東方龍球伝ですが」

魔理沙「皆様のおかげで無事年越しまで続ける事が出来ました」

悟空「来年も投稿を続けっから絶対に見てくれよな」

明希「あ、あとお知らせとしましては私は特色受験を受けるつもりなのでそれで合格すれば2月の後半からはまた、毎日投稿が戻せるかもしれないません」

霊夢「そのお知らせ今言う！普通後書きで書くべきでしょ」

明希「え、だってこう言うのは早く言った方が…」

悟空「こら、おめえたち最後なんだからそんな言い争いさんじゃなくてピシッとまとめようぜ」

悟空がそう告げると私と霊夢は再び真剣な顔に戻った。

そして！

明希「皆さま本当に今年一年ありがとうございました！」

霊夢「是非とも来年もこんな風に馬鹿がやれるよう応援した下さい！」

悟空・魔理沙「それじゃあ！」

霊夢・魔理沙・悟空・明希「また来年!!」

## 永久式の人造人間 第109話

悟空「オラの蹴りを受けてもダメージがないなんて…」

流石の悟空も今回ばかりは驚きを隠せない。

ぼたっぼたっ悟空の頬を叩い水が垂れ落ちる。

そう冷や汗である。

26号「どうした。孫悟空。お前の力はその程度か？話にならない」

悟空を挑発する26号。

その表情には絶対の自信が溢れていた。

悟空はこの挑発に乗ったわけではないが少し闘志を燃やす。

悟空「人造人間が何故こんな場所にいるかはしらねえが霊夢と魔理沙も今おめえの仲間と戦つてるといふならオラとここで遊んでるわけにはいかねえな。悪いが本気で行かせてもらうぞ！はあああああ!!」

そう告げると再び気を高める悟空。

そして！

ドゥーン

ビリビリビリビリ

悟空の周りに電気のようなオーラが走る。

そうスーパーサイヤ人2である。

悟空「さあ、第二ラウンド始めっぞ！」

そう告げると悟空は戦闘態勢をとった。

26号「ほお。それがスーパーサイヤ人2か…」

スーパーサイヤ人2へと化した悟空をマジマジ見る26号。

そして、小さく囁くようにこう告げた。

26号「これはあの方に素晴らしいデータを送れそうだ」

そうとだけ告げると26号も悟空と同様に戦闘態勢をとる。

睨み合う悟空と26号。

そして！

ヒュン

ヒュン

二人は同時に攻撃を仕掛けた。

26号「だりゃあ！」



ほんの一手早く攻撃を仕掛ける26号。

26号は手を大きく振りかぶった。

しかし！

悟空「だりやあ！」

ドンッ

少し振りかぶりすぎたか攻撃が遅れ悟空に先制攻撃をくらってしまった。

悟空「そんな大ぶりの攻撃オラにはあたらねえぞ！」

そうとだけ告げると…。

悟空「だりやりやりやりやりや」

物凄いラツシュを悟空は26号の腹部にはなった。

26号「ぐがががが」

流石の26号もこれにはたまったものではない。

そのまま悟空のパンチの威力に吹き飛ばされてしまった。

ドンッ

民家に身をぶつけてしまう26号。

26号はそのまま倒れ込んでしまった。

26号「くっ、実際に戦ってみるとデータ以上に攻撃は重いものだな。しかし！」

倒れ込みながらそう呟く26号、流石の人造人間もこれには降参かと、そう思われた時！

26号「よっこらしよ」

なんと、26号は再び立ち上がった！

悟空「なにっ!?!」

これには悟空もびつくら仰天！

なんと、26号はあの攻撃を耐えきったのである。

26号「あく、いたたたた」

そう呟きながら悟空の元へ戻ってくる26号。

悟空は思った。

まさか、こいつは！

悟空「エネルギー永久式！」

心で呟いたつもりが思わず声に出してしまふ悟空。

26号「お、バレちまったか。そう俺様は弱点なしの永久式の人造人間なのさ」

そう告げると高笑いを浮かべる26号。

悟空にとつてもこれは参った。

永久式の人造人間はエネルギーが減ることはない。

したがって倒すのに時間がかかってしまうのである。

ここは里の中いくら人々が避難しているとはいえそう長々と戦っては被害が出かないのである。

悟空「しようがねえ！」

悟空はそう告げると再び構えをとった。

そうスーパーサイヤ人3になろうと考えたのである。

目の前の人造人間。

どう考えても只者ではない。

正直言うとも魔人ブウぐらい厄介である。

何故ただの人造人間がここまで強いのか疑問を思いつつ気をためようと思ったその

瞬間！

悟空「ん？」

悟空はあることに気がついた。

26号の顔をまじまじとみる悟空。

そうそれは、26号の顔を隠しているフードが少しさっきの衝撃で破れていたのである。

完璧とは言わないものの少しだけ26号の顔を拝むことができた。

しかし！重要なのは26号の顔ではない。

その26号の額であった。

ほんのちよっぴりだが26号のフードの隙間から何かオレンジ色のものが埋め込まれているのが見えたのである。

一体、なんなのか？

悟空がそれを確認しようとした瞬間！

26号「おっと」

26号はフードを深く被りその何かを隠してしまった。

そして！

26号「どうやら、戦いはこの辺にした方がいいみたいだな」

何か慌てたような反応をする26号。

悟空に額を見られるのがそれ程まずかったのであろうか。

26号「おい、孫悟空よ。このまま勝負を続けお前が本気で戦ったらこの人里の住民に被害が出かけない。いや、少なくともこの里は高確率で焼け野原になってしまう。どうだ、ここは一時引き分けということだ」

急に悟空に提案を出す26号。

26号「お前にとっても悪い話ではない。私は必ずお前いや、お前たちの元へ再び現

れる。今は一時休戦するだけだ」

確かに今戦っては里にも被害が出る可能性が高い。

悟空は顎に手を当て少し考える。

そして！

悟空「わかった。今だけは見逃してやる。ただし、次会った時は容赦しねえからな」

悟空のその言葉には闘志がこもっておりどうやら、今回は本当に26号を見逃すようだ。

26号はフード越しに薄ら笑いを浮かべる。

そして！

26号「さらばだ」

とだけ告げ何処かへ飛んでいってしまった。

悟空「一体、あいつはなんだったんだ？」

26号が去った後も考え込む悟空。

悟空「あいつはオラに額を見られるのを恐れていた。それにあの一瞬見えたオレンジ色のものは……。それにあの異常なまでの戦闘力。いってえ、この幻想郷ではなにが起こったんだ？」

今起こった摩訶不思議な出来事に頭がこんがらがってしまおう悟空。

悟空「とりあえず、紫の所へ戻るとすつか……。気を感じ取った感じどうやら霊夢と魔理沙も無事みたいだしな」

悟空はそう告げた瞬間。

額に指を当て紫の元へと瞬間移動するのであった。

## 謎のフードの男 第110話

時は少し坂戻り魔理沙が悟空達と離れて単体行動をとっていた。

魔理沙「悟空に言われた通りそれぞれ別の道でフードの奴らを探すことにしたけど、やっぱり、人里は広いなあ。フードの奴らなんてちつとも見つかる気がしないぜ」

魔理沙はぶつくさ文句を言いながら人里を探索する。

まあ、無理のないことであろう。

魔理沙の言う通り人里の広さは狭いと一言で収めれる大きさでは決してないのである。

いくら手分けして探したとしても見つけるのはそう容易なことではないだろう…。

しかし

魔理沙「ん？」

魔理沙は不意に目を尖らせる。

その目はまるで獲物を見つけた肉食動物のような目であった。

そうもう察しがついていると思うが魔理沙に向かって何者かが歩いて来ているのである。

ガシッ

その人物は強く地面を踏みつけると魔理沙の目の前で止まった。

魔理沙は無言のまま視線を相手に集め睨みつけた。

そうその人物こそが例のフードの男であるのだ。

よくよく考えてみれば向こうもこっちを探しているのである。

別にこっちが顔を合わせたくなかるうともすぐに合う運命だったのだ。

魔理沙「お前が例の私達を探してたっていう奴らの一人か？」

魔理沙はその静けさの漂うフードの男に尋ねた。

しかし、悟空の相手とは違い。

今、魔理沙の目の前にいる者は一向に口を開こうとはしない。

そして！

ヒュン

魔理沙「なっ!?？」

バゴンッ

魔理沙に一気に接近し不意打ちをかけた。

流石の魔理沙も油断しておりまともに攻撃をくらってしまう。

魔理沙「ぐ、ぐはっ！」



魔理沙はそのまま腹を抑え込み膝立ち状態になった。

そして、抱え込んだ痛みの中あることを理解した。

それは……。

魔理沙「こ、こいつ、強い」

そう相手の戦闘力である。

よくよく考えてみると何故か相手の戦闘力をさつきから感じる事が出来なかったのである。

ここ最近、気を感じることに頼りきつてる魔理沙にとって今の相手の行動はまさに暗黙の中からの攻撃に等しいといっても過言ではなかったのだ。

魔理沙は少しよろけつつ立ち上がる。

そして、強い眼光を相手にみせた。

魔理沙「いきなり攻撃なんてやってくれるぜ。どうやら、お前が例の奴らの一人で間違えないみたいだな」

自分を急に攻撃して来た事から相手が例のフード男の一人であることを確認する魔理沙。

しかし、フードの男は……。

??? 「……………」

魔理沙の声がまるで聞こえていないかのように無言の表情を続けた。

魔理沙「また、だんまりかよ。まあ、いいけどな」

そう告げるやいなや無言の表情の相手に不思議な思いを持ちつつも魔理沙は戦闘態勢をとった。

## 魔理沙がピンチ！魔法拳破れる！ 第111話

無言の相手を正面にとらえ続ける魔理沙。

どうやら、魔理沙自身さっきの攻撃からして目の前にいる敵は只者ではないと認識をしたようだ。

魔理沙「どうした？不意打ちじゃなきゃ攻撃ができないのか？」

少し煽りを交える魔理沙。

どうやら、敵の心理状態を掴もうとしているようだ。

しかし…。

フード「……………」

やはり、相手は無言の状態を貫き通す。

ただの無言野郎か魔理沙の動揺を誘っているかは定かではないがどうやら何をしても口を開きそうにはない。

魔理沙「ち、まだ、無言かよ。なら、いいぜ！私がお前の口を力づくで割ってやる」

魔理沙はそうとだけ口走ると一気に魔力を解放する。

そして！

ビュン

魔理沙は超スピードで相手の懐まで迫りよった。

魔理沙「だりやあああ!」

魔理沙はそのまま勢いに身を任せ拳を相手の腹部めがけ投げ飛ばした!  
しかし…。

ガシッ

魔理沙「!?!」

なんと、魔理沙のパンチはいともたやすくフードの男に受け止められてしまった。

これには、流石の魔理沙も驚きを隠すことは出来ない。

魔理沙「わ、私のパンチを!くっ!」

魔理沙は受け止められた拳を軸にし相手に回し蹴りを放った。

流石の相手もこれには驚いたのか受け止めた魔理沙の手をはなし回し蹴りを防御する。

魔理沙は、拳が相手の手から抜けた瞬間に回し蹴りに使った足をすぐさま地面へとおろしバックステップをした。

そう相手との距離をとったのである。

魔理沙「く、なんてやつだ…」

自分のパンチを受け止められたことにまだ衝撃を隠せない魔理沙。

まあ、無理もない。

先ほどの攻撃はどちらかと言うと不意打ちに近いものでありながら受け止められてしまったのだ。

魔理沙「これは、マジでやらないとヤバイみたいだな」

魔理沙の目つきが変わる。

そして！

魔理沙「はああああ！」

魔理沙は魔力を溜める構えを取り体のエネルギーを集中させた。

そうこれは！

魔理沙「魔法拳！」

ボンッ

そうこれこそ魔理沙の奥の手魔法拳である。

この戦いガチでやらないとヤバイと思つた魔理沙はいち早く魔法拳を使ったのであつた。

フード「ほお」

今まで一言も発しなかったフードの男も今回は言葉をごぼした。

魔理沙「ふん、やっとお前の声を聞けたぜ」

魔理沙はそう告げると再び戦闘態勢をとる。

魔理沙「わかつてると思うが魔法拳を使った私は一味も二味も違うぜ!」

魔理沙「だりやあああ!」

ビューーン

魔理沙はフードの男に接近した。

フード「は、はやい!」

魔理沙はフードの男に右手で思いつきりパンチを放った。

魔理沙のパンチは風すらも切り物凄いい音をなびかせる。

フード「ちっ」

フードの男は舌打ちをしとっさに攻撃を受け流す。

しかし…

。

魔理沙「まだまだ!」

受け流されたかと思うと今度は空に飛び上がる魔理沙。

そして！

魔理沙「だりやりやりやりややや!!!」

魔理沙は高密度ながら威力、素早さを兼ね備えた弾幕をフードの男に向かって放った。」

ドン、ドン、ドン、ドン、ドン

弾幕はフードの男の立っている地面へと衝突していく。

あたり一帯には爆風が立った。

魔理沙「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

ここに来て息を切らし出す魔理沙。

どうやら、今の攻撃でかなりの体力を消費したようだ。

魔理沙は、周りを見渡す。

そこで人里に被害が出ていないかを確かめた。

どうやら、魔理沙とフードの男が戦っている間に周りの住民は避難したらしく建物自体にもあまり大きな損害はなかった。

魔理沙「どうやら、周りでの被害は無いみたいだな。それにしても危なかったぜ。下手をしていたら私がドボンだったぜ」

魔理沙は薄れゆく爆風を見ながらそんなことを呟いたのであった。

しかし……………。

「はっはっはっはっはっはっ!」

急に爆風の中から笑い声が聞こえ出した。

魔理沙「なに!」

魔理沙は、恐る恐る笑い声の方へと顔を向ける。

そこには!

な、なんと爆風の中から人影が見えたのである。

魔理沙の顔は一気にどん底に落ちたような表情を浮かべた。

魔理沙「おいおい、嘘だろ?」

動揺のあまり目の前で起こっていることが理解できない魔理沙。

まあ、無理もない。目の前に見たくないものがどんどんはつきりと見えて来ているのだから。

そうその見たくないものとはもう殆どの人がお察しであろう。

フード「ふははは」

そうフードの男である。



なんと、フードの男はあの魔理沙の猛攻を耐えきったのである。

魔理沙「マジかよ。あいつ」

流石の魔理沙も動揺を隠せない。何故なら今のは自分の全てをぶつけた攻撃。それをいとも簡単に防がれたのだから。

魔理沙「でも、今のを耐えるなんて普通できるか？ん？」

疑問に思った魔理沙はフードの男をマジマジ見つめる。

そして、あることに気づいた。

ブイーン

魔理沙「あ、あれはバリアか！」

そうバリアである。

爆風のせいで少し霞んでしまいうまく見ることが出来なかったが爆風が消えた今フードの男の周りに透明な球体のようなものがフードの男を包むようにまかれていたのだ。

ビューーン

フードの男はゆつくりとバリアを解く。

フード「今のは少し驚いたぞ！」

先程の無言が嘘のように口から言葉を吐き出すフードの男。

おそらく、これは魔理沙の強さを認めた証拠であろう。

フード「貴様の今の攻撃。バリアなしではダメージは免れなかった。尊敬に値するぞ。だが、しかし!貴様はこれで終わりだ」

フードの男はそうとだけ魔理沙に告げると身体中にエネルギーを溜め出した。

魔理沙「く、なんて威圧感だ。押しつぶされそうだけ」

魔理沙は、フードの男の戦闘力アップに今までに感じたことのない恐怖を感じた。

魔理沙「おいおい、嘘だろ。あの野郎、今まで全然本気を出していなかったな」

魔理沙は苦笑いを浮かべつつ告げるのであった。

時は少し遡り霊夢が魔理沙と悟空も別行動をとっていた。

霊夢「それにしてもやつぱり人里は広いわね。全然、見つかる気がしないわ」

単体行動をとることになった霊夢はどうやら、人里の広さに少し困惑しているようだ。

霊夢「こんな風に歩いててもキリがないわね。少し休もうかしら」

霊夢はそう告げるや否や人里のお団子屋さんの方へと目を向ける。

霊夢「お団子か…そういうえば、最近食べてないわね」

霊夢は、トコトコとゆっくりと団子やに近づいて行く。

しかし、

霊夢「おっと、危ない。危うく娯楽に走ってしまふところだったわ」

ギリギリの所へ我に返り自分の使命を頭に再度浮かべた。

霊夢「紫をも倒すほどの敵がこの人里に潜伏してる今そんなことしてる暇はないわね」

霊夢は、自分にそう聞かせると足早と団子屋を去って行くのであった。

数分歩いたところだろうか……。

霊夢は、目の前に怪しげな男が一人こちらへ歩いて来ているのに目をやった。

霊夢は目を尖らせる。

そして、一言告げた。

霊夢「あらあら、どうやら向こうからこちらに来てくれたみたいね」

そう霊夢が見たのは例のフードの男であったのだ。

何故か、気を感じることが出来ないがその男から出てくる威圧感から恐らく間違えな  
いであろう。

霊夢は、戦闘態勢とまでは言わないが少しだけ身構える。

霊夢「あなたが例の私と魔理沙と悟空を探してたつていうフードの方かしら？」

10メートルほどの感覚を保ちつつ霊夢はゆっくりとフードの男に質問をした。

フードの男はニヤリと笑う。

フード「ふふふ」

その笑みは不気味さをさらけ出すだけでなく、霊夢に恐怖すらも与えた。

霊夢「ちよつと、あんた何笑ってるのよ!」

霊夢から冷や汗が流れ落ちる。

「どうやら、霊夢は体ではなく直感で感じとったようだ。」

この相手はヤバイと!

霊夢は戦闘態勢をとる。

霊夢「いいあんた?もし、私の質問に答える気がないなら、少し荒っぽいけど力づくでやらせてもらおうわよ!」

霊夢はフードの男に警告を交えたセリフを伝えた。

すると、フードの男は……。

フード「は、は、は、は、は、面白い。なら、力づくで喋らせてもらおうか!」

霊夢の警告に従うどころか、霊夢の警告に乗ってきたのである。

それには、流石の霊夢も驚きの声が漏れた。

霊夢「何ですって……」

一歩後ずさりする霊夢。

その時だった。

ヒュン

霊夢「なっ!？」

フードの男は霊夢の目に捉えられないような速度で霊夢に接近してきた！  
眼光をこれでもかというぐらい開ける霊夢。

フードの男はそんな霊夢の表情を楽しむかのように手を大きく振る。

そして！

バゴンッ

霊夢の腹部めがけ信じられない威力のパンチを放った。

霊夢「ぐはっ!？」

霊夢の腹部から唾液が飛び出る。

霊夢は、そのまま膝立ち状態になってしまった。

霊夢「く、ぐぐぐ」

痛みに耐える霊夢。

人里の人々はその光景を見てパニックになってしまった。

人々「うわあ！」

人々「悪魔だ!」

人々「逃げろー!」

次々と逃げて行く人々。

これは、逆に霊夢にとつては都合が良かった。

人々が勝手に逃げてくれたのなら思う存分戦えるそう思ったのである。

霊夢「ふん」

シュン

霊夢はジャンプするり

フード「ん?」

フードはそんな霊夢のジャンプを見上げた。

その瞬間!

霊夢「はあ!」

バゴンツ

霊夢はフードの男に力一杯の回し蹴りを放った。

流石のフードの男もそれを避けきけることは出来ない。

フード「ぐっ!」

少し吹き飛ばされてしまうフードの男。

フードの男は思った。

こいつ、思ったよりやるな！と…。

フード「思ったよりやるではないか！俺に攻撃を当てるとわな」

フードの男はそう告げると霊夢を鋭い眼光で睨みつけた。

霊夢「ふん、そりやどうも」

霊夢もそれに合わせてフードの男を睨み返す。

しかし、霊夢は内心ビビっていた。

何故なら、今の回し蹴りはまともに奴を捉える事が出来た、

しかし、やつにはこれっぽっちのダメージも入っていないのだから。

正直、もう降参スレスレである。

両者、共に構える二人。

そして！

霊夢「はああああ！」

フード「はああああ！」

両者とも気を解放し始めた。

「どうやら、ここからがお互い本領発揮のようだ。」

ヒュン ヒュン

同時に超スピードで近づきあう二人。

そして!

霊夢「だりやりやりやりやりや!」

フード「だりやりやりやりやりや!」



## 圧倒的力の差 第112話

フード「さあ、次はこっちから行かせてもらおうぞ！」

デーン

そう告げるとフードの男の周りに白いモヤモヤした炎のようなオーラが出てきた。

どうやら、本気で魔理沙を殺す気のようにだ。

魔理沙の額からは冷や汗が流れ落ちる。

そして、後悔した自分一人であいつと戦おうと思ったことを……。

魔理沙「くっそお！」

魔理沙はヤケクソになり戦闘態勢をとる。

そして！

魔理沙「だりやりやりやりやりや！」

弾幕を相手に放った。

今度の弾幕はどちらかというと威力重視でかなりのエネルギーが込められていた。

だが、しかし！

フード「ふん」

フードの男は右手を前にかざす。

そして！

フード「だりやあ！」

右からものすごい威力のエネルギー波を放った。

その威力、下手をすれば魔理沙のマスタースパークをも上回る程の威力である。

デウン デウン デウン デウン

魔理沙の弾幕はいとも容易く奴のエネルギー波に飲み込まれてしまった。

魔理沙「な！私の弾幕が！」

戸惑う魔理沙！

フード「今だ！」

フードの男は魔理沙の戸惑った一瞬を狙い魔理沙に急接近した！

ヒュン

魔理沙の目の前に現れるフードの男。

フードの男は魔理沙の腹部に重い一撃を放った。

その速度は素早く魔理沙ですらそのスピードについていくことは出来なかった。

ドンッ

魔理沙の腹部にパンチが命中する。

魔理沙 「ぐはあ！」

魔理沙の口から血が吹き出る。

今までに感じたことのない程の威力のパンチ魔理沙は絶句したこの戦い負けるのではないかと…。

バタンツ

地面に倒れ込んでしまう魔理沙。

フード 「どうした！もう終わりか」

倒れた魔理沙を見下すフードの男。

しかし、いくら見続けても魔理沙は動かない。

フード 「ふん、死んだか」

あまりにも動きを感じ取れなかったので勝手に死んだと判断する男。

フードの男は倒れた魔理沙を置いて何処かへ歩き出すのであった。

しかし！

「待てよ」

フード 「ん？」

フードの男の背中から声が響いた。

フードの男は恐る恐る後ろを振り向く。

そこには！

魔理沙「どこにいくんだよ」

よろめきながら立っている魔理沙がいた！

どうやら、先程の攻撃に耐えきったようだ。

フード「ほお、これは驚いた。てつきり、死んだと思ってたよ」

フードの男はそう告げるや否や再び魔理沙の方へと体を向けた。

薄ら笑いを浮かべるフードの男。

！  
魔理沙「ははは、悪いな私はなかなかしぶとくてなたったパンチ一発じゃしないぜ  
！」

魔理沙はそう告げるとよろめきながらも戦闘態勢をとった。

魔理沙「せめて、そのフードだけでも引き裂いてお前の素顔を拝ませてもらうぜ！」

魔理沙は、そう告げるとかをためはじめる。

そして！

魔理沙「魔法拳1.5倍だー!!」

魔理沙は魔法拳を一気に1.5倍まで引き上げた。

フード「ほお、まだ、それ程の力を残していたとは面白い。いいだろうもうすこし遊んでやろう。はあ！」

そう告げるとフードの男も周りに白いもやを出し戦闘態勢をとる。

魔理沙は、思った。

今のこの状況普通に戦っては勝ち目はまずない。

しかし、それはあくまで普通に戦ったらの話。

どんな手を使つても勝つてやる！と…。

魔理沙は額に指を当てる。

そして！

シユン

瞬時に消え去った。

フード「なにっ!？」

さすがのフードも困惑する。

フード「ちっ、奴はどこへ？」

辺りをキョロキョロ見渡すフードしかし、どこを見ても魔理沙の姿はない。

その時だった！

魔理沙「魔符「スターダストレヴァリエ」」

フードの男の背後から魔理沙な声が聞こえる。

フードの男は慌てて後ろに振り向いた。

そこには！

スペルカードを持った魔理沙がいた！

どうやら、魔理沙は瞬間移動で相手の死角に回り込みスペルカードを構えたようだ。

フードの男は慌てて距離をとろうとするが時すでに遅し。

魔理沙の放ったスペカがフードの男を捉えた。

超近距離からの弾幕流石のフードの男も避けることが出来なかったようだ。

フード「ぐ、ぐあああ！」

バン バン バン バン

次々と命中していく魔理沙の弾幕

その素早さと密度は相手にバリアをはらせるスキすらも与えなかった。

魔理沙「はあはあ、ザマアみやがれ！」

ヒューン

魔理沙の魔法拳が解除される。

どうやら、エネルギーを使い果たしたようだ。

少し距離を取り爆風を見つめる魔理沙。

魔理沙「はあはあ、決まったのか？」

息を切らしつつ今ので決まったことを祈る魔理沙。

正直、これで倒せていかなかったらもう魔理沙に勝ち目はないだろう。

しかし、現実とは酷いものであった。

「はああああああ!!」

突然、爆風の中から叫び声が響く。

爆風はその叫び声と共に一気に吹き飛ばされた。

魔理沙「おいおい、冗談じゃないぜ」

もはや苦笑いですら浮かび上がらない魔理沙。

それもそのはず、なんと、爆風の中からほぼ無傷で奴が出てきたのだから…。

フード「今のは少し焦ったぞ」

フードの男は少し動揺の表情を浮かべる。

だが、恐らくダメージは少ししか入っていないであろう。

しかし、魔理沙のやったことは無駄では無かった。

な、なんと、フードの男のフードが完全ではないにせよ少し破れていたのである。

魔理沙「ふん、どうやら、少しだけ顔を拝めたようだな」

フードの男をマジマジ見つめる魔理沙。

そして、あることに気づいた。

魔理沙「ん？」

それはフードの男の額である。

先程まではフードが邪魔で見ることが出来なかったが今フードの破れた隙間からなにやらオレンジ色の球のようなものが見えたのである。

フード「ふははははははは」

急に笑い出すフード。

フード「よくぞ、私のフードの中を少しでも覗くことが出来たな。気に入ったぞ！」

そう告げるとフードの男は破れた部分を隠す。

フード「よかろう。今回は貴様を見逃してやるぞ。あの方の命令も貴様らの処分ではないからな」

意味ありげな言葉を並べるフードの男。

魔理沙は、そこに疑問を覚えた。

魔理沙「あの方？命令？お前一体、なにを入っているんだ！」

威圧のある声で告げる魔理沙。

しかし、フードの男は、薄ら笑いを浮かべ魔理沙に告げる。

フード「ふふふ、残念ながらまだ、貴様らにその事を話すわけにはいけないんであなたの方の計画を……」



フードの男はそうとだけ告げると魔理沙に背中を向ける。

魔理沙は、とっさに手を伸ばし「待て！」と叫んだ。

フードの男はチラツと魔理沙の方を振り向く。

魔理沙「せめて、お前の名前を教えてくださいませんか？別に名前ぐらい問題はないだろ？」

魔理沙は、フードの男に名前を教えるよう要求する。

すると、フードの男は少し悩んだ後こう告げるのであった。

フード「人造人間27号」

そうとだけ告げフードの男は飛んでいくのであった。

魔理沙は、27号の飛んでいった先の空を見つめる。

魔理沙「人造人間だと？」

訳の分からない事を言って何処かへ飛んで言った敵に不安と恐怖を感じる魔理沙。

魔理沙は、額に指を当て紫の元へと瞬間移動するのであった。

## 負けるな霊夢 第113話

時は少し廻り霊夢が魔理沙と悟空も別行動をとっていた。

霊夢「それにしてもやつぱり人里は広いわね。全然、見つかると気がしないわ」

単体行動をとることになった霊夢はどうやら、人里の広さに少し困惑しているようだ。

霊夢「こんな風に歩いててもキリがないわね。少し休もうかしら」

霊夢はそう告げるや否や人里のお団子屋さんの方へと目を向ける。

霊夢「お団子か：そういえば、最近食べてないわね」

霊夢は、トコトコとゆっくりと団子やに近づいて行く。

しかし、

霊夢「おっと、危ない。危うく娯楽に走ってしまうところだったわ」

ギリギリの所へ我に返り自分の使命を頭に再度浮かべた。

霊夢「紫をも倒すほどの敵がこの人里に潜伏してる今そんなことしてる暇はないわね」

霊夢は、自分にそう聞かせると足早と団子屋を去って行くのであった。

数分歩いたところだろうか……。

霊夢は、目の前に怪しげな男が一人こちらへ歩いて来ているのに目をやった。

霊夢は目を尖らせる。

そして、一言告げた。

霊夢「あらあら、どうやら向こうからこちらに来てくれたみたいね」

そう霊夢が見たのは例のフードの男であったのだ。

何故か、気を感じることが出来ないがその男から出てくる威圧感から恐らく間違えな  
いであろう。

霊夢は、戦闘態勢とまでは言わないが少しだけ身構える。

霊夢「あなたが例の私と魔理沙と悟空を探してたつていうフードの方かしら？」

10メートルほどの感覚を保ちつつ霊夢はゆっくりとフードの男に質問をした。

フードの男はニヤリと笑う。

フード「ふふふふ」

その笑みは不気味さをさらけ出すだけでなく霊夢に恐怖すらも与えた。

霊夢「ちよつと、あんた何笑ってるのよ！」

霊夢から冷や汗が流れ落ちる。

どうやら、霊夢は体ではなく直感で感じとったようだ。

この相手はヤバイと！

霊夢は戦闘態勢をとる。

霊夢「いいあんた？もし、私の質問に答える気がないなら。少し荒っぽいけど力づくでやらせてもらうわよ！」

霊夢はフードの男に警告を交えたセリフを伝えた。

すると、フードの男は……。

フード「は、は、は、は、は、は、面白い。なら、力づくで喋らせてもらおうか！」

霊夢の警告に従うどころか霊夢の警告に乗ってきたのである。

それには、流石の霊夢も驚きの声が漏れた。

霊夢「何ですって……」

一歩後ずさりする霊夢。

その時だった。

ヒュン

霊夢「なっ!？」

フードの男は霊夢の目に捉えられないような速度で霊夢に接近してきた！  
眼光をこれでもかというぐらい開ける霊夢。

フードの男はそんな霊夢の表情を楽しむかのように手を大きく振る。  
そして！

バゴンッ

霊夢の腹部めがけ信じられない威力のパンチを放った。

霊夢「ぐはっ!？」

霊夢の腹部から唾液が飛び出る。

霊夢は、そのまま膝立ち状態になってしまった。

霊夢「く、ぐぐぐ」

痛みに耐える霊夢。

人里の人々はその光景を見てパニックになってしまった。

人々「うわあ！」

人々「悪魔だ！」

人々「逃げろー！」

次々と逃げて行く人々。

これは、逆に霊夢にとっては都合が良かった。

人々が勝手に逃げてくれたのなら思う存分戦えるそう思ったのである。

霊夢「ふん」

シユン

霊夢はジャンプするり

フード「ん？」

フードはそんな霊夢のジャンプを見上げた。

その瞬間！

霊夢「はあ！」

バゴンッ

霊夢はフードの男に力一杯の回し蹴りを放った。

流石のフードの男もそれを避けきることは出来ない。

フード「ぐっ！」

少し吹き飛ばされてしまうフードの男。

フードの男は思った。

こいつ、思ったよりやるな！と…。

フード「思ったよりやるではないか！俺に攻撃を当てるとわな」

フードの男はそう告げると霊夢を鋭い眼光で睨みつけた。

靈夢「ふん、そりやどうも」

靈夢もそれに合わせてフードの男を睨み返す。

しかし、靈夢は内心ビビっていた。

何故なら、今の回し蹴りはまともに奴を捉える事が出来た、

しかし、やつにはこれっぽっちのダメージも入っていないのだから。

正直、もう降参スレスレである。

両者、共に構える二人。

そして！

靈夢「はあああ！」

フード「はあああ！」

両者とも気を解放し始めた。

どうやら、ここからがお互い本領発揮のようだ。

ヒュン ヒュン

同時に超スピードで近づきあう二人。

そして！

霊夢「だりやりやりやりや！」

フード「だりやりやりやりや！」

ものすごい攻防戦を繰り広げた。

霊夢はパンチを放てばそのパンチをフードの男が受け流しフードの男がパンチを放てば霊夢が受け流すというまさに互角！まさに超人と言わんばかりの戦いであった。

しかし、そんな中！

霊夢「はあ！」

霊夢はその攻防戦の中で一瞬の隙を見つけフードの男に超近距離でエネルギー弾を放つ！

だが、それを瞬時に判断したフードの男は！

フード「無駄だ！」

負けじと霊夢とほぼ同じ威力のエネルギー弾を放った。

ドンッ

二人のエネルギー弾は互いにぶつかり合い大きな衝撃波を生み出した。

ビューン

霊夢「ぐ、うわー！」

フード「な、なにー！」



その衝撃波を近距離で浴びてしまい二人とも互いに線対称になるよう吹き飛ばされていった。

しかし！

霊夢「ぐっ！」

フード「はっ！」

二人ともすぐに体の態勢を立て直し空中で急ブレーキをかける。

霊夢「はあはあ、強い！」

息を切らしつつ告げる霊夢。

フード「強い？ふん、そのセリフはこつちも一緒さ。驚いたよ生身の人間がここまで

戦えるとわね」

フードの男も霊夢を褒める。

どうやら、お互いの強さを認めあったようだ。

フード「いいだろう。お遊びはこのへんにしてお互い本気でやろうじゃないか？」

フードの男は霊夢に告げる。

霊夢「本気ですって？」

霊夢はそのフードの男にへんな疑問をもった。

フード「とぼけるな。貴様、まだ、力を隠しているだろう。その力を全てみせてみろ

！そして、私もみせてやる！お互い本気と本気をぶつけ合おうじゃないか！」  
どうやら、フードの男は霊夢との本気のバトルを望んでいるようだ。

この霊夢との短時間の中フードの男の心で燃えている炎にガソリンのようなものが  
まかれたのであろうか！

フードの男は燃えるような心で霊夢に告げた。

霊夢ら軽く微笑む。

そして！

霊夢「いいわ。やってやろうじゃない！あんたの望む通り本気でね！」  
相手の提案になったのであった。

## 靈夢の限界！決めるぜ20倍界王拳！ 第114話

靈夢「いいわよ！あんたの望み通り見せてあげる！私の本気をね！」  
そう告げると靈夢は気を溜める態勢をとる。

そして！

靈夢「10倍界王拳！」

靈夢は界王拳を使った。

靈夢の周りに色鮮やかな赤色のオーラがにじみ出る。

靈夢「これが私の本気よ！」

ぼうぼうぼうぼう

フード「ほお」

文字通り燃え上がる気を見せつけられ少し驚くフードの男。

しかし、思ったよりもリアクションは薄かった。

靈夢「さあ、私の本気を見せたんだから。次は貴方の本気を見せてもらおうわよ！」

そう言いながら相手を指差す靈夢。

すると…。

フード「ふ、ふはははは」

急にフードの男は笑い始めた。

霊夢はその笑いに少しイラつきを覚える。

霊夢「何急に笑いだしてんのよ」

霊夢の怒りに気づいたのかフードの男は笑うのをこらえ霊夢にこう告げた。

フード「すまない。君が冗談を言うものだからついね」

霊夢「冗談ですって?」

霊夢は別に何一つとして冗談は言っていない。

一体、相手は何を企んでいるのか、霊夢は少し警戒する。

フード「まあ、冗談と言っても君は本気のもりだったのかな。私に本気を出せと言

うのは……」

霊夢「なんですって?」

霊夢が眉をひそめる。

その霊夢の反応には怒りも確かに入っているがどことなく恐れも感じ取れた。

フード「正直に言いますよ。もし、あなたの本気がそれなら私の25パーセント。

そう4分の1の力さえ出せばあなたに勝利することが出来ます」

な、な、なんと、フードの男は自分の4分の1で霊夢に勝利出来ると宣言してきた!

これには流石の霊夢も困惑する。

霊夢「たつたの25パーセントですって…。舐められたものね。この界王拳確かに体力だけは馬鹿みたいに使うけど戦闘力の増加はその分果てしないものになっているのよ！そんな、強がつてるとあんたやられるわよ」

しかし、霊夢も流石にそれはハツタリと思つたのかすぐに正気にもどつた。

フード「ふん。信じれないと言うならば見せてあげましょう！25パーセントのパワーをね！」

そう告げるとフードの男は戦闘力を解放するのであつた。

フード「さあ、行くぞ！」

急に戦闘態勢をとるフードの男。

どうやら、この男本気で霊夢と25パーセントの力で戦う気のようなだ。

霊夢「ち、私も舐められたものね。いいわ！見せてあげる。界王拳の力を！」

霊夢はそう告げるや否やフードの男と同様に戦闘態勢を取つた。

お互い睨みつけ合う二人。

そして…。

霊夢「はあ！」

霊夢はフードの男めがけ一気に接近した！

そのスピードは先程までとは比較にならないほどのスピードである。

大きく腕を振りかぶる霊夢。

そして!

霊夢「だりや!」

勢いよくパンチを放った。

パンチは勢いよく風を切る音を放ちながらフードの男の顔面目掛けて飛んで行く。

霊夢自身この瞬間自分のパンチは完全に相手を捉えたと思った。

しかし!

ガシッ

霊夢「え?」

フード「ふん」

な、な、なんと霊夢のパンチはいとも容易くフードの男に受け止められてしまった!

霊夢も自分自身何をされたか頭の回転が追いつかず、固まってしまう。

フードの男はその霊夢の油断をついたのか瞬時に反撃にうつった。

フード「はあっ!」

ドンッ

受け止めた霊夢の拳を軸にして膝蹴りを霊夢の腹部に入れ込むフードの男。

霊夢「ぐはっ!?？」

これには流石の霊夢も大ダメージをくらってしまった。

しかし、フードの男は攻撃をやめない。

すぐに攻撃をくらい霊夢がよろめいた所を狙って思いっきり回し蹴りを霊夢目掛けて放った!

勿論、霊夢がそんな攻撃避けることなどできるはずがなく……。

ダンッ

シューーン

数メートル先まで吹き飛ばされるのであった。

フード「どうした。これで終わりか」

倒れ込んだ霊夢を見下すかのように見つめるフードの男。

霊夢「く、はあはあ……」

霊夢は息を切らしつつも再び立ち上がる。

ダメージみたいはかなり入ってしまったようだがどうやら、戦えなくなるほどではないようだ。

霊夢「これで25パーセントですって、ふざけてるわね」

疲労のせいかな、焦りのせいかな、どうかは定かではないが思わず本音が溢れてしまう霊

夢。

フード「だからいっただろう。私は25パーセントの力で貴様をやれるとな。どうする?降参するか?」

霊夢に力の差を体で教えたくえでそう尋ねるフードの男。確かにこのまま戦っても恐らく霊夢に勝ち目は無い。

霊夢はこのまま降参してしまうのであろうか…。

しかし!

霊夢「降参ですって?冗談言わないでよ降参するぐらいなら私は死んだ方がマシよ」  
そう言いながら再び構えをとる霊夢。

それを見たフードの男は首を左右に振り「やれやれ」と告げるのであった。

フード「いいだろう。体に叩き込んでもわからないのなら。死んで後悔するがよい!」

そう告げるとフードの男も霊夢に合わせ構えをとる。

霊夢はこの時、思った。

この戦い死ぬ気でやらないと負けると…。

霊夢は気を溜める態勢をとる。

そして…!



霊夢「界王拳20倍よ！」

今の自分の限界20倍界王拳を使った。

ぶっちゃけ霊夢自身流石に20倍まであげてしまうと10分と体がもたない。

霊夢はこの短期間の戦闘力増加に全てをかけたのであった。

次回！超本気の霊夢とフードの男がぶつかり合う！

## 本気と本気 第115話

炎のような輝きを見せる霊夢。

それをみたフードの男は驚いた。

てつきり、フードの男は霊夢はもうすでに限界のパワーを見せていたと思っていたのである。

フード「これは驚いた。私はてつきり、さつきまでの力が本気かと思っていましたよ」  
フードの男は改めて霊夢を感じるのであった。

霊夢「ふん、まあね」

霊夢は、少しドヤ顔を浮かべるとすぐさま構えを取る。

どうやら、界王拳を20倍まで上げたので時間がないようだ。

霊夢「さあ、とつとと始めるわよ。この姿はあんまり体力に余裕がないの」

霊夢は鋭い眼光でフードの男を睨みつけた！

それをみたフードの男も霊夢に合わせて構えを取る。

フード「いいだろう。お前のその本気、私も試させてもらおう」

そう告げるとフードの男は早速、超スピードで霊夢に接近した！

そして、そのまま勢い任せに霊夢へパンチを放った。

そのスピードはあまりにも素早く先程の霊夢なら避けることすらままならなかったであろう。

しかし、今の霊夢は違った！

ガシッ

な、な、なんと霊夢はこの異様なまでの素早さをそのまま素手で受け止めたのである

！

フード「なに！」

流石のフードの男もこればかりには驚きを隠せないようだ。

霊夢はそのまま腕を振り上げる。

そして！

霊夢「さっきのお返しよ！」

ドゴンッ

霊夢はフードの男の腹部に物凄い一撃を与えた。

フード「ぐはあ！」

腹部に激しい痛みを感じるフードの男。

しかし、霊夢は攻撃を止めることはなかった。

霊夢は、そのままフードの腹部めがけ連続でパンチを放つ！

霊夢「だりやりりやりりや!!」

フードの男はそのまま数メートル吹き飛ばされてしまった。

よろめくフードの男。

すると、フードの男は謎の独り言を呟きだした。

フード「な、な、なんだ。このパワーは強い。強すぎる！データではこれほどのパワーはなかったはず、ちっ、どうやらパワーアップを成しているようだな」

霊夢は、この一人ごとに敏感に反応する。

あまりにも不自然過ぎる独り言流石の霊夢も気になり相手に尋ねる。

霊夢「データ？あんた、一体何言ってるの？」

その質問を聞いた瞬間、フードの男は霊夢の目を見つめた。

どうやら、今の独り言を聞かれたのが少しマズかったようだ。

フード「おっと、いけない。聞かれちゃったか。だが、まあいいだろう」

そう告げるとフードの男は構えを取る。

フード「ここで貴様を倒せばなんの問題もない！」

フードの男はそう告げると気を貯める体制をとる。

そして！

フード「はあああああ！」

フードの男は瞬時にエネルギーを貯めだした。  
みるみる上がるフードの男の戦闘力！

そして！

フード「はあ!!」

フードの男から物凄い衝撃波が吹き飛んだ！  
フード「さあ、第2ラウンドスタートだ！」

## 20倍界王拳の「夢想封印 集」 第116話

力を解放したフードの男の威圧に圧倒されてしまう霊夢。

霊夢「く、この威圧感！なんて、力なの見てるだけで押しつぶされそうだわ」

霊夢は今までにないほど警戒を入れた。

構えをとる霊夢。

その額からは汗が滲み出ていた。

フードの男は指で霊夢に挑発をいれる。

霊夢の目つきが変わった。

霊夢「ふん、あんまり私をなめないことね。だりやあ！」

そう告げた瞬間、霊夢はフードの男に急接近した。

しかし、フードの男も霊夢に合わせ霊夢に接近する。

そして！

霊夢「だりやりやりやりやりや!!」

フード「だりやりやりやりやりや!!」

再び激しい攻防戦が続いた。

今のフードの男は20倍界王拳の霊夢さえしのぎ兼ねないスピードとパワーを持っている。

そのゆえ、どうしてもこのようなタイマンでは霊夢が不利になってしまった。

フード「だりやりやりやりや!!」

攻撃の速度を速めるフードの男。

ついに霊夢は防戦一方になってしまった。

霊夢「くっ!」

なんとか、攻撃する隙を作りたい霊夢。

このパワー差を埋めるにはあれしかなかった。

霊夢は一度後ろへ力強くバックステップをとった。

そう相手との距離を取ろうと考えたのである。

しかし…。

ガシッ

霊夢「っ!?!」

フード「逃がさん」

なんと、フードの男は霊夢のバックステップに瞬時に反応し霊夢の足を捕まえたので

ある!

なんとか、抜け出そうと対抗する霊夢。

しかし、そのとてつもない握力に霊夢の骨が悲鳴を上げ始めた。

メシメシ

フード「ふん、このまま握り潰してやる！」

フードの男はみるみる握力を上げていく。

その時だった！

霊夢「ふ、はははは」

急に霊夢が笑い始める。

これには流石のフードの男も頭にクエスチョンマークを浮かべた。

フード「なんだ。恐怖で頭がおかしくなっちゃったか？」

フードの男は霊夢に尋ねる。

霊夢は笑うのをやめこう告げた。

霊夢「バカね。そんなわけないでしょ。私が笑った理由はあなたがまさに私の予想通

りの行動をとってくれたからよ！」

フードの男の目がほんの少し泳いだ。

どうやら、霊夢の言葉に動揺しているようだ。

霊夢「あなたが私の足を掴むこれは私の予想の範囲内だったのよ！」



霊夢はそう告げるとスペルカードを構えた！

霊夢「いくら、あなたでもこの距離からの攻撃を避けられるかしら！」

そう霊夢の作戦はこれだったのだ！

これこそ相手との力の差を埋める方法の一つ。

近距離からの本気の一撃である！

この近距離の状況を作り出した霊夢の勝利なのだ！

霊夢「くらいなさい！これが私の本気！20倍界王拳の！霊符「夢想封印 集」

」

近距離から霊夢の最大の攻撃力を誇る技。

「夢想封印 集」が放たれた！

霊夢の足を掴んでたフードの男も慌てて霊夢の足をはなし距離を取ろうとする。

しかし、そんな余裕なのすでにあるはずもなく…。

ドンッ

フードの男は爆風に飲み込まれていくのであった。

ものすごい爆風と衝撃波に体が吹き飛ばされてしまう霊夢。

霊夢自身も近距離で衝撃を受けてしまったためダメージは入ってしまったようだ。



しかも、息も切らしておらずピンピンしている。

霊夢「う、うそでしょ！私は確かに全力でやった。不死身なのか！」

流石の霊夢も動揺を隠せないようだ。

あれ程のエネルギーふつうの者なら耐えられるはずがない。

ましてや、ダメージがないなんて！

霊夢「ん？あれは？」

その時、霊夢があることに気づく。

それは、フードの男の顔である。

先ほどの霊夢の攻撃でどうやらフードの男のフードが吹き飛んだようだ。

しかし、霊夢が気になったのは別にフードの男の顔がどうのこうののではない。

その額である。

何かはよく分からないがフードの男の額にボールのような物があつたのである。

霊夢「その額の物は一体？」

霊夢はフードの男に尋ねる。

しかし、勿論それに対する返答は返ってこなかった。

フード「どうやら、俺は貴様をなめていたようだ」

フードの男は背中を向ける。

そして、こう告げるのであった。

フード「今回は生かしといてやる。俺らの目的は貴様らの処分ではないからな」  
その瞬間、フードの男は飛び出そうとする！

しかし、霊夢は！

霊夢「はあ！」

残り少ないエネルギーを絞ってフードの男に攻撃を仕掛けた。

フードの男は振り返る。

フード「やめておけ、今の貴様では俺に勝てない。それは貴様が一番わかってるはずだ」

フードの男は強い威圧を霊夢にかける。

その瞬間、恐怖から霊夢は体が震えだした。

霊夢「なら、せめてあなたの名前はなんなの？それを教えなさいよ！」

霊夢はフードの男に名前を要求した。

フードの男は霊夢に背中を見せる。

そして…。

フード「人造人間22号」

そうとだけ告げ何処かへ飛んでいくのであった。

霊夢は棒立ち状態に少しなってしまう。

霊夢「人造人間？」

どうやら、最後のセリフに謎を覚えたようだ。

しかし、こんなところに立っけていても何も始まらない。

そう考えた霊夢は紫の元へ瞬間移動するのであった…。

## 人造人間の謎 第117話

それぞれのルートでフードの男いや、人造人間と戦った悟空、魔理沙、霊夢は、紫の元へ瞬間移動した。

悟空「お？」

魔理沙「ん？」

霊夢「ん？」

なんとこの偶然か3人はほぼ同時に瞬間移動で紫の元へ戻った。

紫は3人を見て驚く。

紫「ど、どうしたの3人ともその体の傷は！」

そう3人の体は傷だらけだったのである。

無理もない生死を分ける戦いを行なっていたのだから。

紫「まさか、フードの男達に！」

紫は心配の眼差しで霊夢達を見た。

魔理沙と霊夢はうつむく。

そして、拳を強く握った。

霊夢「あいつの強さはまさに別次元だったわ。まるで、歯が立たなかった」

魔理沙「ああ、恐らく向こうがひいていつてくれなかったら今頃、私達は生きてないぜ」

霊夢と魔理沙の目には悔しさがうつる。

それを見た悟空は二人にこう告げた。

悟空「何言つてんだ二人共。今回もし、負けたんなら次勝てばいいだけだろ。また、一から修行してそいつらに勝てばいいんだ！」

悟空の台詞は根拠もない根性だけの言葉だった。

しかし、今の二人には悟空の言葉が支えにもなった。

霊夢と魔理沙に少し笑顔が戻る。

それを確認した悟空と紫はお互い顔を合わせ「ニツ」と笑うのであった。

悟空「あ、そうだ！霊夢に魔理沙？」

悟空が何やら不意に思い出したかのように霊夢と魔理沙に尋ねた。

霊夢と魔理沙は「え？」という表情を浮かべる。

悟空「オメエ達フードの男と戦ったんだろ？その時、相手の顔特に額の部分なんか見てないか？」

そのセリフを聞いた霊夢と魔理沙は「はっ！」と声を荒げた。

「どうやら、覚えがあるようだ。」

霊夢「そういえば、相手の額に変な球みたいなのがあったわね。オレンジ色の」

そのセリフを言った瞬間、魔理沙は霊夢の言葉を聞き少し早口になりながら告げた。

魔理沙「私もだぜ。オレンジ色の変なボール」

二人のその言葉を聞いた瞬間、悟空は深刻そうな顔を浮かべた。

悟空「そうか…」

何故か悟空の目には焦りのようなものが写っていた。

悟空「とりあえず、この話の続きは人里ではなく一度、博麗神社に戻ってから話そう」  
そう告げると悟空は霊夢と魔理沙と紫と共に舞空術を使い博麗神社に戻るのであつた。

数分後…。

悟空「よし、ついたな」

悟空達はすぐに博麗神社に戻ってきた。

つくやいなやすぐに霊夢は悟空に尋ねた。

霊夢「ちよつと、悟空一体どうしたの？博麗神社に一度戻ったってことはかなり重大

な話なの？」

霊夢の表情には少し不安がみえた。



無理もない。

今回の異変。正直、悟空ですら焦るほどなのである。

魔理沙「なあ、悟空。教えてくれよ？あのオレンジ色の球に一体何があるんだ？」

霊夢と同様いや、それ以上かもしれない。

魔理沙の言葉もあたふたとしておりかなり怯えているようだ。

悟空は、ゆっくりと口を開ける。

悟空「あくまでオラの推測だが結論から、言わせてもらうと奴らはドラゴンボールの力を利用して作られた人造人間だ！」

そのセリフを聞いた瞬間、霊夢と魔理沙と紫は数秒固まってしまった。

そして、霊夢はゆっくり口を開く。

霊夢「ド、ドラゴンボールってまさか！前にあんたが言ってた邪悪龍っていうとんでもない化け物を生んだボールのこと！」

霊夢のセリフに悟空はコクリと頷く。

悟空「ああ、間違いねえ。オラもこの目でしつかり見た！一瞬だったから何神球かは分からなかったが間違えなくあれはドラゴンボールだった！」

悟空は拳を強く握る。

悟空「今回は、まだ一人につき相手は1つのボールしか持っていないから対処出

来た。だけど、もし、一体の人造人間に7個全てのボールが備わったら……」

幻想郷に来て初めて見せる怯えた表情。

これは霊夢と魔理沙を更に不安にするのであった。

紫「悟空。もう一つ聞きたいことがあるんだけど？ どうして、相手が人造人間だと？」  
紫は重苦しい空気の中悟空に尋ねた。

悟空「ああ、それは向こうが勝手に名乗ってくれたんだ。俺は人造人間ってな。オラの予想だが霊夢と魔理沙もオラと同じじゃねえか？」

悟空は霊夢と魔理沙の方に顔をやる。

霊夢「ええ、そうよ。相手が人造人間って名乗ってたわ」

魔理沙「私もだぜ」

どういいうわけかは、分からないが人造人間達は向こうからこちらに人造人間だと教えてくれた。

わざとか単なる気まぐれかは分からないがそのおかげで少し相手の情報が掴めた。

魔理沙「なあなあ？」

不意に悟空達の方に振り向く魔理沙。

魔理沙は、少し頬を赤らめる。

魔理沙「少し言いくいんだけどさ……。人造人間ってなんだ？」

どうやら、魔理沙今まで人造人間の意味を理解せずに会話には言っていたようだ。

霊夢「あんたよく今までの話についてこれたわね」

霊夢は少し呆れた顔をする。

悟空と紫はくすくす笑っていた。

良い意味でも悪い意味でも今の会話は霊夢達の雰囲気を増すことになった。

人造人間達のこととはまだまだ謎が多いが今後ゆっくり調べていけばいい。

話はそういう風にまとまるのであった。

## 地霊編

### 嬉しい大ニュース! 第118話

里に人造人間が現れたあの時からじつに1ヶ月が経とうとしていた。

霊夢と魔理沙、それに悟空も今まで以上に修行を積む。

今度こそ奴らを倒す! 今度こそ奴らの目的を暴く!

そのことだけを一心不乱に考え拳を振り続けるのであった。

現在、悟空 v s 霊夢 & a m p ; 魔理沙の組手が行われている。

霊夢「だりやあ!」

魔理沙「だりやあ!」

霊夢は右から魔理沙は左から悟空に回し蹴りをはなつ。

しかし、悟空は両方とも肘で受け止めた。

そして、「だりやあ!」とそのまま衝撃波を放ち2人を吹き飛ばそうとする!

しかし、2人はその衝撃波に逆らい無理矢理悟空は近づこうとした。

それを見た悟空は、瞬時に攻撃へ切り替え衝撃波で身動きが取れない2人に鋭いパン

チをそれぞれ放つ。

これを食らった2人は流石にダメージが大きく降参してしまった。組手を終えた3人は縁側に腰掛け雑談を交わす。

魔理沙「やっぱり、悟空は強いぜ。なかなか勝てねえ」

霊夢「本当よね。悟空がちよつと本気を見せたらスーパーサイヤ人にならなくとも私たち2人を倒せるまさにチートだわ」

この2人は相変わらず、悟空に勝つことが出来ず正直、悟空の強さに驚いている。

前までは正直、悟空ともそれなりのバトルが出来ていたのだがここ最近、霊夢と魔理沙はともに物凄い戦闘力をつけてきた。その為、悟空は次のステップとして本気で霊夢達と戦っているのである。

悟空「だけど、オメエ達も凄えぞ。オラがこの幻想郷に来てまだ、数年しか経っていないえ。そんな、短時間でそこまで戦闘力をあげるなんて、普通の人間ならまず、考えらんねえしな」

悟空は、毎日組手が終わる為にこのように霊夢と魔理沙を褒める。

おそらく、理由は霊夢と魔理沙のモチベーションの上昇もあるであろうが悟空自身霊夢達の強さに驚かされているのであろう。

悟空は、ひよいつと縁側から立ち上がる。

悟空「今日ももう日が傾きはじめてえだし今日の修行はここまでだ」

悟空の言葉聞いた魔理沙と霊夢は「うん」と相槌を打ち。

その日は、解散することにした。

魔理沙「じゃあ、今日は内に帰るから」

近頃、博麗神社に泊まることが増えていた魔理沙であったが週に一回は家に帰るり今日はその日であった。

魔理沙「じゃあな! 2人共!」

箒に足をかけた魔理沙はそう告げるとプカプカと浮かび上がり博麗神社を後にするのであった。

魔理沙「いや、今日もいい汗かいたぜ!」

空の空気を全身であたり汗を乾かす魔理沙。

どうやら、風がよほどきもちいのである。

と、その時だった!

魔理沙は急ブレーキをかける。

魔理沙「ん? なんだあれ?」

どうやら、魔理沙はなにかを見つけたようだ。

魔理沙の向いた方向にはデッカい穴が開いていたのである。

魔理沙はゆっくりとその穴の方へ近づいていった。

魔理沙「霊夢の神社の近くにこんな穴なんてあったか？」

魔理沙は、頭に疑問符を浮かべた。

そう実はこの場所博麗神社からはそう遠く離れておらずほんの数分でいける距離にあるのである。

魔理沙「もしかして、新手の妖怪か幽霊か？」

魔理沙は息をのむ。

そして、恐る恐る周りを見渡した。

しかし、いくら見渡そうとも生物の影が見えるどころか妖気すら感じることがなかった。

魔理沙「周りには特に危険そうな奴はいないみたいだな」

最新の注意を払いつつ周りを調べる魔理沙であったが結局怪しいものは何一つ見つけることが出来なかった。

周りを見渡した魔理沙は次に穴の方へ視点を変えた。

そうよくよく考えてみるとまだ、穴の中を確認していないのである。

魔理沙は、自分に大丈夫大丈夫と言い聞かせ恐る恐る穴の中を覗こうとする。

その時だった！

バシャーーーーーー!!!

魔理沙の前にあるものが飛び出てきた。

魔理沙「な、なにーーーーー!!!」

突然、驚く魔理沙。

魔理沙は、穴の周りを激しく動き回り興奮状態に入ってしまった。  
そして、ニヤリツと笑い急いで家に帰るのであった。

翌日。

魔理沙「おーーーーーい!!!」

早朝、魔理沙はすぐに博麗神社に来た。

霊夢と悟空は驚く!

それもそのはず、時計を見てみるとまだ朝の6時だったのだ。

お天道様もついさっき顔を出したばかりである。

霊夢「ちよ、魔理沙なんて時間に来てんのよ!いくらなんでも早すぎるでしょ!」

慌てて玄関から出てきた霊夢は少し呆れた顔で魔理沙を見た。

しかし、そんな霊夢の表情はほったらかしにする魔理沙。



魔理沙「そんなことは、どうでもいいぜ！そんなことより霊夢ちよつと来てくれよ！」  
どうも来るや早々、子供のようにはしやぐ魔理沙。

霊夢について出てきた悟空も思わず首を傾げてしまう。

霊夢は、はしやぐ魔理沙に対して少しダルそうな表情をとる。

霊夢「わかったから取り敢えず落ち着きなさいよ」

霊夢のその言葉を聞いた瞬間、ほんのすこしだけ我に帰ったのか少し落ち着きを取り戻す魔理沙。

魔理沙はふと太陽の方角をみる。

そして、自分がこんな朝早くに飛び出してきたことを初めて知った。

魔理沙「わるい、わるい、つい興奮しちまって」

魔理沙は、頭に手をかけ笑顔で誤魔化す。

それを見た霊夢は軽くため息をついた。

恐らく、魔理沙へのあきれが現れているのであろう。

そんな、霊夢の表情を見かねてか悟空はすぐさま話の流れを変えるべく魔理沙に尋ねた。

悟空「それで、魔理沙おめえ一体何があつたんだ？」

悟空のその言葉に対し少しにやけ顔を浮かべる魔理沙。

そして、魔理沙は2人にこう告げるのであった。

魔理沙「聞いて驚くなよ!なんと、博麗神社の近くに間欠泉があったんだ!!」  
霊夢の表情が一瞬固まる。

そして……。

霊夢「え?えええー!!!」

幻想郷に響き渡るような大きな声を上げる霊夢であった。

## 娯楽の中に潜む影 第119話

霊夢「間欠泉ですって！」

目をまん丸にして魔理沙を見つめる霊夢。

魔理沙は、予想通りの反応に少しニヤける。

魔理沙「その反応待ってたぜ！」

やはり、お互い間欠泉の存在は大きく少し興奮気味のようなだ。

魔理沙は、霊夢と悟空に顔を近づける。

魔理沙「なあなあ、今日修行が終わったら行ってみないか久しぶりにゆつくりとした

温泉水で体を休めたいぜ」

魔理沙がその台詞を告げた刹那。

霊夢は空白の時間を挟むことなく魔理沙に告げる。

霊夢「もちろんよ！」

霊夢のその表情はまるで子供のような表情であった。

余程、温泉水が好きなのであろう。

しかし…。

悟空「すまねえ。じゃあ、オラはパスだ」

なんと、悟空は温泉の誘いを断ったのであった。

霊夢と魔理沙は目を大きく見開く。

魔理沙「なんでだ悟空？」

思わず、魔理沙は悟空に考えた。

しかし、次の悟空の言葉で2人はすぐ納得するのであった。

悟空「いや、だってオラ男だぞ？」

霊夢「あつ」

魔理沙「あつ」

口を開けつばなしで固まってしまふ霊夢と魔理沙。

そうよくよく考えてみれば最近出来た間欠泉。

男女分けられてるわけもなく思春期の霊夢達と悟空が一緒に温泉に入れるわけがないのだ。

霊夢「そう言えば、そうだったわね」

少し考え込む霊夢。

しかし、そんな霊夢を見かねた悟空は優しい声で霊夢に告げるのであった。

悟空「別にオラの事は考える必要なんてねえ。オラの事は考えなくていいからお前達

だけで行つてこい」

悟空のその声を聞いた瞬間、霊夢と魔理沙は軽く会釈をする。

どうやら、話がまとまったようだ。

悟空「よし！そうと決まれば少し早いけどさっさと修行して今日の分の修行を終わらせるか！」

そう告げ等や否や悟空達はすぐさま修行を始めるのであった。

そして、数時間後

時刻は5時を回ろうとした。

霊夢「だりやあ！」

魔理沙「はっ！」

相変わらず、組み手を繰り返す霊夢と魔理沙。

ぶつちやけたところこの二人の強さにも少し限界が来ていた。

勿論、動きの俊敏さやパンチの重さなどはあがってはいる。

しかし、相手の動きを予想で来ていないのだ。

簡単に説明すると相手が動いてから行動することが多いので少し動作が遅れてしま

うのである。

悟空も薄々このことには気づいていた。

ふと、時計を見る悟空。

そして、時間を確認した。

悟空「よし、二人とも今日は朝早くからやってたしここまでだ」

その台詞を聞いた瞬間、組み手をストツプする2人。

霊夢と魔理沙はそのまま悟空の元へ寄るのであった。

魔理沙「なんだ？悟空もう終わりか？」

悟空に尋ねる魔理沙。

そんな、魔理沙に少し悟空は笑みを浮かべつつ告げるのであった。

悟空「なんだ、魔理沙？忘れちゃったのか？今日は修行を早く切り上げておめえが見

つけた間欠泉の温泉に入りに行くって言ってたじゃねえか」

その言葉を聞いた瞬間、魔理沙はハツとした。

表情から、何うにどうやら忘れていたようだ。

魔理沙「いつけねー。完全に忘れてたぜハハハハ」

軽く笑ってごまかす魔理沙。

悟空はそんな魔理沙に笑顔という言葉で返答するのであった。

霊夢「じゃあ、魔理沙さっさと用意していきましようか」

霊夢は魔理沙にそう告げる。

魔理沙は、霊夢の方に振り向き「そうだな」と呟くのであった。

数分後

霊夢と魔理沙は桶とバスタオルとタオルを持ち例の間欠泉へ向かうのであった。

霊夢「それじゃあ、行ってくるわね」

最後にそうとだけ告げ魔理沙とともに間欠泉の元へ目指す霊夢。

悟空は、そんな霊夢と魔理沙に「おう！」とだけ言葉をかわすのであった。

ビューン ビューン

颯爽と旅立っていく霊夢と魔理沙。

しかし、この頃の霊夢と魔理沙は知らなかった。

この後、間欠泉で起こる謎の出来事<sup>いへん</sup>を……

博麗神社を出発して1分ぐらいだろうか。

魔理沙の言っていた通り本当に博麗神社のすぐ近くに間欠泉があった。

霊夢「わく、本当に間欠泉があるじゃない！」

間欠泉を見て更に興奮を高める霊夢。

魔理沙「本当って、今まで信じてなかったのかよ」

霊夢「いや、そういうわけじゃないけど、なんていうのかしら、いぎ、目の前で実物を見るとより感動がこくなっちゃって」

魔理沙「あく、なるほどな」

間欠泉を目の前に再び会話を交わす2人。

それは、まるで修学旅行前日の中学生のような顔をしていた。

スタツ スタツ

同時に間欠泉の目の前に降り立つ霊夢と魔理沙。

時間のタイミングも良かったのかちょうど間欠泉から温泉水が飛び出ている。

霊夢「それにしても凄い迫力ね。一体、いつの間にこんなのが出来たのかしら？」

霊夢の目に少し疑問の表情が浮かんだ。

確かにその通りである。

今まで何にも考えずにここまで来たのだがいぎ考えてみるとこんな所に急に間欠泉が出来るのは少し不自然なのであった。

霊夢「まさか、これも異変？」

霊夢は目を尖らせる。

しかし、その時！

魔理沙「なぐに、言ってるんだ霊夢。仮にこれが異変だとしても悪いことじゃねえじゃ



ねえか。これが、あれば多くの妖怪や人間が体を休めることができる。逆にこの異変に感謝しねえと」

魔理沙は霊夢にそう告げた。

確かに魔理沙の考えも一理ある。

別に間欠泉が出来たからといってマイナスに働くことはほぼない。

霊夢は、少し顔を上げやはり、考えすぎかなと自問自答を繰り返すのであった。

しかし、その時！

ピクツ　　ピクツ

霊夢と魔理沙の頭の中に電流が流れたような直感が走った。

霊夢「これは、一体！」

## 謎の妖怪達 第120話

間欠泉で何かを感じとった霊夢と魔理沙。

2人は、間欠泉の方へと目をやる。

その時だった！

シユン シユン

本来は、温泉水が出るべき場所である地底へと繋がる穴から2つの影が舞い上がって来た。

その影は人型をしておりどう考えても間欠泉から出てくるものではない。

霊夢達は身構える。

その時だった！

ドンッ ドンッ

間欠泉から飛び出て来た影の正体が2体、霊夢達の目の前に足をおろす。

その姿は、どこかしら異様な光景をしておりどう考えても普通のものではない。

妖怪A「ケツケツケツ。どうやら、ここ本当に地上と繋がっているようだな」

妖怪B「こりや良いぜ！今まで見れなかった外の世界を堪能できる。いや、上手くい

けば支配すらできるかもしれねえ」

何者かは、分からないが会話から察するに穏やかな存在ではないようだ。

そんな会話を交わしている中妖怪達は目の前にいる霊夢と魔理沙に気がついた。

妖怪A「おい、みてみるよ。あれを……」

一体の妖怪が霊夢と魔理沙の方を目掛け指を指した。

妖怪A「あれは人間じゃねえか。噂によると美味いらしいぜ」

妖怪B「何？それは本当か？」

霊夢達を見るや否や舌で口周りをぬぐう妖怪達。

どうやら、霊夢達を食料として見ているようだ。

妖怪A「地上で初の食事だ！しっかり味わって食ってやるか」

妖怪B「そうだな」

妖怪達はそんな会話をした瞬間、一気に戦闘態勢をとる。

妖怪A「よお！人間ども！どうやら、人間どもどうやら、お前達には運が無かったよ

うだな！何故なら、貴様らはたまたまか故意的かは知らんが俺たちが地上に出た瞬間、

その出口付近にいるとわな！」

あまりにも威勢良く告げる妖怪。

霊夢と魔理沙はお互いに顔を合わせ「はあ」と大きなため息をついた。

妖怪B「ふん。どうやら、己の不安さに対してのため息が出たようだな。だが、安心しろ。こう見えても俺たちは優しいんだ。苦しむ間もなく一瞬である世に行かせてやる」

そう告げるや否や霊夢に急接近する妖怪B。

霊夢は魔理沙に対して「やっぱり、うまい話には何かしらの悪いことがついてくるのね」つとダルそうな表情で呟くのであった。

霊夢は瞬時に腕を引く。

そして、敵が自分に対して近づいて来た瞬間！

引いていた腕を一気に解き放ち妖怪の腹部目掛け重いパンチを放った。

ズボッ

霊夢の腕は妖怪の腹部を貫通する。

ストンッ

妖怪はそのまま重力に引かれ霊夢の腕を抜け地面に倒れこむのであった…。

魔理沙は、それを何事も無かったかなように呆然と眺めている。

しかし、その中一人だけ冷や汗を流すものがいた。

そいつは勿論、こいつである。

妖怪A「う、嘘だろ」

そう妖怪Aである。

どうやら、この妖怪達は異変解決の専門家である霊夢と魔理沙を知らなかったようだ。

妖怪Aは、少し後ずさりする。

しかし…。

霊夢「待ちなさい」

逃がさんと言わんばかりに妖怪に鋭い眼光を飛ばす霊夢。

妖怪はあまりの恐怖に立ちすくんでしまった。

霊夢「あんたを倒す前に1つ聞きたいことがあるの」

そう告げるや否や霊夢は妖怪Aに近づいていく。

妖怪Aは、近づいてくる霊夢の威圧に押され尻餅をついてしまった。

霊夢「貴方達は何者？何が目的？そして、あの間欠泉はなんなの？」

霊夢は一気にくつもの質問を妖怪Aにした。

しかし、妖怪Aは、恐怖のあまりどうやら口がすくんでしまったらしく。

言葉を発することが出来ない。

霊夢「はあ」

大きなため息をつく霊夢。

すると、サツと妖怪Aに手の平を見せるような体制になる。

霊夢は、そのまま手にエネルギーをためていった。

すると、霊夢の手の平が光を浴び出す。

霊夢「いい、あと10秒以内に知ってることを全て言いなさい。さもないと、貴方の命はないわよ」

そう告げると霊夢はゆっくりとカウントをとる。

霊夢「いーち、にーい、さー…」

妖怪A「俺たちは何にもしらねえ。ただ、変な穴があつたからそこを通つてここにきただけなんだ。本当だ」

霊夢のカウントに焦つたのか慌てて口を開ける妖怪A。

霊夢は、手にエネルギーを溜めるのをやめる。

霊夢「なるほど、じゃあ、あんた自身この穴については何にも知らない」と

妖怪A「ああ…」

霊夢はその言葉を聞いた瞬間、クルツと体を回し魔理沙の方へと歩いていく。

霊夢「なら、もうあんたには用はないわ。この幻想郷を荒らさない限りは私達は別にあんたをあつたりもしないしね」

どうやら、この妖怪Aは本当に何も知らない上にたいした力も持っていない。

そうとわかった霊夢は妖怪Aを見逃してやることにしたのであった。妖怪Aは、その言葉を聞いた瞬間、慌てて何処かへ飛び立っていく。恐らく、今後、霊夢達の前に現れることはないであろう。

霊夢「ねえ、魔理沙」

真剣な表情で魔理沙を呼ぶ霊夢。

霊夢「どうやらこの間欠泉。かなりヤバイみたいよ」

魔理沙「ああ、そうみたいだな」

どうやら、霊夢と魔理沙はこの間欠泉のヤバさを理解したようだ。

この間欠泉をほっておくときつとまたさっきのような妖怪が出てくるはず…。そう考えた霊夢達はある行動をするのであった…。

## 悟空不在の異変解決 第121話

博麗神社付近に突如出現した間欠泉。

霊夢と魔理沙は極楽目的でそこに行つたのだがなんとその間欠泉からは温泉水ではなく妖怪達が湧き出てきた。

何故、妖怪が出てきたのか理由はよくわかっていないがこのままこの間欠泉を放置したならば幻想郷のバランスが崩れる可能性すらある。

霊夢達はこの状況を打破すべくある行動をとつたのだった。

霊夢「魔理沙、行くわよ！」

霊夢はそう告げると間欠泉の方へと足を運んだ。

しかし…。

魔理沙「ちよつと待てよ霊夢」

魔理沙は霊夢の肩を掴み霊夢の足を止めた。

そのまま霊夢を自分の方へ振り向かせる。

魔理沙「行くんだつたら悟空を呼ばなくていいのか？ここから博麗神社まではそう遠くわねえぜ」



そう魔理沙は、悟空を呼ぼうと思ったのだ。

たしかに悟空がいれば万が一のことがあるともきつと大丈夫。

彼にはそれほど力があるのだから。

霊夢「ダメよ」

霊夢は、魔理沙を睨みつけそう告げた。

魔理沙は、首をかしげる。

魔理沙「なんてだ？」

どうやら、魔理沙は霊夢の考えを読み取ることが出来ないようだ。

まあ、たしかにそうであろう。

ここから悟空を呼びに行くのは、ぶつちやけ瞬間移動を使えば1秒もかからないのである。

自分達、2人が危険な事にあつた場合を想定するならばやはり悟空を呼ぶのが一番適作に思えるのだ。

明らかに頭に疑問符を浮かべたような表情をする魔理沙にたいし霊夢は間欠泉を指差した。

霊夢「魔理沙、よく考えて見なさい。あの間欠泉は急に現れたものなのよ。だからこそあの間欠泉がどこに繋がってるのか出入り口があそこ以外にあるのかなどわからない

い事だらけなの。もし、悟空を連れて三人で間欠泉に入ったとするわ。でも、間欠泉が突如現れたように間欠泉が突然消えてしまい更には他の出口も無いとしたらわたし達3人はまんまと間欠泉の中の世界に閉じ込められてしまうの。もし、そうなって帰るのに1ヶ月かかっちゃつたら1ヶ月間妖怪が暴れ放題になっちゃうわ。だからこそ、今回は悟空に博麗神社にいらつてもらつてもしもの場合に備えてもらおう。私はそれが一番の適作だと思おうわ」

魔理沙「なるほどなあ」

霊夢の意見を聞いた魔理沙は少し考える表情を浮かべつつも最終的には霊夢の意見に賛成した。

魔理沙自身も幻想郷を守るにはこれが一番と思つたのであろう。

魔理沙「わかつたぜ霊夢！なら、さつさと間欠泉だろうが何だろうがとつと入つて主犯をぶつ飛ばしてやろうぜ」

魔理沙は気合のこもつた声で霊夢に告げると霊夢はクスリと笑みを浮かべ「もちろんよ！」と威勢よく告げるのであつた。

# 力が入らない？ 第122話

間欠泉の目の前まで足を進める霊夢と魔理沙。

霊夢は、魔理沙に最後の確認をとる。

霊夢「いいわね、魔理沙。ここに入ったら一体何処につながっていつ返ってこれるか  
はわからないわよ」

霊夢は、魔理沙の方をチラッと振り向きながら告げた。

その霊夢の慎重さは霊夢の目をみれば一目瞭然。

今までにないほどの真剣さであった。

確かによく考えてみれば今までの異変はいわば、皆が簡単に行き来できる表の幻想郷  
で起きていた現象だった。

しかし、今回は違う。

この先が何処につながってるかは愚か帰ってこれる保証すら無いのだ。

あえて、言葉を言い換えるならばそう裏の幻想郷である。

誰でも簡単に足を運べる場所ではなく。

情報が全くない。いわば、謎の世界。

そんな中に入ると言うのだから、霊夢が慎重になるのも無理がないのである。

しかし、魔理沙は、そんな霊夢を慎重さを他所にいつも通りの破天荒な性格で霊夢にこう告げるのであった。

魔理沙「な〜くに慎重になってるんだぜ霊夢。お前らしくもない。こう言うところはな行き当たりばったりでいいんだぜ。そんなに深く考えることもねえと思うけどな」

魔理沙は、ニツと霊夢の方に笑みを浮かべた。

魔理沙の白く光る歯が霊夢の眼に映る。

そして…。

霊夢「ふふふ」

霊夢は、不意に笑みを浮かべた。

魔理沙「何笑ってるんだぜ? 霊夢」

恐らく、その機ではないだろうがまるで自分が笑われているように錯覚する魔理沙は、少しイラツとした。

霊夢は、慌てて誤解を解くように説明する。

霊夢「いや、違うのよ魔理沙。別にあなたのことを笑ってるんじゃないのよ。ただ、あなたの発言を聞いたら一瞬でも慎重になった自分が少し馬鹿らしくなっただけ」

霊夢は、そう告げると再度、間欠泉を睨みつける。

そして、霊夢は魔理沙に告げるのであった。

霊夢「行くわよ！魔理沙！」

魔理沙「おう！」

シュン　　シュン

その瞬間、霊夢達は一気に間欠泉の中に入り込んだのであった。

どンドン奥へ進んで行く霊夢と魔理沙。

しかし、その間欠泉の穴は思ったよりも深く掘られておりなかなかそこまで辿り着かない。

三分ぐらいたったころだろうか、霊夢達はまだ間欠泉の穴を突き進んでいる。

どうやら、この間欠泉思ったよりも深いらしく。

霊夢達がそれなりの速度で移動しているにもかかわらず一向につかない。

そこから考えてもこの間欠泉はかなりの深さといってもいいであろう。

しかし、霊夢達はそんなことをまるで意識してないかのように一気に穴を突き抜けて行く。

しかし…。

霊夢「ねえ、魔理沙」

どうしたのか、不意に魔理沙に声をかける霊夢。

その表情は少しうなだれていた。

魔理沙は、霊夢の方に軽く顔を向け「なんだ？」と告げる。

霊夢「この間欠泉。おかしくない？」

魔理沙「間欠泉？そりゃ妖怪も湧いてくるぐらいだからな。それにかなり深いし」

霊夢「そんなことを言ってるんじゃないわ」

そう告げると霊夢は一度ブレーキをかけた。

急に止まる霊夢に魔理沙も急いで急ブレーキをかける。

魔理沙「なんだよ？霊夢。急に止まったりして」

霊夢の方に近づきながら告げる魔理沙。

すると、霊夢は、急にある行動を取り出す。

霊夢「はあ！」

霊夢は急に戦闘力を解放した。

狭い間欠泉の穴に勢いよく風が流れる。

魔理沙「わ、なんだよ、霊夢。急に」

目の前で急に霊夢が力を吐き出したので魔理沙自身吹き飛ばされそうになった。

霊夢を睨みつける魔理沙。

魔理沙「こんなところで急になんだよ、霊夢。危うく、飛ばされるところだったじゃねえか」

すこしキレ気味に言ったつもりの魔理沙であったのだがどうしたことか霊夢は魔理沙の言葉に一切の反応をしない。

魔理沙も流石の霊夢の異様な表情に何かを察した。

魔理沙「なあ、どうしたんだ霊夢？」

ダイレクトに質問をする魔理沙。

霊夢は、チラッと魔理沙の方を振り向く。

霊夢「おかしいのよ」

魔理沙「へっ？」

霊夢「さっき私は霊力を解放した。なのに、どうしてなの！いつもと違って全然、力が入らないのよ」

魔理沙「なんだって！」

霊夢の意外すぎる発言に集中力を高める魔理沙。

魔理沙「た、確かに今の霊夢の霊力。いつもよりも全然小さいぜ。そ、それに私も体の魔力が上手く表面に出てこない！一体、どうなってるんだぜ！」

慌てふためく魔理沙。

まあ、無理もない体に力が入らないのだから…。

霊夢「落ち着きなさい魔理沙。何かが起こるのは覚悟してたはずよ」

霊夢は、そう告げるとまだまだ下に続くこの間欠泉の底へと目をやった。

霊夢「恐らく、この間欠泉の中身。思ってたよりも相当ヤバイ場所みたいね。この環境に適応出来てないものは簡単に野垂れ死ぬ。そういう空間よ」

霊夢がそう告げた瞬間。

額から汗が一滴流れ落ちた。

どうやら、霊夢自身落ち着くよう振舞っているが内心はすこし焦っているようだ。

どこに続いているか分からない上に自分たちの体はここに適応することが出来ない。

正直、すこしピンチである。

しかし！

霊夢「行くわよ。魔理沙！」

霊夢は、魔理沙にそう告げる！

どうやら、ここまでできた以上引き下がることは出来ない。

霊夢は、そう考えているのである。

いや、霊夢だけではない魔理沙の方も「ああ！」と霊夢に相槌をうった。



まさかの環境のせいか弱体化が望まれてしまう間欠泉。

このまま進んで行くときつとさらにこの状況は悪化するであろう。

だが、霊夢と魔理沙はちよつとやそつとの相手にやられる程のものではない。

きつと、2人とも自分の強さに絶対の自信を持ちこの間欠泉を作った黒幕を倒してやろうと意気込んでいる。

2人は、そのまま底まで止まることなく進み続けるのであった。

## 謎の世界 第123話

あれからどれだけ降りたのだろうか。

霊夢と魔理沙はひたすら地面めがけて間欠泉を下っていた。

どうやら、間欠泉は思ったよりも深かったらしくもはや自分たちが今どれほど潜ったのかわからなくなるほどであった。

と、その時…。

一筋の光が霊夢達の目の前に現れる。

魔理沙「霊夢、あれは！」

不意に霊夢の方を振り向く魔理沙。

霊夢も魔理沙に顔を合わせる。

霊夢「どうやら、ようやく出口様のご登場って事ね。まったく、どれだけ深いのよこの間欠泉」

そう告げるや否や霊夢は、軽くスピードを上げ一気にその光の元へ降り立った。

魔理沙も霊夢を追いかける形でスピードを上げる。

トン トン

同時に地面に足をつける2人

そのまま周りの景色を見渡した。

しかし、いくら見渡そうともそこは薄暗い景色が広がっており光といえば所々に設置されている提灯のようなものがわずかな光を放っているだけであった。

これには思わず魔理沙も顔をしかめる。

魔理沙「なんだここやけに殺風景じゃねえか。明かりもかなり少ないし一体どうなつてんだ？」

魔理沙の言葉には驚きがどことなく混じっていた。

まあ、無理もない。

ここはまるで太陽の光が行き届いておらず明かりといえはこの提灯のように人工的に作られたものだけなのだから。

しかし、そんな魔理沙とは裏腹に冷や汗を流しているものもいた。勿論、そいつは言うまでもなく霊夢である。

霊夢の冷や汗が地面に落ちた。

魔理沙「ん？」

どうやら、魔理沙は霊夢の冷や汗に気づいたようだ。

魔理沙「どうした霊夢？」

霊夢に尋ねる魔理沙。

まあ、無理もないであろう。

冷や汗は人間の焦りを意味するサインのようなもの。

霊夢からそれが現れたと言うことは霊夢が焦っていると言うことなのだ。

霊夢は、すこしつばを飲み込む。

そして、ゆっくりと口を開いた。

霊夢「なんなの一体ここは……。こんなに最悪な環境なのにかなり大きい力を持った

ものをいくつも感じるわ！」

魔理沙「なに？」

霊夢の言葉聞いた瞬間、魔理沙も慌てて周りにいるものの気を察知する。

魔理沙「ほんとだぜ。馬鹿でかいものがゴロゴロいやがるぜ」

どうやら、霊夢の言ったことは正しいらしくこの間欠泉の中の世界はよほどの場所のようだ。

霊夢と魔理沙に少しの緊張がはしった。

霊夢「魔理沙わかってると思うけどどうやら、ここかなりやばい場所みたいね」

魔理沙「ああ、なめてかかったら多分アウトだぜ」

霊夢と魔理沙はお互いに顔を合わせる。

そして、大きく「うん」と頷いた。

どうやら、お互いに気合を入れ直したようだ。

お互いに思っていた以上に今の自分達の状況が悪い事を把握したのである。

霊夢「とりあえず、あてを探しましょう。ここでソワソワしてもなにも始まらないわ」

霊夢は魔理沙に不意にそう告げる。

魔理沙は、「ああ」と言いながら首を縦に振り霊夢の意見に同意した。

しかし、あてといつてもそんな無理に動いては逆に自分たち自身が位置の把握などが出来なくなってしまう恐れがある。

それを考えた霊夢は魔理沙にある提案をするのであった。

霊夢「それならとりあえず複数の気が密集しているところに行きましょう。すくなくともいくつかの情報は入るはずよ」

そう告げると同時に1つの方向を指差す霊夢。

どうやら、こちらの方向から複数の気を感じるようだ。

魔理沙「なるほどな。敵か味方かはさておき情報収集は出きそうだぜ」

魔理沙は、霊夢の指差す方向へ振り向く。

そして、2人は同時に複数の気を感じる方へと向かうのであった。

く数分後く

霊夢達の前にいくつもの灯りが見えてきた。

魔理沙「霊夢あそこは！」

魔理沙が霊夢に灯りの方向を指差しつつ告げる。

霊夢「おそらく、この世界の繁華街といったところかしら。どうりでたくさんのお金を感じるわけね」

そう霊夢達の前にあるのはどうやらこの世界の繁華街立ち位置の場所のようだ。

店のようなものはいくつも建っておりかなり都会のようである。

霊夢と魔理沙は少しスピードを上げすぐさま繁華街へと降り立った。

トンツ トンツ

地面に足をつける霊夢と魔理沙。

すると…。

妖怪1「なんだ？お前ら？」

妖怪2「どうして、人間がこんなところに？」

妖怪3「ちょうど腹が減ったからラッキーだぜ」

妖怪4「こんなところにわざわざ足を運ぶとはバカな人間だな」

つくやそうそう恐らくこの繁華街に住んでいるであろう妖怪達に目をつけられる霊夢と魔理沙。

「どうやら、ここはそんなに治安が良いわけでは無いようだ。」

周りにいる妖怪達は全て霊夢と魔理沙に殺気のようなものを奮い立たせている。しかし、霊夢達にとつてはこんなことは正直脅しにもならなかった。

霊夢「ねえ？あんた達ここはどこなの？」

霊夢は、怯えもしなければ隠れることもなく堂々とその辺の妖怪達に尋ねる。

それがよほど不思議な光景だったのでろうか。

一瞬、妖怪達は哑然としてしまった。

妖怪5「ふん。えらくえらそうじゃねえか、人間の分際で」

あまりにも平然としている霊夢に妖怪達は少しイラツとしてしまう。

霊夢と魔理沙の周りにドンドンドンドンと妖怪が集まってきた。

そして、気がつくとき…。

四方八方抜け道一つなく妖怪に囲まれてしまっていたのであった。

## 巨大な妖力を持つ女 第124話

繁華街で謎の妖怪達に囲まれてしまった霊夢と魔理沙。

「どうやら、完全に妖怪達のまとにされてしまったようだ…。」

ひとりの妖怪が霊夢達に声をかける。

その妖怪は少し大型で周りのやつらよりもふたまわりほど大きかった。

妖怪1「おい、貴様！人間の分際でよくそんな軽々しい口を開けたもんだな」

妖怪1は、周りの妖怪達よりも一步霊夢達に踏み出し威圧をかけるように告げた。

それを見た妖怪達は煽りをかけるかのように後ろから声をどんどん荒げていった。

高く口笛を吹き込むものもいれば、「そうだそうだ！」などと大声で叫ぶものもいる。

霊夢は、思わず吹き出してしまった。

霊夢「ぷっふっふっふ」

急に大声で笑いだす霊夢。

周りは、その声に反応したのかシーンとなってしまった。

顔を赤くする妖怪1。

「どうやら、頭に血が上ったようだ。」



妖怪Ⅰ「貴様！何がおかしい！」

馬鹿みたいに大きな声で告げる妖怪Ⅰ。

霊夢は、そんな妖怪Ⅰの顔の方へ顔を向けた。

霊夢「あんた達ね。それじゃあ、妖怪じゃなくて街中にいるヤンキーと同じじゃないの」

若干、笑いを堪えつつ告げる霊夢。

しかし、それとは裏腹に周りには妖怪達の堪忍袋は爆発した。

妖怪達「貴様ー！！いちいちと余計な事を言いやがって！どうやら、本当に死にたいようだな！なら望み通りにしてやるぜ！」

一気に四方八方を囲んでいた妖怪達が霊夢、ついでに魔理沙に飛びかかった。

どうやら、怒りで理性をなくしているようだ。

魔理沙「たく、霊夢め。余計な仕事増やしやがって」

そう告げると瞬時に構えを取る魔理沙。

霊夢も魔理沙に「ごめんごめん」とだけ謝り即座に構えを取る。

妖怪Ⅰ「だりゃあ！」

まず、一番最初に攻撃が届いてきたのは一步周りのやつらよりも霊夢に近づいていた大柄な妖怪であった。

どうやら、見た感じパワーはあるようだ。  
しかし…。

霊夢「だりやあ！」

その巨体さゆえに攻撃出来る面積が広く霊夢のパンチをもろにくらってしまった。

妖怪「ぐはっ！」

一瞬にして吹き飛ばされる妖怪！。

しかし、霊夢達はまだ、油断は出来ない今このようにしている間も囲んでいる妖怪達は霊夢と魔理沙にみるみる近づいてくる。

そして！

妖怪達「どりやあ!!」

妖怪達はほぼ全員同時に攻撃を霊夢と魔理沙に仕掛けた。

流石の霊夢と魔理沙もこの人数ではきついか。

そう思われた瞬間！

???「待ちな！」

この繁華街全てに響き渡りそうな大きな声があたり一面に広がった。

霊夢達を襲おうとしていた妖怪達はすぐさま足をすくめ固まってしまふ。

すぐさま声のした方向へと振り向く妖怪達。

妖怪2 「ゆ、勇儀さん！」

妖怪3 「一体、どうしてここに！」

さつきまでの威勢は何処へやら霊夢達を囲んでいた妖怪達は急に目の前に現れた黄色い髪の毛に赤いツノをはやした謎の女性に媚を降り始める。

どうやら、先ほどの声の主もこいつのようだ。

魔理沙 「あいつは？」

この数の妖怪を締めくくる謎の女性。

恐らく、額のツノから想像するに鬼であろう。

右手には大きな盃を持っておりその中には大量のお酒が含まれていた。

勇儀 「おい、お前たち一体何をやっているんだ」

まるで上司のような口調で妖怪達を怒鳴りつける勇儀。

妖怪達はすっかり肩をすくめてしまっていた。

妖怪2 「いや、こんなところに人間がいたものですから。つい気になってしまったもので…」

妖怪達は若干、声を震わせながら答えた。

これだけ大人数の妖怪ですら怯えてしまう存在。

霊夢は、思った間違えなくこの妖怪はこの繁華街の中心人物だと…。

勇儀「まあ、もう過ぎてしまったのをどうの言うのもあれだしもう何も言わな  
いが次からは気をつけろよ。もし、私が止めてなかったら今頃お前達はあの世さ。お前  
達がああ巨体のあいつを一瞬でぶっ飛ばすやつに勝てる訳かないしな」

その台詞を聞いた妖怪達は「はい」とだけ礼儀正しく告げその場を立ち去る。

霊夢と魔理沙は、その光景に少し唾然とするのであった。

勇儀は立ち去っていく妖怪達を最後まで見送る。

そして、「さて」と見送りを終えた勇儀は霊夢と魔理沙の方へと視線を移した。

霊夢と魔理沙は警戒をいれる。

まあ、それもそうであろう。

何故なら、この勇儀という鬼からはものすごい妖力を感じるのである。

恐らくパワーだけなら今の弱体化した自分達では勝てない可能性がある。

しかし、緊張した瞬間も一瞬で幕を閉じるのであった。

勇儀「おいおい、そんなに警戒何てしなくていいさ」

盃の中のお酒をグイッと飲みながら告げる勇儀。

勇儀「私は別にお前達を殺そうなんて考えてないよ」

本当か嘘かは分からないがどうやら勇儀に殺意はないようである。

たしかに勇儀からは殺気のようなものは全く感じ取れない。

霊夢と魔理沙は、少しだけ肩の荷を下ろした。

「どうやら、こいつは敵ではないそう認識したのである。」

勇儀「どうやら、信じてもらえたみたいだね」

もう一度、酒を飲みながら告げる勇儀。

霊夢は、警戒は無くなっているようだが目を鋭くし勇儀の方へ視線を送った。

霊夢「まだ、完璧ではないけどあんたからは殺気を感じない。だから、警戒を解いただけよ」

魔理沙「ああ」

それを聞いた勇儀は、盃に入っているお酒を一気に口へ運んだ。

そして、霊夢達にこう告げる。

勇儀「やれやれ、どうやら最近の人間、少しは話が通じるみたいね。私はてつきりすぐさま襲ってくると思ってたよ」

霊夢「ふん、それはお互い様よ」

霊夢は勇儀の方へコトコトゆっくり足音を立てながら迫った。

魔理沙も霊夢の後を追うように勇儀の元へ歩く。

そして、霊夢はついに勇儀の目の前まで足を運んだ。

この距離感恐らくお互いに警戒心があるなら近づけない距離であろう。

そう2人は認めあつたのである。

お互い敵ではないと…。

霊夢はゆつくりと勇儀の方へ手を差し伸べる。

それを見た勇儀はニヤツと笑い。

その手を握り返すのであつた。

# この世界の正体 第125話

ガツシリと握手を握りしめた霊夢と勇儀。

種族がどうであろうと2人にとつてすでに敵という概念は無くなっていた。

2人の手が離れると同時に声をあげる勇儀。

勇儀「そういえばまだ名前を聞いていなかったな」

不意に勇儀が霊夢にそう質問をした。

そういえばそうである。

霊夢は、「あ、そうだったわね」と今更ながら思い出した。

霊夢「私の名前は博麗霊夢。博麗神社の巫女よ。そして、横にいるこいつは霧雨魔理沙」

霊夢がそう告げると横から挨拶がわりにニヤツと笑顔を浮かべる魔理沙。

勇儀は改めて2人の顔を見直す。

勇儀「霊夢に魔理沙だな！よし、覚えた」

とりあえず、名前を早々と覚えた勇儀。

そして、続いて自分の自己紹介をするのであった。

勇儀「もうわかっていと思うが一樣言っておくと私の名前は勇儀。星熊勇儀さ」  
盃を掲げながら自己紹介を済ませる勇儀。

その時の表情からはまさに強者と感じ取れる威圧感が感じ取れた。

霊夢は、この時こいつが敵意丸出しの妖怪じゃなかったことに少し感謝する。  
と、そんな強張ったことを考えていると勇儀はもう一つ霊夢に質問して来た。

勇儀「そういうえば、霊夢達は どうしてこんなところにいるんだい？ここは、普通人間が来るべき場所じゃないはずだが？」

頭にクエスチョンマークを浮かべたかのような表情で尋ねてくる勇儀。

確かに勇儀にとっては突如現れた謎の人間である。

不思議に思っただけなのだ。

勿論、霊夢は特に敵でもないであろうし情報が更に手に入るかもしれないと簡単に解釈し今の自分達の状況を洗いざらい勇儀に説明をした。

（霊夢説明中）

長い説明を終える霊夢。

勇儀は、顎に手を当て「なるほどな」と考え込む仕草をする。



霊夢「私達自身、まだこの異変に関する情報はあまり集める事が出来ていないわ。だから、もし、知っていることがあれば教えて欲しいの。ここは、一体どこなのか？そして、その間欠泉を作り出した人物は一体誰なのか？」

真剣な眼差しで勇儀を見つめる霊夢。

そんな、霊夢の気持ちに惹かれたのか勇儀は少し霊夢の質問に口を開いてくれた。

勇儀「まず、一つ確信を持って説明出来ることといたらこの世界だな」

そう告げると周りをグルッと見渡す勇儀。

霊夢と魔理沙そんな勇儀につられて周りを見渡した。

勇儀「先に結論から言わせてもらおうがここは旧地獄という元々地獄だった場所さ」

その瞬間、霊夢と魔理沙の目の焦点が勇儀の目に集まった。

霊夢「じ、地獄ですって！」

魔理沙「おいおい、マジかよ！」

明らかに動揺する2人。

まあ、無理もないであろう。

なぜなら、自分達が今立っている場所が元々地獄と呼ばれた場所なのだから…。

しかし、勇儀は霊夢達が動揺するのは想定内だったのか黙々と説明を続けた。

勇儀「かなり昔の事だけど地獄をコンパクト化しようっていう計画が行われちゃって

ね。その時に区切られちまったのさ」

少し悲しげな表情を浮かべる勇儀。

確かにその地獄のコンパクト化か何かは知らないが除け者にされたようなものには変わりない。

少し悲しげになつてもしようがないのである。

霊夢と魔理沙もようやく落ち着きを取り戻し自分達が今いる場所の重みを知ることができた。

少し勇儀には、辛いことを思い出させてしまったのではないかと反省する反面この世界の手がかりを少し手に入れることができたという達成感も感じることもできた。

霊夢「少し苦い過去を振り返らせちゃったわね。ごめんなさい。でも、あなたのおかげで少し情報を知ることができたわ。ありがとう」

勇儀に笑顔でお礼をいう霊夢。

そんな霊夢に対して感謝されるのに慣れていないのか勇儀は少し頬を赤らめた。

勇儀「ああ、別に良いってことよ！あと、お前達がいった間欠泉だが少し怪しい奴らを思い出したぜ」

その言葉な霊夢と魔理沙の目が光る。

霊夢「なんですって？」

思わず口から言葉が漏れる霊夢。

霊夢はそのまま勇儀に尋ねた。

霊夢「そいつらつて一体！」

正直、いきなりそこまでの手がかりは掴めないであろう。

霊夢は、そう考えていたのである。

しかし、ラッキーなことにその手がかりは目の前の者が持っているのである。

これを逃すすべはない。

勇儀「そんなに慌てんなって、教えてやるからよ」

興奮する霊夢を抑えこむような優しい口調で告げる勇儀。

勇儀の言葉で「はっ」としたのか霊夢は自分が取り乱したのを恥と思いすぐに冷静さを取り戻す。

霊夢「ごめんなさい。少し取り乱したわ」

冷静さを取り戻した霊夢。

恐らく、さつさとここから抜きたいという早々としてしまった気持ち巻き起こしたのである。

霊夢が落ち着いたのを確認すると勇儀はゆっくりと口を開いた。

しかし…。

勇儀「……」

一体、どうしたのだろうか。

勇儀は何も告げることなく口を閉じてしまった。

霊夢「ん？どうしたの黙っちゃって？」

急に言葉を吐き出すのをやめた勇儀を不審に思う霊夢。

一体、勇儀はどうしたのだろうか？

勇儀「いや、別にどうってわけじゃないんだが少し頼みごとをしたくなつてな」

霊夢「頼みごと？」

勇儀の発言に首をかしげる霊夢と魔理沙。

その反応を確認した勇儀は更に言葉を吐く。

勇儀「頼みといても単純なことだし、もし、私の頼みごとを聞いてくれるっていう

んなら心当たりがある奴らについて教えてやる」

唐突な勇儀の発言に霊夢と魔理沙はお互い顔を見つめあった。

どうやら、お互いの解答を確認しあったのである。

霊夢「まあ、確かにこのまま私たちばかり教えてもらうのも申し訳ないしね」

魔理沙「だな」

どうやら、2人は勇儀の頼みを聞くことにしたようだ。

「靈夢「いいわ。なんでも言つて私達に出来ることならなんでもするわ」  
その台詞を聞いた瞬間、満面の笑みを浮かべる勇儀。

「どうやら、余程嬉しかったようだ。」

勇儀「そうか！聞いてくれるのか！」

テンションが上がっていく勇儀。

魔理沙「ああ、ただ単純なのにしてくれよ」

「一様、勇儀に警告しておく魔理沙。」

まあ、確かにこれで不可能に近いことを言われても困つてしまう。

「これは、正しい判断であろう。」

勇儀「それぐらいわかつてるさ」

「ルンルンとした気分で告げる勇儀。」

「どうやら、余程求めていた願いなのであろう。」

「靈夢と魔理沙は黙つてその頼みごとの内容を聞いた。」

勇儀「それじゃあ、私と戦つてくれよ！」

靈夢「え？」

魔理沙「え？」

# 恐るべきパワー!魔理沙 v s 勇儀 第 1 2 6 話

霊夢「戦うって? あんたと?」

頭の上に大きな疑問符を浮かべながら告げる霊夢。

どうやら、まだ、頭の回転が追いついていないようである。

しかし、勇儀は、そんな霊夢の様子には御構い無し。

大きな笑顔を浮かべ「ああ!」と告げた。

霊夢と魔理沙は、頭を抱え込む。

そして、後悔した。

先に何をして欲しいか聞いておくべきだったと…。

正直、この力を上手く操れない場所での戦闘は最低限まで抑えておきたかったのである。

この後の主犯との戦いのためにも。

しかし、こちらはすでに承諾してしまっている。

そのため、今更断るわけにもいかないのだ。

霊夢と魔理沙は目を合わせる。

そして、大きなため息をつくのであった。

しかし、こんなところでグダグダやっていたら余計に時間がかかってしまう。

霊夢と魔理沙は面倒いながらも勇儀と戦う決心をつけるのであった。

霊夢「わかったわ。あんたの頼み、叶えてあげるわ！」

霊夢は、少し威勢のある声で勇儀に告げる。

どうやら、テンションだけでも上げて行くようだ。

それに対して、勇儀は大きく笑顔を浮かべてこう告げるのであった。

勇儀「やったぜ！」

ガッツポーズをする勇儀。

どうやら、霊夢達と戦えるのがかなり嬉しいようである。

まあ、たしかに考えてみるとこの繁華街にいる妖怪は殆どが貧弱な奴らばかりで勇儀

の相手にならないのである。

その故に勇儀は、恐らく本気で戦うことが長い間出来ていなかったであろう。

しかし、今日の前にいる人間達は妖怪をいとも容易く吹き飛ばすことのできる妖怪退

治のエキスパート達。

そんな者達と戦えるのだから嬉しくなっても仕方ないのである。

勇儀「さあ、やろうぜ！」

話が進むや早々、手に持っていた盃を地面に置き戦闘態勢をとる勇儀。恐るべき行動の早さである。

しかし…。

霊夢「ちよ、ちよつとまってよ」

霊夢は、すぐに戦闘は入ろうとした勇儀を慌ててとめた。

それを聞いた勇儀は、一度戦闘態勢を解く。

そして…。

勇儀「なんだ？」

頭に純粹な疑問符を浮かべ上がらせた。

どうやら、霊夢がなんでとめたか理解できていないようである。

霊夢は、そんな天然な勇儀にあきれながらも何やら説明を始めるのであった。

霊夢「あのね。急に構えられてもまだ、私たちがどっちが戦うか決めてないんだけど」

霊夢のその言葉を聞いた瞬間、勇儀は「あつ」と言葉を漏らした。

そして、右手で頭をかきながら告げる。

勇儀「そういえば、そうだったな。わるい、わるい、あまりに楽しみだったもんで

ちよつと先々動き過ぎちまった」

微笑を浮かべながらなんとか誤魔化そうとする勇儀。



霊夢と魔理沙はやれやれという表情を浮かべた。

勇儀「で、私と戦ってくれるのはどっちなんだ？」

霊夢と魔理沙に尋ねる勇儀。

2人は一度お互いの顔を見合わせた。

霊夢「どうする魔理沙？」

魔理沙「どうするっていつてもなく」

2人にとつてもこの展開はあまりにも急すぎたためそんなこと何一つ考えていなかったのである。

かといって今から決めるのも時間がかかりそう。

なので、2人はあの方法で決めることにしたのであった。

霊夢「結局、これで決めるのね」

魔理沙「そうみたいだな」

そう告げると拳を後ろに下げる霊夢と魔理沙。

そして、2人は声を揃えてこう告げるのであった。

「最初はグー！ジャンケンポン！」

そうこの2人にとつてある行動とはジャンケンの事である。

いつもどっちがするか迷った時は責任を持ち勝った方がすることになっているのであ

る。

2人の拳の先を見てみる。

すると、霊夢は手を「グー」の形、魔理沙は手を「パー」の形にしていた。

魔理沙の勝ちである。

魔理沙「ちえっ」

今回ばかりは勝つてもあまり喜ばない魔理沙。

まあ、無理も無いであろうここでは自分の力を発揮できないのだから。

霊夢「あらら、残念。私まけちゃったわ」

あからさまに心で思っていることと逆のことを告げる霊夢。

魔理沙は、少し悔しそうな顔を浮かべるのであった。

勇儀「どうやら、私の相手は魔理沙のようだな」

指をポキポキならしながら魔理沙に告げる勇儀。

どうやら、こっちのやる気は十分なようである。

それに刺激されたのか魔理沙はやれやれと思いつつも何処と無く戦いが楽しみな  
なってきた。

霊夢より一步前に入る魔理沙。

そして、気迫のある大きな声を上げた。

魔理沙「よし、やるんならさっさとやろうぜ！」

それに感化されたのか勇儀も魔理沙と同様に気迫のある声を上げる。

勇儀「ああ！」

その声はさすが鬼と言わんばかりの迫力であった。

しかし、魔理沙はそんなことでビビるわけもなくすぐに戦闘への態勢をとるのであった。

それを見た鬼も戦闘態勢をとる。

どうやら、いよいよ戦いが始まるようである。

霊夢は、2人から少し距離をとった。

魔理沙「さあ、いつでもいいぜ！」

構えをとりながらそう告げる魔理沙。

すると、勇儀は少し微笑み「なら、遠慮なく！」と言いながら魔理沙に突っ込んでいった。

そして！

勇儀「はあ!!」

勇儀は、魔理沙に鋭い拳を放つ。

そのパワーは一般的な妖怪なら粉碎するくらいのパワーが込められていた。  
だが!

魔理沙「甘いぜ!」

魔理沙は、俊敏にその攻撃に反応する。

膝を思いつきり曲げて自分の姿勢を低くすることでそのパンチを躲した。

さらに今、勇儀はパンチを外し少し態勢が崩れている。

魔理沙は、その隙を見逃さなかった。

すぐさま、曲げていた膝をバネのように開放し鋭いパンチを勇儀の腹部に放った。

ドンッ

魔理沙の拳が勇儀の腹部に直撃した。

流石の勇儀もこれは答えたはず!

魔理沙は、そう確信する。

しかし、それは大きな間違えであった。

勇儀「ふん」

魔理沙のパンチを鼻で笑う勇儀。

なんと、勇儀にはダメージが無かったのである!

魔理沙「!!?」

慌てた魔理沙はすぐに拳を勇儀から離し後ろへ逃げようとした。しかし、時すでに遅し。

勇儀は、魔理沙が逃げる前に右足で魔理沙を蹴り飛ばした！ズドンッ

魔理沙「ぐはっ!!？」

その攻撃は、計り知れない威力を持っていた。

ヒューーン

ドンッ

魔理沙は、勢いよく吹き飛ばされ近くにあつた岩に激突する。

魔理沙の口からは血が出ていた。

魔理沙「なんて、パワーだ！それにあの頑丈さ！」

勇儀の恐るべきパワーと耐久力に困惑する魔理沙。

しかし、それも無理も無いことである。

何故なら先ほどのパンチはたしかに勇儀の腹部を捉えていた。

それなのに奴はダメージが通るところか反撃の余裕まであつたのである。

しかも、この威力。

魔理沙は、少しジャンケンで負けたことを悔やむのであった…。

勇儀「どうした。もう終わりか？」

モヤモヤと考え事をしている魔理沙に勇儀は告げた。

勿論、魔理沙がこの程度で終わるわけがない。

すぐさま勇儀との距離が二メートルの範囲まで近づく。

魔理沙「わかるかったな。少しお前を舐めていたぜ」

勇儀の力を知った魔理沙は素直に勇儀を褒めた。

それに対して勇儀は当たり前と言わんばかりの様子で「まあな!」と告げた。

それを聞いた魔理沙は少し頭の中を整理し勇儀にこう告げるのであった。

魔理沙「だけど、ここまでだ!」

その瞬間、魔理沙の目つきが変わる。

どうやら、ここから本気でやるようだ。

勇儀もすぐさまそのことを悟った。

急遽始まった魔理沙 vs 勇儀。

魔理沙は、果たして勇儀に勝つことが出来るのだろうか。

## 魔力vs怪力 第127話

魔理沙「ふん」

魔理沙は少し澄ました顔を浮かべる。

そして、こう告げるのであった。

魔理沙「魔法拳!!」

その瞬間、魔理沙の周りにオレンジ色のオーラがまとわりつく。

勇儀は、目を丸くしてその光景を見ていた。

勇儀「なんだ一体それは？」

魔理沙から放たれる威圧感。

流石の勇儀も少し驚いたようである。

魔理沙「これは、魔法拳でいつて魔力と肉体を一体化させることのできる技だぜ。ま

あ、簡単に言うともめちやくちや強くなるための技さ」

余裕綽々で告げる魔理沙。

どうやら、勝ちを確信したようである。

しかし…。



勇儀「まさか、まだ、そんな技を隠していたなんてな。楽しくなってきたぜ」  
どうやら、勇儀は、少し驚いただけでほとんど動揺はしていないようである。

それどころか、いつもの霊夢や魔理沙のように戦いを楽しんでるようだ。

魔理沙は、そんな勇儀を見て、「こいつ、本当に戦いが好きなんだな」と囁くのであった。

勇儀「さあ、パワーアップが済んだんならさつさと続きをやろうぜ！私の腕が早く戦いたいって疼いてやがる」

そう告げると勇儀はすぐさま戦闘態勢をとった。

魔理沙の方も勇儀に急かされるがままに構えをとる。

どうやら、いよいよ第二ラウンドの始まりのようだ。

2人の目つきが真剣になる。

魔理沙「……」

勇儀「……」

お互い無言になり様子を伺い出した。

どうやら、先にどちらが仕掛けるか待っているようである。

そして！

勇儀「はあ!!?」

先に動いたのは勇儀であった。

勇儀はぐんぐんと魔理沙との距離を詰めていく。

そして、勢いそのままにパンチを放った!

ヒューン

勇儀のパンチはそのまま風を切り裂く音を立て魔理沙の腹部に向かう。

その速度は先ほどよりも上回っていた。

どうやら、勇儀の方も実力を見せてきたようである。

しかし!

ヒュン

魔理沙は、いともたやすくその攻撃を避けた。

勇儀「!!?」

まさか、避けられるとは思っていなかったのか勇儀は一瞬硬直する。

だが、このままじゃ負けない!

そう思ったのか、今度は魔理沙に連続でパンチを放った。

勇儀「だりやりやりや!!」

重くかつ素早く攻撃を連打する勇儀。

しかし…。

魔理沙「よっ、ほっ、おっと」

魔理沙は、まるでリズムゲームのように華麗なステップを放ち勇儀の攻撃を躲してゆく。

どうやら、スピードでは完全に魔理沙が上回ってしまったようだ。

勇儀「くっ!!?」

それをいち早く察知した勇儀は一度バックステップをし魔理沙と距離をとった。

魔理沙「どうした。もう終わりか?」

笑顔で勇儀に告げる魔理沙。

どうやら、この戦いの流れは完全に魔理沙がとったようである。

勇儀「いや、まだまだ!」

しかし、勇儀も諦めたわけではない。

勇儀の目に映る戦いの炎は一ミリたりとも消えていなかった。

勇儀は、再び戦闘態勢をとり魔理沙との戦闘に意識を集中させる。

魔理沙「そうこなくちゃ!」

勇儀の絶対に諦めない心に惹かれたのか魔理沙もやる気が湧いてきた。

魔理沙も戦闘態勢をとる。

そして！

魔理沙「はあ!!？」

ヒュン

ヒュン

ヒュン

今度は魔理沙の方から先制攻撃を仕掛けるのであった。

魔理沙は大きめのエネルギー弾を三発放つ。

そのエネルギー弾は一発一発物凄い速度で移動していた。

流石の勇儀もこれは避けられまい。

魔理沙は、心のどこかで早々と勝利を確信した。

しかし、それは大きな間違いであった事を次の瞬間、その目で教えられる。

勇儀「そんな物！かき消してやるわ!!」

勇儀はそう告げると思いつきり拳を振りかざす。

そして！

バゴンッ

な、な、なんと、そのまま拳をエネルギー弾に当たってエネルギーをがち割ってしまっ

た。

その後が続く二発も…。

バゴンッ

バゴンッ

恐るべき怪力でエネルギー弾を割っていく。

魔理沙は、思わずぼかーんと固まってしまった。

そして、思い出した。

目の前にいる勇儀は、パワーは化け物級であることを…。

先程はそれをくらくらうことなくスピードで避けてたから助かったただけであつてもしまともにくらえば終わりであつただろう。

魔理沙の額からは冷や汗が流れる。

そして、思わず本音をこぼすのであつた。

魔理沙「こりゃ、ちよつとやべえな」

魔理沙がそうこう言っている間勇儀は自分の拳を睨みつけていた。

どうやら、先ほどのエネルギー弾のせいで手が痺れてしまっているようだ。

勇儀「まさか、私の手が痺れるなんてね」

そう告げると今度は魔理沙の方に視線を移した。

勇儀「こりゃ、舐めてかかるとエライ目にあつちまうぜ」

どうやら、勇儀の方も勇儀の方で魔理沙のエネルギー弾に驚かされたようである。

お互いに相手の強さを理解した瞬間であつた。

そして、2人は声を揃えて同時に告げるのであった。

「面白くなってきたじゃねえか」

どうやら、この二人精神的には少しも参ってなかったようだ。それどころかお互いに楽しさを分かち合わせ始めたのである。

魔理沙と勇儀は再び戦闘態勢をとる。

その目には先ほどまでなかったワクワクの目が浮かぶのであった。

勇儀「今度は、こっちの番だ！」

威勢のある声とともに思いつきり拳を振り上げる勇儀

魔理沙との距離はかなりある。

一体、勇儀は何を企んでいるんだ？

魔理沙は、心中そんなことを考えていた。

しかし、次に勇儀のとる行動は魔理沙の斜め上を言っていたのであった。

なんと、勇儀は振り上げた拳をそのまま地面へとぶつけたのである。

その瞬間、地面は割れ大きな地割れのような物が出来た。

魔理沙「なに!!？」

勇儀の思わぬ行動に驚きを隠せない魔理沙。

そう勇儀は、自らの力で地面を切り裂いたのである。

しかも、それだけではない。

その地割れは魔理沙の足元まで来た。

魔理沙は、体のバランスを崩してしまう。

勇儀は、その一瞬の間を見逃さなかった。

瞬時に魔理沙に接近する勇儀。

そして！

勇儀「だりゃあ!!？」

重い一撃を魔理沙に放つのであった。

新たな手がかり。 目指す場所は地霊殿！ 第128話

勇儀の頭脳プレイにより隙が生まれてしまった魔理沙。

目の前からは勇儀のパンチが飛んでくる。

魔理沙「くっ!!？」

魔理沙は、その攻撃に瞬時に反応し額に指を当てた。

そして！

ヒュン

勇儀の攻撃が当たる瞬間、魔理沙は姿を消す。

バゴンツ

勇儀のパンチはそのまま空振りに終わってしまい地面を直撃した

勇儀「なにつ!!？」

急に姿をくらました魔理沙に驚きを隠せない勇儀。

勇儀は、すぐさま周りを見渡す。

すると…。

「どつちを見ているー！」



後ろから声が聞こえてきた。

勇儀は、恐る恐る後ろに視線を移す。

そこには、ミニ八卦炉を構えた魔理沙が立っていた。

魔理沙「流石のお前もこの距離なら！」

そう告げる瞬間、魔理沙のミニ八卦炉が光りを放ち出した。

どうやら、エネルギーを蓄積しているようである。

勇儀は、慌てて振り返ろうとするが時すでに遅し。

勇儀が行動に移るより先に魔理沙のミニ八卦炉のエネルギーがたまる。

そして！

魔理沙「恋符「マスタースパーク」」

魔理沙は、マスタースパークを勇儀に放つのであった。

流石の勇儀も背中からの攻撃は防ぐことが出来ない。

ドンッ

抵抗できないままエネルギーの中に飲み込まれるのであった。

周りは爆風に覆われてしまう。

魔理沙は、そんな勇儀を体から出るオレンジ色のオーラを消し見つめるのであった。

そして、少し経ち爆風の中から勇儀の姿が見えてくる。

勇儀は、横たわっておりかなりのダメージを受けたようだ。

それを見た魔理沙は、少し慌てる。

魔理沙「やべ、少しやり過ぎちゃったか」

思ったよりも上手く直撃してしまったマスタースパーク。

魔理沙は、少し勇儀の安否を心配した。

しかし、その心配もすぐさま消える。

勇儀「う、うう」

なんと、勇儀は立ち上がったのである。

流石の魔理沙もそれには目を丸くした。

先ほどの攻撃は確かに勇儀を捉えたはず、それにも関わらず勇儀は立ち上がったのである。

勇儀「痛い、痛い」

そう言いながら身体中についた煤を払いのける勇儀。

魔理沙は、その光景をぼかんと眺めるのであった。

煤を払い終えた勇儀は魔理沙の方へ視線を向けた。

魔理沙は、とっさに身構える。

しかし、勇儀は、そんな魔理沙に笑みを浮かべこう告げた。

勇儀「そんな身構えなくていいさ。降参さ。降参」

なんと、勇儀は魔理沙に降参を宣言したのである。

どうやら、これ以上やつてもこんなボロボロではまともに戦えないと思ったのである。

魔理沙は、そんな勇儀の言葉を耳に止めるとすぐさま戦闘態勢をといた。

そして、勇儀の元へと足を進める。

魔理沙「めちやくちや楽しかったぜ！」

勇儀の目の前に着いた魔理沙は、そう告げると同時に手を差し出すのであった。

勇儀は、そんな魔理沙に対して「こつちだつて」と告げながら差し出された手を強く

握り返す。

どうやら、この戦いで二人の友情が深まったようである。

離れて見てた霊夢がこつちに近づいてきた。

霊夢「お疲れ様。二人共」

優しい口調で二人に告げる霊夢。

どうやら、見ていた霊夢の方も二人の戦いに感動したようだ。

魔理沙「ああ！」

魔理沙は、そんな霊夢に軽く相槌を返す。

その表情には満足感が見て取れた。

霊夢「あんた最初はあんなごちやごちや言ってたくせに結構、楽しんでたじゃない」  
少し魔理沙を冷やかすようにつける霊夢。

魔理沙は、「ははは」と笑い、「まあな」と囁くのであった。

勇儀「こつちも久しぶりに楽しませてもらったよ」

霊夢と魔理沙の会話に入り込むように告げる勇儀。

どうやら、勇儀の方もかなり満足してくれたようだ。

霊夢「へえ、そんなに楽しめたんなら私が戦えばよかった」

魔理沙と勇儀の会話から少し戦えばよかったと後悔する霊夢。

確かによくよく考えてみれば地底での弱体化があるとはいえ、それが上手いことハンデとなり戦いをより濃いものとしてくれるのである。

魔理沙「へへくん。結局、戦いつてのは最終的には満足あるものになるんだよ」

霊夢の悔しそうな顔を見ながらそう告げる魔理沙。

そして、自分がジャンケンで勝ったことを今更喜ぶのであった。

そういう話していると不意に勇儀が霊夢達に声をかけた。

勇儀「そういえば間欠泉について怪しい奴らについて知りたいんだつたな」  
霊夢と魔理沙は、「あつ」と声をもらす。

どうやら、戦いに熱中し過ぎたせいですつかりその事を忘れていたようだ。

霊夢「そういえばそうだったわね」

魔理沙「だな」

苦笑いしながら誤魔化す霊夢と魔理沙。

勇儀は、そんな二人に対して少しだけクスツと笑うのであつた。

勇儀「約束だ。教えてやるよ」

そう告げると勇儀は、ある一点に指を指す。

勇儀「こつちの方角にしばらくいけば地霊殿っていう大きな建物がある」

勇儀の指差す方へと振り向く霊夢と魔理沙。

勇儀「その地霊殿の主人は、どうも化け物みたいな能力を持つている奴らしく人間はおろか妖怪にすら嫌われているらしい。その故、ほとんど館内で引き込んでる。あくまで私の予想だがそいつが関わってる気がするんだよな」

勇儀の言っていることには確証はなかつた。

どうやら、勇儀自身もあくまで手がかりとして霊夢達に教えてくれたらしい。

しかし、行くあてが特にない霊夢達にとってはとてもありがたかつた。

霊夢「なるほどね」

霊夢は、そう告げると一歩前へ出る。

どうやら、行く気満々のようだ。

勿論、霊夢だけではない。

魔理沙も霊夢に続くように前へ出た。

霊夢は、後ろを振り返り勇儀の方へと顔を向ける。

そして、こう告げるのであった。

霊夢「貴重な情報ありがとね」

勇儀は、そんな霊夢に対して「ああ！」と相槌を打った。

そして！

ヒュン

霊夢は勢いよく飛び立つ。

この世界で手に入れた唯一の情報。

霊夢は、これに掛けたのである。

魔理沙もすぐさま霊夢を追う形で飛び立った。

勇儀は、そんな二人を後ろからまじまじと見つめる。

果たして、この先、霊夢達には何が待ち受けているのだろうか。

## ついに到着！地霊殿！ 第129話

勇儀に教えてもらった僅かな情報を元に地霊殿という建物を目指すことにした霊夢と魔理沙。

どうやら、目標ができたことにより迷うことなく動くことができるようになったようである。

魔理沙「なあ、霊夢」

飛んでいる最中、不意に霊夢の方へと視線を飛ばす魔理沙。

霊夢は、そんな魔理沙に相槌を交わす。

霊夢「ん？何、魔理沙？」

急な魔理沙の呼び止めに対して瞬時に反応する霊夢。

霊夢は、魔理沙の方へと視線を移した。

魔理沙「さつき勇儀が言ってた地霊殿の主人が持つ化け物みたいな能力ってなんなんだろうな。話によると妖怪にすら嫌われるほどの能力じゃないか」

魔理沙は、割と真剣なトーンで霊夢に尋ねる。

どうやら、あまりの情報の少なさと勇儀の言っていた事が引っかけかり少し警戒してい

るようである。

すると…。

霊夢「はあ…」

少し魔理沙に対して呆れたような感じでわざとらしくため息をつく霊夢。

どうやら、魔理沙のあまりにも拍子抜けな発言に言葉を失ったようだ。

霊夢「あのねえ、魔理沙。そんな事、今考えたってどうにかなるわけじゃないでしょ。相手の事を警戒するのはいい事だけど、それが不安となって戦いに隙が生まれる事だつてあるんだから」

魔理沙にまとわる僅かな不安な気持ちを感じ察知した霊夢。

霊夢はそんな能力を今考えても無駄だと魔理沙に念を押すように言った。

たしかにその通りである。

今の魔理沙は相手の能力への恐れが高まってしまっているためほんの少し冷静さに亀裂が生まれてしまっているのである。

これは、戦いにとってかなり不利になってしまふ。

霊夢は、少し冷たいながらもスツとした表情で魔理沙に接するのであった。

しかし、ここはさすが魔理沙と言うべきか。

魔理沙自身すぐに霊夢の態度から霊夢自身が伝えたいことを感じ取った。



魔理沙「たしかにそうだな。ちよつとこの元地獄という環境にびびっちゃまってたぜ」  
魔理沙は、霊夢にそう告げるとニコツとした笑顔を向けるのであった。

霊夢は、そんな魔理沙に対してフツと笑みをこぼす。

どうやら、これだけで2人のコミュニケーションは成立するようである…。

と、その時…。

霊夢「ねえ！魔理沙!!」

霊夢は、急に目の前を指差す。

魔理沙は、霊夢につられるがまま指の先に視線を移した。

魔理沙「なんだあれ!？」

魔理沙は、目を大きく見開き目の前の光景を直視する。

そして、同時に何かを察した。

魔理沙「これは…」

そう呟きながら霊夢の方へと視線を向ける魔理沙。

霊夢も魔理沙と同じ動きをする。

霊夢「ええ、恐らくそうね…。ここは、地霊殿よ!」

そうつげると同時にすぐさま入り口の手前へと足を下ろす霊夢と魔理沙。  
果たしてこの先、2人には何が待ち受けているのだろうか!

## 突如、現れる気配無き少女

## 第130話

間欠泉の妖怪から巡りに巡りやつとの思いでたどり着いた地霊殿。

果たして、この建物の中には一体何があるのだろうか…。

霊夢「やつと着いたわね。地霊殿…」

周りの環境に同化し不気味なオーラを放つその建物をしみじみと見つめる霊夢。

いや、霊夢だけではない横にいた魔理沙の方も同じである。

思えばただ温泉で体を休めるはずだった2人が今から敵の陣地に乗り込むのである。

2人の表情に真剣さが浮かぶのも当然であった。

霊夢「行くわよ！魔理沙！」

そう告げると同時に扉へと手をかける霊夢。

魔理沙も霊夢の後ろに張り付くように扉へと近づいた。

ギィ〜〜〜

大きな扉は大きな音とともにいとも容易く開いた。

霊夢「あれ？案外簡単に開くのね」

正直、この旧地獄の中心部ということはそこそこの防犯システムや罠があると思っ

いた霊夢。

あつさり空いてしまった扉に少し呆気なさを感じた。

魔理沙「まあ、簡単に侵入できる分にはいいじゃねえか」

霊夢とは違い呆気ないというよりラッキーという気持ちで勝つ魔理沙。

まあ、確かに下手に体力を使うよりはこちらの方が都合が良いのは確かである。

霊夢「うん……。まあ、それもそうね」

魔理沙の言う通り簡単に侵入出来て損はない霊夢はそう割り切りついに建物の中へと歩を進めるのであった。

コンッコンッ

建物の中は狭く苦しい廊下が続いてるといよりは、大きなショッピングモールのように中は広くなっていた。

今更だが霊夢と魔理沙は地霊殿内の通路を何一つ知らない。

強いて言うならば、唯一の手がかりを掴む方法として気を探る能力を使い、この建物の上に何やら周りとは一風変わったボスのようなものがあることは分かった。

だが、肝心の上へ向かう階段が何処にあるかが分からないのである。

壊して無理矢理上に上がるうにも完全に黒かどうか分からない以上下手なことも出来ないのである。

霊夢達にできることはひたすら歩き回ることだけであつた。

魔理沙「なあ、霊夢……」

しばらくして、ついに痺れを切らした魔理沙が声を漏らす。

霊夢「何よ？」

魔理沙の言葉に反応した霊夢はクルツと魔理沙の方へと顔を向けた。

霊夢の視線にはダラダラめんどくさそうな魔理沙が写る。

魔理沙「さつきから闇雲に歩いてるけどいったいいつまで歩くんだよ」

霊夢「そんなの私に分かるわけないでしょ。今はただ歩き回るしか方法がないんだから」

そう告げるとすぐさま前を向き歩き出す霊夢。

魔理沙は、ため息をつきながらも渋々進んでいくのであつた。

その時！

霊夢「……………」

霊夢が急に歩を止めた。

魔理沙は、そのまま霊夢の背中にぶつかると。

魔理沙「急に止まんなよ霊夢」

魔理沙が霊夢に少し疲れた声で告げる。

しかし、霊夢に魔理沙の声は一切届いていない。

魔理沙「霊夢……？」

そんな、霊夢に少し疑問を持つ魔理沙。

と、その時だった！

急に霊夢は手にエネルギーをためた！

そして！

霊夢「そこよ！」

そう告げると左斜め後ろあたりに急にエネルギー弾を放つのであった！

ヒュン

威力は大したことはないがかなりのスピードを秘めるエネルギー弾はそのまま何も  
ない壁の方へと飛んでいく。

魔理沙「おい、霊夢？」

霊夢の謎の行動に戸惑いを隠せない魔理沙。

霊夢の次は魔理沙が少しフリーズするのであった。

ドンッ

大きな音と爆風を広げる霊夢のエネルギー弾。

すると……。

??? 「痛っ」

魔理沙「!!」

なんと、爆風の中から何者かの声が聞こえた。

魔理沙は、咄嗟に声の方へ視線を向ける。

すると、爆風の隙間から…。

??? 「いたたた」

な、なんと、そこには緑髪の少女がいた。

魔理沙は、少し呆然としてしまう。

何故なら、魔理沙は、付近に一切気配を感じていなかったのである。

これだけ近くの距離にもしいたなら当たり前のように気づけるはず。

魔理沙「おい、霊夢あいつは一体!」

霊夢の方へと視線を向ける魔理沙。

霊夢「さあね。ただ、何か分からないけど僅かに気配を感じたから撃つただけよ」

魔理沙「気配って…私は何にも感じなかったけど…。てか、お前、いつから気づいて

たんだ?」

霊夢「気配自体は入った瞬間から気づいてたわよ。ただ、何度振り返ってもそこには誰もがいなかったから気に止めないようにしてたけど流星にここまで接近されたら撃

たないわけにもいかないでしょ」

自分には、全く感じることの出来なかつた気配を当たり前のように感じていた霊夢。魔理沙は、この時、改めて霊夢の凄さに気づいたのであった。

霊夢「まあ、今はそんな事よりあの少女ね。見た感じ妖怪っぽいけど何者かしら？」  
霊夢はそう告げると魔理沙と共に少女の方へと歩み寄った。

少女は、そんな霊夢達に対して逃げる素振りもなくニコツと笑みを浮かべる。

???「お姉ちゃん達すごいね！まさか、私の存在に気づくなんて」

近づいてくる霊夢達に対しなんの警戒心もなくフレンドリーに話しかけてくる少女。その姿はまさに純粹無垢な子供であった。

霊夢「あなた、一体何者？どうして、私達についてきてたの？」

あまりに隙だらけの少女に対し一步距離をとり質問をする霊夢と魔理沙。

「どうやら、よっぽどこの子の能力を警戒しているようである。」

???「え、私？私はいしだよ。古明地こいし。お姉ちゃんに頼まれてちよつと跡をつけてたの」

突如、現れた謎の少女、こいし。

そして、彼女のお姉ちゃんとは？